

大宰府条坊跡 48

—都府楼南・通古賀・般若寺地区の調査—

平成 30(2018) 年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の都府楼南・通古賀・般若寺地区で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書です。

今回の調査では、古代の建物や井戸などの生活痕跡や東西道路、さらに近現代の瓦窯など、大宰府条坊の西辺地区の古代景観はもちろん、通古賀で営まれた近現代の窯業を理解する上で貴重な成果を得ることができました。また、般若寺丘陵の調査では、多くの瓦が出土し、ありし日の般若寺を復元する手がかりとなるものとなりました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

結びになりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成 30 年 10 月
太宰府市教育委員会
教育長 樋田京子

例言

1. 本書は太宰府市都府楼南・通古賀・朱雀で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り G. N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。第 101 次・108 次調査は測量不足のため、およその方位である。
3. 遺構の実測及び写真撮影は担当者のほか、山田富美が行った。
4. 遺構の空中写真撮影は南空中写真企画が行った。
5. 出土した鉄製品の保存処理は鞆タクトが行った。
6. 遺物の実測は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、元田晃子、山村、中島、宮崎、遠藤、中村が行った。
7. 表入力・写真整理等は瀬戸ロミな子、市川晴美が行った。
8. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
9. 遺物の写真撮影は南システム・レコ、遠藤が行った。
10. 図の浄書は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、元田晃子、山村、宮崎が行った。
11. 本書に用いた分類は以下のとおり。
 - 須恵器・・・『宮ノ本遺跡Ⅱ 一窯跡篇一』（太宰府市の文化財第 10 集）1992
 - 陶磁器・・・『大宰府条坊跡 XV 一陶磁器分類一』（太宰府市の文化財第 49 集）2000
 - 土器・・・『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第 7 集）1983
 - 瓦・・・『大宰府史跡出土軒丸・叩打痕文字瓦型式一覧』2000 九州歴史資料館
12. 報告に関する整理・執筆は、第 276 次調査は山村、第 293・301 次調査の一部を遠藤、第 322 次調査の一部を中村、それ以外を宮崎が行い、編集は宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	1
II、調査体制	2
III、調査および整理方法	5
IV、調査報告	
①都府楼南・通古賀地区	
1、第38次調査	9
(1) 調査に至る経緯	9
(2) 基本層位	9
(3) 検出遺構	9
(4) 出土遺物	9
(5) 小結	15
2、第40次調査	17
(1) 調査に至る経緯	17
(2) 基本層位	17
(3) 検出遺構	17
(4) 出土遺物	17
(5) 小結	20
3、第45次調査	21
(1) 調査に至る経緯と成果	21
4、第62次調査	22
(1) 調査に至る経緯	22
(2) 基本層位	22
(3) 検出遺構	22
(4) 出土遺物	23
(5) 小結	26
5、第72次調査	27
(1) 調査に至る経緯	27
(2) 基本層位	30
(3) 検出遺構	30
(4) 出土遺物	30
(5) 小結	49
6、第101次調査	58
(1) 調査に至る経緯	58
(2) 基本層位	58
(3) 検出遺構	58
(4) 出土遺物	61
(5) 小結	71

7、第 108 次調査	76
(1) 調査に至る経緯	76
(2) 基本層位	76
(3) 検出遺構	76
(4) 出土遺物	78
(5) 小結	85
8、第 175 次調査	88
(1) 調査に至る経緯	88
(2) 基本層位	88
(3) 検出遺構	88
(4) 出土遺物	94
(5) 小結	127
9、第 198 次調査	140
(1) 調査に至る経緯	140
(2) 基本層位	140
(3) 検出遺構	141
(4) 出土遺物	144
(5) 小結	147
10、第 229 次調査	154
(1) 調査に至る経緯	154
(2) 基本層位	155
(3) 検出遺構	157
(4) 出土遺物	157
(5) 小結	170
11、第 253 次調査	178
(1) 調査に至る経緯	178
(2) 基本層位	178
(3) 検出遺構	178
(4) 出土遺物	183
(5) 小結	188
12、第 276 次調査	195
(1) 調査に至る経緯	195
(2) 調査区と基本層位	195
(3) 検出遺構	195
(4) 出土遺物	200
(5) 小結	213
13、第 322 次調査	218
(1) 調査に至る経緯	218
(2) 基本層位	218
(3) 検出遺構	218

(4) 出土遺物	231
(5) 小結	274
②般若寺地区	
1、第 293 次調査	293
(1) 調査に至る経緯	293
(2) 基本層位	293
(3) 検出遺構	294
(4) 出土遺物	294
(5) 小結	295
2、第 294 次調査	296
(1) 調査に至る経緯	296
(2) 基本層位	296
(3) 検出遺構	296
(4) 出土遺物	298
(5) 小結	302
3、第 299 次調査	304
(1) 調査に至る経緯	304
(2) 基本層位	304
(3) 出土遺物	306
(4) 小結	323
4、第 301 次調査	325
(1) 調査に至る経緯	325
(2) 基本層位と検出遺構	325
(3) 出土遺物	325
(4) 小結	329
V、調査まとめ	330

写真図版・・・主な遺構および遺物写真
 付録・・・CD（遺構および遺物写真）

I、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に脊振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。その中央には宝満山を源流とする御笠川が流れ、その周辺では平野を形成している。周辺の山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっており、御笠川は福岡平野を通り博多湾へと注いでいる。市役所から博多湾まで直線距離で15km、筑後川まで20kmの位置関係である。

太宰府の縁辺部の低丘陵を中心に旧石器が出土し、さらに平野部では目立った遺構は確認されないものの、縄文時代後・晩期の縄文土器が古代の遺構に混じって出土している。弥生から古墳時代にかけては、福岡・筑後の各平野に営まれた勢力に挟まれた太宰府では、4世紀には割竹形木棺で鏡を副葬する円墳（蒲蒲ヶ浦、下高尾、宮ノ本）が築造されている。5世紀に入ると行政区こそ太宰府市であるが、福岡平野を見渡す丘陵に帆立貝形前方後円墳の成屋形古墳が築造されている。6世紀になって、四王寺山や高尾山の裾部に円墳が僅かに築造されるが、群集墳と呼べる状況を示していない。

古代になると大宰府政庁が置かれ、博多側には四王寺山と吉松丘陵を塞ぐ水城跡の土塁が築造されたほか、周囲に山々には大野城・基肆城・阿志岐城などの古代山城が築造された。近年、筑紫野市前畑遺跡で丘陵上に造られた土塁が発見されたことにより、周辺丘陵上に踏査するなどいわゆる羅城について再検討が行われている。

四王寺山の南麓には大宰府政庁、観世音寺、学校院のほか官衙が並び、その政庁を北辺中央に置いた南側一帯にはいわゆる大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。大宰府条坊はその規模は南北22条、東西12坊の約2km四方におよぶものと推定され、南辺部は筑紫野市まで広がっている。その存在については鏡山猛氏が『観世音寺文書』や『八幡宇佐宮御神領大鏡』等に記述されている文言や地割から分析し、一区画1町四方とした条坊の復元案を提示したことに始まる。当初は発掘調査が少なかったため、その存在については疑問視する声もあったが、1982年第34次調査で坊路が初めて発見されたことにより、大宰府条坊の存在が高まり、その後発掘調査が増大すると共に条坊痕跡が発見が相次ぎ、近年ではその成果を基に一区画90m四方とする条坊復元案が井上信正氏により提示されている。近年の大宰府条坊の調査成果としては、五条2丁目で行った第217・224調査では、平安時代中期と12世紀埋没の南北道路側溝が検出され、約90mの区割りでみる条坊案では左郭12坊路推定ライン上にあたる。この道は『宇佐大鏡』久安4（1148）年条の記述にある「京極大路」と推測される。筑紫野市塔原東1丁目（第258次調査）では、8世紀後半埋没の平行する東西溝が検出され、井上信正条坊案の22条と合致し、条坊の南限である可能性が指摘されている。条坊西側では条坊外に続く条里の存在も指摘され、その一画である都府樓南2丁目の第222次調査では広大な面積が調査された。ここは政庁Ⅱ期に条坊外の条里が広がっていた土地で、平安時代後期になり土地開発が行われたと推測され、井上氏は大宰府条坊の右郭については8坊までだったと推測している条坊の中心を南北に走る中央大路（推定朱雀大路）沿いでは、南北に並ぶ大型榑立柱建物が見つかり、一帯からは佐波理の匙や加盤をはじめ、高級食器類が出土し、大宰府に來た外国使節を安置する客館跡と推定されている。

また、条坊周辺では、南西側の宮ノ本丘陵一帯で、100基を越える奈良・平安期の墳墓があり、買地券をはじめ鏡や陶磁器類を副葬され、古代大宰府の官人墓地を推測されている。近年では条坊の南方にあたる筑紫野市堰池遺跡で、平安前期の越州系系青磁の唾壺を副葬する木炭榑木棺墓などが見つかり、古代大宰府南辺部の土地利用や官人墓地のあり方を考える上で重要な発見であった。

また、条坊北東部には筑前国分寺があり、近くでは7世紀末の戸籍・計帳に関することを墨書した木簡が出土している。

II、調査体制

(昭和 57 / 1982 年度)・・・第 38・40 次調査

総括	教育長	陶山直次郎		
庶務	社会教育課長	西山義則		
	文化財係長	黑板力	主事	岡部大治
調査	技師	山本信夫		

(昭和 58 / 1983 年度)・・・第 45 次調査

総括	教育長	陶山直次郎		
庶務	社会教育課長	西山義則		
	文化財係長	黑板力	主事	岡部大治
調査	技師	山本信夫	狭川真一	

(昭和 61 / 1986 年度)・・・第 62 次調査

総括	教育長	藤寿人		
庶務	社会教育課長	花田勝彦		
	文化財係長	鬼木富士夫	主事	岡部大治
調査	技師	山本信夫	狭川真一	緒方俊輔

(昭和 63 / 1988 年度)・・・第 72 次調査

総括	教育長	藤寿人		
庶務	社会教育課長	花田勝彦	文化財係長	鬼木富士夫
	主事	白水伸司	川原和典	
調査	技師	山本信夫	狭川真一	緒方俊輔
	技師 (嘱託)	山村信榮		

(平成 2 / 1990 年度)・・・第 101 次調査

総括	教育長	長野治己		
庶務	教育部長	西山義則		
	社会教育課長	関岡勉	文化財係長	鬼木富士夫
	主任主事	岡部大治	主事	白水伸司
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利
	技師	緒方俊輔	山村信榮	
	技師 (嘱託)	中島恒次郎	狭川麻子	

(平成 3 / 1991 年度)・・・第 108 次調査

総括	教育長	長野治己		
庶務	教育部長	中川シグ子		
	文化課長	佐藤恭宏		
	埋蔵文化財係長	富田謙	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治	川谷豊	
調査	主任技師	山本信夫	狭川真一	城戸康利
	技師	山村信榮	中島恒次郎	塩地潤一
				緒方俊輔

(平成7 / 1995年度) . . . 第175次調査

総括	教育長	長野治己			
庶務	教育部長	白木三男			
	文化課長	花田勝彦			
調査	文化財保護係長	和田敏信	文化振興係長	大田重信	
	主任主事	岡部大治	川谷豊	主事	今村江利子
	技術主査	山本信夫			
	主任技師	狭川真一	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎
	技師	井上信正	高橋学		
	技師(囑託)	下川可容子			

(平成10 / 1998年度) . . . 第198次調査

総括	教育長	長野治己			
庶務	教育部長	小田勝弥			
	文化財課長	津田秀司			
調査	文化財保護係長	和田敏信	文化財調査係長	山本信夫	
	主任主事	藤井泰人	主事	今村江利子	囑託 鈴木弘江
	技術主査	狭川真一			
	主任技師	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	井上信正
	技師	高橋学	宮崎亮一		
	技師(囑託)	下川可容子	森田レイ子		

(平成15 / 2003年度) . . . 第229次調査

総括	教育長	關敏治			
庶務	教育部長	白石純一			
	文化財課長	木村和美			
調査	文化財保護係長	和田敏信	文化財調査係長	神原稔	
	事務主査	藤井泰人	主任主事	大石敬介	
	主任主査	城戸康利	技術主査	山村信榮	中島恒次郎
	主任技師	井上信正	高橋学	宮崎亮一	
	技師(囑託)	下川可容子	森田レイ子	柳智子	渡邊仁

(平成17 / 2005年度) . . . 第253次調査

総括	教育長	關敏治			
庶務	教育部長	松永栄人			
	文化財課長	齋藤廣之			
調査	保護活用係長	久保山元信	調査係長	永尾彰朗	
	主任主査	齋藤実貴男	事務主査	大石敬介	
	主任主査	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	
	技術主査	井上信正			
	主任技師	高橋学	宮崎亮一		
	技師(囑託)	下川可容子	柳智子	長直信	松浦智

(平成20 / 2008年度) . . . 第276次調査

總括	教育長	關敏治			
庶務	教育部長	松田幸夫			
	文化財課長	齋藤廣之			
調査	保護活用係長	菊武良一	調査係長	永尾彰朗	
	主任主査	吉原慎一		齋藤実貴男	
	主任主査	城戸康利	山村信榮	中島恒次郎	
	技術主査	井上信正	主任技師	高橋学	宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳智子	下高大輔	大塚正樹	
(平成 23 / 2011 年度)・・・第 293 次調査					
總括	教育長	關敏治			
庶務	教育部長	齋藤廣之			
	文化財課長	井上均			
調査	保護活用係長	菊武良一	調査係長	池本義彦	
	事務主査	橋川史典	主事	古川あや	
	主任主査	山村信榮	中島恒次郎	井上信正	
	技術主査	高橋学	宮崎亮一		
	主任技師	遠藤茜	技師（嘱託）	白石溪牙	
	(文化財課事務取扱)	城戸康利	(都市計画課 景観・歴史のまち推進係長)		
(平成 24 / 2012 年度)・・・第 294 次調査					
總括	教育長	關敏治			
庶務	教育部長	古野洋敏			
	文化財課長	井上均			
調査	保護活用係長	菊武良一	調査係長	山村信榮	
	事務主査	橋川史典	主事	古川あや	
	主任主査	中島恒次郎	井上信正		
	技術主査	高橋学	宮崎亮一	主任技師	遠藤茜
		(文化財課事務取扱)	城戸康利	(都市計画課 景観・歴史のまち推進係長)	
(平成 25 / 2013 年度)・・・第 299・301 次調査					
總括	教育長	木村甚治			
庶務	教育部長	今泉憲治			
	文化財課長	菊武良一	文化財副課長	城戸康利	
調査	保護活用係長	友添浩一	調査係長	山村信榮	
	事務主査	廣見京子	主事	古川あや	有田ゆきな
	主任主査	井上信正	高橋学	宮崎亮一	
	主任技師	遠藤茜	技師	神田正大	中村茂央
		(文化財課事務取扱)	中島恒次郎	(都市計画課 景観・歴史のまち推進係長)	
(平成 29 / 2017 年度)・・・第 322 次調査					
總括	教育長	木村甚治			
庶務	教育部長	緒方扶美			
	文化財課長	城戸康利			

保護活用係	係長	江坂研治			
	主任主査	井上信正	高橋学		
	主任主事	岡部大治	主事	久木原駿史	伊藤裕貴
調査係	係長	山村信榮			
	主任主査	宮崎亮一	主任主事	有田ゆきな	
	主任技師	遠藤茜	沖田正大	中村茂央	
	(文化財課事務取扱)	中島恒次郎	(都市計画課	景観・歴史のまち推進係長)	
(平成 30 / 2018 年度)・・・報告書発行					
統括	教育長	樋田京子			
	教育部長	緒方扶美			
	文化財課長	城戸康利			
保護活用係	係長	江坂研治			
	主任主査	井上信正	高橋学		
	主任主事	岡部大治	主事	豊増慧大	
調査係	係長	山村信榮			
	主任主査	宮崎亮一	主任主事	有田ゆきな	
	主任技師	遠藤茜	沖田正大	中村茂央	
	(文化財課事務取扱)	中島恒次郎	(都市計画課	景観・歴史のまち推進係長)	

III、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群 1』(太宰府市の文化財第 14 集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂)に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時 1/10、1/20 等で記録し、遺構全体図は人力によって 1/20 の縮尺で実測を行ったが、一部測量不十分で座標値・方位・レベルが不明確な調査地もある。

整理に際し、時期が特定できそうな遺物や搬入品などの希少な遺物については、実測作業を行ったが、規則性の強い陶磁器については、『大宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類 -』を元に分類し、出土遺物一覧表に分類と破片数を掲載することで、実測作業を省いている。また、出土している遺物の内容については、出土遺物一覧表に全て掲載しており、同時に確認して頂きたい。

第 229 次調査では、SK001 で土師器が多量に出土したため、丸底杯・小皿 a について、残存率が 1/2 以上は実測、1/3 前後は計測のみとした。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。

紀年銘	AD	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式 (型式の上段) 反輪	線輪	標準磁器	準標準磁器
⑥	700	I	A B				
	725	II					
	750	III					
		IV					
	800	V		備後0-10 井ヶ谷10-78	長門7・鶴内	白磁I類	唐三彩・二彩 絞胎
①	825	VI	A B	黒磁K-14	長門・洛北・(洛西)・(黒磁K-14)	越州系青磁I・II類 長沙系青磁・黄釉 褐彩・褐胎	
	850	VII	A	備前S-4 黒磁K-90	洛西 黒磁K-90		青磁褐彩・褐胎 初期イスラム陶器
	900	VIII					
	925	IX	(A新)				
	950	IX		虎渡山1 (折戸0-53)	近江		
	1000	X		折戸0-53		越州系青磁II類 白磁XI類	
	1050	XI	B	東山H-72 (丸石Z)			
②	1100	XII	A B	丸石Z 百代寺 東山H-105 備前S-1		白磁III・IV, VI, VII, VIII類 血II, IV, V, VI, VIII類	初期龍泉系・同安系青磁0類 越州系青磁 初期高麗青磁I, II, III類 青白磁
		XIII					白磁鉢皿類、椀XIV類
	1150	XIV				龍泉系青磁鉢I-1~4, 6 皿I類 同安系青磁鉢I-IV, 皿I類	白磁鉢椀, V-4, 皿皿類増加
	1200	XV	D				白磁鉢椀, 皿椀-I類
④	1230	XVI	E			龍泉系青磁鉢II-a, b類	白磁皿椀-2類
	1250	XVII				龍泉系青磁皿類 白磁X類	龍泉系青磁II-c類 白磁X類 黒胎陶器
③	1300	XVIII					
	1350	XIX	F			龍泉系青磁IV類	白磁B, C類 安南鉄胎
⑤	1350	XX	G				
	1450						
⑦	1500						

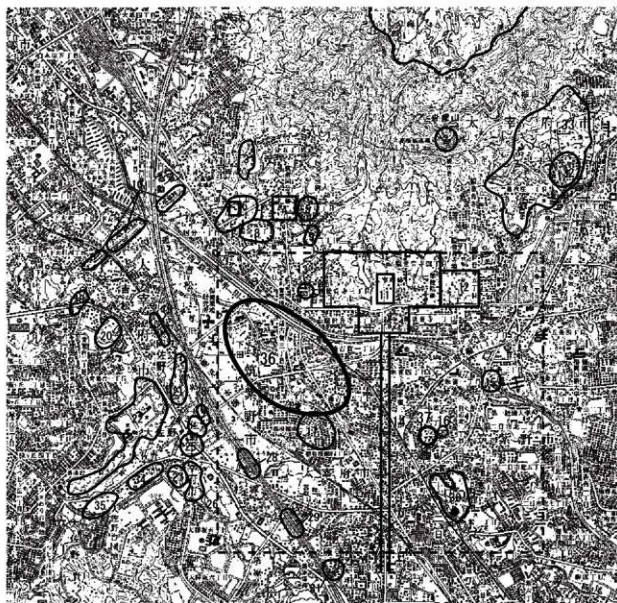
Fig.1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁編年

紀年銘資料

- ①A. D. 927 延長5年, 大宰府74次SD205A溝
 ②A. D. 1091 寛治5年, 平安京定章4條1納SE8井戸
 ③A. D. 1224 貞応3年, 大宰府33次SD605溝
 ④A. D. 1304 嘉元2年, 大宰府109, 111次SD3200溝
 ⑤A. D. 1330 元徳2年, 大宰府45次SX1200池
 ⑥A. D. 784 延暦5年, 長岡原102次SD10201溝
 ⑦A. D. 1459・1465 長祿3・寛正5年, 福岡市井相田C11・SG16池
 ⑧A. D. 1501 文亀元年, 大宰府70次SD1805溝
 ⑨A. D. 1265 文永2年, 博多62次713土溝

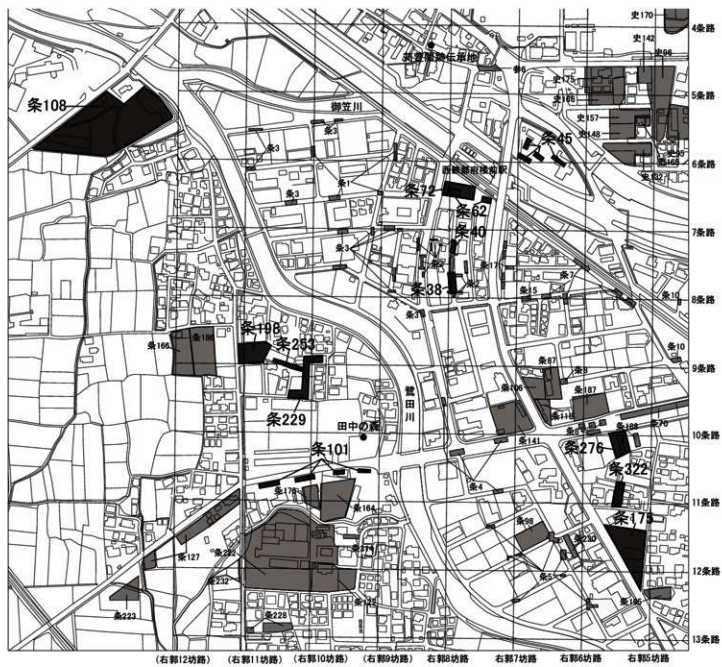
文献

- ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ②田辺昭三・吉川龍彦「平安京跡発掘調査報告 右京四条一坊」1975 平安京調査会
 ③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
 ④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
 ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
 ⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
 ⑦福岡市教育委員会「井相田遺跡①」『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988
 ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
 ⑨福岡市教育委員会「博多48」『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995



- | | | | |
|------------|----------------------|-----------|-----------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 刺塚遺跡 |
| 2. 岩置城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 備振遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡 (●は烽火臺跡) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀団印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 大宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府桑坊跡 (鏡山麓、穂積内) | 23. 麗川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 園分松本遺跡 | 15. 君徳遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 園分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠団印出土地 | 18. 神ノ前竈跡 | 27. 殿城戸遺跡 | 36. 報告地域 (郡府様南・通古賀地区) |
| | | | 37. 報告地域 (般若寺地区) |

Fig. 2 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30,000)



※条境は、非正確な条境である。

Fig.3 調査地と周辺調査地点 (1/5000)

IV、調査報告

①都府楼南・通古賀地区

1、第38次調査

(1) 調査に至る経緯

太宰府市大字通古賀（現在、通古賀3丁目）字半田283で、西鉄都府楼前駅の南側150m付近に位置する。

調査は観世音寺地区土地区画整理事業に伴う道路新設によるものである。当時の調査区画番号の57区画3トレンチで、この調査地の一部は、昭和54年度に実施した大宰府条坊跡第2次調査の6トレンチと重複している。調査期間は1982（昭和57）年12月24日～1983（昭和58）年1月18日で、調査は山本信夫が担当した。調査面積は57㎡である。

(2) 基本層位 (Fig.5)

調査地は現代の盛土が1mほどあり、その下に厚さ0.15m前後の床土があり、その下に黄灰色土や暗灰色土などが厚さ0.3m程あり（遺物取り上げは暗灰色土）、さらに、その下の厚さ0.4m前後の黄灰色粘土を除去すると灰色粗砂の地山が遺構面となるが、大溝部分はやや窪んでおり、その部分にやや灰色を帯びた黄灰色粘土（遺物取り上げは黄灰色粘土最下層）が堆積し、それを除去すると大溝(SD001)の埋土が始まる。

(3) 検出遺構

溝

38SD001 (Fig.5)

調査区内を斜めに検出された大溝で、振れが約N-26°30'-Eである。幅は約8.3m、深さは南岸からが0.97m、北岸からは0.4mで、断面形状は緩い弓なり状をなしている。埋土は灰色系の粘質土で最下層には薄く腐食土があった。遺物は溝上層の灰色粘土でまとめて取り上げている。

(4) 出土遺物

溝

38SD001

38SD001 灰色粘土出土遺物 (Fig.6)

須恵器

蓋c (1) 若干潰れたボタン状のツمامを貼付する。

蓋c3 (2～5) 復元口径は13.2～16.2cm。5以外は潰れた扁平のツمامを貼付する。2の外面中位



Fig.4 第38次調査 遺構全体図 (1/200)

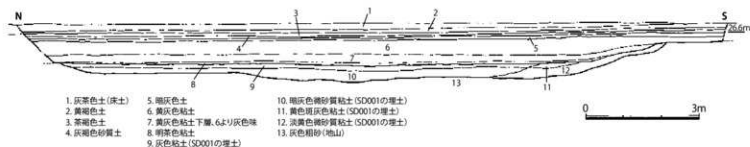


Fig.5 第38次調査区東壁土層実測図 (1/100)

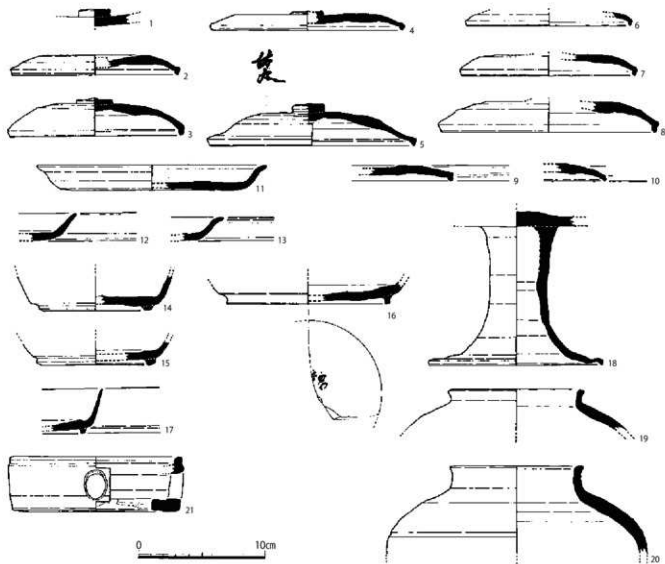


Fig.6 38SD001 灰色粘土出土遺物実測図 (1/3)

には重ね焼き痕を残す。3の外面上半部は回転ヘラケズリ。4の外面上半部は回転ヘラ切り後未調整。5の外面にはうっすらと「佐太」の墨書がある。

蓋3 (6～10) 復元口径は13.0～17.0 cm。8の外面は全て回転ナデ調整。10の口縁部は若干狭弱である。

皿a (11～13) 11・13は口縁端部を僅かに曲げている。11は復元口径18.2 cm。内面底部はナデ調整。底部外面は回転ヘラ切り後板状圧痕を残す。

坏c (14～17) 底部外面は回転ヘラ切り後未調整。16の底面には墨書があり、文字の右側は「帛」や「易」のような字体が読めるが、正確な文字は不明。

高坏 (18) 復元脚部径13.8 cm。内外面とも回転ナデで、色調は青灰色を呈する。

短頸壺 (19、20) 復元口径は10.8 cmと10.6 cm。内外面とも回転ナデ調整。

円面硯 (21) 小片だが、底部に空間を開ける硯と推測される。側面には径2 cmの円孔があり、数か所あったと考えられる。焼成良好で色調は暗青灰色を呈する。口径13.8 cm、器高4.3 cm。

暗灰色土出土遺物 (Fig.7)

土師器

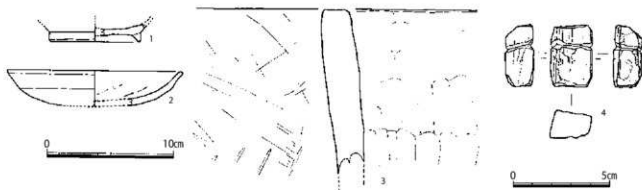


Fig.7 第38次調査 暗灰色土出土遺物実測図 (1/3、3・4は1/2)

碗c (1) 復元高台径7.3 cm。色調は淡黄色を呈する。

丸底坏a (2) 復元口径13.8 cm。内面にはミガキbのコテ当て痕が残る。

石製品

石鍋 (3) 外面はヘラケズリ、内面には整形と使用による不定方向のケズリ痕が残る。内面には炭化物が薄く付着している。滑石製。

滑石加工品 (4) 大きさは3.3×2.2×1.5 cmの長方形体で、中位には全周する溝が彫り込まれている。石鏢か。

黄灰色粘土出土遺物 (Fig.8・9)

須恵器

蓋c (1～3) 外面は回転ヘラケズリで、2・3は扁平に押し潰したツمامミを貼付する。

蓋2 (4) 明確ではないが口縁端部を折り曲げたような形状をなす。外面上部は回転ヘラケズリ。還元不良で内面は暗茶色を呈する。

蓋c (5) 扁平な形状で、外面は回転ヘラ切り後未調整である。ツمامミは残らないが、その調整の回転ナデが残る。復元口径14.2 cm。

蓋3 (6～16) 復元口径13.0～17.8 cm。6・7・15は回転ヘラ切り後未調整。9・10は外面中位に回転ヘラケズリを施すが、それより上部は回転ヘラ切り後未調整である。10はやや歪んでいる。外面端部には重ね焼き痕が残る。12は扁平で、外面は回転ヘラケズリの後ナデ調整。

蓋4 (17) 外面上半部は回転ヘラ切り、それ以外は回転ナデ。口縁端部内面には浅い沈線が巡る。

壺蓋 (18) 外面は回転ヘラケズリで、擬宝珠形のツمامミを貼付する。

皿a (19、20) 復元口径は16.6 cmと18.9 cm。19の底部外面は回転ヘラ切り後未調整。

皿c (21) 復元高台径17.6 cm。色調は灰白色を呈する。

小皿a (22,23) 復元口径は8.6 cmと10.6 cm。底部外面は回転ヘラ切りで、それ以外は回転ナデ調整。23は還元不良で、色調は淡赤灰色を呈する。

坏a (24) 復元口径13.3 cm。外面底部には板状圧痕が残る。焼成不良で灰白色を呈する。

坏c (25～40) 復元口径12.0～17.2 cm。体部は直線的にやや外開きで、若干貧弱な高台を貼付するものが多い。色調は灰色や淡灰色などを呈する。

大坏c (41) 復元高台径12.2 cm。底部端に断面方形の高台を貼付する。外面最下は回転ヘラケズリ。底部内外面はナデ調整。

高坏b (42) 復元口径23.0 cm。外面かは回転ヘラケズリで、内面は灰びりする。

壺 (43～45) 43は0.2 cm以下の白色砂粒を多く含む胎土である。復元口径8.0 cm。44は復元底径12.0 cm。底部は未調整。その他は回転ナデ調整。45は体部下半が回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。

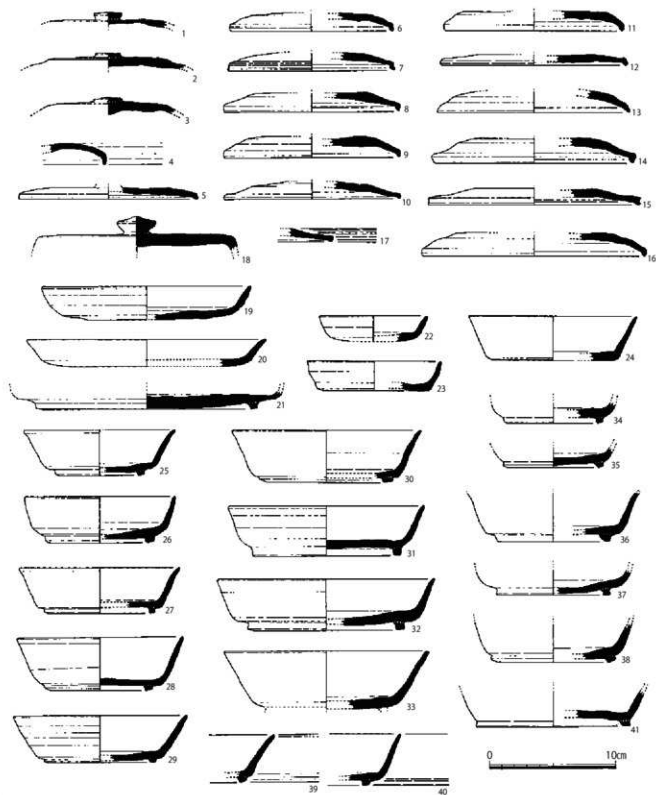


Fig.8 第38次調査 黄灰色粘土出土遺物実測図① (1/3)

鉢 (46) 外面下半は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ調整。

甕 (47,48) 口縁端部外面は肥厚させる。焼成良好で色調は暗灰色を呈する。47は復元口径29.9 cm。土師器

坏 a (49) 外面底部はやや丸味がある。胎土は精製され、色調は赤橙色を呈する。内外面とも摩滅し調整不明。

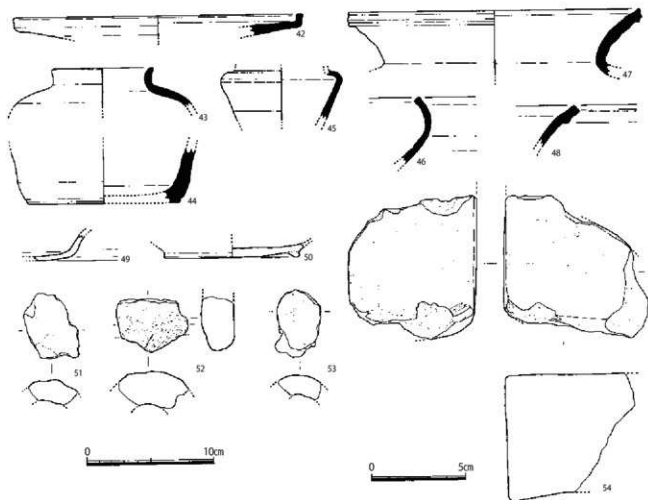


Fig.9 第38次調査 黄灰色粘土出土遺物実測図② (1/3, 53は1/2)

坏c (50) 内外面とも摩滅する。色調は淡橙色を呈する。復元高台径10.8cm。

土製品

輪羽口 (51～53) 51・53は外面を面取りするように整形されている。52は先端部で、被熱で溶解している。

石製品

砥石 (54) 欠損するが4面の使用が認められる。泥岩製。

黄灰色粘土最下層出土遺物 (Fig.10)

須恵器

蓋c (1, 2) 1はボタン状のツمامミを貼付する。2は外面回転ヘラケズリで扁平のツمامミを貼付する。

蓋c3 (3, 4) 外面上半部は回転ヘラケズリ。3は器形に膨らみがなく直線的である。

蓋3 (5～8) 8以外は口縁端部をやや長めに折り曲げている。外面上半部は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ調整。

蓋4 (9) 全体的に扁平をなす。残存範囲は回転ナデ調整。復元口径15.4cm。

皿a (10) 復元口径14.2cm。底部は回転ヘラ切りで、焼成良好で淡灰色を呈する。

坏c (11～16) 復元高台径8.0～12.1cm。11は復元口径11.4cm。16は復元口径18.3cm。色調は淡灰色や灰色を呈する。

高坏 (17, 18) 復元口径は23.0cmと24.4cm。内面下半はナデ調整。18の外面中位のみ回転ヘラケズリ。

小鉢 (19) 復元口径15.8cm、器高6.5cm。外面下半から底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ

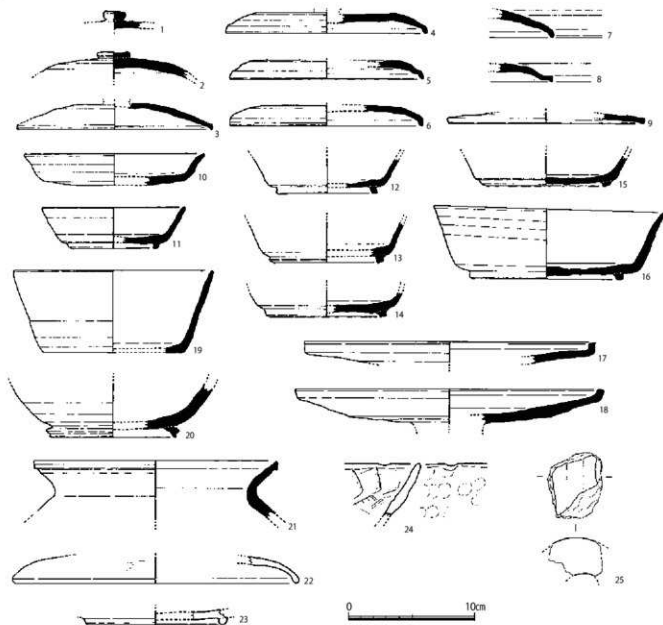


Fig. 10 第38次調査 黄灰色粘土最下層出土遺物実測図 (1/3)

調整。焼成良好で色調は暗灰色や淡灰色を呈する。

壺 (20) 外側に跳ねる高台を貼付する。復元高台径 10.0 cm。外面は底部がヘラ切り後未調整。それ以外は回転ナデ、内面はナデ調整。

甕 (21) 復元口径 19.3 cm。色調は暗灰色を呈し、外面肩部は灰被りしている。

土師器

蓋 3 (22) 小片で若干正確性に欠けるが復元口径 22.6 cm。外面にはミガキが僅かに残る。

皿 e もしくは杯 c (23) 復元高台径 11.1 cm。内外面とも摩滅し調整不明。色調は淡橙色を呈する。

製塩土器

焼塩壺 (24) 外面ナデ、内面は工具によるナデ調整。色調は淡橙色を呈する。

土製品

輪羽口 (25) 胎土は砂粒を多く含む。

(5) 小結

調査地の最終堆積時期は、平安時代後期であるが、溝（38SD001）は8世紀中頃までには埋設している。Fig. 12のように、昭和54年度の第2次調査で確認された溝が、L字形に曲がり続けているものと推測されている。溝の方が、周辺の御笠川や鶯田川の流路方向とも異なり、正方位でないため、条坊と無関係に掘られた溝と推測されるが、部分的な調査のためその全容や目的は全く想像できず、今後の周辺調査を待つしかない。

参考文献

太宰府町教委『太宰府条坊跡』太宰府町の文化財第5集 1982

表1 第38次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	38SD001	溝	灰色粘土	8世紀前半～中頃	

表2 第38次調査 出土遺物一覧表

灰色粘土(38SD001)

須 恵 餅	須3、須c3、須c3(唐餅)、須c、須、環c、環c、環a、
土 師 須	高坪、須a、丹波焼、甕
土 師 須	須c、環、甕、破片

灰土

須 恵 餅	須a、須3、須c、環c、環c、環、甕
土 師 須	破片
瓦	類(平瓦(椅子、無文))

埴色粘土

須 恵 餅	須a3、須3、須c、甕、環c、高坪、鉢、甕
土 師 須	須丸底环a、須c、大甕c、环、甕
白	磁甕；IV(1)、IV~III(1)、V~IIa(1)
埴 輪 陶	須丸底(文目)(1)
瓦	類(丸瓦(無文)、平瓦(椅子、護目))
石 製	品(滑石石籠(2)、滑石製品(1))

黄灰色粘土

須 恵 餅	須2、須3、須c3、須4、須c、須c2、环a、环c、大环c、
土 師 須	小甕a、須a、大瓦c、高坪、高坪b、高坪脚、鉢
土 師 須	須a、环c、甕、破片
埴 色 土 師 人 須	須c
埴 色 土 師 系 青 須	須；1~5(1)
瓦	平瓦(護目、椅子、無文)、丸瓦(椅子、無文)
土 製	文字瓦(1~5(平瓦))、無文磚
土 製	品(輪形口(4))

黄灰色粘土最下層

須 恵 餅	須2、須3、須c、須c3、須4、須a、环a、大环c、环c
土 師 須	高坪、甕、小鉢、鉢、破片(須a等あり)
土 師 須	須丸底(环c、环c、环a、甕、甕、小甕c、破片)
埴 輪 土	須焼甕
瓦	類(丸瓦(無文)、平瓦(無文、護目))
土 製	品(輪形口(1))

表3 第38次調査 土器供膳具計測表

灰青色粘土 (MSD001)

種別	器 種	器物番号	図番号	口径	縁高	底径	A	B
甕形器	甕	F-005	Fig. 10-1	—	1.3*a	—	—	—
	甕c	F-011	Fig. 10-2	(3.2)	3.6	—	—	—
	甕c	F-009	Fig. 10-3	(3.7)	3.5	—	—	—
	甕c	F-010	Fig. 10-4	(3.2)	1.4*a	—	—	—
	甕c	F-012	Fig. 10-5	(3.2)	3.3	—	—	—
	甕c	F-003	Fig. 10-6	(3.0)	1.0*a	—	—	—
	甕c	F-014	Fig. 10-7	(3.4)	1.5(a)	—	—	—
	甕c	F-013	Fig. 10-8	(3.0)	2.4(a)	—	—	—
	甕c	F-002	Fig. 10-9	—	1.10*a	—	—	—
	甕c	F-004	Fig. 10-10	—	1.4*a	—	—	—
	甕c	F-015	Fig. 10-11	(3.2)	2.8	(3.4)	○	○
	甕c	F-016	Fig. 10-12	—	2.15	—	○	○
	甕c	F-017	Fig. 10-13	—	1.85	—	○	○
	甕c	F-008	Fig. 10-14	—	2.7*a	(3.9)	○	X
	甕c	F-006	Fig. 10-15	—	1.90*a	—	○	○
	甕c	F-001	Fig. 10-16	—	1.8*a	12.9	—	—
	甕c	F-007	Fig. 10-17	—	3.5	—	○	○

黒灰色土

種別	器 種	器物番号	図番号	口径	縁高	底径	A	B
土師器	甕	F-001	Fig. 6-1	—	1.6*a	(7.3)	—	—
	大甕c	F-002	Fig. 6-2	(3.8)	2.7*a	—	—	—

黒灰色粘土

種別	器 種	器物番号	図番号	口径	縁高	底径	A	B
甕形器	甕	F-040	Fig. 7-1	—	1.2*a	—	—	—
	甕	F-047	Fig. 7-2	—	1.3*a	—	—	—
	甕	F-049	Fig. 7-3	—	1.3*a	—	—	—
	甕c	F-012	Fig. 7-4	—	1.7(a)	—	—	—
	甕c	F-009	Fig. 7-5	(3.2)	0.9*a	—	—	—
	甕c	F-001	Fig. 7-6	(3.0)	1.0*a	—	—	—
	甕c	F-051	Fig. 7-7	(3.2)	1.4*a	—	—	—
	甕c	F-000	Fig. 7-8	(3.0)	1.0*a	—	—	—
	甕c	F-010	Fig. 7-9	(3.4)	1.5(a)	—	—	—
	甕c	F-008	Fig. 7-10	(3.0)	1.4*a	—	—	—
	甕c	F-011	Fig. 7-11	(3.2)	1.6(a)	—	—	—
	甕c	F-002	Fig. 7-12	(3.4)	0.9*a	—	—	—
	甕c	F-003	Fig. 7-13	(3.2)	1.7*a	—	—	—
	甕c	F-036	Fig. 7-14	(3.0)	2.0(a)	—	—	—
	甕c	F-004	Fig. 7-15	(3.0)	1.2*a	—	—	—
	甕c	F-007	Fig. 7-16	(3.0)	1.6(a)	—	—	—
	甕c	F-002	Fig. 7-17	—	1.1*a	—	—	—
	甕蓋	F-048	Fig. 7-18	—	2.9*a	—	—	—
	甕c	F-021	Fig. 7-19	(3.4)	2.6	(3.2)	○	X
	甕c	F-002	Fig. 7-20	(3.0)	2.15	(3.0)	○	—
	大甕c	F-044	Fig. 7-21	—	1.4*a	(3.4)	○	—
	小甕c	F-023	Fig. 7-22	(3.0)	2.0*a	(3.7)	—	—
	小甕c	F-024	Fig. 7-23	(3.0)	2.30	(3.0)	—	—
	甕c	F-028	Fig. 7-24	(3.2)	3.5	(3.4)	○	○
	甕c	F-013	Fig. 7-25	(3.0)	3.60	(3.4)	○	X
	甕c	F-014	Fig. 7-26	(3.0)	3.6	(7.1)	—	—
	甕c	F-018	Fig. 7-27	(3.7)	3.6	(3.4)	○	—
	甕c	F-003	Fig. 7-28	(3.2)	4.2	(3.3)	○	X
	甕c	F-004	Fig. 7-29	(3.7)	3.70	(3.4)	○	○
	甕c	F-015	Fig. 7-30	(3.4)	4.1	(3.4)	○	○
	甕c	F-005	Fig. 7-31	(3.0)	4.0	(1.8)	○	○
	甕c	F-017	Fig. 7-32	(3.7)	4.00	(3.4)	○	—
	甕c	F-016	Fig. 7-33	(3.6)	4.3*a	—	—	—
	甕c	F-045	Fig. 7-34	—	1.7*a	(7.8)	○	—
	甕c	F-039	Fig. 7-35	—	1.60*a	(3.4)	○	—
	甕c	F-040	Fig. 7-36	—	3.9*a	(3.4)	○	—
	甕c	F-042	Fig. 7-37	—	2.0*a	(3.0)	○	—
	甕c	F-041	Fig. 7-38	—	3.1*a	(3.4)	○	—
	甕c	F-020	Fig. 7-39	—	3.75	—	—	—
	甕c	F-019	Fig. 7-40	—	3.50	—	—	—
大甕c	F-043	Fig. 7-41	—	2.9*a	(12.2)	—	—	
土師器	甕c	F-006	Fig. 8-08	—	2.05*a	—	—	—
	甕c	F-037	Fig. 8-09	—	1.1*a	16.4	—	—

灰青色粘土下

種別	器 種	器物番号	図番号	口径	縁高	底径	A	B
甕形器	甕	F-020	Fig. 9-1	—	1.4*a	—	—	—
	甕	F-019	Fig. 9-2	—	2.15*a	—	—	—
	甕c	F-014	Fig. 9-3	(3.4)	2.0*a	—	—	—
	甕c	F-012	Fig. 9-4	(3.0)	1.0*a	—	—	—
	甕c	F-015	Fig. 9-5	(3.2)	1.0*a	—	—	—
	甕c	F-013	Fig. 9-6	(3.3)	1.60*a	—	—	—
	甕c	F-017	Fig. 9-7	—	2.7*a	—	—	—
	甕c	F-010	Fig. 9-8	—	1.5*a	—	—	—
	甕c	F-018	Fig. 9-9	(3.4)	0.80*a	—	—	—
	甕c	F-011	Fig. 9-10	(3.4)	3.5	(11.4)	○	—
	甕c	F-007	Fig. 9-11	(3.4)	3.2	(7.2)	○	—
	甕c	F-008	Fig. 9-12	—	2.8*a	(3.0)	○	—
	甕c	F-000	Fig. 9-13	—	3.2*a	(3.0)	○	—
	甕c	F-009	Fig. 9-14	—	2.7*a	(3.0)	○	—
甕c	F-010	Fig. 9-15	—	3.4*a	(10.1)	○	—	
土師器	甕c	F-005	Fig. 9-16	(3.8)	5.5	(12.1)	○	—
	甕c	F-002	Fig. 9-22	(2.4)	2.1*a	—	—	—

2、第40次調査

(1) 調査に至る経緯

太宰府市大字通古賀（現在、通古賀3丁目）字半田284-1で、第2次調査や第38次調査のすぐ北側に位置する。

調査は親世音寺地区土地画整理事業に伴うもので、当時の調査区画番号の57区画4トレンチである。調査期間は1983（昭和58）年2月8日～2月21日で、調査は山本信夫が担当した。調査面積は31.4㎡。

(2) 基本層位

調査当時の調査地付近の標高は28.1mで、地表から真砂土や表土があり、深さ約0.3～0.4mで遺構面となる。遺構検出時の土色は暗茶色土で、地山は黄色粘土である。

(3) 検出遺構

溝

40SD001 (Fig. 11)

調査区外に続いているが検出長9m、幅4.2m前後で、深さは0.4mで、北側がさらに0.1～0.2m深くなった幅1m前後の溝が掘られている。この溝は西に向かって下がっている。振れはE-24° 6′ -Nである。

40SD003 (Fig. 11)

SD001の南側にあり、東側は調査区外に続き、西側は擾乱を受けている。検出長6.5m、幅1.1～1.7mで、深さは0.5mで、西に向かって下がっている。振れは約E-20° 43′ -Nである。

(4) 出土遺物

溝

40SD001 上層出土遺物 (Fig. 13)

土師器

坏 a (1) 口径11.4 cm、器高2.15 cm。底部に穿孔がある。

40SD001 下層出土遺物 (Fig. 13)

土師器

小皿 a もしくは坏 a (2、3) 2は口径10.8 cm、器高1.8 cm、3は復元口径11.0 cm、器高1.6 cm。

坏 a (4～11) 口径10.7～12.2 cm、底部切り離しは回転ヘラ切り。5・8・10は体部中位に僅かな屈曲がある。7・8の口縁部には油煙の煤が付着する。

碗 a (12、13) 12は復元口径13.1 cm、器高3.65 cm、13は復元口径13.4 cm、器高3.95 cm。摩擦が目立つが内外面とも回転ナデ。底部はヘラ切り後、板状圧痕が残る。

碗 c (14) 口縁端部を僅かに緩やかに外反させる。内面にミガキのような痕跡が残る。口径12.8 cm、器高4.35 cm。

瓦類

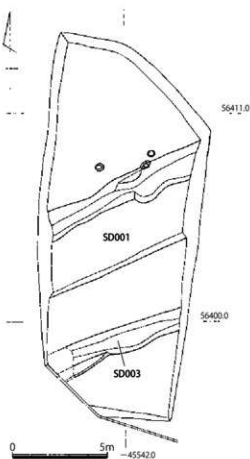


Fig. 11 第40次調査 遺構全体図 (1/200)

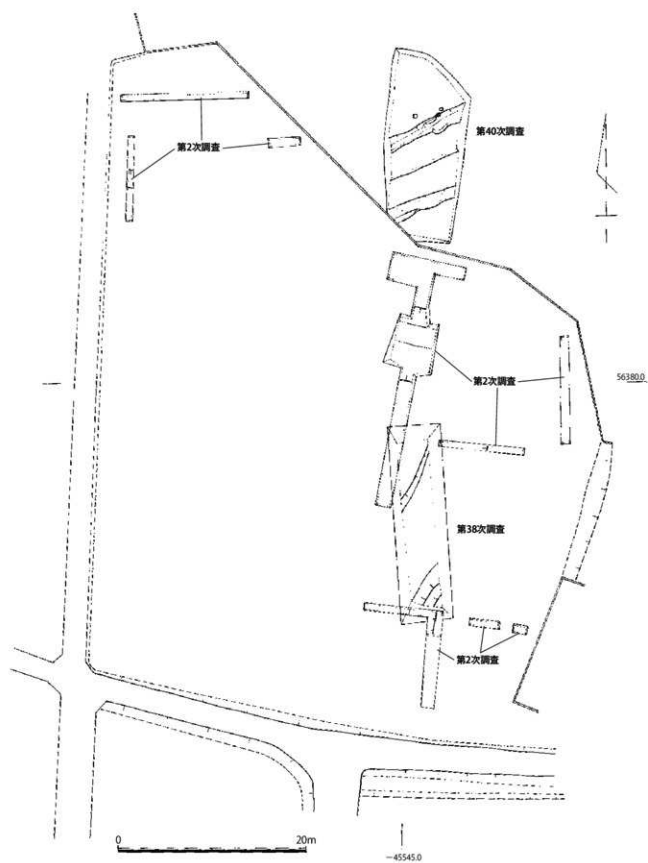
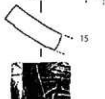
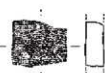
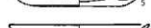
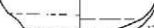
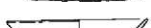
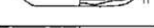
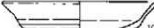
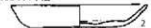


Fig.12 第2・38・40次調査位置図 (1/400)

40SD001上層



40SD001下層

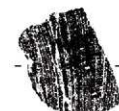
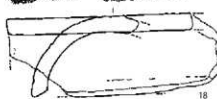


0 10cm

0 10cm

0 5cm

暗茶色土



0 10cm

Fig. 13 第40次調査出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、石製品は1/2)

平瓦 (15) 「佐」の文字瓦。

石製品

砥石 (16) 大きさ 7.65×4.5×4.2 cm。側面は割れているが、割れ面に若干使用痕がある。

暗茶色土出土遺物 (Fig. 13)

瓦類

軒丸瓦 (17) 蓮弁は単弁、素弁で、中房は1+7とみられる。珠文はオタマジャクシ状をなしている。外縁素文。

九瓦 (18) 菱形の格子叩き。

平瓦 (19～21) 19は「平井」の文字瓦の一部。20は「筑」の文字瓦。21は格子叩きで、破片には残されていないが、九歴分類の902Eの「佐」の文字瓦とみられる。

(5) 小結

調査地を横切る溝(40SD001・003)は、明確に人為的に掘られた溝と推測されるが、正方位のつていないため条坊に関連した溝とは言い難い。溝の埋没時期はIX～X期(10世紀中頃～11世紀前半)で、北側の第72次調査の主要遺構と同時期であるものの、溝以外の遺構が検出されていないため、調査地一帯の土地利用が不明瞭である。

表4 第40次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	40SD001	溝		10世紀後半～11世紀前半	
2		ピット群			
3	40SD003	溝		平安時代	

表5 第40次調査 出土遺物一覧表

S-1上層	
土 器	須江環 ^a
越前窯系青磁類	I (1)
緑 釉 陶	赤地丹(1)
中 国 陶	磁器; 瓦耳蓋形(2)
瓦	額文字瓦(B-5)、破片
金 属 製 品	漆刀
石 製 品	黒磁片(黒曜石)
S-1下層	
須 江 環	須江環、折瓦、破片
土 器	須江環 ^a 、小皿×9枚 ^a 、碗 ^a 、碗c
越前窯系青磁類	I (3)、I-29(1)、I-3(1)、II-26(3)、II-26?(1)
中 国 陶	磁器; 瓦耳蓋形(1)
金 属 製 品	漆刀、鉄塊
石 製 品	黒磁片、刺片(黒曜石)

S-2	
金 属 製 品	点検釘?
S-3	
越前窯系青磁類	I-2a(1)、II-2(1)
河内窯系青磁類	破片(1)
緑 釉 陶	器破片(1)
暗茶色土	
須 江 環	須江環、破片
越前窯系青磁類	I (4)、I-19(1)、I-2a(1)、II (1)、II-26?(1)
中 国 陶	磁器; II (1)
白 磁類	破片(1)
瓦	額文字瓦(I-4「平野」)、文字瓦(B-1「佐」)、額文字瓦(IV-4「筑」)、単弁十二葉軒丸瓦、破片

表6 第40次調査 土器供膳具計測表

S-1上層								
種別	器 種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	須江環	R-001	Fig. 13-1	11.4	2.15	6.2	○	○
S-1下層								
種別	器 種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿×9枚	R-002	Fig. 13-2	10.8	1.9	7.5	○	○
	小皿×9枚	へう	R-002	Fig. 13-3	11.0	1.6	(8.2)	○
	碗	へう	R-011	Fig. 13-12	13.1	3.65	6.95	○
	碗	へう	R-012	Fig. 13-13	13.4	3.90	6.7	○
	碗	へう	R-013	Fig. 13-14	12.8	4.35	7.4	○

S-1下層								
種別	器 種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	須江環	へう	R-004	Fig. 13-4	10.7	2.2	7.7	○
	須江環	へう	R-005	Fig. 13-5	11.2	1.8	7.6	○
	須江環	へう	R-008	Fig. 13-6	(11.2)	1.85	(7.6)	○
	須江環	へう	R-010	Fig. 13-7	11.4	1.95		○
	須江環	へう	R-007	Fig. 13-8	(11.5)	2.0	(7.9)	○
	須江環	へう	R-009	Fig. 13-9	11.5	1.8	6.2	○
	須江環	へう	R-001	Fig. 13-10	(12.2)	2.4	(8.4)	○
須江環	へう	R-003	Fig. 13-11		1.7+	(7.2)	○	

3、第45次調査

(1) 調査に至る経緯と成果

太宰府市大字通古賀（現、通古賀1丁目）字古川354-1、353-1、362-1、360で、西鉄都府楼前駅の北東に位置し、北側を御笠川が流れている。当時の発掘調査地割番号は6AYQ-Bである。

観世音寺土地区画整理事業に伴うもので、トレンチを4ヶ所設定し、遺構の確認を行ったものの、遺構は検出されなかった。当時の詳細な記録は残されていないが、御笠川に隣接している立地から、氾濫原だったと推測される。調査年月日は1983（昭和58）年10月11日で、調査は山本信夫が担当した。調査面積約50㎡。

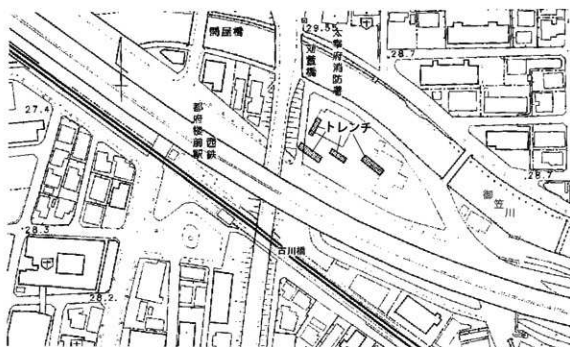


Fig.14 第45次調査位置図 (1/2500)

4、第62次調査

(1) 調査に至る経緯

太宰府市大字通古賀（現在、通古賀3丁目）字半田290-1外で、西鉄都府楼前駅南側の駅前広場整備に伴う調査であったが、調査期間がほとんど与えられない状況下での調査であったため、東西2ヶ所にトレンチ（西側が1トレンチ、東側が2トレンチ）を設け、確認を行った程度で、井戸も完掘できず、調査を終えることとなった。

発掘調査は1987（昭和62）年1月26日に実施した。調査は山本信夫、狭川真一が担当した。調査面積28.1㎡である。

(2) 基本層位

現況面から深さ約1m程で、黄茶色粘土の地山に遺構が確認される。遺構面は1面で、写真を見る限り、表土には現代の攪乱や灰色土がみられるものの、氾濫層などは見ることができない。

(3) 検出遺構

溝

62SD002

東側の2トレンチで検出した東西溝だが、西側は攪乱により分断されている。検出長2.6m以上、幅は北側の上端が調査区外となっているが、幅はおよそ1.3mと推測される。深さは0.55m前後で、断面U字形である。埋土は上層0.4mほどが暗茶灰色土で、その下層が黒褐色土である。

井戸

62SE001 (Fig. 16)

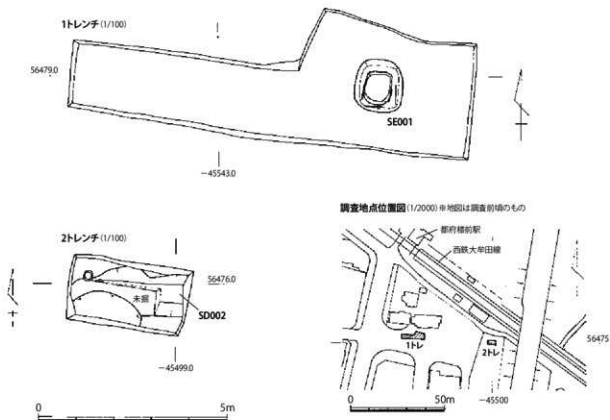


Fig. 15 第62次調査 遺構全体図・位置図

西側の1トレンチで検出した井戸で、東西1.27m、南北1.4mの隅丸方形の掘り方で、深さは1.2mまで掘り下げたものの、時間の関係で完掘できていない。掘り方内では深さ0.9m付近で井戸枠が検出された。井戸枠は0.9m四方の方形で、縦板を並べているが、部分的にしか遺存していない。その方形井戸枠内には、さらに幅約0.3～0.6mの大きな板材を4枚とその隙間などを埋める幅0.15m前後の縦板を立て、隅丸状の井戸枠が設けられている。これが底部近くの浄化装置なのか、井戸枠が上下異なる二重構造だったのかは、完掘できなかったため解明できていない。

(4) 出土遺物

溝

62SD002 上層出土遺物 (Fig. 17)

土師器

坏 a (1～4) 復元口径11.0～11.4 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。色調は白茶色を呈する。

碗 (5, 6) 口縁端部を若干折り曲げ外反させる。色調は白茶色を呈する。

椀 c (7～13) 7は丸味のない底部で、底部端に低い台形の高台を貼付する。8～13は高い高台で、高台径6.9～11.6 cm。内面は摩滅し調整不明。外面ヨコナデ。12は復元口径14.9 cm。

大椀もしくは鉢 (14) 胎土は砂粒をやや多く含み、茶灰色を呈する。内外面とも摩滅する。緑釉陶器

椀 (15) 胎土は土師質で淡橙色を呈する。内外面とも光沢のある濃緑色釉を施す。

62SD002 下層出土遺物 (Fig. 17)

土師器

小皿 a (16, 17) 16は復元口径10.0 cm, 17は底部切り離しは回転ヘラ切り。

坏 a (18) 復元口径11.7 cm, 器高2.6 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。

椀 c (19～23) やや細身の高台を貼付する。復元高台径7.6～8.5 cm。内面は摩滅するがナゲ調整が残るものもある。

椀 (24) 内面はヨコナデもしくはミガキである。

小甕 (25) 内面に煤が付着する。

鉢 (26) 復元底径14.0 cm。胎土は0.3 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄白色や茶灰色を呈する。内外面ともヨコナゲ調整。

黒色土器

椀 (27) A類。摩滅し単位不明瞭だが、内面はミガキを施す。復元高台径9.0 cm。

井戸

62SE001 上層出土遺物 (Fig. 18)

土師器

小皿 a (1) 底部切り離しは回転ヘラ切り。復元口径9.6 cm, 器高1.3 cm。

小皿 c (2) 口径10.6 cm, 器高2.6 cm, 高台径6.7 cm。

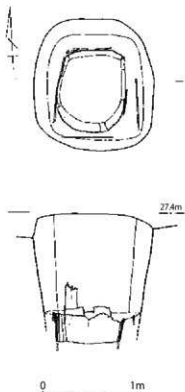


Fig. 16 62SE001 遺構実測図
(1/40)

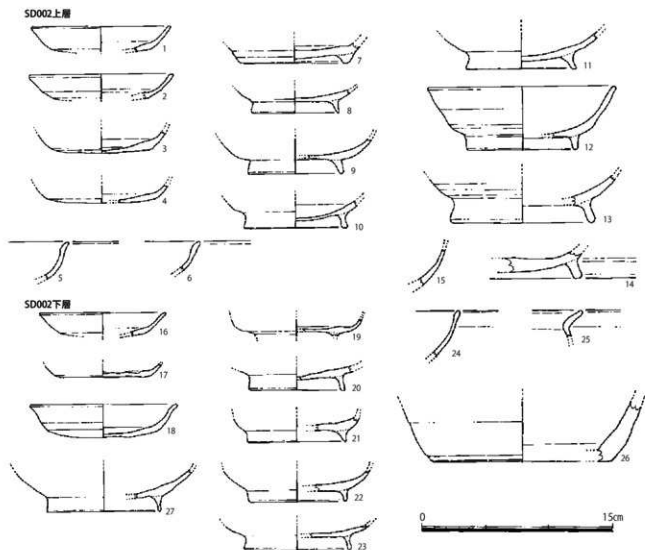


Fig. 17 62SD002 出土遺物実測図 (1/3)

小甕 (3) 胎土は砂粒が少なく、淡黄橙色を呈する。外面には煤が厚く付着する。

甕 (4) 移動式甕の底部分とみられ、胎土は赤橙色で、内面には煤が付着する。

黒色土器

碗 c (5) B 類。口縁端部を僅かに外反させる。摩滅するが内面にはミガキが確認できる。口径 15.2 cm。

瓦類

平瓦 (6, 7) 6 は格子叩きに「賀」の左字。7 は二重格子に「賀茂」の文字瓦。

62SE001 下層出土遺物 (Fig. 18)

土師器

小皿 a (8) 底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。復元口径 10.2 cm。

碗 c (9) 内面は不定方向のナデ、外面は摩滅が目立つ。口径 14.5 cm。

丸底杯 c (10) 外面は摩滅するが、内面はミガキ b を施す。口径 15.2 cm。

黒色土器

碗 c (11~13) 11・12 は A 類で、細かくミガキ c を施す。11 は復元口径 14.8 cm。12 は口縁端部を若干曲げる。外面も口縁部付近は黒化する。口径 15.3 cm。13 は B 類。口縁端部を僅かに外反させている。口径 15.0 cm。

瓦類

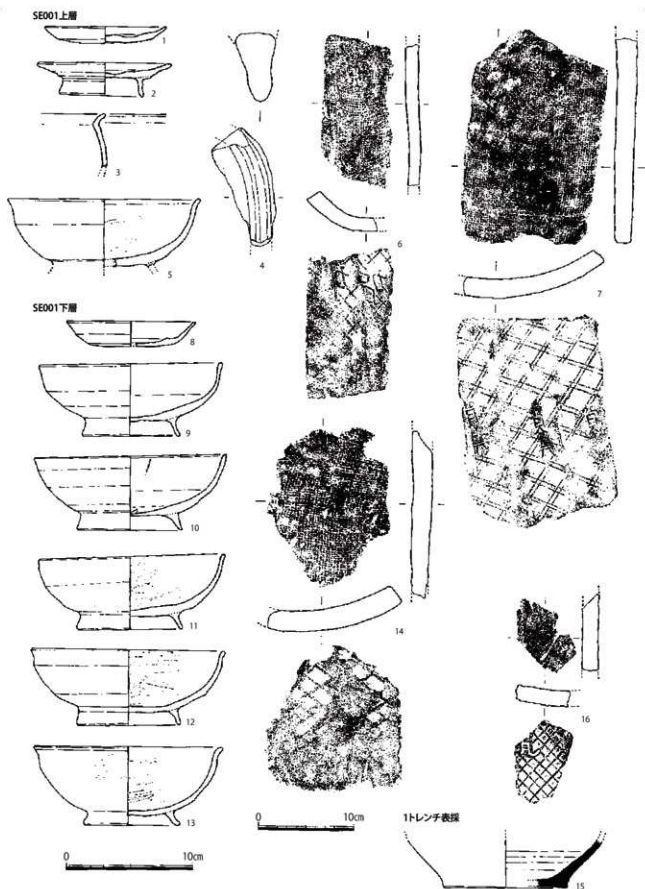


Fig. 18 62SE001・表採出土遺物実測図 (1/3, 瓦は 1/4)

平瓦 (14) 大きめの格子叩きの後、一部ナデ調整する。

第 62 次調査 1 トレンチ表探遺物 (Fig. 18)

須恵器

葺 (15) 胎土は精製され、色調は灰色を呈する。底部外面は糸切り。内外面ともヨコナデ調整。篠窩。

瓦類

平瓦 (16) 正格子叩きに「瓦」の陰刻文字瓦。欠損している上部には「平井」の文字が続くとみられる。

(5) 小結

調査面積は狭いが、御堂川の氾濫原は広がってなく、IX~X期 (10 世紀中頃~11 世紀前半) の明確な溝と井戸が検出され、遺構が安定的に残っていることがわかった。

表7 第62次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	62SE001	井戸		IX~X期	西トレンチ
2	62SD002	溝		X期	東トレンチ

表8 第62次調査 出土遺物一覧表

S-1

蘇州窯系青磁鉢; 1-2(1)

S-1上層

須 恵 器 磁器3、蓋c、坏c、甕、短須壺、破片

土 師 器 小皿a、小皿a、坪a(9)、坏c、碗c、小甕、甕類、線付、壺、破片

黒色土器A類陶c

黒色土器B類陶c

蘇州窯系青磁鉢; 1(2) 坏; 1(1)

瓦 類 平瓦(格子、二重格子)、破片

金 風 製 品 漆器

石 製 品 石碇

土 製 品 土塊

七 の 磁瓦

S-1下層

土 師 器 小皿a、坪a、坪a(9)、丸底坏c、碗c、甕

黒色土器A類陶c

黒色土器B類陶c

蘇州窯系青磁鉢; 1-27(1)

瓦 類 平瓦(調目、格子)、丸瓦(無文)

土 製 品 土塊

S-2上層

須 恵 器 磁器3、蓋c、坏c、高坏、甕、破片

土 師 器 坏、坪a、丸底坏c、碗c、甕、大甕×鉢、壺、線付壺

黒色土器B類陶c

緑 釉 陶 器 陶片(1)

瓦 類 平瓦(格子)、丸瓦(格子)

金 風 製 品 漆器

S-2下層

須 恵 器 坏c、破片

土 師 器 小皿a、坪a、碗c、小甕、甕、鉢

黒色土器A類陶c、破片

緑 釉 陶 器 陶片(1)

蘇州窯系青磁鉢片(1)

瓦 類 平瓦(格子)、丸瓦(格子)

1 トレンチ表探

須 恵 器 磁器c、甕(篠窩)

土 師 器 坏、破片

瓦 類 平瓦(格子)

出土地詳細不明

須 恵 器 磁器3、坏c、甕?、甕、破片

土 師 器 坏、坪a、碗c、甕、甕類、つまみ、破片

黒色土器A類陶c

黒色土器B類陶c

瓦 類 平瓦(調目、格子)、丸瓦(格子)

表9 第62次調査 土器供膳具計測表

S-1上層

検出	品 種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿a	へ? 0-004	Fig. 18-1	18.0	1.3	7.0	○	○
土師器	小皿a	へ? 0-008	Fig. 18-5	18.6	2.4	6.7	○	○
黒色土器B類陶c	破片	0-001	Fig. 18-5	15.2	5.4*			

S-2上層

検出	品 種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	坪a	へ? 0-003	Fig. 17-1	(11.0)	2.05*	(7.8)		
土師器	坪a	へ? 0-006	Fig. 17-3	(11.4)	2.1*	(8.1)	○	○
土師器	坪a	へ? 0-008	Fig. 17-4		1.4*	(8.0)		
土師器	碗c	0-012	Fig. 17-5		3.0*			
土師器	碗c	0-002	Fig. 17-6		2.4*			
土師器	碗c	0-008	Fig. 17-7		1.6*	(8.5)		
土師器	碗c	0-012	Fig. 17-8		1.85*	(8.9)		
土師器	碗c	0-007	Fig. 17-9		2.8*	(7.4)	○	○
土師器	碗c	0-013	Fig. 17-10		2.15*	(8.2)	○	○
土師器	碗c	0-014	Fig. 17-11		3.1*	(8.7)	○	○
土師器	碗c	0-010	Fig. 17-12	(14.9)	5.0	(8.0)		
土師器	碗c	0-011	Fig. 17-13		3.7*	(11.4)		

S-1下層

検出	品 種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿a	へ? 0-002	Fig. 18-8	(18.2)	2.0	(7.0)	○	○
土師器	小皿a	へ? 0-003	Fig. 18-9	14.6	2.7	7.25	○	○
土師器	丸底坏c	0-005	Fig. 18-10	15.2	5.85	4.3	○	○
黒色土器B類陶c	破片	0-005	Fig. 18-11	(14.0)	8.8	8.36	○	○
黒色土器B類陶c	破片	0-008	Fig. 18-12	15.3	6.2	8.2	○	○
黒色土器B類陶c	破片	0-001	Fig. 18-13	15.0	6.2	7.4	○	○

S-2下層

検出	品 種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土師器	小皿a	へ? 0-002	Fig. 17-16	(18.0)	1.8*			
土師器	小皿a	へ? 0-003	Fig. 17-17		1.1*			
土師器	坪a	へ? 0-001	Fig. 17-18	(11.7)	2.6	(8.0)	○	○
土師器	碗c	0-010	Fig. 17-19		1.4*			
土師器	碗c	0-008	Fig. 17-20		1.9*	(7.4)		
土師器	碗c	0-007	Fig. 17-21		1.9*	(7.4)		
土師器	碗c	0-009	Fig. 17-22		2.5*	(7.8)		
土師器	碗c	0-008	Fig. 17-23		1.95*	(8.8)		
土師器	碗c	0-004	Fig. 17-24		3.7*			
黒色土器A類陶c	破片	0-011	Fig. 17-27		3.5*	(8.0)		

5、第72次調査

(1) 調査に至る経緯

太宰府市大字通古賀（現在、通古賀3丁目）字半田298-1で、御笠川の南方に位置する。

西鉄都府楼前駅南側の駅前広場整備に伴う調査で、1987（昭和62）年に実施した第62次調査でできなかった部分を中心に行った。調査期間は1988（昭和63）年6月6日～6月25日で、調査は狭川真一が担当した。調査面積264㎡。

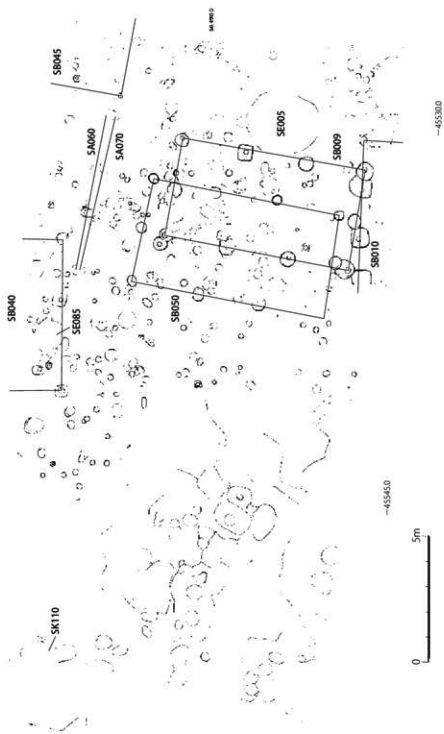
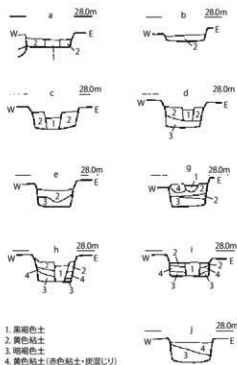
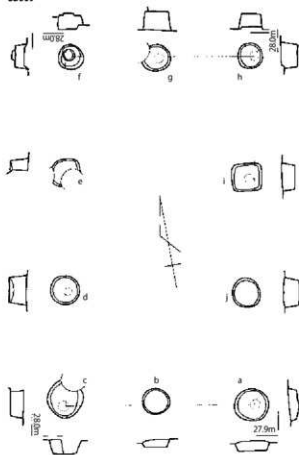


Fig. 19 第72次調査 遺構全体図 (1/150)

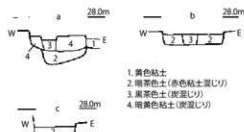
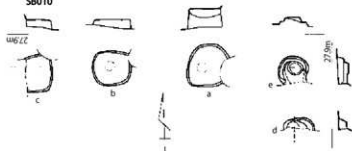
SB009



1. 黒褐色土
2. 黄色粘土
3. 暗褐色土
4. 黄色粘土(赤色粘土・灰混じり)

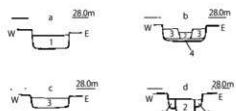
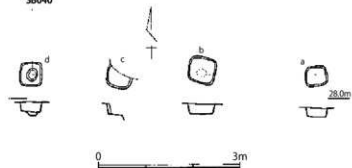


SB010



1. 黄色粘土
2. 暗茶色土(赤色粘土混じり)
3. 黒茶色土(灰混じり)
4. 暗黄色粘土(灰混じり)

SB040



1. 赤茶色土(黄色ブロック混じり)
2. 暗茶色土(赤色ブロック混じり)
3. 赤黄色粘土(灰混じり)
4. 黄褐色粘土



Fig. 20 72SB009・010・040 遺構実測図 (1/80、1/50)

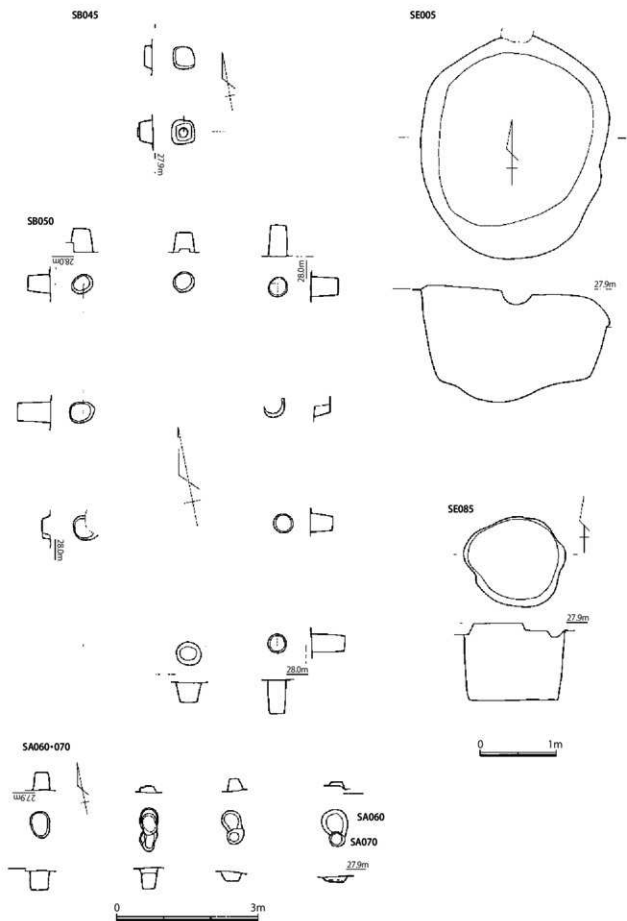


Fig. 21 72SB045・050、SA060・070、SE005・085 遺構実測図 (1/80、井戸は1/50)

(2) 基本層位

表土下の茶灰色土を除去すると黄灰色土で遺構が検出される。調査区中央から西半分はさらに茶色粘土が遺構面を覆っている。遺構面のレベルは、標高 27.9m 程である。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

72SB009 (Fig. 20)

2間×3間(4.0×7.4m)の南北棟で、振れはN-9° 45' 34" -Eである。掘り方は隅丸方形で、柱間は桁行2.4～2.5m、梁間は2.0mである。

72SB010 (Fig. 20)

調査区の南端で確認されたもので、東西3間分検出したが、調査区外に続いている。振れはW-2° 10' 54" -Nである。掘り方は隅丸方形であるが、東端の掘り方はやや不定形で小さく、底である可能性は高い。

72SB040 (Fig. 20)

調査区北辺で検出した柱列で、掘り方は方形で、東西3間分(6m)検出している。柱間は東から2.4m、1.8m、1.8mで、振れはほぼ東西で、建物として続くのであれば、北側の調査区外へと展開するとみられる。

72SB045 (Fig. 21)

調査区の北東隅で検出された2つの方形の掘り方で、調査区外に続くものと推測される。掘り方は隅丸方形で、柱間は1.6m、振れはN-9° 38' 53" -Eである。

72SB050 (Fig. 21)

2間×3間(4.2×7.6m)の南北棟で、振れはN-11° 18' 36" -Eである。掘り方は円形で、柱間は桁行2.4～2.6m、梁間は1.9～2.1mである。

柵列

72SA060 (Fig. 21)

東西3間(6.2m)の柵列で、振れはW-11° 10' 32" -Nである。柱穴は円形で、柱間は東から2.2m、1.8m、2.2mである。同規模のSA070と重複しており、SA070の建て替えと推測される。

72SA070 (Fig. 21)

東西3間(6.4m)の柵列で、振れはW-12° 19' -Nである。柱穴は円形で、柱間は東から2.2m、1.8m、2.4mである。SA060と同規模だが、SA060に切られている。

井戸

72SE005 (Fig. 21)

掘り方は、東西2.5m、南北2.9m、深さ1.45mの楕円形で、最上層は暗茶色土で、その下は黒灰色土で、中央付近は若干窪んでいる。井戸枠などは確認できていない。

72SE085 (Fig. 21)

掘り方は、東西1.35m、南北1.2m、深さ1.02mの円形で、明確な井戸枠は確認できていない。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

72SB009

72SB009a 出土遺物 (Fig. 22)

土師器

坏a (1) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は黒灰色や淡茶灰色を呈する。

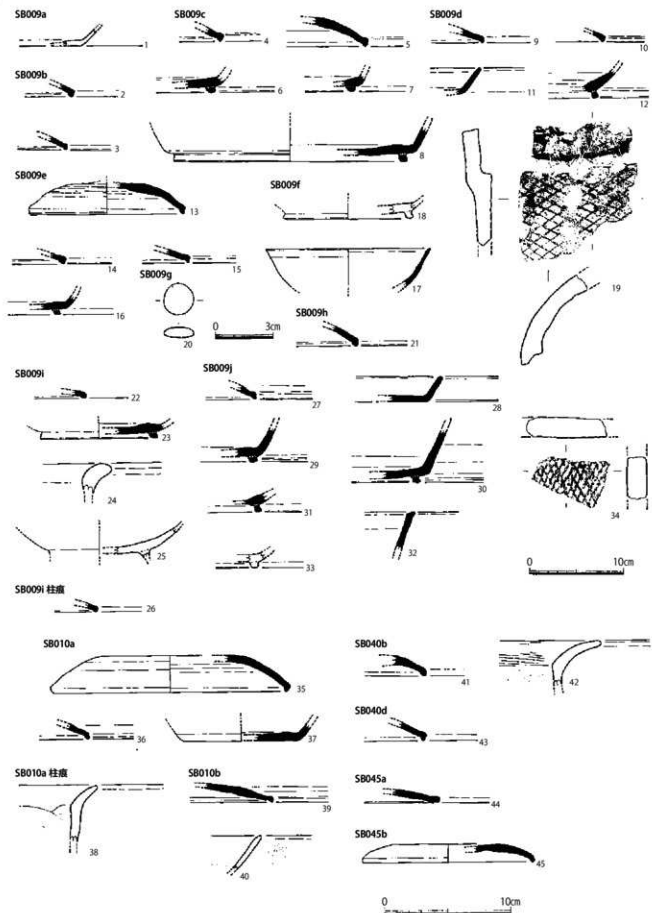


Fig. 22 72SB009・010・040・045 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、石製品は1/2)

72SB009b 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (2, 3) 断面を僅かに三角形にした口縁端部で、内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色を呈する。

72SB009c 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (4, 5) 5 は外面上半部が回転ヘラケズリ。

坏 c (6, 7) 高台はやや潰れた低い高台を貼付する。

大坏 c (8) 断面方形の高台を貼付する。復元口径 18.4 cm。外面底部は回転ヘラケズリ。

72SB009d 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (9) 口縁端部を僅かに広げ、断面三角形を呈する。

蓋 4 (10) 口縁端部は断面がやや三角形をなすが、回転ナデで丸く仕上げる。

皿 a (11) 体部の厚さに対し高台は小さい。内外面とも回転ナデ調整で、外面はやや灰被りである。

72SB009e 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (13 ~ 15) 13 は復元口径 12.4 cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、内外面の一部には重ね焼き痕が残る。14 は内面に沈線が巡る。端部断面は三角形をなすが、蓋 4 に近い形状である。

坏 c (16) 断面方形の高台を簡単に貼付する。

72SB009f 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

坏 (17) 復元口径 13.0 cm。内外面とも回転ナデ調整で、灰色を呈する。

土師器

坏 c (18) 復元高台径 10.3 cm。色調は黄橙色を呈する。

瓦類

丸瓦 (19) やや横長の格子叩き。

72SB009g 出土遺物 (Fig. 22)

石製品

平玉石 (20) 大きさは 1.7 × 1.6 cm、厚さ 0.55 cm。色調は暗灰色を呈する。

72SB009h 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (21) 口縁端部は肥厚させているが、断面三角形ではなく丸味のある形状に仕上げる。

72SB009i 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (22) 口縁端部は僅かに肥厚させているが、蓋 4 に近い。

坏 c (23) 復元高台径 9.3 cm。外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。色調は灰色を呈する。

土師器

甕 (24) 肥厚した口縁部である。内外面とも摩滅し調整不明。

黑色土器

碗 c (25) A 類。丸味のある体部で、外面ヨコナデだが、内面は摩滅し調整不明。

72SB009j 柱痕出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (26) 口縁端部を僅かに擠まむ程度で、蓋 4 に近い。

72SB009j 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (27) 残存範囲では回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

皿 a (28) 器高 2.0 cm。底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。

坏 c (29 ~ 31) やや貧弱な高台を貼付する。30 は体部が直線的に開く。

鉢 (32) 口縁部上面を平坦に仕上げる。

土師器

坏 c (33) 内外面にミガキ a が施されている。色調は茶色を呈する。

瓦類

平瓦 (34) 縦長の格子叩きである。

72SB010

72SB010a 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (35、36) 35 は復元口径 19.0 cm。外面上半部は回転ヘラケズリ。内面には重ね焼き痕が残る。36 は口縁端部を僅かに曲げている。色調は白灰色を呈する。

坏 a (37) 復元底径 9.0 cm。外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整か。

72SB010a 柱痕出土遺物 (Fig. 22)

土師器

甕 (38) 体部内面はヘラケズリ、その他は摩滅し調整不明。

72SB010b 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (39) 口縁端部は小さく断面三角形を呈する。外面上部はヘラ切り後ナデ、内面はナデ調整。

土師器

坏 (40) 内外面ともミガキ a。色調は淡茶色を呈する。

72SB040

72SB040b 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (41) 口縁端部は軽く折り曲げる。内外面とも回転ナデで、外面上半部は回転ヘラケズリか。

土師器

甕 (42) 胴部があまり張らず、口縁部をやや長く作る。外面はタテハケ、体部内面はヘラケズリ、口縁部内面はヨコハケのあとナデ調整する。

72SB040d 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (43) 内外面とも回転ナデで、端部は断面三角形に仕上げる。色調は灰色を呈する。

72SB045

72SB045a 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 4 (44) 内外面とも回転ナデで、口縁部はやや曲げているが、端部は丸く仕上げる。

72SB045b 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

蓋 3 (45) 口縁端部は内湾するように曲げ、蓋 4 に近い形状である。外面上半部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。色調は青灰色を呈する。

72SB050

72SB050a(S-44) 出土遺物 (Fig. 23)

土師器

坏 a (1) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は黄白色を呈する。

椀 c もしくは小皿 e (2) 細く高い高台を貼付する。摩滅し調整不明。色調は黄白色を呈する。

72SB050b(S-47) 出土遺物 (Fig. 23)

須恵器

蓋 3 (3) 口縁端部は僅かに擴まんだ程度である。内外面とも回転ナデで、灰色を呈する。

皿 a (4) やや丸味のある体部。外面底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。

坏 c (5) 内外面とも回転ナデ調整。やや崩れた高台を貼付する。器高 4.0 cm。

土師器

坏 a (6) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は暗黄灰色を呈する。

72SB050c(S-18) 出土遺物 (Fig. 23)

須恵器

蓋 3 (7) 内外面とも回転ナデ調整。色調は灰黄色を呈する。

72SB050d(S-30) 出土遺物 (Fig. 23)

土師器

椀 c (8) 断面三角形の低い高台を貼付する。全面摩滅し調整不明。色調は暗黄灰色を呈する。

72SB050e(S-13) 出土遺物 (Fig. 23)

須恵器

蓋 3 (9、10) 9 は口縁端部を僅かに擴まみ出している。内外面とも回転ナデ。10 は外面上半部が回転ヘラケズリ、内面上半部はナデ調整。

皿 a (11、12) 2 点とも体部は回転ナデ調整で、色調は灰色を呈する。11 は底部ヘラ切り後未調整。

土師器

蓋 3 (13) 摩滅が目立つが、回転ナデか。

坏 c (14) 底部はやや丸味があり、色調は淡橙色を呈する。

椀 c (15) 高く薄い高台を貼付する。内外面とも摩滅し調整不明。色調は白茶色を呈する。

72SB050g(S-28) 出土遺物 (Fig. 23)

土製品

土壁 (16) 胎土は 0.6 cm 以下の白色砂粒を多く含み、スサや土師器片も含む。平坦面とその反対に小舞痕を残す。

72SB050h(S-69) 出土遺物 (Fig. 23)

須恵器

蓋 3 (17、18) 17 の口縁端部はやや長めの断面三角形を呈する。18 の端部は僅かに断面三角形を呈する。

坏 a (19) 底部はヘラ切り後未調整で、やや還元不良で淡橙色を呈する。

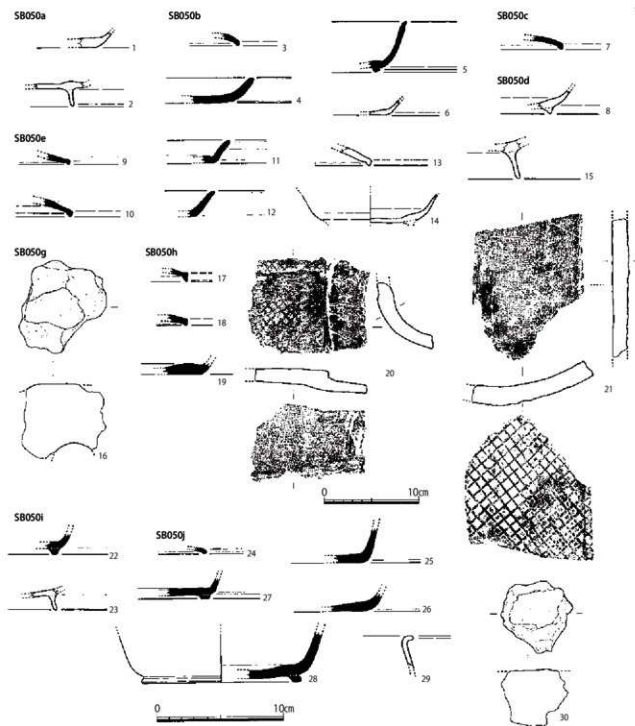


Fig. 23 72SB050 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4)

瓦類

丸瓦 (20) 外面はやや小さめで浅い格子叩き。

平瓦 (21) 正方形の格子叩き。凹面は布目で、一部ナデ調整する。

72SB050i (S-59) 出土遺物 (Fig. 23)

須恵器

坏 c (22) 底部端に断面台形の高台を貼付する。色調は青灰色を呈する。

土師器

椀 c (23) 細く高い高台を貼付する。全体的に摩滅する。色調は淡黄色を呈する。

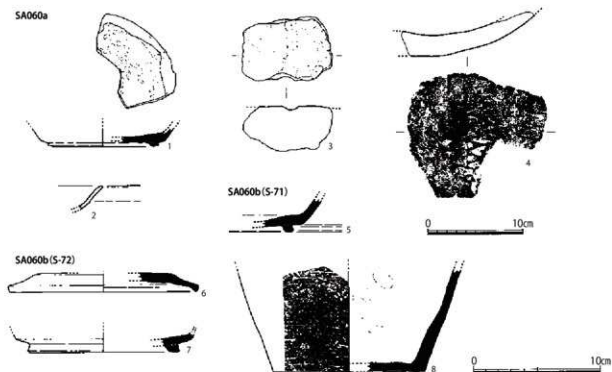


Fig. 24 72SA060 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

72SB050j(S-58) 出土遺物 (Fig. 23)

須恵器

蓋3 (24) 小片で口縁端部を僅かに肥厚させる。

坏a (25) 体部は直線的に立ち上がる。外面は摩擦が目立つが、内面は回転ナデ調整。

皿aもしくは坏a (26) 体部内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色を呈する。

坏c (27, 28) 27はやや低い断面台形の高台を貼付する。28は復元高台径12.6cm。内外面とも回転ナデ、底部外面はナデ調整か。

黒色土器

小甕 (29) A類。口縁端部を短く曲げる。外面には煤が若干付着する。

土製品

土壁 (30) 胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、スサ痕もみられる。色調は黄橙色を呈し、片面を平坦に仕上げる。

櫛列

72SA060

72SA060a(S-95) 出土遺物 (Fig. 24)

須恵器

坏c (1) 低く潰れた高台を貼付する。内面には漆が付着する。

土師器

坏 (2) 口縁端部に向かって僅かに外反させる。内外面の調整はヨコナデか。色調は黄色を呈する。

土製品

土壁 (3) 胎土は大きき砂粒を多く含み、スサ痕もみられる。片面を平坦に仕上げる。

瓦類

平瓦 (4) 横長のやや大きめの格子叩きを施す。凹面は摩擦するが僅かに布目痕を残す。

72SA060b (S-71) 出土遺物 (Fig. 24)

須恵器

坏c (5) 焼成良好で、色調は黄灰白色を呈する。

72SA060b (S-72) 出土遺物 (Fig. 24)

須恵器

蓋3 (6) 外面上半部は回転ヘラケズリ、内面はナデ、口縁部付近は回転ナデ調整である。復元口径 15.0 cm。

坏c (7) やや太い高台を貼付する。復元高台径 12.0 cm。

壺 (8) 外面は回転ヘラケズリで、中位には叩きのような痕跡を残す。外面底部はナデ調整。内面はナデで、指頭圧痕を残す。色調は内面が淡橙灰色、外面が灰茶色を呈する。

井戸

72SE005

72SE005 暗茶色土出土遺物 (Fig. 25・26)

土師器

小皿a (1~3) 復元口径 10.2~10.8 cm。全体的に摩滅が目立つ。

小皿c (4~6) 復元口径 11.0~12.6 cm。4・5はやや厚い体部である。内外面とも摩滅し調整不明。

小坏a (7) 復元口径 10.6 cm、器高 2.3 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

坏a (8~14) 復元口径 10.2~12.0 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

丸底坏a (15) 坏aの可能性もあるが、やや底部を押し出しているように見える。

皿 (16) 体部は丸味のある器形で、小破片だが復元口径 25 cm前後である。胎土は 0.2 cm以下の白色砂粒をやや多く含み、色調は白茶色を呈する。内外面ともヨコナデ調整。

小碗c (17) 口径 10.55 cm、器高 4.7 cm。丸味のある体部で、口縁端部は直上する。

碗c (18~21) 復元口径 11.85~15.3 cm。20は口縁端部を僅かに外反させるが、それ以外は体部がやや外開きである。内外面とも摩滅し調整不明。

小鉢 (22) 手づくねで成形されている丸味のある器形である。胎土は 0.1 cm以下の砂粒を含み、色調は黒灰色を呈する。

小甕 (23、24) 23は口縁部がヨコナデ、外面タテハケ、内面はナデ調整か。24は内外面ともヨコナデ。胎土は 0.1 cm以下の白色砂粒を含み、淡茶灰色を呈する。

黒色土器

小鉢 (25) A類。復元口径 13.0 cm。体部上部に長く細い把手を貼付する。色調は淡橙黄色を呈する。把手や口縁部は回転ナデ調整だが、他は摩滅し調整不明。

小甕 (26) A類。口縁端部に向かって僅かに薄くさせながら外反させる。内面ナデ、外面ヨコナデだが、摩滅が目立つ。

碗c (27) B類。口径 15.5 cm、器高 6.25 cm。口縁端部はごく僅かに外反させる。内外面ともミガキcを施す。

瓦類

平瓦 (28~39) 28・30は縦長の菱形格子叩き。29は方形に近い格子叩き。その他は凸面に横長(幅 1~1.5 cm)で中形の菱形格子叩きを施す。

丸瓦 (40、41) 40はやや横長の幅 1 cm前後の格子叩きを施す。41は幅 1.8 cm前後の横長の菱形格子叩きを施す。

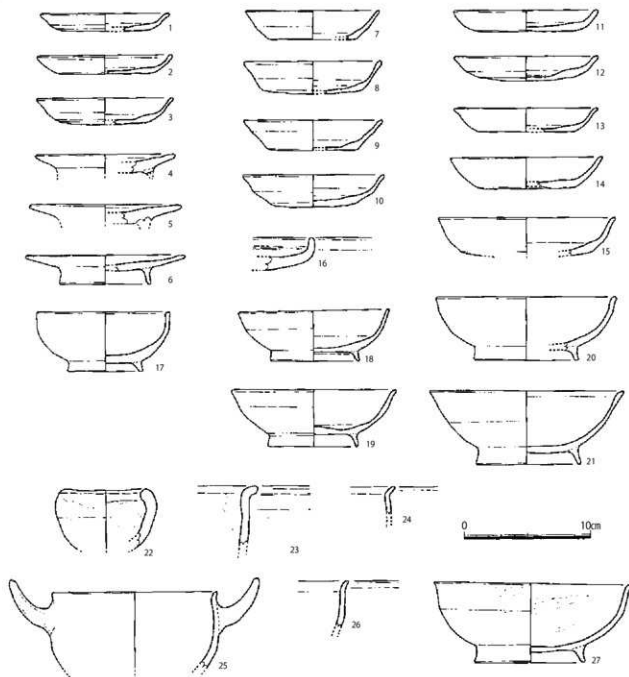


Fig. 25 72SE005 暗茶色土出土遺物実測図① (1/3)

石製品

石鍋 (42) 石鍋の底部で、ケズリ痕が残る。滑石製。

滑石加工品 (43) 石鍋を再利用したものと推測されるが、欠損も目立つ。片面は使用によるものなのか研磨されている。大きさは14.0×12.1 cm、厚さ3.3 cm、上部に径0.8 cm程の円孔を穿つ。滑石製。

砥石 (44) 欠損するが現存長6.7 cm、幅6.6 cm、厚さ3.45 cm。4面使用され、特に広い面には敲打痕や擦痕が残る。砂岩製。

72SE005 黒灰色土出土遺物 (Fig. 27 ~ 32)

土師器

坏 a (1 ~ 18) 口径10.4 ~ 11.8 cm。体部中位に屈曲部や丸味がある。底部切り離しは回転ヘラ切りである。器高が低いものもあり、小皿との区別が困難なものもある。18は口縁端部内面に煤が付着

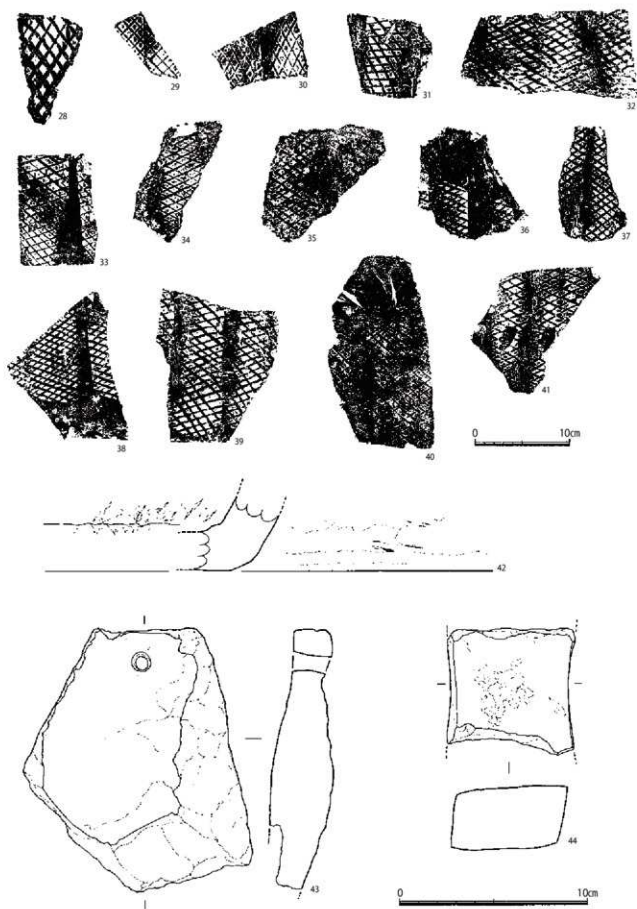


Fig. 26 72SE005 暗茶色土出土遺物実測図② (瓦は1/4、石製品は1/2)

する。

小皿 c (19 ~ 23) 復元口径 12.0 ~ 13.4 cm, 器高 1.8 ~ 2.7 cm. 22 は内面に部分的に煤が付着する。

椀 (24, 25) 口縁部をやや外反させる。内外面とも摩滅し調整不明。

椀 a (26) 復元口径 12.8 cm, 器高 3.25 cm. 内外面ヨコナデ、内面底部はナデ調整。形状としては丸底杯のように見えるが、底部押し出しやミガキ b は確認できない。

椀 c (27 ~ 46) 復元口径 11.9 ~ 16.0 cm. 口縁端部を僅かに外反させるものと外開きのものが混在する。内外面ヨコナデで、内面底部はナデ調整である。28 は内面に漆が厚く付着する。31 は内面にコテ当て痕が残る、内外面に煤が付着する。45 は低い高台を貼付する。色調は淡茶色を呈する。内外面とも摩滅し調整不明。

小壺 (47, 48) 47 は復元口径 12.7 cm. 内外面ともヨコナデ調整。48 は外面ヨコナデ調整。色調は暗茶灰色を呈する。

甕 (49 ~ 54) 49 は復元口径 28.8 cm. 内面ケズリ、外面叩きで、全体的に煤が付着する。50 は復元口径 30.4 cm. 内面と外面上半部はナデ調整、外面下半は格子状の叩きである。51 は内面が凸凹となる。外面肩部はヨコハケで、体部は平行叩きで、全体的に煤が付着する。52 は復元口径 30.2 cm. 体部は内面ナデ、外面は上半部がヨコナデ、下半は叩き。口縁部に朱塗りのような痕跡が残る。外面には煤が付着し、中位付近は二次焼成により暗茶灰色に変色する。53 は復元口径 30.8 cm. 体部外面の殆どがハケの後叩きで、煤が付着する。内面は当て具痕と強いナデが残る。54 は復元口径 30.0 cm. 内外面ヨコナデ調整。色調は黄白色を呈する。

黒色土器

椀 c (55) A 類。高台径 8.8 cm. 外面回転ナデ、内面にはミガキ c が僅かに残る。

椀 (56) A 類。復元口径 15.6 cm. 摩滅が目立つが内面にミガキ c が残る。

皿 c (57) B 類。復元口径 11.2 cm. 摩滅が目立つがミガキ c を施す。

椀 c (58) B 類。復元高台径 6.4 cm. 内外面に細かくミガキ c を施す。

托上椀 (59) B 類。復元口径 17.6 cm, 器高 6.8 cm. 内外面にミガキ c を施す。口縁部を僅かに外反させる。

瓦類

軒丸瓦 (60) 胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒を多く含む。瓦当面には重弁がみられる。

丸瓦 (61 ~ 65) 61 は幅 1 cm 前後の格子叩き。62 は縦長格子叩きで「佐」とある文字瓦。63 は二重格子叩きで「賀」のある文字瓦。64 は幅 1.5 cm 程の横長の格子叩き。65 は幅 2 cm 程の横長の格子叩き。

平瓦 (66 ~ 72) 66 は方形の格子叩きの文字瓦であるが欠損し内容不明。67 は横長のやや不定形の格子叩きで「筑」とある文字瓦。68 は 1 cm 程の正方形の格子叩きで、「平」とある文字瓦。69 は幅 1.5 cm 程の横長の格子叩き。70 は小さな格子叩き。71・72 は幅 2.5 cm 程の横長の大きめの格子叩きである。

鬼瓦 (73) 目玉部分の破片である。焼成はやや軟質で、色調は暗灰色を呈する。

石製品

石鍋 (74, 75) 74 は大きく欠損するが、口縁部近くで瘤状把手がケズリ出されている。滑石製。75 は体部下半付近で、外面にはケズリ痕跡が残る、煤が付着する。内面は傷状の工具痕が残る。滑石製。

滑石加工品 (76, 77) 2 点とも欠損し全形は不明。石鍋を再利用したものと推測される。上部に径 1 cm 前後の円孔を穿つ。滑石製。76 はケズリ整形されているが、摩滅が目立つ。77 は両面ともケズリ整形されているが、片面は明瞭にその痕跡を残す。

砥石 (78) 大きさは 11.5 × 6.3 cm, 厚さ 4.4 cm. 使用面は 4 面で、1 面だけ細かい傷が多くみられる。砂岩製。

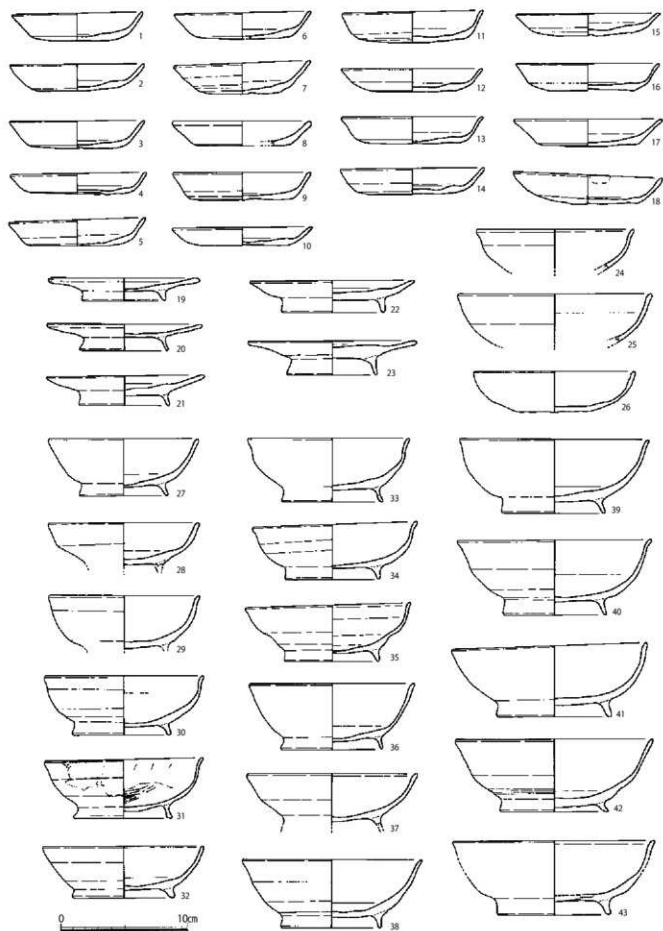


Fig. 27 72SE005 黑灰色土出土遺物実測図① (1/3)

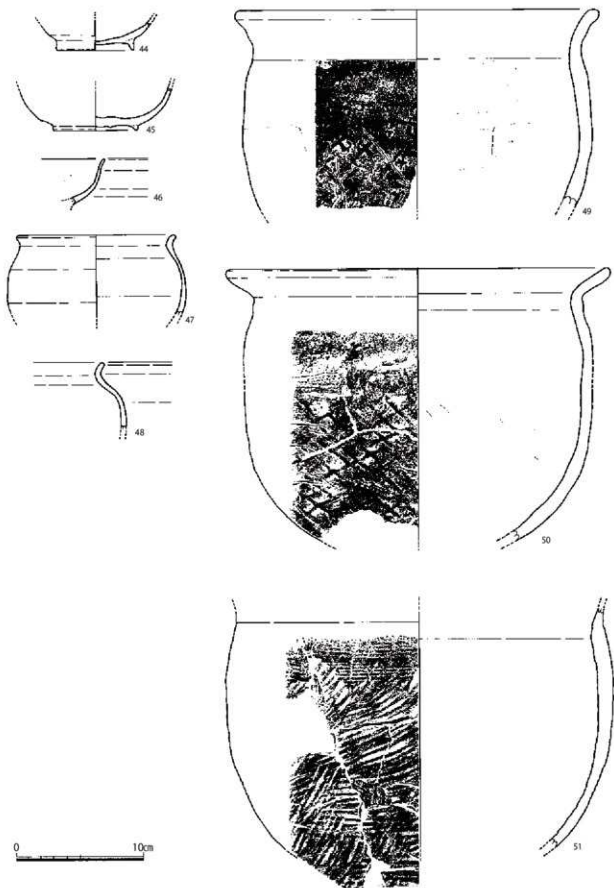


Fig. 28 72SB005 黑灰色土出土遺物実測図② (1/3)

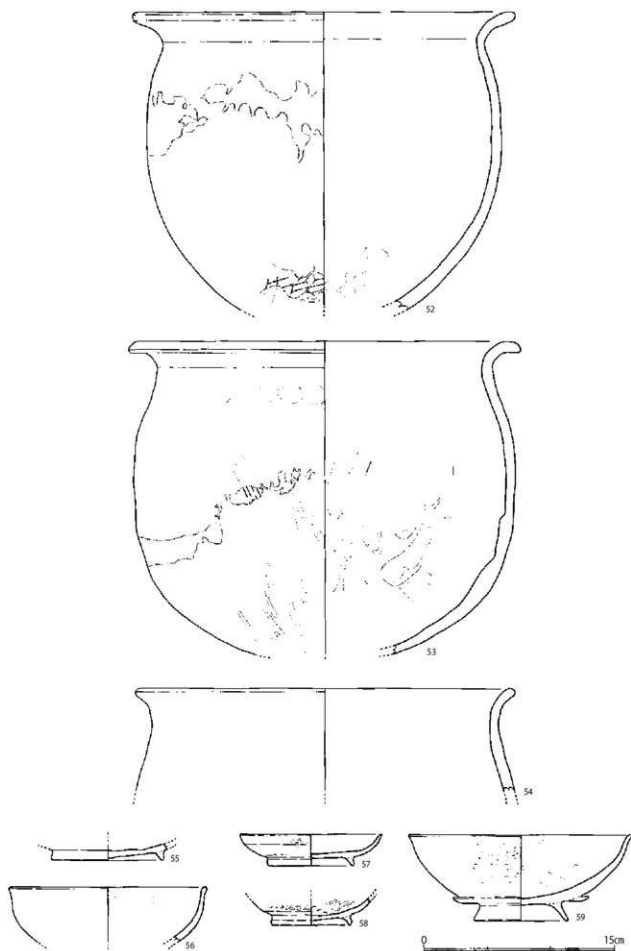


Fig. 29 72SE005 黑灰色土出土遺物実測図③ (1/3)

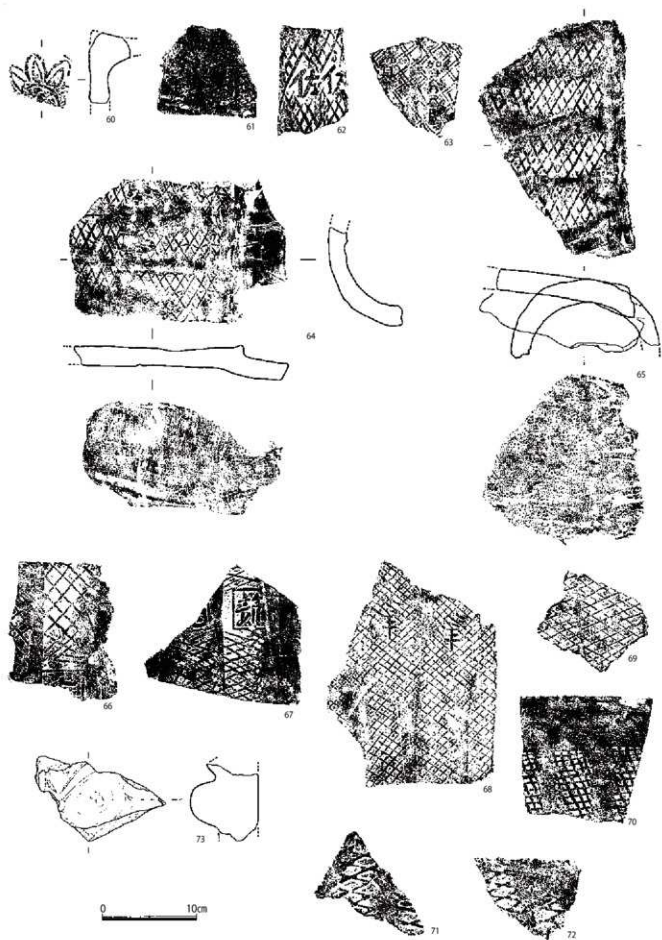


Fig. 30 72SE005 黑灰色土出土遗物实测图④ (1/4)

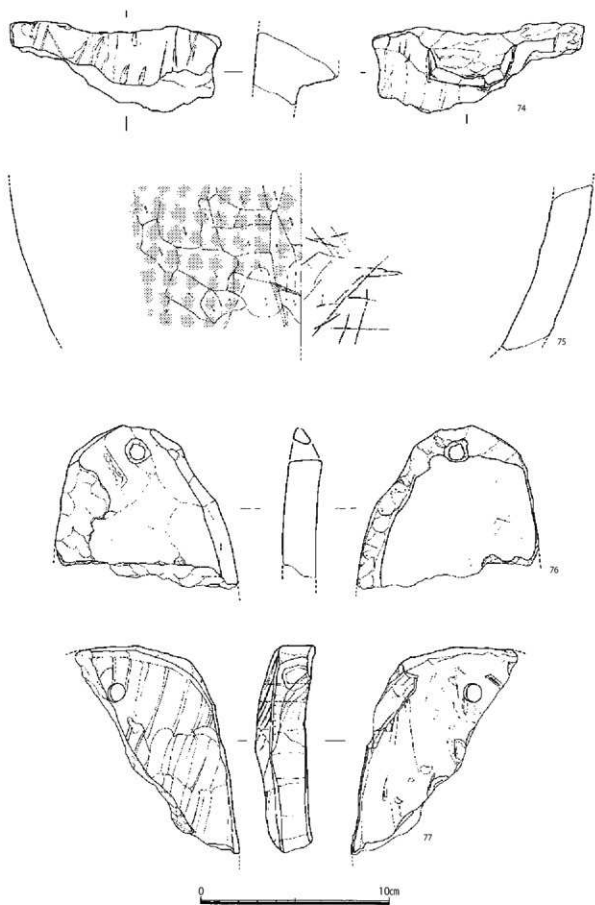


Fig. 31 72SE005 黑灰色土出土遗物实测图⑤ (1/2)

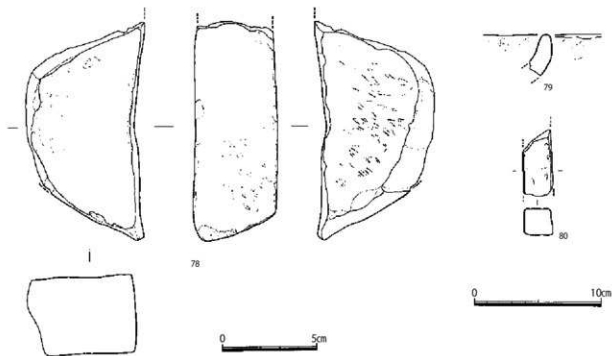


Fig. 32 72SE005 黒灰色土出土遺物実測図⑥ (1/3、78 は 1/2)

土製品

トリベ (79) 手づくね成形され、指頭圧痕が残る。内面には付着物がある。

棒状土製品 (80) 両端を欠損し、現存長 5.0 cm、幅 2.4×2.0 cm の長方体である。胎土は 0.1 cm 以下の白色砂粒や茶色粒を多く含む。色調は赤茶色を呈する。

72SE085 出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

蓋 3 (1~4) 口縁端部は断面三角形で、3 の外面上半部は回転ヘラケズリである。4 は端部を折り曲げている。蓋 2 に近い形状である。

蓋 4 (5) 端部を丸く仕上げるが、内面に僅かに段がある。外面上半部は回転ヘラケズリ。

皿 a (6、7) 6 は体部が大きく外開きで、底部外面は回転ヘラ切りで、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデで、色調は黄灰白色を呈する。7 は口縁部に向かってやや外反させる。

坏 a (8) 外面底部は回転ヘラ切り、内面は回転ナデ。

坏 c (9~14) 全体的にやや低い高台を貼付する。9 は復元口径 11.6 cm。12 は高台が大きく潰れていて、墨付けに板状圧痕が残る。

土師器

蓋 3 (15) 内外面にミガキ a を施す。

坏 a (16~18) 16 は口径 14.6 cm。底部外面は回転ヘラ切り後板状圧痕を残す。体部は内外面とも回転ナデ調整。17・18 の体部内外面とも回転ナデ調整。色調は淡橙色や茶灰色を呈する。

坏 d (19) 全体的に摩滅が目立つが、体部はミガキを施しているように見える。色調は暗褐色を呈する。口径 15.6 cm、器高 3.6 cm、底径 7.2 cm。

坏 c (20~22) 平らな底部端に高台を貼付する。20 は復元口径 16.4 cm。体部は直線的に開く。底部外面は回転ヘラケズリで、外面はヨコナデ調整。色調は淡黄白色や橙色を呈する。22 は内外面とも摩滅し調整不明。色調は橙色する。

甕 (23~28) 体部内面はヘラケズリ、外面はタテハケ調整。口縁部内面は 23・24 がナデ、25~28

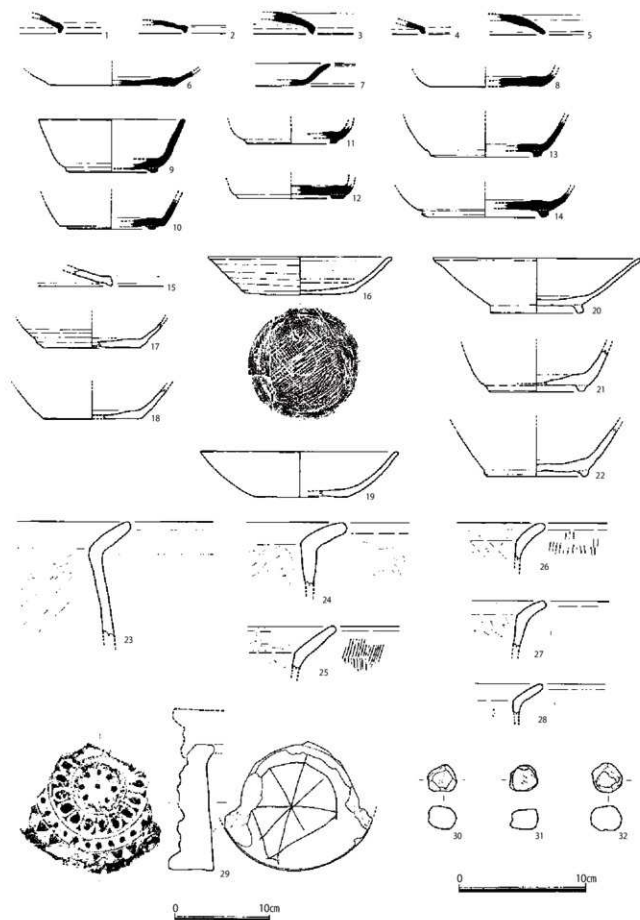


Fig. 33 72SE085 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4)

がヨコハケ調整である。23は外面摩滅し調整不明。

瓦類

軒丸瓦(29) 中房の蓮子は1+8で、複弁である。外縁には鋸歯文が巡る。瓦当面の背面にはヘラ記号が施されている。

瓦玉(30～32) 大きさは、30が1.8×2.25 cm、厚さ1.8 cm。31が2.05×2.15 cm、厚さ1.6 cm。32が2.3×2.35 cm、厚さ1.95 cm。

土坑

72SK110 出土遺物 (Fig. 34)

須恵器

蓋c(1～3) 口縁端部は僅かに横まみ断面三角形をなす。外面上半部は回転ヘラケズリで、3は欠損するが、その他は潰れたツマミを貼付する。

杯c(4、5) 断面方形の高台を貼付する。底部は内面が一方方向のナゲ、外面はナゲ調整される。4は復元口径12.8 cm。

土師器

甕(6) 復元口径24.0 cm。全体的に摩滅するが、体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリである。口縁部はヨコナゲ調整。

その他の遺構

72SX015 出土遺物 (Fig. 34)

緑釉陶器

椀c(7) 乳白色の土師質の胎土に緑白色釉を薄く施すが、剥落が著しい。防長産。

椀(8) 復元口径14.6 cm、器高4.9 cm、復元高台径6.0 cm。胎土は乳白色の土師質。内外面とも淡緑色釉を施すが、底部外面には一部釉が濃い部分がある。体部外面は釉にムラがあり、暗茶色や黒灰色の部分が多いが、二次焼成によるものか。

土製品

土壁(9、10) 胎土は0.3 cm以下の白色砂やスサを多く含み、片面を平坦に仕上げる。9は胎土に須恵器を含む。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 34)

製塩土器

焼塩壺(11) 復元形状は円錐状で、摩滅が目立つが外面に指頭圧痕が残る。SX035より出土。

越州窯系青磁

椀(12) 黄色味がかった緑色釉を内外面に施す。外面にはヘラ描き文様を施す。SX099より出土。

須恵質土器

鉢(13) 東播系。SX099より出土。

石製品

石籤(14) 縦4.1 cm、最大幅2.0 cm、厚さ0.45 cm。全面剥離調整するが、全体的に風化が目立つ。安山岩製。茶灰色土より出土。

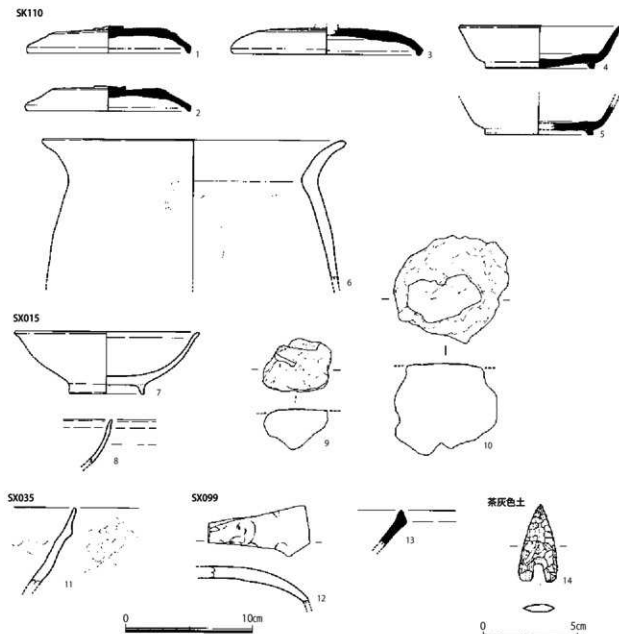


Fig. 34 72SK110、SX015・035・099、茶灰色土出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

(5) 小結

今回の調査の主な所見は以下の通りである。

- ・掘立柱建物5棟、柵列2条を検出。
- ・検出した遺構は、8世紀末～9世紀前半と10世紀中頃の2つの時代が主であった。

調査区西半分が大きく擾乱されていたが、御笠川と鷺田川に挟まれたこの地でも、遺構が広がっていることがわかった。遺構や遺物の内容について、目立った特殊性は見出せなかったが、遺物の多くが政庁Ⅱ期のものであり、政庁Ⅲ期に条坊西側の土地利用が広がりを見せる中、この付近では積極的な土地利用がなされなかった可能性が高い。その要因は想像の域を出ないが、両河川に挟まれ、氾濫を受けやすい立地が関係したのかもしれない。

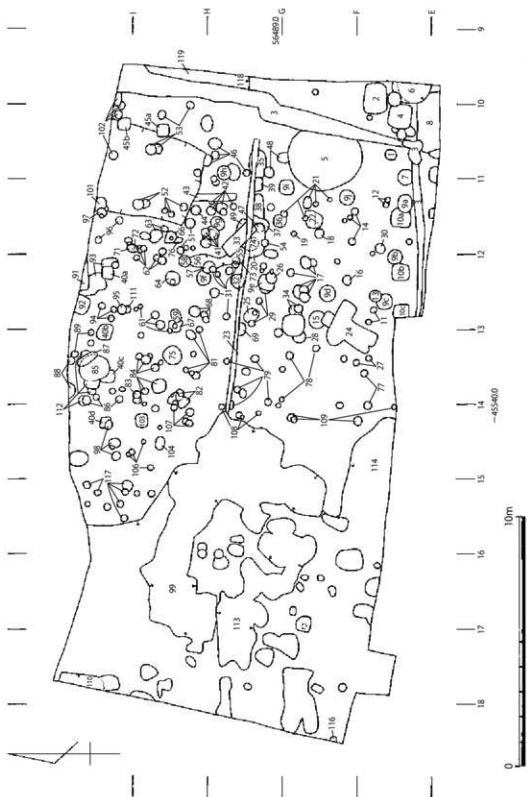


Fig. 35 第72次調査遺構略測図 (1/150)

表10 第72次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		ビット		奈良時代	E10
2		覆瓦(犬の墓)		現代	E9・10
3		新溝(現代)		現代	E~I.9・10
4		土坑		近世~	E10
5	72SE005	井戸		IX期	F10
6		土坑		平安時代	E9
7	72SB010	柱穴		古代	E10
8		土坑		近世~	E~G.10~12
9	72SB009	掘立柱建物	2×3間 S-9a~9.j(9fは除外)とS-57	8世紀後半~9世紀初頭	E10
10	72SB010	掘立柱建物	a~c	8世紀後半~末頃	E11・12
11		ビット群			E12
12		ビット群		平安初期?	E11
13	72SB050e	柱穴		9世紀	E12
14		ビット群		8世紀後半~9世紀初頭	F11
15	72SX015	ビット	焼土塊、炭多く入る。	平安前期	F12
16		ビット		8世紀	F12
17		ビット群		9世紀初頭	F12
18	72SB050c	柱穴		8世紀末前後	F11
19		ビット			F11
20		土坑		8世紀後半~9世紀初頭	G11
21		ビット群		平安前期	F11
22		ビット		奈良時代	G10~14
23		溝(現代)		現代	GF12・13
24		覆瓦(電柱?)		近現代	
25		ビット(掘立柱建物?)	25' は柱痕?		G12
26		ビット	S-9a~26	9世紀	G12
27		ビット群			E13
28	72SB050g	柱穴	焼土塊多い。		F13
29		ビット群		8世紀後半	G12
30	72SB050d	柱穴	(S-13. 28. 69. 59. 58. 44. 47. 18と並ぶ)	9世紀	E11
31		ビット群		奈良時代?	G12
32		ビット		奈良時代?	G12
33		覆瓦		近世~	G11
34		ビット群		古代	F12
35	72SK035	土坑			G10
36		ビット		奈良時代	G11
37		ビット	間状でS-20とつながっている。分けるのが困難。 S-38~37~20	古代	G11
38		ビット	間状でS-20とつながっている。分けるのが困難。	奈良時代	G11
39		ビット	39~35	奈良時代?	G11
40	72SB040	掘立柱建物		奈良時代?	G11
41		ビット群		8世紀	G11
42		ビット群			G11
43		溝状覆瓦		近代~	G11
44	72SB050a	柱穴	焼土多い。	9世紀	H11
45	72SB045	掘立柱建物		8世紀末前後	H10
46		ビット群		平安時代	G10
47	72SB050b	柱穴		9世紀前半	G11
48		ビット群		平安前期?	G10
49		ビット		平安時代	G11
50	72SB050	掘立柱建物	(S-44. 47. 18. 30. 13. 58. 59. 69. 28)	9世紀初頭	E~H. 11~13
51		ビット群		平安前期	H11
52	72SA070	ビット群		平安時代	H10
53	72SA070	ビット群		平安時代	H10
54		ビット	S-20~54	奈良時代?	G11
55		窪み		奈良時代	G12
56		窪み		8世紀	H12
57	72SB009f	柱穴	S-9の掘立柱建物	9世紀前半	G12
58	72SB050j	柱穴	焼土入る。	8世紀末前後	H12
59	72SB050i	柱穴	焼土入る。	9世紀初頭	H12
60	72SA060	横列	S-95. 71. 72. 52. 53 S-70~60		M10~12
61		ビット群		奈良時代?	H12
62	72SA070	ビット群		古代	H11・12
63		ビット群		古代	H11
64		ビット	掘立柱建物?	奈良末~平安初頭	H12

65		土坑			I14	
66		ビット	掘立柱建物?	8世紀後半	H11	
67		ビット	掘立柱建物?	8世紀後半	H12	
68		ビット群		奈良時代?	H12	
69	72SB050h	柱穴		8世紀末前後	G13	
70	72SA070	櫓列	S-111, 62, 52, 53	S-70→60	平安前期	MI10~12
71	72SA060b	柱穴	S-71→62		8世紀末~	H11
72	72SA060b	柱穴	S-72→71		平安前期	H11
73		ビット	S-65→73か?			G12
74		ビット	S-74→20			G11
75		土坑			9世紀	H13
76		ビット	S-76→66		平安時代	H11
77		ビット群			平安時代	E13
78		ビット群			古代	F13
79		ビット群			平安時代	G13
81		ビット群			古代	H13
82		ビット				H13
83		ビット			奈良時代	H13
84		ビット			奈良時代	H13
85	72SE085	井戸			8世紀後半~末	I13
86		ビット群			奈良時代?	I13
87		ビット			9世紀	I13
88		ビット群			古代	I13
89		ビット群			奈良時代	I13
91		覆乱				I12
92		ビット			古代	I12
93		窪み群	S-93→40a		奈良時代	I12
94		窪み群			平安時代	I12
95	72SA060a	柱穴			9世紀	I12
96		ビット群			平安時代	I11
97		ビット	灰色土		平安時代	I11
98		ビット群			平安前期?	I14
99		大覆乱			近代~	F~H.14~17
101		ビット			古代	I11
102		ビット群			平安時代	I10
103		ビット			古代	H14
104		ビット			奈良時代	H14
106		ビット群			古代	H14
107		ビット群			8世紀?	H14
108		ビット群			奈良時代?	G14
109		ビット群			古代	EF14
110	72SK110	土坑	浅い		8世紀前半~中頃	I17
111	72SA070	柱穴			8世紀末前後?	I12
112		ビット群				I13
113		覆乱			近世~	Fg. 15~17
114		覆乱				EF. 14・15
116		ビット	遺物なし			F18
117		ビット群			9世紀	I15
118		段落ち				G19
119		ビット群			平安時代	G19

表11 第72次調査 出土遺物一覧表

S-1	須 志 銅蓋、蓋3、破片 土 師 銅環、甕
S-2	須 志 銅蓋c、環、破片 土 師 銅環 瓦 瓦 銅蓋 瓦 銅瓦(無文)
S-3	須 志 銅環c、甕、破片 土 師 銅環a、陶c、甕、破片 越前窯系青磁陶1(G) 瓦 銅平瓦(横目)、丸瓦(橋子)
S-4	須 志 銅蓋3、蓋4、環c、甕 土 師 銅環 瓦 銅瓦、銅蓋 瓦 銅平瓦(横目)、丸瓦(無文)
S-5銅黑色土	須 志 銅蓋、蓋3、蓋c、坪a、坪c、高坪、甕、蓋、蓋c 土 師 銅、丸底坪、小甕、小鉢、小鉢、器台、把子 黑色土器A 陶、陶c、小甕、小鉢 越前窯系青磁陶1(G)、皿(G) 皿1(G) 中 瓦 銅破片(G) 綠 繪 陶 銅破片 瓦 銅平瓦(橋子、横目)、丸瓦(橋子、横文)、瓦玉 金 属 製 品 漆器 石 製 品 砥石、石鏡、滑石加工品、丸石 土 師 品 土甕 金 属 製 品 漆器 その他 他役
S-6黒灰化土	須 志 銅蓋、蓋3、大蓋3、環、坪a、坪c、甕 土 師 銅蓋、小皿×坪a(c)、小皿c、坪a(c)、陶、陶c、陶、小甕、甕、皿、小鉢、把子 黑色土器A 陶、陶c、小甕、把上甕 黑色土器B 陶、陶c、陶、陶c、把上甕 越前窯系青磁陶1(G) 陶1(G)、1坪反(G)、1梅反(G)、皿-2(G)、皿直口(G) 越前窯系青磁陶破片(G) 綠 繪 陶 銅破片 瓦 銅平瓦(橋子、横目)、丸瓦(橋子、横目、横文、二重橋子) 金 属 製 品 漆器 石 製 品 石鏡、砥石、滑石片、石鏡加工品、滑石加工品 土 師 品 土甕、漆器土製品、トリス 金 属 製 品 漆器 木 製 品 木片 その他 他役
S-6	須 志 銅蓋×高坪、坪、坪c、甕、破片 土 師 銅蓋、破片 白 磁 陶 皿-1(G) 白磁破片(G) 瓦 繪 陶 銅破片(G) 瓦 銅瓦(無文)
S-7	須 志 銅蓋3、環、甕 土 師 銅甕 瓦 銅瓦玉
S-8	須 志 銅蓋3、坪c、甕、破片 土 師 銅環c、甕 瓦 銅瓦、銅蓋 瓦 銅平瓦、丸瓦(橋子)
S-9a	須 志 銅蓋7、蓋3、坪、甕 土 師 銅环、坪a、坪c、陶c、甕類
S-9b	須 志 銅蓋3、蓋7 土 師 銅环、甕類
S-9c	須 志 銅蓋、蓋3、坪、坪c、大坪c 土 師 銅环、甕 越前窯系青磁陶破片(G) 瓦 銅平瓦(横目) 金 属 製 品 漆器、刀子
S-9d	須 志 銅蓋3、蓋4、蓋7、皿、坪、坪c、小甕 土 師 銅甕、破片
S-9e	須 志 銅蓋3、坪c、甕 土 師 銅环、甕 瓦 銅瓦

S-9f	須 志 銅环、坪c、甕? 土 師 銅环、甕
S-9f住居	須 志 銅蓋4 土 師 銅甕、破片
S-9g	須 志 銅环c、甕、破片 土 師 銅甕、破片 黑色土器A 陶、破片 石 製 品 平石
S-9h	須 志 銅蓋3、坪、高坪、甕 土 師 銅蓋、坪、甕、器台 瓦 銅破片
S-9i	須 志 銅蓋、蓋3、坪、坪c、甕、蓋 土 師 銅环、陶c、甕、破片 黑色土器A 陶、陶c 金 属 製 品 用蓋不明鉄製品
S-9i住居	須 志 銅蓋3、破片 土 師 銅破片
S-9j	須 志 銅蓋3、坪c、坪c、蓋a、甕、蓋7、鉢 土 師 銅环、坪c、甕 黑色土器A 陶、陶c 瓦 銅平瓦(橋子)
S-9k	須 志 銅破片 土 師 銅环、甕類
S-10a	須 志 銅蓋3、坪、坪a 土 師 銅环、坪c、甕 瓦 銅瓦(無文)
S-10a住居	土 師 銅甕、破片
S-10b	須 志 銅蓋3、甕、破片 土 師 銅环、破片
S-10c	土 師 銅甕
S-11	須 志 銅甕、破片 土 師 銅环、破片
S-12	須 志 銅环 土 師 銅环、坪c、甕 瓦 銅瓦(橋子) 土 製 品 土甕
S-13	須 志 銅蓋c、坪a、甕、甕 土 師 銅蓋、蓋3、坪c、陶c、陶c、甕 土 製 品 土甕 その他 他役
S-14	須 志 銅蓋3、坪a、鉢、破片 土 師 銅环、坪a、甕 瓦 銅瓦(無文)
S-15	須 志 銅蓋3、坪c、甕、甕 土 師 銅环、坪a、甕 綠 繪 陶 陶、陶c 土 製 品 土甕 その他 他役
S-16	須 志 銅蓋3、坪、坪c 土 師 銅环、甕 土 製 品 土甕
S-17	須 志 銅蓋、蓋3、甕 土 師 銅环、坪c、甕 越前窯系青磁陶1(G) 瓦 銅破片
S-18	須 志 銅蓋3、坪、坪a? 土 師 銅蓋、坪、甕 瓦 銅瓦 土 製 品 土甕

5-19
領 志 銅破片
土 師 銅破片
越州窯系青磁類：1(D)、1-2P(1)

5-20
領 志 銅蓋3、蓋c、环、环c、胸a、雙、高环脚?
土 師 銅破片、雙
製 瓦 土 銅破片?

5-21
領 志 銅蓋3
土 師 銅环、环a、雙
瓦 類平瓦(横目)

5-22
領 志 銅蓋c、环、环c
土 師 銅环、雙
瓦 類平瓦

5-23
領 志 銅蓋、蓋3、环、雙
土 師 銅蓋
土 師 銅蓋
肥前系磁器類
土 製 品上塊
木 製 品木片

5-24
領 志 銅蓋3、环、环c、高环、皿a、雙
土 師 銅破片、雙
國産陶器破片
肥前系磁器類
瓦 類平瓦
土 製 品土塊

5-25
領 志 銅破片
土 師 銅环、雙

5-26
領 志 銅蓋3、蓋c、环c、雙
土 師 銅环、环c、胸c、雙
瓦 類平瓦

5-27
領 志 銅破片
土 製 品土塊

5-28
領 志 銅破片
土 師 銅破片
越州窯系磁器類
土 製 品土塊

5-29
領 志 銅蓋3、环
土 師 銅环、雙

5-30
領 志 銅环
土 師 銅环、胸c、雙
瓦 類破片

5-31
領 志 銅蓋、蓋3、环、环c
土 師 銅环、雙、破片

5-32
領 志 銅蓋3、环c、皿
土 師 銅环、雙

5-33
領 志 銅蓋、蓋c、环、环c、高环、雙
土 師 銅蓋
瓦 類平瓦(横目)、平瓦(横L瓦)
土 製 品土塊
木 製 品木片

5-34
領 志 銅蓋3、环、雙、破片
土 師 銅环、雙
その他図

5-35
領 志 銅蓋、胸a
土 師 銅环
製 瓦 土 投槍塚遺

5-36
領 志 銅环、环a
土 師 銅蓋×皿、环、雙

5-37
領 志 銅破片
土 師 銅蓋

5-38
領 志 銅蓋3、蓋c、环
土 師 銅蓋

5-39
領 志 銅蓋
土 師 銅蓋
製 瓦 土 銅破片

5-40a
領 志 銅破片
土 師 銅环、雙

5-40b
領 志 銅蓋、蓋3、环
土 師 銅胸c、雙

5-40b柱成
領 志 銅蓋、蓋?
土 師 銅破片

5-40c
領 志 銅环
土 師 銅蓋
瓦 類破片

5-40d
領 志 銅蓋3
土 師 銅环、雙

5-41
領 志 銅蓋3、环、环c、蓋
土 師 銅环、雙

5-42
領 志 銅蓋、破片
土 師 銅环、雙
國産陶器破片

5-43
國産陶器破片
瓦 類破片

5-44
領 志 銅蓋3、环c、破片
土 師 銅环a、胸c×小皿c
瓦 類破片
土 製 品土塊

5-45a
領 志 銅蓋?、蓋4
土 師 銅环、雙

5-45b
領 志 銅蓋3
土 師 銅蓋

5-46
土 師 銅环、胸c、雙
黒色土器B類類
金屬製品家洋

5-47
領 志 銅蓋、蓋3、环、环c、皿a、破片
土 師 銅环a、胸c、雙
製 瓦 土 銅破片
土 製 品土塊

5-48
領 志 銅蓋3、蓋c、环
土 師 銅环、雙
瓦 類平瓦(横目)、平瓦(横L瓦)

5-49
領 志 銅蓋、蓋3、高环、环
土 師 銅环、雙

5-51
領 志 銅环、破片
土 師 銅环、环a、雙
黒色土器A類破片

5-52
領 志 銅蓋3、环c、雙
土 師 銅环、环c、胸c、雙
瓦 類平瓦(横目、横L瓦)、瓦瓦(棒子)
その他図

5-53
領 志 銅环
土 師 銅环、雙、鉢?、破片

5-54
領 志 銅蓋
土 師 銅蓋、破片
土 製 品土塊

5-55
領 志 銅蓋3、环、环c
土 師 銅蓋
石 製 品平玉石

S-56
須 志 跡环, 环c
土 師 跡环c, 甕
瓦 瓶平瓦

S-57
須 志 跡环, 甕
土 師 跡环c, 环c, 甕
瓦 瓶瓦(佛子)

S-58
須 志 跡蓋3, 环, 环a, 环c, 皿a×环a, 甕
土 師 跡环, 甕
黑色土器A類破片
瓦 瓶瓦(甕目), 破片
土 瓶 品土甕

S-59
須 志 跡环c, 破片
土 師 跡环c, 环c, 甕, 破片
黑色土器A類破片
瓦 瓶平瓦(甕目), 破片

S-61
土 師 跡环, 甕

S-62
須 志 跡蓋3
土 師 跡甕, 破片
瓦 瓶平瓦(甕目)

S-63
須 志 跡环
土 師 跡甕

S-64
須 志 跡盖1, 甕
土 師 跡环, 瓶c, 甕

S-64a
須 志 跡环破片
土 師 跡甕

S-64住居
土 師 跡甕
黑色土器A類破片

S-65
須 志 跡蓋, 盖3, 环
土 師 跡蓋, 环, 甕
金属製 品磁片

S-66
須 志 跡蓋3
土 師 跡蓋, 环, 甕
金属製 品鉄釘

S-66a
土 師 跡蓋, 破片

S-67
土 師 跡环

S-67a
須 志 跡环
土 師 跡环

S-68
須 志 跡破片
土 師 跡蓋, 环, 甕

S-69
須 志 跡蓋, 盖3, 环, 环a, 甕
土 師 跡蓋, 环
瓦 瓶平瓦(佛子), 瓦瓦(佛子, 甕目)
石 製 品丸石
土 製 品土甕
七 の 磁瓦

S-71
須 志 跡蓋, 环c
藤州窯系青磁焼1(2)

S-72
須 志 跡蓋3, 环, 环c, 盖
土 師 跡环, 甕
黑色土器A類破片
瓦 瓶平瓦(甕目, 佛文, 破片)

S-73
須 志 跡环
土 師 跡瓶c

S-74
須 志 跡蓋3
石 製 品平瓦石

S-75
須 志 跡蓋, 环, 甕
土 師 跡蓋, 环, 甕
瓦 瓶平瓦, 瓦瓦(甕目)
石 製 品石段(高踏石)
土 製 品土甕

S-76
須 志 跡甕
土 師 跡环, 甕

S-77
須 志 跡蓋3, 环, 破片
土 師 跡环, 环c, 甕

S-78
須 志 跡破片
土 師 跡环, 甕
土 製 品土甕

S-79
須 志 跡环, 环c, 甕
土 師 跡环, 瓶c, 甕

S-81
須 志 跡环c, 破片
土 師 跡环, 破片
藤州窯系青磁焼1(1)
瓦 瓶瓦
金属製 品磁片

S-82
須 志 跡蓋3, 甕
土 師 跡环, 破片

S-83
須 志 跡环, 甕
土 師 跡盖1, 环, 甕
瓦 瓶平瓦(甕目)

S-84
須 志 跡蓋, 盖3, 环c, 皿
土 師 跡蓋, 甕

S-85上面
須 志 跡蓋, 盖2, 盖3, 环c, 环c, 甕, 破片
土 師 跡环, 环c, 甕, 破片
黑色土器A類破片
瓦 瓶破片
土 製 品土甕

S-85
須 志 跡蓋, 盖3, 盖4, 盖c, 环, 环a, 环c, 皿a, 甕
土 師 跡蓋3, 环, 环a, 环c, 环c, 甕, 瓶c, 佛子
瓦 瓶平瓦(甕目), 瓦瓦(甕目), 佛文, 平瓦瓦, 瓦瓦

S-86
須 志 跡蓋, 环, 甕
土 師 跡蓋, 环, 瓶c, 甕

S-87
須 志 跡蓋, 环, 甕, 盖
土 師 跡环, 环a, 甕
黑色土器A類破片
金属製 品磁片

S-88
須 志 跡蓋3, 甕
土 師 跡环, 甕
石 製 品平瓦石
七 の 磁瓦

S-89
須 志 跡蓋, 环, 环c
土 師 跡环, 瓶c, 甕

S-91
須 志 跡蓋3, 破片
土 師 跡甕, 破片

S-92
須 志 跡环, 环c, 甕
土 師 跡环

S-93
須 志 跡瓶a
土 師 跡蓋, 环

S-94
須 志 跡环c
土 師 跡环, 甕
瓦 瓶平瓦(甕目)

S-95
須 志 跡蓋, 环c, 甕
土 師 跡环, 环a, 甕
藤州窯系青磁焼1(1)
瓦 瓶瓦(佛子, 破片)
土 製 品土甕
七 の 磁瓦

5-96
銅 蒸 銅薄片
土 師 銅片c、輪c、甕

5-97
銅 蒸 銅蓋、環c、甕
土 師 銅片、環a、環c、甕

5-98
銅 蒸 銅蓋c、環c、環c
土 師 銅片、甕

5-99
銅 蒸 銅蓋、蓋3、蓋c、環c、高環c、甕、破片
土 師 銅片、環c、大瓶c、輪c、甕
銅 蒸 瓦 土 器(瓦蓋形)
肥 前 瓦 磁 器(小鉢、破片)
陶 瓦 陶 器(漆鉢)
瓦 瓦 磁 器(破片)
越 州 瓦 瓦 磁 器；I(1)、II(1)
德 島 瓦 瓦 磁 器；I×II(1)
白 磁 瓦 磁 器；IV(1)、直口(1)、外反(1)、破片(1)
白 磁 瓦 磁 器(1)
瓦 磁 瓦 磁 器(平瓦(破片)、破し瓦、瓦瓦、破片)
金 屬 製 品(漆淨、鉄釘)
石 製 品(刺片(黑曜石)、磁石)

5-101
銅 蒸 銅蓋、蓋3
土 師 銅破片

5-102
銅 蒸 銅片c、大輪c、甕
土 師 銅片、環c、甕

5-103
銅 蒸 銅蓋3、蓋c、環c
土 師 銅破片
瓦 磁破片

5-104
銅 蒸 銅蓋3、破片
土 師 銅片c、甕

5-106
銅 蒸 銅蓋3、甕
土 師 銅破、甕

5-107
銅 蒸 銅蓋3
土 師 銅甕、破片

5-108
銅 蒸 銅蓋3
土 師 銅片

5-109
銅 蒸 銅片
土 師 銅片、破片

5-110
銅 蒸 銅蓋c3、環c、環c、甕
土 師 銅蓋、環c、輪c、甕、把手

5-111
銅 蒸 銅蓋3、環c
土 師 銅片、環c、甕

5-112
銅 蒸 銅蓋、蓋3、甕c
土 師 銅片、甕

5-113
銅 蒸 銅蓋、蓋3、蓋4、環c、甕、破片
土 師 銅甕
陶 瓦 磁 器(破片)
白 磁 器(平瓦(1))
金 屬 製 品(漆淨、鉄釘?)

5-114
銅 蒸 銅蓋、破片
土 師 銅片
瓦 磁 瓦 瓦 磁 器(平瓦(破片、無文))
金 屬 製 品(鉄釘)

5-117
銅 蒸 銅蓋3、環c、甕?
土 師 銅片、環c、甕

5-118
銅 蒸 銅蓋、蓋3、甕c、環c、環c、甕
土 師 銅片、輪c、甕、破片
瓦 磁 瓦 瓦 磁 器?
瓦 磁 瓦 瓦 磁 器(平瓦(偽子)、瓦瓦(偽子))
白 磁 瓦 瓦 磁 器(平瓦)

5-119
銅 蒸 銅甕
土 師 銅破片
白 磁 器(破片(1))

英化色土
銅 蒸 器、蓋3、蓋c、蓋c3、環c、環c、高環c、瓦、
甕、破片、鉢
土 師 銅片、環a、環c、輪c、甕
銅 蒸 土 器(漆淨)
陶 瓦 土 器(大瓶破片)
瓦 磁 土 器(鉢?)
鉢 輪 陶 器(陶)
陶 瓦 陶 器(破片)
越 州 瓦 瓦 磁 器；II-1b(1)
德 島 瓦 瓦 磁 器；II-1b(1)
河 交 廣 瓦 瓦 磁 器；I-1b(1)
瓦 磁 瓦 瓦 磁 器(平瓦(偽子)、破片)、平瓦(破し瓦)、瓦瓦(偽子)
金 屬 製 品(漆淨、鉄釘)
石 製 品(石磨、丸石、刺片(黑曜石))
土 師 品(土塊)
土 の 磁石

英化鉛土
銅 蒸 銅蓋、蓋3、環c、環a、環c、甕
土 師 銅片、甕、破片
肥 前 瓦 磁 器(破片)
陶 瓦 陶 器(陶)
白 磁 器；IV(2)
金 屬 製 品(漆淨)

土土
銅 蒸 銅片、環c、甕
土 師 銅片c(破片)、輪c、甕
德 島 土 器(白磁)
肥 前 瓦 磁 器(破片)
陶 瓦 陶 器(破片)
瓦 磁 瓦 瓦 磁 器(平瓦(偽子))

6、第101次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字通古賀（現在、都府楼南1丁目）494-12外で、鶯田川に架かる田中橋の西側に位置する。

調査は、県道505号板付牛頭筑紫野線を片側2車線に拡幅する計画に伴うもので、福岡県那珂土木事務所の費用負担のもとで実施された。発掘調査は1990（平成2）年7月26日から8月21日にかけて実施した。調査は東西約150mの範囲に4ヶ所のトレンチを設定、西側からトレンチ番号を付し、1トレンチは7月26日～8月6日、2トレンチは8月3日～8月18日、3・4トレンチは8月18日～8月21日と順次実施した。開発対象面積は約2800㎡で、調査面積は計507㎡である。調査は狭川真一、緒方俊輔が担当した。

なお、トレンチ毎に各々測量した関係で、測量データが正確性を欠く状況となり、各トレンチの位置や方位に確証がなく、遺構図に示す方位は略北としている。

(2) 基本層位

詳細な記録がなく、写真で確認できるだけで、盛り土や耕作土を除去すると、その直下で遺構が確認されている。深さは現地表から約1mの標高27.5m前後である。3・4トレンチの地山は、花崗岩の風化土で、一部粘土化している部分もある。

(3) 検出遺構

井戸

101SE001 (Fig. 37)

掘り方は2.3～2.4mの円形で、深さ約0.8mで井戸枠が検出された。井戸枠は一边0.8m四方の方形で、部分的に縦板材が残存していた。方形井戸枠内には径0.48m、深さ約0.28mの桶が据えられていた。桶材は幅0.1m前後で、17枚程で作られている。確認できた井戸底までの深さは1.3mである。

101SE002 (Fig. 37)

東西3.0m、南北3.5mの楕円形の掘り方で、掘り方南側の深さ約0.85m付近で、井戸枠材を検出した。井戸枠は一边0.9m程とみられ、井戸枠は幅0.15m程の縦板で、横棧で押さえられていた。また、井戸枠北西隅には隅柱が残存していた。しかし、湧水により井戸枠が崩落し、詳細な記録が取れなかった。井戸枠内から曲物が出土したが、浄化装置かどうかははっきりしなかった。井戸枠崩落により井戸底から曲物が外れた可能性もある。井戸底までの深さは1.1mである。

101SE005 (Fig. 37)

掘り方は径1.06m、深さ1.02mの円形で、形状から井戸と推測される。埋土は黄色粘土ブロック入りの暗灰色土の単一層だが、底の一部のみ灰茶色砂層であった。また、底面近くからは、完形の土師器や瓦器輪が多く出土した。

101SE010 (Fig. 37)

調査区端で検出された。南北1.66m、東西0.85m以上、深さ1.1mの円形で、形状から井戸と推測される。

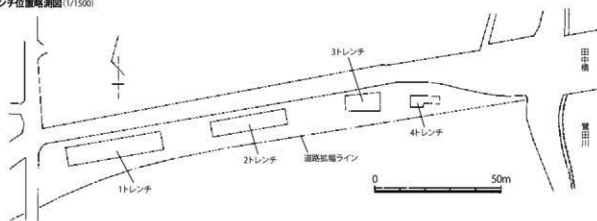
101SE015 (Fig. 37)

掘り方は東西1.81m、南北1.5m、深さ1.4mの楕円形である。底面中央では径0.84m、深さ0.44mほどの円形土坑が検出されたが、井戸枠材は遺存していなかった。土坑内の埋土は黒色粘土であった。

101SE026 (Fig. 37)

検出時は径1.68～1.8mの円形で、僅かに掘り下げると径1.34～1.44mの円形となり、深さは1.45m

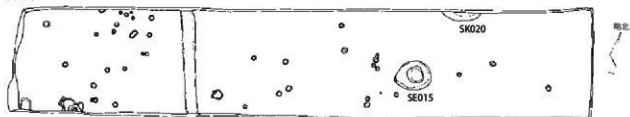
トレンチ位置略地図 (1/1500)



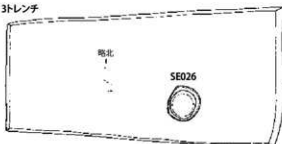
1トレンチ



2トレンチ



3トレンチ



4トレンチ



Fig. 36 第101次調査 遺構全体図 (1/200、位置図は1/1500)

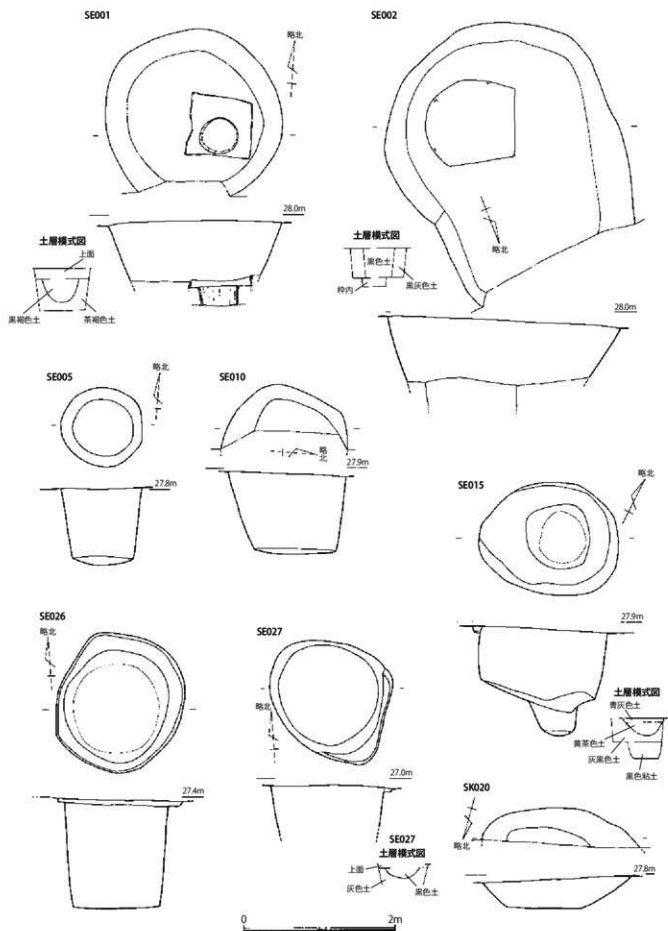


Fig. 37 第101次調査井戸・土坑遺構実測図 (1/50)

である。形状から井戸と推測される。

101SE027 (Fig. 37)

掘り方は径1.45～1.5mの円形である。深さは0.56mまで掘り下げたが、掘削中崩落の危険性が出てきたため、完掘せずに終了した。

土坑

101SK020 (Fig. 37)

調査区端で検出されたため、全形は不明である。検出された大きさは、東西2.06m以上、南北0.48m以上、深さ0.41m。埋土は上層が黄茶色土、下層は灰黒色土である。

(4) 出土遺物

井戸

101SE001

101SE001 上面出土遺物 (Fig. 38)

土師器

小皿 a (1, 2) 口径は8.4 cmと8.8 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

坏 a (3) 復元口径15.8 cm。底部切り離しは回転糸切りで板状圧痕を残す。

碗 c (4) 断面三角形の低い高台を貼付する。復元高台径6.0 cm。内外面とも摩滅し調整不明。

鉢 (5) 胎土は砂粒や雲母を含み粗く、色調は暗茶褐色を呈する。内外面とも摩滅し調整不明。

土製品

土壁 (6) 胎土は0.2 cm以下の砂粒を含み、スサ痕も残る。色調は橙黄色を呈する。1面に平坦面を残す。

石製品

紡錘車 (7) 一辺2 cm程の方形軸穴を穿つ。厚さ1.5 cm、復元径8 cm程である。滑石製。

101SE001 黒褐色土出土遺物 (Fig. 38)

土師器

小皿 a (8～10) 復元口径9.0～9.4 cm。底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕を残す。

丸底坏 a (11, 12) 復元口径15.0 cmと16.0 cmである。

瓦器

碗 c (13) やや潰れた高台を貼付する。復元高台径8.0 cm。摩滅するが内面はミガキのように見える。

碗 (14) 内面はミガキ、外面はヨコナデ調整である。色調は灰黄色や暗灰色を呈する。

101SE001 茶色砂出土遺物 (Fig. 38)

土師器

小皿 a (15～17) 復元口径9.0～9.8 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

丸底坏 a (18, 19) 18は口径15.5 cm。底部ヘラ切りで、内面にはミガキ b のコテ当て痕が残る。

瓦器

碗 c (20) 復元高台径6.0 cm。外面は摩滅するが、内面にはミガキが残る。

灰釉陶器

碗 (21) 底部切り離しは回転糸切りで、細い断面三角形の高台を貼付する。復元高台径6.0 cm。胎土は微細な白色砂粒が目立つ。内面はヨコナデで所々に軸が付着する。色調は淡灰色を呈する。

101SE001 枠内出土遺物 (Fig. 38)

土師器

小皿 a (22) 底部切り離しはヘラ切りとみられる。

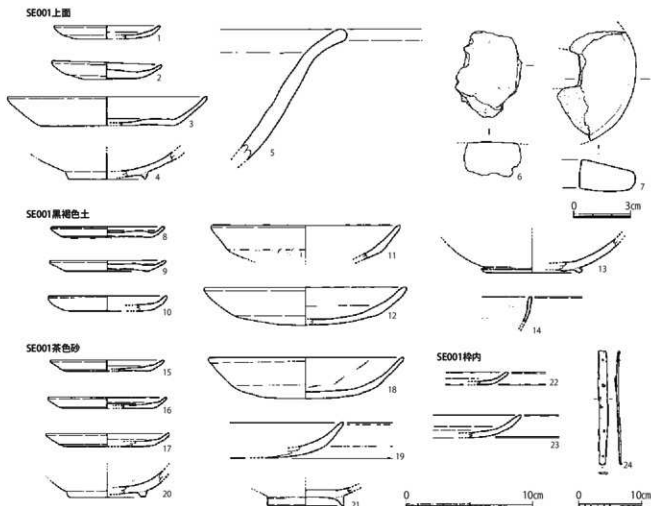


Fig. 38 101SE001 出土遺物実測図 (1/3, 7は1/2, 24は1/6)

丸底坏 a (23) 底部押し出しで内外面はヨコナデ調整に見える。

木製品

不明製品 (24) 長さ18.5 cm、幅1.45 cm、厚さ0.3 cmの板片である。板材には3.5～4 cmの間隔で径0.03 cm程の円孔が5ヶ所あり、そのうち3ヶ所に木釘が残されている。

101SE002

101SE002 黒色土出土遺物 (Fig. 39)

土師器

小皿 a (1～5) 復元口径8.8～10.2 cm。底部切り離しは全て回転糸切りである。

小皿 c (6) 口径9.5 cm、器高1.4 cm、高台径6.2 cm。内面一方向のナデ、外面には板状圧痕を残す。

坏 a (7～12) 復元口径14.8～16.7 cm。底部切り離しは全て回転糸切りである。

碗 c (13) 低い高台を貼付する。復元高台径7.0 cm。全体的に摩滅するが、内面ミガギのようにみえる。色調は淡黄灰色などを呈する。

ミニチュア土器小鉢 (14) 復元口径4.2 cm、器高1.8 cm。底部切り離しは糸切りか。

甕もしくは鍋 (15) 口縁部を逆L字形に屈曲させる。外面には煤が付着する。

黒色土器

碗 (16, 17) 2点ともB類。16は復元口径17.0 cm。

瓦器

碗 c (18 ~ 23) 断面三角形の低い高台を貼付する。内外面ともミガキだが、外面は摩滅が目立つ。18は内面上半部はミガキ b の後ミガキ c を施す。外面はヨコナデの後下半を中心にミガキ c を施すが、部分的で雑である。19は黒色土器 B 類に近い燻し具合である。20や22の外面下半には指頭圧痕が残る。

碗 (24 ~ 26) 24は内面摩滅するが、内外面ともミガキ c を施す。

須恵質土器

鉢 (27) 外面底部はナデ、内外面とも強い回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

中国陶器

鉢 (28) 外面底部は雑なナデ調整。体部外面は回転ナデ、体部内面は回転ナデだが使用により平滑である。胎土は砂粒が目立ち粗く、色調は淡灰赤色を呈する。

石製品

石鍋 (29 ~ 32) 断面台形の鏝を削り出し巡らしている。滑石製。29は復元口径 40.0 cm。鏝より上部は使用によるのか劣化する。鏝より下は煤が付着する。30は縦に切断面があり、二次加工されている。

金属製品

用途不明製品 (33) 断面方形形状部分は L 字形に曲げ、断面扁平な部分は先端部を欠損する。

鉄釘 (34、35) 頭付近を L 字形に曲げている。34はさらにねじれている。

刀子 (36) 刃先が欠損し、茎付近を中心に残る。現存長 4.2 cm、幅 0.9 cm。

101SE002 黒灰色土出土遺物 (Fig. 40)

土師器

小皿 a (1 ~ 5) 復元口径 9.0 ~ 9.2 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りと糸切りが混在している。

皿 c もしくは大杯 c (6) 復元高台径 11.0 cm。

杯 a (7 ~ 10) 復元口径は 7 が 14.6 cm、8 が 15.0 cm。底部切り離しは全て回転糸切りである。

丸底杯 a (11) 復元口径 15.6 cm。底部はヘラ切りで、底部を押し出しているが、内面はナデとヨコナデでミガキ b が無いように見える。

丸底杯 (12) 破片で明確ではないが、丸底杯のように見える。内外面はヨコナデか。

瓦器

碗 (13 ~ 15) 内外面にミガキ c が残る。13は復元口径 16.0 cm。

碗 c (16 ~ 18) 18の内外面には部分的にミガキ c が施されているが、その他は摩滅し調整不明瞭。

須恵質土器

鉢 (19、20) 口縁部を僅かに肥厚させる。20は片口鉢である。

101SE002 枠内出土遺物 (Fig. 40・41)

土師器

小皿 a (21) 復元口径 9.0 cm。底部切り離しは回転糸切り。

杯 a (22、23) 底部切り離しは回転糸切り。23は復元口径 15.2 cm。

瓦器

碗 c (24 ~ 28) 断面三角形の低い高台を貼付する。口径は、24が 15.4 cm、25が 16.6 cm。25は全体的に歪んでいる。内外面とも粗いミガキである。

碗 (29) 内外面ともミガキ c であるが、外面は部分的である。

須恵質土器

鉢もしくは甕 (30) 底部はヘラ切り後未調整。内面は強い回転ナデ、外面は回転ナデ調整。色調は暗灰茶色を呈する。

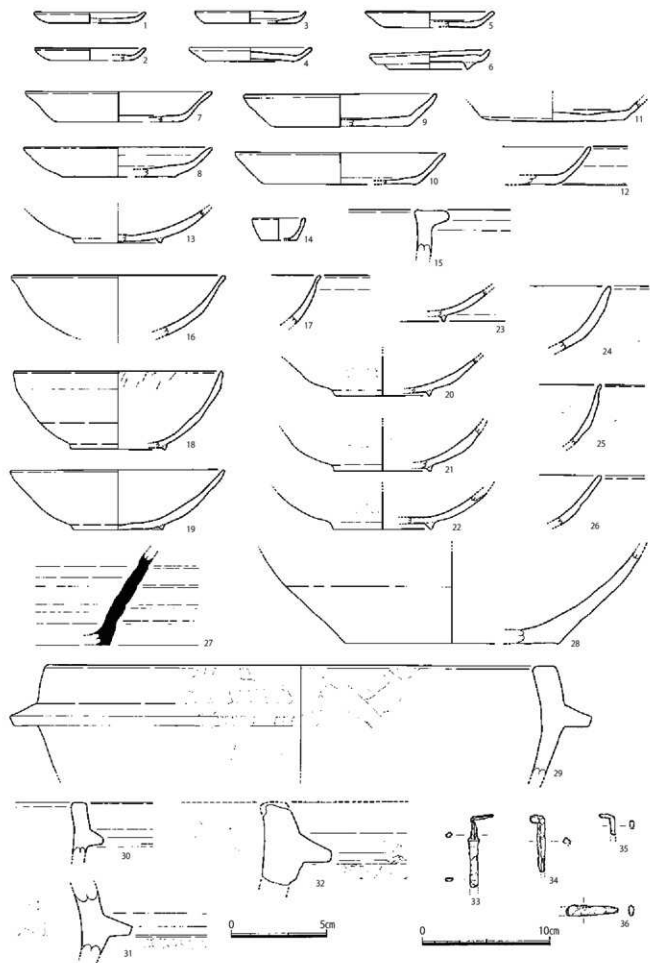
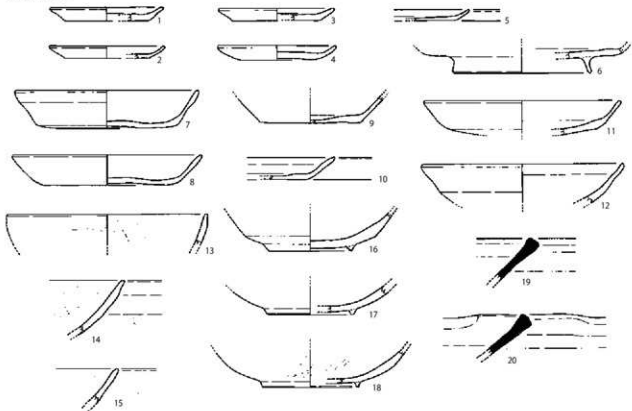


Fig. 39 101SE002 黒色土出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

SE002黒灰色土



SE002埴内

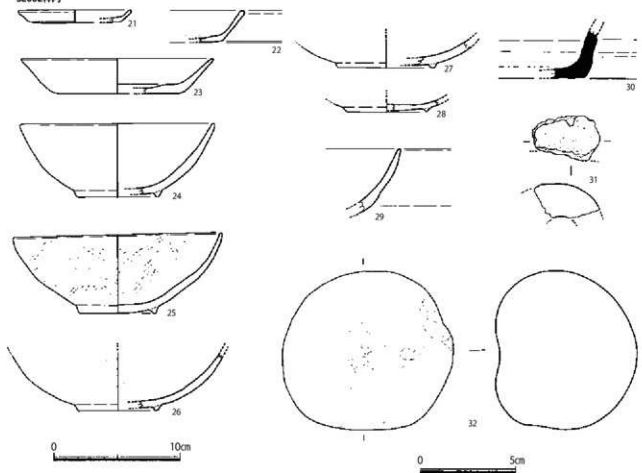


Fig. 40 101SE002 黒灰色土・埴内①出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

土製品

輪羽口 (31) 輪羽口の先端部で、表面は
被熱で溶解し、暗灰色を呈する。

石製品

叩き石 (32) 大きさは8.4×9.0×7.3 cm。
球状の石材の2ヶ所に敲打痕の凹みがある。

木製品

曲物 (33) 径23.4 cm前後、高さ10.5～
11.5 cm。薄板を二重に巻き、1ヶ所で留め
ているが、その間には同じような薄板が4
枚挟んでいる。内面には斜方向にキズを付
けている。

底板 (34) 一部欠損するが、16.2×
13.1 cm以上、厚さ0.4 cm。片面には無数の細かいキズが付いている。木釘穴などの痕跡は確認できない。

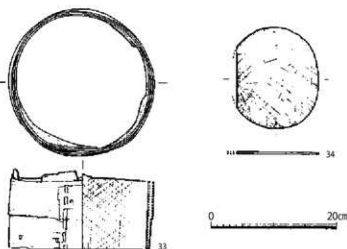


Fig. 41 101SE002 枠内②出土遺物実測図 (1/6)

101SE005

101SE005 出土遺物 (Fig. 42)

土師器

小皿 a (1～3) 口径8.7～9.1 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

丸底坏 a (4～8) 復元口径15.2～16.5 cm。底部は回転ヘラ切りで、外面はヨコナデ、内面は摩滅
が目立つ。

瓦器

碗 c (9) 復元口径16.0 cm、器高4.9 cm。内外面ともミガキ c で、高台付近に板状圧痕が残る。

白磁

碗 (10、11) 10はIV-1b類。復元口径19.0 cm。11はIV-1a類。底径6.2 cm。

101SE005 下層出土遺物 (Fig. 42)

土師器

小皿 a (12～14) 復元口径8.8～9.4 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

丸底坏 a (15～18) 口径14.6～15.5 cm。内面は回転ナデの後ミガキ b を施し、コテ当て痕を残す。

丸底坏 c (19) 内面は回転ナデの後丁寧なミガキ b。底部は丁寧な回転ナデ、体部下半は部分的に押
し出しの凸凹が残る。復元口径14.7 cm、器高3.75 cm。

瓦器

碗 c (20～23) 口径15.1～15.9 cm。内外面に細かくミガキ c を施す。色調は灰白色を呈する。20
の外面ミガキ c は、5分割で口縁部に対し平行に施す。21は回転ナデ・指頭圧痕の後細かくミガキ c を
施す。口縁端部は部分的に黒色となる。22の内面は5分割でミガキ c を施す。23は内面ミガキ c を4
分割で施す。

白磁

碗 (24) IV類。

金属製品

刀子 (25) 刀先は欠損し、茎付近を中心に残る。現存長9.5 cm、幅2.6 cm。

101SE010 出土遺物 (Fig. 43)

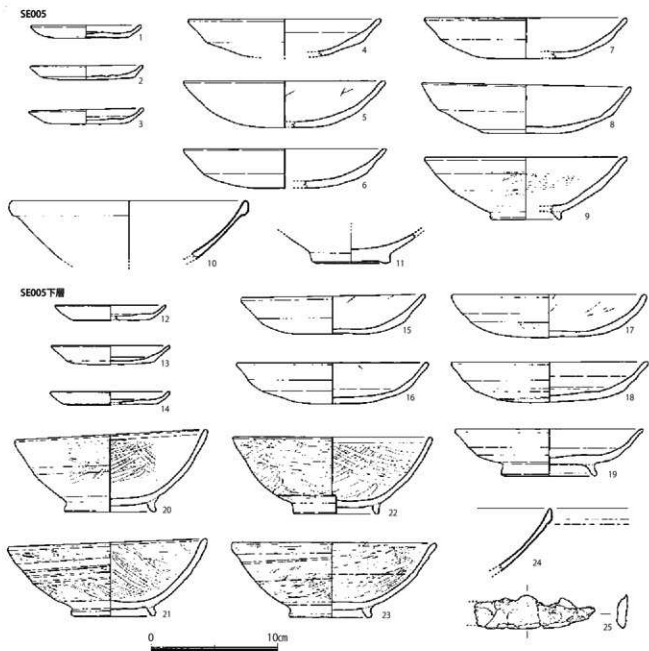


Fig. 42 101SE005 出土遺物実測図 (1/3)

土師器

小皿 a (1 ~ 11) 復元口径 7.6 ~ 10.6 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。2 は他よりやや深い。

丸底坯 a (12 ~ 14) 14 の内面にはミガキ b が確認できるが、他は摩滅し調整不明。

丸底坯 (15) 内外面とも摩滅し調整不明。

鉢 (16) 内外面ともヨコナデで、外面には煤が付着する。

瓦器

椀 c (17) 復元高台径 6.6 cm。内外面ともミガキ c。色調は内面灰白色、外面暗灰色を呈する。

土製品

輪羽口 (18) 外面ナデ調整で、やや角ばっている。

101SE015

101SE015 青灰色土出土遺物 (Fig. 43)

土師器

坯 a もしくは丸底坯 (19) 内外面とも摩滅し調整不明。

丸底坯 a (20) 内外面とも摩滅し調整不明。

小壺 (21) 底径 7.1 cm。外面には丹塗りのような痕跡がある。

瓦器

椀 (22) 色調は灰色で、口縁部外面のみ黒灰色を呈する。

101SE015 黄茶色土出土遺物 (Fig. 43)

土師器

小皿 a (23, 24) 復元口径は 9.0 cm と 9.8 cm。底部切り離しは 2 点とも回転ヘラ切りである。

椀 c (25) 復元口径 16.6 cm、器高 6.05 cm。内外面とも摩滅し調整不明。

瓦器

椀 c (26) 内面はミガキ c を施すが、外面は摩滅し調整不明。外面底部にはヘラ記号を施す。

椀 (27) 内面は摩滅するが外面にはミガキ c が残る。

101SE015 灰黒色土出土遺物 (Fig. 43)

土師器

小皿 a (28 ~ 30) 復元口径 8.2 ~ 9.2 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

丸底坯 a (31, 32) 復元口径は 14.8 cm と 16.8 cm。

椀 (33) 内外面に細かくミガキ c を施す。色調は白黄色を呈する。

瓦器

椀 (34) 摩滅が目立ち、僅かにミガキが残る。

白磁

皿 (35) VI-1b 類。底部外面は露胎。口径 11.2 cm、器高 2.55 cm。

101SE015 黒色粘土出土遺物 (Fig. 43)

土師器

椀 (36) 内外面ともミガキで、色調は淡黄橙色を呈する。

甕 (37) 胎土は 0.4 cm 以下の白色砂粒を含み、色調は暗茶灰色を呈する。外面には煤が付着する。

101SE026

101SE026 上面出土遺物 (Fig. 44)

土師器

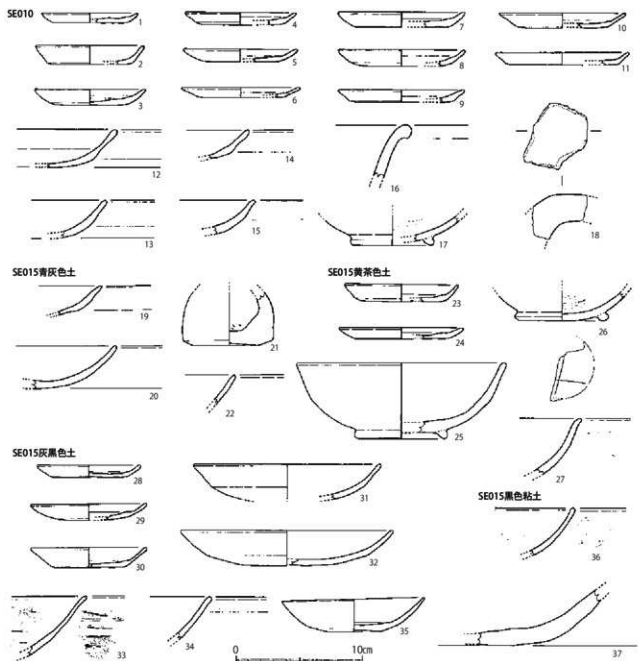


Fig. 43 101SE010・015 出土遺物実測図 (1/3)

小皿 a (1, 2) 2点とも底部切り離しは回転ヘラ切りで、復元口径9.4cm。

丸底坏 a (3~5) 復元口径15.2~16.8cm。3は内面にミガキbを確認できるが、他は摩滅し調整不明。

鉢 (6) 口縁部を僅かに外反させる。内面ヨコナデ、外面は摩滅し調整不明。色調は暗黄橙色を呈する。瓦器

碗 (7) 内外面ともミガキcで、胎土は灰色だが、器面は暗灰色を呈する。

101SE026 黒色土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

小皿 a (8) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底坏 a (9) 内外面とも摩滅するが、外面中位に僅かに指頭圧痕が残る。

101SE026 灰色土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

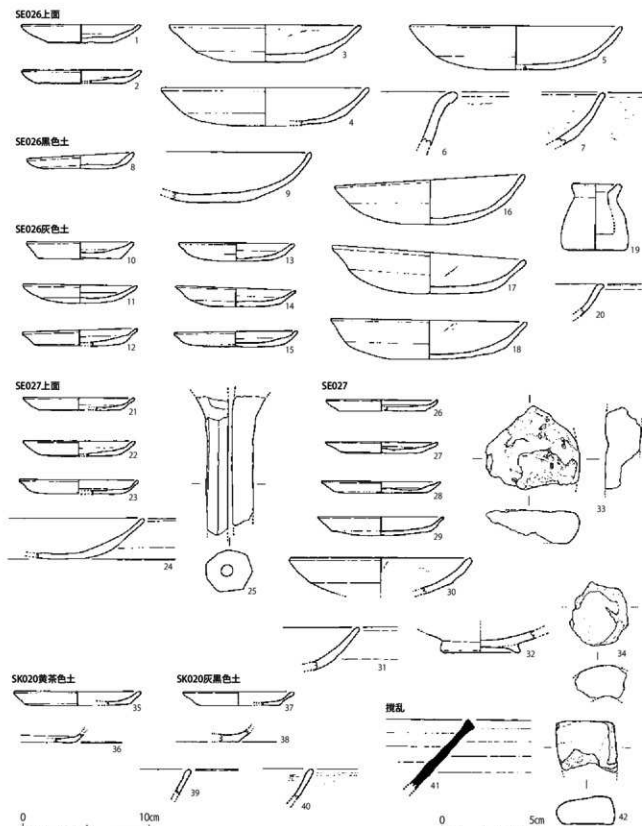


Fig. 44 101SE025・026・027、SK020、擾乱出土遺物実測図 (1/3、42は1/2)

小皿 a (10～15) 口径 8.5～9.8 cm。底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。
 丸底杯 a (16～18) 口径は 15.0～15.5 cm。17・18 の内面にはミガキとコテ当て痕が残る。
 小壺 (19) 口径 3.9 cm、器高 5.25 cm、底径 5.0 cm。全面ナゲ調整。色調は淡黄灰色を呈する。
 初期高麗青磁

椀 (20) III-1 類。胎土は白色砂粒を含み粗く、色調は灰色を呈する。内外面に灰緑色釉を施す。

101SE027

101SE027 上面出土遺物 (Fig. 44)

土師器

小皿 a (21 ~ 23) 復元口径 8.8 ~ 9.4 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りか。

丸底坏 a (24) 内外面とも摩滅するが、底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

器台 (25) 外面は八角形ほどに整形されているが、摩滅し調整不明。中央に 0.9 cm 程の円孔がある。

101SE027 出土遺物 (Fig. 44)

土師器

小皿 a (26 ~ 29) 復元口径 8.8 ~ 9.9 cm。底部切り離しは全て回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底坏 a (30) 復元口径 14.4 cm。底部は回転ヘラ切りで、内面にはミガキ b を施す。

丸底坏 (31) 内面にミガキ b を施す。

椀 c (32) 高台径 6.2 cm。

土製品

土壁 (33) 胎土は 0.5 cm 以下の砂粒を含み、靱痕跡も確認できる。厚さは 2.5 cm で、側面を丸く仕上げているため、土壁以外の可能性も考えられる。

輪羽口 (34) 小片で色調は橙黄色を呈し、外面の一部が灰色を呈する。

土坑

101SK020 黄茶色土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

小皿 a (35、36) 35 は復元口径 10.0 cm。底部切り離しは摩滅し不明。36 の底部切り離しは糸切り。

101SK020 灰黒色土出土遺物 (Fig. 44)

土師器

小皿 a (37、38) 底部切り離しは、37 は回転ヘラ切り、38 は回転糸切り。37 は復元口径 8.8 cm。

瓦器

椀 (39、40) 内外面ともミガキ c で、色調は断面灰白色で、表面は暗灰色を呈する。

攪乱出土遺物 (Fig. 44)

須恵質土器

鉢 (41) 胎土は黒色粒を多く含み、色調は灰黒色を呈する。SX003 より出土。

金属製品

不明製品 (42) 幅 3.2 cm、厚さ 1.5 cm 程で、方形状をなしているが、欠損しているため、全形は不明。目立った調整などは観察できない。SX019 より出土。

(5) 小結

調査の結果、遺構面は大きく削平されており、井戸などの深い遺構のみ残存するという状況であった。その状況で確認された全ての井戸が 11 世紀後半 ~ 12 世紀前半頃のものであったことから、奈良時代はもちろん、平安時代前期・中期についても、井戸を掘るような居住域が広がっていなかったことを物語っており、平安時代後期になってこの付近一帯に都市が広がってきたことが理解できる。

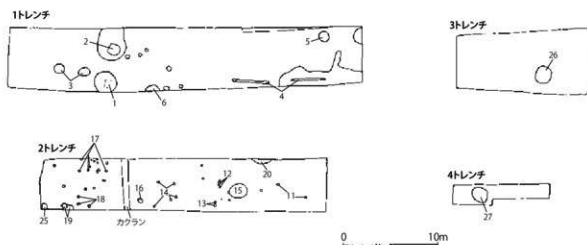


Fig. 45 第101次調査遺構略測図 (1/400)

表13 第101次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	101SE001	井戸		12世紀前半	1トレンチ
2	101SE002	井戸		12世紀後半	1トレンチ
3	101SX003	ビット(攪乱)		平安後期～	1トレンチ
4		溝	灰色土	平安後期～	1トレンチ
5	101SE005	井戸		11世紀後半～12世紀初頭	1トレンチ
6		土坑		平安後期～	1トレンチ
10	101SE010	井戸		11世紀後半～12世紀初頭	1トレンチ
11		ビット群	灰黒色土	平安時代	2トレンチ
12		ビット群	茶色土	平安後期～	2トレンチ
13		ビット群	灰黒色土	平安後期?	2トレンチ
14		ビット群	灰黒色土	平安後期～	2トレンチ
15	101SE015	井戸		11世紀後半～12世紀初頭	2トレンチ
16		ビット	灰色砂	12世紀～	2トレンチ
17		ビット群	灰黒色土	11世紀後半～12世紀	2トレンチ
18		ビット群	灰黒色土	平安後期～	2トレンチ
19	101SX019	攪乱	淡灰色砂	近世～	2トレンチ
20	101SK020	土坑		12世紀前半～中頃?	2トレンチ
25		土坑		平安後期～	2トレンチ
26	101SE026	井戸		11世紀後半～12世紀初頭	3トレンチ
27	101SE027	井戸		11世紀後半～12世紀前半	4トレンチ

表14 第101次調査 出土遺物一覧表

5-1上面

須恵 器	須恵
土 師 器	小黒a(1, ~?), 坪, 坪a(1), 丸底环a, 鉢
瓦	須恵
灰 胎 陶 器	須恵丸瓦(椅子)
白 磁	須: II(1), IV(5), IV-1a(1), V-2b7(1), V-3b(1) 内面磨目(1), 輪破片(4)
白 磁	須: V-2a(1), 鉄破片(1) 内裏磨目(1), 底広東系(1) 白磁破片(2), 丹反(2), 広東系(2)
中 国 陶 器	須: 瓦(2)
右 製 品	平玉5石, 粘刺巻, 石鏝
土 製 品	土墾

5-1黒褐色土

土 師 器	小黒a(1, ~?), 坪a(1, ~?), 丸底环a, 雙環
黒色土 師a 器	須c, 須
瓦	須c, 須
須恵質土 器	須c
白 磁	須: II(1), III-1(4), IV(7), V-1(1), 輪破片(5) 須: VI-1b(1), V~VII(2) 白磁破片(2)
須恵質系青磁	須: I-2~4(1)
中 国 陶 器	須(1) 中国陶器破片(1)
瓦	須(瓦落)
土 製 品	土墾

5-1黒色砂

須恵 器	須c
土 師 器	小黒a(~?), 丸底环a, 雙環
瓦	須c
須恵質土 器	須c
灰 胎 陶 器	須c
白 磁	須: II-1(1), III-3~4(2), IV(2), V-2b(1) 広東系(2), 須(1)
白 磁	須: V~VII(2), VI-b×VII-2(1) 白磁破片(1), 内面磨目(1)
同 安 東 系 青 磁	須? (1)

5-1内面

土 師 器	小黒a(~?), 坪, 丸底环a, 雙環
黒色土 師a 器	須c, 須
瓦	須c
白 磁	須: V-2b(1), IX? (1), 広東系(1), 輪破片(1) 須: VI-1b(1)
右 製 品	平玉
土 製 品	土墾
金 属 製 品	不明製品

5-2黒色土

須恵 器	須c
土 師 器	小黒(~?), 小黒c, 坪, 坪a(1), 丸底环, 雙環, 供膳具, ミニチュア土師小鉢
黒色土 師a 器	須c, 須, 須c
土 師 質土 器	須c
須恵質土 器	須c
同 産 産 品	同産産品鉢
須恵質(輸入)	朝鮮系無釉陶器
白 磁	須: II(2), IV(2), IV-1a(1), V(3), V-1a(1), V-2a(2), VII(2), VII-2(1), 広東系(1) 内面磨目(2), 輪破片(2) 須: III-1(1), III-2(2), V~VII(1), VI-1b(2) VI-b×VII-2(2), 広東系(4) 須(1) 白磁破片(1), 丹反(1), 丸底环(1), 須(1) 小胸(1) 同安東系青磁: 須: I-1a(1), I-1b(2), III-1a(1), 破片(1) 小胸(1) 須: I(1) 中国陶器: 須: 破片(2) 瓦: 須(1), 須I×II(1) 中国陶器破片(1) 右 製 品: 平玉, 須瓦
土 製 品	土墾
金 属 製 品	工具等, 鉄釘, 刀子

5-2黒褐色土

須恵 器	須c, 須
土 師 器	小黒a(~?), 小黒c, 坪, 坪a(1), 坪c, le×大坪c, 丸底环a, 丸底环, 雙環
黒色土 師a 器	須c, 須c
瓦	須c, 須c
須恵質土 器	須c
白 磁	須: II(1), III-1(2), IV(7), IV-1a(1), V-2a(1) V-1×VII-2(2), V-4×VII-1(3), VI-1a7(1) 内面磨目(1), 広東系(1), 輪破片(2) 須: III-1(1), III-1a(2), III(2), VI×VII(2) VI-1a(2), VI-2b(1), 広東系(2) 白磁破片(1)
青 白 磁	須? (1)
中 国 陶 器	輪破片(1), 鉢破片(1), 須? (1) 中国陶器破片(1)
瓦	須(瓦落)
右 製 品	高磁石, 滑石片

5-2内面

須恵 器	須c
土 師 器	小黒a(1), 坪, 坪a(1), 鉢?
瓦	須c, 須, 須c
須恵質土 器	須c×須
須恵質(輸入)	朝鮮系無釉陶器
白 磁	須: II(1), IV(1), 内面磨目(1) 四耳皿(1) 中国陶器須(瓦落)
瓦	須丸瓦
右 製 品	平玉, 須平石
土 製 品	土墾
木 製 品	品名物, 木製内椀
土 製 品	石
土 製 品	他石物

5-3

土 師 器	小黒a(~?), 丸底环?, 破片
須恵質土 器	須c(広東系)

5-4

土 師 器	須c
瓦	須c
白 磁	須(広東系(1))

5-5

土 師 器	小黒a(~?), 坪, 丸底环a, 供膳具, 破片
瓦	須c
白 磁	須: IV-1a(1), IV-1b(1), V-2(1) 白磁破片(2) 須: V~VII(1), VI×VII(1), VI-2b×VII-2b(1)
土 製 品	土墾

5-5下面

土 師 器	小黒a(~?), 坪, 丸底环a, 丸底环, 雙
瓦	須c, 須
白 磁	須: IV(1), V-2(1)
金 属 製 品	刀子

5-6

土 師 器	小黒a, 丸底环c, 須c
黒色土 師a 器	須c
瓦	須c
白 磁	須: IV(1), V-1a(1) 白磁破片(2)
中 国 陶 器	須: V~VII(1), 広東系(1)
土 製 品	土墾

5-10

土 師 器	小黒a(~?), 小黒c, 丸底环a, 丸底环, 鉢, 雙環
黒色土 師a 器	須c
瓦	須c
白 磁	須: II-1(1), IV(2), V(1), V-1a(1), V-2a(1), V-1×VII-2(2), 輪破片(1) 須: V-2a(1), VI-b×VII-2(1), VII-1c(1), XI-27(1) 白磁破片(1), 直口(1), 丹反(1)
土 製 品	品種判口

5-11

土 師 器	須c, 破片
-------	--------

5-12

土 師 器	小黒?, 坪, 雙環
白 磁	須(内面磨目(1))
同 安 東 系 青 磁	須破片(1)

5-13

土 師 器	須c, 坪c, 破片
瓦	須c
土 製 品	品種土墾
金 属 製 品	工具等

5-14

土 師 器	小黒a, 坪, 須c, 雙環, 破片
黒色土 師a 器	須c

5-15黄褐色土

土 師 器	須c, 坪c, 丸底环a, 坪c×丸底环c, 小黒, 鉢
瓦	須c
白 磁	須: II-1(1), 広東系(1) 須: V~VII(1)

5-15黄褐色土

須恵 器	須c
土 師 器	小黒a(~?), 坪, 丸底环, 丸底环a, 鉢c, 雙環, 把手
瓦	須c, 須c, 須c
白 磁	須: II-1(1), IV(1), V-1(1) 須: V-2a(1) 白磁破片(1)
金 属 製 品	同産不明鉄製品

5-15灰褐色土

土 師 器	小黒a(~?), 坪, 丸底环a, 須c, 雙環
瓦	須c
白 磁	須: II-1(2), IV-1a(2), IV(5), V-2a(1), V-1×VII-2(1), 広東系(1), 丹反(2), 輪破片(4) 須: V~VII(2), VI-1b(1), VII-2b(1) 白磁破片(2)
瓦	須平瓦(須製)
土 製 品	土墾

S-15黑色粘土

土 師	膨坪、丸底坪 α_0 、礫、礫
白 礫	礫：IV (1)、礫破片 (1)
白 礫	礫：V-1a (1) 白礫破片：広東系 (1)
中 國 陶	礫破片 (1)

S-16

須 惠	礫、礫片
土 師	礫小皿 α_1 (?)、坪、坪 α_0 、礫 α_0 、礫層
瓦	礫、礫片
須 惠 實 土	礫 (東澤表)
白 礫	礫：IV (1)、V-2a (1)、礫破片 (1)
瓦	礫平瓦 (礫子)

S-17

土 師	礫坪、礫片
白 礫	礫：IV (1)

S-18

土 師	礫坪、丸底坪、礫層、礫片
白 礫	礫破片直立 (1)
土 師	品土塊

S-19

須 惠	礫坪、坪、礫、礫片
土 師	礫坪、礫、礫片
須 惠 實 土	礫、礫片
肥 前 系 陶 磁 器	磁器：陶
國 産 陶	磁器、紅磁、磁、陶鉢、破片
須 惠 實 (輸入)	朝鮮系無釉磁器
白 礫	礫：II (1)、IV (1)、IV-1a (1)、V (1)、 V \sim V α (1) 内面磨目 (1)、礫破片 (1)
龍 泉 窯 青 磁	磁土 1-2 (1)
瓦	礫平瓦 (礫文)
金 崎 銅 品	赤澤、新?

S-20黄茶色土

須 惠	礫破片
土 師	礫小皿 α_1 (?)、 α_2 ?)、坪 α_0 、礫層
白 礫	礫：IV (1) 白礫破片 (1)
土 師	品土塊

S-20灰藍色土

須 惠	礫
土 師	礫小皿 α_1 (?)、 α_2 ?)、坪、坪 α_0 、礫
瓦	礫、礫片
白 礫	礫：II-1 (1)、V-1 (1)、礫破片 (2)
白 礫	礫：V \sim V α (1) 白礫破片：直立 (1)

S-25

須 惠	礫
土 師	礫小皿 α_1 (?)、坪
瓦	礫

S-25上面

須 惠	礫、礫
土 師	礫小皿 α_1 (?)、坪、丸底坪 α_0 、礫、礫、礫、礫、礫、礫層
瓦	礫
瓦	礫平瓦

S-26黑色土

土 師	礫小皿 α_1 (?)、丸底坪、丸底坪 α_0
白 礫	礫：IV-1a (1)、礫破片 (1)

S-26灰色土

土 師	礫小皿 α_1 (?)、丸底坪 α_0 、礫、小皿
白 礫	礫：V-1a (1)、礫破片 (1)
高 麗 青 磁	礫-1 (1)
瓦	礫平瓦 (礫文)

S-27

須 惠	礫、礫?
土 師	礫小皿 α_1 (?)、坪 α_0 (?)、 α_2 ?)、丸底坪 α_0 、礫、礫 α_0 、礫層
黄色土 師 A	礫層
白 礫	礫：IV (1)、IV \times V (1)、V-2a (1)、礫 α (1)、広東系 (2)
石 製	品磁石 白礫破片 (1)
土 師	品土塊、礫破口

S-27上面

須 惠	礫坪、丸底坪、礫
土 師	礫小皿 α_1 (?)、坪、丸底坪 α_0 、礫層
瓦	礫
白 礫	礫：IV-1a (2)、礫破片 (1)

表土

須 惠	礫層、礫片
土 師	礫小皿 α_1 (?)、 α_2 ?)、坪、坪 α_0 、丸底坪、礫 α_1 ?)、礫層
瓦	礫、礫片
須 惠 實 土	礫、礫 (東澤表)
須 惠 陶	磁レンガ
須 惠 陶	磁紅瓦
白 礫	礫：II (1)、IV (1)、IV-1a (1)、V (2)、内面磨目 (1) 礫破片 (2)
白 礫	礫：III (1)、礫-2 (1)、V \sim V α (1)、VI \times VI \times VI \times (1) 白礫破片：(4)、礫花 (1)、直立 (1)

青 白

青 白	礫破片 (1)
龍 泉 窯 青 磁	磁破片 (1)
河 東 窯 青 磁	土 1b (1)
中 國 陶	磁器 (1) 中国陶磁破片 (1)、I群 (2)
石 製	品磁石
瓦	α_2 能高礫小皿

7、第108次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市大字向佐野字迎田 19-1 外で、御笠川の南岸に位置する。

調査は太宰府市立太宰府史跡水辺公園建設に伴うもので、1991(平成3)年3月19、20日に対象地の西側を中心にトレンチを8本設定し、ビットが確認された対象地の西端を、1991(平成3)年4月2日から4月15日にかけて発掘調査を実施した。調査は緒方俊輔が担当した。開発対象面積は9070㎡で、調査面積は780㎡である。

測量不足や計測ミスなどで、レベルや座標が不明もしくは不正確部分が多く、残された記録と現況から推測して、遺構面は標高25.5m前後のところとみられる。

(2) 基本層位

対象地は、7枚の田圃に分かれ、北側に向かって低くなっていた。上面から水田の耕作土が厚さ0.4m程あり、その下には砂層や粘質土と交互に堆積し、西端では黄色粘土の地山を確認している。

なお、堆積状況については、土層実測図 (Fig.47) を掲載しているものの、土層写真 (CD収録) と異なる部分があり、実測の正確性に疑問が残り、参考程度にご覧いただきたい。

(3) 検出遺構

遺構が確認された南西隅の調査箇所では、深さ0.2～0.5m程のビットや窪みが検出されたが、溝状遺構以外は目立った遺構はなく、その半分ほどが氾濫原であった。

溝状遺構

108SD001

調査区の南西部で検出した東西方向の溝状遺構で、検出幅は2～3.4m、検出長は約19mで、調査区外南側に続いている。深さは0.3～0.5mで、埋土は上層が灰褐色粘土、下層は暗灰色粘質土である。

氾濫原

108SX021

調査区の北側に広がる氾濫原で、上面を掘り下げたのみで完掘していないが、トレンチの土層状況から粘土と砂が互層になっている。

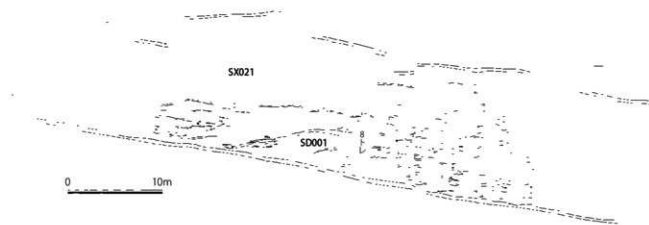


Fig.46 第108次調査 遺構全体図 (1/400)

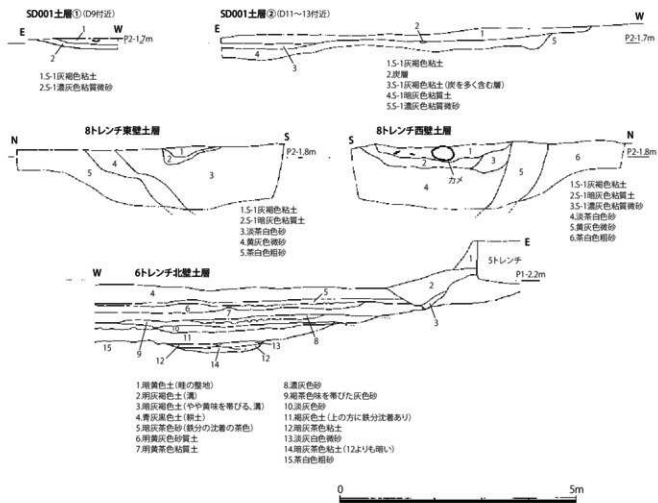
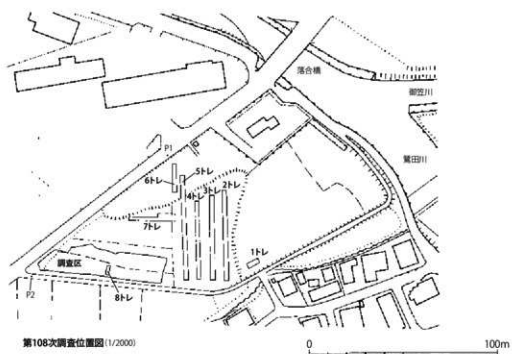


Fig. 47 第108次調査位置図 (1/2000)・土層実測図 (1/80)

(4) 出土遺物

108SD001 灰褐色粘土出土遺物 (Fig. 48 ~ 52)

弥生土器

甕 (1 ~ 22) 全体的に摩滅が目立ち、調整不明瞭なものが多い。1・2は部分的に欠損もあるが、全形がわかる甕で、口縁部下のくびれ部と胴部最大径の若干下に断面台形の突帯を貼付する。底部は僅かに丸味を帯びている。1は口径23.1cm、器高51.0cm、底径8.8cm。2は口径29.6cm、器高63.2cm、復元底径9.4cm。胴部下の突帯には刻み目が施されている。全体的に摩滅しているが、部分的に外面にはタテハケが残る。3 ~ 7はく字形の口縁部である。3は復元口径22.2cm。内外面ともハケ調整。4は復元口径23.2cm。5は復元口径14.0cm。8は口縁部に向かって屈曲なく外反させる。9は厚く上げ底の底部である。10は平らな底部で、細身の体部とみられる。摩滅するが外面はハケとナデ調整である。11の底部は欠いているが、意図的に打ち欠いている可能性もある。12は内外面ともハケ目を丁寧に施す。色調は黄白色で、外面には対照的に2ヶ所黒斑が残る。13は復元底径7.0cmの若干丸味のある底部である。底径に対し胴部が張っている。外面はハケ調整の後ナデか。内面はハケの後ナデ調整。14 ~ 22は若干丸味のある底部である。全体的に摩滅し、表面の調整は不明瞭である。15は底部を打ち欠き、2.7cm程の孔を穿っている。22は外面下半に浅いハケ目があるが、工具によるナデ痕にも見える。

小甕 (23、24) 23は内面ハケの後ナデ。外面摩滅し調整不明。色調は黄灰色を呈する。24は復元口径8.1cm。外面は摩滅するが、内面は指頭痕が残る。色調は黄橙色を呈する。

複合口縁壺 (25 ~ 28) 頸部から口縁部にかけての破片で、くびれ部には低い断面三角形の突帯を貼付する。外面タテハケ、内面ヨコハケ調整である。色調は黄橙色を呈する。25は復元口径17.4cm。体部も残っていて、内外面ともハケ目が残る。色調は淡黄灰色を呈する。26は摩滅が目立ち調整不明。

壺 (29 ~ 32) 29はくびれ部に低い断面三角形の突帯を巡らす。体部内外面ともハケ調整。30は短頸壺とみられる。内外面とも摩滅し調整不明瞭。31は長頸壺の胴部と推測される。底部は若干丸味があり、内面にはハケと指頭圧痕が残る。外面にはうっすらと浅いタテハケと薄く煤が付着する。32は口径22.8cm、器高29.1cm、底径9.1cm。全体的に摩滅が目立つが、外面下半にタテハケが僅かに残る。色調は暗橙茶色を呈する。

壺もしくは甕 (33) 口径22.3cm。全体的に摩滅が目立つが、外面にはハケ目が残る。色調は黄白色や黄橙色を呈する。

鉢 (34 ~ 38) 34は復元口径42.8cm。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈する。口縁部はナデ、体部は斜めハケを施す。外面下半にはタテハケが残る。35は復元口径30.0cm。外面はくびれ部に工具痕が残るが、摩滅が目立つ。内面はハケ調整。36は内面摩滅するが、外面には浅いハケ目が僅かに残る。口縁部外面には工具痕が残る。37は復元口径24.5cm、器高14.3cm、底部は丸味があるが復元口径9.6cmである。内面ナデ、外面は口縁部がヨコナデだが工具痕が残る。下半には粗いタテハケを施す。38は内外面ともナデもしくはミガキが劣化した状態とみられる。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は黄灰色や黒灰色を呈する。

器台 (39 ~ 41) 39は内面下半がヘラケズリ、中位には指頭圧痕が残るが、外面摩滅し調整不明。40は摩滅が目立つが外面タテハケで、口縁部はヨコハケが残る。復元口径15.2cm。色調は黄橙色を呈する。41は小片で、器台としたが長頸壺の可能性もある。胎土は精製され、内面にはハケ目が残る。

古式土師器

坏 (42) 復元口径16.0cm、器高5.6cm、復元底径12.0cm。胎土は精製され、色調は橙色を呈する。石製品

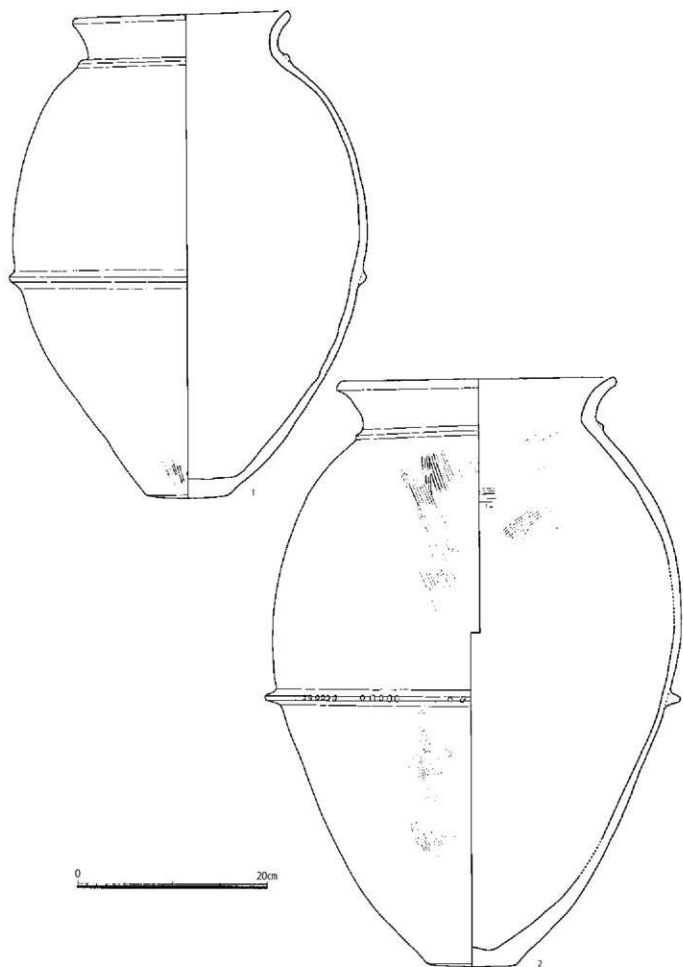


Fig. 48 108SD001 灰褐色粘土出土遺物実測図① (1/4)

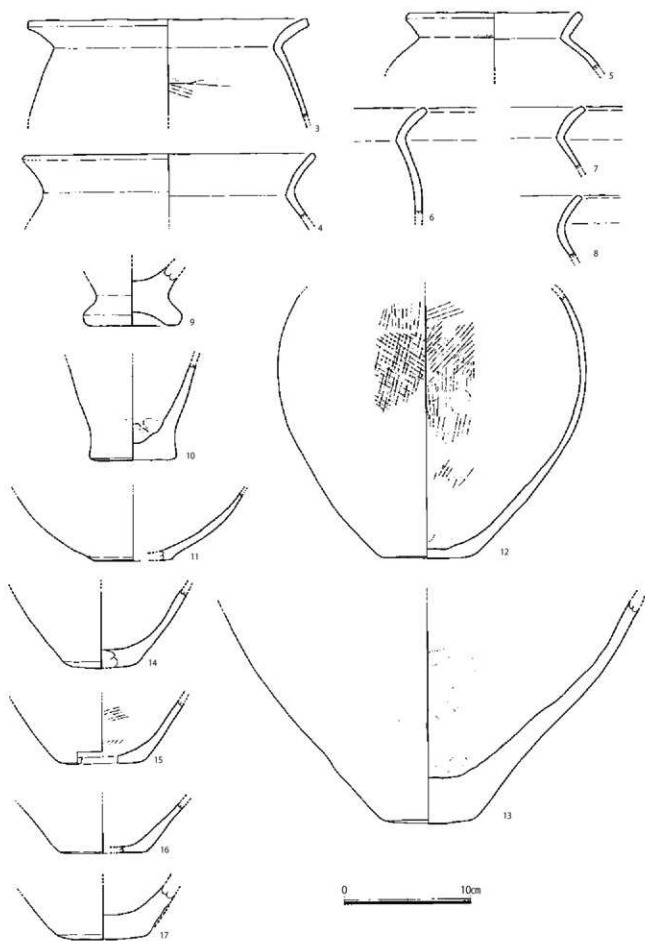


Fig. 49 108SD001 灰褐色粘土出土遺物実測図② (1/3)

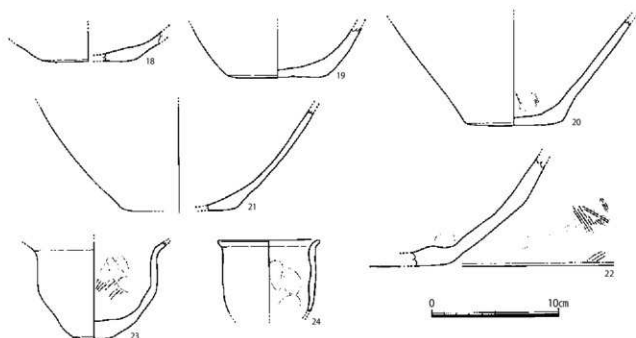


Fig. 50 108SD001 灰褐色粘土出土遺物実測図③ (1/3)

石鏝(43) 縦4.2 cm、厚さ0.55 cm、黒曜石製。

石包丁(44) 大きく欠損し、紐穴付近が残り、刃部も僅かに残る。幅6.5 cm前後と推測される。厚さ0.6 cm。堆積岩製。

108SD001 暗灰色粘質土出土遺物 (Fig. 53)

弥生土器

甕(1、2) 内外面とも浅いハケ目を施す。

108SD001 濃灰色粘質微砂出土遺物 (Fig. 53)

弥生土器

甕(3) 如意形の口縁で、口縁部下に沈線を巡らす。色調は黄橙灰色を呈する。

壺(4) 肩部付近で、断面三角形の突帯を貼付する。外面の突帯より下にはハケ目が残る。内面には指頭圧痕やケズリ痕が残る。

石製品

石包丁(5) 石包丁の側縁部で、厚さ0.4 cm。石材は暗紫灰色の輝緑凝灰岩製。

その他の遺構

108SX002 出土遺物 (Fig. 54)

弥生土器

甕(1) 如意形の口縁で、口縁部下に指頭圧痕があり沈線を巡らす。外面はほとんど摩滅するがハケを施す。内面は摩滅するが、ミガキのような痕跡が残る。色調は暗黄橙色を呈する。復元口径17.8 cm。

108SX005 出土遺物 (Fig. 54)

古式土師器

坏(2) 復元口径13.2 cm、器高約4.5 cm。全体的に摩滅するが、外面下半にはケズリ痕跡が残る。胎土は黄橙色を呈する。

108SX007 出土遺物 (Fig. 54)

土師器

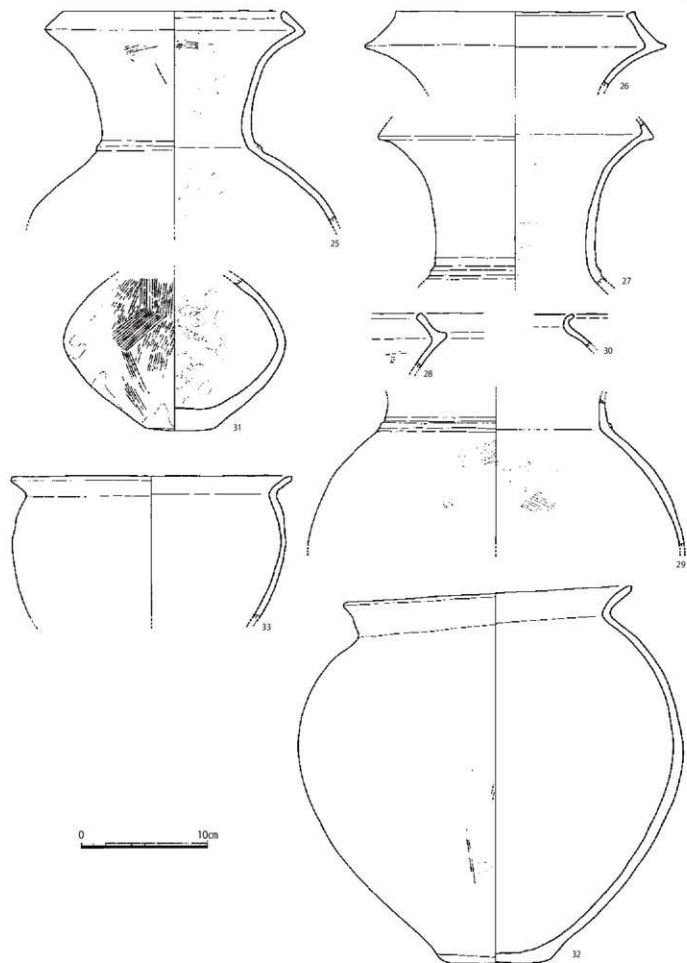


Fig. 51 108SD001 灰褐色粘土出土遺物実測図④ (1/3)

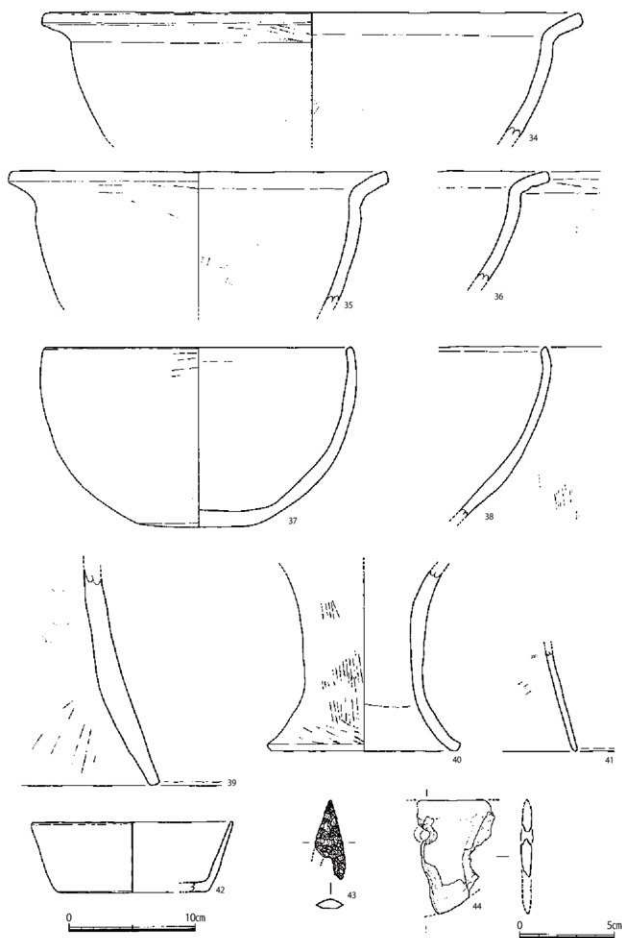


Fig. 52 108SD001 灰褐色粘土出土遺物実測図⑤ (1/3、石製品は1/2)

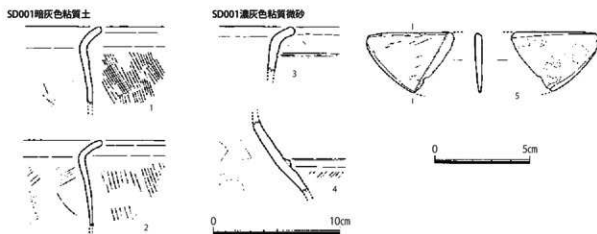


Fig. 53 108SD001 暗灰色粘質土・濃灰色粘質微砂出土遺物実測図 (1/3、5は1/2)

坏c (3) 復元高台径8.7cm。

108SX009 出土遺物 (Fig. 54)

須恵器

蓋3 (4) 口縁端部は摘まんだ程度で、やや細く尖り貧弱である。

108SX011 出土遺物 (Fig. 54)

土師器

碗c (5) 色調は黄灰色を呈する。内面摩滅し調整不明。

108SX012 出土遺物 (Fig. 54)

須恵器

坏身 (6) 復元口径8.6cm。外面底部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

108SX017 出土遺物 (Fig. 54)

古式土師器

坏 (7) 外面底部にはヘラケズリのような痕跡が残る。色調は淡橙黄色を呈する。器高4.2cm。

石製品

搔器 (8) 長さ4.4cm、幅3.05cm、厚さ0.7cm。端部を僅かに加工し刃部を作り出している。安山岩製。

縦長剥片 (9) 長さ3.8cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm。一部自然面が残る。黒曜石製。

108SX018 出土遺物 (Fig. 54)

瓦類

平瓦 (10) 凸面にアミダ状の格子叩きを施す。

108SX019 出土遺物 (Fig. 54)

石製品

剥片 (11) 大きさは3.6×3.0cm、厚さ0.7cm。黒曜石製。

108SX021 暗黄灰色土出土遺物 (Fig. 54)

土師器

坏c (12) 復元高台径8.8cm。色調は淡橙色を呈する。

須恵質土器

鉢 (13) 内外面とも回転ナデ調整。胎土は黒色粒を含み、灰色を呈する。東播系。

白磁

碗 (14) IV類。

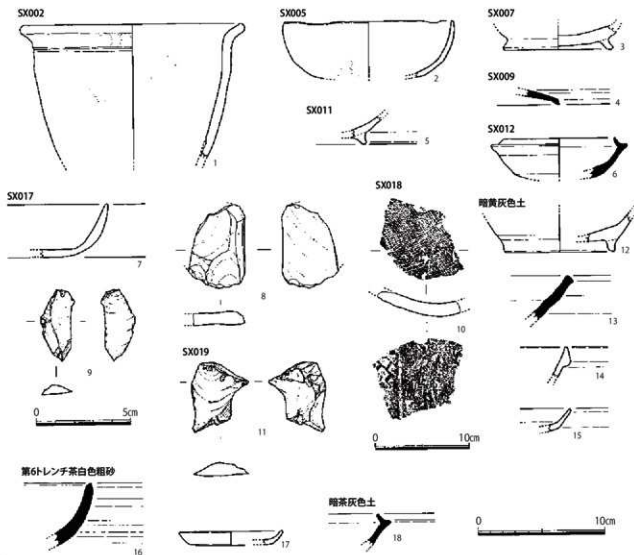


Fig. 54 第108次調査 その他の遺構出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4, 石製品は1/2)

皿 (15) Ⅶ類と推測されるが、軸がやや黄ばんでいる。

第6トレンチ茶白色粗砂出土遺物 (Fig. 54)

須恵器

鉢 (16) 内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ。色調は暗灰色を呈する。

土師器

小皿 a (17) 復元口径 8.2 cm、器高 1.1 cm、復元底径 6.6 cm。底部切り離しは不明。

暗茶灰色土出土遺物 (Fig. 54)

須恵器

坏身 (18) 内外面とも回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

(5) 小結

調査対象地の大半が御笠川の氾濫原のため、遺構はほとんど確認できていない。調査区南辺部分では、弥生時代後期中頃の遺物が多く出土したが、安定的な生活面は確認できなかった。周辺の調査事例がほとんどないが、調査地の南側の平野部が、標高が 2m 前後高くなっていることや、条里のような痕跡も残されていることから、河川氾濫を受けていない安定した土地であったとみられ、調査地南側一帯に弥生時代の集落が存在している可能性も考えられる。

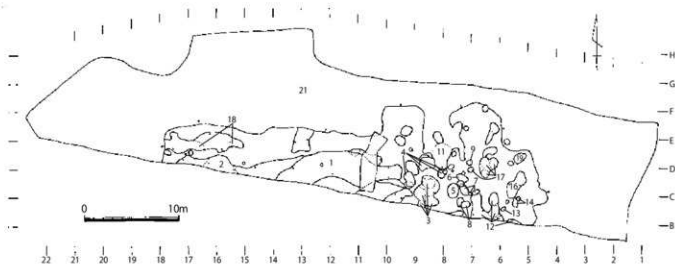


Fig. 55 第108次調査遺構略測図 (1/400)

表16 第108次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	108SD001	溝	灰褐色粘土、暗灰色粘質土	弥生後期中頃	CD. 9~17
2	108SX002	土坑		弥生前期?	CD. 15・16
3	108SX003	窪み群		奈良時代	BC8
4	108SX004	窪み群			CD8・9
5	108SX005	土坑		6世紀	C7
6	108SX006	土坑			C7
7	108SX007	窪み群			C6・7
8	108SX008	窪み群		奈良時代	B7
9	108SX009	ピット		奈良時代	D7
11	108SX011	土坑		平安時代	D7・8
12	108SX012	窪み群		古墳時代末期	B5・6
13	108SX013	ピット			B5
14	108SX014	窪み群		古墳時代~	B5
16	108SX016	窪み群			C5
17	108SX017	土坑群			CD6・7
18	108SX018	土坑群		近世~	DE15~17
19	108SX019	土坑		古代	D5
21	108SX021	氾濫原	暗黄灰色土	12世紀中頃~	A~H. 1~17

表17 第108次調査 出土遺物一覧表

S-1区褐色粘土	
土師	器环c、破片
古式土師	器环、器台
黒色土師土器破片	
国産陶器細鉢	
弥生土器	甕、小甕、甕×壺、小甕、甕、甕合口縁意、鉢、
石製	品石鏝、石包丁
土製	品土塊
土の	物高脚小甕
S-1褐色粘質土	
弥生土器	器、破片
S-1褐色粘質砂	
弥生土器	甕、破片
石製	品石包丁、裏片(黒曜石)
S-2	
弥生土器	器甕
S-3	
須恵	器环
土師	器环a(9)
弥生土器	器甕×壺、破片
瓦	類平瓦(横目)
S-4	
弥生土器	器高坏、甕×壺、破片
S-5	
古式土師	器环、甕
弥生土器	器破片
S-6	
越州産赤青磁陶; II(1)	
弥生土器	器甕×壺
S-7	
須恵	器环、环c、甕、破片
土師	器甕、环c、环d、鉢?
弥生土器	器高坏?、甕、破片
S-8	
弥生土器	器甕、破片
S-9	
須恵	器蓋
弥生土器	器蓋、破片
S-11	
土師	器环、碗c
弥生土器	器甕、甕、破片
石製	品割片(安山岩、黒曜石)
土の	物高脚小甕
S-12	
須恵	器环身
古式土師	器高坏、甕
弥生土器	器破片
S-13	
古式土師	器破片?
弥生土器	器破片
石製	品割片(黒曜石)

S-14	
須恵	器破片
須恵	器破片
古式土師	器甕、破片?
弥生土器	器破片
S-16	
須恵	器高坏?、破片
弥生土器	器甕×壺、甕、破片
S-17	
須恵	器蓋
古式土師	器环
土師	器身
弥生土器	器高坏、甕、甕
石製	品割片(安山岩、黒曜石)、漆器
S-18	
須恵	器蓋c、坏身
高麗青磁	器片(I)
国産磁器	碗
白磁陶	器片(I) 白磁破片(I)
弥生土器	甕、破片
瓦	類平瓦(横目)、丸瓦、破片
金風製	品漆器
土製	品割片(安山岩、黒曜石)
土製	品特殊土製品
S-19	
須恵	器蓋?、破片
弥生土器	器破片
石製	品割片(黒曜石)
地蔵灰色土(S-21)	
須恵	器蓋、蓋3、破片
古式土師	器小甕
土師	器小瓶a、环、环a、碗c
黒色土師土器	
越州産赤青磁陶	器片I×II(1)
須恵質土器鉢	
白磁陶	器IV(1)、広東窯(1)、直口(1) 甕; 甕(1)
弥生土器	器高坏、甕、破片
瓦	類平瓦(横目)、破片
土製	品割片(黒曜石、安山岩)
暗茶灰色土	
弥生土器	器环身、甕、破片
弥生土器	器高坏、甕、破片
6レンヂ灰白色磁砂	
須恵	器环c、鉢、破片
土師	器小瓶a、环、环a、碗c、破片
黒色土師土器	碗c
須恵質土器鉢	
白磁陶	器白磁破片直口(1)
中国陶	器破片(1)
弥生土器	器甕、破片
石製	品磁石

8、第175次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市通古賀5丁目537-2、547、548、549、550で、旧国道3号線（現県道112号線）沿いに位置する。

1994（平成6）年12月12日より、当該地における埋蔵文化財の問い合わせが始まり、1995（平成7）年6月9日に確認調査を行い、深さ0.2mで遺構を確認した。その後の土地利用については、増田石油（株）のガソリンスタンド建設と決まり、遺構が破壊されることが明確になったため、開発者の調査費用負担のもと調査することとなった。

発掘調査は1995（平成7）年11月26日から1996（平成8）年1月16日にかけて実施した。調査地は大きく攪乱を受けており、遺構が残存していた部分を北・中・南の3区に分けて調査を行った。開発対象面積は2056㎡で、調査面積は1163㎡である。調査は狭川真一、山村信榮、井上信正が担当した。

(2) 基本層位

調査地は、昭和初期の旧国道3号線（現県道112号線）造成工事によって、大きく削平を受けたと言われ、調査地中央付近にはかつて墓地があった。東側の隣接道路のレベルが28.8mに対し、遺構面のレベルは、およそ北区が27.5m、中区が29.1m、南区が27.9mで、墓地として旧状を保っていた中区以外大きく削平され、深い井戸のみが残存したことがわかった。遺構の残りが良い中区でも包含層は確認できず、表土直下に地山の黄色粘土があり、遺構が広がっている。

(3) 検出遺構

井戸

175SE010 (Fig. 57)

掘り方は東西3.6m、南北3.4m、深さ2.12mの円形である。深さ0.85mで井戸枠痕跡とみられる1.1m四方の暗灰色土の方形プランが確認され、その下部で井戸枠材が残存していた。井戸枠は横板が二重になっていて、井戸枠の内法は、外側が0.9m四方で、内側は0.72m四方である。外側と内側との横板の重なり具合は約0.1mで、下端の枠材のみ残存していた。

175SE050 (Fig. 57)

掘り方は1.16m四方、深さ1.04mの方形である。井戸枠は0.8m四方の方形で、幅0.2m前後の縦板を方形に加工した横板で押さえている。井戸枠最下部内側には幅0.7m四方、高さ0.3mの方形木枠が据えられていた。井戸枠内は黒灰色砂質土で、その底部には暗灰色粘土が堆積していた。

175SE060 (Fig. 57)

掘り方は東西2.0m、南北2.58m、深さ1.14mの楕円形で、SE090の埋土に切り込んでいる。井戸枠は1mほどの方形とみられるが、きれいな状況を保っていない。やや不定形な井戸枠プランの内部の埋土は、黄色粘土入りの灰色粘土で、枠材は東側のみ残存し、幅0.2m前後の縦板が3枚検出された。南側には幅0.6mの板材が傾いた状態で検出されたが、これはSE060の井戸枠材の可能性もある。井戸底では径0.68mの曲物を検出した。枠内の端に偏って出土したため、落下した曲物の可能性も考えられるが、曲物周囲は茶色硬化砂層であったため、井戸底に据えられていたものと推測される。また、曲物検出面では種子と共に緑色を保った葉が堆積していた。さらに、その曲物端では竹が刺さった状態で見つかった。竹筒内は空洞で、井戸埋め戻し時の祭祀として息吹きが行われたと推測される。

175SE080 (Fig. 57)

調査区端で検出された井戸のため、底部まで調査できていない。掘り方は径1.4m、深さ1.1m以上の

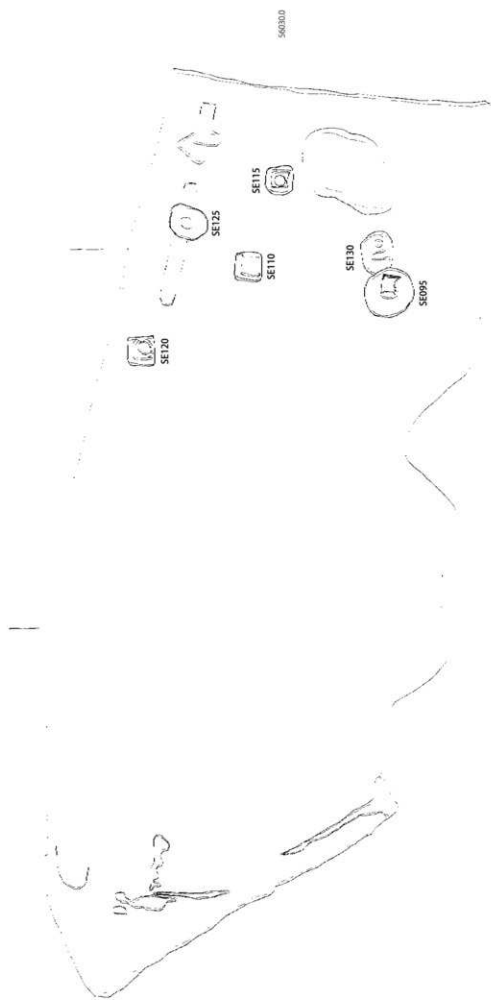
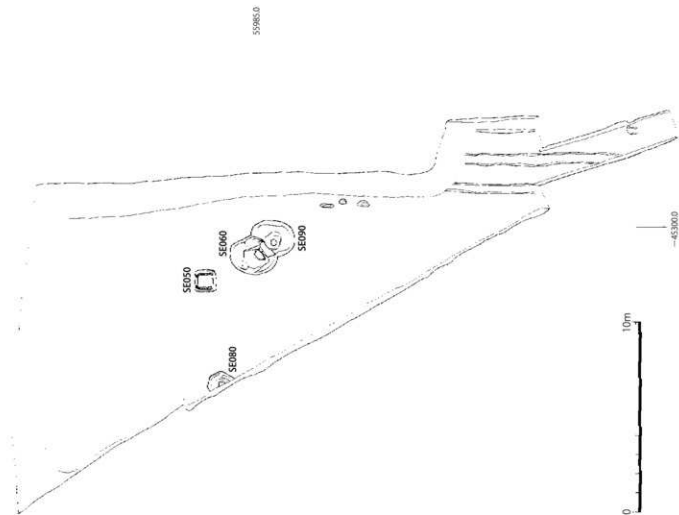
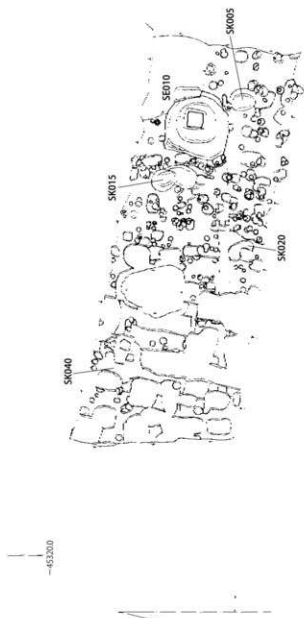


Fig. 56 第175次調査遺構全体図 (1/200)



円形である。井戸枠は僅かしか確認できていないが、縦板を用いた方形井戸枠である。

175SE090 (Fig. 57)

SE060に切られているが、掘り方は径2.1m、深さ1.26mの円形である。井戸枠は木材削り抜きで、やや変形しているが、径0.86mほどの円形で、その中に径0.44～0.4m、深さ0.34mの円形土坑が検出され、木質が僅かに残存していた。

175SE095 (Fig. 58)

掘り方は東西2.6m、南北2.5m、深さ1.9mの円形である。井戸枠は幅0.25m前後の縦板を断面方形に加工された横棧で押さえていたが、土圧などで崩落していた。井戸枠底には内法0.8m四方の井桁が据えられている。井桁は断面0.14×0.08mの方形に加工されたものを組んでいる。井桁にはさらに内法0.63m、深さ0.1mほどの方形木枠が据えられていた。井戸枠底には転落した柄杓と推測される曲物が出土した。

175SE110 (Fig. 58)

掘り方は東西1.5m、南北1.4m、深さ0.85mの方形である。井戸枠は方形で、枠材はほとんど残っておらず、南側に僅かな痕跡と縦板の圧痕が残されていた。また、南西隅に隅柱が残り、縦板を押さえていた自然木の横棧が崩れながらも残存していた。黄褐色粘土の埋土下に板材・木チップ・横棧とみられる部材が検出され、土器器内から種子も出土した。また、その下に堆積する灰褐色粘土を除去した最下部にも木片や土器が散乱していた。

175SE115 (Fig. 58)

掘り方は東西1.45m、南北1.4m、深さ1.28mの方形である。方形の井戸枠は、西側と南側は土圧で歪んでいたが、井戸枠の内法幅は0.9m四方である。枠材は幅0.25m前後の縦板で、井戸枠中央には径0.58m、深さ0.4mの曲物痕が残されていた。

175SE120 (Fig. 58)

掘り方は東西1.6m、南北1.4m、深さ1.25mの方形である。井戸枠は幅0.15m前後の板材を用いた円形の桶枠で、桶は土圧でやや歪み径0.6～0.72mで、南側の枠材は腐食し遺存していなかった。

175SE125 (Fig. 58)

掘り方は東西1.7m、南北2.1m、深さ1.3mの楕円形である。井戸枠材は全く遺存していなかったが、底面では径0.56～0.68mの円形土坑が確認され、曲物痕と推測される。

175SE130 (Fig. 58)

掘り方は東西1.7m、南北2.3mの長楕円形で、掘り方の東寄りで方形の井戸枠が検出された。井戸枠は0.8m四方で、横板を用いた枠材が遺存していた。井戸枠の南西隅には円柱の隅柱が遺存していたが、それ以外は柱痕跡とみられる灰色粘土が棒状に検出されたのみであった。底面では大きさ0.44×0.41m、深さ0.16mの断面逆台形の円形土坑が検出され、曲物痕と推測される。曲物痕底部までの深さは1.3mである。なお、埋土上層の灰褐色土からは曲物が出土している。

土坑

175SK005

東西1.15m、南北1.4m、深さ0.3mの楕円形土坑で、埋土は明灰色土である。

175SK015

南北2.45mのプランを検出したが、中央付近は黒灰色粘土と黒灰色土の境が確認されたが、その切り合いラインは微妙であった。完掘状況を見ると2つの土坑であったとみられるが、検出状況からすると時期差はさほどないものと推測される。北側の土坑は、東西1.2m、南北1.4m、深さ0.7mで、その底部

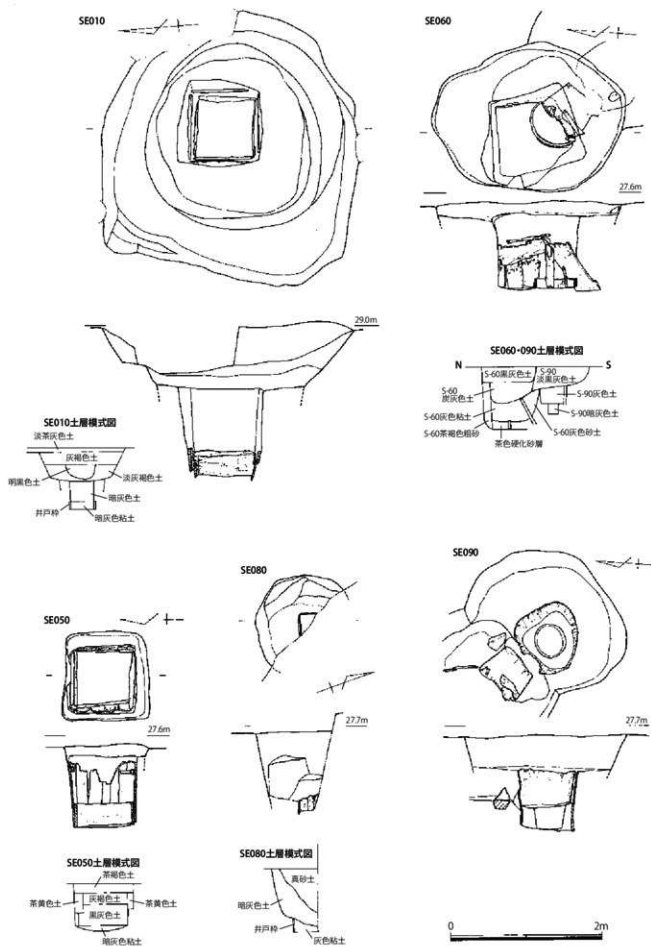


Fig. 57 175SE010・050・060・080・090 遺構実測図 (1/50)

には厚さ 0.05m 程の黄灰色粘土が堆積していた。南側の土坑は、東西 1.2m、南北約 1.8m、深さ 0.4m である。埋土は黒灰色土である。

175SK020

北端は SD029 によって切られている。東西 0.9m、南北 1.45m、深さ 0.16 前後である。

175SK040

東西 2.3m、南北 1.9m、深さ 0.87m の不定形土坑である。

(4) 出土遺物

全体として、奈良時代～平安前期の遺物が多く出土し、陶磁器の出土は比較的少なかった。

井戸

175SE010

175SE010 灰褐色土出土遺物 (Fig. 59・60)

須恵器

蓋 c (1～3) ボタン状のツマミを貼付する。1 と 3 のツマミ付近はヘラケズリが確認できる。

蓋 3 (4～11) 口縁端部は僅かに擠んだ程度の断面三角形で、蓋 4 に近い形状をしている。4 は復元口径 20.0 cm、外面上部は回転ヘラケズリである。5・10 は外面上半部が回転ヘラケズリ。6～8 は外面上半部がヘラ切り後ナデ調整。

皿 a (12～14) 復元口径 17.0～17.8 cm、12 は口縁部を若干曲げる。

小坏 a (15) 復元口径 9.4 cm、外面底部は回転ヘラ切り後未調整。その他は回転ナデ。黒灰色を呈する。

坏 a (16、17) 16 は復元口径 13.2 cm で、丸味のある底部である。17 は復元口径 13.5 cm、外面底部は回転ヘラ切りの後簡単なナデ。

碗 a (18、19) 18 は復元口径 15.2 cm、外面下端と底部は回転ヘラケズリ、それ以外は内外面とも回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。19 は、外面底部は回転ヘラ切り後未調整。外面下半は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。焼成良好で、色調は茶灰色を呈する。搬入品か。

坏 c (20～26) 復元高台径 7.4～10.4 cm、20 の体部は直線的に外反する。25 は低い高台を貼付し、外面底部はヘラ切り後未調整。

壺 (27) 体部の外面は格子状の叩きの後回転ナデか、内面は同心円の当て具の後回転ナデ。

小壺 (28、29) 28 は内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色を呈する。29 は復元底径 6.4 cm、外面底部が回転ヘラ切りで、外面下端は回転ヘラケズリである。

土師器

蓋 (30) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は薄黄茶色を呈する。

坏 a (31) 全体的に摩滅するが、外面底部は回転ヘラケズリである。色調は薄茶色を呈する。

皿 a (32) 復元口径 17.1 cm、底部は回転ヘラ切りだが、摩滅し調整不明。

坏 a もしくは坏 d (33) 復元口径 13.5 cm、摩滅が目立ち調整不明。色調は鈍い橙色を呈する。

碗 c (34、35) 復元高台径 8.3 cm と 9.0 cm、色調は鈍い橙色を呈する。

高坏 (36) 復元口径 18.0 cm、内外面とも摩滅するが、内面にミガキのような痕跡を残す。

甕 (37～40) 37 は復元口径 19.6 cm、摩滅が目立つが体部外面に僅かにハケ目が残る。38・39 の体部は外面タデハケ、内面ヘラケズリで、口縁部内面はヨコハケ調整。40 は口縁部が摩滅するが、体部は内面ヘラケズリ、外面タデハケ。

小壺 (41) 外面はミガキ、内面は回転ナデ調整。底径 6.1 cm、色調は薄茶色を呈する。

黒色土器

椀 c (42) A 類。全体的に摩滅する。高台は断面三角形の高台を貼付する。復元高台径 7.4 cm。外面の色調は薄茶色を呈する。

製塩土器

煎茶土器 (43) 甕の一部で、外面は叩き、内面は当て具痕が残る。胎土は砂粒を多く含み、暗茶色を呈する。

焼塩壺 (44～46) 44・45 は I 類。内面は布目、外面はナデで、口縁端部を斜めに仕上げる。色調は淡茶色を呈する。44 の胎土には雲母が多く含まれる。46 は II -b 類。外面はナデ、内面は明確ではないがナデ調整か。焼成良好で淡黄茶色を呈する。

灰軸陶器

壺 (47) 胎土は微細な砂粒や黒色粒を含み、淡灰色を呈する。内面は回転ナデの後施軸する。外面は回転ヘラケズリもしくはナデ調整の後施軸する。軸は緑灰色で透明度がある。

石製品

用途不明製品 (48) 現存長 6.2 cm で、表面をはじめ欠損が目立つが、くびれるように仕上げる。

砥石 (49) 大きさは 21.3 cm、断面 11.4×9.0 cm。使用面は 3 面で、敲打痕もみられる。砂岩製。

175SE010 明黒色土出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

蓋 3 (50、51) 50 は外面上半部が回転ヘラ切り後未調整。口縁端部は僅かに擠まむ程度。重ね焼痕が残る。51 は外面上半部が回転ヘラ切り。

坏 a (52) 底部は回転ヘラ切り後未調整。復元底径 9.4 cm。

壺 (53) 復元高台径 13.0 cm。外面はヘラケズリ、内面は強いナデ調整、底部はナデ。色調は外面が暗灰茶色、内面と断面は橙茶色を呈する。

土師器

皿 a (54) 口径 15.2 cm。底部は回転ヘラ切り後未調整。内外面とも回転ナデ調整。

坏 d (55、56) 2 点とも内面にはミガキが残り。外面は下半が回転ヘラケズリで、その他は回転ナデ。55 は口径 13.3 cm。56 は底径 6.6 cm。

甕 (57) 口縁部は内面ヘラケズリで、体部は外面タテハケ、内面ヘラケズリ。

175SE010 淡灰褐色土出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

蓋 3 (58～62) 口縁端部は僅かに擠まみ出した程度である。

坏 c (63～67) 底部には潰れたりした貧弱な高台を貼付する。63 は復元口径 13.4 cm。66 の底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。67 の底部は回転ヘラ切り後未調整。

壺 (68) 復元口径 11.8 cm。内外面とも回転ナデ調整。

土師器

甕 (69) 口縁部を肥厚させる。内面はヘラケズリ、外面はナデ調整か。

175SE010 暗灰色土出土遺物 (Fig. 61)

須恵器

蓋 3 (1～7) 口縁端部を僅かに擠まむ程度である。1 は復元口径 14.2 cm。2 は復元口径 17.6 cm。4 は外面上半部が回転ヘラケズリ。5 は外面上半部が回転ヘラ切り後簡単なナデ調整。それ以外はヘラ切り後未調整。

蓋 4 (8) 口縁端部内面に沈線が巡る。外面上部は回転ヘラ切り後未調整。

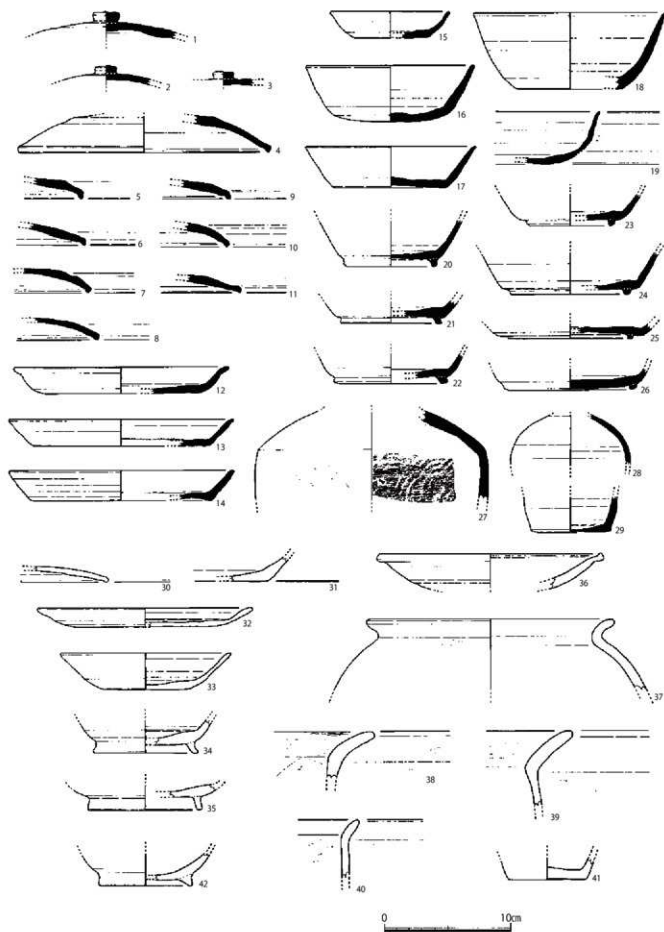
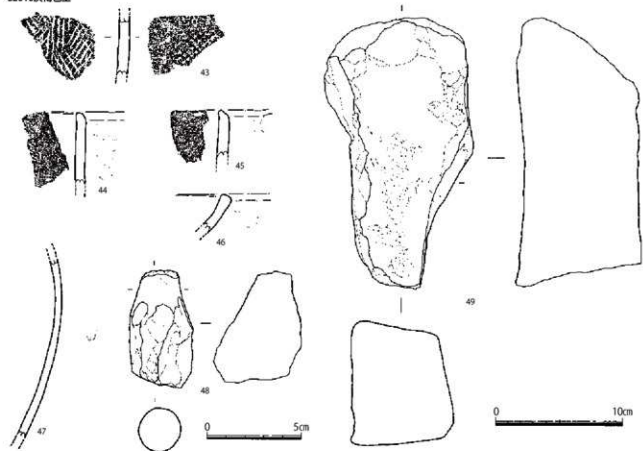
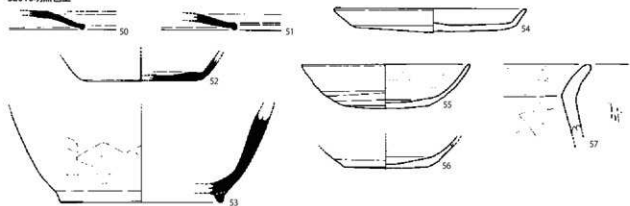


Fig. 59 175SE010 灰褐色土出土遺物実測図① (1/3)

SE010灰褐色土



SE010明黑色土



SE010淡灰褐色土

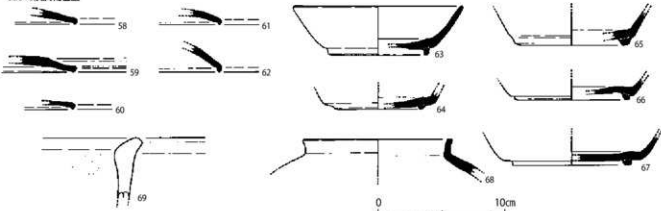


Fig. 60 175SE010 灰褐色土②、明黑色土、淡灰褐色土出土遗物实测图 (1/3, 48 是 1/2)

蓋 c4 (9) 復元口径 14.2 cm。外面上半部は回転ヘラ切り後未調整。
坏 c (10, 11) 10 は復元口径 7.0 cm。底部はヘラ切り後未調整。11 は潰れた高台を貼付する。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整か。
皿 a (12 ~ 14) 12 は復元口径 13.8 cm。底部はヘラ切り後未調整。13 は還元やや不良で、色調は白灰色を呈する。底部はヘラ切り後未調整。14 は若干丸味のある体部で、底部はヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデ調整。

土師器

蓋 3 (15) 内外面ともミガキ a を施す。
坏 a (16) 口径 13.3 cm。やや丸味のある底部で、外面下半は回転ヘラケズリである。色調は淡橙黄色を呈する。
大坏 a (17) 丸底坏のような形状をなす。底部外面は回転ヘラ切り後ヘラケズリか。色調は橙黄色を呈する。口径 17.4 cm。
皿 a (18) 復元口径 16.2 cm。外面底部は回転ヘラケズリ。色調は橙黄色を呈する。
碗 c (19) やや細い高台を貼付する。復元高台径 9.2 cm。色調は橙色を呈する。
甕 (20 ~ 24) 全て口縁部内面はヨコハケ、体部は内面がヘラケズリ、外面がタテハケである。20 は復元口径 24.0 cm。21 は復元口径 24.0 cm。

175SE010 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 61)

須恵器

蓋 c (25, 26) 2 点ともボタン状のツマミを貼付する。
蓋 3 (27, 28) 2 点とも重ね焼きのため、口縁部は暗灰色を呈する。
坏 a (29, 30) 29 は底部がヘラ切り後未調整。30 は丸味のある底部で、回転ヘラケズリである。色調は白茶色を呈する。

175SE050

175SE050 黒灰色土出土遺物 (Fig. 62)

須恵器

蓋 3 (1) 口縁端部を僅かに擴まんている。
蓋 4 (2) 口縁端部は擴むことなく、回転ナデである。
坏 a (3) 復元底径 8.2 cm。
坏 c (4 ~ 6) 4 は口径 12.3 cm。胎土は白色砂粒を多く含む。外面底部には墨書が一字あるが内容は明確ではない。5 は低い高台を貼付する。復元口径 16.0 cm。底部外面にはヘラ記号が施されている。6 は低い断面方形の高台を貼付する。

土師器

蓋 3 (7) 内外面ともヨコナデである。色調は暗黄色を呈する。
坏 d (8 ~ 10) 復元口径 14.0 ~ 15.2 cm。外面下半から底部は回転ヘラケズリ。色調は橙黄色を呈する。
甕 (11 ~ 14) 全て体部内面ヘラケズリ、外面タテハケ、口縁部内面はヨコハケである。11 は復元口径 27.0 cm。12 は復元口径 14.8 cm。

黒色土器

皿 (15) B 類。胎土は淡橙色を呈し、内外面ともミガキ c を施す。

製塩土器

焼塩甕 (16, 17) I 類。胎土は白色砂粒を多く含み、淡橙色を呈する。16 は内面が摩滅するが、外

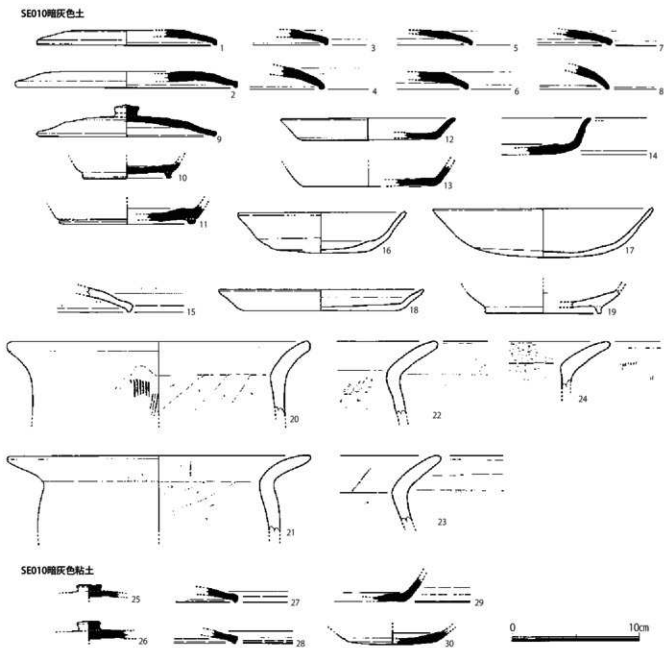


Fig. 61 175SE010 暗灰色土・暗灰色粘土出土遺物実測図 (1/3)

面は指頭圧痕が残る。17 は外面指頭圧痕、内面は細かい布目痕を残す。

石製品

砥石 (18) 平坦な砂岩を利用し、使用面は主に1面である。

175SE050 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 62)

土師器

坏 d (19) 口径 16.0 cm、器高 3.9 cm、底径 8.7 cm。内外面とも摩滅し調整不明瞭だが、底部は回転ヘラケズリが残る。色調は暗褐色を呈する。

木製品

櫛 (20) 幅 3.9 cm、厚さ 0.7 cm。両端を欠損する。

曲物底板 (21) 円形板であるが半分欠損、復元径は 16 cm 程である。厚さ 0.65 ~ 0.75 cm。側面部には木釘孔が 2ヶ所確認できる。

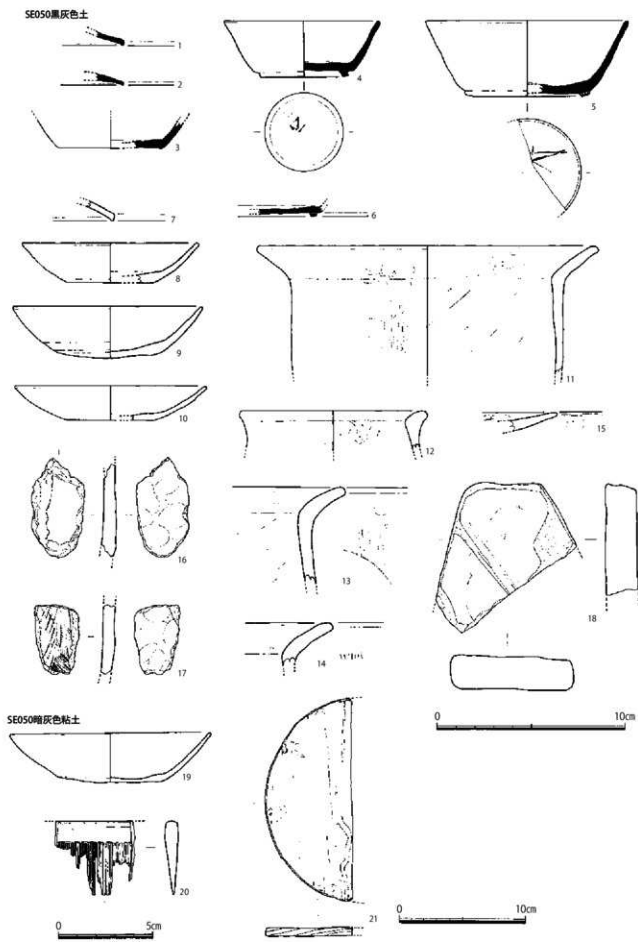


Fig. 62 175SE050 黒灰色土・暗灰色粘土出土遺物実測図 (1/3、18・20は1/2)

175SE060

175SE060 最上層出土遺物 (Fig. 63)

須恵器

鉢 (1) 内外面ヨコナデで、口縁部は肥厚させる。胎土は微細な黒色粒を多く含み、色調は白灰色を呈する。籾窯。

土師器

小皿 a (2~4) 復元口径 9.4~10.8 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。3の底部には焼成後に円孔を穿っている。

丸底坏 a (5) 復元口径 17.6 cm。

石製品

石鍋 (6) 外面には瘤状の把手を削り出し、周辺には煤が付着する。滑石製。

175SE060 黒灰色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

小皿 a (7~12) 復元口径 9.5~10.6 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。

石製品

叩き石 (13) 両面に使用痕があり、片面には研磨痕、もう片面には僅かな研磨痕と叩き痕が残る。現存長 10.1 cm、幅 6.5 cm、厚さ 2.7 cm。

175SE060 炭灰色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

小皿 a (14~19) 口径 9.6~11.0 cm。底部切り離しは回転ヘラケズリである。

小皿 a2 (20, 21) 20は復元口径 10.6 cm。口縁端部はやや抉り込んでいる。21は復元口径 10.8 cm。口縁端部には僅かに浅い沈線が巡る。

丸底坏 a (22~25) 復元口径 14.6~15.6 cm。内面はミガキ b で一部コテ当て痕が確認できる。

鍋 (26) 復元口径 38.0 cm。胎土は 0.5 cm 以下の砂粒を多く含み、焼成良好で色調は灰茶色を呈する。外面下半はナデ、その他はヨコナデだが、上半部は工具によるナデがみられ、内面下半は使用により摩滅する。外面は全面煤が付着する。

黒色土器

椀 c (27) B 類。口径 15.0 cm。全体的に摩滅するが、内外面とも丁寧なミガキを施す。

緑釉陶器

椀 (28) 須恵質で、光沢のある暗緑灰色釉を薄く施す。

土製品

土鐘 (29) 長さ 4.8 cm、径 1.05 cm。胎土は雲母を多く含み、色調は暗黄橙色を呈する。

石製品

叩き石 (30) 大きさ 9.0×8.8 cm、厚さ 4.7 cm。部分的に研磨面があり、側面部に若干叩き痕が残る。

175SE060 灰色粘土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (1) 復元口径 10.1 cm。底部切り離しは回転ヘラケズリ。

小皿 a2 (2) 復元口径 9.0 cm。底部切り離しは回転ヘラケズリで、板状圧痕が残る。口縁端部には僅かに沈線が巡る。

丸底坏 a (3) 復元口径 14.7 cm。内面にはミガキ b を施す。

鍋 (4) 口縁端部を丸く外反させる。外面には部分的に煤が付着する。

石製品

台石 (5) 厚さ 8.0 cm。片面には煤が付着する。花崗岩製。

石鍋 (6) 底部付近で、内外面ともケズリ調整する。外面には煤が付着する。滑石製。

175SE060 黒色粘土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

甕 (7) 復元口径 32.2 cm。口縁部はヨコナデ、体部は縦ナデで、内外面に煤のような黒色付着物がみられる。

黒色土器

椀 (8) B 類。復元口径 15.2 cm。内外面ミガキ c を施す。

椀 c (9) B 類。ハ字形の高台で、高台径 6.9 cm。外面は回転ナデで、内面底部にはミガキ c が施される。

瓦器

椀 c (10) 口径 16.0 cm。内外面ミガキ c で、焼成具合が黒色土器か瓦器かの判断が難しい。

石製品

石鍋 (11) 内外面ともケズリ成形され、外面には煤が厚く付着する。滑石製。

175SE060 灰色砂土出土遺物 (Fig. 65)

土師器

小皿 a (1、2) 復元口径 10.0 cm と 10.4 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

丸底坏 c (3) 口径 15.0 cm。内面は摩滅し調整不明、外面はナデ。底部には外開きの高台を貼付する。

黒色土器

椀 c (4) A 類。高台径 7.0 cm。内外面ともミガキ c だが、内面は黒色化するが摩滅が目立つ。

175SE060 灰褐色土出土遺物 (Fig. 65)

土師器

小皿 a (5～7) 復元口径 9.7～10.1 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。7 の底部には径 0.8 cm 程の円孔が、焼成前に穿たれている。

丸底坏 a (8～10) 復元口径 14.0～16.3 cm。内面にはミガキ b が施され、10 の外面中位には指頭圧痕が明瞭に残る。

甕 (11) 復元口径 36.8 cm。内外面ともヨコナデで、外面にはうっすらと僅かに煤が付着する。

黒色土器

椀 c (12) B 類。復元口径 14.8 cm。内外面にミガキ c を施す。

土製品

輪羽口 (13) 小片で、内外面はナデ調整され、外面は被熱で変色する。

175SE060 茶褐色粗砂出土遺物 (Fig. 65)

須恵器

鉢 (14) 復元底径 9.8 cm。胎土は微細な黒色粒を多く含み、灰白色を呈する。底部は回転糸切りである。体部内外面はヨコナデ調整で、内面は使用により平滑である。篠窯。

土師器

小皿 a (15～19) 復元口径 9.2～10.6 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

椀 (20) 復元口径 13.4 cm。体部中位を僅かに屈曲される。口縁部内外面は回転ナデである。

椀 c (21) ハ字形に開く高台を貼付する。高台径 7.7 cm。内外面とも摩滅し調整不明瞭。

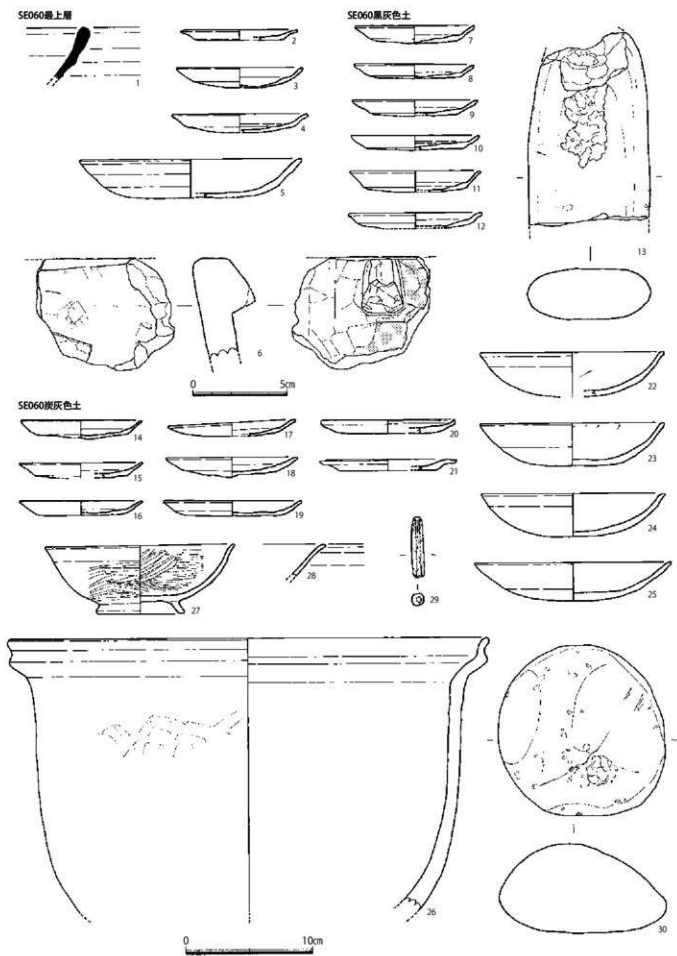


Fig. 63 175SE060 最上層・黒灰色土・炭灰色土出土遺物実測図 (1/3、右製品は1/2)

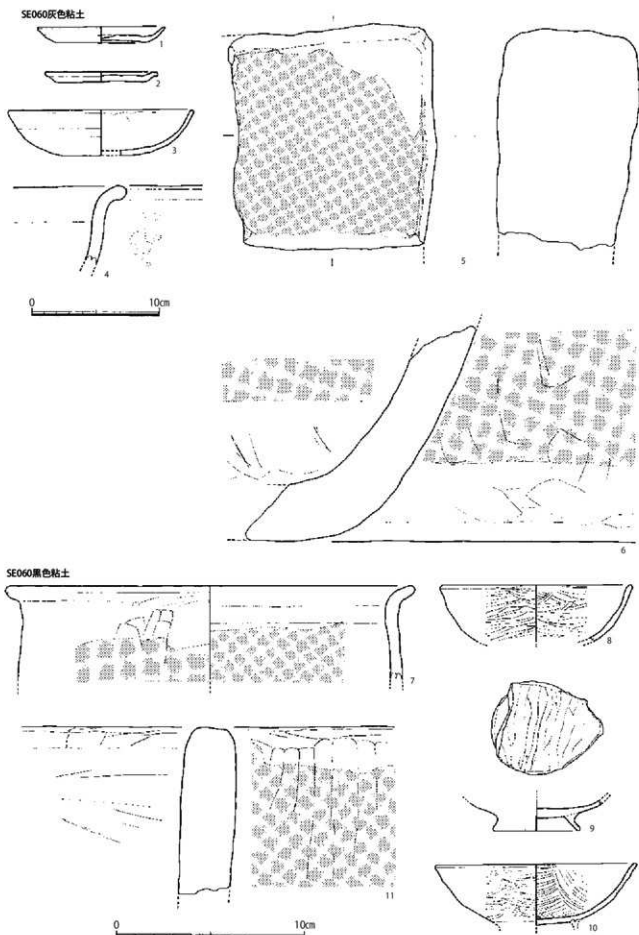


Fig. 64 175SE060 灰色粘土・黒色粘土出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

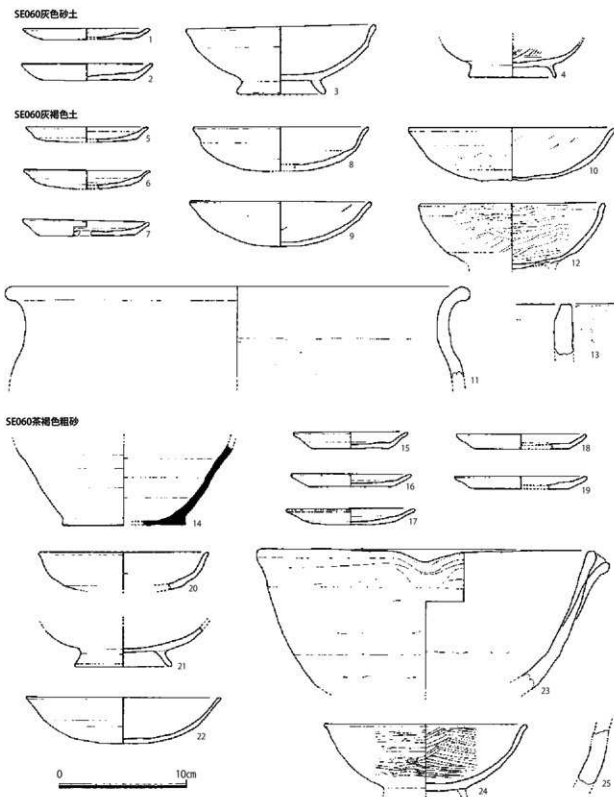


Fig. 65 175SE060 灰色砂土・灰褐色土・茶褐色粗砂出土遺物実測図 (1/3)

丸底坏 a (22) 復元口径 15.4 cm。口縁端部は若干平坦に仕上げる。

鉢 (23) 片口の鉢で、復元口径 26.8 cm。内外面ヨコナデで、内外面に粘土細痕が僅かに確認できる。

黒色土器

碗 c (24) B 類。復元口径 16.1 cm。内外面とも丁寧なミガキを施す。口縁端部は僅かに外反させる。

縄文土器

鉢 (25) 胎土は0.3 cm以下の白色砂粒や灰色砂粒を多く含み、色調は灰褐色を呈する。内面は摩滅するが、外面はナデ調整である。

175SE080 暗灰色土出土遺物 (Fig. 66)

須恵器

蓋 c3 (1) 上半部は回転ヘラ切り後未調整。

蓋 3 (2~4) 2は復元口径14.6 cm。外面上半部は回転ヘラケズリ。3・4の残存範囲は回転ナデ調整。

坏 a (5) 復元底径8.6 cm。底部は回転ヘラ切り後未調整。

坏 c (6) 低い高台を貼付する。

碗 c (7,8) 7は内面にヘラ記号を施す。色調は淡褐色を呈する。8は小片で、色調は灰黄色を呈する。

175SE090

175SE090 淡黒灰色土出土遺物 (Fig. 66)

土師器

小皿 a (9~11) 全体的に小片だが、体部中に若干屈曲がある。口径は小さく、坏と小皿の区別が難しい時期のものとみられる。

碗 c (12~14) 12は復元口径11.0 cm。内外面ヨコナデ、口縁端部はごく僅かに外反する。13・14は内面ナデ調整。色調は黄白色を呈する。

土製品

トリベ (15) 胎土は少々ササが混じる。口縁部は被熱で黒色に変色し、内面には付着物がみられる。

瓦類

平瓦 (16, 17) 16は縦長格子叩き。17は横長格子叩き。

丸瓦 (18) 横長格子叩き。

瓦玉 (19) 大きさは2.8×2.7 cm、厚さ1.7 cm。

175SE090 灰色土出土遺物 (Fig. 66)

土師器

碗 c (20) 復元高台径6.8 cm。内面ヨコナデ調整。

碗 (21) 体部中に若干屈曲がある。内面ヨコナデ調整。

甕 (22) 内外面は粗いハケで、外面下方には平行叩きを施す。

瓦類

平瓦 (23~27) 23~26は小さな横長格子叩きである。27は縦長の格子叩きである。

丸瓦 (28) 大きさが若干不定形な格子叩きである。

175SE090 暗灰色土出土遺物 (Fig. 66)

瓦類

平瓦 (29) やや小さな斜格子叩き。

175SE095

175SE095 黒灰色土出土遺物 (Fig. 67)

土師器

小皿 a (1, 2) 復元口径9.6 cmと9.8 cm。2の底部切り離しは回転ヘラ切りである。

丸底坏 a (3) 復元口径15.2 cm。内面はミガキ b でコテ当て痕も残る。

土師質土器

鉢 (4) 内外面とも摩滅し調整不明。

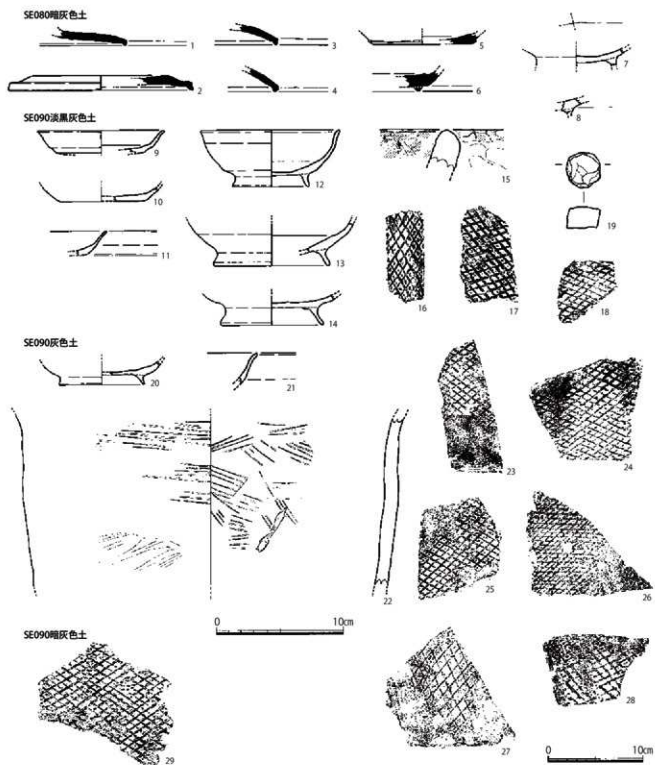


Fig. 66 175SE080・090 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4)

青白磁

蓋 (5) 小片で全形が不明瞭だが、蓋の一部とみられる。内外面とも光沢のある緑灰色釉を施し、細かな貫入が入る。

白磁

皿 (6) 復元口径 11.1 cm、器高 1.5 cm。胎土は灰白色で、外面中位には沈線が巡る。内外面に光沢のある半透明釉を施すが、外面底部は露胎である。口縁部は波打っている。

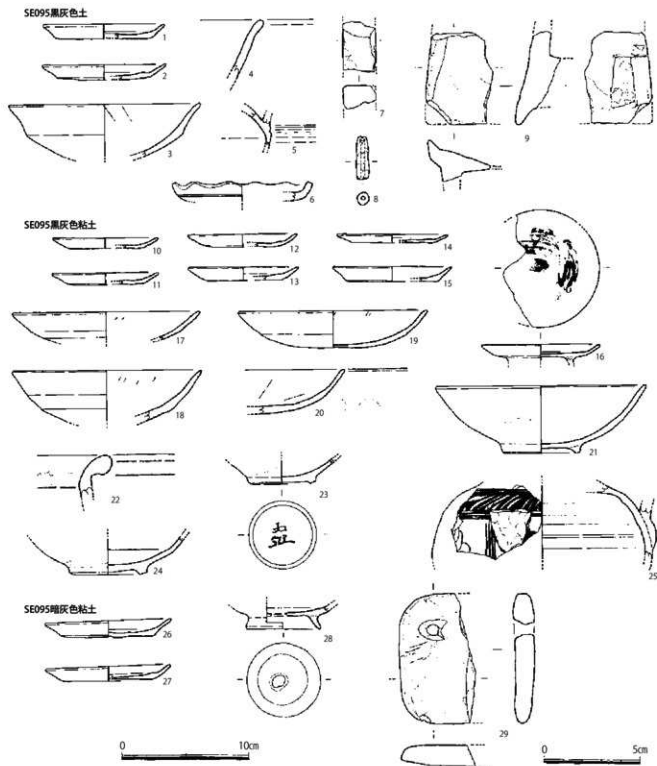


Fig. 67 175SE095 出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

瓦類

埴 (7) 胎土は0.1 cm以下の砂粒を多く含み、灰白色を呈する。内外面ともナデ調整。厚さ2.6 cm。

土製品

土錘 (8) 長さ3.4 cm、径1.0 cm。外面ナデ調整し、中央に穿孔を穿つ。

石製品

風字硯 (9) 陸の下方部分で、一部墨痕が残る。底面には長方形の脚を削り出している。滑石製。

175SE095 黒灰色粘土出土遺物 (Fig. 67)

土師器

小皿 a (10 ~ 15) 復元口径 8.4 ~ 9.4 cm。底部切り離しは 15 が回転糸切りだが、それ以外は回転ヘラ切りである。

小皿 c (16) 復元口径 9.4 cm。内面に墨痕が残る。

丸底杯 a (17 ~ 20) 復元口径 14.2 ~ 15.0 cm。内面はミガキ b でコテ当て痕が残る。

丸底杯 c (21) 復元口径 16.6 cm。口径に対し小さな高台を貼付する。全体的に摩滅し調整不明瞭。色調は淡黄橙色を呈する。

鉢もしくは鍋 (22) 口縁部を丸く曲げる。口縁部以外の内外面に煤が付着する。

白磁

皿 (23, 24) 23 は II -1 類で、底部外面には墨書があるが、文字の内容は不明。24 は XI -3 類。

青白磁

壺もしくは水注 (25) 乳白色の胎土で、内面は回転ナデで露胎、外面全面にヘラ描き文様を施し、淡緑青色釉を施す。把手が欠損し、付け根部分が残る。

175SE095 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 67)

土師器

小皿 a (26, 27) 口径 9.95 cm と 10.0 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。

碗 c (28) 底部には焼成後に孔を穿っている。

石製品

滑石加工品 (29) 幅 6.9 cm、厚さ 1.15 cm の隅丸方形に成形し、径 0.5 cm 程の孔を開けている。滑石製。

175SE110

175SE110 茶褐色粘土出土遺物 (Fig. 68)

須恵器

蓋 3 (1, 2) 2 は外面上半部が回転ヘラ切り後ナデ調整。口縁端部は僅かに摘まん程度である。

杯 c (3, 4) 3 は復元高台径 7.2 cm。4 は復元高台径 11.0 cm。色調は灰色を呈する。

甕 (5) 復元口径 16.8 cm。内外面とも回転ナデ調整。焼成良好で色調は黒褐色を呈する。

175SE110 黄褐色粘土出土遺物 (Fig. 68)

須恵器

杯 c (6) 復元高台径 9.6 cm。

土師器

皿 a (7) 復元口径 18.6 cm。内外面とも摩滅し調整不明。色調は淡橙色を呈する。

大碗 c (8) 復元口径 17.9 cm。内外面ミガキ a だが、外面は摩滅と汚れでミガキが見えづらい。

175SE110 灰褐色粘土出土遺物 (Fig. 68)

須恵器

蓋 3 (9, 10) 9 は復元口径 17.6 cm。外面上半部は回転ヘラケズリである。

杯 a (11) 復元底径 6.6 cm。色調は黒褐色で、断面部が茶褐色を呈する。

杯 c (12) 口径 12.6 cm。やや潰れた高台を貼付する。

土師器

蓋 c (13) 口径 18.6 cm。口縁端部内面は浅い沈線が巡る。外面上半部は回転ヘラケズリだが摩滅が目立つ。

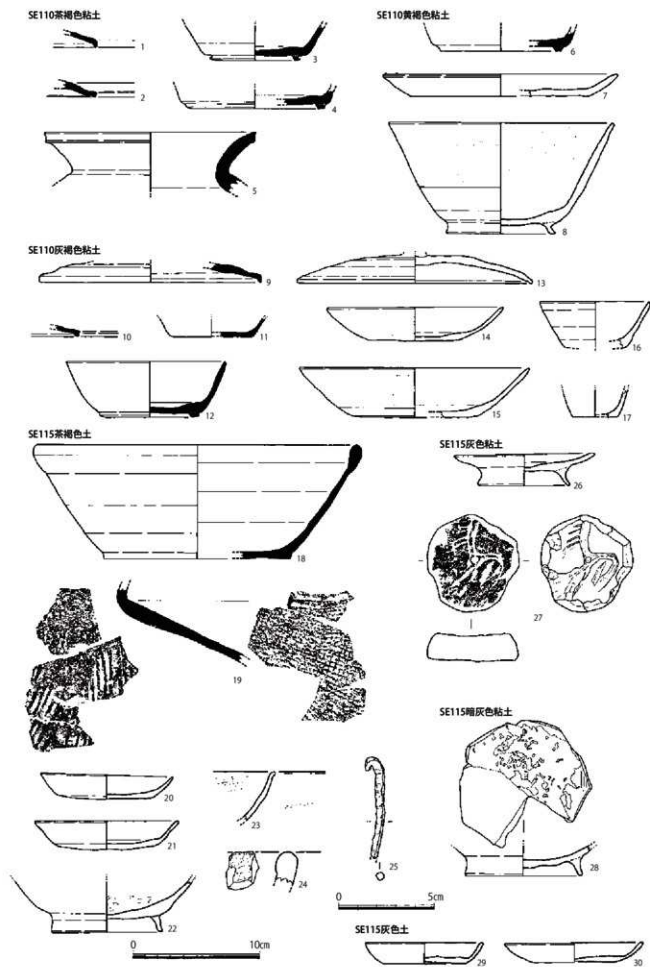


Fig. 68 175SE110・115 出土遺物実測図 (1/3、25・27 は 1/2)

坏 d (14, 15) 内外面ともミガキ a で、底部外面は回転ヘラケズリである。14 は口径 14.0 cm, 15 は復元口径 18.2 cm。色調は淡橙色を呈する。

坏 e (16) 復元口径 8.8 cm。内外面とも回転ナデにみえるが、外面はミガキ a か。

小壺 (17) 復元底径 3.6 cm。摩滅が目立つが、底部外面はナデ調整。色調は橙色を呈する。

175SE115

175SE115 茶褐色土出土遺物 (Fig. 68)

須恵器

鉢 (18) 復元口径 26.0 cm、器高 9.0 cm、復元底径 14.8 cm。胎土は微細な黒色粒を多く含み、色調は灰色を呈する。底部外面は回転糸切りである。内外面とも回転ナデで、内面底部は使用により平滑となる。

甕 (19) 胎土は白色砂粒を多く含み、色調は灰色を呈する。外面に小さな格子叩き、内面には棒状の当て具とみられる痕跡がみられる。

土師器

小皿 a (20, 21) 底部切り離しは回転ヘラ切り。口径は、20 が 10.5 cm, 21 は 11.4 cm。

黒色土器

椀 c (22) A 類。復元高台径 8.8 cm。外面はヨコナデ、内面はミガキ c を施す。

椀 (23) B 類。内外面ともミガキ c を施す。

土製品

トリペ (24) 内面は溶解し、緑黄色の付着物がみられる。

金属製品

鉄釘 (25) 頭部を折り曲げ、先端部を欠損する。現存長 5.4 cm。

175SE115 灰色粘土出土遺物 (Fig. 68)

土師器

小皿 c (26) 口径 11.2 cm。

石製品

滑石加工品 (27) 大きさ 5.1×4.8 cm、厚さ 1.4 cm。中央に 0.3 cm 程の穴を彫り、それを中心に線刻がみられるが、文様構成は不明瞭である。滑石製。

175SE115 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 68)

黒色土器

椀 c (28) A 類。復元高台径 9.3 cm。内面にうっすらと付着物がみられる。埋没時のものか。

175SE115 灰色土出土遺物 (Fig. 68)

土師器

小皿 a (29, 30) 口径 9.3 cm と 11.0 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

175SE120

175SE120 暗灰色土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

小皿 a (1, 2) 復元口径 10.0 cm と 10.2 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

小皿 a2 (3) 口縁端部内面には僅かに沈線が巡る。

丸底坏 a (4) 復元口径 16.2 cm。

朝鮮系無軸陶器

甕 (5) 内面は強いヨコナデ、外面はヨコナデ。底部は切り離し後未調整。焼成良好で焼成は黒灰色、断面が赤茶色を呈する。

白磁

椀 (6) 胎土は微細な黒色粒を多く含み、外面にはヘラ描き、内面底部には櫛やヘラによる草花文が施されている。高台内面は露胎である。

石製品

磨り石 (7) 径 8.4 cmほどの円形で、片面が研磨される。

175SE120 黒灰色粘土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

小甕 (8) 復元口径 12.6 cm。外面は摩擦するが、内面はヘラケズリである。

瓦器

椀 (9) 内外面ともミガキ c で、色調は灰色を呈する。

須恵質土器

甕 (10) 内外面とも回転ナデの後、内面は斜め方向のナデ調整、外面はナデ調整。底部外面はヘラ切り後ナデ調整か。

175SE120 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

丸底坏 (11) 内面はヨコナデの後ミガキ b である。

175SE125

175SE125 灰色土出土遺物 (Fig. 69)

灰軸陶器

蓋もしくは高坏 (12) 端部を折り曲げている。胎土は焼成良好で淡灰色を呈し、うっすらと釉がかかる。

175SE125 暗灰色土出土遺物 (Fig. 69)

土師器

小皿 a2 (13) 口縁部を大きく窪ませている。

丸底坏 a (14, 15) 口縁端部は若干外反させる。外面下半には底部押し出しの指頭圧痕が明瞭に残る。14 は口径 13.7 cm。15 は復元口径 16.2 cm。内面から外面上部にかけて煤が厚く付着する。

須恵質土器

鉢 (16) 小片で形状がやや不明確で、口縁端部が断面三角形に肥厚させる。東播系。

金属製品

用途不明金具 (17) 大きさ 1.2×1.05 cm、厚さ 0.5～0.8 cm の方形リングである。銅製品で表面は緑青がみられる。

棒状銅製品 (18) 現存長 5.2 cm、断面 0.45×0.45 cm。

石製品

砥石 (19) 小片だが研磨面があり砥石と推測される。

175SE125 灰色粘土出土遺物 (Fig. 69)

黒色土器

椀 c (20) B 類。高台径 6.7 cm。内面底部には丁寧なミガキ c を施す。

175SE130

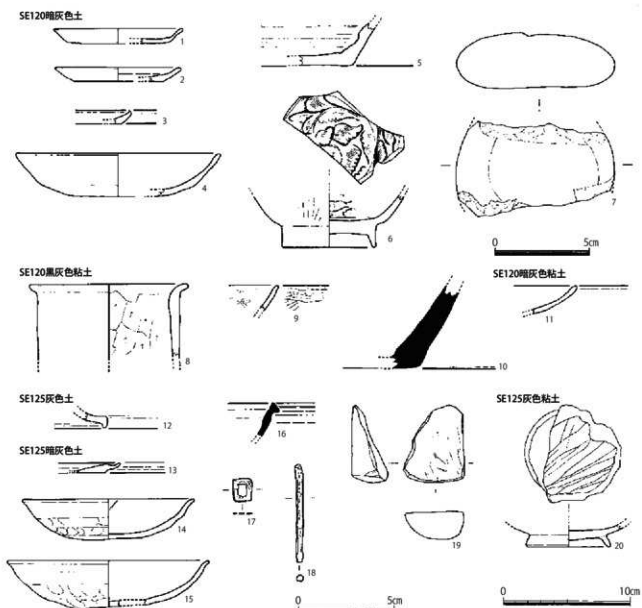


Fig. 69 175SE120・125 出土遺物実測図 (1/3、金属製品・石製品は1/2)

175SE130 灰褐色土出土遺物 (Fig. 70)

須恵器

蓋 3 (1~3) 1・3の口縁端部は強めにツمامし出している。2は端部を僅かに摘まんでいる。

坏 c (4~6) 4は口径 11.1 cm。高台はやや貧弱である。5は復元高台径 9.8 cm。還元不良で灰橙茶色を呈する。

甕 (7~10) 7は復元口径 24.4 cm。体部外面は平行叩き、内面は同心円の当て具痕。8~10は頸部から口縁部の破片で、回転ナデ調整される。

壺 (11~13) 11は胎土がやや粗いが焼成良好で暗青灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。12は高台径 10.7 cm。色調は灰白色を呈する。13は底径 11.8 cm。体部外面下半は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整。焼成還元不良で、色調は淡灰色で、内面は薄橙灰色を呈する。

土師器

皿 c (14) 復元高台径 13.0 cm。胎土は茶色粒や白色粒を含み、色調は薄橙色を呈する。

甕 (15) 口径 28.1 cm。体部外面は細かいタテハケだが、上部ほど摩滅が目立つ。内面はヘラケズリ

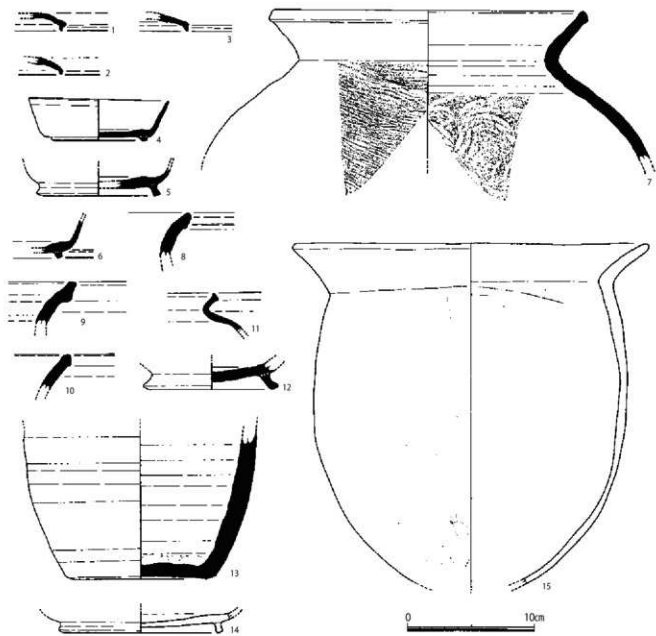


Fig. 70 175SE130 灰褐色土出土遺物実測図 (1/3)

で口縁部共々摩滅が著しい。

175SE130 灰色土出土遺物 (Fig. 71)

須恵器

蓋 c (1) 潰れたツマミを貼付する。

坏 c (2～5) 2は復元高台径 6.2 cm。焼成良好で青灰色を呈する。3～5はやや不定形な高台を貼付する。

甕 (6～9) 6は復元口径 25.0 cm。外面は灰被りする。色調は灰色や暗灰色を呈する。7は復元口径 12.0 cm。9は外面に波状文を施す。

高坏 b (10) 復元口径 30.4 cm。外面下半は回転ヘラケズリで、それ以外は回転ナデ。内面は灰被りである。

土師器

皿 (11) 口縁端部を僅かに外反させる。内外面ミガキ a で、色調は赤橙色を呈する。

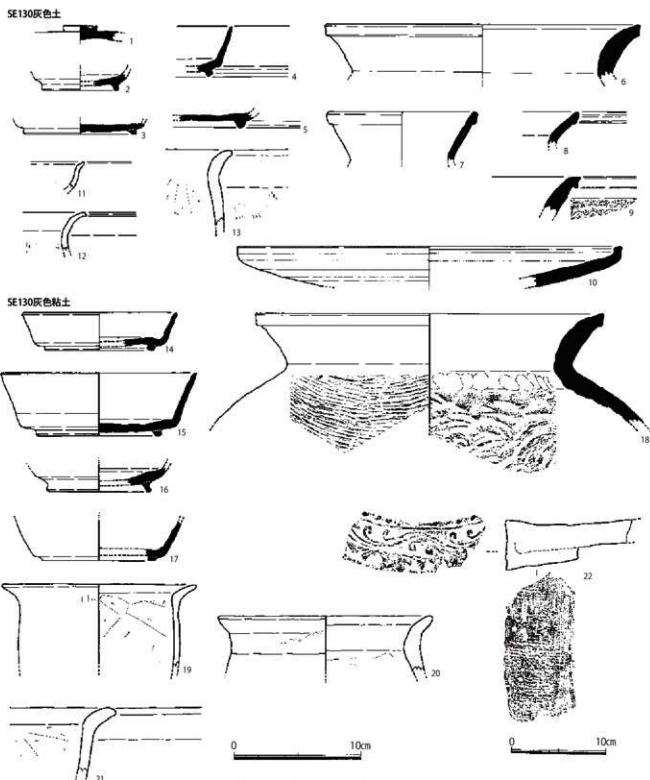


Fig. 71 175SE0130 灰色土・灰色粘土出土遺物実測図 (1/3, 22は1/4)

甕 (12, 13) 12は丸味にある頸部で、内外面ヨコナデで、内面下半は工具ナデである。13の体部外面はタテハケ、内面ヘラケズリである。

175SE0130 灰色粘土出土遺物 (Fig. 71)

須恵器

坏c (14～17) 16以外平坦な底部にやや低い高台を貼付する。

甕 (18) 復元口径27.6 cm。体部外面は平行叩き、内面は同心円叩きを施す。

土師器

甕(19～21) 3点とも体部内面はヘラケズリだが、外面は摩擦で調整不明瞭。19は復元口径15.4 cm。口縁部下に煤が付着する。20は復元口径17.0 cm。口縁部内面に煤が付着する。

瓦類

軒平瓦(22) 扁行唐草文で、上外区が珠文、下外区には鋸歯文が並ぶが、全体的に范が上手くとれていない。

土坑

175SK015

175SK015 黒色土出土遺物 (Fig. 72・73)

須恵器

壺蓋(1) 外面上部は回転ヘラケズリで、擬宝珠を貼付する。内面天井部はナデ、それ以外は回転ナデ調整。復元口径12.6 cm。

蓋c(2) 外面上部は回転ヘラケズリで、断面逆台形のツツミを貼付する。

蓋3(3～12) 口縁部は僅かに擴まんだ程度の断面三角形を呈する。口縁部には重ね焼きによる変色が多くみられる。3は復元口径17.4 cm。胎土には白色砂粒が多く含まれている。4の外面上半部は回転ヘラ切り後回転ナデ調整。5・6は回転ヘラ切り後簡単なナデ調整。11の外面上半部は回転ヘラ切り後未調整。

蓋4(13) 復元口径16.2 cm。外面上半部は回転ヘラ切り後未調整。蓋3に近いが、端部は周囲と一緒にナデられている。

皿a(14～16) 復元口径16.9～17.6 cm。外面底部は、14が回転ヘラ切り後未調整。15・16は回転ヘラ切り後簡単なナデ調整。色調は暗灰色や灰色を呈する。

坏c(17～27) 高台はやや小さな断面方形や潰れた形状でやや貧弱である。復元口径12.8～16.0 cm。25は内面に漆が付着する。

土師器

蓋c(28) 摩擦し調整不明。

蓋(29) 29は復元口径17.6 cm。外面上半部は回転ヘラケズリ。色調は薄茶色を呈する。

大蓋(30) 内外面ともミガキaである。色調は暗茶灰色を呈する。

坏d(31～35) 内外面ともミガキaだが、33・34は摩擦が目立つ。35は口径18.6 cm。内面はミガキa、外面下半は回転ヘラケズリ。

皿a(36) 復元口径18.4 cm。体部はミガキaがあるが摩擦する。

椀c(37～43) 復元高台径6.0～8.0 cm。43は底部を平坦にするが、それ以外はやや丸味のある底部をなす。全体的に摩擦するが、27の内面はミガキか。

甕(44～46) 44は復元口径26.4 cm。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。口縁部は摩擦する。45は復元口径14.4 cm。口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。46は口縁部内面ヨコハケ、体部内面はヘラケズリ。外面は摩擦し調整不明。

製塩土器

焼塩壺(47～54) 47～49はI類。外面は指頭圧痕が残る、47の内面は細かい布目。48・49の内面は粗い布目である。50はII-a類。内面には拓本でも採取できない細かい布目が残る。51～54はII-b類。内外面ともナデ調整。52は口径14.0 cm。内面には工具痕が残る。色調は全て淡茶色を呈する。

175SK015 黒灰色粘土出土遺物 (Fig. 73・74)

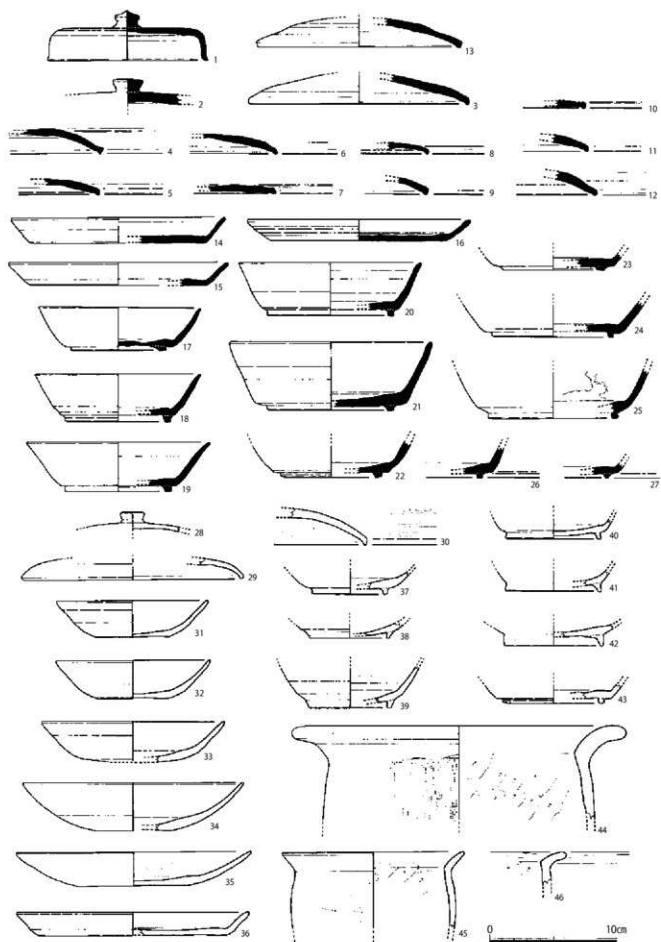
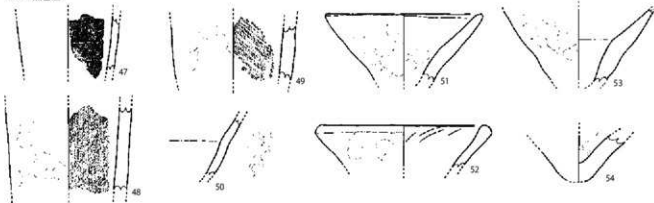


Fig. 72 175SK015 黑色土出土遺物実測図① (1/3)

SK015黑色土



SK015黑灰色粘土

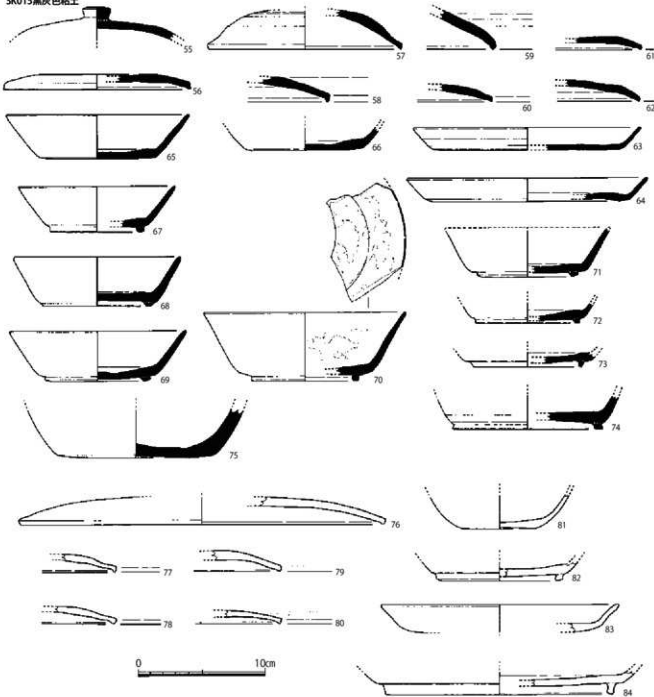


Fig. 73 175SK015 黑色土②・黑灰色粘土①出土遺物実測図 (1/3)

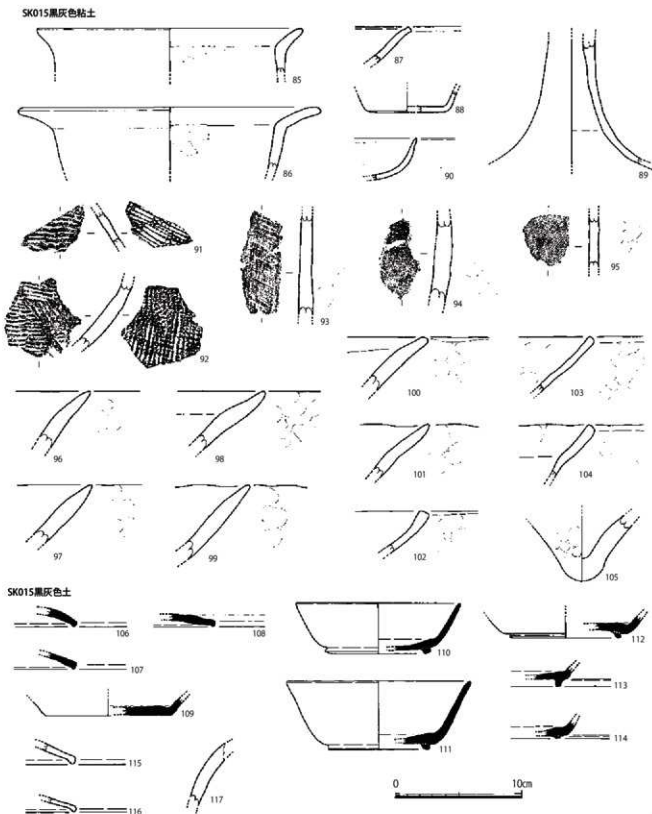


Fig. 74 175SK015 黒灰色粘土②・黒灰色土出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

蓋 c (55) 外面は回転ヘラ切り後未調整。

蓋 a3 (56) 復元口径 14.8 cm。外面上部は全て回転ナデである。

蓋 3 (57 ~ 62) 57・58 の端部は小さく断面三角形を呈する。59 ~ 62 は口縁端部を若干擴まんいで

るが、蓋4の形状に近い。57・59の外面上半部は回転ヘラケズリである。

皿a(63, 64) 63は復元口径18.0cm。復元口径19.0cm。底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整。

坏a(65, 66) 65は復元口径14.4cm。体部は直線的な外開きである。色調は灰色を呈する。66は底径9.3cm。色調は灰白色を呈する。

坏c(67～74) 復元口径12.4～14.0cm。体部は直線的に開く。底部には小さく潰れたような貧弱な高台を貼付する。70は内面に漆が付着する。

壺(75) 体部外面から底部にかけて回転ヘラケズリ、内面は回転ナデである。復元底径12.4cm。

土師器

大蓋3(76) 復元口径29.0cm。内外面とも摩滅し調整不明。色調は橙黄色を呈する。

蓋3(77～80) 80には内外面にミガキaが残るが、それ以外は摩滅し調整不明。色調は橙黄色を呈する。

坏d(81) 摩滅が目立つが、外面底部は回転ヘラケズリ、内面はミガキaか。色調は淡橙色を呈する。

椀c(82) 復元高台径10.0cm。内面摩滅するが、外面底部は回転ヘラ切りである。色調は黄灰色を呈する。

皿a(83) 復元口径18.8cm。内外面とも摩滅し調整不明。色調は橙黄色を呈する。

大皿c(84) 復元高台径18.0cm。

甕(85, 86) 85は復元口径21.0cm。体部は外面タテハケ、内面はヘラケズリである。86は復元口径24.0cmで、体部は歪らない。摩滅が目立ち、体部内面はヘラケズリである。

鉢もしくは皿(87) 小片で器種が明確でない。内外面とも摩滅し調整不明。色調は橙黄色を呈する。

小壺(88) 復元底径6.4cm。外面底部は回転ヘラケズリ、体部はヨコナデか。色調は橙黄色を呈する。

高坏(89) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は橙黄色を呈する。

黒色土器

椀(90) A類。内外面ともミガキcだが、単位は不明瞭である。

製塩土器

煎煎土器(91, 92) 胎土は白色砂粒を僅かに含み、内面は当て具痕、外面叩き痕が残る。

焼塩壺(93～105) 93～95はI類。内面に布目、外面は指頭圧痕が残る。調整良好で暗橙色を呈する。

96～105はII-b類。内外面ともナデ調整で、摩滅が目立つが、外面に指頭圧痕が残るが、色調は暗橙色を呈する。

175SK015 黒灰色土出土遺物 (Fig. 74)

須恵器

蓋3(106～108) 口縁端部は僅かに摘まんだ程度で、断面は丸味のある三角形を呈する。

坏a(109) 底部外面は回転ヘラ切りの後雑なナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

坏c(110～114) 色調は暗灰色を呈する。112・114の高台は潰れている。

土師器

蓋3(115, 116) 外面は摩滅するが、内面は回転ナデ調整。色調は淡橙黄色を呈する。

製塩土器

焼塩壺(117) II類。内外面の調整は不明で、内面は淡灰色に溶解している。

175SK020 出土遺物 (Fig. 75)

土師器

小皿a(1～4) 復元口径10.0～11.0cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。4は口縁部に煤が付着する。

九底坏a(5～13) 復元口径14.9～16.6cm。摩滅が目立ち、僅かにミガキbが確認できる。

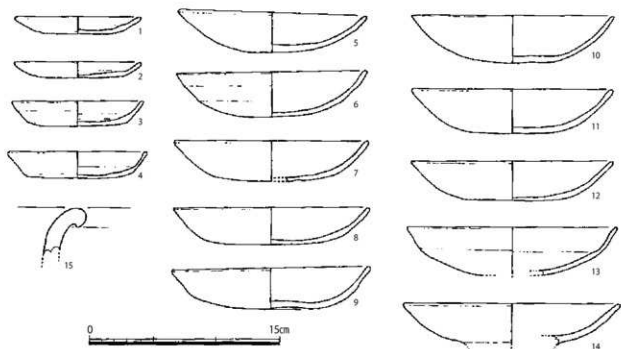


Fig. 75 175SK020 出土遺物実測図 (1/3)

丸底杯 c (14) 復元口径 17.2 cm。坏部はあまり深みがない。内外面とも摩滅し調整不明。

土師質土器

甕 (15) 胎土は白色砂粒を多く含み、黄茶色を呈する。口縁端部を折り曲げている。内外面とも摩滅する。

175SK040

175SK040 黒灰色土出土遺物 (Fig. 76・77)

須恵器

蓋 b3 (1) 口径 18.4 cm、器高 2.9 cm。還元やや不良だが、造りは丁寧で、外面上半部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナゲで、ツمام直下の内面のみナゲ調整。色調は淡黄橙色を呈する。

蓋 c (2) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は橙褐色を呈する。

蓋 c3 (3, 4) 扁平な器形で、ボタン状の潰れたツمامを貼付する。口縁端部は重ね焼きにより黒灰色に変色する。外面上半部は、3が回転ヘラ切り後ナゲ調整、4はヘラ切り後未調整である。

蓋 3 (5～11) 復元口径 15.0～19.2 cm。口縁端部は重ね焼きにより暗灰色に変色する。外面上半部の調整は、5・7～10が回転ヘラ切り後未調整。6は回転ヘラ切り後簡単なナゲ調整。11は回転ヘラ切り後ナゲ調整。

皿 a (12～14) 復元口径 18.6～19.0 cm。底部は回転ヘラ切りで、13は簡単なナゲ調整を行う。

坏 a (15) 復元口径 13.4 cm。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残るが、やや丸味がある。

坏 c (16～30) 復元口径 11.5～17.0 cm。やや貧弱で不定形な低い高台を確に貼付する。28・29は底部端に高台を貼付する。20の底部外面には焼成後にヘラ記号を施している。

甕 (31) 復元口径 18.6 cm。口縁部内外面は回転ナゲ、体部外面は叩き、内面は同心円の当て具である。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

土師器

蓋 (32) 外面上半部は回転ヘラケズリ、それ以外は内外面ともミガキ a を施す。

坏 d (33～36) 復元口径 14.4～17.8 cm。外面底部は回転ヘラケズリで、内外面ともミガキ a を施す。33は全体的に摩滅する。

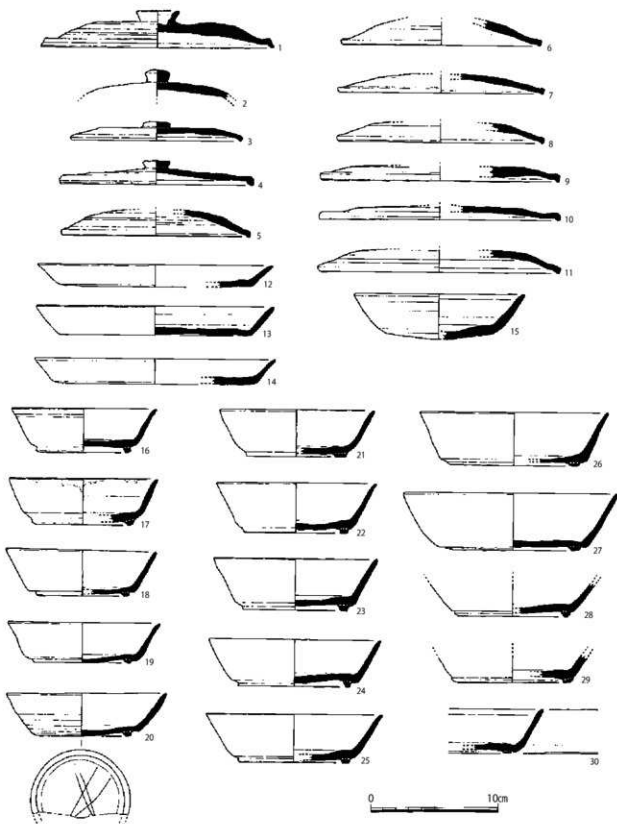


Fig. 76 175SK040 黒灰色土出土遺物実測図① (1/3)

坏 c (37) 復元口径 14.0 cm。内外面は摩擦し僅かにミガキ a が確認できる。色調は黄橙色を呈する。

碗 c (38) 平坦な底部に断面三角形の高台を貼付する。色調は暗橙色を呈する。

皿 a (39) 復元口径 20.8 cm。底部は回転ヘラ切り、内面底部はナデ、その他は回転ナデ調整である。

大皿 c (40) 口径 27.4 cm、器高 4.9 cm、高台径 19.0 cm。口縁部は僅かに外反させる。体部は摩擦するが、

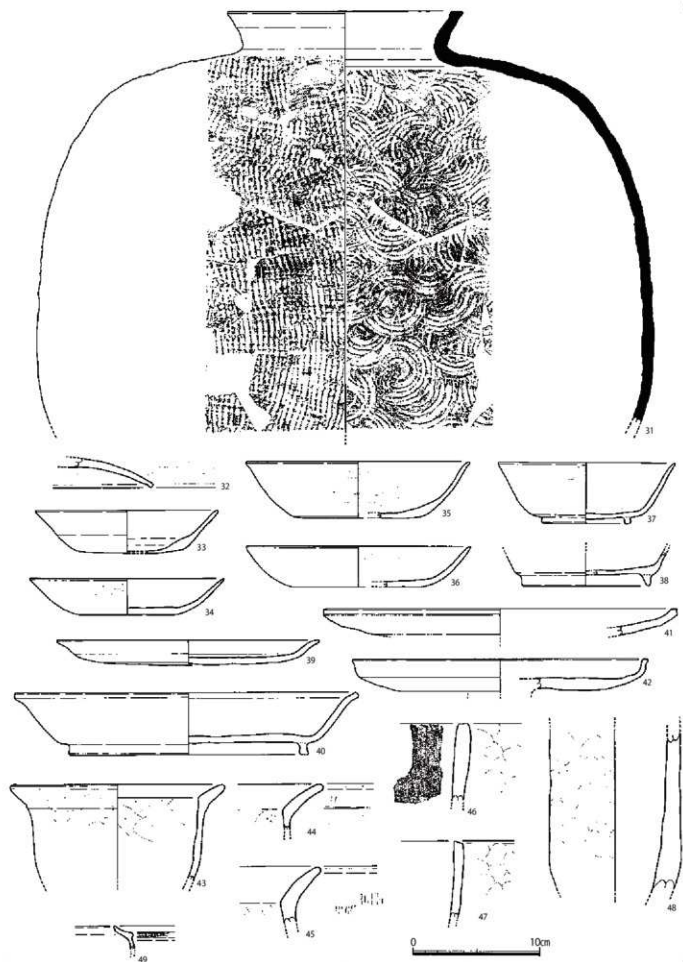


Fig. 77 175SK040 黑灰色土出土遺物実測図② (1/3)

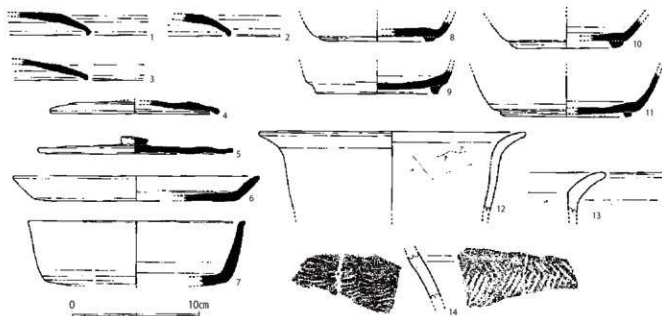


Fig. 78 175SK040 黄灰色土出土遺物実測図 (1/3)

底部外面は回転ヘラケズリが確認できる。色調は橙色や淡黄灰色を呈する。

皿もしくは高坏 (41) 復元口径 28.0 cm。内外面とも摩擦し調整不明瞭。

高坏 a (42) 復元口径 23.4 cm。摩擦が目立つが、外面は回転ヘラケズリである。

甕 (43～45) 体部外面タテハケ、内面ヘラケズリである。43は復元口径 17.0 cm。

製塩土器

焼塩壺 (46～48) I類。外面指押さえて、内面布目で、色調は明橙色を呈する。48の布目は拓本で
きないほどの細かい布目である。外面は灰色に変色し、一部溶解している。

白磁

壺(49) 小片で全形が明確にし難い。外面に僅かな突起が巡り、その端部には刻み目が施されている。

素地は白色で、内外面に光沢のある透明釉を施す。

175SK040 黄灰色土出土遺物 (Fig. 78)

須恵器

蓋 3 (1～3) 外面上半部は、1・2が回転ヘラケズリ、3は回転ヘラ切り後ナデ調整。3の端部は蓋
4に近い形状で、内面には墨痕のような痕跡が残る。2以外は口縁端部のみ重ね焼きで変色する。

蓋 c3 (4) 復元口径 13.4 cm。外面上半部は回転ヘラ切り後未調整。口縁端部は僅かにつまんでいる。

蓋 c4 (5) 口縁端部は重ね焼きで変色する。5は復元口径 15.4 cm。全体的に潰れた形状で、内面は
不定方向のナデ、外面は回転ヘラ切り後簡単なナデ調整。

皿 a (6) 復元口径 19.5 cm。底部外面は回転ヘラ切り、内面底部は回転ナデの後ナデ調整。

碗 a (7) 復元口径 17.2 cm。体部外面は回転ヘラケズリで、体部内外面は回転ナデ調整。色調は淡
灰色を呈する。

坏 c (8～11) 復元高台径 9.0～10.4 cm。高台は不定形で潰れている。色調は灰色や暗灰色を呈する。

土師器

甕 (12, 13) 12は復元口径 21.1 cm。外面は摩擦し、内面はヘラケズリで炭化物が付着する。摩擦
が目立つが、外面はタテハケ、内面はヘラケズリである。

製塩土器

煎煮土器 (14) 甕の肩部付近で、胎土は砂粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。内面は同心円の当て具痕、外面には叩き痕が残る。

墓

175ST107 出土遺物 (Fig. 79)

土師質土器

甕 (1) 底径 28.0 cm。胎土は薄茶色を呈する。外面底部は砂が付着し、内面底部は回転状の刷毛目を施す。

国産陶器

皿 (2) 高台径 4.95 cm。胎土は白色を呈し、内外面には白濁した釉を施し、外面下半は露胎である。

175ST108 出土遺物 (Fig. 79)

国産陶器

甕 (3) 復元口径 24.9 cm、器高 25.4 cm、底径 13.3 cm。外面上部には径 3 cm 程の粘土がスタンプされている。内外面とも回転ナデで、外面は暗赤茶色～暗茶黄褐色釉を厚く施釉し、内面は光沢のない暗赤茶色釉を薄く施す

その他の遺構・遺物

175SX105 出土遺物 (Fig. 80)

須恵器

蓋 c3 (1, 2) 口縁端部を僅かに曲げている。外面上半部は、1 が回転ヘラ切り後未調整。2 は回転ヘラ切り後粗いナデ調整である。

蓋 c (3, 4) 3 はボタン状のツマミを貼付する。4 は断面方形のツマミを貼付する。

蓋 3 (5) 口縁端部を僅かに摘まんでいる。復元口径 16.0 cm。

坏 c (6) 復元高台径 12.2 cm。高台を底部端に貼付する。

表土出土遺物 (Fig. 80)

須恵器

挿鉢 (7) 底部径は 8.6 cm。底部はナデ調整後刃状工具の刺突痕が多数施されている。

龍泉窯系青磁

皿 (8) IV類。高台内面は露胎で、それ以外はやや白濁した緑灰色釉を施す。内面底部に花文のスタンプがある。

石製品

滑石加工品 (9) 半分ほど欠損しているものとみられ、中央に突起を削り出し、穿孔が設けられてい

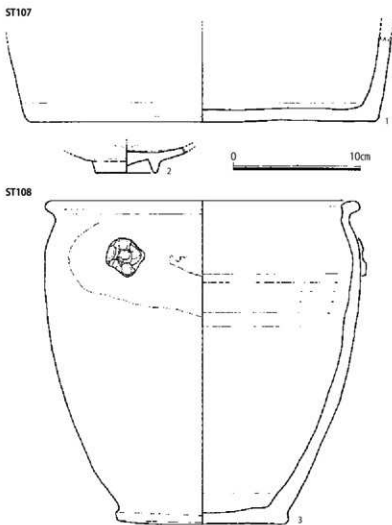


Fig. 79 175ST107・108 出土遺物実測図 (1/3)

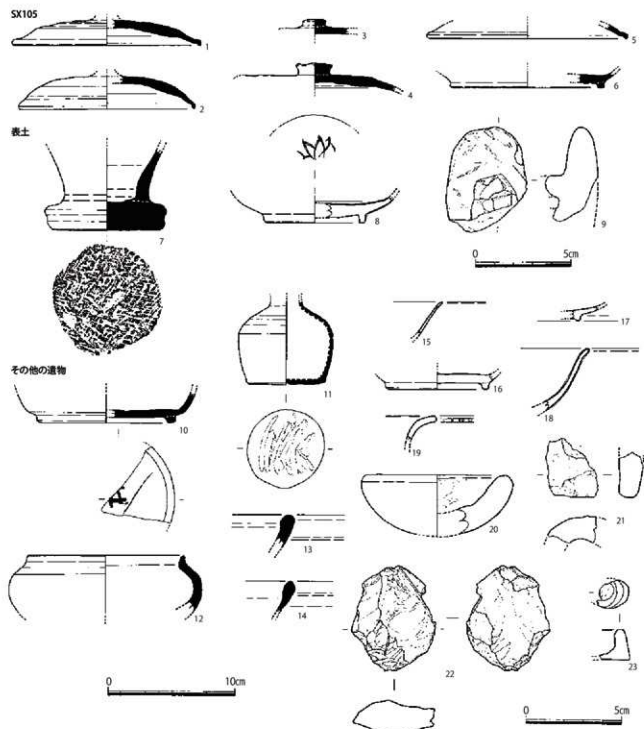


Fig. 80 175SX105、表土、その他の出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

たとみられる。穿孔部分には鉄が残存し、鉄棒のようなものが刺してあったものと推測される。幅約4.3cm。滑石製。

その他の出土遺物 (Fig. 80)

須恵器

坏c (10) 底部外面には墨書があるが、欠損しているため、文字は判読できない。ST126より出土。

小壺 (11) 底径6.1cm。胎土は白色砂粒をやや含み暗灰色を呈する。外面は回転ナデで、外面底部は簡単なミガキを施す。SX044より出土。

短頸壺 (12) 復元口径 12.5 cm。胎土は白色砂粒を多く含み、還元不良で赤茶色を呈する。外面は摩滅するが内面は回転ナデ調整。SX029 より出土。

鉢 (13、14) 篠窯系。口縁部が肥厚する。色調は灰白色を呈する。13 は SX069 より出土。14 は SX124 より出土。

緑釉陶器

碗 (15) 須恵質に焼成され、内外面は深緑色釉を施す。SX117 より出土。

碗 c (16) 復元高台径 8.2 cm。胎土は白色砂粒を多く含み土師質で、内外面に淡緑色釉を施すが剥落が目立つ。SX118 より出土。

碗もしくは皿 (17) 須恵質に焼成され、内外面は深黄緑色釉を施す。京都産。ST126 より出土。

龍泉窯系青磁

碗 (18) IV類。SX029 より出土。

弥生土器

甕 (19) 口縁端部には刻み目を施す。胎土は 0.2 cm 以下の砂粒を含み、色調は暗茶黒色を呈する。SE095 黒灰色土より出土。

土製品

トリペ (20) 復元口径 12.0 cm。胎土は稜痕が残る。外面は摩滅し、口縁部から内面は溶解する。ST126 より出土。

輪羽口 (21) 外面は被熱で溶解する。SX029 より出土。

石製品

剥片 (22) 大きさは 5.6×4.4 cm、厚さ 1.8 cm。一部自然面が残る。安山岩製。SE060 黒色粘土より出土。

小型容器 (23) 高さ 1.65 cm。滑石製。SX073 より出土。

(5) 小結

今回の調査の主な所見は以下のとおりである。

- ・奈良時代～平安前期を中心とした遺構が展開する。
- ・井戸を 11 基検出。
- ・製塩土器が多く出土した。

調査地は大きく削平を受けており、遺構の全容は掴めにくい。削平を免れている中区の遺構状況から推測すると、高密度で遺構が広がっていた可能性が窺える。そして、井戸が調査区東側に偏って検出されていることから、井上条坊案の右郭 6 坊路側に井戸などが配され、建物はその西側に建築されていたものと推測される。また、製塩土器が多く出土したが、その他に祭祀などの特殊な遺物は出土していないため、消費地として土器に充満した塩が持ち込まれ、廃棄されたとみるのが妥当である。

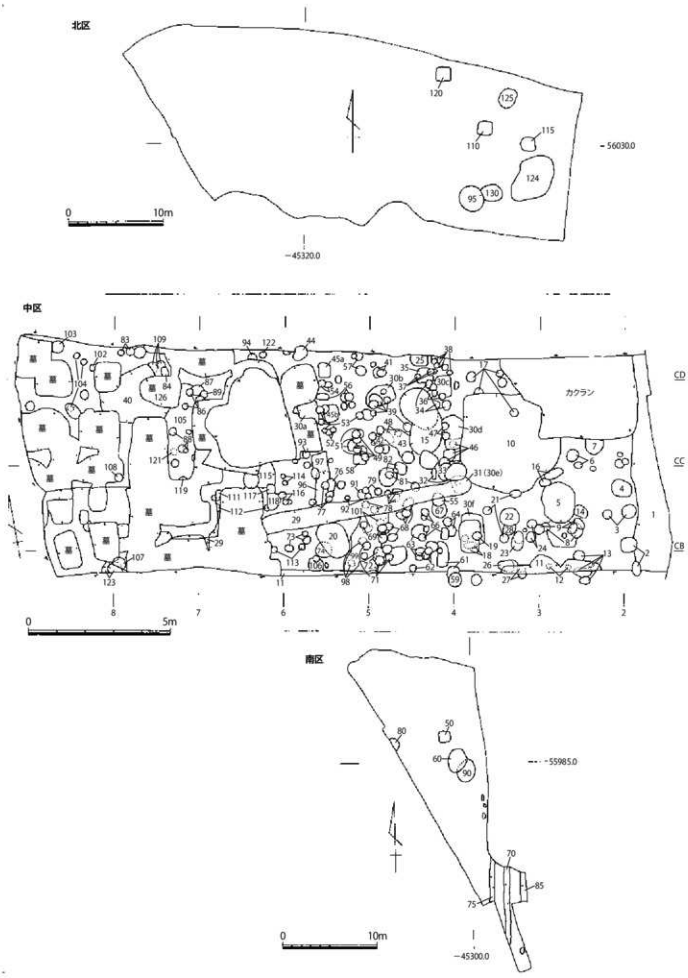


Fig.81 第175次遺構略測図（北・南区は1/400、中区は1/133）

表18 第175次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		溝		近現代	CA~CD1
2		ビット	切り合い間違いか?	近現代	CA2
3		ビット群	黒灰色土系	奈良時代?	CB2
4		ビット	灰色土系(赤)	古代	CB2
5	175SK005	土坑	明灰色土	古代	CB2
6		ビット群		平安前期	OC2
7		ビット		奈良時代	OC2
8		ビット群	黒灰色土系	奈良時代~平安前期?	CB2
9		ビット群	黒色土系	平安時代	CB2
10	175SE010	井戸	暗灰褐色土	8世紀後半~末頃	CB・OC、2・3
11		窪み		奈良時代?	CA2
12		ビット群	S-12→11	平安時代	CA2
13		ビット群	S-13→11	奈良時代?	CA2
14		ビット	S-14→5	奈良時代	CB2
15	175SK015	土坑	黒色土	8世紀後半~末頃	OC4
16		ビット群	S-5→16	平安時代	CB2
17		ビット群		平安時代	OC3
18		ビット群		平安時代	CB3
19		ビット		平安時代	CB3
20	175SK020	土坑		X1~XII期	CB5
21		ビット群		古代	CB3
22		ビット	黒灰色粘土	奈良時代	CB3
23		ビット	明灰色粘土	奈良時代	CB3
24		ビット群	黒灰色土	平安時代	CB3
25		獨立柱建物ビット?	明灰色土	奈良時代	OC4
26		ビット	明灰色土	平安時代	CA3
27		ビット群	灰色土系 11→27	8世紀後半	CA3
28		ビット		8世紀前半	CB3
29	175SX029	溝?	赤褐色土	14世紀?	CB4
30		獨立柱建物	a~c	8世紀末~9世紀初頭	4.5ライン
31		ビット	S-31→29	古代	CB4
32		ビット群		9世紀	CB4
33		ビット		9世紀前半	CB4
34		ビット群	灰色土系	平安前期	OC4
35		獨立柱建物ビット?		古代	CB4
36		ビット群	黒色土系	古代	OC4
37		ビット群	黒色土系	平安時代	CB4
38		ビット群	灰色土系	奈良時代	CB4
39		ビット群	黒色土系		OC4
40	175SK040	土坑	黒灰色土	8世紀後半~末頃	OC7
41		ビット群		平安時代	CB4
42		ビット群	灰色土系	奈良時代	OC4
43		窪み	灰褐色土	8世紀末~9世紀初頭	OC4
44	175SX044	ビット	暗灰色土	8世紀後半	CB5
45		獨立柱建物ビット		古代	5ライン
46		ビット群		奈良時代?	OC4
47		ビット群		古代	OC4
48		ビット群		古代	OC4
49		ビット群		平安前期	OC5
50	175SE050	井戸		8世紀後半~末頃	AIK
51		ビット群		平安時代	OC5
52		ビット群		平安時代	OC5
53		ビット群		平安時代	OC5
54		ビット群		平安時代	OC5
55		ビット		8世紀後半	CB4
56		ビット群			OC5
57		ビット群	灰色土系	古代	OC5
58		獨立柱建物ビット?			CB5
59		ビット		奈良時代?	CA3
60	175SE060	井戸		XI~XII期	AIK
61		ビット群	灰色土系	奈良時代?	CB4
62		ビット群	黒色土系	平安後期	CB4
63		ビット群	灰色土系	平安時代	CA・CB4
64		ビット群	灰色土系	古代	CB4
65		ビット	灰色土系	平安時代	CA4

66		ビット群	黒赤色土	平安時代	CB4
67		ビット			CB4
68		ビット群	灰色土系	平安時代	CB4
69	175SX069	ビット群	黒灰色土	平安時代	CB4
70		溝	畑のウネ?	近世～	AIX
71		ビット群	黒色土系	11世紀後半	CA4
72		ビット	灰色土系	平安時代	CA4
73	175SX073	ビット群		平安後期	CB5
74		掘立柱建物ビット?	灰色土系	平安時代	CB5
75		溝	畑の畝?		AIX
76		ビット群	灰色土系	奈良時代	CB5
77		ビット群	黒色土系	平安時代	CB5
78		ビット群	灰色土系 S-7→29	古代	CB4
79		ビット群	黒色土系	平安時代	CB4・5
80	175SE080	井戸		8世紀末～9世紀初頭	AIX
81		ビット群	黒色土系	平安前期	CB4
82		ビット群	灰色土系		CB4
83		ビット群		平安時代	CD7
84		ビット		8世紀末	CD7
85		溝	畑のウネ?		AIX
86		ビット群		平安時代	CC7
87		ビット			CC7
88		ビット群			CC7
89		ビット			CC7
90	175SE090	井戸	S-90→60	IX～X期	NIK
91		ビット		古代	CB5
92		ビット群		平安時代	CB5
93		ビット		平安時代	CC5
94		ビット		古代	CD6
95	175SE095	井戸		12世紀前半	NIK
96		掘立柱建物ビット?		8世紀後半	CB5
97		窪み	S-96→97	奈良時代	CC5
98		ビット群	S-98→99	古代	CA・CB5
99		窪み			CA・CB、4・5
101		ビット群	S-101→99	平安後期	CB5
102		ビット	黒色土系		CD8
103		ビット	黒色土系	8世紀末	CD8
104		ビット群	灰色土系	奈良時代?	CC・CD8
105	175SX105	敷地?	淡灰色粘土	8世紀末	CC7
106		ビット		古代	CA5
107	175ST107	火葬墓	覆底が掘えられていた。	近世	CA7
108	175ST108	火葬墓	覆を掘える。	近世～	CB7
109		ビット群			CD7
110	175SE110	井戸		8世紀後半～末	NIK
111		ビット		奈良時代	CB6
112		ビット群		平安時代	CB6
113		ビット群		奈良時代?	CB5・6
114		ビット群		古代	CB6
115	175SE115	井戸		IX期前後	NIK
116		ビット群		平安時代	CB6
117	175SX117	ビット	黒灰色土 柱痕あり		CB6
118	175SX118	ビット	淡灰色土	平安前期	CB6
119		ビット	黒色炭層 S-105→119	古代	CB7
120	175SE120	井戸		XII期	NIK
121		ビット	灰色土系 S-121→105		CC7
122		ビット	暗灰色土	古代	CD6
123		ビット群	灰色土系	平安時代	CA8
124	175SX124	覆土		近現代	NIK
125	175SE125	井戸		XI期	NIK
126	175ST126	墓		近世～	CC7
127		ビット	暗灰色土	8世紀末	CB6
130	175SE130	井戸		8世紀中頃～後半	NIK

5-27	須 惠 磁器1、磁2、环c、甕
土 師 磁器1、环c、甕	
瓦 磁平瓦(楕円)	
5-28	土 師 磁器环
5-29	須 惠 磁器1、磁2、环、环a、环c、甕、短頸甕
土 師 磁器a、环c、甕、把手	
黒色土器B 磁器	
黒色土器A 磁器(IV(1))	
瓦 磁平瓦(楕円)	
金 属 製 品 漆泽	
石 製 品 平石	
土 製 品 楕円口	
5-30a	須 惠 磁器片
土 師 磁器片	
石 製 品 割片(黒曜石、安山岩)	
5-30b	須 惠 磁器、甕、磁片
土 師 磁器c、磁片	
5-30c	須 惠 磁器、磁片、磁4、环c、甕
土 師 磁器、环c、甕	
5-30d	須 惠 磁器片
土 師 磁器、甕	
5-31	須 惠 磁器台、磁片
土 師 磁器、甕、磁片	
黒色土器A 磁器a	
5-32	須 惠 磁器3、环、甕、蓋
土 師 磁器、环a(c)、甕	
製 瓦 土 師 磁片	
緑 釉 陶 磁器片	
石 製 品 平石	
5-33	須 惠 磁器3、磁4、环a、环c、甕
土 師 磁器(c)、陶c、甕、磁片	
黒色土器A 磁器	
瓦 磁平瓦(楕円、格子)	
5-34	須 惠 磁器3、磁a、磁片
土 師 磁器a、甕	
製 瓦 土 師 磁器	
土 製 品 土塊	
5-35	須 惠 磁器3、磁片
土 師 磁器、磁片	
製 瓦 土 師 磁器	
石 製 品 割片(黒曜石)	
5-36	須 惠 磁器
土 師 磁器a、甕	
5-37	須 惠 磁器
土 師 磁器、甕	
5-38	須 惠 磁器、磁片
土 師 磁器、环c、甕	
5-39	須 惠 磁器3、环、甕
土 師 磁器a、陶c、磁片	
黒色土器A 磁器、磁c	
緑 釉 陶 器 磁器(IV(1))	
石 製 品 割片(黒曜石)	
5-40黒灰色土	須 惠 磁器1、磁2、磁4、磁c、磁c3、磁b3、环、环a、环c、 磁a、甕、甕b、磁片
土 師 磁器、磁c、环a、环c、环d、丸底环a、磁a、把手、 大土器、陶c、磁x高野、高环a、甕、柄、カマド、磁片	
製 瓦 土 師 磁器	
白 磁器?(1)	
瓦 磁平瓦(楕円)、丸瓦(楕文)、磁片	
金 属 製 品 漆泽	
石 製 品 割片(黒曜石)、丸石	
土 製 品 土塊	
5-40黄灰色土	須 惠 磁器、磁2、磁c3、磁c4、环a、环c、陶a、磁a、甕
土 師 磁器、环c、磁c	
製 瓦 土 師 磁器	
瓦 磁平瓦(楕円)、丸瓦(楕文)、磁片	
石 製 品 平石	

5-40褐色	須 惠 磁器3、环、环c、甕
土 師 磁器a、甕	
製 瓦 土 師 磁片	
金 属 製 品 漆泽	
石 製 品 平石	
土 製 品 土塊	
5-41	須 惠 磁器c、磁片
土 師 磁器c、环a、甕	
5-42	須 惠 磁器片
土 師 磁器、甕、磁片	
石 製 品 土塊	
5-43	須 惠 磁器3、磁a、环c、环a
土 師 磁器	
黒色土器A 磁器	
瓦 磁平瓦(楕円、格子、楕文)	
5-44	須 惠 磁器3、磁c、环c、小甕
土 師 磁器、磁a、甕、鉢	
金 属 製 品 漆泽	
土 製 品 土塊	
5-45a	須 惠 磁器
土 師 磁器、甕、磁片	
石 製 品 土塊	
5-45b	須 惠 磁器片
土 師 磁器、磁器、磁片	
5-46	須 惠 磁器
土 師 磁器、甕	
5-47	須 惠 磁器3
土 師 磁器c、陶c、甕	
黒色土器A 磁器、磁片	
5-48	須 惠 磁器片
土 師 磁器c	
瓦 磁器片(楕円)	
金 属 製 品 鉄打	
5-49	須 惠 磁器1、磁c、甕
土 師 磁器c、环c、甕	
黒色土器A 磁器、磁片	
5-50茶褐色土	須 惠 磁器c
土 師 磁器c、环c、甕、磁片	
瓦 磁平瓦(楕円)	
5-50灰褐色土	須 惠 磁器3、环c、甕
土 師 磁器c、环c、甕	
5-50黒灰色土	須 惠 磁器3、磁4、环c、环a、环c、甕、磁片
土 師 磁器c、环c、陶c、磁片	
製 瓦 土 師 磁器	
黒色土器B 磁器	
瓦 磁平瓦(楕円)、丸瓦(楕文)	
金 属 製 品 漆泽	
石 製 品 磁石	
5-50褐色粘土	土 師 磁器c、环c
木 製 品 漆物漆、櫛	
5-50茶褐色土	須 惠 磁器3、甕
土 師 磁器c、磁片	
5-51	須 惠 磁器c、磁片
土 師 磁器c、甕	
製 瓦 土 師 磁片	
瓦 磁器片	
5-52	須 惠 磁器片
土 師 磁器c、环c、陶c、甕	
5-53	須 惠 磁器c、甕、磁x甕
土 師 磁器c、甕	
黒色土器A 磁器c	
緑 釉 陶 器	
土 製 品 土塊	

5-54
須 惠 形造、環、破片
土 師 形環、環、破、變
黒色土器 A 形陶
瓦 形破片
石 製 品石片(燧石)

5-55
須 惠 形造3、環、破片
土 師 形造、環、破、變、破片
土 師 品土器

5-56
須 惠 形造3、環
土 師 形環、變
黒色土器 B 形陶

5-57
須 惠 形破片
土 師 形環、變
黒色土器 A 形破片

5-58
須 惠 形造、破片
土 師 形環、環、破、破片

5-59
須 惠 形造、環×環、破片
土 師 形環、環、破片

5-60焼土層
須 惠 形造3、造、環、環、環、環、環、環、鉢
土 師 形環、小皿a、環、丸底環、陶、環、環×環
黒色土器 A 形陶
黒色土器 B 形陶、陶、破片
越 河 産 青 磁 陶 ; 1-1(1)、Ⅱ(1) 類 B 破片(1)
須 惠 質 土 形陶
瓦 形平瓦(格子)、丸瓦(格子)、瓦玉
金 属 製 品漆器
石 製 品石片

5-60灰白色土
須 惠 形造、造3、環、環、環、環
土 師 形(小皿a(2))、丸底環、陶、環
黒色土器 A 形陶
黒色土器 B 形陶
越 河 産 青 磁 陶 ; 1(1)
白 形破片(1)
瓦 形平瓦(調目、格子)
石 製 品石片、可変石
土 師 品土器

5-60灰白色土
須 惠 形造3、環、環、環、環、環、環、環
土 師 形(小皿a(2))、小皿a2(2))、丸底環、陶、環、環
製 造土 形破片?
黒色土器 A 形陶
黒色土器 B 形陶
越 河 産 青 磁 陶、破片
(1) 類 B 破片(1)
瓦 形平瓦(調目、格子、無文)、丸瓦(格子、無文)
石 製 品灰石、滑石片、可変石
土 師 品土器、土師、土師
その他 焼土層小皿

5-60灰色粘土
須 惠 形造
土 師 形(小皿a(2))、小皿a2(2))、環a(2))、陶、
丸底環、環
黒色土器 A 形陶
土 師 製土 形陶
瓦 形平瓦(無文)、丸瓦(格子、無文)
石 製 品石片、破石片(台石?)

5-60灰色粘土
須 惠 形環、環、環、環、環
土 師 形環、環a(2))、陶、環、鉢
黒色土器 B 形陶、陶
瓦 形陶
白 形陶 ; IV(1)
越 河 産 青 磁 陶 ; 1-3(1)
瓦 形平瓦(格子)
石 製 品陶片(灰土粉)、石片

5-60灰色砂土
須 惠 形環、環、環、環、環
土 師 形環、小皿a(2))、小皿a2、環c(2))、丸底環、陶、陶
黒色土器 A 形陶
土 師 陶 形破片
瓦 形平瓦(調目、格子)、丸瓦(格子)、瓦玉
その他 焼土層小皿

5-60褐色色土
須 惠 形造4、環、環、造環、環
土 師 形造、小皿a(2))、環、環、丸底環a、環、破片
黒色土器 B 形陶
中 国 陶 形木注(1)
瓦 形平瓦(調目、格子)、丸瓦(格子)
石 製 品漆器
土 師 品漆器
その他 焼土

5-60茶褐色粗砂
須 惠 形造3、環a、環c、環c、鉢(無文)
土 師 形(小皿a(2))、環a(2))、丸底環、陶、陶、
山口鉢、陶
黒色土器 A 形陶
黒色土器 B 形陶
越 河 産 青 磁 陶 ; 1(1)、1-27(1)
須 惠 質 (輸入) 朝鮮系無輪陶器
鐵 文 土 形鉢
瓦 形平瓦(格子)、丸瓦(格子、無文)
石 製 品石片

5-61
須 惠 形造
土 師 形環、破片
須 惠 質 (輸入) 朝鮮系無輪陶器
石 製 品平瓦石

5-62
須 惠 形環
土 師 形環、丸底環、環
黒色土器 A 形陶
黒色土器 B 形陶

5-63
土 師 形環、丸底環?、陶c、變類
石 製 品石片(燧石)

5-64
土 師 形破片
瓦 形破片

5-65
須 惠 形環c、環、破片
土 師 形環、陶c、環、變類

5-66
須 惠 形造1、造3、環c、環
土 師 形環、環、陶、陶c

5-67
須 惠 形造3、環、環c、環
土 師 形環、環
土 師 品土器

5-68
須 惠 形環、環
土 師 形環、陶、陶c、變類

5-69
須 惠 形環、環c、鉢
土 師 形環、環c、環、破片
石 製 品平瓦石

5-70
須 惠 形破片
土 師 形破片
瓦 形破片(平瓦)

5-71
須 惠 形造c、環、環、破片
土 師 形(小皿a(2))、環a、丸底環、陶
黒色土器 B 形破片
金 属 製 品漆器

5-72
須 惠 形造
土 師 形環、變類

5-73
須 惠 形造3
土 師 形(小皿a(2))、變類、破片
黒色土器 A 形破片
石 製 品滑石製磁器

5-74
須 惠 形造3
土 師 形環、變類

5-75
須 惠 形環c、破片
土 師 形環、破片
瓦 形平瓦(格子)
金 属 製 品漆器

5-76
須 惠 形造3、環c、環
土 師 形環、陶、環
瓦 形平瓦(調目)
石 製 品平瓦石

5-77
須 惠 形造3、環c、環
土 師 形環、陶、環
瓦 形破片

5-78
須 惠 形環、環、破片
土 師 形環、環
石 製 品平瓦石

5-79

土 師	副环、环a、雙環
-----	----------

5-80暗灰色土

須 惠	副環1、副3、副c、副c、环、环c、高环、雙
土 師	副大环c、副c、雙、破片
金 属 類	品洋釘
石 製	品玉石、滑石片
瓦	品施部小環

5-80灰色粘土

須 惠	副环、破片
土 師	副环c、雙

5-81

須 惠	副環、环、雙
土 師	副环c、雙、雙環、破片
黑色土 師 A 類	破片
須 惠 質 (輸入)	朝鮮系無軸陶器
瓦	類平瓦(佛子)

5-82

須 惠	副環1、雙、破片
土 師	副环c、雙環、破片
石 製	品洋片(燻磁石)

5-83

須 惠	副環1、环c
土 師	副环、破片

5-84

須 惠	副環、環、环、环c
土 師	副破片

5-85

須 惠	副環
土 師	副環
白	破或口破片(1)

5-86

須 惠	副環1、雙
土 師	副环、雙、破片

5-87

須 惠	副環3、环c、雙、破片
土 師	副環a、雙、破片

5-88

須 惠	副环、环c
土 師	副环、雙
石 製	品平玉石

5-89

須 惠	副環
土 師	副環
石 製	品玉石

5-90暗灰色土

須 惠	副環1、副3、环c、副a、雙、破?
土 師	副小環a、环a、輪c、雙
黑色土 師 A 類	破片
越州系青系陶器	II(1)
瓦	類平瓦(佛子)、瓦瓦(佛子)、瓦瓦、破片
土 製	品タリマ

5-90灰色土

須 惠	副環3、環c、环c、雙、破片
土 師	副环、环c、雙、鉢、鉢c、破片
黑色土 師 A 類	雙輪、輪c
瓦	類平瓦(佛子)、瓦瓦(佛子)、破片

5-90暗灰色土

須 惠	副環
土 師	副环、副a、輪c
黑色土 師 A 類	破片
瓦	類平瓦(佛子)
石 製	品磁石?

5-91

須 惠	副环
土 師	副環、破片

5-92

須 惠	副环a
土 師	副环a、大底环c、破片

5-93

須 惠	副環、副3、环、环c、雙
土 師	副環c、雙
瓦	類平瓦(佛子)

5-94

土 師	副環、破片
黑色土 師 A 類	破片

5-95暗灰色土

須 惠	副環、副3、副a、副c、环、环a、环c、雙、環
土 師	副小環a(c)、环、环a、大底环a、輪c、大輪c、高环、雙、鉢c、鉢a、破片、佛子、破片
須 惠 土 師	破片
黑色土 師 A 類	破片
黑色土 師 B 類	雙輪、輪c
鉢	鉢
土 師 質 上 類	鉢
須 惠 質 (輸入)	朝鮮系無軸陶器
白	陶(1)、II(1)、II-1b(1) 蓋: I(1)
越州系青系陶器	陶: I-2(1) 燻磁片: I(2)、I(白綠性区(1))、II(2)
白	磁: II(2)、II-1(2)、IV(2)、XI-2(2)、XI-1b(1)
白	磁片(2) 白磁破片(2)
青 白	磁(1)、蓋(1)
中 西 陶	器基座(1)
赤 土 師	破片
瓦	類平瓦(圓目、佛子、無文)、瓦瓦(佛子、無文)、磚
金 属 類	品洋釘
石 製	品玉石、石磁、破片(燻磁石)、滑石破片
土 製	品土塊、碎瓦土製品

5-95暗灰色土

須 惠	副環、副3、环、环c、环c、雙
土 師	副小環a(c)、小底a2、小底a、环a、大底环a、輪c、雙、鉢×雙
須 惠 土 師	破片
黑色土 師 B 類	破片
黑色土 師 B 類	雙輪、輪c、破片
越州系青系陶器	陶: I(2)、I-2(2)
越州系青系陶器	陶: II(1)、II-1(2)、IV(2)、V-2a(1)、XI-1(1)
白	磁: II-1a(2)、V-2a(1)、W-1b(1)、XI-3(1)
白	白磁破片(4)、赤土系(2)
青 白	磁(1)、蓋×赤土(1)
赤 土 師	破片
瓦	類平瓦(圓目、佛文)、瓦瓦(佛子、佛文)
金 属 類	品洋釘
石 製	品タリマト片

5-95暗灰色土

須 惠	副環
土 師	副小環a(c)、輪c、破片
瓦	類平瓦(佛子)
石 製	品滑石加工品

5-96

須 惠	副環1、副3、环、雙
土 師	副环、雙
瓦	類平瓦(佛文)
石 製	品洋片(燻磁石)

5-97

須 惠	副環c、环
土 師	副环、雙

5-98

須 惠	副環1、副c、环、环c
土 師	副环、雙

5-99

須 惠	副环、环c
土 師	副環、小環a(c)、大底环c
鉢	鉢
陶	破片

5-101

土 師	副环、大底环
-----	--------

5-102

須 惠	副環3、破片
土 師	副环、雙環

5-103

須 惠	副環1、副3、副a、环、环c、雙
土 師	副環
須 惠 土 師	破片
石 製	品平玉石

5-104

須 惠	副環
土 師	副破片

5-105

須 惠	副環、副3、副c、環c、环、环a、环c、雙
土 師	副環、副3、大底环c、环c、雙
石 製	品平玉石
土 製	品土塊

5-106

須 惠	副环、破片
土 師	副環

5-107

須 惠	副環
土 師	副破片
土 師 質 上 類	雙環
因 產 磁	磁

5-108

土 師	副環類
因 產 陶	磁

S-130灰褐色土

根 系	根叢1、根3、环c、雙、莖、破片
土 節	節叢c、环d、莖b、雙、破片
瓦	類瓦瓦(磚瓦)
石 製	高脚片(黑曜石)
土 製	赤土塊

S-130灰色土

根 系	根叢、莖c、环、环c、高环b、雙
土 節	節叢环、环b、莖、雙、破片
製 瓦 土	節叢莖、破片?

S-130灰色粘土

根 系	根叢、莖c、环、环c、高环、雙、莖、鉢
土 節	節叢、环c、雙、破片
瓦	類平瓦(磚瓦)、斜平瓦

铁紫灰色土

根 系	根叢3、环、环a、环c、莖a、莖
土 節	節叢、环、环a、莖c、雙
製 瓦 土	高脚莖
瓦	類平瓦(磚瓦)
石 製	高平瓦石

灰色土

根 系	根叢、莖c、破片
土 節	節叢c
國 產 陶	節叢片
國 產 磁	節叢片
白	磁破片(1)

茶褐色土

根 系	根叢3、环、环c、莖
土 節	節叢、破片
國 產 陶	節叢
國 產 磁	節叢片
製 瓦 瓦 青 磁 瓦	節叢破片(1)
白	磁破片(1)
青 白	磁破片(1)
土 製	赤土塊

表土

根 系	莖、莖1、莖3、莖4、莖c、环、环a、环c、莖a、高环、小短莖、莖b、鉢、節叢、破片
土 節	莖c、小莖a(平)、环、环a、环c、环d、瓦底环a、莖a、莖c、高环、小莖、莖、破片、破片
製 瓦 土	節叢莖
黑 色 土	節叢
黑 色 土	節叢
土 節 實	節叢
綠 釉 陶	節叢片
綠 釉 陶	節叢片
國 產 磁	節叢、莖、莖、莖、鉢、節叢、破片
國 產 磁	節叢、灰鉢、破片
瓦 瓦 瓦 (轉 入)	節叢石粉陶器
綠 釉 瓦 瓦 青 磁 瓦	節叢(1-2)、莖(1) 綠釉(破片(3))
國 產 瓦 瓦 青 磁 瓦	節叢(1) 莖、IV(1) 節叢破片; I(1)、II(1)
國 產 瓦 瓦 青 磁 瓦	節叢(1)、I-III(2)
白	莖; V-2(1)、VI-1b(1)、XI-1(1)、XI-1×2(1)
白	莖莖系(1)、破破片(3) 小輪(3)
白	莖; V-1(2)、VI-1a(1)、IX(1)、莖破片(1)
白	白磁破片(2)、破(1)
中 國 陶	莖(1) 中國節叢破片(1)
瓦	平瓦(圓瓦、斜瓦、瓦瓦)、瓦瓦(磚瓦)
瓦	類平瓦(平瓦、斜平瓦)
金 屬 製 品	漆器
石 製 品	陶片(黑曜石、安山岩)、石鑄、漆器加工品
土 製 品	瓦石、泥瓦石
土 製 品	磚瓦

表裡

根 系	節叢3、环c、小莖、破片
土 節	節叢、莖
肥 前 系 磁	節叢片
國 產 陶	節叢片、破片
瓦	類平瓦(無瓦)、瓦瓦(磚瓦)、類平瓦(平瓦)

埋瓦

埋 瓦	埋瓦
土 節	節叢、环a、莖

表20 第175次調査 土器供膳具計測表

A: 内蔵ナブ B: 取付ナブ

5-10段状色土							
種別	器種	器物番号	調査号	口径	器高	底径	A B
復原器	甕	へ2	B-024 Fig. 59-1	2.1φ			
	甕	へ3	B-025 Fig. 59-2	1.8φ			
	甕	へ4	B-023 Fig. 59-3	1.1φ			
	甕	へ5	B-012 Fig. 59-4	2.9φ			
	甕	へ6	B-028 Fig. 59-5	1.1φ			
	甕	B-010 Fig. 59-6	1.7φ				
	甕	へ7	B-021 Fig. 59-7	1.9φ			
	甕	へ8	B-022 Fig. 59-8	1.8φ			
	甕	B-011 Fig. 59-9	1.4φ				
	甕	へ9	B-020 Fig. 59-10	1.9φ			
	甕	B-019 Fig. 59-11	1.4φ				
	甕	へ10	B-025 Fig. 59-12	(17.0) 2.1	(14.1) 0		
	甕	へ11	B-026 Fig. 59-13	(17.0) 2.1	(14.0) 0		
	甕	へ12	B-001 Fig. 59-14	(15.0) 2.0	(14.0) 0		
	小甕	へ13	B-028 Fig. 59-15	(8.0) 2.1	(8.0) 0		
甕	へ14	B-003 Fig. 59-16	(13.2) 4.1	(8.0) 0			
甕	へ15	B-002 Fig. 59-17	(13.5) 3.0	(8.0) 0			
甕	へ16	B-012 Fig. 59-18	(13.2) 4.0	(8.0) 0			
甕	へ17	B-007 Fig. 59-19	4.0φ				
甕	へ18	B-029 Fig. 59-20	3.7φ				
甕	へ19	B-011 Fig. 59-21	1.8φ	(8.0) 0			
甕	へ20	B-007 Fig. 59-22	2.8φ	(8.0) 0			
甕	B-006 Fig. 59-23	2.8φ	(7.0) 0				
甕	へ21	B-005 Fig. 59-24	3.3φ	(8.0) 0			
甕	へ22	B-004 Fig. 59-25	1.3φ	(8.0) 0			
甕	へ23	B-030 Fig. 59-26	1.7φ	(10.0) 0			
甕	B-008 Fig. 59-29	1.9φ					
甕	へ24	B-012 Fig. 59-31	2.0φ				
甕	へ25	B-038 Fig. 59-32	(17.1) 1.5	(13.0) 0			
甕	へ26	B-039 Fig. 59-33	(18.0) 2.9	(7.0) 0			
甕	へ27	B-041 Fig. 59-34	2.7φ	(8.0) 0			
甕	へ28	B-040 Fig. 59-35	3.0φ	(8.0) 0			
甕	へ29	B-015 Fig. 59-42	2.4φ	(7.0) 0			
5-10段状色土							
種別	器種	器物番号	調査号	口径	器高	底径	A B
復原器	甕	B-008 Fig. 60-50	1.4φ				
	甕	B-007 Fig. 60-51	1.3φ				
	甕	へ1	B-006 Fig. 60-52	1.9φ	(8.0) 0		
土器類	甕	へ2	B-001 Fig. 60-34	15.2	1.9	13.2	0
	甕	B-002 Fig. 60-35	15.3	3.1	4.8	0	
	甕	B-003 Fig. 60-36	2.1φ	4.8	0		
5-10段状色土							
種別	器種	器物番号	調査号	口径	器高	底径	A B
復原器	甕	B-009 Fig. 60-58	1.2φ				
	甕	B-010 Fig. 60-59	1.2φ				
	甕	B-012 Fig. 60-60	0.7φ				
	甕	B-010 Fig. 60-61	1.2φ				
	甕	B-011 Fig. 60-62	1.2φ				
	甕	B-006 Fig. 60-63	(13.0) 3.7	(8.0) 0			
	甕	B-005 Fig. 60-64	1.7φ	(7.0) 0			
	甕	B-007 Fig. 60-65	2.7φ	(8.0) 0			
	甕	B-004 Fig. 60-66	1.7φ	(8.2) 0			
	甕	B-003 Fig. 60-67	2.3φ	(8.0) 0			
5-10段状色土							
種別	器種	器物番号	調査号	口径	器高	底径	A B
復原器	甕	B-009 Fig. 61-1	(16.2) 1.9				
	甕	B-009 Fig. 61-2	(17.0) 1.2				
	甕	B-013 Fig. 61-3	1.3φ				
	甕	B-001 Fig. 61-4	1.9φ				
	甕	B-011 Fig. 61-5	1.3φ				
	甕	B-010 Fig. 61-6	1.4				
	甕	B-012 Fig. 61-7	1.3φ				
	甕	B-022 Fig. 61-8	1.9φ				
	甕	B-008 Fig. 61-9	(14.0) 2.3				
	甕	へ1	B-007 Fig. 61-10	1.3φ	(7.0) 0		
	甕	へ2	B-006 Fig. 61-11	1.9φ	(10.0) 0		
	甕	へ3	B-003 Fig. 61-12	(13.0) 1.7	(8.0) 0		
	甕	へ4	B-034 Fig. 61-13	1.3φ	(10.0) 0		
	甕	へ5	B-005 Fig. 61-14	3.9			
	甕	B-019 Fig. 61-15	2.9φ				
甕	へ6	B-003 Fig. 61-16	15.3	3.2	7.3	0	
小甕	へ7	B-002 Fig. 61-17	17.4	3.0			
甕	へ8	B-001 Fig. 61-18	(16.2) 1.7	(12.0) 0			
甕	B-018 Fig. 61-19	2.0φ					
5-10段状色土							
種別	器種	器物番号	調査号	口径	器高	底径	A B
復原器	甕	B-005 Fig. 61-25	0.9φ				
	甕	B-003 Fig. 61-26	1.3φ				
	甕	B-005 Fig. 61-27	1.1φ				
	甕	B-006 Fig. 61-28	1.1φ				
	甕	へ1	B-002 Fig. 61-29	2.0φ			
	甕	へ2	B-001 Fig. 61-30	1.1φ	(7.0) 0		
	甕	B-017 Fig. 61-31	1.1φ				
5-10段状色土							
種別	器種	器物番号	調査号	口径	器高	底径	A B
復原器	甕	B-007 Fig. 70-108	1.9φ				
	甕	B-008 Fig. 70-107	1.3φ				
	甕	B-005 Fig. 70-109	1.9φ				
	甕	へ1	B-006 Fig. 70-100	1.1φ	(10.0) 0		
	甕	B-003 Fig. 70-110	(13.0) 4.0	(8.0) 0			
	甕	B-002 Fig. 70-111	(14.0) 3.1	(8.0) 0			
	甕	B-001 Fig. 70-112	1.8φ	(8.0) 0			
	甕	B-005 Fig. 70-113	1.8φ				
	甕	B-002 Fig. 70-114	1.1φ				
	甕	B-010 Fig. 70-115	1.7φ				
	甕	B-011 Fig. 70-116	1.2φ				
	5-10段状色土						
種別	器種	器物番号	調査号	口径	器高	底径	A B
復原器	甕	へ1	B-013 Fig. 71-1	(12.0) 3.9			
	甕	へ2	B-012 Fig. 71-2	(12.0) 3.9			
	甕	へ3	B-011 Fig. 71-3	(17.0) 4.2			
	甕	へ4	B-009 Fig. 71-4	2.0φ			
	甕	へ5	B-007 Fig. 71-5	1.2φ			
	甕	へ6	B-008 Fig. 71-6	1.5φ			
	甕	へ7	B-003 Fig. 71-7	0.7φ			
	甕	へ8	B-001 Fig. 71-8	0.9φ			
	甕	へ9	B-002 Fig. 71-9	1.3φ			
	甕	B-005 Fig. 71-20	1.5φ				
	甕	B-006 Fig. 71-21	1.3φ				
	甕	B-002 Fig. 71-22	1.9φ				
	甕	へ10	B-010 Fig. 71-23	(16.2) 3.2			
	甕	へ11	B-010 Fig. 71-24	(16.2) 3.2			
	甕	へ12	B-014 Fig. 71-25	(17.0) 4.1			
甕	へ13	B-013 Fig. 71-26	(16.2) 3.9				
甕	へ14	B-011 Fig. 71-27	(17.0) 4.2				
甕	へ15	B-012 Fig. 71-28	(17.0) 4.1				
甕	へ16	B-015 Fig. 71-29	(16.2) 3.9				
甕	へ17	B-014 Fig. 71-30	(16.2) 3.9				
甕	へ18	B-017 Fig. 71-31	(12.0) 2.4	(7.0) 0			
甕	へ19	B-025 Fig. 71-32	(13.0) 3.8	(8.2) 0			
甕	B-024 Fig. 71-33	(14.0) 3.0	(8.0) 0				
甕	へ20	B-022 Fig. 71-34	(16.0) 3.4	(10.0) 0			
甕	B-021 Fig. 71-35	1.4φ	(8.0) 0				
甕	B-019 Fig. 71-36	1.3φ	(8.0) 0				
甕	へ21	B-023 Fig. 71-37	3.8φ	(10.2) 0			
甕	B-012 Fig. 71-38	2.4φ	(7.0) 0				
甕	B-010 Fig. 71-39	1.3φ	(7.0) 0				
甕	B-009 Fig. 71-40	1.9φ					
甕	へ22	B-041 Fig. 71-29	(17.0) 1.7φ				
甕	へ23	B-042 Fig. 71-30	1.9φ				
甕	へ24	B-036 Fig. 71-31	(12.0) 2.0	(5.0) 0			
甕	へ25	B-037 Fig. 71-32	(12.0) 3.0	(5.0) 0			
甕	へ26	B-038 Fig. 71-33	(12.0) 3.0	(5.0) 0			
甕	へ27	B-039 Fig. 71-34	(17.0) 3.8	(5.0) 0			
甕	へ28	B-038 Fig. 71-35	(16.0) 3.7	(5.0) 0			
甕	へ29	B-040 Fig. 71-36	(16.0) 3.8	(5.0) 0			
甕	へ30	B-033 Fig. 71-37	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ31	B-032 Fig. 71-38	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ32	B-031 Fig. 71-39	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ33	B-029 Fig. 71-40	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ34	B-028 Fig. 71-41	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ35	B-027 Fig. 71-42	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ36	B-026 Fig. 71-43	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ37	B-025 Fig. 71-44	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ38	B-024 Fig. 71-45	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ39	B-023 Fig. 71-46	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ40	B-022 Fig. 71-47	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ41	B-021 Fig. 71-48	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ42	B-020 Fig. 71-49	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ43	B-019 Fig. 71-50	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ44	B-018 Fig. 71-51	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ45	B-017 Fig. 71-52	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ46	B-016 Fig. 71-53	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ47	B-015 Fig. 71-54	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ48	B-014 Fig. 71-55	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ49	B-013 Fig. 71-56	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ50	B-012 Fig. 71-57	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ51	B-011 Fig. 71-58	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ52	B-010 Fig. 71-59	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ53	B-009 Fig. 71-60	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ54	B-008 Fig. 71-61	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ55	B-007 Fig. 71-62	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ56	B-006 Fig. 71-63	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ57	B-005 Fig. 71-64	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ58	B-004 Fig. 71-65	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ59	B-003 Fig. 71-66	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ60	B-002 Fig. 71-67	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ61	B-001 Fig. 71-68	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ62	B-000 Fig. 71-69	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ63	B-000 Fig. 71-70	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ64	B-000 Fig. 71-71	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ65	B-000 Fig. 71-72	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ66	B-000 Fig. 71-73	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ67	B-000 Fig. 71-74	1.2φ	(8.0) 0			
甕	へ68	B-000 Fig. 71-75	1.2φ	(8.0) 0			
甕</							

5-40段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
埋藏層	埋藏土	B-048	Fig. 79-1	18.4	2.9			
	埋藏土	B-050	Fig. 79-2	5.2	0			
	埋藏土	B-051	Fig. 79-3	13.6	1.5			
	埋藏土	B-054	Fig. 79-4	15.0	1.9			
	埋藏土	B-056	Fig. 79-5	15.0	3.0			
	埋藏土	B-057	Fig. 79-6	15.0	1.5			
	埋藏土	B-058	Fig. 79-7	18.4	1.5			
	埋藏土	B-059	Fig. 79-8	18.4	1.5			
	埋藏土	B-060	Fig. 79-9	18.4	1.5			
	埋藏土	B-061	Fig. 79-10	19.2	1.7			
上層部	埋藏土	B-062	Fig. 79-11	19.2	1.4			
	埋藏土	B-052	Fig. 79-12	18.0	1.7	(18.2)	○	
	埋藏土	B-053	Fig. 79-13	18.0	3.3	18.2	○	
	埋藏土	B-055	Fig. 79-14	18.0	3.0	18.0	○	
	埋藏土	B-056	Fig. 79-15	13.0	3.6	0.0	○	
	埋藏土	B-057	Fig. 79-16	11.0	3.6	0.0	○	
	埋藏土	B-058	Fig. 79-17	11.0	3.6	0.0	○	
	埋藏土	B-059	Fig. 79-18	11.0	3.6	0.0	○	
	埋藏土	B-060	Fig. 79-19	12.1	3.2	0.7	○	
	埋藏土	B-061	Fig. 79-20	12.1	3.4	5.9		
上層部	埋藏土	B-063	Fig. 79-21	12.2	3.6	0.7	○	
	埋藏土	B-064	Fig. 79-22	12.2	3.9	0.2	○	
	埋藏土	B-065	Fig. 79-23	12.0	4.0	0.2	○	
	埋藏土	B-066	Fig. 79-24	13.0	3.7	8.8	○	
	埋藏土	B-067	Fig. 79-25	14.0	3.8	0.0	○	
	埋藏土	B-068	Fig. 79-26	14.0	4.2	(16.0)	○	
	埋藏土	B-069	Fig. 79-27	17.0	4.1	18.6	○	
	埋藏土	B-070	Fig. 79-28	22.0	2.0	0.2	○	
	埋藏土	B-064	Fig. 79-29	22.0	0.0	0.0	○	
	埋藏土	B-065	Fig. 79-30	3.0	0.0	0.0	○	
上層部	埋藏土	B-061	Fig. 77-32	3.2	0.0			
	埋藏土	B-066	Fig. 77-33	14.4	3.4	8.6		
	埋藏土	B-068	Fig. 77-34	15.0	2.9	0.7		
	埋藏土	B-069	Fig. 77-35	12.0	6.5	(18.0)	○	
	埋藏土	B-070	Fig. 77-36	(7.0)	3.2	10.3	○	
	埋藏土	B-071	Fig. 77-37	(4.0)	4.8	(7.1)	○	
	埋藏土	B-072	Fig. 77-38	3.6	10.2			
	埋藏土	B-073	Fig. 77-39	28.0	2.0	(14.0)	○	
	埋藏土	B-049	Fig. 77-40	27.4	4.9	19.0	-	
	埋藏土	B-074	Fig. 77-41	27.4	4.9	19.0	-	

5-41段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
埋藏層	埋藏土	B-066	Fig. 79-1	1.7	0.0			
	埋藏土	B-067	Fig. 79-2	1.7	0.0			
	埋藏土	B-068	Fig. 79-3	1.6	0.0			
	埋藏土	B-069	Fig. 79-4	(3.4)	1.0			
	埋藏土	B-070	Fig. 79-5	(3.4)	1.3			
	埋藏土	B-071	Fig. 79-6	(8.5)	2.0	(18.2)		
	埋藏土	B-072	Fig. 79-7	(7.2)	5.1	0.0		
	埋藏土	B-073	Fig. 79-8	1.6	0.0	0.0		
	埋藏土	B-074	Fig. 79-9	1.6	0.0	0.0		
	埋藏土	B-075	Fig. 79-10	2.3	0.0	0.0		
上層部	埋藏土	B-076	Fig. 79-11	3.2	0.0	(10.4)	○	
	埋藏土	B-077	Fig. 82-1	12.3	4.6	6.9	○	
	埋藏土	B-072	Fig. 82-2	1.0	0.0	0.0	○	
	埋藏土	B-073	Fig. 82-3	12.3	4.6	6.9	○	
	埋藏土	B-074	Fig. 82-4	15.0	4.0	(10.0)	○	
	埋藏土	B-075	Fig. 82-5	1.6	0.0			
	埋藏土	B-077	Fig. 82-6	(4.0)	3.1	6.9	-	
	埋藏土	B-078	Fig. 82-7	(4.0)	4.1	6.2	-	
	埋藏土	B-076	Fig. 82-10	(5.2)	2.7	0.7	-	
	埋藏土	B-075	Fig. 82-15	1.0	0.0			

5-42段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
埋藏層	埋藏土	B-079	Fig. 82-1	1.2	0.0			
	埋藏土	B-070	Fig. 82-2	1.0	0.0			
	埋藏土	B-071	Fig. 82-3	2.2	0.0			
	埋藏土	B-072	Fig. 82-4	12.3	4.6	6.9	○	
	埋藏土	B-073	Fig. 82-5	15.0	4.0	(10.0)	○	
	埋藏土	B-074	Fig. 82-6	1.6	0.0			
	埋藏土	B-077	Fig. 82-6	(4.0)	3.1	6.9	-	
	埋藏土	B-078	Fig. 82-7	(4.0)	4.1	6.2	-	
	埋藏土	B-076	Fig. 82-10	(5.2)	2.7	0.7	-	
	埋藏土	B-075	Fig. 82-15	1.0	0.0			
上層部	埋藏土	B-079	Fig. 82-19	16.0	3.9	6.7		

5-43 (15m以下)

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
上層部	埋藏土	B-084	Fig. 82-2	0.0	0.0	(7.2)	○	X
	埋藏土	B-085	Fig. 82-3	3.0	0.0	4.4	○	X
	埋藏土	B-082	Fig. 82-4	(0.0)	1.5	(0.2)	○	
	埋藏土	B-086	Fig. 82-5	(7.0)	3.1			
	埋藏土	B-087	Fig. 82-6	(7.0)	3.1			

5-44段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
埋藏層	埋藏土	B-091	Fig. 82-6	8.5	1.0	7.3	○	
	埋藏土	B-094	Fig. 82-9	(5.0)	1.2	(7.1)	○	
	埋藏土	B-095	Fig. 82-10	(5.2)	1.2	(0.0)	○	
	埋藏土	B-096	Fig. 82-11	(0.0)	1.7	(0.2)	○	
	埋藏土	B-093	Fig. 82-12	(0.0)	1.3	(0.1)	○	

5-45段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
埋藏層	埋藏土	B-093	Fig. 82-14	9.6	1.5	7.0	○	
	埋藏土	B-094	Fig. 82-15	0.0	1.1	(0.2)	○	X
	埋藏土	B-097	Fig. 82-18	1.2	0.0	0.0	○	
	埋藏土	B-092	Fig. 82-17	10.1	1.0	6.6	○	
	埋藏土	B-096	Fig. 82-18	18.4	1.6	7.4	○	
	埋藏土	B-098	Fig. 82-19	(11.0)	1.5	(8.4)	○	X
	埋藏土	B-099	Fig. 82-20	(10.0)	1.1	(0.0)	○	
	埋藏土	B-098	Fig. 82-21	(0.0)	0.9	7.3	○	
	埋藏土	B-099	Fig. 82-22	(4.0)	3.9	0.0	○	
	埋藏土	B-092	Fig. 82-23	(4.0)	3.3			
埋藏土	B-091	Fig. 82-24	(4.0)	3.4				
埋藏土	B-093	Fig. 82-25	(5.0)	3.1				
埋藏土	B-094	Fig. 82-27	15.0	3.4	7.0			

5-46段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
上層部	埋藏土	B-095	Fig. 84-1	(18.1)	1.2	(7.4)	○	○
	埋藏土	B-096	Fig. 84-2	(8.0)	0.8	(7.4)	○	○
	埋藏土	B-097	Fig. 84-3	(14.2)	3.7			

5-47段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
埋藏層	埋藏土	B-092	Fig. 84-8	(15.2)	4.0	0.0		
	埋藏土	B-093	Fig. 84-9	(16.0)	1.8	0.0		
	埋藏土	B-094	Fig. 84-10	(16.0)	1.8	0.0		

5-48段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
上層部	埋藏土	B-091	Fig. 85-1	(18.0)	6.8	(7.0)	○	
	埋藏土	B-092	Fig. 85-2	(18.0)	5.0	(7.0)	○	
	埋藏土	B-093	Fig. 85-3	15.0	5.3	(0.0)	-	

5-49段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
上層部	埋藏土	B-094	Fig. 85-4	2.7	0.0			

5-50段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
上層部	埋藏土	B-095	Fig. 85-5	(0.7)	2.2	(0.2)	○	
	埋藏土	B-096	Fig. 85-6	(0.7)	1.9	(7.0)	○	
	埋藏土	B-097	Fig. 85-7	10.1	1.2	3.0	○	X

5-51段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
上層部	埋藏土	B-098	Fig. 85-8	(14.0)	1.0	0.0	○	
	埋藏土	B-099	Fig. 85-9	(14.0)	1.0	0.0	○	
	埋藏土	B-100	Fig. 85-10	(13.0)	3.0	0.0	○	
	埋藏土	B-101	Fig. 85-11	(14.0)	3.0	0.0	○	
	埋藏土	B-102	Fig. 85-12	(14.0)	3.0	0.0	○	
	埋藏土	B-103	Fig. 85-13	(14.0)	3.0	0.0	○	
埋藏層	埋藏土	B-098	Fig. 85-14	(16.1)	5.2	0.0		

5-52段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
埋藏層	埋藏土	B-092	Fig. 85-15	1.7	0.0			
	埋藏土	B-093	Fig. 85-16	1.7	0.0			
	埋藏土	B-094	Fig. 85-17	1.0	0.0			
	埋藏土	B-095	Fig. 85-18	1.0	0.0			
	埋藏土	B-096	Fig. 85-19	1.0	0.0			
	埋藏土	B-097	Fig. 85-20	1.0	0.0			
	埋藏土	B-098	Fig. 85-21	1.7	0.0			
	埋藏土	B-099	Fig. 85-22	1.0	0.0			
	埋藏土	B-100	Fig. 85-23	1.0	0.0			
	埋藏土	B-101	Fig. 85-24	1.0	0.0			

5-53段灰色土

層別	層名	層番号	頂面番号	口積	底積	底積	A	B
上層部	埋藏土	B-102	Fig. 85-25	(16.0)	1.0	(7.0)	○	
	埋藏土	B-103	Fig. 85-26	(16.0)				

5-125 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-004 Fig. 69-1		1.3 ϕ a			
	器口	器	B-005 Fig. 69-2		1.3 ϕ a			
	器口	器	B-002 Fig. 69-3		2.3 ϕ a	(7.3)	○	
	器口	器	B-003 Fig. 69-4		1.6 ϕ a	(11.6)	○	

5-126 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土器群	器口	器	B-001 Fig. 69-9	(8.6)	1.7 ϕ a	(8.6)	○	
	器口	器	B-001 Fig. 69-7	(8.6)	1.6	(18.2)		
	器口	器	B-003 Fig. 69-4	(7.0)	8.8	(8.6)	○	

5-127 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-002 Fig. 69-9	(11.6)	1.6 ϕ a			
	器口	器	B-001 Fig. 69-10		0.9 ϕ a			
	器口	器	B-004 Fig. 69-11		1.6 ϕ a	(6.6)		
	器口	器	B-003 Fig. 69-12		2.4	4.4	1.9	
土器群	器口	器	B-009 Fig. 69-13	(8.6)	2.3 ϕ a			
	器口	器	B-007 Fig. 69-14	(8.6)	2.6	3.1	○	X
	器口	器	B-008 Fig. 69-15	(8.2)	2.9	(8.7)	○	X
	器口	器	B-006 Fig. 69-16	(8.6)	3.7 ϕ a	(5.6)		

5-128 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-001 Fig. 69-20	(8.1)	1.9	1.3	○	X
	器口	器	B-002 Fig. 69-21	(11.6)	3.3	(8.3)	○	○
	黄色土器上群	器	B-003 Fig. 69-22		4.1 ϕ a	(8.8)	X	○
	黄色土器上群	器	B-004 Fig. 69-23		4.0 ϕ a			

5-129 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土器群	器口	器	B-001 Fig. 69-28	(11.2)	2.6	7.2	○	○

5-130 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-001 Fig. 69-29		1.8 ϕ a	(8.3)	X	X

5-131 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-001 Fig. 69-28		1.7	(6.6)		○
黄褐色系	器口	器	B-001 Fig. 69-28		11.0	1.6	6.8	○

5-132 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土器群	器口	器	B-002 Fig. 69-1	(8.3)	1.2	(8.3)	○	○
	器口	器	B-003 Fig. 69-2	(8.6)	1.1	(11.2)		
	器口	器	B-004 Fig. 69-3		1.1			
	器口	器	B-001 Fig. 69-4	(8.3)	3.4			
	器口	器	B-001 Fig. 69-4	(8.3)	3.4			

5-133 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-002 Fig. 69-9		2.0 ϕ a			

5-134 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土器群	黄色土器	器	B-001 Fig. 69-11		2.3 ϕ a			

5-135 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土器群	器口	器	B-003 Fig. 69-13		6.6			
	器口	器	B-001 Fig. 69-14		13.7	3.3		
	器口	器	B-002 Fig. 69-15		(6.2)	5.7		

5-136 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-001 Fig. 69-20		1.8 ϕ a	6.7		○

5-137

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-002 Fig. 69-20		2.3 ϕ a	(11.6)		

5-138 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-002 Fig. 70-1		1.4 ϕ a			
	器口	器	B-011 Fig. 70-2		1.4 ϕ a			
	器口	器	B-012 Fig. 70-3		1.4 ϕ a			
	器口	器	B-002 Fig. 70-4	(11.1)	3.3	7.7		
	器口	器	B-003 Fig. 70-5		2.3 ϕ a	(8.6)		
	器口	器	B-010 Fig. 70-6		2.3 ϕ a			
土器群	器口	器	B-006 Fig. 70-11		1.6 ϕ a	(13.6)		

5-139 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-009 Fig. 71-1		1.1 ϕ a			
	器口	器	B-002 Fig. 71-2		1.6 ϕ a	(8.3)	○	
	器口	器	B-004 Fig. 71-3		1.6 ϕ a	(8.6)	○	X
	器口	器	B-003 Fig. 71-4		4.0 ϕ a			
	器口	器	B-013 Fig. 71-5		1.2 ϕ a			
器口	器	B-001 Fig. 71-11		2.3 ϕ a				

5-140 黄褐色系上

種別	群 種	動物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黄褐色系	器口	器	B-001 Fig. 71-11	(12.3)	3.0	(8.7)	○	
	器口	器	B-002 Fig. 71-18	(18.3)	4.8	(8.3)	○	
	器口	器	B-004 Fig. 71-28		2.2 ϕ a	(8.3)	○	
	器口	器	B-003 Fig. 71-27		3.2 ϕ a	(8.3)		

9、第198次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市都府楼南1丁目489-5、筑紫野市大字杉塚435-15で、鶯田川の西岸に位置する。1996(平成8)年10月より共同住宅建築に対する文化財の取り扱いについて、問い合わせが始まり、1996(平成8)年11月13日に確認調査を実施し、現況から深さ0.9m程で遺構が確認された。その後工事計画は中断していたが、1997(平成9)年12月、文化財保護法57条による共同住宅建築計画が出され、調査期間や費用等について協議を重ねた後、九州電工ホーム株式会社の費用負担のもと発掘調査が実施された。調査期間は1998(平成10)年3月24日～7月15日、調査は高橋学が担当した。調査対象面積は997㎡、調査面積は596㎡である。

(2) 基本層位

調査地は鶯田川の西岸にあたる標高約28～29mの沖積地に位置する。現地表から0.7m程下げると田水田面に到達する。水田耕作土は0.2mの厚みがあり、その下には約0.1mの床土を検出した。床土の下には暗灰色土が薄く堆積しその下が地山となる。遺構は地山面に穿って形成されている。遺構面は1

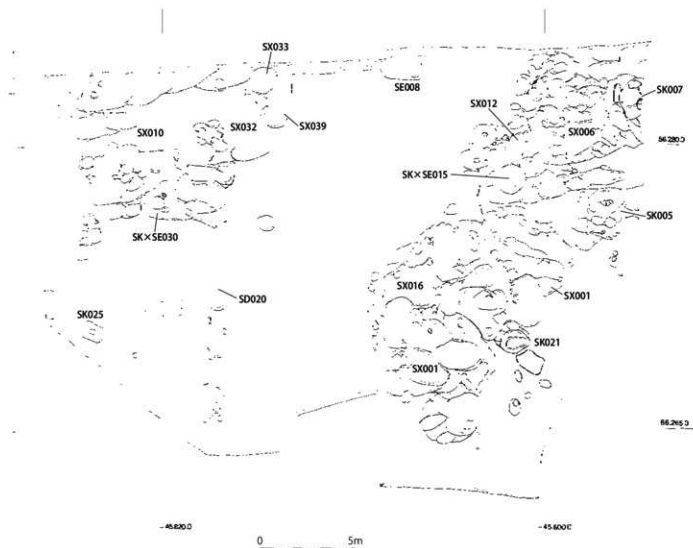


Fig. 82 第198次調査遺構全体図 (1/200)

層で、地形的には西から東方向に向かって低くなっている。地山は、明茶色砂（粗砂粒）の下に黄灰色粘土（細砂粒）が堆積しているが、部分的に黄灰色粘土が露出している。

(3) 検出遺構

溝

198SD020 (Fig. 83)

検出長 8.7m、幅 0.55～0.9m、深さ 0.15～0.3m の南北溝で、振れは N-2° 50' 3" -E である。溝底は北側に向かって下がっていて、埋土は 2 層で、上層は土器を多く含む暗茶灰色土で、下層は水が溜まり堆積したことを物語る明茶灰色粘質土であった。

なお、この溝からも、他の遺構同様、近現代の遺物が 2 点出土したが、他の遺構と異なり、残存率の高い土師器が多いことから、これら土師器が掘り返された後に埋没したとは考えにくく、遺構を覆っていた暗灰色土が残存し、それに近現代の新しい遺物が含まれていたものと推測される。遺構の時期は、出土遺物より 12 世紀後半～13 世紀前半と考えられる。

井戸

198SE008 (Fig. 84)

調査区北端で検出された土坑で、東西 2.34m、南北 1.3m 以上、深さ 1.4m 以上の隅丸方形で、調査区外に続いている。その深さから井戸と推測される。上から黄褐色砂、灰茶色粘土、暗褐色砂の層位で、埋土から肥前系の磁器が出土しているため、近世後期以降の埋没と推測されるが、最上位からの出土のため混入の可能性もあり、その場合、井戸の使用時期は平安時代後期の可能性も考えられる。なお、調査区際ということで完掘できていない。

土坑もしくは井戸

198SK×SE015 (Fig. 84)

径 1.5m、深さ 1.09m の円形土坑で、素掘りの井戸の可能性もある。埋土は主に明灰茶色砂であるが、上層に僅かに淡灰茶色土が堆積する。底面に木質が腐食したような暗茶色粘土層が薄く堆積する。

198SK×SE030 (Fig. 84)

東西 1.87m、南北 2.05m、深さ 1.0m の不定形土坑である。底面にはさらに大きさ 0.6×0.7m、深さ 0.17m の方形の土坑やピットが掘られている。底面の土坑が曲物痕とみると井戸の可能性もある。

土坑

198SK005 (Fig. 84)

東西 3.0m、南北 2.72m、最深 1.17m の不整形の土坑である。埋土は、上層が褐茶色土で、その下は暗青灰色土に黄灰色粘土が混じる埋土で、その上層付近から完形の木製柄杓がひっくり返った状態で出土した。

198SK007 (Fig. 85)

調査区際で検出された円形土坑で、大きさは南北 3.9m、東西 2.8m 以上、深さ 0.86m である。埋土は灰茶色土に黄灰色土が混じる。土坑は調査区外に続いている。

198SK021 (Fig. 85)

東西 1.9m、南北 1.75m の不定円形で、深さ 0.1m 程から南側はさらに深くなり、東西 1.6m、南北 1.25m の土坑となり、さらに深さ 0.8m 程からは 0.65～1.1m の楕円形土坑となり、全体として深さ 1.35m の

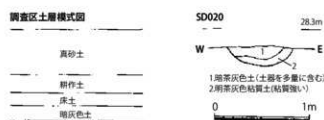


Fig. 83 第 198 次調査調査区土層模式図および 198SD020 土層実測図 (1/40)

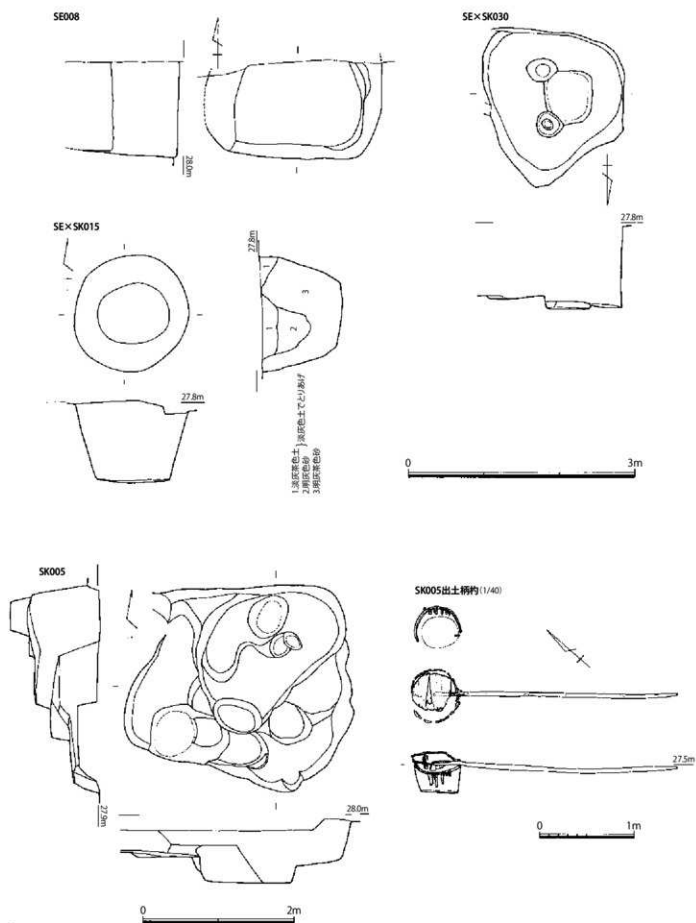
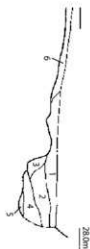


Fig. 84 198SE008, SE×SK015·030, SK005 遺構実測図 (1/40, 1/50)

SK007

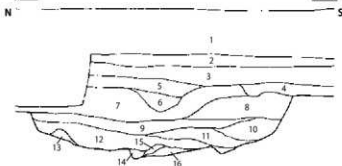
1. 灰褐色粘土(白色粘土ブロック混入)
2. 灰褐色粘土(白色粘土ブロック混入)ややわらかい
3. 灰褐色粘土
4. 灰褐色粘土
5. 灰褐色粘土
6. 灰褐色粘土
7. 灰褐色粘土
8. 灰褐色粘土
9. 灰褐色粘土
10. 灰褐色粘土
11. 灰褐色粘土
12. 灰褐色粘土
13. 灰褐色粘土
14. 灰褐色粘土
15. 灰褐色粘土
16. 灰褐色粘土



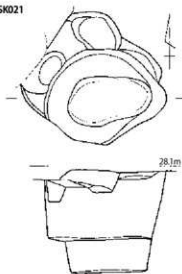
1. 黄褐色砂質土(花崗岩の風化土)→黄砂土
2. 褐灰色土
3. 褐灰色土
4. 灰青褐色土(黄褐色粘土ブロックが少量混入していた)S-1
5. 褐灰色土(黄褐色粘土と暗褐色粘土のブロックが混入)
6. 褐灰色土(黄褐色粘土ブロックを少量混入)
7. 灰褐色土(1cm以下の土器破片を多く含む)
8. 灰褐色土(黄褐色粘土ブロックを少量含む)
9. 褐灰色土(8と比べてやや粘質が安定)
10. 黄褐色土(灰色土の細砂粒を少量含む)
11. 黄褐色粘質土(粘質はとて強い)
12. 灰青褐色粘質土
13. 淡緑灰色粘質土(細砂粒)
14. 青灰色粘土
15. 黄褐色粘質土
16. 淡灰緑色砂(地山)

SK007 横壁土層

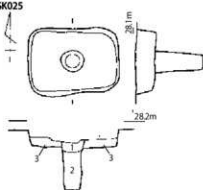
29.0m



SK021



SK025



1. 灰褐色粘質土(1と同層相)柱礎
2. 淡青灰色粘質土
3. 灰褐色土(砂質土を多く含む、炭化物を少量含む)→掘り方

0 3m

Fig. 85 198SK007・021・025 遺構実測図 (1/50)

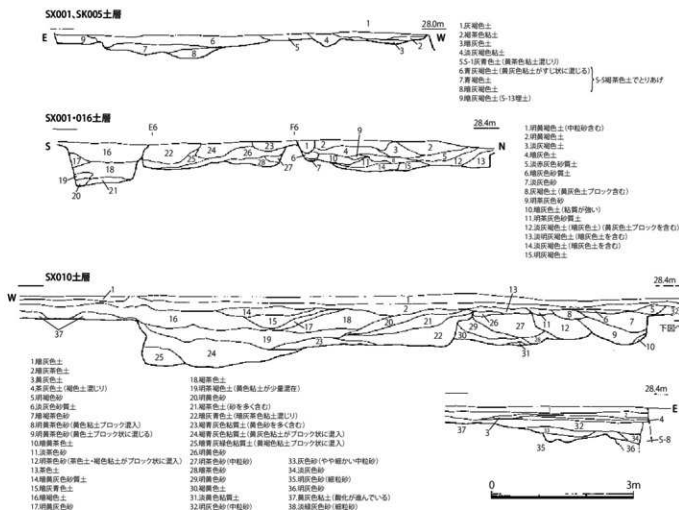


Fig. 86 198SX001・010・016 土層実測図 (1/80)

土坑となる。最上層は炭化物混じりの褐色土や灰褐色土で、その下層は青灰色砂と地山に近い淡灰色粘土が互層となり、最下層は明青灰色砂となる。

198SX025 (Fig. 85)

大きさ 1.2m×0.9m、深さ 0.2m の隅丸方形の土坑である。その土坑底面中央には、深さ 0.65m、径 0.23m 前後の柱痕のようなピットが掘られている。

粘土採掘坑

調査区の中央付近は明茶色砂で、東西両側に黄灰色粘土層があり、その粘土を掘削した不定形の土坑が広がっている。

198SX001・006・012・016 (Fig. 86)

調査区の東側に広がる粘土採掘坑で、全体として南北約 21m、東西約 8m、底面は凹凸していて、最深 0.7m ほどである。埋土には地山と同じ黄灰色粘土が混じる。

198SX010・032・033・039 (Fig. 86)

調査区西側で検出した隅丸方形の土坑で、東西 11.5m、南北 8.0m 以上で、北面ほど深くなり、最深で 1.2m を測る。埋土には地山を掘り出した黄灰色粘土ブロックが多く混じっている。なお、上面は重機で除去した。

(4) 出土遺物

溝

198SD020 出土遺物 (Fig. 87)

土師器

小皿 a (1～10) 復元口径 8.4～9.5 cm。底部切り離しは、全て回転系切りで板状圧痕を残す。色調は淡橙茶色や淡黄色を呈する。10 の口縁部には煤が付着する。

坏 a (11～35) 口径 14.3～15.6 cm で、35 はやや大きく 16.7 cm。底部切り離しは全て回転系切りで板状圧痕を残す。色調は淡黄橙色や淡赤橙色などを呈する。16 は内外面に煤が付着する。

高麗青磁

椀 (36) III-2 類。復元高台径 7.4 cm。内外面に灰緑色釉を施し、畳付けや内面に白色の目跡が残る。

石製品

砥石 (37) 片方を欠損していて、現存長 9.3 cm、幅 2.8×1.2 cm。全面研磨されている。暗灰色の泥岩製。

土坑

198SK005

この遺構からは、肥前系の染付片が出土し、時期は近世後期以降と推測されるが、遺物は小片のため図化していない。なお、ここに図化したものは、平安後期の遺物の中で珍しい遺物である。

198SK005 褐茶色土出土遺物 (Fig. 88)

青白磁

壺 (1、2) 2 点は同一個体の可能性がある。1 は肩部付近で、内面は強い回転ナデで露胎。外面は縦押線やヘラ沈線を施し、淡い緑青色釉を薄く施している。2 は底部で、体部外面には縦押線があり、淡い緑色釉を施すが、高台と内面は露胎である。

朝鮮系無釉陶器

壺 (3) 胴部付近で、内面は強いナデ、外面は叩きの後強いヨコナデを施す。色調は内外面とも暗灰色を呈するが、断面は茶褐色を呈する。

木製品

柄杓 (Fig. 84) 全体で長さ 140 cm、自然木の柄の長さは 115 cm、容器部分は径 25～27.5 cm、埋土の痕跡から推測される容器の深さは約 15 cm である。容器部分は桶型で側板はほとんど腐食しているが、底板は残存する。底板周囲には鉄製のタガが残っていた。近世後期以降のものである可能性が高い。

198SK005 暗青茶色土出土遺物 (Fig. 88)

白磁

椀 (4) 広東系で、体部に僅かな屈曲を設ける。内外面には細かな貫入がみられる。小片で分類は明確にできない。

198SK007 出土遺物 (Fig. 88)

青白磁

蓋 (5) 復元口径 6.2 cm。天井部外面にはうっすらと文様が施され、青味のある透明釉を施すが、内面は露胎である。

肥前系磁器

皿もしくは鉢 (6) 底部は蛇の目高台で、畳付けは露胎、その他は青白色釉で、内面には呉須で文様を施す。

その他の遺構

198SX001 灰青色土出土遺物 (Fig. 88)

青白磁

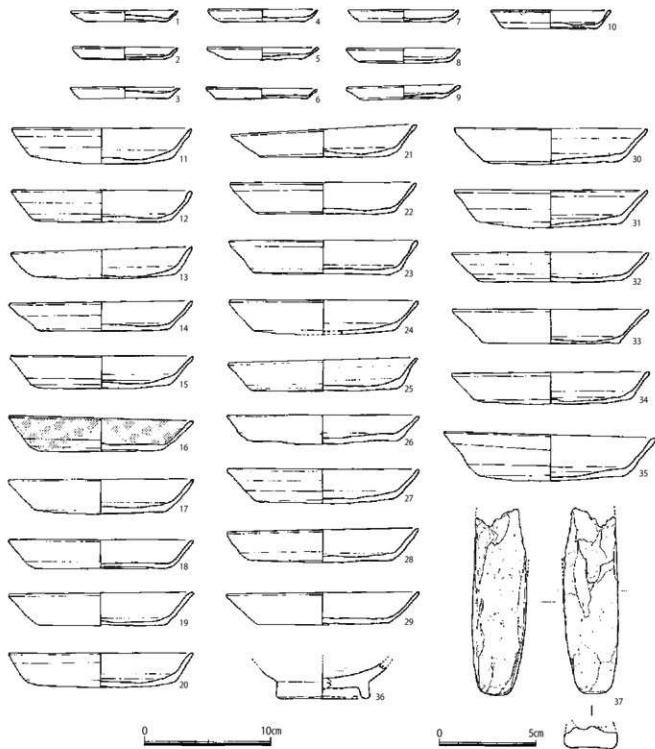


Fig. 87 198SD020 出土遺物実測図 (1/3、37は1/2)

合子蓋 (7) 復元口径4.8 cm。外面に浅く文様を施し、外面と内面天井部に淡い緑色釉を薄く施す。

肥前系磁器

碗 (8、9) 8は復元高台径2.6 cm。全体的に淡い水色で、外面に呉須で圈線を施す。9は口縁部内外面に薄い水色釉で四方禪文を施す。

暗灰色土出土遺物 (Fig. 88)

須恵質土器

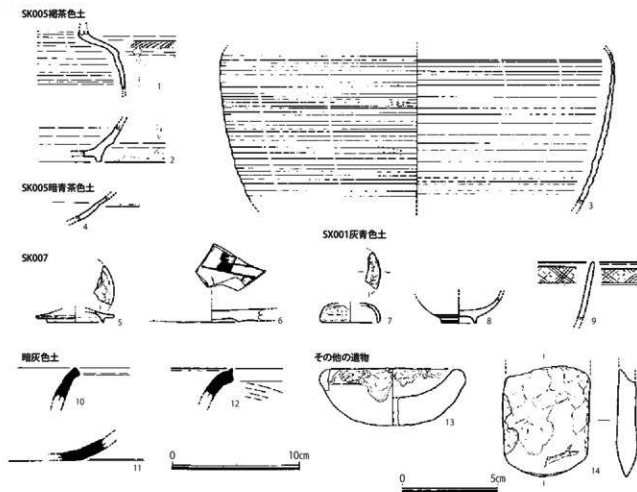


Fig. 88 198SK005・007、SX001、暗灰色土、その他出土遺物実測図 (1/3、14は1/2)

甕 (10、11) 胎土は白色砂粒を僅かに含み、暗灰色を呈する。10は内外面とも回転ナデ調整。11は外面に叩き痕が残る。

鉢 (12) 底部はヘラ切りで未調整、その他内外面ともヨコナデで、色調は青灰色を呈する。

その他の出土遺物 (Fig. 88)

土製品

トリベ (13) 復元口径 11.6 cm、器高 4.6 cm。内面と口縁部外面を中心に、灰緑茶色や明茶色などに溶解した付着物が多く付着する。SD011 より出土。

石製品

磨製石斧 (14) 上部を欠損し、現存長 5.7 cm、幅 4.55 cm、厚さ 1.05 cm。表面の加工はやや摩滅し明確ではないが、先端部を中心に研磨痕が確認できる。SX001 灰青色土より出土。

(5) 小結

今回の調査で検出された遺構は粘土採掘坑と南北溝である。粘土採掘は黄灰色粘土を採集することを目的としている。粘土採掘坑の埋土から出土した遺物は、ほとんどが平安時代後期～13世紀前半にかけてのものであったが、ごく僅かに肥前系磁器や国産陶器が含まれていた。通常なら混入と判断する程の1、2点という極めて少ない状況であった。しかし、この粘土採掘に関して、以下のような興味深い聞き取り記録がある。

「瓦の粘土は、今の田中の森の辺りで採っていた。畑で粘土を取ったから田にしたため“ヂサグ田”と言っていた。」(陶山恒雄、大正14年生、通古賀在住、2008年聞き取り)。

通古賀集落には瓦葺がかつて3軒あったと言われ、そのひとつの瓦葺については、第322次調査として瓦葺を調査し、この報告書でも報告している。証言にあった田中の森は、この調査地の南東側約160mにあり、古老が記憶する採掘場所は、その森の北側一帯といい、調査地から東に約130m程である。隣接地ではないものの、記憶の中でいう周辺の範疇に入ると言って良いものと考えられる。しかし、田中の森に近い第229・253次調査では、砂質の地盤ということもあり、土取りの痕跡が全く確認されていない。田中の森付近一帯で粘土を求め、粘土質のこの調査地まで採掘していった可能性が高い。また、平安後期～13世紀の遺物が多いのに対し、近世以降の遺物が極めて少ないのは、この地域が近世以降居住域ではなく田畑であったこと、そして、その地下の粘土を掘削し埋め戻す際に、平安後期～13世紀の遺物を破壊し、その土砂で埋められたためと推測される。

このような粘土採掘による破壊を免れた古代・中世の遺構は、SD020とSK×SE030である。調査地から出土した遺物は、12～13世紀前半にかけての約100年間のものがほとんどであった。この調査地の西側で筑紫野市によって調査された第166・186次調査では、検出された遺構が、11世紀後半～12世紀前半のものが占めており、今回の調査はそれより若干新しい遺構が点在していたということになる。

そして、今回の調査地は、井上条坊案を参考に条坊を復元すると調査地西端を11坊路が通ることになるが、坊路に関する遺構は検出していない。鷲田川の西側にある調査地周辺の調査では、条坊と異なる溝や道路痕跡が確認されている調査（第166・186・222次調査）も多く、井上氏が指摘するように右郭について、条坊は8坊までであったことを補足する結果とも言え、198SD020は、条里地割に由来した溝である可能性が高い。

参考文献

- 通古賀区『とおのこが風土記』2003年
太宰府市教委『太宰府条坊跡27』太宰府市の文化財第81集 2005年
筑紫野市教委『太宰府条坊跡 第166次調査』筑紫野市文化財調査報告書第102集 2010年
筑紫野市教委『太宰府条坊跡 第186次調査』筑紫野市文化財調査報告書第103集 2010年
井上信正「太宰府条坊研究の現状」『太宰府条坊跡44』太宰府市の文化財第122集 太宰府市教委 2014年
太宰府市教委『太宰府条坊跡45』太宰府市の文化財第123集 2015年

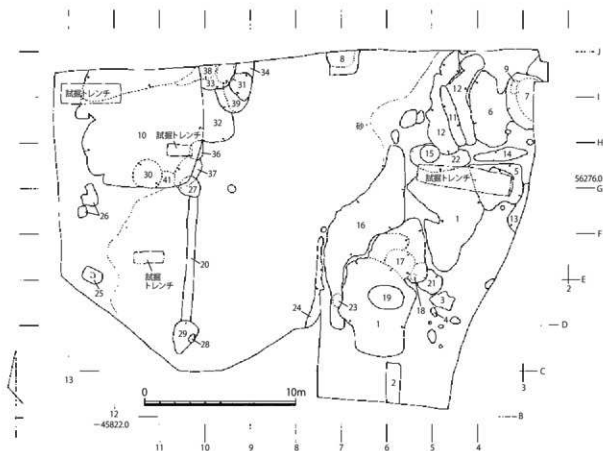


Fig. 89 第198次調査遺構略測図 (1/250)

表21 第198次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
198SD020	北端中点	56275.68	-45816.75	-442.945	-991.637	N-2° 50' 3" -E
	南端中点	56267.60	-45817.15	-451.028	-991.956	

表22 第198次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	198SX001	土取り穴		近世後期以降	C~G, 4~6
2		窪み	暗灰色砂	近世後期以降	BC5
3		窪み	暗茶色土	平安時代~	D4
4		窪み		平安時代~	D4
5	198SX005	土坑		近世後期以降	F03~
6	198SX006	土取り穴	S-12→6→7	近世後期以降	H13
7	198SX007	土坑	S-12→6→7	近世後期以降	H12.3
8	198SE008	井戸	黄褐色砂	平安後期? 近世後期以降?	I6.7
9		窪み		近世後期以降	I3
10	198SX010	土取り穴	遺物は12c後~13c前。	近世後期以降	G~I, 10~12
11	198SD011	溝	灰青色土 茶色粘土ブロック混じり	近世後期以降	H4~
12	198SX012	土取り穴	S-22→12→6→7	近世後期以降	H4~I4
13		土坑		11世紀後半	F3
14		溝		11世紀後半	G3
15	198SK×SE015	土坑もしくは井戸	S-22→12→15	近世後期以降	G4
16	198SX016	土取り穴		近世後期以降	D~F, 5~7
17		土坑	S-1の底面	12世紀前半	E5
18		土坑	S-18→1	12世紀~	E5
19		土取り穴	S-1→19	近世後期以降	D5.6
20	198SD020	溝		12世紀後半~13世紀前半	D10~F10
21	198SX021	土坑		近世後期以降	DE4.5
22		窪み	S-22→12→15	近世後期以降	G4.5
23		窪み	S-23→16		D7
24		窪み	暗灰色土	近世後期以降	DE7
25	198SX025	方形土坑			E12
26		窪み	暗灰色土	近世後期以降	F12
27		土坑	S-20→27→10	13世紀~	F10, G10
28		ピット	明灰色土 S-29→28	13世紀~	C10
29		窪み	S-29→28	13世紀~	C10
30	198SK×SE030	土坑もしくは井戸	灰褐色粘土→茶黄色砂 S-30→10	平安後期~	G11
31		窪み	暗褐色土	近世後期以降	I9
32	198SX032	土取り穴	黄灰褐色土	近世後期以降	H9
33	198SX033	土取り穴	淡茶色土	近世後期以降	I9
34	198SX034	土取り穴	淡灰色砂	近世後期以降	I9
36		土坑		近世後期以降	G10
37		土坑		近世後期以降	G10
38	198SX038	土取り穴		平安後期~	I9, 10
39	198SX039	土取り穴		近世後期以降	I9
41		土坑	濃黄色土(炭片, 暗灰色土混じり)	平安後期?~	G10

表23 第198次調査 出土遺物一覧表

5-1	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a、P _{5a} (0)、丸底杯a、碗c、供養具	
瓦 質 土 師	器	碗	
瓦 質 土 師	器	碗	
白 磁	器	Ⅱ(1)、Ⅱ-1(1) 白磁碗口(1) 水注(1)	
石 製	品	銅片(黒曜石)、玉石	
5-1褐色土	遺 患	銅鏃、鏃、破片	
土 師	器	小瓶a(○)、丸底杯、雙形、供養具	
肥 前 系 磁 器	器	碗、碗c	
國 産 陶 器	器	破片	
白 磁	器	Ⅱ-1(3)、V-3a(1)、陶破片(2)	
肥 前 系 磁 器	器	Ⅱ(1)破片(2)、広葉系(2)	
國 産 陶 器	器	碗：Ⅱ-1(1)	
中 國 陶 器	器	破片(1)	
瓦 質 土 師	器	碗(1)	
石 製	品	銅片(安山岩)、磨石片	
5-1灰青色土	遺 患	銅鏃、鏃、環、鏃c、鏃、雙形、供養具	
土 師	器	小瓶a(○)、P _{5a} 、丸底杯a、碗c、雙形、供養具	
瓦 質 土 師	器	碗、碗c	
肥 前 系 磁 器	器	碗、破片	
瓦 質 土 師	器	碗、鏃	
肥 前 系 磁 器	器	碗、破片	
國 産 陶 器	器	碗、鏃	
國 産 陶 器	器	破片	
遺 患 質 (輸入)	器	朝鮮系鉄胎陶器 Ⅱ(2)、Ⅱ-1(5)、IV(22)、IV-1a(5)、V-1a(1)、V-2a(2) V(2)、Ⅱ(2)、V-4×Ⅱ-1(1)、広葉系(4)、漆(1) 陶破片(22)	
白 磁	器	Ⅱ：Ⅱ-1a(1)、Ⅱ(2)、IV-1a(5)、IV-1b(3)、V(1)、V-2a(4) V _{5a} ×V _{5b} (1)、V-1×Ⅱ-1(1)、V-1×Ⅱ(1)、V-1×Ⅱ(1)、 V _{5b} (1)、V _{5c} (1)、Ⅱ(1)、広葉系(2)、磁破片(1) Ⅱ：Ⅱ(1)、破片(1)、小瓶? (1) 白磁器：(21)、広葉系(1)、口縁折片(1)、口縁外反(1) 破片(2)、内面磨目(3)	
青 白 磁	器	Ⅱ(1)、合子蓋(1)	
肥 前 系 磁 器	器	Ⅱ(1) 磨石片(1)	
肥 前 系 磁 器	器	破片(1)、IV(1)	
中 國 陶 器	器	破片(2)	
金 屬 製	品	銅平瓦(佛子、無文)、丸瓦(佛子)、蓮し瓦、瓦玉、不明瓦	
石 製	品	銅片(黒曜石、安山岩)、石鏃、石斧、石楯	
土 師	器	品 土 壺	
石 製	品	銅片(安山岩)	
その他	他	石炭	
5-2	土 師	器	破片
國 産 陶 器	器	破片	
白 磁	器	碗口直口(1)	
瓦 質 土 師	器	碗口直口(1)	
5-3	土 師	器	供養具
5-4	土 師	器	供養具
5-1褐色土	遺 患	銅鏃、鏃、破片	
土 師	器	小瓶a(○)、P _{5a} (1)、丸底杯a、碗c、供養具	
黒色土 師	器	雙形、磨付鉢	
瓦 質 土 師	器	碗、碗c	
肥 前 系 磁 器	器	碗、破片	
肥 前 系 磁 器	器	破片	
白 磁	器	V(1)、IV(6)、V-2(1)、V-3a(1)、V-1×Ⅱ-2(1) Ⅱ：Ⅱ-47(1)、夕夕々(1)、漆(1)、陶破片(7) Ⅱ：Ⅱ×Ⅱ(1)、VI-6(2)、V-1×Ⅱ有文(1)、Ⅱ(1)、破片(1) 破片(1) 白磁器：(2)、Ⅱ(1)、口縁折片(1)、広葉系(2) 内面磨目(1)	
青 白 磁	器	Ⅱ(2)	
遺 患 質 (輸入)	器	朝鮮系鉄胎陶器 Ⅱ 銅平瓦(佛子)、瓦玉	
石 製	品	銅片(黒曜石)、石鏃(安山岩)、平玉石	
木 製	品	漆筒	
5-1緑黄色土	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a(○)、丸底杯a、供養具	
肥 前 系 磁 器	器	破片	
白 磁	器	Ⅱ(1)、IV(1)、広葉系(1)	
肥 前 系 磁 器	器	Ⅱ：Ⅱ-1b(1)、陶破片(2)、広葉系(1)	
遺 患 質 (輸入)	器	朝鮮系鉄胎陶器	
5-2褐色色砂	土 師	器	破片
白 磁	器	碗、IV(1) 白磁破片(1)	
5-2灰青色土	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a(○)、丸底杯a、供養具	
瓦 質 土 師	器	碗	
肥 前 系 磁 器	器	碗、破片	
白 磁	器	Ⅱ：Ⅱ-1(1)、X17(1)、黒破片(1)	
中 國 陶 器	器	破片(1)	
瓦 質 土 師	器	碗(1)	
石 製	品	銅片(黒曜石)	

5-4	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a(○)、P _{5a} (1、○)、丸底杯a、丸底杯c、供養具	
瓦 質 土 師	器	雙形	
瓦 質 土 師	器	碗	
肥 前 系 磁 器	器	碗(広葉系)	
遺 患 質 (輸入)	器	朝鮮系鉄胎陶器 Ⅱ：Ⅱ-1(1)、Ⅱ(2)、IV-1a(1)、IV(1)、V-1×Ⅱ-2(1) V-2(1)、漆(1)、陶破片(6) Ⅱ：Ⅱ-1×Ⅱ(1)、広葉系(1)、黒破片(1) 合子蓋(1)、Ⅱ(1) 白磁器：(2)、広葉系(2)、内面磨目(1)、白磁? (1)	
中 國 陶 器	器	破片(1)	
石 製	品	銅片(磨目、無文、破片) 品銅片(安山岩、黒曜石)、平玉石	
5-7	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a(○)、雙形、供養具	
遺 患 質 土 師	器	碗	
肥 前 系 磁 器	器	Ⅱ×Ⅱ鉢	
白 磁	器	V-1×Ⅱ-2(1) Ⅱ：VI(1)、VI-1b(1) 白磁破片(1) 磨石(1)	
青 白 磁	器	Ⅱ	
中 國 陶 器	器	水注(1)	
5-7褐色土	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a、P _{5a} (1)、供養具	
遺 患 質 土 師	器	碗	
肥 前 系 磁 器	器	Ⅱ：Ⅱ(1)、IV(1)	
白 磁	器	白磁破片(2)	
瓦 質 土 師	器	Ⅱ×Ⅱ鉢(無文)	
5-8	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a(○)、丸底杯a、雙形、供養具	
黒色土 師	器	碗	
肥 前 系 磁 器	器	破片	
遺 患 質 (輸入)	器	朝鮮系鉄胎陶器 Ⅱ VI-1a(1) 白磁破片(2)	
白 磁	器	銅平瓦(佛子)、蓮し瓦	
石 製	品	銅片(安山岩)	
5-8黄褐色砂	土 師	器	小瓶a(○)、破片
白 磁	器	碗、IV(1) 白磁破片(1)	
5-8灰青色土	土 師	器	丸底杯a、供養具
瓦 質 土 師	器	碗、IV(1)	
瓦 質 土 師	器	碗及玉	
5-8褐色色砂	遺 患	銅鏃、鏃	
土 師	器	小瓶a(○)、供養具、破片	
白 磁	器	Ⅱ-1a(2)、陶破片(2)	
5-10	土 師	器	小瓶a(○)、P _{5a} (1)、供養具
白 磁	器	破片(1)	
瓦 質 土 師	器	銅平瓦	
5-11	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a、破片	
瓦 質 土 師	器	碗c	
國 産 陶 器	器	破片	
白 磁	器	白磁破片? (1)	
瓦 質 土 師	器	破片	
土 師	器	品トリ<	
5-12	遺 患	銅鏃	
土 師	器	小瓶a(○)、丸底杯a、供養具	
瓦 質 土 師	器	碗	
肥 前 系 磁 器	器	Ⅱ：V-2(1)、陶破片(1)	
白 磁	器	Ⅱ：Ⅱ-1(1)、X17(1)、黒破片(1) 白磁器：(1)、広葉系(2)	
中 國 陶 器	器	破片(1)	
瓦 質 土 師	器	破片	
石 製	品	銅片(黒曜石)	

10、第 229 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は鷺田川の南側に位置し、太宰府市都府楼南1丁目 470-1、475-1、475-7、475-8 である。

2000（平成12）年2月から宅地造成に対する文化財の取り扱いについて、問い合わせが始まった。2002（平成14）年2月8日に確認調査を行い、現況面から深さ0.3mで遺構の存在が確認された。その

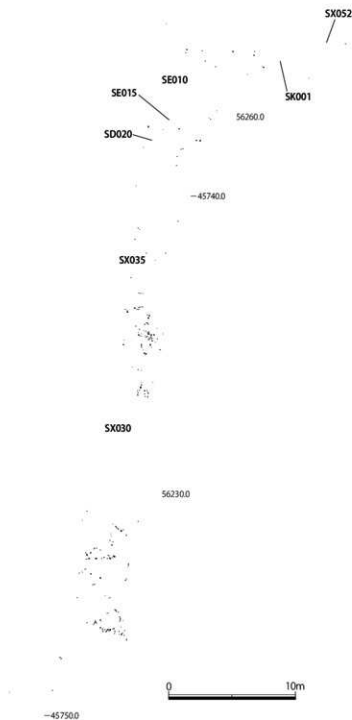
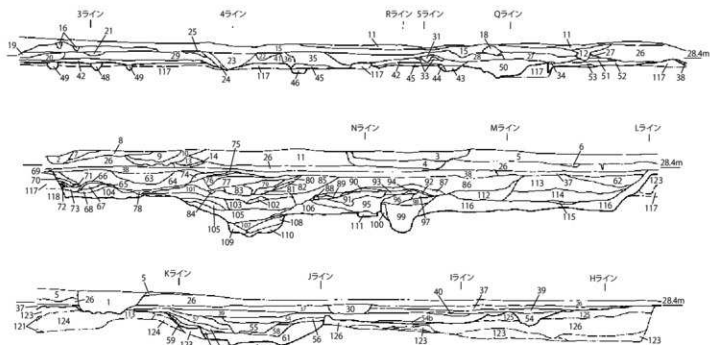


Fig. 90 第 229 次調査遺構全体図 (1/300)



- | | | |
|----------------------|------------------------|---------------------------------|
| 1 黒砂土と灰色土混じり層状 | 41 黒砂土 | 80 褐色粘砂 |
| 2 粘砂土(地山)ブロック置入り灰黄色土 | 42 赤灰色土 | 81 粘砂土 |
| 3 黄灰色土 | 43 2.4層赤土 | 82 灰黄色粘砂 |
| 4 灰入り黄灰色土(砂と土之間) | 44 地山混じり灰黄色土 | 83 灰黄色粘砂 |
| 5 黄砂土 | 45 赤灰色粘土 | 84 黄灰色粘砂 |
| 6 黄砂土 | 45.5 粘 | 85 粘砂土(地山)ブロック置入り灰黄色粘砂 |
| 7 灰黄色土 | 47 黄灰色土 | 86 粘砂土 |
| 8 粘砂土 | 48.5 1層粘砂土 | 87 粘砂土 |
| 9 灰黄色土 | 49 黄灰色粘土 | 88 粘砂土 |
| 10 粘砂土 | 50.5 2層赤土 | 89 粘砂土 |
| 11 茶褐色粘砂 | 51 粘砂土 | 90 粘砂土(地山)ブロック置入り灰黄色粘砂 |
| 12 灰色粘砂 | 52 黄灰色土 | 91 粘砂土 |
| 13 灰色土 | 53 黄灰色粘土 | 92 粘砂土 |
| 14 黄灰色土 | 54 灰色土含む灰黄色粘砂(5-30) | 93 黄灰色土 |
| 15 赤土 | 54b 灰黄色粘土 | 94 赤土 |
| 16 黄砂土 | 55 黄灰色土 | 95 粘砂土(地山、茶黄色粘土(地山)ブロック置入り黄灰色土) |
| 17 黄砂土 | 57 黄灰色土 | 96 黄灰色粘土 |
| 18 粘砂土 | 57 黄灰色土 | 97 粘砂土 |
| 19 黄砂土 | 58 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 | 98 粘砂土 |
| 20 黄砂土 | 59 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 | 99 粘砂土 |
| 21 黄砂土 | 60 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 | 99.5 粘 |
| 22 黄砂土 | 61 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 | 100 黄灰色粘土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 23 黄砂土 | 62 粘砂土 | 101 黄砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 24 黄砂土 | 63 赤灰色粘土 | 102 黄砂土 |
| 25 黄砂土 | 64 黄灰色土 | 103 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 26 赤土 | 65 赤粘砂 | 104 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土(砂も含む) |
| 27 白色砂入り黄灰色土 | 66 粘砂土(地山)ブロック入り黄灰色土 | 105 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 28 赤土 | 67 黄砂土 | 106 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 29 赤土 | 68 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 | 107 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 30 粘砂土 | 69 粘砂土 | 108 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 31 黄砂土 | 70 粘砂土 | 109 黄砂土 |
| 32 黄砂土 | 71 粘砂土 | 110 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 33 赤土 | 72 粘砂土 | 111 5.9 |
| 34 黄砂土 | 73 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 | 112 粘砂土(地山) |
| 35 黄砂土 | 74 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色粘砂 | 113 粘砂土(地山) |
| 36 黄砂土 | 75 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色粘砂 | 114 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 37 粘砂土 | 76 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色粘砂 | 115 粘砂土(地山) |
| 38 粘砂土 | 77 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色粘砂 | 116 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| 39 粘砂土 | 78 粘砂土 | 117 粘砂土(地山) |
| 40 黄灰色土 | 79 粘砂土 | 118 粘砂土(地山)ブロック置入り黄灰色土 |
| | | 119 粘砂土(地山) |
| | | 120 黄灰色粘土(地山) |
| | | 121 粘砂土(地山) |
| | | 122 粘砂土(地山) |
| | | 123 粘砂土(地山) |
| | | 124 粘砂土(地山) |
| | | 125 粘砂土(地山) |
| | | 126 粘砂土(地山) |

Fig. 91 第229次調査地東壁土層実測図(1/80)

後宅地造成計画(7戸)について協議を重ねた結果、現況面から盛土が道路予定地で0.3m、宅地で0.4m以上実施することがわかった。よって、宅地部分については、遺構に影響がないもの、開発地内の道路予定地については、調査対象であるため発掘調査することとなった。

調査は2003(平成15)年4月1日～6月17日で実施し、柳智子が担当した。開発対象地は1896.55㎡、調査面積は338.26㎡で、調査地以外の宅地部分は遺構が保存されている。

(2) 基本層位 (Fig. 91・92)

調査対象地は鷺田川の南側に位置する。調査前は南側2/3が水田で、灰色土(耕作土)、橙色土(床土)の直下で河川堆積とみられる黄褐色粗砂などが広がっており、その面で遺構が確認された。北側1/3の宅地があった部分で、真砂土が厚さ0.5m程あり、その下に部分的に茶色土(遺物包含層)が検出され、黄褐色土(地山)で遺構が確認できた。

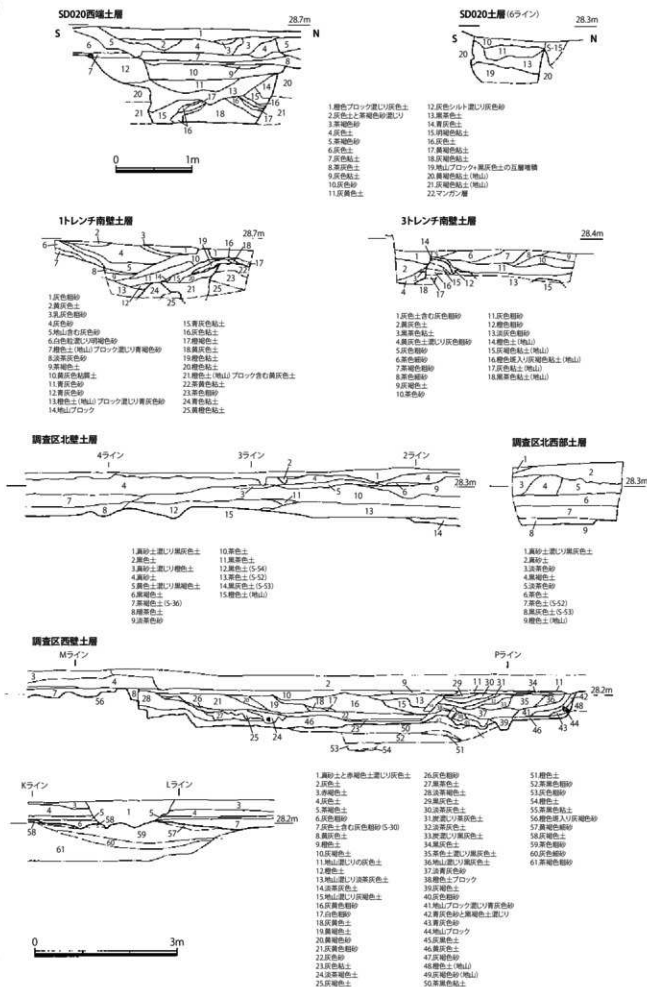


Fig. 92 229SD020、トレンチ、調査区北・西壁土層実測図 (SD020は1/50、1/80)

(3) 検出遺構

溝

229SD020

東西溝で、検出長 5.1m、幅 1.0～2.0m、深さ 0.71～0.94m で、西に向かって深くなっている。振れは E-7° 30' 11" -N である。埋土は最上層から灰色砂、灰黄色土、黒茶色土、粘質土である。最下層の粘質土部分は互層になっており、自然堆積を繰り返していたことがわかる。

井戸

229SE010 (Fig. 93)

掘り方は大きさ 2.0×2.5m、深さ 1.8m の楕円形で、中央付近には井戸枠痕跡とみられる灰色砂があり、井戸枠材の破片とみられる木片も出土した。

229SE015 (Fig. 93)

南側を SD020 に、北側を SE010 に切られている。掘り方は東西 3.0m×南北 2.2m 以上、深さ 2.05m で、深さ 0.8m 程はラッパ状に開き、そこから真つすぐ深くなっている。埋土は地山の橙色土ブロックが多く入り、黒灰色土や灰褐色土などの互層となっていたが、井戸枠痕跡は確認できなかった。素掘りの井戸と推測されているが、橙色土ブロックの入り方から人為的に埋められたものと考えられるため、井戸枠を抜き取り埋められた可能性や井戸ではない土坑の可能性も考えられる。

土坑

229SK001 (Fig. 94)

東西 3.75m、南北方向は 1.6m 前後、深さ 0.2m 前後の不定形土坑である。底面には大きさ 0.9×0.7m、深さ 0.2m の楕円形土坑が掘られている。埋土は黒灰色土や茶灰色土で、土坑中央付近では炭化物に混じって多量の土師器が出土し、廃棄土坑と考えられる。

229SK004

大きさ 1.8×1.4m、深さ 0.25m 前後の不定形土坑である。埋土は黄灰色土や灰色土である。

その他の遺構

流路

229SX030

幅 7～14m、深さ 0.5m 前後の流路で、狭い範囲だが北西方向に向かって僅かに深くなっている。埋土は砂層が細かく入り乱れている。

229SX035

幅 10～18m、最深で 1.2m の流路で、砂層が細かく入り乱れて堆積している。北側は段状になり、底面が大きく窪んでいる部分がある。南端付近の底面にはビットなどの凹凸がみられる。

229SX052

調査区北辺部で検出した溝状の落ち込みで、埋土は茶色土で、深さ 0.5m 前後で調査区外に続いている。

(4) 出土遺物

溝

229SD020

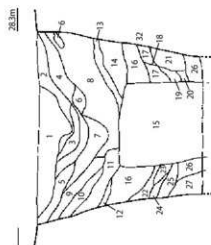
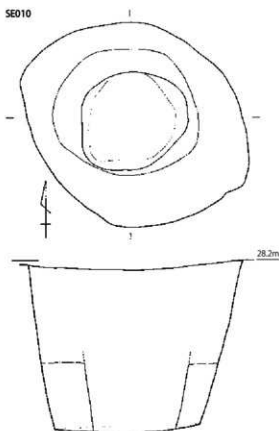
229SD020 黄灰色出土遺物 (Fig. 95)

土師器

小皿 a (1) 口径 8.0 cm。底部切り離しは回転糸切りで板状圧痕を残す。

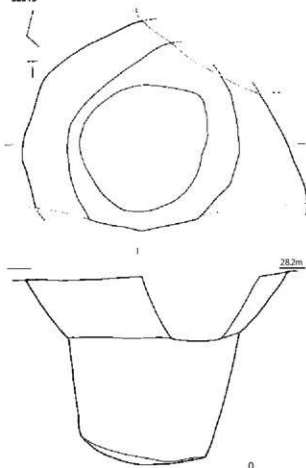
坏 a (2) 体部が開き、器高は低い。復元口径 15.6 cm。器高 2.0 cm。底部切り離しは回転糸切りである。

SE010



- 1.黒灰色土
- 2.黒褐色砂
- 3.黒灰色土
- 4.灰褐色土
- 5.黒褐色土
- 6.黒褐色土(ロツク)
- 7.黒褐色土
- 8.灰褐色土
- 9.黒褐色土
- 10.黒褐色土
- 11.黒褐色土
- 12.黒褐色土
- 13.灰褐色土
- 14.黒褐色土
- 15.灰褐色土
- 16.灰褐色土
- 17.黄灰色砂
- 18.黄灰色砂
- 19.黄灰色粘土
- 20.灰褐色粘土
- 21.灰褐色土
- 22.黄褐色土(山)
- 23.黄褐色土(山)
- 24.灰褐色土
- 25.黄灰色土
- 26.黄灰色粘土
- 27.黄褐色土

SE015

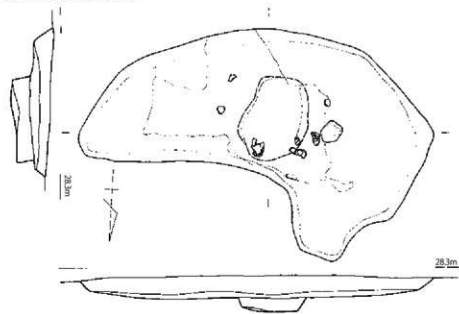


- 1.黒灰色砂
- 2.灰褐色土
- 3.黒褐色土
- 4.灰褐色土
- 5.黒褐色土
- 6.黒褐色土(山)
- 7.灰褐色土
- 8.黒褐色土
- 9.黒褐色土
- 10.黒褐色土(山)
- 11.黒褐色土
- 12.黒褐色土
- 13.黒褐色土(山)
- 14.黒褐色土
- 15.灰褐色土
- 16.黄褐色粘土
- 17.灰褐色砂
- 18.黄褐色砂
- 19.黒褐色土(山)
- 20.黄褐色土(山)
- 21.黄褐色土(山)
- 22.黄褐色土(山)
- 23.黄褐色土(山)
- 24.灰褐色砂(山)

Fig. 93 229SE010-015 遺構実測図 (1/40)

0 2m

炭入黒灰色土遺物出土状況と完備状況



黒灰色土遺物出土状況と土層

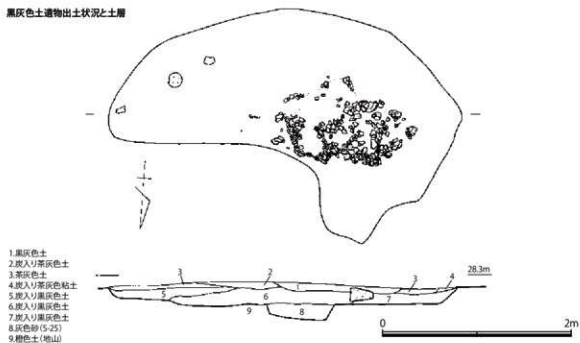


Fig. 94 229SK001 遺構実測図 (1/40)

色調は淡黄色を呈する。

229SD020 灰色粘土出土遺物 (Fig. 95)

黒色土器もしくは瓦器

碗 (3) 摩滅が目立ち調整不明だが、断面暗灰色で、内外面とも黒灰色を呈する。

肥前系磁器

碗 (4) やや青味がかった透明釉を全面に施し、外面に呉須で文様を施す。

229SD020 灰色砂出土遺物 (Fig. 95)

土師器

小皿 a (5～7) 復元口径 8.4～9.6 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りと糸切りが混在する。
坏 a (8～12) 復元口径 14.0～15.4 cm。底部切り離しは全て回転ヘラ糸切りである。色調は黄褐色を呈する。

丸底坏 (13) 復元口径 14.0 cm。内面はヨコナデの後ミガキ b を施す。

肥前系磁器

碗 (14, 15) 14 は内面に呉須で文様を描く。高台置付は軸を掻き取り、黄褐色を呈する。15 は高台径 4.0 cm。体部と底部外面に淡緑灰色釉で文様を描く。

国産陶器

播鉢 (16) 胎土は 0.1 cm 以下の白色砂粒を多く含み、明茶色を呈する。内面には摺り目を施し、外面に茶褐色釉を施す。

土製品

土壁 (17) 胎土は 0.1 cm 以下の砂粒や茶色粒とスサを多く含む。片面を平坦に仕上げ、その反対側には半円の小舞竹痕を残す。

229SD020 灰黄色土出土遺物 (Fig. 95)

土師器

小皿 a (18, 19) 復元口径は 8.8 cm と 9.0 cm。18 の底部切り離しは回転糸切り。

国産陶器

鉢 (20) 復元高台径 8.8 cm。胎土は灰色を呈し、内面に緑色がかった透明釉を、外面下半に茶褐色釉を施す。

播鉢 (21) 外面に赤茶色釉を施し、内面には摺り目を施すが、使用により摩滅が目立つ。

229SD020 黒茶色土出土遺物 (Fig. 95)

土師器

小皿 a (22～33) 口径 8.0～9.6 cm、器高 0.7～1.2 cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、板状圧痕を残す。

坏 a (34～40) 口径 13.3～16.0 cm、器高 1.95～2.6 cm。底部切り離しは全て回転糸切りで、板状圧痕を残す。色調は黄白色や黄褐色を呈する。

鍋 (41) 口縁部を L 字形に屈折させる。外面ヨコナデ、内面は縦方向のナデ調整。

瓦器

碗 c (42) 断面台形の低い高台を貼付する。復元高台径 6.0 cm。内外面とも摩滅し調整不明。

井戸

229SE010

229SE010 黒灰色土出土遺物 (Fig. 96)

土師器

小皿 a (1) 復元口径 10.0 cm。切り離しは摩滅し調整不明。

坏 a (2) 底部切り離しは糸切り。内面に指頭圧痕が残る。色調は淡茶色を呈する。

丸底坏 a (3) 復元口径 11.4 cm。底部押し出しで体部中位に屈曲が残る。

土師質土器

鉢 (4) 摩滅するがヨコナデ調整が残る。色調は淡茶色を呈する。

瓦類

平瓦 (5) 凸面に複弁蓮華文の型押しが施されている。凹面は摩滅し調整不明。

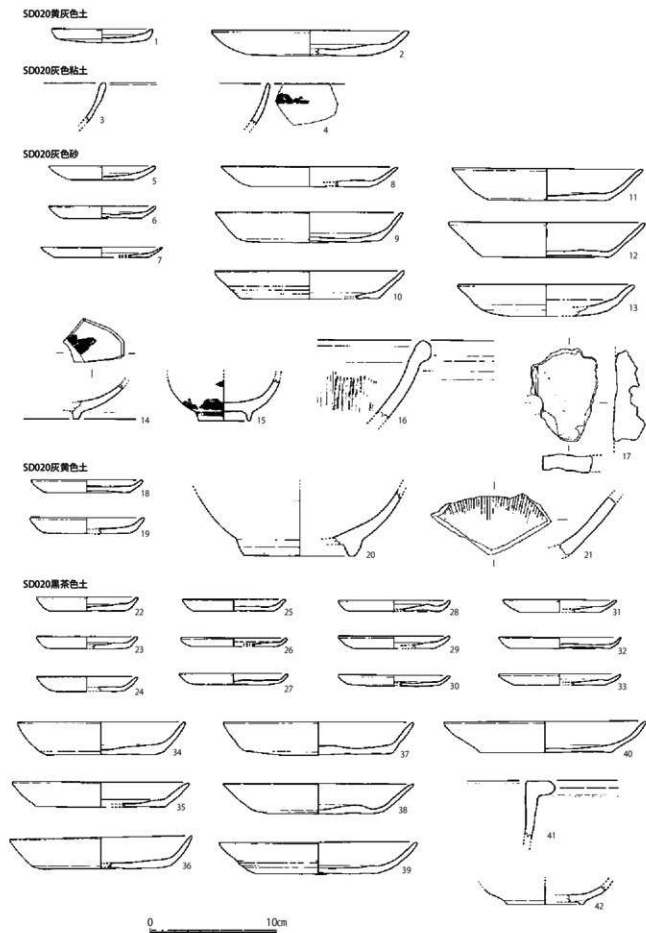


Fig. 95 229SD020 出土遺物実測図 (1/3)

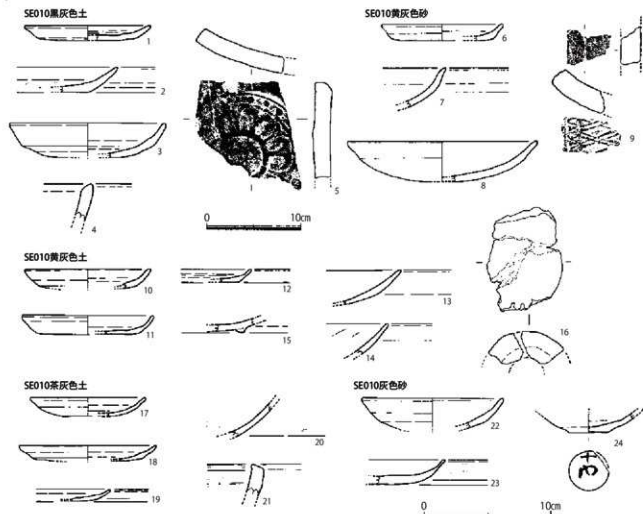


Fig. 96 229SE010 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

229SE010 黄灰色砂出土遺物 (Fig. 96)

土師器

小皿 a (6) 復元口径 9.6 cm。底部切り離しは不明。

丸底坏 (7) 内面摩滅し調整不明。外面下半はヘラ切り後ナデ調整。

丸底坏 a (8) 復元口径 15.0 cm。全面摩滅し調整不明。

瓦類

平瓦 (9) 外面は横長の菱形二重格子叩き。内面は布目。

229SE010 黄灰色土出土遺物 (Fig. 96)

土師器

小皿 a (10～12) 復元口径は 10.0 cm と 10.5 cm。底部切り離しは調整不明。

丸底坏 (13, 14) 13 は全面摩滅し調整不明。14 は内面ミガキ b、外面上部は回転ナデ、下半はナデ調整。

瓦器

碗 c (15) 瓦器とみられる土器だが、全面摩滅し調整不明。

土製品

籬羽口 (16) 外面はやや面取り状にナデ調整し、被熱で若干溶解し、一部に赤褐色の付着物がみられる。

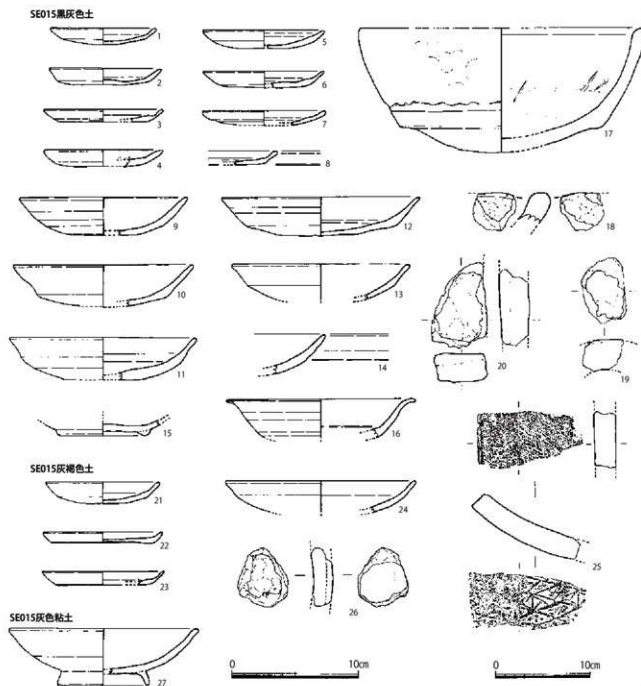


Fig. 97 229SE015 出土遺物実測図 (1/3、瓦は 1/4)

229SE010 茶灰色土出土遺物 (Fig. 96)

土師器

小皿 a (17 ~ 19) 復元口径 9.2 cm と 10.8 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

瓦器

椀 c (20) 外面は摩滅するが内面はミガキ c を施す。

土師質土器

鉢もしくは鍋 (21) 胎土は 0.4 cm 以下の砂粒を多く含み、色調は暗茶灰色を呈する。内面はカキ目、外面はヨコナゲ調整。

229SE010 灰色砂土出土遺物 (Fig. 96)

土師器

小丸底坏 a (22) 復元口径 11.2 cm。内面はミガキ b で、外面ヨコナデ調整。

瓦器

小皿 a (23) 外面はミガキ c、内面はナデ調整である。底部は糸切りか。

白磁

皿 (24) VI-1b 類。底部外面に墨書がある。「十門」か。

229SE015

229SE015 黒灰色土出土遺物 (Fig. 97)

土師器

小皿 a (1～8) 復元口径 8.4～9.8 cm。摩滅が目立つが、底部切り離しは確認できるものは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。色調は淡茶色を呈する。

丸底坏 a (9～12) 復元口径 13.2～15.6 cm。全体的に摩滅が目立つ。

丸底坏 (13、14) 13は復元口径 14.0 cm。14は内外面とも摩滅し調整不明。

黒色土器

碗 c (15) B 類。断面台形の低い高台を貼付する。復元高台径 7.2 cm。全体的に摩滅し調整不明。

土師質土器

鉢 (17) 復元口径 22.2 cm、器高 9.8 cm、底径 16.0 cm。胎土は 0.4 cm 以下の砂粒を多く含み、淡茶色を呈する。内面は工具によるナデ、外面はナデ調整で指頭圧痕が残る。外面底部はナデ調整で、火を受けたことにより赤褐色を呈する。

白磁

皿 (16) 口縁部が外反し、内面下部に沈線が巡る。胎土は微細な黒色粒を含み、薄く光沢のある透明釉を施し、一部に貫入がみられる。復元口径 15.0 cm。華南系。

土製品

トリベ (18) 内面は溶解した付着物がみられ、外面には指頭圧痕が残る。

繻羽口 (19) 胎土は白色砂粒を多く含む。色調は内面が淡茶色、外面が灰色を呈する。

鋳型 (20) 胎土は白色砂粒やスサ痕が多くみられ、断面の色調は淡黄灰色と灰色で、灰色の表面には厚さ 0.1 cm 程の真土とみられる細かい砂層があり、形状は不明だが鋳型の破片と推測される。

229SE015 灰褐色土出土遺物 (Fig. 97)

土師器

小皿 a (21～23) 21は底部が張り出しているが、その他は平坦に仕上げる。底部切り離しは 21 がヘラ切りだが、他は摩滅し不明。

丸底坏 a (24) 復元口径 15.0 cm。全面摩滅し調整不明。

瓦類

平瓦 (25) 凸面には大きめの斜格子叩きを施す。

土製品

鋳型 (26) 胎土はスサ痕が目立ち、暗灰色を呈する。外面は指頭圧痕があり、内面には細かい灰色砂が厚さ 0.5 cm 程あり、鋳型の真土と推測される。

229SE015 灰色粘土出土遺物 (Fig. 97)

土師器

丸底坏 c (27) 復元口径 15.0 cm、器高 4.5 cm、復元高台径 7.2 cm。全面摩滅し調整不明。

土坑

229SK001

229SK001 出土遺物 (Fig. 98)

土師器

小皿 a (1～5) 復元口径 8.6～9.2 cm。底部切り離しは全て回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底坏 a (6、7) 摩滅が目立ち、調整不明。復元口径 15.0 cm と 15.1 cm。

丸底坏 c (8) 全面摩滅する。復元口径 16.3 cm、器高 4.0 cm、高台径 7.3 cm。

鉢もしくは甕 (9) 復元底径 15.0 cm。胎土は砂粒を多く含み、暗黄色や淡茶褐色を呈する。全面摩滅し調整不明。

金属製品

鉄釘 (10) 錆に覆われ、両端が欠損しているようである。現存長 6.9 cm。

229SK001 黒灰色土出土遺物 (Fig. 98)

土師器

小皿 a (11～15) 口径 8.8～9.4 cm。底部切り離しは全て回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

小皿 c (16) 復元口径 9.6 cm、器高 2.05 cm、高台径 6.3 cm。

坏 a (17～20) 復元口径 14.4 cm と 14.6 cm。色調は淡橙黄色を呈する。底部切り離しは全て回転糸切りである。

丸底坏 a (21～26) 口径 14.15～15.5 cm、器高 2.7～3.6 cm。底部はヘラ切り離し後に押し出している。摩滅も目立つが、25・26 の内面にはミガキが確認できる。

碗 c (27、28) 復元高台径は 6.6 cm と 7.4 cm。内面はナゲ調整。

青白磁

合子蓋 (29) 復元口径 7.2 cm、器高 1.8 cm。外面には草花文などの文様を描き、水色釉を施す。また、内面上部には透明釉を施軸する。

229SK001 炭入黒灰色土出土遺物 (Fig. 98)

土師器

小皿 a (30～35) 復元口径 8.4～9.7 cm。底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。

丸底坏 a (36～42) 復元口径 14.3～17.0 cm。体部下半外面に底部押し出しによる指頭圧痕が残る。36 は中位に屈曲が残る。

金属製品

鉄釘 (43、44) 角釘で、頭部が L 字形に屈折する。先端部は欠損する。43 は現存長 3.7 cm、44 は現存長 4.1 cm。

石製品

砥石 (45) 4 面使用されている。

土製品

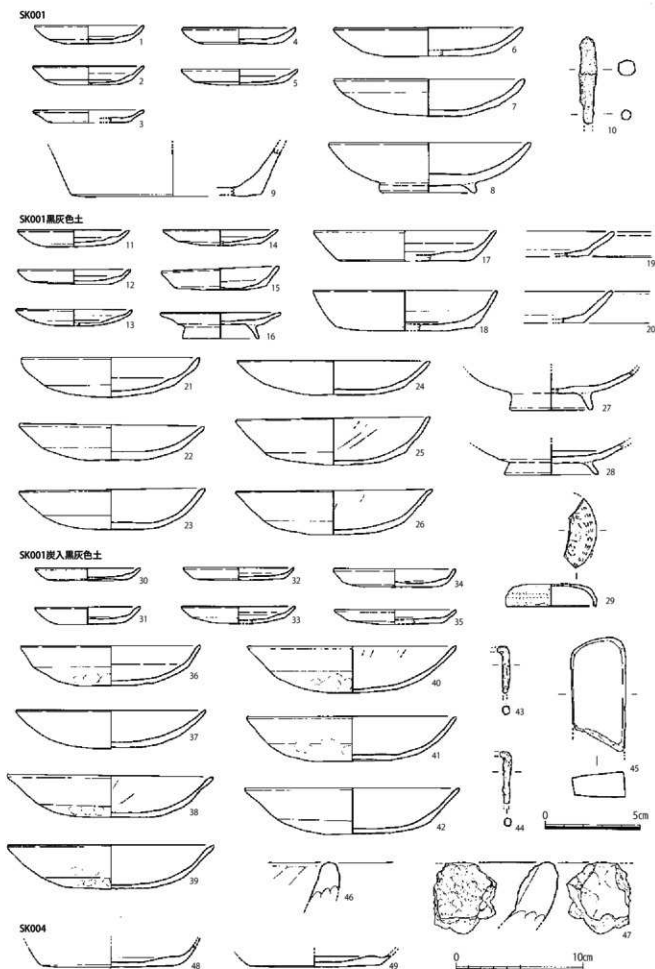
トリベ (46、47) 46 は内面から口縁部にかけて被熱で黒色に硬化している。47 は口縁部が被熱で黒色化し、内面には茶褐色や黄白色の付着物が覆う。

229SK004 出土遺物 (Fig. 98)

土師器

坏 a (48、49) 48 は底部切り離し不明。底径 11.0 cm。49 は底径 10.4 cm。底部切り離しは回転糸切り、内面底部は一方方向のナゲ調整。色調は暗黄色を呈する。

その他の遺構出土遺物



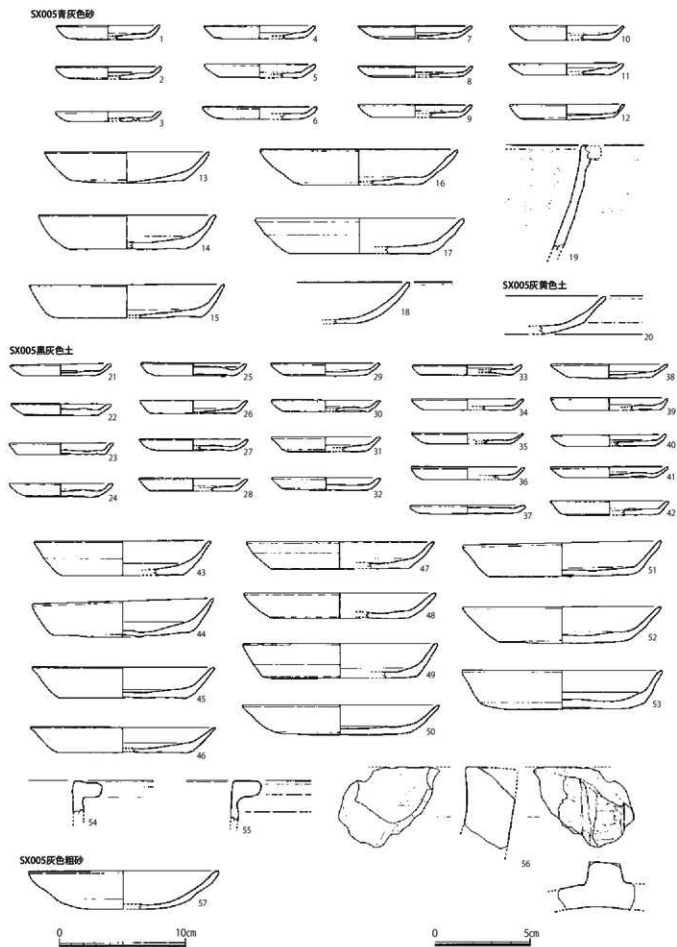


Fig. 99 229SX035(005) 出土遺物実測図 (1/3、56は1/2)

229SX035 (SX005)

229SX035 (SX005) 青灰色砂出土遺物 (Fig. 99)

土師器

小皿 a (1～12) 復元口径 8.2～9.0 cm。底部切り離しは回転糸切りで、12のみヘラ切りである。

杯 a (13～17) 復元口径 13.0～16.4 cm。器高 2.5～2.8 cm。底部切り離しは確認できるものは回転糸切りである。色調は淡黄橙色を呈する。

丸底杯 a (18) 摩滅し調整不明。

鍋 (19) 口縁部をL字形に屈曲する。内外面は浅いハケの後ナゲ調整を施す。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は暗茶色を呈する。

229SX035 (SX005) 灰黄色土出土遺物 (Fig. 99)

土師器

丸底杯 a (20) 摩滅し調整不明だが、底部外面には回転ヘラ切りが残る。

229SX035 (SX005) 黒灰色土出土遺物 (Fig. 99)

土師器

小皿 a (21～42) 復元口径 8.0～9.4 cm。底部切り離しは全て回転糸切り。

杯 a (43～53) 復元口径 14.0～15.8 cm。底部切り離しは全て回転糸切り。色調は黄橙色を呈する。

鍋 (54, 55) 口縁部は断面方形でL字形に屈曲する。内外面ともヨコナゲ調整。

石製品

石鍋 (56) こぶ状把手を削り出している。滑石製。

229SX035 (SX005) 灰色粗砂出土遺物 (Fig. 99)

土師器

丸底杯 a (57) 復元口径 15.0 cm、器高 3.0 cm。摩滅が目立ち調整不明。

229SX054 灰色土出土遺物 (Fig. 100)

土師器

小皿 a (1) 底部切り離しは回転ヘラ切りである。器高 0.9 cm。

瓦類

平瓦 (2) 凸面に菱形のやや不定形の格子叩きを施す。

229SX054 黒色土出土遺物 (Fig. 100)

土師器

小皿 a (3) 底部切り離しは回転ヘラ切りである。器高 1.0 cm。

丸底杯 a (4) 外面下半には回転ヘラ切り痕が残る。

土製品

埴埴 (5) 胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡黄橙色で、内側は被熱で暗灰色に硬化している。器壁は厚さ 3 cm である。

輪羽口 (6) 外面に一部が被熱により黒灰色を呈する。

その他の出土遺物 (Fig. 100)

土師器

施 c (7) 高台径 6.0 cm。体部は丸味があるが、底部は平坦でその端に高台を貼付する。底部切り離しは回転糸切りである。摩滅が目立ち調整不明。色調は黄白色を呈する。SD019 より出土。

須恵質土器

鉢 (8) 内外面とも回転ナゲで、口縁部外面のみ灰黒色を呈する。東播系。SX038 より出土。

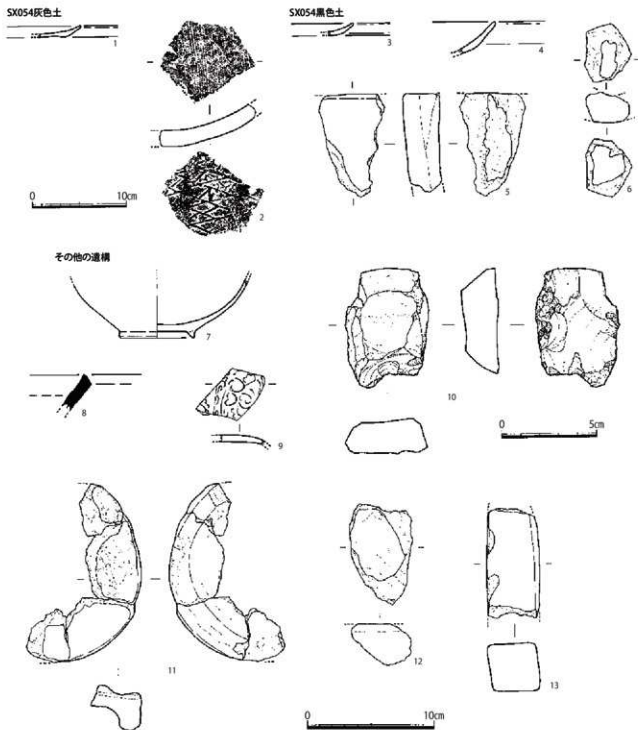


Fig. 100 229SX054、その他の遺構出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、石製品は1/2)

白磁

蓋 (9) 内面は回転ナデで露胎、外面にはヘラ描き文様が描かれ、やや黄色がかった釉を施しているが、部分的に剥けている。広東系。SX038 より出土。

石製品

石核 (10) 大きさは 6.3×4.5 cm、厚さ 1.9 cm。大きな剥離と細かい剥離があり、自然面も残る。黒曜石製。SD020 灰黄色土より出土。

土製品

鋳型 (11、12) 11 は径 14 cm ほどの円形状の鋳型である。胎土は 0.2 cm 以下の砂粒やスサ混じりで、表面には黄色砂とその下に暗黄灰色砂の真土が覆う。黄色砂は回転整形痕を残し、平坦でとなる。背面は中央付近が凹んでいる。12 は 0.2 cm 以下の砂粒やスサ混じりの胎土で、表面には厚さ 0.6 cm 程の黄色砂が覆い、真土とみられる。2 点とも SX034 より出土。

棒状土製品 (13) 両端を欠損するが、現存長 8.7 cm、幅は 4.2×3.8 cm の直方体である。胎土は 0.2 cm 以下の砂粒を多く含み、色調は淡橙黄色を呈する。全面ナデ調整。SX017 より出土。

(5) 小結

今回の調査で確認された遺構は、平安後期以降のもので、井戸や流路が混在していた。また、出土した土師器が全体的に摩滅が目立ったことも考慮すると、平安後期になって居住地として土地利用が行われたものの大水の時は、居住地が氾濫に見舞われることがあったのではないかと推測される。

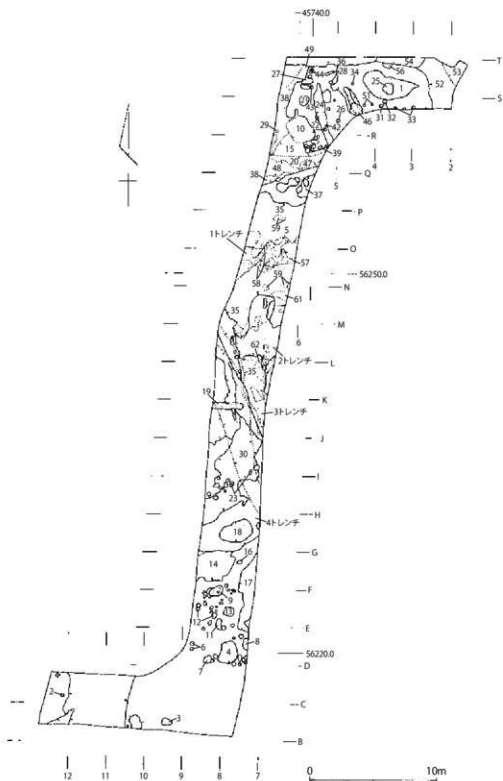


Fig. 101 第229次調査遺構略測図 (1/300)

表25 第229次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	229SX001	廢棄土坑	黒灰色土 S-25→1	12世紀前半	S3・4
2		ビット	灰色土		C12
3		たまり状	灰色土	平安時代～	B9
4	229SX004	土坑	灰色土	12世紀前半	D7
5	229SX035	溝	黒灰色土 S-35の上層	XVI期前後	O6
6		ビット群	灰色土	平安時代～	D8
7		土坑	灰色土	12世紀～	D8
8		土坑	灰色砂		D7
9		たまり状	灰色土	平安後期～	E8
10	229SE010	井戸	S-15→10	XIII期	R5・6
11		たまり状	灰色土	12世紀中頃～	E8
12		ビット群	灰色土	平安後期～	E8
13		土坑	黒灰色土	平安時代～	E7
14	229SX014	包含層	黒灰色土	13世紀～	F7・8
15	229SE015	井戸	黒灰色土 S-15→10	XII期	O6
16		ビット	灰色土		F7
17	229SX017	土坑?	茶灰色粘土	近世～	EF7
18		たまり状	茶灰色砂		G7
19	229SD019	溝状遺構	茶灰色土		J7・8
20	229SD020	溝	灰色土 S-15→20	12世紀後半、最終埋没は近世	O5・6
21		土坑	黒褐色土	平安時代～	S5
22		ビット群	黒褐色土	平安後期～	R5
23		ビット群	灰色土		HI7
24		溝状	黄灰色土		R, S5
25	229SX001	土坑	灰色砂 S-1→25 無遺物		S3
26		ビット	黒褐色土	平安後期～	R4
27		土坑	黒褐色土		S5
28		ビット群	黒褐色土	平安時代～	S5
29		ビット	灰色土	平安後期～	R6
30	229SX030	流路		13世紀～	G～L, 7・8
31		ビット	黒灰色土	近世～	R3
32		ビット	黒灰色土	13世紀～	R3
33		ビット群	黒灰色土	平安後期～	R3
34	229SX034	ビット	炭化土		S4
35	229SX035	流路		XVI期前後	J～P, 6・7
36		溝状	茶褐色土	近世～	S4～6
37		土坑	黒褐色土		P5
38	229SX038	包含層	茶灰色土	近世	Q～S, 5・6
39		ビット	黒褐色土	近代～	Q5
41		ビット	茶灰色土		R5
42		ビット	黒色土	平安後期～	R5
43		ビット	灰色土	平安後期～	S5
44		ビット群	灰色土		S5
46		土坑	橙色ブロック入灰色土 S-20→47	平安後期	R4
47		土坑状	黒灰色土 S-20→48	11世紀後半～	Q5
48		溝状	茶褐色土		Q6
49		溝	灰茶土		S5・6
51		ビット群	黒褐色土		R4
52	229SX052	溝?	茶色土 S-53→52	12世紀中頃～後半	S2
53		溝?	黒灰色土		S1・2
54	229SX054	たまり状	黒色土 S-52→54? 54→36	12世紀	S13
56		ビット	茶色土	平安後期	S3
57		たまり状	青灰色土	12世紀～	N6
58		たまり状	青灰色土 S-57と同一	12世紀～	N6
59		ビット群		平安時代	N06
61		たまり状	黄灰色土		M6
62		たまり状	黄灰色土	平安後期～	K7

5-10黄白色上

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	へつ	R-001	Fig. 96-17	(8.3)	1.5	(8.4)	○
	小皿		R-002	Fig. 96-18	(10.8)	1.1	(8.4)	○
	小皿	へつ	R-003	Fig. 96-19		0.90±		○
	丸皿	横	R-005	Fig. 96-20		3.9±		○

5-10灰色上

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	へつ	R-002	Fig. 96-22	(11.2)	3.20±		
	小皿		R-009	Fig. 96-23		3.9±		

5-10黄白色下

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿		R-001	Fig. 97-1	(8.4)	1.3	(8.4)	
	小皿	へつ	R-011	Fig. 97-2	8.4	1.2	7.7	
	小皿		R-009	Fig. 97-3	(8.4)	1.0	(7.2)	○
	小皿		R-010	Fig. 97-4	8.4	1.2	7.5	
	小皿		R-004	Fig. 97-5	(8.4)	1.4	(8.4)	○
	小皿	へつ	R-009	Fig. 97-6	(8.4)	1.2	(7.4)	○
	小皿		R-008	Fig. 97-7	(8.4)	1.15	(7.4)	○
	小皿		R-007	Fig. 97-8		1.3±		○
	丸皿	横	R-005	Fig. 97-9		3.8		
	丸皿	横	R-013	Fig. 97-10	(14.2)	3.3±		
	丸皿	へつ	R-014	Fig. 97-11	(14.2)	3.2±		
	丸皿	横	R-017	Fig. 97-12	(14.6)	3.1		○
	丸皿	横	R-002	Fig. 97-13	(14.4)	2.7±		
	丸皿	横	R-012	Fig. 97-14		3.1±		
	黒色上群部	横	R-015	Fig. 97-15		1.2±	(7.2)	

5-10灰色下

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	へつ	R-002	Fig. 97-21	(8.0)	1.7	(7.1)	○
	小皿		R-004	Fig. 97-22	(8.4)	0.9	(8.1)	○
	小皿		R-001	Fig. 97-23	(8.4)	1.1	(7.4)	○
	丸皿	横	R-003	Fig. 97-24	(15.0)	2.8±		

5-15灰色上

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	丸皿	横	R-001	Fig. 97-27	(15.0)	4.8	(7.2)	○

5-20

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	横	イト	R-001		4.8±	4.0		

5-20黄白色上

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	イト	R-001	Fig. 98-1	8.9	4.8	○	○
	横	イト	R-002	Fig. 98-2	(15.4)	2.5	(10.0)	○

5-20

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
黒色上群部	丸皿	横	R-001	Fig. 98-3		3.2±		

5-20灰色上

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	へつ	R-003	Fig. 98-5	(8.4)	1.1	(8.4)	○
	小皿	イト	R-009	Fig. 98-8	8.5	1.0	(6.2)	○
	小皿		R-008	Fig. 98-7	(8.4)	0.9	(7.4)	○
	横	イト	R-010	Fig. 98-8	(14.4)	1.4	(8.4)	×
	横	イト	R-013	Fig. 98-9	(14.4)	2.4	(11.4)	○
	横	イト	R-001	Fig. 98-10	(15.4)	2.2	(10.4)	○
	横	イト	R-011	Fig. 98-11	(15.4)	2.5	(10.4)	○
	横	イト	R-012	Fig. 98-12	(15.4)	2.7	(10.4)	○
	丸皿	横	イト	R-002	Fig. 98-13	(14.4)	2.5	

5-20黄白色下

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	イト	R-001	Fig. 98-22	(8.0)	1.1	(8.4)	○
	小皿	イト	R-003	Fig. 98-23	(8.0)	1.0	(8.2)	○
	小皿	イト	R-016	Fig. 98-24	(8.0)	1.2	(5.4)	○
	小皿	イト	R-013	Fig. 98-25	(8.2)	0.90	(8.4)	○
	小皿		R-006	Fig. 98-26	(8.4)	2.7	(8.4)	○
	小皿	イト	R-011	Fig. 98-27	(8.0)	0.9	(6.4)	○
	小皿	イト	R-002	Fig. 98-28	(8.4)	0.80	(7.4)	○
	小皿	イト	R-004	Fig. 98-29	(8.4)	1.0	(8.2)	○
	小皿	イト	R-017	Fig. 98-30	(8.4)	0.9	(7.2)	○
	小皿	イト	R-005	Fig. 98-31	(8.4)	1.4	(8.2)	○
	小皿	イト	R-012	Fig. 98-32	(8.4)	0.9	(8.4)	○
	小皿	イト	R-018	Fig. 98-33	(8.4)	0.9	(7.2)	○
	横	イト	R-015	Fig. 98-34	(13.2)	2.4	(8.2)	○
	横	イト	R-014	Fig. 98-35	(14.2)	1.90	(10.1)	○
	横	イト	R-009	Fig. 98-36	(14.4)	2.4	(11.4)	○
	横	イト	R-008	Fig. 98-37	(15.4)	2.4	(11.4)	○
横	イト	R-011	Fig. 98-38	(15.1)	2.50	(8.4)	○	
横	イト	R-020	Fig. 98-39	(15.4)	2.40	9.9	○	
横	イト	R-007	Fig. 98-40	(15.0)	2.5	(10.4)	○	

5-20黄色上

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	イト	R-002	Fig. 98-18	(8.4)	1.0	(6.7)	○
	小皿		R-001	Fig. 98-19	(8.4)	1.2	(6.4)	○

5-4灰色上

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	へつ	R-001	Fig. 100-1		0.9		

5-4黄白色上

種別	部 種	産物番号	図番号	口積	距離	感度	A	B
主群部	小皿	へつ	R-001	Fig. 100-2		1.0		
	丸皿	横	R-002	Fig. 100-3		2.8±		

11、第 253 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市都府楼南 1 丁目 470-9 の一部、470-20、481-1、489-1、489-16 で、鶯田川の右岸に位置する。

2003(平成 15)年 5 月から土地利用に対する文化財の取り扱いについて問い合わせが始まった。2005(平成 17)年 7 月から宅地分譲計画が出され、2005(平成 17)年 7 月 28 日に確認調査を実施し、現況面から 1.05m で遺構が確認された。その後の協議の結果、宅地部分は遺構に影響がなかったものの、道路新設が予定されたため、道路部分のみ発掘調査することとなった。調査期間は 2005(平成 17)年 10 月 13 日～11 月 14 日、調査は松浦智が担当した。開発対象面積は 1109.21 m²、調査面積は 260.68 m²で、道路以外の宅地部分は遺構が保存されている。

(2) 基本層位

調査前、対象地には家が建っていた。そのため住宅地造成のため厚さ 0.8m 前後の盛土が行われている。よって、最上層には黒茶色土の表土、その下に盛土である橙色を呈する真砂土、そして、その下の暗灰色粘質土・暗茶色粘質土は水田の耕作土である。耕作土の下が地山面になっていて、遺構が広がっている。地山は明黄褐色土、黄褐色粘質土、暗褐色粗砂の 3 種類がある。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

253SB010 (Fig. 103)

西側調査区西隅で検出された南北 2 間、東西 2 間の総柱の掘立柱建物と考えられる建物で、さらに南側に南北 1 間、東西 2 間の庇が付く。主軸の振れは $N-1^{\circ} 18' - E$ でやや東に振れている。総柱建物の柱間は南北方向が北から 1.88m、1.7m、東西方向が東から 2.7m、2.04m となっている。柱穴の掘り方は平面略円形プランを呈し、径 0.3～0.6m 前後、深さは 0.1～0.4m を測る。遺構検出時に柱痕は検出できなかった。柱穴のひとつが 253SE015 に切られていたが、遺物の時期から切り合いを間違えた可能性が高く、SE015 埋没後に SB010 が建てられたものと推測される。

253SB020 (Fig. 103)

西側調査区中央で検出された南北 2 間、東西 3 間の側柱の掘立柱建物であるが、調査区外に続き、明確な規模は不明である。主軸の振れは $W-0^{\circ} 22' - S$ でやや南に振れている。柱間は南北方向が北から 1.8m、1.5m、東西方向が東から 2.38m、2.2m、1.98m となっている。柱穴の掘り方は平面略円形プランを呈し、径 0.3～0.6m 前後、深さは 0.2～0.4m を測る。遺構検出時に柱痕は検出できなかった。

253SB025 (Fig. 104)

西側調査区東で検出された南北 2 間以上、東西 1 間以上の掘立柱建物であるが、調査区外に続き、明確な規模は不明である。主軸は真北である。柱間は南北方向が北から 1.6m、1.5m、東西方向が 3.3m となっている。柱穴の掘り方は平面略円形プランを呈し、径 0.3～0.6m 前後、深さは 0.1～0.3m を測る。遺構検出時に柱痕は検出できなかった。

253SB030 (Fig. 104)

西側調査区東で検出された南北 1 間以上、東西 3 間以上の掘立柱建物であるが、調査区外に続き、明確な規模は不明である。主軸の振れは $W-1^{\circ} 3' 39'' - S$ で僅かに南に振れている。柱間は南北方向が 3.1m、東西方向が東から 2.85m、2.5m、2.5m となっている。柱穴の掘り方は平面略円形プランを呈し、径 0.3～0.6m 前後、深さは 0.2～0.4m を測る。2 基の柱穴から花崗岩の礎石が置かれているのを確認

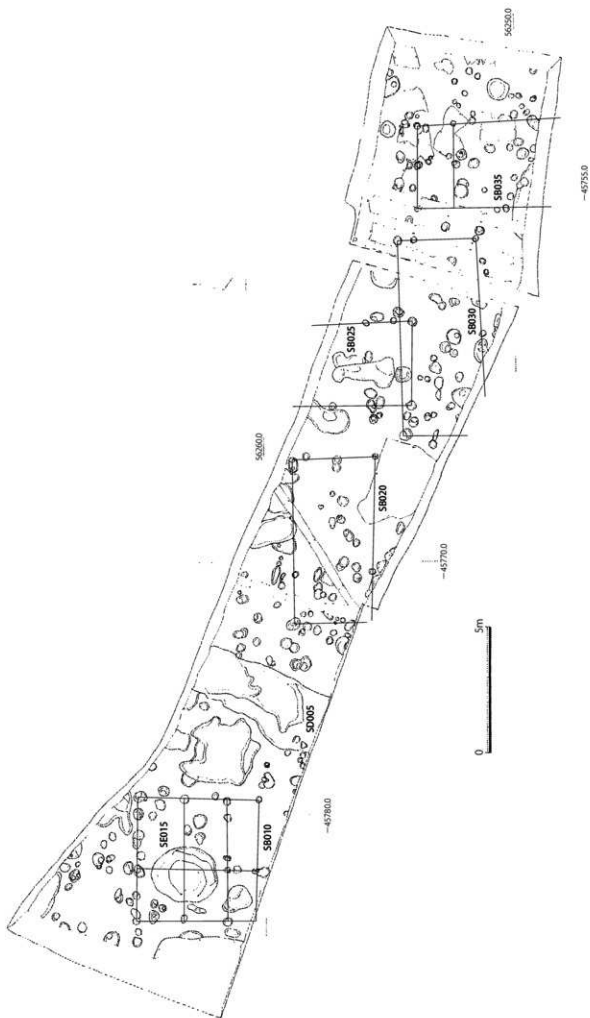


Fig. 102 第253次調査遺構全体図 (1/150)

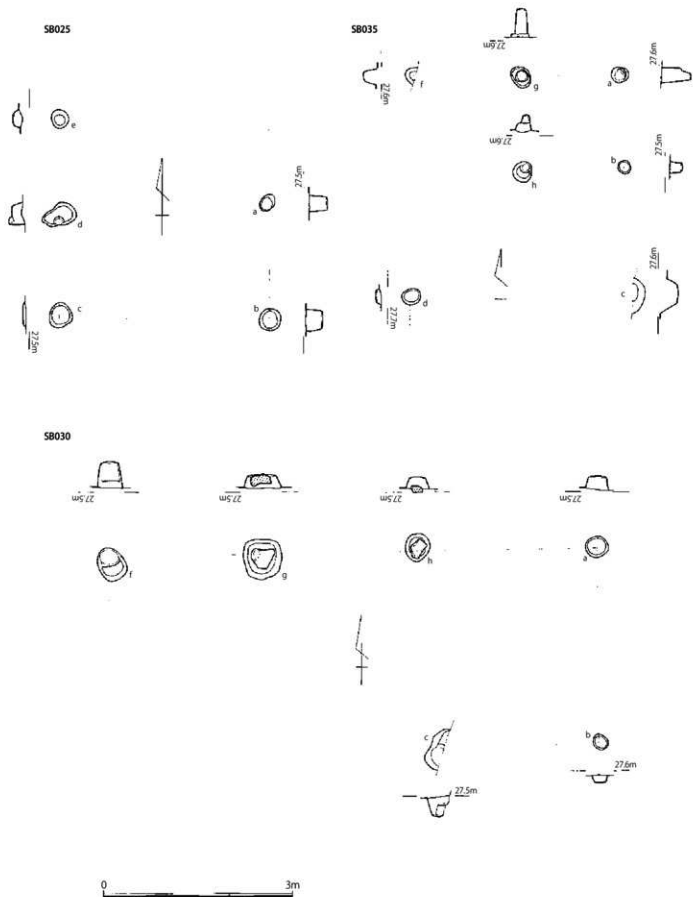
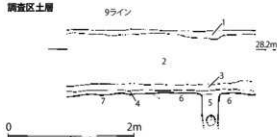


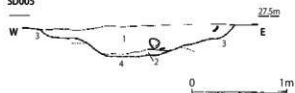
Fig. 104 253SB025・030・035 遺構実測図 (1/60)

調査区土層



- 1.黒茶色土(締りなし、草の根多い、表土)
- 2.褐色砂質土(黄砂土、締りなし)
- 3.暗灰色粘質土(旧耕作土)
- 4.暗茶色粘質土(旧耕作土)
- 5.黄褐色粘質土と茶褐色土の混合層(田圃の排水層)
- 6.黄褐色粘質土(地山)
- 7.暗褐色粘砂(地山)

SD005



- 1.暗茶褐色土(よく締まる、黄褐色土ブロック含む、S-S)
- 2.灰褐色砂質土(黄褐色土ブロック含む、S-S)
- 3.暗褐色粘砂(地山)
- 4.暗黄褐色粘質土(地山)

SE015

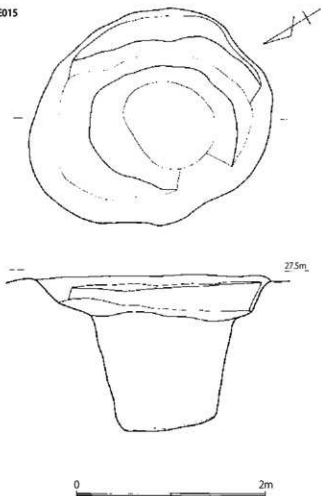


Fig. 105 第253次調査区土層、SD005、SE015 遺構実測図 (1/60、1/40)

した。遺構検出時に柱痕は検出できなかった。

253SB035 (Fig. 104)

東側調査区で検出された南北2間以上、東西2間の掘立柱建物で、北側に庇が付いているが、調査区外に続き、明確な規模は不明である。主軸の振れはN-1° 13' 39" - Wで僅かに西に振れている。柱間は南北方向が2m、東西方向が東から1.55m、1.7mとなっている。柱穴の掘り方は平面略円形プランを呈し、径0.3～0.6m前後、深さは0.1～0.5mを測る。遺構検出時に柱痕は検出できなかった。

溝

253SD005 (Fig. 105)

検出長5.25m、幅1.85～2.7m、深さは最深で0.4mを測る。振れはN-26° 24' 54" - Eである。

井戸

253SE015 (Fig. 105)

西側調査区の西隅にあり、3段掘りの素掘りの井戸である。250SB010の柱穴を切っている可能性が考えられる。平面プランは楕円形プランを呈し、長軸約2.5m、短軸2.25m、深さは1.63mを測る。井戸枠の部材と考えられる木製品の出土はなかった。埋土は遺構上面から暗褐色土、茶褐色土、黒褐色土、暗灰色粘土に分かれ、遺物は各層から出土した。

(5) 出土遺物

掘立柱建物

253SB010j 出土遺物 (Fig. 106)

土師器

坏a (1, 2) 2点とも底部切り離しは糸切りである。1は復元口径15.6cm。

丸底坏a (3) 内面にはミガキbが部分的にみられる。

253SB010g 出土遺物 (Fig. 106)

土師器

丸底坏 (4) 摩滅が目立つ。色調は黄白色を呈する。

253SB020j 出土遺物 (Fig. 106)

土師器

丸底坏a (5) 内面がミガキbで、外面中位には指頭圧痕を残す。

253SB035a 出土遺物 (Fig. 106)

土師器

小皿a (6) 口径9.8cm。底部切り離しは不明。

丸底坏a (7) 復元口径15.5cm。

丸底坏 (8) 摩滅が目立つが、外面には回転ヘラ切り痕が残る。

鉢 (9) 復元口径22.0cm。全体的に摩滅し、色調は黄橙色を呈する。

253SD005 暗茶褐色土出土遺物 (Fig. 106)

土師器

小皿a (10～14) 復元口径8.8～9.8cm。底部切り離しは、ヘラ切りと糸切りが混在する。

坏a (15, 16) 底部切り離しは糸切りである。16は復元口径14.1cm。

丸底坏a (17) 内面ミガキbで、外面はヨコナデとナデ調整。

鉢 (18) 胎土は砂粒を多く含み、色調は黄白色で、外面には煤が点在している。

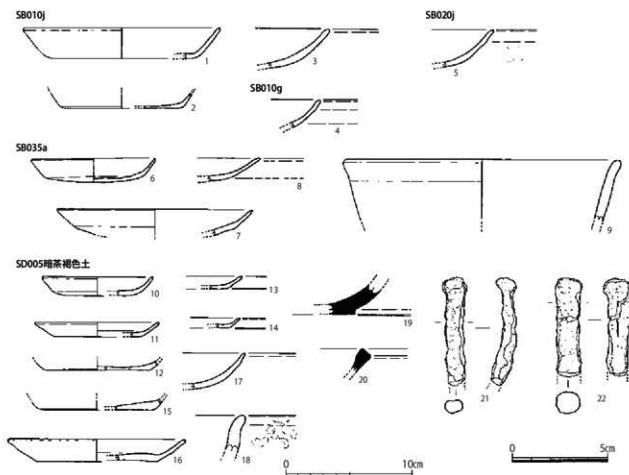


Fig. 106 253SB010・020・035、SD005 出土遺物実測図 (1/3、21・22は1/2)

須恵質土器

鉢 (19, 20) 19は底部が糸切り後ナゲ調整。内面は使用により平滑である。20は東播系、金属製品

鉄釘 (21, 22) 2点とも厚く錆に覆われ、先端を欠損する。21は現存長5.75 cm、大きさ1.3×0.9 cm。22は現存長5.2 cm、大きさ1.4×1.5 cm。

井戸

253SE015 暗褐色土出土遺物 (Fig. 107)

須恵器

碗c (1) 復元口径15.8 cm、器高4.6 cm、復元底径5.4 cm。底部外面は回転糸切り。内外面は回転ナゲ調整。胎土は精製され、色調は灰色を呈する。籬窓。

風字硯 (2) 陸部の破片で、墨池部分は欠損する。胎土は0.3 cm前後の白色砂粒を含み、色調は暗灰色を呈する。全てヘラケズリで成形し、硯側に合わせ脚部を作っている。硯面は使用により平滑となり、細かい擦痕が残る。

土師器

小皿a (3~13) 底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。口径は、3が他より小さく7.6 cmだが、それ以外は8.8~10.0 cm。

丸底坏a (14~20) 復元口径14.6~15.8 cm。底部は回転ヘラ切りである。

鉢 (21) 胎土は0.1 cm以下の白色砂粒と微細な茶色粒を多く含み、色調は黄灰色を呈する。内面ミガキ、外面もミガキのようにみえる。

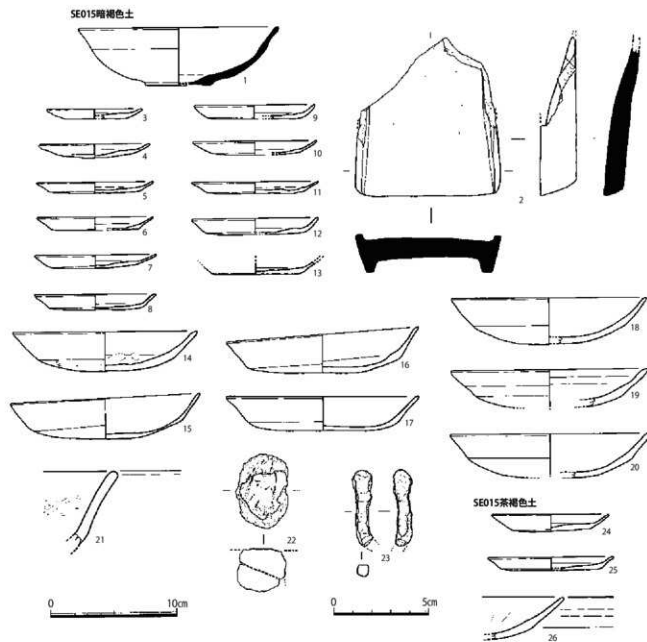


Fig. 107 253SE015 暗褐色土・茶褐色土出土遺物実測図 (1/3, 23 は 1/2)

土製品

土壁 (22) 胎土には土師器片を含み、スサ痕もみられる。1面に平坦面があり表面部分と推測される。

金属製品

鉄釘 (23) 先端部を曲げているが欠損する。釘に対し直交する木目が残る。

253SE015 茶褐色土出土遺物 (Fig. 107)

土師器

小皿 a (24, 25) 口径 9.4 cm と 10.0 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。

丸底坏 a (26) 外面ヨコナデ、内面はミガキ b を施す。

253SE015 黒褐色土出土遺物 (Fig. 108)

須恵器

椀 (1, 2) 1は灰色で内外面に暗灰色に変色する部分がある。籾窠か。2は口縁端部が黒色化する。内面が若干平滑である。籾窠か。

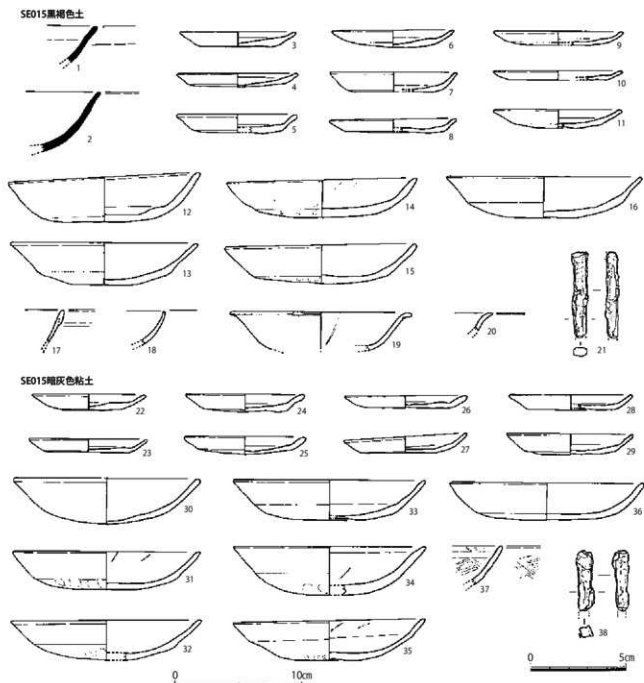


Fig. 108 253SE015 黒褐色土・暗灰色粘土出土遺物実測図 (1/3、21・38は1/2)

土師器

小皿 a (3～11) 復元口径 9.2～10.2 cm, 底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

坏 a (12) 復元口径 15.2 cm, 器高 3.15～3.9 cm, 底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。

丸底坏 a (13～16) 復元口径 14.8～15.2 cm, 14は内面にミガキ b のコテ当て痕が残る。

白磁

碗 (17) やや扁平な玉縁口縁である。IV類。

皿 (18) 丸味のある体部である。VII類。

青白磁

皿 (19, 20) 19は復元口径 14.4 cm, 口縁端部を外反させ、輪花と白堆線を施す。胎土は微細な黒粒を多く含む。軸は青緑色釉で、内外面に大きな貫入が入る。20は19と同一個体か。

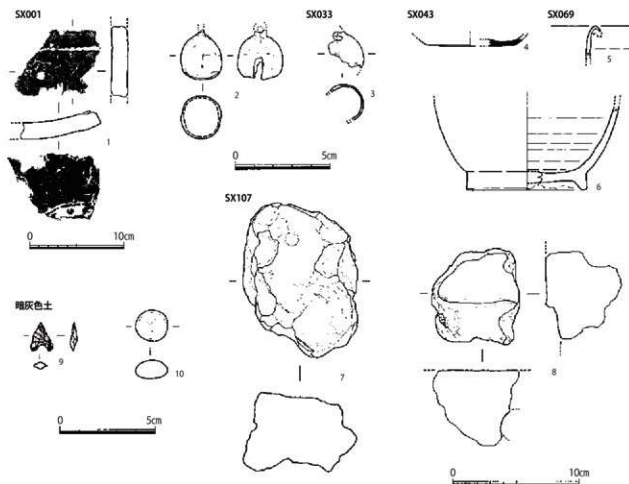


Fig. 109 第253次調査その他の出土遺物実測図 (1/3、石製品・金属製品は1/2、瓦は1/4)

金属製品

鉄釘 (21) 先端部を欠損する。現存長 4.5 cm、幅 0.85×0.75 cm。

253SE015 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 108)

土師器

小皿 a (22 ~ 29) 口径 9.0 ~ 10.0 cm。底部切り離しは全て回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底坏 a (30 ~ 36) 復元口径 14.8 ~ 15.4 cm。摩擦が目立つものもあるが、底部は押し出され、内面にはミガキ b を施す。34 の口縁部内面にはやや平坦に仕上げる。

黒色土器

椀 (37) B 類。内外面にミガキ c を施すが摩擦も目立つ。

金属製品

鉄釘 (38) 先端部を欠損する。錆に残る木目は釘と平行する。

その他の遺構

253SX001 出土遺物 (Fig. 109)

瓦類

平瓦 (1) 軒丸瓦の瓦当面の押し型を施す。その他はナデ調整。

金属製品

銅鈴 (2) 一部欠損するが良好に残り、色調は暗緑青色を呈する。内部に小玉は残っていない。現存縦 2.7 cm、横 2.4 cm。

253SX033 出土遺物 (Fig. 109)

金属製品

銅鈴 (3) 銅鈴の残片で、接合部が確認できる。

253SX043 出土遺物 (Fig. 109)

須恵器

坏 (4) 胎土は微細な黒色粒を多く含み、灰色を呈する。底部切り離しは回転系切りである。

253SX069 出土遺物 (Fig. 109)

白磁

壺 (5, 6) 5は口縁部を大きく曲げる。釉調は淡白緑色を呈する。6は復元高台径9.6 cm。釉調は淡白緑色で、内外面とも施釉するが、高台内面は露胎である。

253SX107 出土遺物 (Fig. 109)

土製品

土壁 (7, 8) 7は胎土にスサ痕がみられ、一部平坦面が作られている。8は胎土に土器片やスサを含む。一部平坦面が作られ、小舞竹痕も残る。

暗灰色土出土遺物 (Fig. 109)

石製品

石鏃 (9) 大きさは1.5×1.2 cm、厚さ0.4 cm。黒曜石製。

基石 (10) 乳白色の石英。大きさは1.6×1.7 cm、厚さ1.0 cm。

(5) 小結

井上条坊案は右郭8坊までとしており、今回の調査地は条坊外となる。仮に12坊まであったとした場合、調査地中央を9条路が通っているはずであるが、そのような痕跡は確認できていない。また、確認した遺構の全てが11世紀後半以降のものであり、政庁Ⅲ期になって居住域となったことが窺える。これらのことから、この付近一帯は大宰府条坊の外側であったことを裏付けるものと言える。

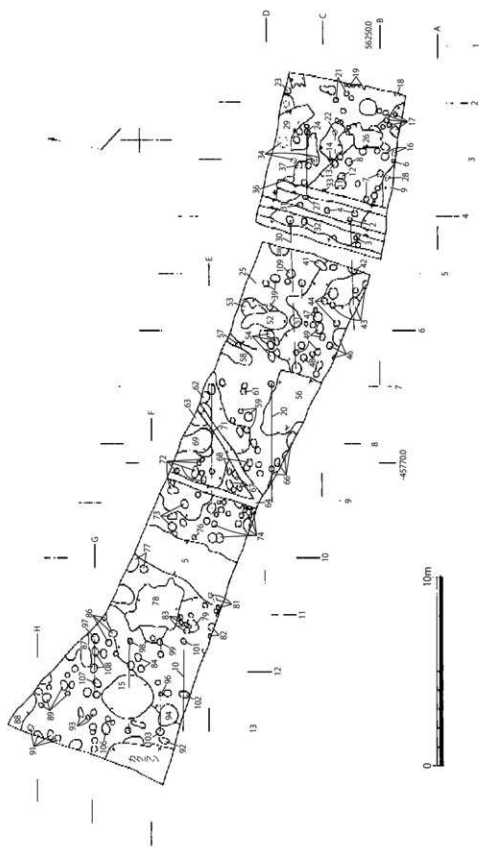


Fig. 110 第253次調査遺構略測図 (1/200)

表28 第253次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	253SX001	攪乱		近代以降	BC3.4
2	253SB030b	ピット	S-30の柱穴 暗茶色土	11世紀後半～12世紀前半?	B4
3		攪乱	黒褐色土	近代～	B4
4		ピット群	茶褐色土	平安後期～	B3
5	253SD005	溝	暗茶褐色土	12世紀中頃～後半	DEB.10
6		ピット	茶褐色土	平安時代～	A3
7		ピット群	茶褐色土	平安時代～	B3
8		ピット	茶褐色土	11世紀後半	B3
9		たまり	茶褐色土	11世紀後半～12世紀前半	A3
10	253SB010	掘立柱建物		12世紀後半	E～G.11～13
11		ピット	暗茶色土	平安後期～	B3
12		ピット	茶褐色土	11世紀後半～12世紀前半	B3
13	253SB035h	ピット	S-35の柱穴 茶褐色土	平安時代～	B3
14		ピット	暗茶色土	平安時代後期～	B3
15	253SE015	井戸	S-15→10か?	11世紀後半～12世紀初頭	F12
16		ピット群	茶褐色土	11世紀後半～12世紀初頭	A2
17		ピット群	暗茶色土	11世紀後半～	A2
18		ピット群	暗茶色土		A1
19		攪乱(重機の爪跡)		近代～	B1
20	253SB020	掘立柱建物		11世紀後半前後?	CD6～9
21		ピット群	暗茶色土	平安時代	B1
22	253SB035b	ピット	S-35の柱穴 暗茶色土	11世紀後半～12世紀前半?	B1
23		ピット	暗茶色土	平安後期～	C2
24	253SB035a	ピット	S-35の柱穴 暗茶色土	11世紀後半～12世紀前半?	C2
25	253SB025	掘立柱建物		平安時代	CD6.6
26		攪乱		近世～	B2
27	253SB035f	ピット	S-35の柱穴 暗茶色土	平安時代	C3
28		ピット	暗茶色土	平安後期～	A3
29		攪乱		現代	C2.3
30	253SB030	掘立柱建物		11世紀後半～12世紀前半?	BC4～6
31		ピット(攪乱)	黒褐色土	近代～	C3
32		ピット	茶褐色土	平安後期～	C4
33	253SX033	ピット	茶褐色土	平安時代	C3
34		ピット群	茶褐色土	平安後期	C3
35	253SB035	掘立柱建物			A～C.2・3
36		ピット	茶褐色土	11世紀後半	C3
37		ピット	茶褐色土	11世紀後半	C3
38		土坑	暗茶色土	11世紀後半～12世紀初頭	C4
39		ピット群	暗茶色土	平安後期	C5
41		ピット	茶褐色土	平安後期	C4
42		ピット	暗茶色土		B4
43	253SX043	ピット群	暗茶色土	12世紀代	B5
44		ピット群	茶褐色土	平安後期	B5
46		ピット群	暗茶色土	12世紀代	B6
47		ピット群	茶褐色土	平安後期	C5
48		ピット群	茶褐色土	平安後期～	C6
49		ピット群	暗茶色土		C6
51	253SB030g	ピット	S-30の柱穴 暗茶色土	11世紀後半～12世紀前半?	C5
52		土坑	暗茶色土	11世紀後半～12世紀初頭	CD6.6
53		ピット	茶褐色土	平安時代	D6
54		ピット群	茶褐色土	平安後期～	C6
56		攪乱		近現代	C7
57	253SB025e	ピット	S-25の柱穴 茶褐色土	平安時代	D6
58		溝	暗茶色土	12世紀	D6
59		ピット群	茶褐色土	平安後期	D7
61		ピット	暗茶色土	平安後期	D7
62		ピット	暗茶色土		E7
63		ピット	茶褐色土		E7
64		攪乱(下水管)		近現代	DEB.9
66		ピット群	暗茶色土	平安後期	C8

67		ビット群	茶褐色土	平安時代	D6
68		ビット群	暗茶色土	平安時代	D6
69	253SX069	土坑	暗茶色土	12世紀中頃	E7. 8
71	253SB020j	ビット	S-20のビット 茶褐色土	11世紀後半前後?	D7
72		ビット群	茶褐色土	平安後期	E8
73		ビット群	茶褐色土	平安時代	E9
74		ビット群	茶褐色土	平安後期	D9
76		ビット	茶褐色土		E9
77		ビット群	茶褐色土	平安時代	E10
78		たまり	茶褐色土	平安後期	EF10. 11
79		ビット	暗茶色土		E11
81		ビット群	茶褐色土		D10
82		ビット群	茶褐色土	平安時代	D11
83		ビット群	茶褐色土	平安時代	E11
84		ビット群	茶褐色土	12世紀～	F11
86		ビット群	茶褐色土		F11
87		土坑	茶褐色土		G11
88		たまり	暗茶色土		H12
89		ビット群	茶褐色土		G12
91		ビット群	茶褐色土		G13
92		ビット	暗茶色土		E13
93		ビット群	茶褐色土	平安後期	G12
94		土坑	暗茶色土	12世紀中頃	E12
96	253SB010i	ビット	S-10の柱穴 茶褐色土	12世紀後半	E12
97	253SB010a	ビット	S-10の柱穴 茶褐色土	12世紀後半	G11
98	253SB010b	ビット	S-10の柱穴 茶褐色土	12世紀後半	F11
99	253SB010c	ビット	S-10の柱穴 茶褐色土	12世紀後半	E11
101	253SB010d	ビット	S-10の柱穴 茶褐色土	12世紀後半	E11
102	253SB010e	ビット	S-10の柱穴 茶褐色土	12世紀後半	E12
103	253SB010g	ビット	S-10の柱穴 茶褐色土	12世紀後半	E13
104	253SB010j	ビット	S-10の柱穴 茶褐色土	12世紀後半	G12
106		ビット	茶褐色土		F13
107	253SX107	ビット	茶褐色土	11世紀後半	G12
108		ビット群	茶褐色土	平安時代	G11
109	253SB030b	礎石	S-30の柱穴	11世紀後半～12世紀前半?	C5

表29 第253次調査 出土遺物一覧表

5-1	銅 意 銅鏡片
土 師 部	器(小皿a(1)、杯a(1))、供養具
土 師 實 土 部 鉢	鉢
肥 前 系 礎 部 磁 片	磁 片
白	磁 器：V-1a(1)
国 産 陶 器	器(レンガ、磁片)
瓦	製平瓦(射天笠形)、横し瓦(平瓦)
金 属 製	品(銅釘、鉄釘)
土 製	品(粘土土器)
5-2	土 師 部 供養具
5-3	国 産 陶 器
瓦	製横し瓦(平瓦)
土	の 磁 瓦
5-4	土 師 部 器(小皿a、杯、碗c)、供養具
国 産 實 土 部 磁 片	磁 片
5-5(埋藏彩色土)	国 産 意 器(杯、碗、磁片)
土 師 部	器(小皿a(1、2)、杯a(1)、丸底杯a、碗c、)
瓦	供養具、器台、鉢?
土 師 實 土 部 鉢	鉢
肥 前 系 礎 部 磁 片	磁 片(灰被面)
白	磁 器：IV(2)、V-1×樽-1(1)、樽(1)、煎口(1) 広東系(1)、陶磁片(2)
中 国 陶 器	器(1)
瓦	製横し瓦(平瓦)、丸瓦(横山)、射平瓦?
金 属 製	品(鉄釘、鉄釘)
土 製	品(滑石加工品、石鏡)
5-6	土 師 部 供養具
5-7	土 師 部 供養具
5-8	土 師 部 器(小皿a(5)、杯、丸底杯a)
5-9	国 産 意 器
土 師 部	器(小皿a、供養具)
白	磁 器：V-1a(1)、器(1) 白磁磁片：広東系(1)、磁片(1)
5-11	国 産 意 器(碗、磁片)
土 師 部	供養具
5-12	土 師 部 器(小皿a(5)、杯a、丸底杯a、供養具)
5-13	土 師 部 供養具
金 属 製	品(鉄釘)
土 師 部	器(小皿a、杯a)
5-10(埋藏彩色土)	土 師 部 器(小皿a(5)、丸底杯、供養具、器台)
瓦	製 品(磁片)
土 製	品(土器)
5-15(埋藏彩色土)	国 産 意 器(碗)
土 師 部	器(小皿a(5)、杯a(5)、丸底杯a、碗c、器台)
瓦	製 品
白	磁 器：IV-(1) 煎：罐(1)
青 白 磁 器(2)	
石 製	品(滑石加工品)
土 製	品(土器)
金 属 製	品(鉄釘)
5-13(埋藏彩色土)	国 産 意 器(碗)
土 師 部	器(小皿a(5)、丸底杯a、磁片)
瓦	製 品(土器)
白	磁 器：II-6(1)、XI-17(2) 煎：V~樽(1)
石 製	品(滑石(黒曜石))
土 製	品(磁片?)

5-18(埋藏彩色土)	国 産 意 器(碗、鉢(陶器))、磁片
土 師 部	器(小皿a(5)、杯a(5)、丸底杯a、)
瓦	製 品(碗、鉢、鉢)
土 師 實 土 部 鉢	鉢
白	磁 器：II-(1) 煎磁片?(2) 白磁磁片：広東系(1)
青 白 磁 器(2)	
瓦	製 品(滑石?)
石 製	品(丸石、滑石(黒曜石)、黒字碗)
土 製	品(土器)
金 属 製	品(鉄釘)
土	の 磁 瓦
5-16	土 師 部 器(小皿a(5)、丸底杯a、供養具)
5-17	土 師 部 器(杯、丸底杯、供養具)
白	磁 器：広東系(1)
5-18	土 師 部 器(杯)
5-19	土 師 部 器(片、磁片)
国 産 意 器(2)	
瓦	製横し瓦
5-21	土 師 部 供養具
5-22	土 師 部 器(小皿a、丸底杯、供養具)
白	磁 器(白磁磁片(1))
5-23	土 師 部 供養具
土 製	品(土鏡)
5-24	土 師 部 器(小皿a(5)、丸底杯a、丸底杯、鉢)
土 製	品(土器)
5-25	国 産 意 器(碗、磁片)
土 師 部	器(杯a、供養具、器台)
白	磁 器：V-1a(1)、V-1×樽-2(1)、樽(1)、磁片(1) 煎 品：V-1a(1)、煎?(1)
中 国 陶 器(2)	
瓦	製横し瓦
5-27	土 師 部 器(小皿a×杯a(5)、供養具、器台)
5-28	土 師 部 器(小皿a(5)、杯a×小皿a、供養具)
5-29	国 産 意 器(杯)
土 師 部	器(小皿a(5)、杯a、丸底杯a、供養具)
肥 前 系 礎 部 磁 片	磁 片
国 産 陶 器	器、レンガ
瓦	製平瓦(筒子)、横し瓦(平瓦)
5-31	土 師 部 磁片
瓦	製横し瓦(平瓦)
5-32	土 師 部 器(小皿a、丸底杯、供養具)
5-33	土 師 部 供養具
金 属 製	品(銅釘)
5-34	土 師 部 器(小皿a(5)、丸底杯、供養具)
白	磁 器(白磁磁片(1))
5-35	国 産 意 器(磁片)
土 師 部	器(小皿a(5)、丸底杯a、供養具)
白	磁 器(白磁磁片(1))
5-37	土 師 部 器(小皿a(5)、杯a(5)、丸底杯a、器台)
5-38	土 師 部 器(小皿a(5)、丸底杯a、供養具、器台)
白	磁 器：IV(1) 白磁磁片(1)
5-39	土 師 部 供養具

5-41	上 鋼 鋼小直 α (γ)、供鋼具、鑄鋼
白	鋼白鐵板片(1)
5-42	上 鋼 鋼丸底坪、供鋼具
白	鋼白鐵(北京高板片(1))
5-43	鋼 意 鋼板
上 鋼	鋼小直 α (γ 、 γ)、 $\beta\alpha$ (γ)、供鋼具、鑄鋼
5-44	上 鋼 鋼 α (γ)、鑄鋼、供鋼具
5-46	上 鋼 鋼小直 α (γ 、 γ)、小直 α × $\beta\alpha$ (γ)、供鋼具
上 製	品鐵片
5-47	上 鋼 鋼小直 α 、供鋼具
白	鋼黑：V-2(1)
5-48	上 鋼 鋼供鋼具
其	鋼鋼
5-49	上 鋼 鋼供鋼具
右 製	品鋼片(黑鐵石)
5-51	上 鋼 鋼小直 α × $\beta\alpha$ 、丸底坪、鑄鋼
備 色 上 製 主 鋼鋼	
5-52	上 鋼 鋼小直 α (γ)、丸底坪 α 、供鋼具、鑄鋼
備 色 上 製 A 鋼鐵片	
其	鋼鋼
白	鋼白鐵板片(1)、白鐵內面鋼片(1)
右 製	品丸石
金 屬 製	品鋼釘
5-53	上 鋼 鋼丸底坪、供鋼具
5-54	上 鋼 鋼小直 α 、丸底坪、供鋼具
5-56	鋼 意 鋼鋼、 $\beta\alpha$ 、 α
上 鋼	鋼小直 α (γ)、 $\beta\alpha$ (γ 、 γ)、鋼 α 、供鋼具、鑄、鑄鋼
製 前 系 鋼 鋼	
白	鋼：V(2)、V-1(1)、V-4(1)、V-4× β -1(1)、 β (1) 鋼(鋼鋼(1)、內面鋼片(1)、鋼鐵片(2) 鋼：鋼 γ (1)、V- β (1)、 β -1 β (1) 白鐵板片：鐵片(2)、 β 系系(1)
備 定 鋼 及 青 鋼鋼(1- β × β)	
中 國 陶 鋼	鋼瓦重(1) 中國陶鋼鋼片(2)
其	鋼丸(佛子)
其	鋼瓦重
5-57	上 鋼 鋼供鋼具
5-58	上 鋼 鋼 β (γ)、供鋼具
右 製	品丸石
5-59	上 鋼 鋼小直 α 、供鋼具、鐵片
白	鋼鐵板片(1)
5-61	上 鋼 鋼小直 α (γ)、丸底坪、供鋼具
白	鋼鋼：H-1(1)
5-62	上 鋼 鋼供鋼具
5-63	鋼 意 鋼鋼
上 鋼	鋼丸底坪 α 、供鋼具
右 製	品佛石加工品
5-64	鋼 意 鋼鋼、鐵片
上 鋼	鋼 β (γ)、供鋼具
製 前 系 鋼 鋼	
白	鋼鐵板片(1) 鋼IV(1) 白鐵板片(2)、口輪鋼釘(1)
中 國 陶 鋼	中國陶鋼鋼片(1)
5-66	上 鋼 鋼小直 α (γ)、 $\beta\alpha$ ×小直 α 、供鋼具、鐵片
白	鋼口輪鋼釘(1)
右 製	品丸石

5-67	鋼 意 鋼鐵片
上 鋼	鋼供鋼具
其	鋼鐵片
5-68	上 鋼 鋼鋼 γ 、供鋼具
5-69	鋼 意 鋼板
上 鋼	鋼小直 α (γ 、 γ)、 $\beta\alpha$ (γ)、供鋼具、鑄鋼
白	鋼：H-1(2)、IV(2)、V-2(1)、V-1× β -2(1)、鋼鐵片(1) 鋼：V- β (2)、V- β (1)、鋼鋼(1) 鋼鋼(2)、鋼鋼(1)、鋼(1) 白鐵板片(2)、 β 系系(1)
中 國 陶 鋼	中國陶鋼鋼片(1)
其	鋼平瓦、丸瓦(佛子)
5-71	上 鋼 鋼 β (γ)、丸底坪、供鋼具
5-72	上 鋼 鋼丸底坪、供鋼具
5-73	上 鋼 鋼供鋼具
白	鋼白鐵板片(1)
5-74	上 鋼 鋼小直 α 、供鋼具
右 製	品鋼片(黑鐵石)
5-76	上 鋼 鋼供鋼具
5-77	上 鋼 鋼供鋼具
5-78	鋼 意 鋼鋼
上 鋼	鋼丸底坪、供鋼具
其	鋼鐵片
5-79	上 鋼 鋼鐵片
5-81	上 鋼 鋼鐵片
5-82	上 鋼 鋼供鋼具
白	鋼白鐵板片(1)
5-83	上 鋼 鋼供鋼具
金 屬 製	品鋼釘
5-84	上 鋼 鋼小直 α × $\beta\alpha$ (γ)、丸底坪 α 、供鋼具
5-86	上 鋼 鋼鑄鋼、鐵片
5-87	上 鋼 鋼板
5-88	上 鋼 鋼鐵片
5-89	上 鋼 鋼供鋼具
5-91	上 鋼 鋼鐵片
5-92	上 鋼 鋼供鋼具
5-93	上 鋼 鋼 β (γ)、丸底坪 α
上 製	品上管
5-94	鋼 意 鋼鋼、鋼
上 鋼	鋼小直 α (γ 、 γ)、 $\beta\alpha$ (γ)、丸底坪 α 、鑄鋼
其	鋼鋼
白	鋼：V- β (1)、鋼鐵片(1) 鋼：V1× β (1) 鋼×水柱重(1) 白鐵板片(1)
右 製	品佛石加工品
金 屬 製	品上管
金 屬 製	品鋼釘
5-96	上 鋼 鋼鐵片
5-97	上 鋼 鋼小直 α (γ)、供鋼具
5-98	上 鋼 鋼供鋼具

第 276 次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は大宰府市通古賀 5 丁目 113 番地で、通古賀交差点東側の大宰府条坊右郭 6 坊 10、11 条に位置する。

2007 (平成 19) 年 8 月 24 日より共同住宅建築に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて問い合わせがあった。対象地は 1996 (平成 8) 年に第 188 次調査として一部調査を行い、遺構を確認していたため、2008 (平成 20) 年 6 月 16 日から 8 月 25 日にかけて発掘調査を実施した。開発対象面積は 682 m²で、調査面積は 312 m²で、調査は山村信榮が担当した。

(2) 調査区と基本層位 (Fig. 112)

調査は共同住宅本体の下を 1 区とし、南西側の給水施設部分を 2 区として行った。遺構は区画整理事業によって埋められた旧水田下にあつて、1 区は現在の地表下約 1.4m で最初の遺構が確認される黒褐色土層 SX001 がある。さらにその厚さ 0.4 ~ 0.6m の SX001 下面に次の遺構面が存在する。さらにその下には奈良時代の遺物を含む旧河川の堆積層である黄灰色シルト層が見られる。面的な調査は SX001 の上下 2 面でおこなった。2 区は区画整理整地層を含む表土直下で灰色砂層が確認され、同層からは縄文土器片と黒曜石、安山岩のフレークが出土したが遺構は確認されず、縄文時代の遺物を含む水流により形成された堆積層と考えられる。

(3) 検出遺構

柵列

276SA005 (Fig. 113)

調査区の東側中央で検出された 3 間 (4.3m) の柵列跡で、N-3° 0' 46" -E の方位を持つ。遺構の切りあい関係から黒褐色の溜り状遺構 SX001 に後出し、11 世紀後半以降の所産と考えられる。

溝

276SD010 - 015 (Fig. 113)

調査区東壁沿いの SX001 下面で検出された一連の南北溝で、切れ切れながら長さ 12m、最大幅 1.4m、深さ 0.7m を測る。黒色土によって埋没し、11 世紀後半以降の所産と考えられる。

276SD035 - 040 (Fig. 113)

調査区の北東隅で並行するように検出された 2 条の溝跡で、北側の SD040 は最大幅 2.4m、長さ 8m、深さ 0.2m を測る。黒色粘土で埋没する。SD035 は最大幅 0.6m、長さ 2.4m、深さ 0.1m を測る。黒灰色粗砂で埋没する。約 13m 南に溝であった可能性のある SD020・025 が並行して存在する。SD035・040 は大宰府条坊の 10 条付近で施工されたものであり、通行痕跡の検出に至らなかったものの坊路側溝であった可能性があり、11 世紀後半以降の所産と考えられる。

井戸

276SE030 (Fig. 113)

調査区の東側中央の下面で検出された直径約 2.4m、深さ 1.2m の井戸跡であるが、土層観察から上から深さ 0.7m ほどまでは一度掘り返されて土坑として使用されたと考えられる。上層の茶色砂、中層の黒灰色土は井戸廃棄後の堆積層である。井戸枠は検出されず、底の水溜部分に直径 0.3m、深さ 0.2m ほどの曲物と思われる痕跡が見られ、10 世紀以降の所産と考えられる。

土坑

276SK003 (Fig. 113)

調査区の中央の SX001 の上面で検出され、東西 3m、南北 2.5m、深さ 1.1m を測る。黒灰色シルト、灰

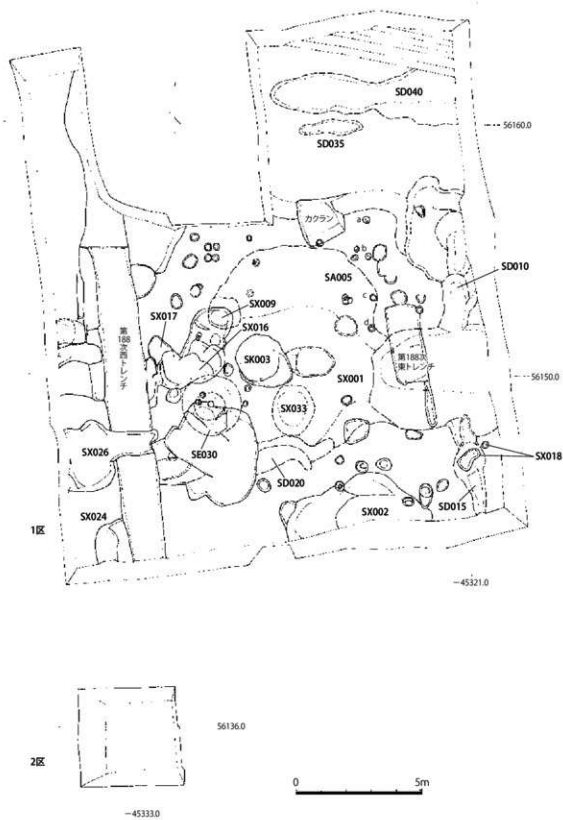


Fig. 111 第276次調査遺構全体図 (1/150)

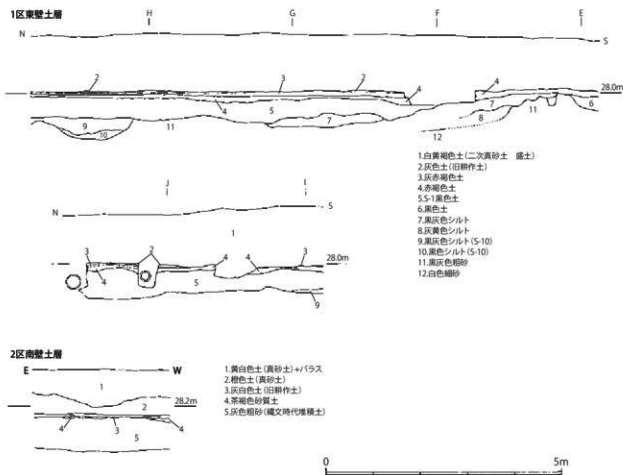


Fig. 112 第276次調査区土層実測図 (1/80)

黒色土、黒色土、黒灰色土の順で堆積する。灰黒色土中で瓦や須恵器壺などがまとまって検出された。9・10世紀代の遺物を比較的多く含むが、最下層の黒灰色シルトで丸底環aが出土していることから11世紀以降に形成された遺構といえ、11世紀後半以降の所産と考えられる。

その他の遺構

276SX001

調査区中央から北側で広く検出された溜り状遺構で、黒色ないし黒褐色土壌が場所によっては0.5mの厚さで堆積する。11世紀後半以降の所産と考えられる。不整形な形状から洪水時の浸食、再堆積により形成されたものである可能性がある。11世紀後半以降の所産と考えられる。

276SX002 (Fig. 114)

調査区の南側中央のSX001の南側で検出され、東西7m、南北2.5m以上、深さ1.1mを測る。自然堆積で埋没するが西側の11～13層はそれ以降の堆積と不整合面で接しており、堆積過程で浸食ないし掘り返しがあった可能性があり、10世紀以降の所産と考えられる。

276SX009 (Fig. 114)

調査区の中央やや西側のSX001の下面で検出された東西0.9m、南北1m、深さ1mを測るピット状の遺構で、黒灰色土の単層で埋没する。底面で須恵器の壺bと土師器碗cが検出された。11世紀以降の所産と考えられる。

276SX016 (Fig. 113)

調査区の中央やや西側で検出された東西1.1m、南北0.7m、深さ0.2mを測る溜り状の遺構で、黒灰色

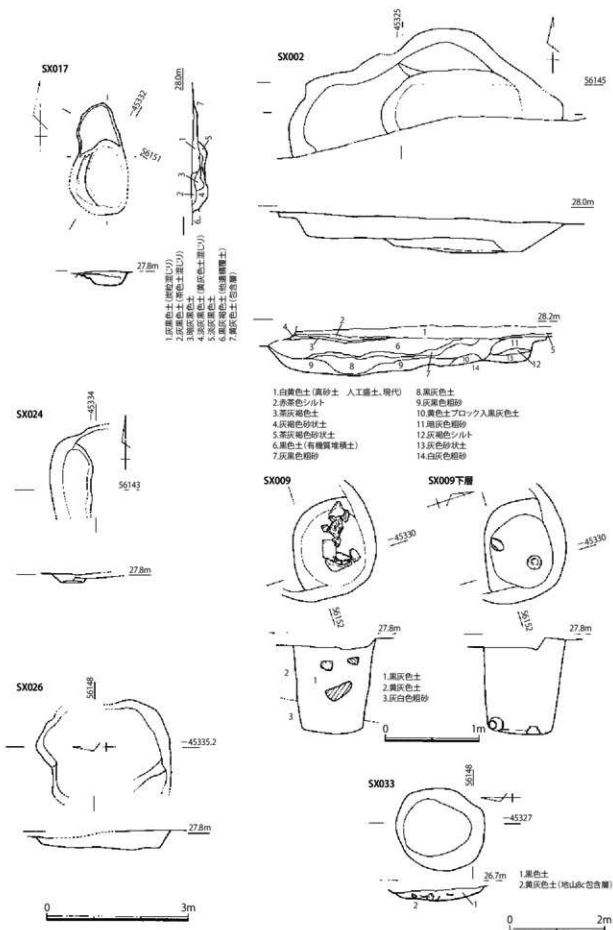


Fig.114 第276次調査 その他の遺構実測図 (1/40、1/80)

土で埋没する。10世紀以降の所産と考えられる。

276SX017 (Fig. 114)

調査区の中央やや西側で検出された東西0.8m、南北1.5m、深さ0.3mを測る溜り状の遺構で、灰黒色土で埋没する276SX016に先行する遺構である。10世紀以降の所産と考えられる。

276SX018

調査区の南東隅で検出されたピット群で、276SD015に後出する遺構である。11世紀後半以降の所産と考えられる。

276SX024 (Fig. 114)

調査区の南西隅で検出された東西0.7m以上、南北1m以上、深さ0.1mを測る溜り状の遺構で、黒色土で埋没する。11世紀後半以降の所産と考えられる。

276SX026 (Fig. 114)

調査区の南西で検出された東西1m以上、南北1.4m、深さ0.2mを測る溜り状の遺構で、黒色土で埋没し、11世紀以降の所産と考えられる。

276SX033 (Fig. 114)

調査区の中央南側で検出された東西1.7m、南北2m、深さ0.2mを測る溜り状の遺構で、黒色土で埋没し、11世紀以降の所産と考えられる。

(4) 出土遺物

井戸

276SE030 黒灰色土出土遺物 (Fig. 115)

土師器

椀c (1) 細身で直線的に広がる高台の形状を呈す。高台径7.2cmに復元される。

器台 (2) 断面七角形に削って面取りされた脚部で、高さ6.9cmが残る。

鉢 (3) 先端は欠損するが横に平たい形状の把手が取り付けられ、体部は上方に大きく開く形状を呈す。ユビオサエ後にナデが施されるが、ハケ目など工具の痕跡は見られない。

黒色土器A類

椀c (4) 厚手で短く広がる高台の形状を呈す。高台径6.7cmに復元される。

黒色土器B類

椀 (5) 厚さ2mm程度の硬質で薄い口縁部片で、内外にヨコ方向の幅の狭い緻密なミガキを施す。口縁端部が外に開く。畿内系の可能性がある。

瓦類

平瓦 (6) 内面は目の粗い布目に、外面は横長の斜格子のタタキ目を有す。焼成は堅い須恵質で、厚さ3.5cmを測る。

石製品

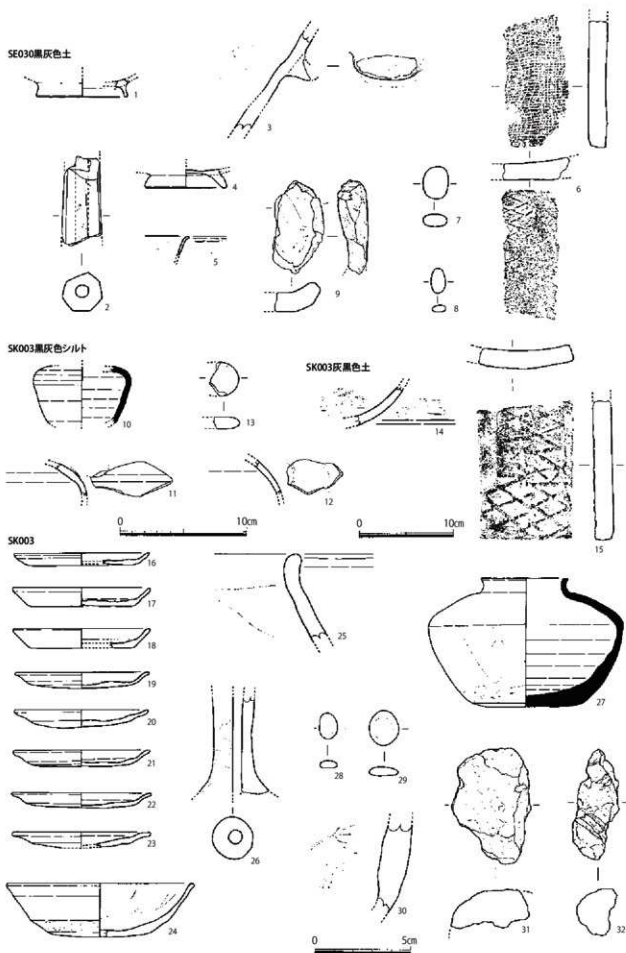
基石 (7、8) 緑色片岩ないし蛇紋岩の光沢をもつ丸石で、7は長さ1.7cm、幅1.4cm、厚さ0.7cm、8は長さ1.4cm、幅0.8cm、厚さ0.4cmを測る。

石鍋の二次加工品 (9) 長さ5.0cm、幅2.7cm、厚さ1.0cmの板状を呈す滑石の破片で、石鍋の底と体部の境部分の破片を2次的に削って使用したものと思われる。

土坑

276SK003 黒灰色シルト出土遺物 (Fig. 115)

須恵器



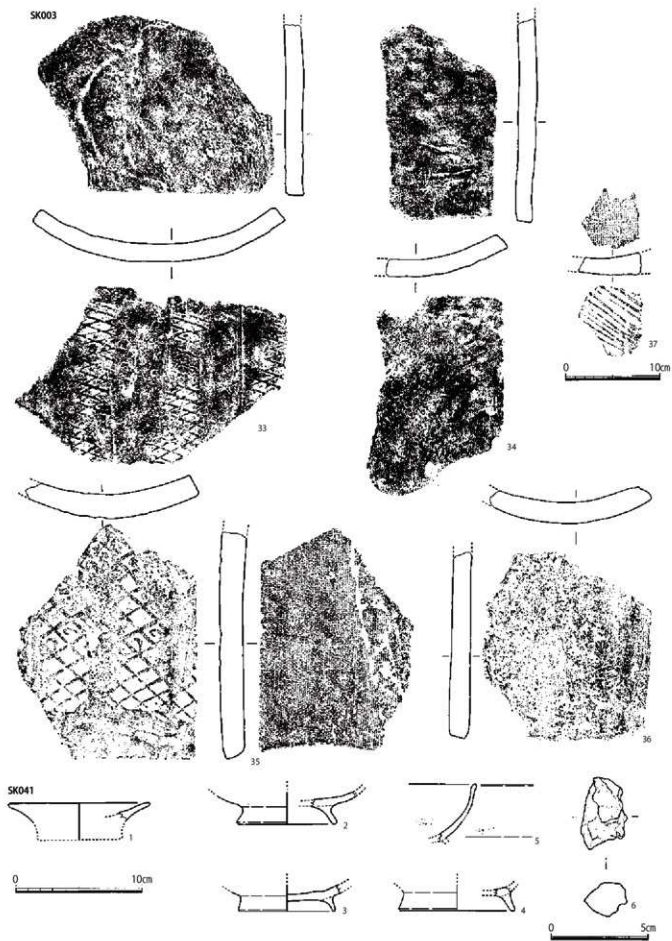


Fig. 116 276SK003 ②・041 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は 1/4, 土製品は 1/2)

小壺(10) 肩の張る葉壺形の形状を成す可能性がある。いわゆるミニチュアの範疇のものか。明るい灰色を呈し焼成は硬質である。

越州窯系青磁

壺もしくは水注(11) 長胴の肩の部分の破片で、淡灰色を呈す緻密で硬質の胎土を持つ。把手などの突起物の一部が残る。

越州窯系青磁もしくは長沙窯系青磁

壺もしくは水注(12) 長胴の肩の部分の破片で、黄緑灰色の軸にやや茶色を帯びた灰色の硬質な胎土を持つ。外面の縦方向に押圧で瓜破の分割線が施される。

石製品

基石(13) 白色の石英質の丸石片で、長さ1.8cm、厚さ0.7cmを測る。

276SK003 灰黒色土出土遺物 (Fig. 115)

緑釉陶器

鉢(14) 球形の胴部片のようだが全体の形状は不明。内外面に手持ちのミガキが施され、灰白色の胎土に薄い緑色の釉が内外面に掛かる。長門系の所産か。

瓦類

平瓦(15) 厚み2cmで、灰色で硬質な胎土を持つ。横長の菱形を呈すタタキ目を有す。

276SK003 出土遺物 (Fig. 115・116)

土師器

小皿a(16～22) 全て回転ヘラ切りによるもので、19～22は口縁端部を外に反らせ気味に仕上げられる。16は口径10.8cm、器高1.0cm、底径8.3cm、17は口径10.8cm、器高1.5cm、底径8.2cm、18は口径10.8cm、器高1.6cm、底径8.1cm、19は口径10.6cm、器高1.3cm、底径7.8cm、21は口径10.8cm、器高1.3cm、底径7.8cm、22は口径11.0cm、器高1.6cm、底径8.1cmに復元される。20は口径10.6cm、器高1.4cm、底径8.0cmを測る。

小皿a2(23) 回転ヘラ切りによるもので、口縁端部を外に反らせた後に上方へ折り曲げる。口径11.0cm、器高1.2cm⁺、底径8.1cmに復元される。

丸底坏a(24) 口径14.9cm、器高4.3cmを測るやや深い形状を呈す。

甕(25) 1.2cmほどの厚めの器壁で口縁端部が短く緩く外反する。

器台(26) 心棒に粘土を巻いて整形した脚部片で、下部は丸底坏が接合されていた。

須恵器

壺a(27) 底は手持ちヘラケズリによる丸底気味の形状で、高台はない。口径6.9cm、器高10.2cmを測る小型品にあたる。

石製品

基石(28、29) 28は長さ1.4cm、幅1.0cm、厚さ0.4cmを測る白色を呈す石英質のもので、29は長さ1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmを測る。

土製品

埴塼(30) カップ状を呈す一見焼土塊状のもので、外面は工具でナデたような痕跡があり、内面は被熱のためか表面が荒れている。

焼土塊(31、32) 赤茶褐色の焼土の塊で、32には藁状の繊維のいわゆるスサが混じる。

瓦類

平瓦(33～37) 33～36は瓦の長軸方向に対して横長の菱形を呈すタタキ目を有するもので、対面

には目の小さな布の痕跡が残る。33と36は側面に分割のための切り込みが残る。37は平行線の刻み目によるタタキ目が残る。厚みは2.5cm程度である。

276SK041 出土遺物 (Fig. 116)

土師器

小皿(1) 口径が10.5cmで直線的に斜め上方方向にやや反りながら開く体部を持つ。南九州地域のものの可能性がある。

椀c(2~4) ハ字形に開く高台を持ち、椀の底は平坦な形状を呈す。高台径は2が7.9cm、3が7.6cm、4が9.2cmに復元される。

黒色土器B類

椀(5) 深い形状の体部で口縁端部はやや厚くなる。内外面に手持ちのミガキbが施される。

金属製品

鉄塊系遺物(6) 錆に覆われ長さ3.2cm、幅2.4cm、厚さ1.0cmを測る。

276SD010 出土遺物 (Fig. 117)

土師器

丸底杯a(1) 口径が10.5cmで、高さが3.2cmまで残るがほぼ底部までであり、あまり深い形状にはならない新しい傾向のものである。

高杯(2) くびれ部の径が6.2cmを測り、杯部は非常に平坦な底の形状を呈す。

鉢(3) 断面の形状が緩く「く」に屈曲する口縁を持つ。焼成は軟質で黄色を基調とする。

甕(4) 厚みが1.2cmほどの直線的な体部で、内面に粘土塊を接合した痕跡が見られる。甕としての風炉のような機能を持つものか。

須恵器

杯c(5,6) 四角い高台が底部やや内側にあり、底は平たい形状を呈す。焼成は硬質で暗灰色を呈す。両者とも内底面に漆の被膜が付着する。5は口径が19.0cm、器高6.3cm、高台径が13.0cmに復元される。

壺a(7) 胴部径が7.0cmに復元されるミニチュア製品で、焼成は硬質で灰色を呈す。

甕(8) 外面は疑似格子目のタタキ目を有す。内面の当て具の痕跡が平行刻み目であり、9世紀の所産と思われる。焼成は硬質で灰色を呈す。

緑釉陶器

椀(9) 円盤状の底から緩く立ち上がる体部に端部が短く屈曲する口縁部を持つ。釉は淡い緑色で光沢がある。胎土は灰色を呈しきめは細かい。洛北系の所産か。口径12.6cm、器高5.3cm、底径4.8cmを測る。

石製品

基石(10,11) 10は長辺1.5cm、短辺1.2cm、厚さ0.6cmを測り白色を呈す石英質のものである。11は長辺1.3cm、短辺1.0cm、厚さ0.5cmを測り、色調は緑灰色を呈し蛇紋岩製のものとみられる。

276SD015 出土遺物 (Fig. 117)

土師器

杯a(12,13) 平坦な底部からややカーブしながら立ち上がる体部を有す。黄灰色を呈し、底径は12が6.8cm、13は7.0cmに復元される。

椀c(14) 平坦な底部から直線的に若干開く高台を持つ。黄白色を呈し、高台径は7.2cmに復元される。

甕(15) 内傾する体部の端部がそのまま口縁となっている。内面はケズリによる調整で、茶褐色を呈す。

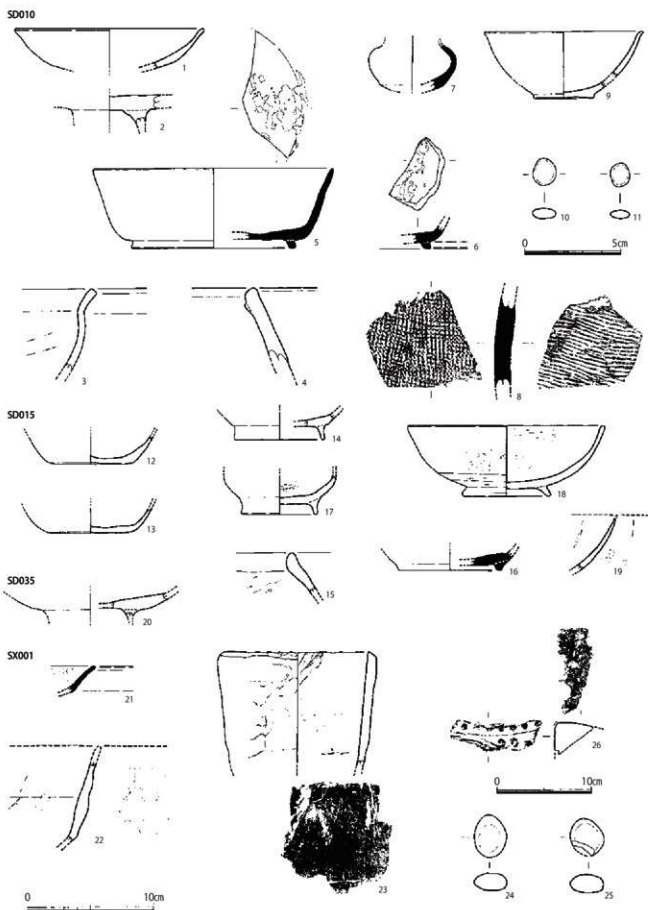


Fig. 117 276SD010・015・035、SX001①出土遺物実測図（1/3、瓦は1/4、石製品は1/2）

須恵器

坏c (16) 高台は丸みを持つ形状で体部外面直下に取り付けられる。灰色を呈し、底径は8.2cmに復元される。

黒色土器A類

碗c (17) 丸みのある体部にやや高さのある高台が付く。内面にはミガキのような調整の痕跡が見られる。胎土は橙色を呈し、底径は6.1cmを測る。

黒色土器B類

碗c (18) 丸底の坏に短く外開きの高台が付く。横方向の手持ちのミガキが施される。口径15.6cm、器高5.6cm、高台径7.0cmに復元される。

緑釉陶器

碗 (19) 緩く湾曲する体部片で、淡褐色を呈しきめの細かい胎土に黄味を帯びた緑色の釉が薄くかかる。内面に縦長い隆起線をヘラで作り出す。中国製磁器碗の体部内側に施される白堆線を模したものとされる。

276SD0035 出土遺物 (Fig. 117)

黒色土器A類

碗c (20) 胎土は黄褐色を呈し、底はやや厚めで中央部がへこむ形状を呈す。南九州からの搬入品の可能性がある。

その他の遺構

276SX001 出土遺物 (Fig. 117・118)

須恵器

皿a (21) 灰色を呈す硬質なもので、内面に漆の被膜が付着した痕跡が見られる。

製塩土器

壺 (22, 23) 23は高さ6.5cm程度が残り、下部が「く」字に屈曲する背の低いカップ状のII-b類で内面にハケ状工具の痕跡が見られる。24は筒状で背の高いI類に属し、口径12.6cmに復元される。内面に目の細かな布目の跡が明瞭に残る。

石製品

基石 (24, 25) 両者とも白色を呈す石英質の石材で、24は長辺2.0cm、短辺1.8cm、厚さ0.9cm。25は長辺2.0cm、短辺1.8cm、厚さ1.0cm。

瓦類

軒平瓦 (26) 軟質な瓦質で外面が暗灰色、芯は白灰色を呈す。瓦当面に老司系の偏向唐草紋が見られる。

平瓦 (27～29) 厚みは2.0cmほどで焼成は硬い須恵質で灰色を呈す。長辺に対して横長の菱形を呈すタタキ目を有す。27は側辺に分割の裁線が浅く残る。

276SX002 出土遺物 (Fig. 118)

土師器

皿a (1) 底部がやや丸底気味で外面に板状圧痕が残る。黄白色を呈し、口径10.4cm、器高1.7cm、底径7.8cmを測る。

丸底坏a (2) 底部が浅い丸底で外面に板状圧痕が残る。黄白色を呈し、口径15.0cmに復元される。

丸底坏c (3) 底部は板状圧痕が残り、灰黄色を呈し、口径16.2cm、器高5.5cm、高台径7.7cmに復元される。

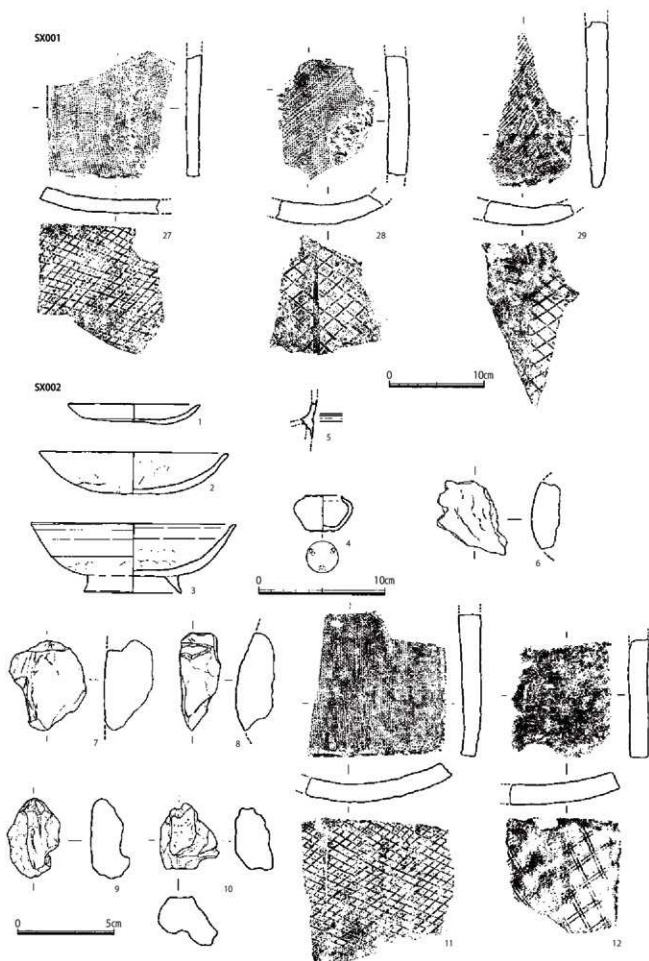


Fig. 118 276SX001 ②・002 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4, 石製品は1/2)

緑釉陶器

小壺 (4) ロクロ水挽きによる成形で体部は玉葱状の形状で、短く上方に口縁が立ち上がる葉壺形を呈すが、高台はない。平底の外面に三又トチンの痕跡が残る。胎土は精製されたボソボソした感があり、灰色を若干帯びた白色を呈し、釉は全施釉され濃緑色で光沢がある。白色系の胎土や三又トチンの使用などから長門産の可能性がある。いわゆるミニチュア製品で奈良三彩からの系譜に置かれると思われるが類例は知られておらず稀少品である。

越州窯系青磁

香炉 (5) 透かしを持つ蓋を伴うタイプの身の胴部片で、外面に2条の横沈線が巡る。胎土は精製された灰橙黄色を呈し硬質である。釉は光沢があり透明感のある緑黄色を呈す。条坊内においても稀少品である。

土製品

輪羽口 (6) 外径が7cm程度の筒状に復元できる羽口の薄片で、黄橙色～黒灰色を呈す。

焼土塊 (7～10) 5cm程度の大きさで、橙色から褐色を呈しササが混じられたもの。10などは一部に面を有しており、土壁のようなものであった可能性が考えられる。

瓦類

平瓦 (11、12) 11は厚さ1.9cmを測り、焼成は硬質で灰色を呈す。横長の菱形を呈すタタキ目と織目のそろった布目が残される。側面に浅い分割の裁線と破断したままの面が観察される。12は厚さ2.0cmで焼成は軟質で灰白色から淡橙色を呈す。縦に長い二重格子のタタキ目が残る。

276SX006 出土遺物 (Fig. 119)

土師器

小皿 a (1) やや凸気味で回転ヘラ切りと板状圧痕の残る底部から短く外に開く口縁を持つ。口径10.1cm、器高0.9cm、底径10.1cmに復元される。

須恵器

壺 f (2) ラップ状に開く二重口縁で、焼成は硬質で暗灰色を呈す。口径は19.8cmに復元される。

甕 b (3) ラップ状に開く二重口縁で、焼成は硬質で灰色、外面の一部は暗茶色を呈す。口径は36.6cmに復元される。

越州窯系青磁

鉢 (4) 平底から大きく開く形状を持ち、外底部は回転ヘラケズリによって整形される。胎土は灰褐色を呈し、内底面に緑灰色～黄緑色を呈す釉が掛けられる。

276SX009 出土遺物 (Fig. 119)

須恵器

壺 b (5) そろばん玉形の胴部から長い頸が伸びるタイプのものであるが、頸部は打ち欠かれたように欠損する。焼成は硬質で暗灰色を呈す。高台径は9.9cmを測る。

黒色土器A類

椀 c (6) 深い丸底の体部にやや外に湾曲しながら開く高台を持つ。手持ちのヘラミガキが見られ、体部外面に「大」の形状のヘラ記号が見られる。口径13.5cm、器高6.0cm、高台径9.8cmを測る。

276SX018 出土遺物 (Fig. 119)

土師器

椀 c (7、8) 平坦な底部に短く外開きの高台が付く。茶灰色を呈し、8は高台径8.0cmに復元される。黒色土器A類

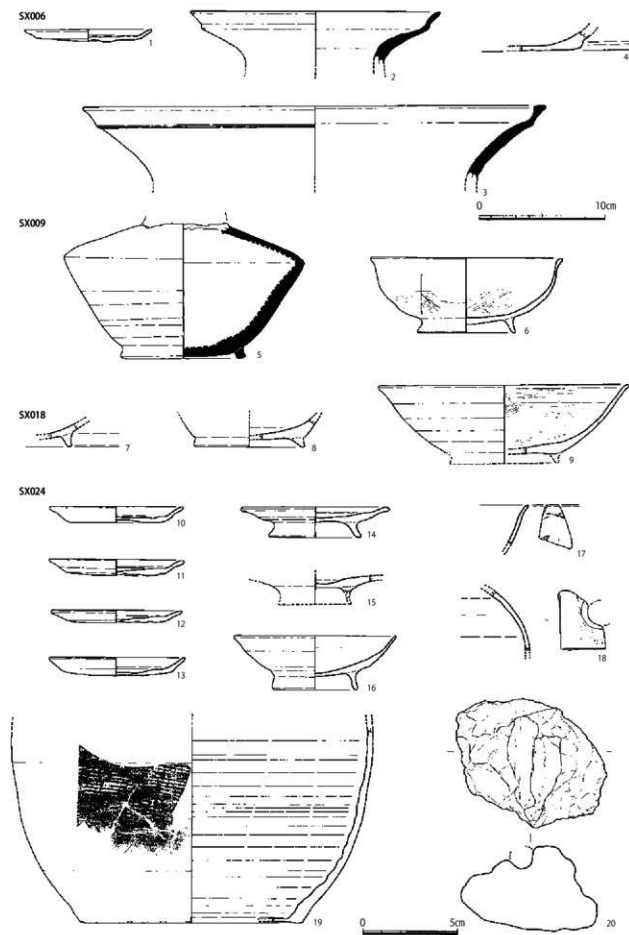


Fig. 119 276SX006・009・018・024 出土遺物実測図 (1/3、土製品は1/2)

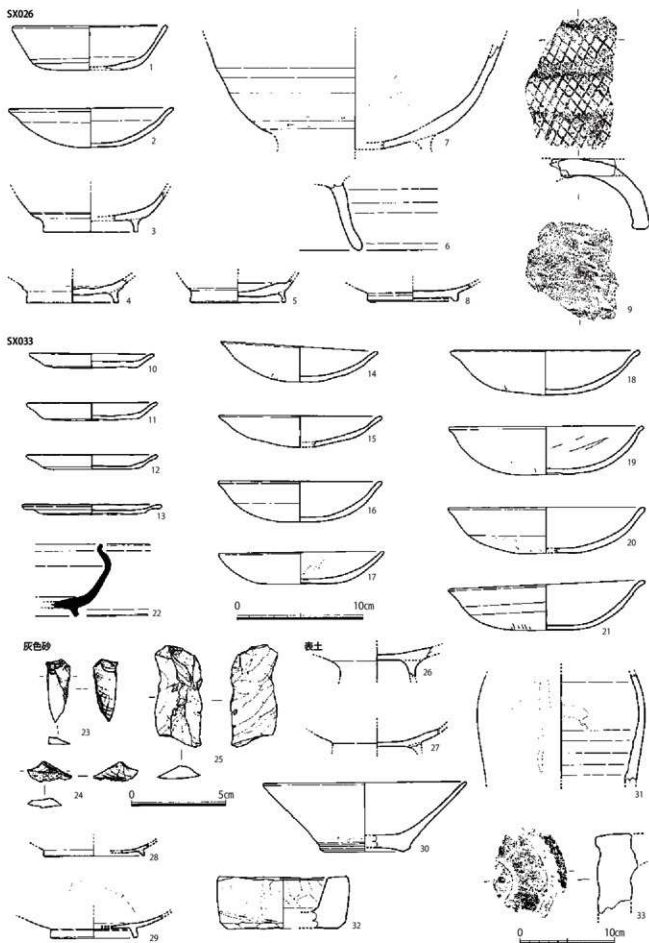


Fig. 120 276SX026・033、灰色砂、表土出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、石製品・土製品は1/2)

碗 c (9) 口径が 19.8cm に復元される大がりの碗で、胎土は緻密で茶灰色を呈し、内面に目の細かい横から斜位の手持ちのミガキ b を施す。畿内から搬入された製品とみられる。

276SX024 出土遺物 (Fig. 119)

小皿 a (10 ~ 13) 底部は全て回転ヘラ切りで、13 が凸気味で他は平底を呈し、胎土は白色を帯びた黄褐色、橙褐色を呈す。10 は口径 10.4cm、器高 1.3cm、底径 7.4cm、11 は口径 10.7cm、器高 1.0cm、底径 8.0cm を測る。12 は口径 10.8cm、器高 1.0cm、底径 8.0cm、13 は口径 10.8cm。

小皿 c (14) 浅い平底の皿に外に開く高台を持つ。胎土は白黄茶色を呈す。口径 11.8cm、器高 2.5cm、高台径 7.4cm を測る。

碗 c (15、16) 15 は内底面が中央で窪む形状で、直線的に下に伸びる高台を持つ。胎土は淡い茶色で芯は黒灰色を呈す。欠損部の高台径は 5.7cm を測る。形状や胎土から薩摩地域から搬入された可能性がある。16 は浅い丸底杯に若干外に直線的に開く高台を持つ。白灰褐色を呈する胎土を持つ。口径 12.8cm、器高 4.3cm、高台径 6.8cm に復元される。

白磁

碗 (17) XI-4 類。乳白色の胎土に光沢の強い透明の釉がかかる。釉には細かい貫入が見られる。底部外面にはケズリ出しによる縮連弁が施される。

越州窯系青磁

水注 (18) 体部上部の注ぎ口の部分で、鶴頸形の口は根元から欠損している。外面に黄緑色の透明感がある釉が掛かり、内面は露胎している。釉には細かな貫入が入る。

朝鮮系無釉陶器

壺 (19) 底が平坦で広く胴部は提灯のように膨らむ形状を成す。内面はロクロ目が顕著で外面は中位以上に格子目のタキが施される。胎土は暗灰色を呈し硬質。底径は 17.6cm に復元される。

土製品

土壁 (20) 長さ 8cm、幅 6.8cm、厚さ 4.5cm の土塊で、直径 1cm ほどの竹芯のような棒状の空洞が見られる。類例から土壁と判断した。

276SX026 出土遺物 (Fig. 120)

土師器

坏 a (1) やや凸気味の底部から直線的に開く体部を持つ。茶色から暗灰色を呈し、口径 12.3cm、器高 3.5cm、底径 8.0cm を測る。

丸底坏 a (2) 胎土は白茶色で、口径 13.0cm、器高 3.1cm の浅い丸底の形状を呈す。

碗 c (3 ~ 5) 平坦な底部からやや開き気味に長めの高台が伸びる。淡い茶色系統の色調で、底径は 3 が 7.4cm、4 は 7.3cm、5 は 7.6cm に復元される。

鉢 (6) 本来は大型の碗の形状をした鉢部に付く長脚の脚部であった。端部が若干外に開く形状で、胎土は白色を帯びた茶色を呈す。

黒色土器 A 類

鉢 (7) 丸底の鉢にやや長い脚が付くものと思われる。底部外面は回転を利用したヘラケズリがあり、内面はミガキ b が施される。大宰府ではあまり類例はない。

緑釉陶器

皿 (8) 高台はケズリ出しによる低平な外開き気味の形状で、底部は平坦で内面に輪状の目跡が残る。胎土は硬い灰色を呈し、釉は緑褐色で透明感はないが光沢の強いものである。高台径は 7.2cm に復元される。洛西系の所産と考えられる。

瓦類

丸瓦(9) 厚みが2cmで灰色を呈し硬質の胎土を持つ。外面は横長な菱形のタタキ目があり、内面はやや目の粗い布目痕跡が残る。

276SX033 出土遺物 (Fig. 120)

土師器

小皿 a(10～12) 全体的に摩耗するが10は外底部に回転ヘラ切りが残る。他は板状瓦痕のみが残る。灰色から黄白色を呈し、10は口径9.9cm、器高1.2cm、底径9.3cmを測り、11は口径10.4cm、器高1.4cm、底径7.5cmに、12は口径10.2cm、器高1.4cm、底径8.0cmに復元される。

小皿 a2(13) 口縁端部上面が疑似的に立ち上がることを示す沈線が巡る。黄白色で口径11.0cm、器高0.8cm、底径8.0cmに復元される。

丸底杯 a(14～21) 14～17は口径が13cm前後のサイズで15～21は15cm台のサイズで2群に分かれる。前者は特に高さが3cmを下回る浅い形状で、同タイプでも新しい様相を持つ。白色系の黄褐色を呈し、摩耗が進み見にくいと17と19には内底面にミガキ c が観察される。14は口径12.4cm、器高2.8cm、15は口径12.9cm、器高2.5cmを測り、16は口径13.0cm、器高3.0cmに復元され、17は口径13.9cm、器高2.5cmを測る。18は口径15.0cm、器高3.5cm、19は15.4cm、器高3.8cmに復元され、20は口径15.5cm、器高3.6cm、21は口径15.5cm、器高3.6cmを測る。

須恵器

小壺(22) 肩の張る短頭の口縁を持ち外に広がる高台を持つ。壺 a よりも口が広いプロポーションとなる。器高5.6cmを測る。

灰色砂層出土遺物 (Fig. 120)

石製品

剥片(23～25) 23と24は光沢のある漆黒色の黒曜石の剥片で、23の一方の側辺には連続した微細剥離が見られる。23は長さ3.3cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、24は長さ1.1cm、幅2.3cm、厚さ0.6cmを測る。25は安山岩製の縦長剥片で長さ5.4cm、幅2.5cm、厚さ0.7cmを測る。

表土出土遺物 (Fig. 120)

土師器

椀 c(26、27) 椀の内底面がへこみ、長い高台を持つもので、26は淡茶灰色を呈し、高台上部の径は8.0cmを測る。27は黄褐色を呈し、高台取り付け部の径は7.0cmを測る。薩摩など南九州域からの搬入品の可能性がある。

黒色土器 A 類

椀 c(28) 厚さが0.2～0.3cmほどの薄い体部に断面三角形の形状を呈す高台が付く。高台径は8.0cmに復元される。和泉型の畿内よりの搬入品と思われる。

緑軸陶器

椀もしくは皿(29) 外に聞き気味で細身の輪高台がつけられる。径は7.0cmに復元される。胎土は淡灰色を呈す緻密なもので硬質である。軸は緑灰色の光沢のあるもので、内底面の中央は露胎している。

越州窯系青磁

椀(30) 淡灰色の硬質な胎土に光沢はあるが透明感のない灰緑色の釉が掛かる。内底面に白色の目跡が見られる。口径16.0cm、器高5.5cm、底径7.0cmに復元される。I-5類に属す。

水注(31) 胴部上位の破片で黄灰色の緻密で硬質な胎土に、やや光沢のある黄灰色の釉が外面に施す。軸垂れがあることから二重に流し掛けされた可能性がある。

石製品

滑石製加工品 (32) 石鍋の2次利用品と思われ、縁が直立する灰皿状の形状を成す。径が6.8cm、器高2.8cmに復元される。

瓦類

軒丸瓦 (33) 瓦当の厚みが4cmのやや厚みを持ち焼成があまい瓦質のもので、中央から中房、ハート形の単弁、珠文拵、周縁を成す。珠文にオタマジャクシのような文様が混じり、九州歴史資料館瓦分類の066系統と思われるが、周縁が低く新しい傾向のものであろう。

(5) 小結

大宰府条坊右郭11条6坊内における平安時代の生活面が上下2面で見つかった。

上面の遺構の基盤になっている遺物を含む黒色土層SX001・007を除去すると地形は北に緩傾斜しており、調査区北東側に区画溝SD035・040、その南に井戸SE030など生活空間を構成する遺構が見られる。上面では平安前期の遺物も多数出土するが、最新の遺物は華南産の産産型の白磁等や当該期の在地産土器が見られることから11世紀後半以降の埋没と言わざるを得ない。

上下層の区画溝は鋭角な掘り方を持つものでなく、底の高さも一定せずに、一見不安定な遺構に見て取れる。しかし、SD040などは大宰府条坊D案(井上条坊案)のほぼ10条付近で施工されたものであり、坊路側溝であった可能性が高い。SD010・015の南北溝は6坊のほぼ中央に掘られたもので、坊内を小分割する区画溝であった可能性がある。その延長は同じ右郭11条6坊内において平成29年度に調査した第322次調査SD060につながる可能性を持つ。

結論的には188次調査時点ではトレンチ調査という性格から面的な情報が得られず十分な遺跡理解に至っていなかった。しかし、今回の調査により、本調査地点においても少なくとも10世紀以降の平安時代にはやや密度は低いが、井戸や土坑を主体とする条坊の集住空間の一角を担っていたと考えられる空間として利用されていたことが判明した。その性格は上層遺構の存在から11世紀後半頃までは踏襲されていたように見受けられる。しかし、いずれにしてもSX001のように腐食土堆積が進むような水はけの悪い環境であったことは間違いなく、条坊内においては居住には難のある場所であったことであろう。しかし、出土遺物については、緑釉陶器は京都北、西、東海系、防長系のものがあり、越州窯系青磁も希少な香炉を含む一定量が出土していることから、条坊域内においても奢侈品が多い優位な状況を示している。黒色土器には和泉系を含む畿内系のものが、土師器には薩摩周辺の所産と考えられる南九州系の土器が複数見られ、搬入された土器の様相は場所の特殊性を示している。

各層の形成時期については、地山に切り込む遺構や地山から出土したものには縄文時代の土器片や弥生時代の石器片を含んでいる。2区および1区南側の灰白色粗砂層には縄文時代と考えられる石器が複数含まれており、層が沖積作用によって形成された段階は縄文時代以降であり、黄灰色シルト層から出土する土器から奈良時代後期以前ということになる。調査した下層面は10世紀以降、上層面は11世紀後半以降の所産となる。

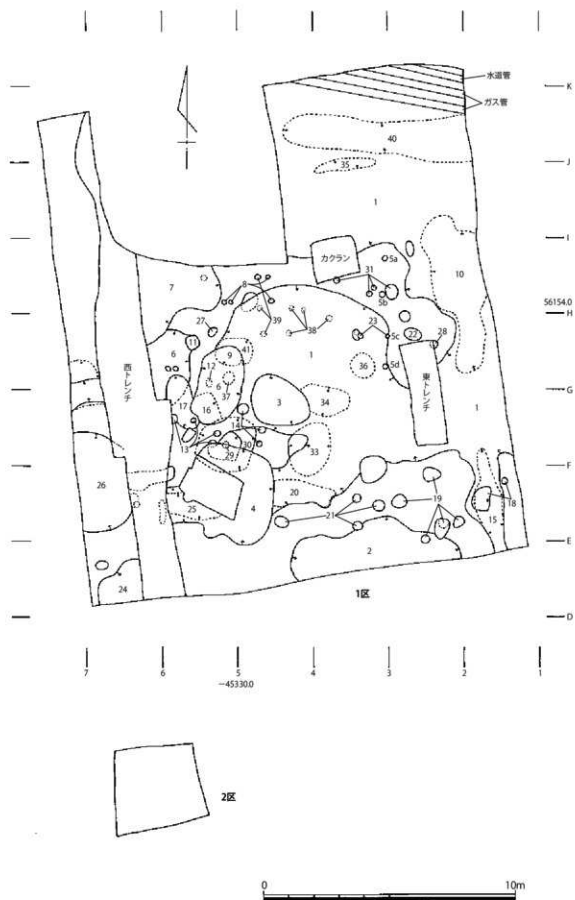


Fig. 121 第276次調査遺構略測図 (1/150)

表31 第276次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	276SX001	たまり状	黒褐色土	11世紀後半～	F3
2	276SX002	土坑	黒褐色土	10世紀後半～	D3
3	276SK003	土坑	黒色土	11世紀後半～	F4
4		たまり状	黒色土	11世紀後半～	E5
5	276SA005	櫓列	黒色土	11世紀後半～	H3
6	276SX006	たまり状	黒色土	11世紀～	G5
7		たまり状	黒色土 第188次調査西トレンチ8層「黒灰色土」	11世紀～	H5
8		ビット群	黒色土	11世紀～	H6
9	276SX009	ビット	黒灰色土 S-9→6	11世紀後半～	G5
10	276SD010	溝	黒灰色土 S-10→1	11世紀後半～	H2
11		ビット	黒色土	9世紀～	G5
12		ビット	黒色土 S-12→6		G5
13		ビット群	黒色土	9世紀～	F5
14		ビット群	黒色土	9世紀～	F4
15	276SD015	溝	黒色土	11世紀後半～	E1
16	276SX016	たまり状	黒灰色土 S-16→6	10世紀～	F5
17	276SX017	たまり状	灰黒色土 S-17→16→6	10世紀～	F5
18	276SX018	ビット群	黒色土	11世紀後半～	E1
19		ビット群	黒色土	9世紀～	E2
20	276SD020	溝	黒灰色土	9世紀～	E4
21		ビット群	黒色土	9世紀～	E3
22		ビット	黒灰色土	9世紀～	G2
23		ビット群	黒色土	9世紀～	G3
24	276SX024	たまり状	黒色土	11世紀後半～	D6
25	276SD025	溝	黒灰色土(黄色土ブロック入)	9世紀～	E5
26	276SX026	たまり状	黒色土	11世紀後半～	E6
27		ビット	黒灰色土		G5
28		ビット	黒色土		G2
29		ビット	黒灰色土	11世紀～	F5
30	276SE030	井戸		10世紀後半～	F5
31		ビット群	黒灰色土	9世紀～	H3
32		溝状	黄灰色土	9世紀～	G7
33	276SX033	たまり状	黒色土	11世紀後半～	F4
34		たまり状	黒灰色土	11世紀～	F3
35	276SD035	溝状	黒灰色粗砂 S-35→1	11世紀後半～	J3
36		たまり状	黒灰色土	9世紀～	G3
37		ビット	黒灰色土	9世紀～	G5
38		ビット群	S-1下層 黒灰色土	10世紀～	H4
39		ビット群	S-1下層 黒灰色土	9世紀～	H4
40	276SD040	溝	黒色粘土 S-40→1	11世紀後半～	J3
41	276SK041	土坑	黒色土	9世紀～	G5
42		たまり状	黒色土		G7

表32 第276次調査 出土遺物一覧表

S-1	
須 恵 部	器3, 环a, 环c3, 环c4, 高环a, 高环b, 皿a
土 師 部	壺, 壺b, 壺c,
灰 土 師 A 部	器3, 环a, 大环, 高环b, 壺
灰 土 師 B 部	形似磁器, 皿-b
黒色土 師 A 部	壺×環 (1)
白 土 師	壺, 口; 皿; 皿(1)
藤州 實業 青 部	壺; 磁片(1)
其 他	平瓦(調目1), 平瓦(橋子目群), 丸瓦(簡文), 和瓦(平切刃)
石 製	品(鏡石(黒曜石), 碁石(白))

S-2	
須 恵 部	器3, 环c3, 高环b, 壺
土 師 部	小皿a(c?), 环a, 丸底环a, 丸底环c, 高环, 碗c, 壺(御込品, 鳥居石入), 鉢
灰 土 師 A 部	壺
黒色土 師 A 部	壺
黒色土 師 B 部	壺
藤州 實業 青 部	器(赤北系) (1), 磁片(赤北系) (2), 碗×皿(赤西系) (2)
灰 土 師	器(1), 磁片(2)
白 土 師	壺(1-1), V=壺(1), 碗×皿(1)
藤州 實業 青 部	大碗; 1-9(1), 磁片(2)
中 国 陶 器	壺×鉢; (磁) (1), 磁片(1)
其 他	平瓦(調目1), 平瓦(橋子目群), 平瓦(橋子目群), 丸瓦(橋子目群)
石 製	品(石, 石鏡)
土 製	品(橋子目, 焼土塊)

S-3 黒色土(1)	
須 恵 部	器3×4, 环a, 壺, 小壺
土 師 部	环a, 丸底环, 碗c, 小壺a, 壺
藤州 實業 青 部	壺; 磁片(1)
灰 土 實業 青 部	壺×木片(1)
須 恵 質 (輸入)	磁器系無釉陶器等?
灰 土 師	壺×(橋子目D-1群), 丸瓦(調目1)
金 属 製 品	品(漆)
石 製	品(赤石(白))

S-3 黒色土	
須 恵 部	器3, 环c3, 壺
土 師 部	环a, 丸底环, 碗c
灰 土 師 A 部	器3(赤北系×長門系) (1)
藤州 實業 青 部	壺; (1)
灰 土 實業 青 部	壺×木片(1)
灰 土 師	壺×平瓦(橋子目群), 丸瓦(橋子目群)

S-3	
須 恵 部	小壺3, 器3, 环c3, 壺, 小壺c?, 蓋?(輸入品), 鉢
土 師 部	小皿a(c?), 小皿a2(c?), 丸底环a, 碗c, 壺a, 壺(赤分群), 鉢(赤分群), 銅台
灰 土 師 A 部	壺c
灰 土 師 B 部	壺c(1)
白 土 師	壺; 磁片(2)
藤州 實業 青 部	壺; 磁片(1)
其 他	环; 1-1(1)
藤州 實業 青 部	平瓦(橋子目群), 平瓦(橋子目D-1群), 平瓦(橋子目群), 丸瓦(野付目群)
石 製	品(石鏡?, 碁石(黒))
土 製	品(供土塊, 埴埴?)

S-4	
須 恵 部	器环c3, 环c4, 壺, 鉢a?, 鉢b
土 師 部	器环c3, 环c4, 丸底环a?, 高环, 碗c, 把手
灰 土 師 A 部	壺
黒色土 師 A 部	壺
灰 土 師 B 部	壺; 磁片(1)
白 土 師	壺; 磁片(1)
藤州 實業 青 部	壺; 磁片(1)
藤州 實業 青 部	壺; 磁片(1)
漢 文 土 師 部	壺
其 他	壺(平瓦(調目1), 平瓦(橋子目群))
石 製	品(碁石(黒)), 銅鏡片(黒曜石)

S-5a	
須 恵 部	器环c3
土 師 部	器磁片

S-5b	
須 恵 部	器大壺
土 師 部	器磁片
黒色土 師 B 部	壺?

S-5d	
土 師 部	器壺?

S-6	
須 恵 部	器3, 环c3, 环c4, 小壺, 壺a, 大壺b, 壺c
土 師 部	小皿a(c?), 丸底环a, 碗c, 壺×鉢
藤州 實業 青 部	壺×木片(1)
灰 土 師	壺×平瓦(調目1), 丸瓦(橋子目群)

S-7	
須 恵 部	器环×壺, 壺
土 師 部	小皿a(c?), 环c3, 丸底环a, 壺
黒色土 師 A 部	壺
其 他	壺×平瓦(橋子目群), 丸瓦(簡文)
石 製	品(碁石(黒))

S-8	
須 恵 部	壺(供縁具)
土 師 部	器 壺丸底环c?, 鉢a?
黒色土 師 A 部	壺
其 他	壺×平瓦(調目1)

S-9	
須 恵 部	壺c, 大壺c, 小环a, 环a(肥後系), 环c1, 环c3, 环c4, 壺b, 壺
土 師 部	器 壺丸底环a, 丸底环c, 碗c, 壺, 壺b, 鉢, 把手
黒色土 師 A 部	壺
白 土 師	磁片(1)
藤州 實業 青 部	壺; 1-1(1), 1-2(1), 磁片(1)
其 他	壺×平瓦(調目1), 平瓦(橋子目群), 平瓦(二重橋子目群), 丸瓦×平瓦(橋子目群)
土 製	品(碁石)

S-10	
須 恵 部	壺, 蓋1, 蓋2, 蓋3, 壺c, c?, 环c1, 环c3, 碗c(御成後系), 环c4, 壺a, 小壺, 壺壺, 壺壺, 壺壺(肥後系), 壺b, 壺付壺×鉢, 鉢7, 埴, 把手
土 師 部	器 壺丸底环c, 高环, 大碗7, 碗c, 鉢, 鉢(赤分群)
黒色土 師 A 部	壺(供縁具, 鉢)
藤州 實業 青 部	壺×皿(赤北系) (1)
藤州 實業 青 部	壺; 1-1(1), 1-2(1), 磁片(2), 壺×木片(輸入) (磁器系無釉陶器等?)
其 他	壺×平瓦(調目1), 丸瓦(橋子目群), 野丸瓦(橋子目群)
石 製	品(碁石(白), 白)

S-11	
須 恵 部	器壺?, 壺, 小壺
土 師 部	器壺
黒色土 師 A 部	壺
其 他	壺×平瓦(調目1), 平瓦(簡文)

S-12	
土 師 部	壺(供縁具)

S-13	
須 恵 部	器壺?
土 師 部	器环a, 碗c
黒色土 師 A 部	壺c

S-14	
須 恵 部	器壺3, 壺c3, 壺
土 師 部	器环a, 小壺c?
其 他	壺×平瓦
土 製	品(碁土塊)

S-15	
須 恵 部	器壺3, 壺c, 环c3, 环c4, 壺
土 師 部	器环a, 皿a, 皿c, 碗c, 小壺, 鉢
黒色土 師 A 部	壺
黒色土 師 B 部	壺
藤州 實業 青 部	壺(赤西, 赤北系)
藤州 實業 青 部	壺; 1-2(1), 皿; 磁片(1), 壺?; 磁片(1), 磁片(2)
須 恵 質 土 師 部(備前系)	壺
漢 文 土 師 部	壺
其 他	壺×平瓦(調目1), 平瓦(橋子目群), 平瓦(簡文)
石 製	品(鏡片(黒曜石))

S-16	
須 恵 部	器壺3, 大壺, 壺b×f
土 師 部	器壺c, 大壺
其 他	壺×平瓦

S-17	
須 恵 部	器壺c, 环c1(輸入品), 环c3, 壺, 壺(赤分群)
土 師 部	器环a(c?), 小壺环, 碗c, 鉢×大壺a
黒色土 師 A 部	壺
其 他	壺×平瓦(調目1), 丸瓦(調目1)
石 製	品(碁石(白)), 碁石製品

S-18	
須 恵 部	器鉢?, 供縁具
土 師 部	器壺
黒色土 師 A 部	壺(備前系)
其 他	壺; 磁片

S-19	
須 恵 部	器壺3, 环c1
土 師 部	器高环, 碗c, 鉢
黒色土 師 A 部	壺(供縁具)
須 恵 質 (輸入)	磁器系無釉陶器等?
灰 土 師	壺×平瓦(橋子目群)

5-20	價 高 鋼圓4、環c3、雙
土 師 鋼環a	
黑色土 師 A 鋼環a、鋼c	

5-21	價 高 鋼環
土 師 鋼環、絲	

5-22	價 高 鋼環c、環d
土 師 鋼環	
黑色土 師 A 鋼環a、鋼c	
瓦 鋼平瓦(橋子日排)	

5-23	價 高 鋼環c3、環c4、絲?
土 師 鋼環a(c?)	

5-24	價 高 鋼環?、雙、絲?
土 師 鋼小環a(c?)、大底環a、鋼c、把手	
黑色土 師 B 鋼環c	
白 磁磚? 11-11(1)	
福州窯青 磁磚? 破片(1)、水注(1)	
瓦 瓦質(輸入)即辦系無釉磁器	
瓦 鋼平瓦(橋子日排)、平瓦(二重橋子日排)	
土 鋼 高地上塊(土磚)	

5-25	價 高 鋼瓦
土 師 鋼瓦、鋼	
黑色土 師 A 鋼瓦	
瓦 鋼平瓦(鋼目)	

5-26	價 高 鋼蓋3、環c3、雙、絲b
土 師 鋼環a、大底環a、高底環c、雙a、腳行絲、絲	
黑色土 師 A 鋼蓋c、絲	
黑色土 師 B 鋼蓋c	
絲 鋼 鋼環×瓦(港西式)	
白 磁磚? 11-11(1)、破片(1)	
福州窯青 磁磚? 1(2)、雙? 破片(2)	
青 白 磁磚	
瓦 鋼平瓦(鋼目)、瓦瓦(橋子日排)	

5-27	土 師 鋼供辦具
------	----------

5-28	土 師 鋼供辦具
------	----------

5-29	土 師 鋼瓦底環a
白 磁磚? 14-11(1)	
5-30 灰色黃色土	
價 高 鋼蓋3、環c3、高底環a、雙	
土 師 鋼高底環c、鋼c、雙?	

5-30 灰色土	價 高 鋼蓋3、環c2、大雙、雙b?
土 師 鋼環a、鋼a、鋼c、小雙	
福州窯青 磁磚? 破片(1)	
瓦 鋼平瓦(鋼目)、平瓦(橋子日排)	

5-30 黑色色?)	價 高 鋼環
土 師 鋼供辦具	
瓦 鋼平瓦(橋子日排)	

5-30 黑色色土	價 高 鋼蓋3、鋼a、雙、雙b、大雙、雙b、鋼b
土 師 鋼環d、高底環c、小雙、絲?(把手仔)、把手、鋼c、(燈仔)	
黑色土 師 A 鋼環a、鋼c	
黑色土 師 B 鋼環a(內表)	
瓦 瓦質土 師絲(條底漆)	
絲 鋼 鋼環×瓦(港西式)(1)	
灰 磚 鋼 鋼環(1)	
白 磁磚? 1×11(1)、破片(1)	
福州窯青 磁磚? 1-2(1)、17(2)、破片(1)	
長沙窯青 磁磚(1)	
瓦 鋼平瓦(鋼目)、平瓦(橋子日排)	
金屬 製 品(漆好)	
石 製 品(白)、板(滑石製品)	

5-30 黑色砂	價 高 鋼蓋、雙、雙
土 師 鋼環a、大底環?、鋼c、雙×絲	
瓦 鋼平瓦(無瓦)	

5-31	價 高 鋼大雙
土 師 鋼環a	
黑色土 師 A 鋼供辦具	

5-32	價 高 鋼環a×鋼a、環c3、雙
土 師 鋼環a、高底環c	
灰 磚 鋼 鋼環(1)	
瓦 瓦質(輸入)即辦系無釉磁器	
瓦 鋼平瓦(鋼目)、瓦瓦(無瓦)	

5-33	價 高 鋼蓋3、大雙、小雙a
土 師 鋼小環a(c?)、大底環a、大底環c、鋼c、環a	
黑色土 師 A 鋼蓋c、絲	
福州窯青 磁磚? 破片(1)	
中國 陶 磁磚×破片(1)	
瓦 鋼平瓦(橋子日排)	

5-34	價 高 鋼蓋3、環c3、鋼、雙
土 師 鋼小環a、環a、大底環	
瓦 鋼平瓦(鋼目)	

5-35	價 高 鋼蓋3、鋼c、小環c3
土 師 鋼環d、鋼c、鋼a(港西式)、雙	
瓦 鋼平瓦(鋼目)	

5-36	價 高 鋼環c3、鋼a
土 師 鋼環仔、雙、雙?(把手仔)	

5-37	價 高 鋼蓋3
土 師 鋼環a?	

5-38	價 高 鋼環c3、鋼a
土 師 鋼大底環c、絲(把手仔)	

5-39	價 高 鋼蓋3、環a×c
土 師 鋼環c	

5-40	價 高 鋼蓋3、鋼4、環c3、鋼a、鋼b(G型止)、蓋仔
土 師 鋼環a、環c3、環d、高底環c、鋼(港西式)、雙a	
黑色土 師 A 鋼蓋?	
瓦 鋼平瓦(鋼目)	

5-41	價 高 鋼蓋3、鋼c、環c3、雙、雙b、絲
土 師 鋼小環a(港西式)、港西式、鋼a、鋼c	
黑色土 師 A 鋼蓋c、供辦具	
黑色土 師 B 鋼蓋c	
福州窯青 磁磚? 破片(1)	
瓦 鋼平瓦(鋼目)、平瓦(橋子日排)、平瓦?(橋子日排)	
金屬 製 品(漆好漆面)	
土 製 品(鑄口)	
石 製 品(鑄片(灰山面))	

灰色砂	價 高 土 鋼(破片)
石 製 品(鑄片(灰山面、黑曜石))	

瓦土	價 高 鋼蓋3、鋼c1、大雙、小環a、環c3、環c3×4、高底環a、雙a、大雙、鋼c、鋼×雙、絲(未分型)、絲a?、絲b
土 師 鋼小環a(c?)、環a、環c3、大底環a、高底環	
土 師 鋼環×瓦(港西式)、鋼c(未分型)、鋼c(港西式)、雙a、絲(未分型)、雙腳行絲、把手×w?F	
黑色土 師 A 鋼蓋c、鋼c(港西式)	
黑色土 師 B 鋼蓋c	
瓦 瓦質土 師條底漆絲(1)	
絲 鋼 鋼環×瓦(港西式、港西式)	
灰 磚 鋼 鋼環×瓦(港西式)、鋼c	
白 磁磚? 鋼蓋(港西式)	
福州窯青 磁磚? 1(1)、1×11(1)、白磁破片(2)	
長沙窯青 磁磚? 鋼×破片(1)	
長沙窯青 磁磚×水注破片(1)	
瓦 瓦質(輸入)即辦系無釉磁器	
磚 文 土 鋼(漆好?)	
瓦 鋼 鋼平瓦(鋼目)、平瓦(橋子日排)、瓦瓦(港西式)、瓦瓦(港西式)、對瓦瓦	
石 製 品(石鑄工品(滑石製)、磁石(刻馬面))	
土 製 品(高土)	

13、第322次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は大宰府市通古賀5丁目423番1・4～8で、通古賀集落の西側縁辺部に位置する。

この土地については、2015(平成27)年9月から宅地造成

に先立ち、埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。2017(平成29)年3月24日に確認調査を行った結果、遺構を確認した。その後、宅地部分については保護層が保たれ遺構に影響はなかったものの、道路新設予定地については発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、開発者の調査費用のもと、2017(平成29)年8月7日から同年11月11日にかけて実施した。確認調査は遠藤茜が行い、発掘調査は中村茂貴が担当した。開発対象面積は1263.2㎡、調査面積は529.8㎡である。

(2) 基本層位 (Fig. 122)

調査地は大宰府政庁跡から南西約800m、標高約29m付近に立地し、調査直前までは住宅が立ち並んでいた。

遺構面は3面確認しており、上面から表土(褐灰色土、灰色土)を除去すると、第1遺構面の基盤である茶色土(茶色土、灰茶色土)があり、今回は南端の窯跡のみ調査対象とした。その下には第2遺構面の基盤である暗灰黄色土(暗灰黄色土、灰黄色土、黒褐色土、灰黄色粘土、黄色砂礫土、灰黄色砂礫土)があり、その下に第3遺構面の基盤層である褐灰色砂礫層(褐灰色砂礫、明黄色砂土、明黄色粘土)がある。第3面の基盤層は、平面的に調査地の北側から褐灰色砂礫層とその上に明黄色粘質土、さらにその上に暗褐色砂礫土が堆積し調査地南端まで続くことが確認していた。なお、平面で確認した明黄色粘質土については調査区東端付近で砂質に変っていくため、土層断面では捉えることができていないが、調査地の北側中央では明確に明黄色粘質土が確認できるため、褐灰色砂礫に部分的に入り込んだ層の可能性が考えられる。また、暗褐色砂礫土についても、平面では明黄色粘質土を挟んで褐灰色砂礫と分けていたが、土層断面では褐灰色砂礫として分層している。褐灰色砂礫に比べ、色調や土質に近いことや、層がグラデーションになっていたことから、褐灰色砂礫と同じ層である可能性が考えられる。

また、第3面の遺構埋土から縄文土器が出土している。遺構の基盤層である褐灰色砂礫層から掘り返された土に混ざった可能性が高いが、褐灰色砂礫の掘削を行っておらず、縄文時代の遺構・遺物の有無については不明である。

なお、各層から遺物は取り上げているのだが、調査時の手違いで各層が混ざった取り上げを行っていたため、各基盤層の時期を特定することができなかった。

(3) 検出遺構

○第1面

瓦窯

322SX001 (Fig. 125)

調査地の南側で見つかった瓦窯で、窯の構造から「だるま窯」であることがわかる。すでに上面は削平を受け、また、確認調査のトレンチにより窯の中央が重機によって破壊されていた。

だるま窯は平面楕円形状で、両脇に焚口がつく構造であるが、東側は調査区外に続いている。検出規

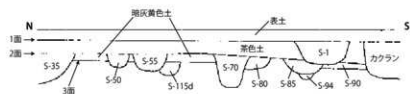


Fig. 122 第322次調査土層模式図

横は東西4.36m、南北2.27m、残存高0.4mを測る。窯内の埋土は赤褐色土と橙色土があり、焼土や窯壁の破片、レンガ、炭、瓦などを多量に含んでいた。埋土除去後、黒色に硬化した底面を検出した。底面にはロストルと考えられる溝が5条並ぶ。底面は窯の中央が高く、両端に向かって傾斜し低くなっている。

窯壁は、焼成の被熱により淡青灰色に変色していた。その変色幅は0.16m前後で、そのうち厚さ0.8m程で被熱した硬化層が3層確認でき、窯壁の貼り直しが最低3回は行われている。その外側に被熱し淡青灰色に変色した土を確認した。北側の窯壁では、上記の淡青灰色硬化層の外側に、赤褐色土、灰白色土が確認されている。それ以外の場所で確認を怠ったため、この強く被熱した灰白色土がどう広がるのかは不明であるが、当初の窯壁である可能性が考えられる。また、窯の底面は、厚さ0.1mの黒色土とその下に被熱により赤褐色に変色した厚さ0.08m程の土層がある。

瓦窯作業場

322SX009 (Fig. 126)

322SX001の西隣で見つかった長方形の窪地である。東西3.2m前後、南北4.95m、深さ0.2mを測る。窪地の北壁では割れた瓦を立て並べられ、北西隅では、狭い範囲ではあるが瓦を縦に敷き並べた部分が

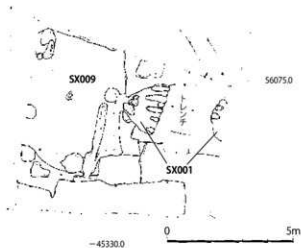


Fig. 124 第322次調査 第1面全体図 (1/150)

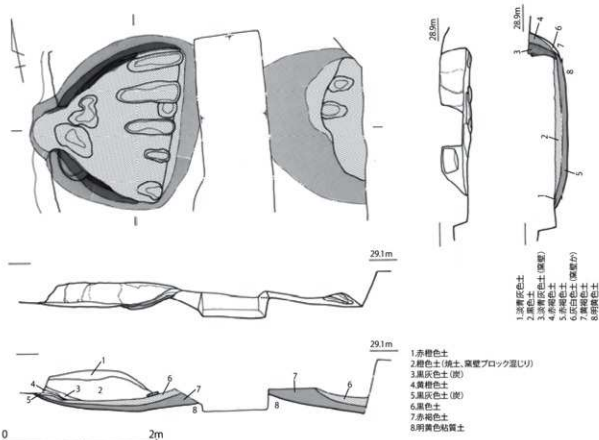


Fig. 125 322SX001 遺構実測図 (1/50)

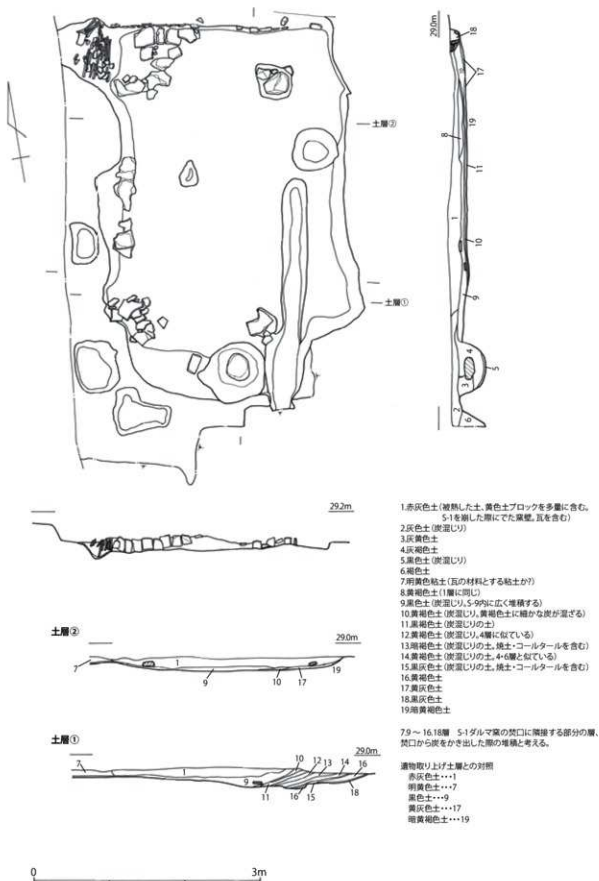


Fig. 126 322SX009 遺構実測図 (1/50)

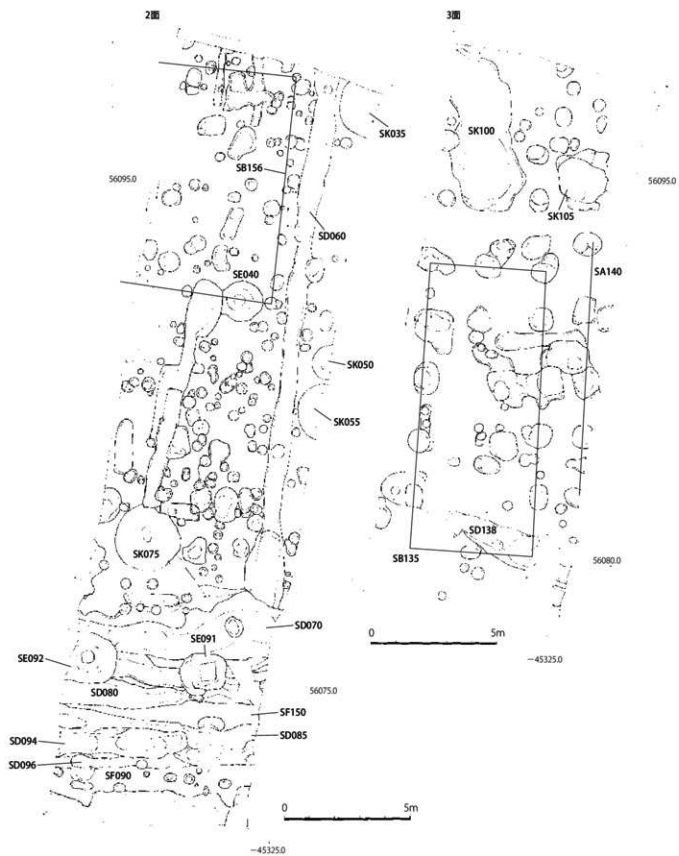


Fig. 127 第322次調査 第2・3面遺構全体図 (1/150)

ある。窪み内に厚く堆積する赤灰色土からは、焼土塊・窯壁・レンガ・瓦片が多量に出土した。窪みの東側の窯の焚口近くでは赤灰色土の下に黄褐色土と炭を含んだ黒褐色土が互層に堆積していた。

聞き取り調査により、窯跡からは多量の粉炭が出ていて、窯の隣には石炭・コークスが置かれていたという証言もあり、この窪みは瓦窯の西側焚口と接していることから、焚口から窯に燃料を入れ込むための作業スペースと考えられ、そこに窯から掻き出した炭層が堆積していたものと推測される。

○第2面

掘立柱建物

322SB156 (Fig. 128)

調査地北側で検出した掘立柱建物である。遺構は調査地外に続くものと考えられ、現状では南北棟と考える。建物規模は、東西3間以上(5.4m以上)、南北4間(9.0m)で、振れは約N-5° 20' -Eである。東西の柱間は1.6~1.8m、南北は両端が2.6mと2.45m、中央の2間が1.9mと2.0mを測る。周囲の柱列以外に対応する柱穴が確認されていないため、櫛列の可能性も考えられる。

溝

322SD060 (Fig. 129)

検出長21.4m、幅0.5~1.95m、深さは0.1~0.4mの南北溝で、振れはN-6° 38' 9" -Eである。南に向かってやや下がっていく。南端はSD070に接続しているが、埋土はSD070に切られている。なお、北端は調査区外へと続いている。埋土は上から黄褐色土、黄褐色砂礫土の2層である。

322SD070 (Fig. 129)

検出長8.5m、幅1.4~2.75m、深さ0.4~0.8mを測る東西溝で、溝の東西は調査区外へと続く。振れはW-1° 34' 49" -Sである。溝は北側がややテラス状の緩やかな面があるが、全体として断面逆台形をなし、東に向かって下がっている。埋土は5層に分層でき、上から暗黄褐色土、暗黄褐色土、灰白色粘質土、暗黄褐色土、暗褐色粘質土が堆積する。SD060とSD080の埋土に切り込む遺構である。溝は井土条坊案の右郭11条の側溝と考えられ、SD085・094と対になると推測される。

322SD080 (Fig. 129)

322SD070の南側で検出した東西溝で、溝の東西は調査区外へと続く。検出規模は長さ8.2m、検出幅1.7~2.3m、深さは約0.15~0.4mを測る。向きはほぼ東

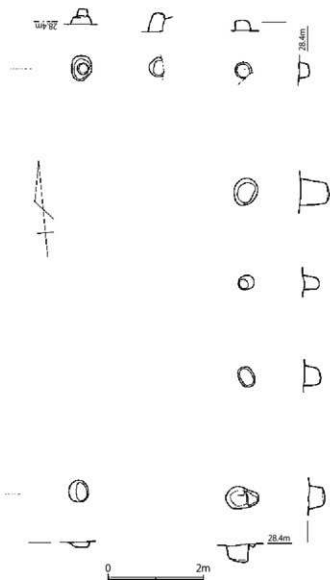


Fig. 128 322SB156 遺構実測図 (1/80)

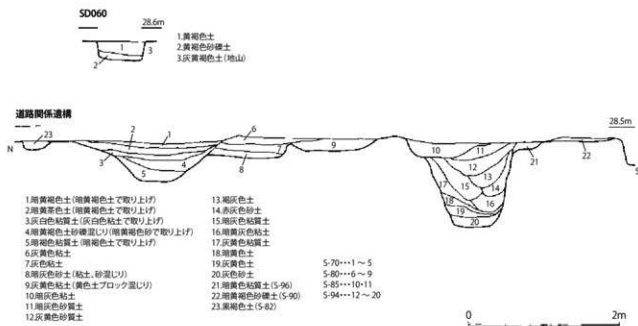


Fig. 129 322SD060、道路関係遺構土層実測図 (1/50)

西方向である。底面は2条の溝が走っていて、それぞれほぼ同じ深さである。埋土は最上層が一律灰黄色粘土で、それを除去すると2条の溝が検出され、北側の溝の埋土は灰色粘土、粘土や砂混じりの暗灰色砂土で、南側の溝は黄色土ブロック混じりの灰黄色粘土である。埋土は北を322SD070に、南を322SD085に切り込まれている。溝は井上条坊案の右郭11条の側溝と考えられる。

322SD085 (Fig. 129)

322SD080の南側で検出した東西溝で、溝の東西は調査区外へと続く。検出規模は長さ8.1m、幅1.3~2.1m、深さ0.2m前後である。振れは $W-5^{\circ} 37' 3^{\circ} -N$ である。322SD094をきれいに覆うように切り込んでいるため、SD094の埋り直しのような同じ意味を持つ溝と推測される。埋土は暗灰色粘土、暗灰色砂質土の2層に分層できる。溝は井上条坊案の右郭11条の側溝と考えられ、SD070と対になると推測される。

322SD094 (Fig. 129)

322SD085の底面で検出した東西溝で、溝の東西は調査区外へと続く。検出規模は長さ7.9m、幅0.55~1.2m、振れは $W-2^{\circ} 59' 35^{\circ} -N$ である。深さは西側が深くSD094の底面から0.8m前後、東側は浅くてSD094の底面から0.2m前後を測る。埋土は他の溝に比べて粘質土層が溝の中位に厚く堆積していた。また、西側を中心に溝の中位から底部にかけて、硬化した土が張り付いていた。地山の暗褐色砂礫、灰色砂と埋土の間に暗黄褐色土の硬化した土が厚さ0.01m前後見られた。溝は井上条坊案の右郭11条の側溝と考えられ、SD070と対になると推測される。

322SD096 (Fig. 129)

322SD094の底面やSX090を除去した面で検出した東西溝で、溝の北側はSD094によって切られている。検出規模は長さ5.5m、幅は両肩が僅かに確認された西側で0.45mであった。深さは0.2~0.3mである。振れは $W-0^{\circ} 58' 22^{\circ} -S$ である。切り合い関係から、この付近で切り合う東西溝で、最も古い溝である。

井戸

322SE040 (Fig. 130)

掘り方は直径1.6m、深さ1.74mの円形で、上面で検出した黒褐色土はレンズ状に堆積していたが、その下にはほぼ水平に黒褐色砂質土が堆積する。土層断面をみると、北側では暗褐色砂質土とその外側

に井戸枠の裏込めと考えられる暗黒褐色砂質土が確認できた。底面の中央では、径0.3m、深さ0.1mの小土坑を検出された。土坑の埋土は灰色砂質土で、曲物の痕跡である可能性が高いが、曲物そのものは遺存していなかった。

322SE091 (Fig. 130)

掘り方は東西2.0m、南北1.6m、深さは2.16mの楕円形である。掘り方南側には、井戸のウラゴメ土と推測される粘土質のしっかりした黄褐色土が残り、その内側に井戸枠内の埋土とみられる暗黄褐色土、暗黒褐色土、暗黄色土が堆積していたが、木質は全く確認できなかった。底部では、一辺0.6×0.7m、深さ0.35mの方形の掘り込みが確認され、浄化用の木枠痕の可能性もあるが、井戸枠そのものがこの大きかった可能性もある。なお、上面はSD070によって切られている。

322SE092 (Fig. 130)

調査区西端で検出され、西側は調査区外となる。掘り方は東西2m以上、南北2.1m、深さは2.4mの円形である。最上層は暗黄褐色土で、その下には暗黄色土が厚く堆積し、それを除去すると一辺0.65mの方形井戸枠痕跡を検出した。その四隅には木質は遺存しないが、隅柱跡とみられる円柱状の掘り込みが検出された。さらに方形の掘り込みの底面中央に径0.5m、深さ0.5mの円形の掘り込みが検出され、曲物と推測されるが、曲物そのものは遺存していなかった。

土坑

322SK035 (Fig. 131)

調査区北東端で検出した土坑で、検出規模は東西1.5m、南北1.86m、深さ1.15mを測る。平面形は弧を描いていることから、円形状の土坑であると考えられ、半分以上が調査区外となっている。

322SK050 (Fig. 131)

調査地中央東端で検出した土坑である。調査区際のため一部の検出である。検出規模は東西1.4m、南北0.8m、深さ0.4mを測る。埋土は灰褐色土と灰黄色砂礫土の2層である。

322SK055 (Fig. 131)

調査地中央東端で検出した土坑だが調査区際のため、一部の検出である。検出規模は南北2.2m、東西1.0m、深さ0.8mを測り、調査区外に続いている。埋土は、上から灰褐色土、黄褐色土、灰茶褐色土、灰黄褐色土である。

322SK075 (Fig. 131)

平面円形の土坑であるが、検出時は黒褐色土が堆積し、遺構プランは不明瞭であったが、黒褐色土を掘削すると、直径2.7mを測る平面円形プランを検出した。深さは1.1mで、埋土は6層で、レンズ状に堆積していた。

道路

322SF090

322SD094の南側で検出した道路の路面舗装とみられる遺構で、道路の検出長8.1m、検出最大幅1.65mを測る。遺構の南側は近現代の掘り込みで切られ、本来の道路幅は不明である。B4～B6付近を中心に明黄色粘土の地山上に明黄褐砂礫土が厚さ0.05mほど堆積する。この砂礫土には砂礫ともに表面の摩滅がやや目立つ土器片を多量に含んでいた。この砂礫土を除去すると、SD096や地山に浅いピットを検出した。この砂礫土は路面の舗装として人為的に敷かれたものと推測される。この付近は井上条坊案の右郭11条路の推定ラインに位置しており、11条路の路面と推測される。路面はSD085の埋土に覆われており、遅くとも11世紀後半～12世紀初頭には使用されていないことがわかる。

322SF150

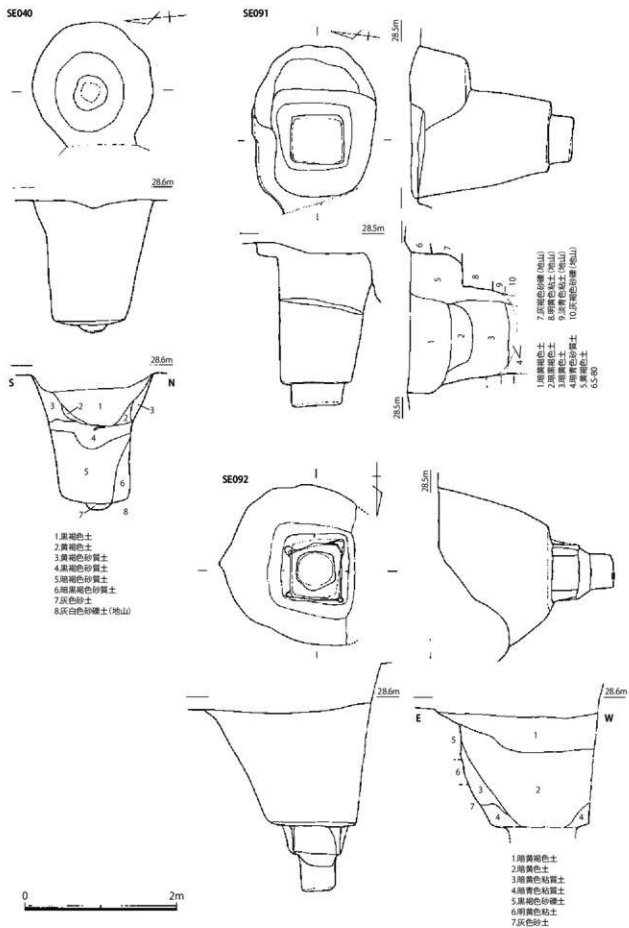
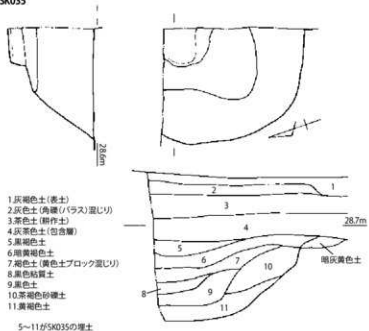
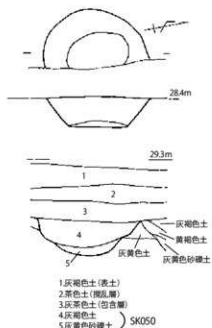


Fig. 130 322SE040・091・092 遺構実測図 (1/50)

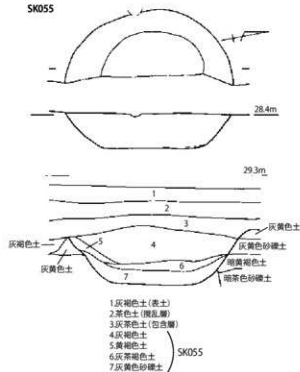
SK035



SK050



SK055



SK075

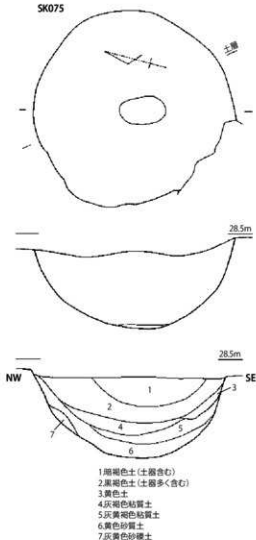


Fig. 131 322SK035・050・055・075 遺構実測図 (1/50)

SF090の北隣に位置するSD070とSD085・094を側溝とする道路で、溝間の道路面の現存幅は2.5～2.9mである。南側側溝については、SD094埋没後にSD085を浅く掘り直している。井戸(SE091・092)埋没後のX期以降に施工されたものと推測され、埋没時期は両側溝ともXⅡ期頃と時期差はない。溝間に路面舗装などは確認できていない。

○第3面

柵列

322SA140 (Fig. 132)

南北棟で振れは約N-1° 17' -Eで、SB135と同じ振れである。規模は南北4間(10m)以上で、南北の柱間は2.4～2.6mを測る。柱列はさらに南側にも続く可能性がある。東側はすぐ調査区外となるため、東側に続く建物の可能性も考えられる。しかし、SB135と約1.8mと近接しているため、建物とした場合は、SB135と異なる時期の建物と推測される。

掘立柱建物

狭い調査範囲に掘り方や土坑が並んでいるため、何通りも建物が推定できる状況である。よって、推定プランは、現場作業時と報告時とでも異なっている。今回はその一案として報告するもので、限定するものではなく、将来的に周囲を調査した際により正確なプランが描けるものとする。

322SB135 (Fig. 133)

南北棟で振れは約N-2° 42' -Eである。規模は東西2間(4.8m)、南北5間(11.5m)で、東西の柱間は2.4m、南北の柱間は2.3mを測る。掘り方は隅丸形状をなしている。

溝

322SD138

検出規模は長さ5.4m、幅0.65～1.7m、深さ0.1～0.25mの東西溝である。東側ほど幅が広がっていき、東側の底部は途中から二股に分かれて調査地外に続く。底面からはSB135hの掘り方が検出されている。

土坑

322SK100 (Fig. 134)

調査地北西端で検出した土坑である。検出規模は長さ6.4m、幅2.6m、深さ0.2～0.5mを測る長楕円形で、北側はさらに調査区外へと続く。埋土は上面の暗黄色土と黄褐色粘質土に多量の土器を含む。底面南側はさらに土坑状にやや深くなる。

322SK105 (Fig. 134)

検出規模は東西1.8m、南北2.4m、

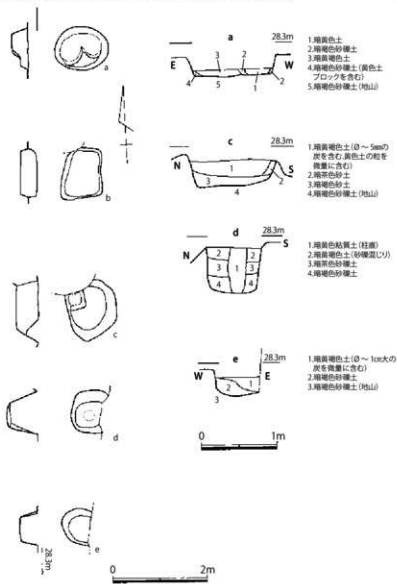


Fig. 132 322SA140 遺構実測図 (1/80、1/50)

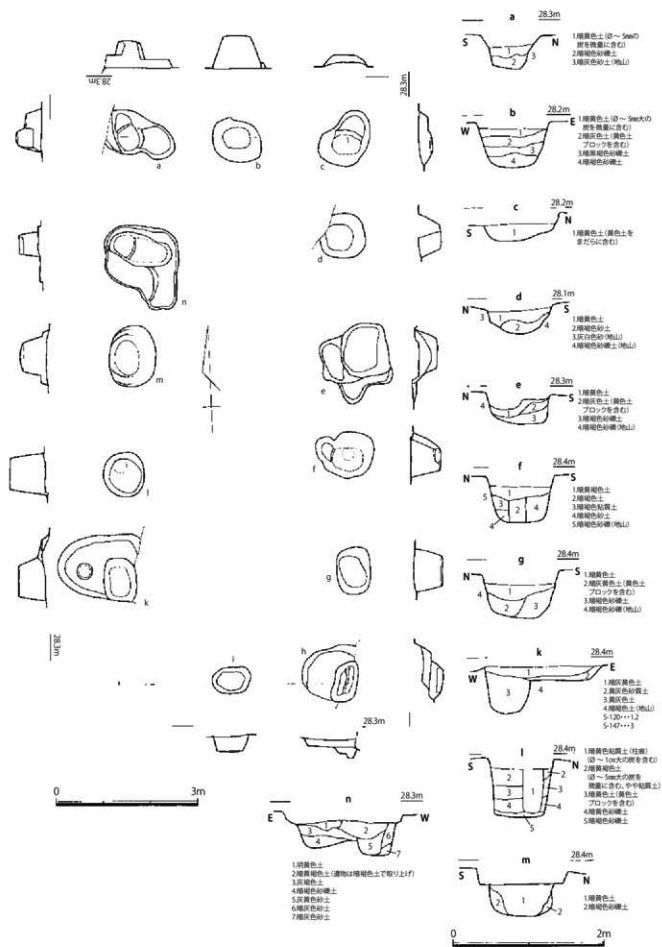


Fig. 133 322SB135 遺構実測図 (1/80, 1/50)

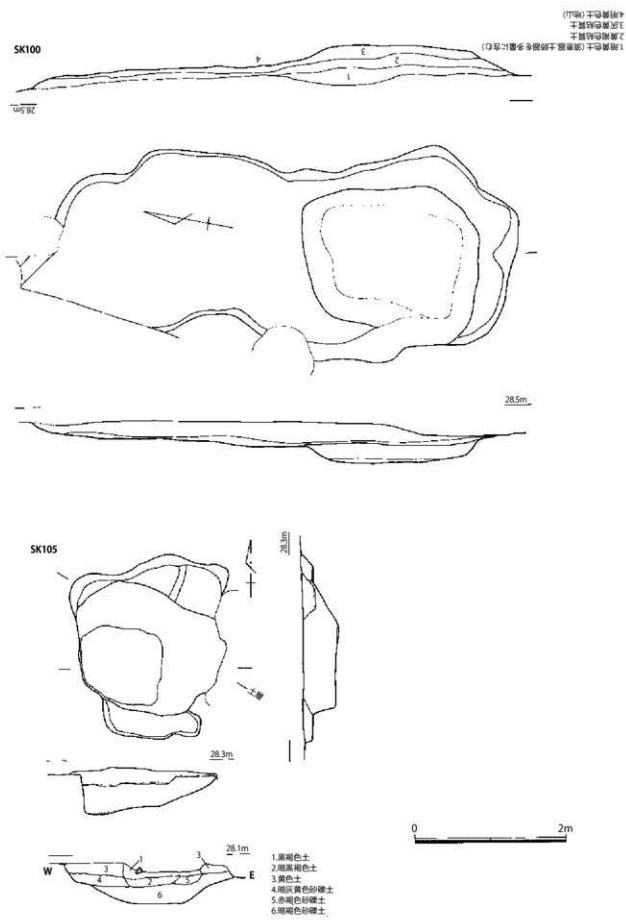


Fig. 134 322SK100・105 遺構実測図 (1/50)

深さ0.5mの不定形の土坑である。当初、土坑が2基重なり合っているものと判断し、掘削を行っていたが、土層断面を確認した際、別遺構ではなく、埋土の違いであることがわかり、同一遺構とした。埋土は6層に分層でき、中央に堆積する黒褐色土、暗黒褐色土に土器が比較的多く含まれていた。

(4) 出土遺物

○第1面

瓦窯

322SX001

322SX001 赤橙色土出土遺物 (Fig. 135)

瓦類

棧瓦 (1) 種し瓦だが煇しが甘く、色調は灰茶色を呈する。内外面ともナデ調整。

322SX001 黒灰色土出土遺物 (Fig. 135)

瓦類

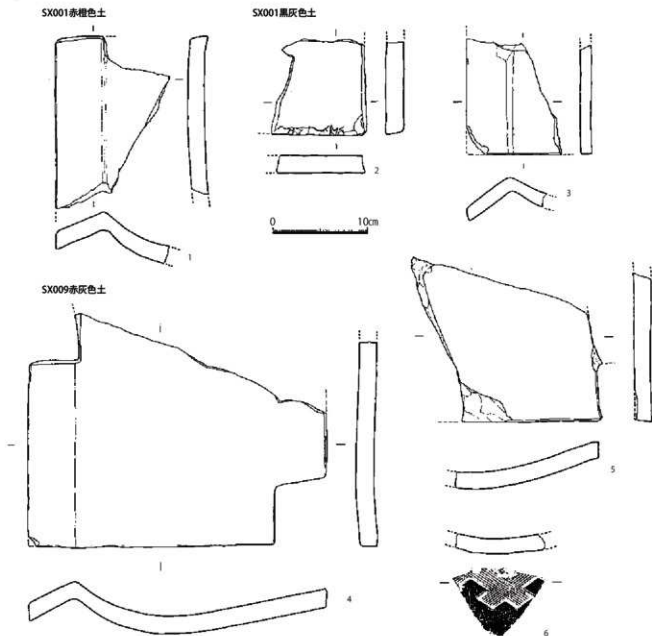


Fig. 135 322SX001・009 赤灰色土①出土遺物実測図 (1/4)

平瓦 (2) 燻し瓦。厚さ 1.9 cm。

棧瓦 (3) 燻し瓦と考えられるが、燻しが甘く、灰褐色を呈する。内外面ともナデ調整。

その他の遺構

322SX009

322SX009 赤灰色土出土遺物 (Fig. 135・136)

瓦類

棧瓦 (4) 燻し瓦だが光沢はない。内外面ともナデ調整で、外面には煤が付着する。両隅に切り込みを入れる。

平瓦 (5, 6) 5は隅に切り込みを入れる。内外面ともナデ調整、燻しが甘く光沢はない。6は燻し瓦だが燻しが甘い。外面にはヘラ描きの文様を施す。

土製品

埴 (7～12) 全体として胎土は0.3 cm以下の白色砂粒を多く含む。7は内外面とも粗く簡単なナデ調整で、黒灰色を呈するが、溶解はしていない。側面部には接着時もしくは窯整形時の粘土が付着する。さらに一方の側面部も被熱により黒灰色を呈する。厚さ 6.4 cm。8は表面を粗くナデ調整し、部分的に粘土が付着する。側面部片側は被熱で黒色化する。9は窯側の面が溶解し、その反対面には畳目のような圧痕を残し、釘のような金属が突出している。厚さ 7.7 cm。10は、表面がケズリ調整。側面部は二次焼成で付着物が多く付き、図の左面には接着時の粘土が残る。厚さ 8.3 cm以上。11は窯面側とみられる面が被熱し付着物がみられる。12の側面部は二次焼成により溶解した付着物がみられる。厚さ 5.8 cm以上。

322SX009 黒灰色土出土遺物 (Fig. 137)

瓦類

平瓦 (13) 燻し瓦で、内外面ともナデ調整でやや光沢がある。縦 27.3 cm、幅 27.0 cm、厚さ 1.7 cm。

322SX009 黒色土出土遺物 (Fig. 137)

瓦類

平瓦 (14) 燻しは外面のみにみられる。側面断面部には「通瓦徳」の刻印がみられる。

322SX009 黄灰色土出土遺物 (Fig. 137)

瓦類

平瓦 (15, 16) 燻し瓦。15は燻しが甘く灰黄色を呈する。両隅に切り込みを有する。内外面ともナデ調整で、一部に煤が付着する。16は隅に切り込みを有する。胎土は黒色粒を多く含む。凹面に煤が付着する。光沢なし。縦 27.5 cm。

棧瓦 (17) 燻し瓦で、外面は光沢を有する。側面断面部には「通瓦徳」の刻印とみられるが、徳の文字には行人扁がみられない。

322SX001・009 周辺出土遺物 (Fig. 138)

瓦類

丸瓦 (18) 外面はミガキを施し、光沢のある黒灰色を呈する。長さ 28.7 cm、幅 14.0 cm。赤褐色土より出土。

平瓦 (19) 燻し瓦で、凹面はやや光沢がある。側面部に「通瓦徳」の刻印とみられる。赤褐色土より出土。

土製品

埴 (20, 21) 20は、胎土にスサを多く含み、表面をナデ調整する。二次焼成による被熱を受けた様子はみられないが、表面には薄く接合時の粘土痕が残る。灰褐色土より出土。21は、日干し煉瓦のよ

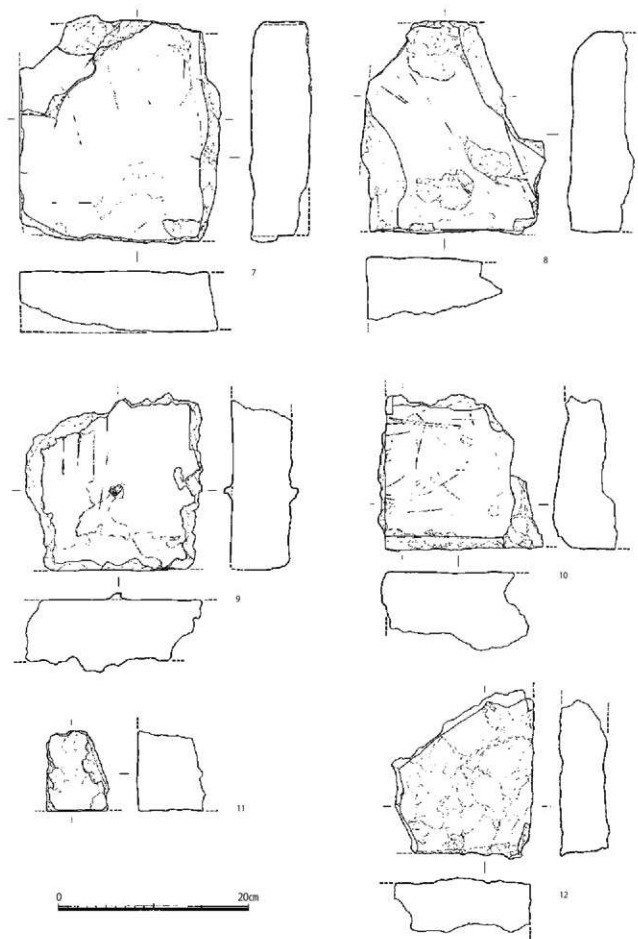


Fig. 136 322SX009 赤灰色土②出土遺物実測図 (1/4)

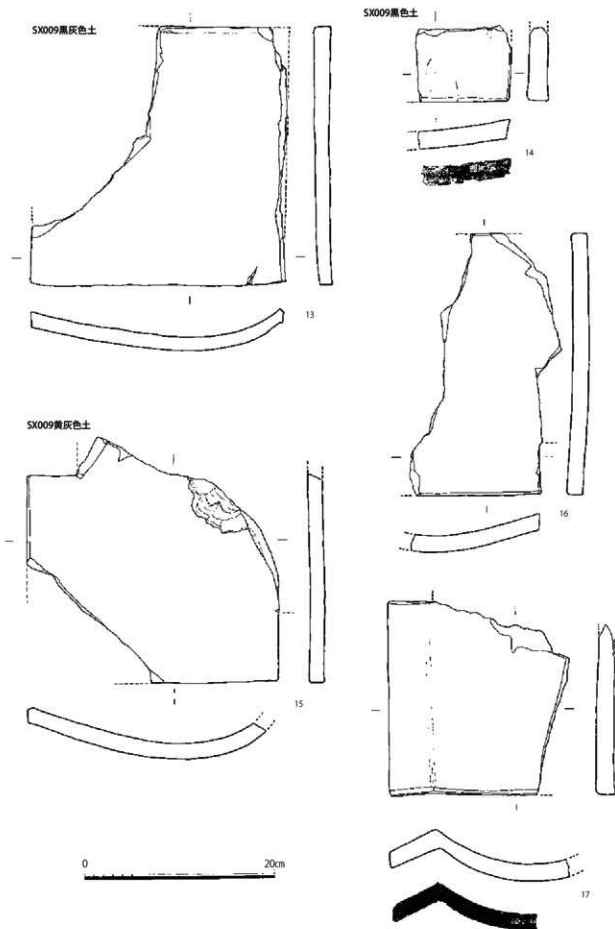


Fig. 137 322SX009 黑灰色土·黑色土·黄灰色土出土遗物实测图 (1/4)

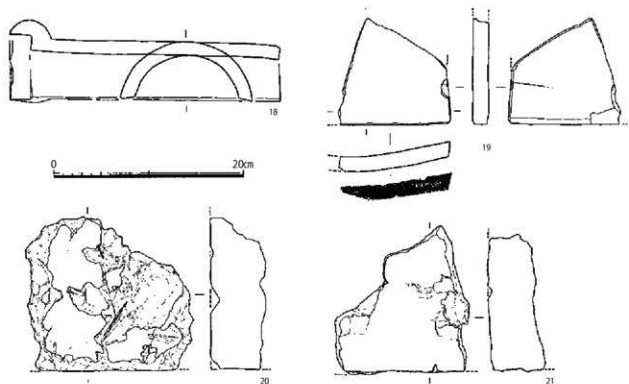


Fig. 138 322SX001・009 周辺出土遺物実測図 (1/4)

うな焼成で、表面はナデ調整し、接合時の粘土が薄く残る。側面は二次焼成により溶解する。表土より出土。

○第2面

溝

322SD060

322SD060 黄褐色土出土遺物 (Fig. 139・140)

土師器

小皿 a (1～18) 復元口径 9.0～10.8 cm。1～16 は底部切り離しが回転ヘラ切りで板状圧痕が多くみられる。17・18 の底部切り離しは回転糸切りである。

小皿 c (19) 高台径 6.25 cm。

丸底坏 a (20～26) 復元口径 14.8～16.2 cm。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内面はミガキ b である。

丸底坏 c (27) 摩滅が目立ち調整不明。復元口径 15.6 cm、器高 4.9 cm。

鉢 (28) 小片で全形がわかりづらいが、口縁端部を内側に屈曲させる。摩滅が目立ち調整不明。

甕 (29, 30) 29 は体部がヨコハゲ、外面は煤が付着する。30 は復元口径 49.7 cm。内外面ともナデ調整で、口縁部付近には指頭圧痕がみられる。

黒色土器 A 類

碗 (31, 32) 内面にミガキ c を施す。

黒色土器 B 類

碗 (33, 34) 内外面ともミガキ c を細かく施す。

碗 c (35～37) 内外面ともミガキ c を細かく施す。35 は丸味のある深い体部で、復元高台径 5.8 cm の小さな高台を貼付する。36 の外面は摩滅するがナデ調整か。

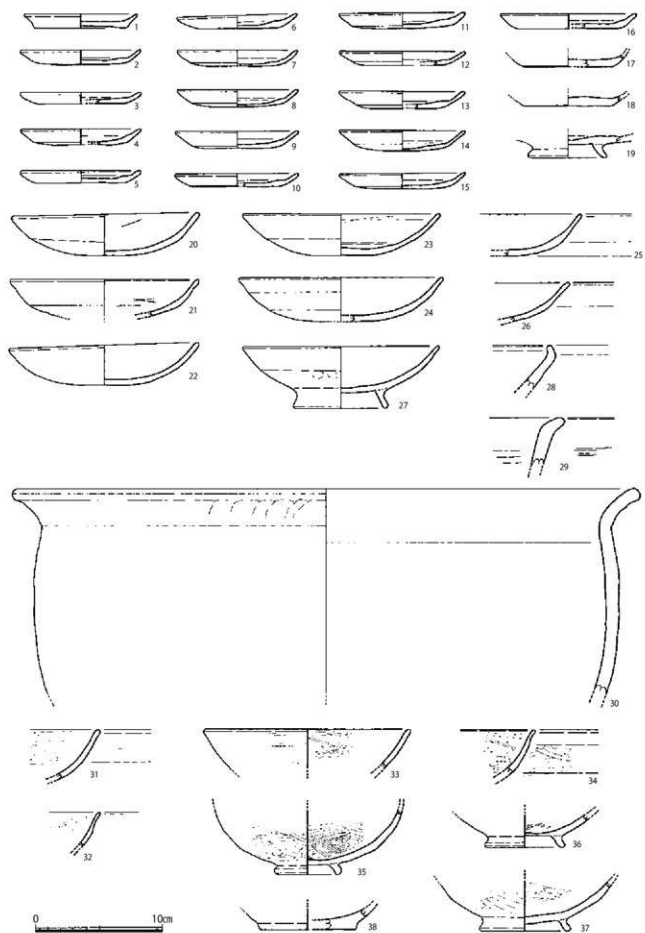


Fig. 139 322SD060 黄褐色土①出土遺物実測図 (1/3)

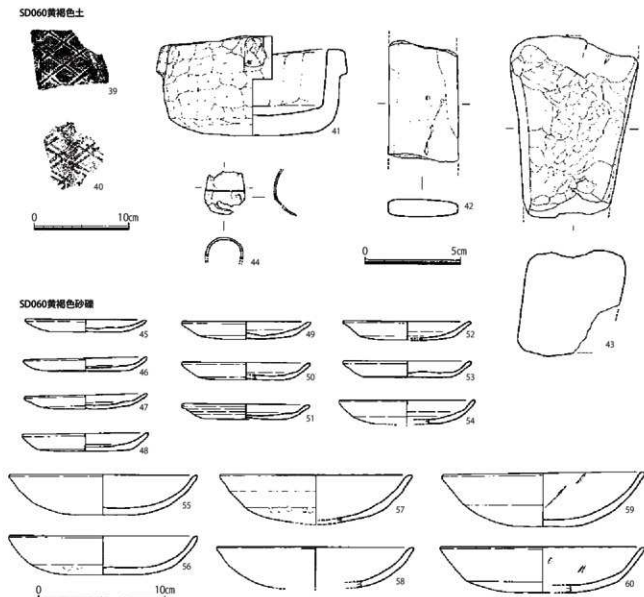


Fig. 140 322SD060 黄褐色土②・黄褐色砂礫出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、金属・石製品は1/2)

緑釉陶器

甕 (38) 復元高台径7.6 cm。焼成は須恵質で、うっすらと灰黄色釉が残る。

瓦類

平瓦 (39) ハケ目の後大きめの格子叩きを施す。

丸瓦 (40) 二重格子叩き。

石製品

石鍋 (41) 口径10.1 cm、器高4.8 cm、底径8.1 cm。外面には瘤状把手が4ヶ所ケズリ出している。外面には部分的に煤が付着する。滑石製。

砥石 (42、43) 42は両端を欠損する。幅3.7 cm、厚さ0.9 cm。全面研磨される。43は3面研磨、1面には叩き痕が残る。泥岩製。

金属製品

銅鈴 (44) 幅2.2 cm、中央に接合部が残る。劣化が目立ち大きく欠損する。

322SD060 黄褐色砂礫出土遺物 (Fig. 140)

土師器

小皿 a (45～54) 復元口径 9.6～10.8 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底杯 a (55～60) 復元口径 14.95～16.2 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。内面は摩滅が目立つが、ミガキ b が確認できる。

322SD070

322SD070 暗黄褐色土出土遺物 (Fig. 141)

須恵器

鉢 (1) 口縁端部を丸く肥厚させる。色調は灰白色を呈する。篠窯。

土師器

小皿 a (2～8) 復元口径 9.4～10.0 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。

丸底杯 a (9) 復元口径 15.7 cm。内面ミガキ b、外面下半には指頭圧痕を残す。

丸底杯 (10～12) 内面ミガキ b、外面下半には指頭圧痕を残す。

碗 c (13, 14) 13 は高台径 5.0 cm。高台付近の形状から南九州の土器と推測される。14 は内面にミガキ b を施す。

黒色土器 A 類

碗 c (15) 跳ね上げた高台を貼付する。内面はミガキ b の後一部ミガキ c を施す。外面下半には指頭圧痕を残す。

黒色土器 B 類

碗 c (16) 復元口径 15.6 cm、器高 6.1 cm。内外面に細かくミガキ c を施す。外面下半に指頭圧痕が残る。

土師質土器

鍋 (17) 口縁端部を緩やかに外反させる。内面と外面下半は摩滅するが、外面上半部はタテハケの後ヨコナデ調整する。内面の下半は若干褐色を呈する。

瓦類

瓦玉 (18) 大きさは 2.7 cm、厚さ 1.6 cm。

石製品

平玉石 (19) 大きさは 1.15×1.6 cm、厚さ 0.35 cm。灰緑色を呈する。

滑石加工品 (20) 径 0.4～0.55 cm の円孔を穿つ。滑石を削り成形しているが、全形は不明。

滑石製容器 (21) 内面を円形にケズリ加工しているが、破片のため全形不明瞭。

322SD070 暗黄褐色砂出土遺物 (Fig. 141)

土師器

小皿 a (22, 23) 22 は底部切り離しが回転ヘラ切り。23 は器高が 1.8 cm とやや高い。

丸底杯 a (24, 25) 内面ミガキ b を施す。24 は口縁端部をやや肥厚する。

黒色土器 B 類

碗 (26, 27) 26 の口縁端部内面には僅かに沈線が巡る。内外面ともミガキ c を施す。

瓦類

平瓦 (28) 「佐」の文字瓦。

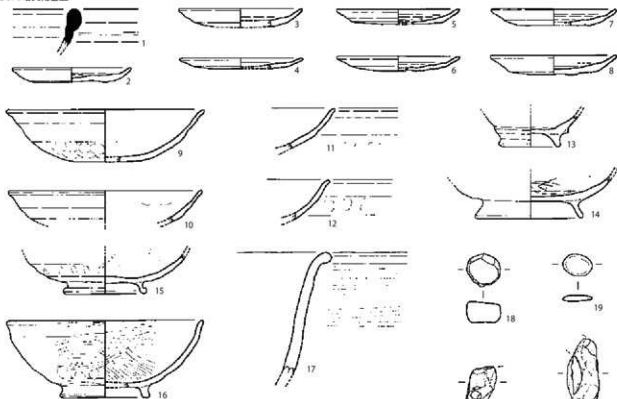
金属製品

鉄釘 (29) 角釘で両端を欠損する。

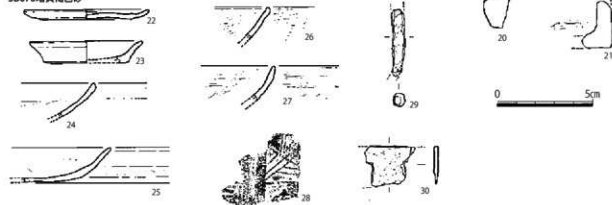
鉄鎌 (30) 小片で明確には言えないが、若干湾曲しており鎌と推測される。

322SD070 暗褐色土出土遺物 (Fig. 141)

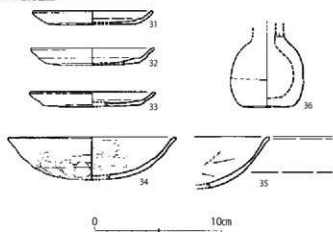
SD070暗黄褐色土



SD070暗黄褐色砂



SD070暗褐色土



SD070灰白色粘土

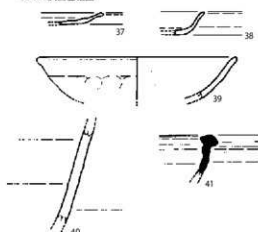


Fig. 141 322SD070 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、金属・石製品は1/2)

土師器

小皿 a (31 ~ 33) 復元口径 9.5 ~ 10.0 cm。底部切り離しは回転ヘラケズリ。

丸底杯 a (34、35) 34 は内面ミガキ b、外面はミガキ c を施し、指頭圧痕を残す。

小壺 (36) 底径 4.0 cm。外面は摩滅し調整不明。

322SD070 灰白色粘土出土遺物 (Fig. 141)

須恵器

鉢 (41) 口縁部を折り曲げて肥厚させる。篠窯。

土師器

小皿 a (37、38) 37 は底部切り離しが回転ヘラ切り。38 は器高が 1.8 cm と深い。

丸底杯 (39) 復元口径 15.8 cm。内面ミガキ b、外面中位に指頭圧痕を残す。

灰軸陶器

壺 (40) 胎土は微細な砂粒を含む。内面回転ナデ、外面は回転ヘラケズリで、外面にごく薄く灰緑色釉を施す。

322SD080 灰黄色粘土出土遺物 (Fig. 142・143)

須恵器

蓋 3 (1 ~ 9) 口縁端部は僅かに断面三角形をなす形状である。外面上半部が残る 1・6・7 は回転ヘラケズリである。

蓋 3 もしくは蓋 4 (10) 外面には 2 本のヘラ記号が残る。

杯 a (11 ~ 13) 体部は直線的な外開きである。11 は復元口径 12.0 cm。

杯 c (14 ~ 29) 14 ~ 17 の復元口径は 11.8 ~ 13.6 cm。18 ~ 27 の復元高台径は 7.2 ~ 11.0 cm。全体として低く貧弱な高台を貼付する。14 ~ 16 の体部は直線的な外開きである。

高杯 b (30) 内面ナデ、外面は摩滅するが回転ヘラ切りか。

壺 (31、32) 31 は二重口縁で、内面は自然軸が覆う。32 は口縁端部を肥厚させ、内外面とも回転ナデ調整。

土師器

蓋 c (33) 色調は黄橙色を呈する。

杯 a (34) 平坦な底部で、色調は白茶色を呈する。

碗 c (35、36) 若干丸味のある底部に細長い高台を貼付する。

甕 (37 ~ 39) 37 は復元口径 21.2 cm。外面摩滅するが指頭圧痕が残る。内面は単位不明瞭だがヘラケズリである。38 は復元口径 24.2 cm。体部外面はタテハケの後ヨコナデ、内面ヘラケズリである。39 は内外面とも摩滅し調整不明。

瓦類

平瓦 (40 ~ 45) 40 は縄目叩き、内面は布目の後ナデ消し。41 ~ 45 は横長の格子叩き。

丸瓦 (46) 格子叩き。

322SD085

322SD085 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 144)

須恵器

鉢 (1) 口縁端部を玉縁状に肥厚させる。篠窯。

土師器

小皿 a (2) 底部切り離しは不明。復元口径 10.0 cm。

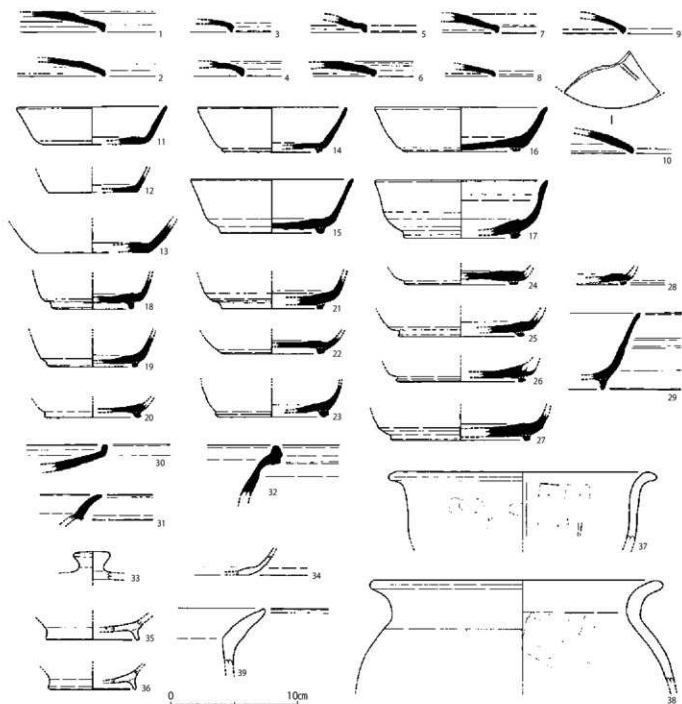


Fig. 142 32SD080 灰黄色粘土出土遺物実測図① (1/3)

碗 c (3, 4) 3は欠損し摩擦も目立つが丸底杯cの可能性はある。

丸底杯 (5, 6) 内面ミガキbを施す。5は復元口径14.2 cm。

丸底杯 c (7) 摩擦が目立つが、丸い杯に長い高台を貼付する。

緑釉陶器

皿 c もしくは碗 c (8) 内面底部は浅い沈線が巡り、目跡が残る。高台豊付には段を有する。内外面とも濃い緑色釉を薄く施す。須恵質。近江産。

瓦類

丸瓦 (9, 10) 外面は横長の大きな格子叩きで、内面は布目痕が残る。

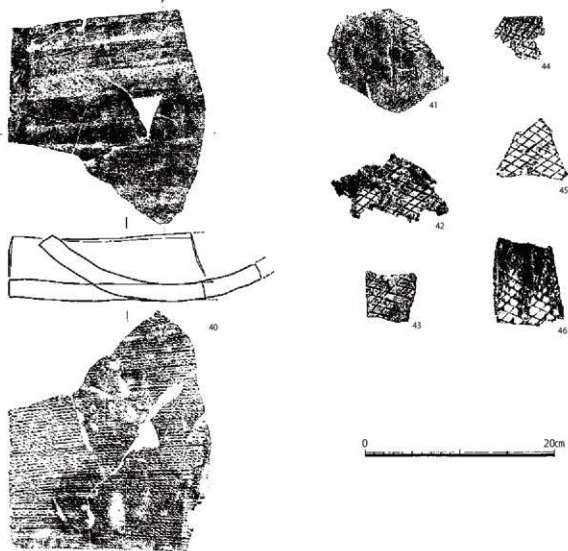


Fig. 143 322SD080 灰黄色粘土出土遺物実測図② (1/4)

土製品

埴 (11) 厚さ 6.2 cm。胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒をやや含み、色調は黄灰色を呈する。

円盤状土製品 (12) 胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒とスサやモミ痕が残る。色調は灰黄色を呈する。
内外面は回転ナデ調整。

322SD085 暗灰色砂土出土遺物 (Fig. 144)

須恵器

鉢もしくは甕 (13) 口縁端部外面には沈線が巡る。

土師器

小皿 a (14) 底部切り離しは不明だが、板状圧痕を残す。

丸底坏 a (15) 底部を回転ヘラ切りし、底部を押し出しするが、中位には屈曲部が残る。

黒色土器 B 類

碗 c (16) 太く低い高台を貼付する。内面はミガキ c が僅かに残る。

322SD094

322SD094 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 145)

土師器

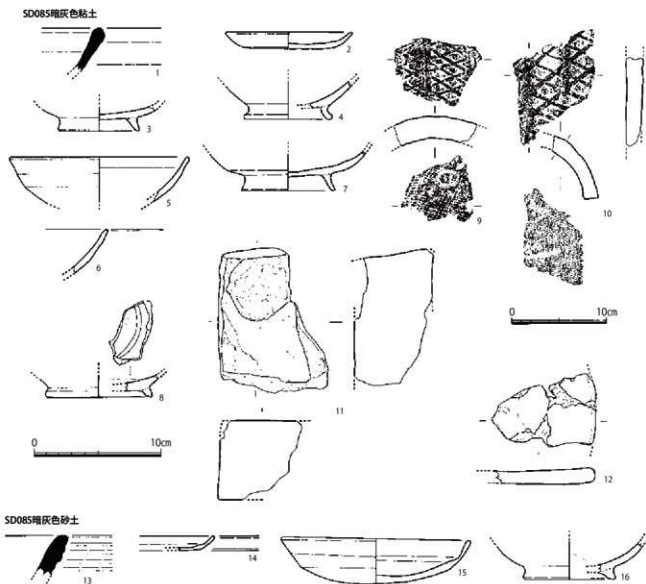


Fig. 144 322SD085 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4)

小皿 a (1) 小片だが復元口径 9.4 cm。

碗 c (2) 高い高台を貼付する。全体的に摩滅する。

丸底坏 a (3, 4) 2点とも内外面とも摩滅し調整不明。

丸底坏 (5, 6) 5 は内面ミガキ b が残る。6 は内外面とも摩滅し調整不明。

甕もしくは鉢 (7) 口縁端部を外反させる。内面は摩滅するが、外面はヨコナデ調整。

322SD094 暗茶色砂礫土出土遺物 (Fig. 145)

金属製品

留金具 (8) 錐のような頭部部分で、頭部の径 0.9 cm。銅製。

322SD094 赤灰色砂土出土遺物 (Fig. 145)

土師器

小皿 a (9) 体部はヨコナデ、底部はナデ調整。

322SD094 暗黄灰色粘土出土遺物 (Fig. 145)

土師器

丸底坏 a (10) 復元口径 14.6 cm。内外面とも摩滅するが、底部にはヘラ切りが残る。

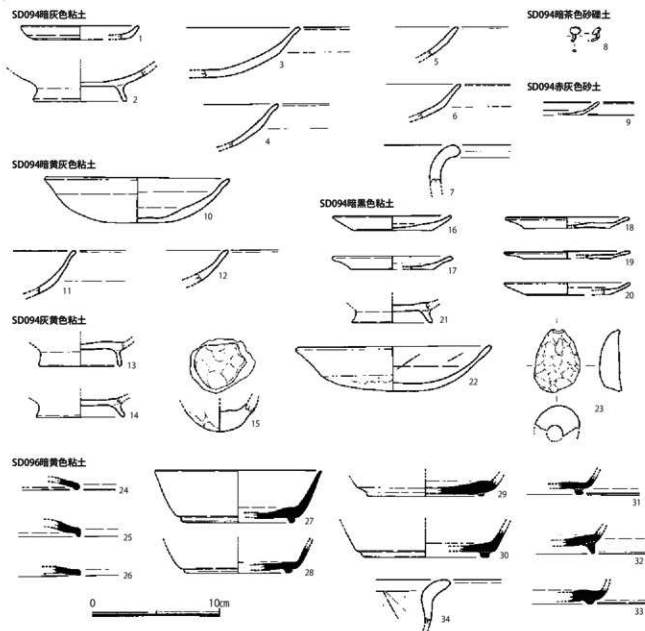


Fig. 145 322SD0094・096 出土遺物実測図 (1/3)

丸底坏 (11, 12) 11は内外面とも摩滅し調整不明。12は10と同一個体が。

322SD094 灰黄色粘土出土遺物 (Fig. 145)

土師器

椀c (13, 14) 底部外面へラ切り、内面底部はナデ調整。

製塩土器

焼塩壺 (15) 内外面ともナデ痕が残る。色調は赤橙色を呈する。

322SD094 暗黒色粘土出土遺物 (Fig. 145)

土師器

小皿a (16~20) 復元口径9.4~10.0 cm, 底部切り離しは回転へラ切り。

椀c (21) 復元高台径6.4 cm, 内面底部は一部ナデ調整。

丸底坏a (22) 底部は押し出しで、内面はミガキbでコテ当て痕が残る。

土製品

土鐘(23) 半分欠損する、長さ5.0 cm、幅約3.6 cm。外面は指頭圧痕が残る。外面の色調は黒色である。

322SD096 暗黄色粘土出土遺物 (Fig. 145)

須恵器

蓋3 (24～26) 口縁端部は僅かに断面三角形をなす。

坏c (27～33) 低く貧弱な高台を貼付する。27の体部は直線的な外開きである。32はやや高い高台を貼付する。胎土は白色砂粒を多く含みやや粗い。

土師器

甕(34) 肥厚した口縁部で、体部内面はヘラケズリである。

井戸

322SE040

322SE040 黒褐色土出土遺物 (Fig. 146)

土師器

丸底坏a (1, 2) 内面ミガキb、底部外面には板状圧痕が残る。

大甕(3) 胎土は0.4 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄色や暗灰色を呈する。内面ヨコナデ、外面はタテハケの後ヨコナデ調整。

322SE040 黄褐色土出土遺物 (Fig. 146)

土師器

鉢(4) 復元口径26.0 cm、器高9.1 cm、復元底径12.6 cm。胎土は0.2 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈する。内面底部付近はヨコハケ、それ以外は内外面ともヨコナデ調整である。

322SE040 黄褐色砂土出土遺物 (Fig. 146)

土師器

小皿a (5) 底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。

丸底坏a (6, 7) 内面は摩滅するが、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕も残す。復元口径はそれぞれ14.6 cmと16.6 cmである。

鍋(8) 復元口径36.5 cm、器高19.3 cm。粘土紐の痕跡が僅かに確認できる。内面はヨコナデの後ナデ調整。外面下半は叩きの後ナデ調整で、部分的に煤が付着する。

322SE040 黒褐色砂土出土遺物 (Fig. 146)

小皿a (9～12) 底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。復元口径9.2～10.4 cm。

丸底坏a (13, 14) 13は口径15.6 cm。内面摩滅し調整不明。14は内面ミガキbで、コテ当て痕も残る。黒色土器B類

椀(15) 復元口径15.0 cm。体部中位で僅かに屈曲する。内外面ともミガキcを施す。

322SE040 暗黒褐色砂土出土遺物 (Fig. 146)

土師器

丸底坏(16) 内面に僅かにミガキbがみられる。復元口径16.0 cm。

瓦類

平瓦(17) 横長格子叩き。還元不良で色調は暗褐色を呈する。

322SE091

322SE091 暗黄褐色土出土遺物 (Fig. 147)

土師器

小皿a (1～3) 復元口径10.4～10.7 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

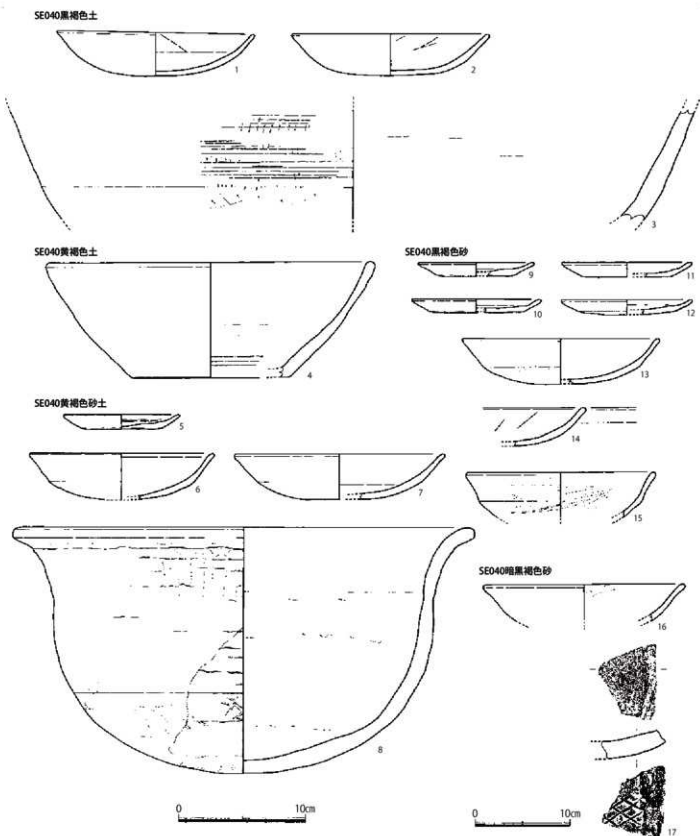


Fig. 146 322SE040 出土遺物実測図 (1/3, 瓦は1/4)

坏 a (4, 5) 復元口径は11.2 cm と 12.1 cm。

碗 a (6) 丸味のある底部で、外面底部には回転ヘラ切りが残るが、体部は摩滅し調整不明。

碗 c (7 ~ 13) 細い高台を貼付する。内外面とも回転ナゲ調整。8 は体部中位で若干屈曲させる。口

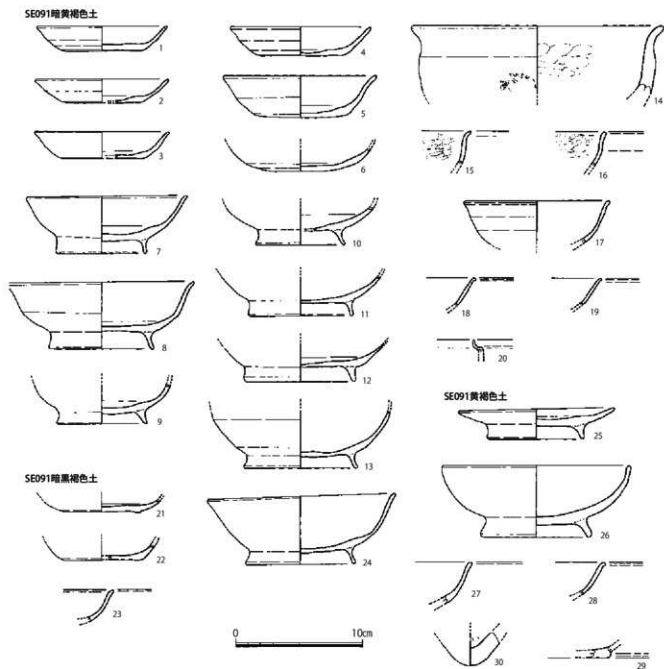


Fig. 147 322SE091 出土遺物実測図 (1/3)

径 14.9 cm、器高 5.3 cm。

甕 (14) 復元口径 20.0 cm。外面の一部に煤が付着する。内面は指頭圧痕が残る。

黒色土器 A 類

碗 (15、16) 内面ミガキc、外面ナデ調整。

緑釉陶器

碗 (17～19) 3点とも口縁端部を僅かに曲げる。須恵質で内外面に緑灰色釉を薄く施す。洛西産か。

17は復元口径 11.6 cm。

香炉 (20) 胎土は須恵質で、内外面に暗緑色釉を施すが、受け部付近は釉が剥げる。東海産。

322SE091 暗黒褐色土出土遺物 (Fig. 147)

土師器

小皿 a もしくは 坏 a (21、22) 底部切り離しは回転ヘラ切り。色調は黄褐色を呈する。

SE092暗黄褐色土

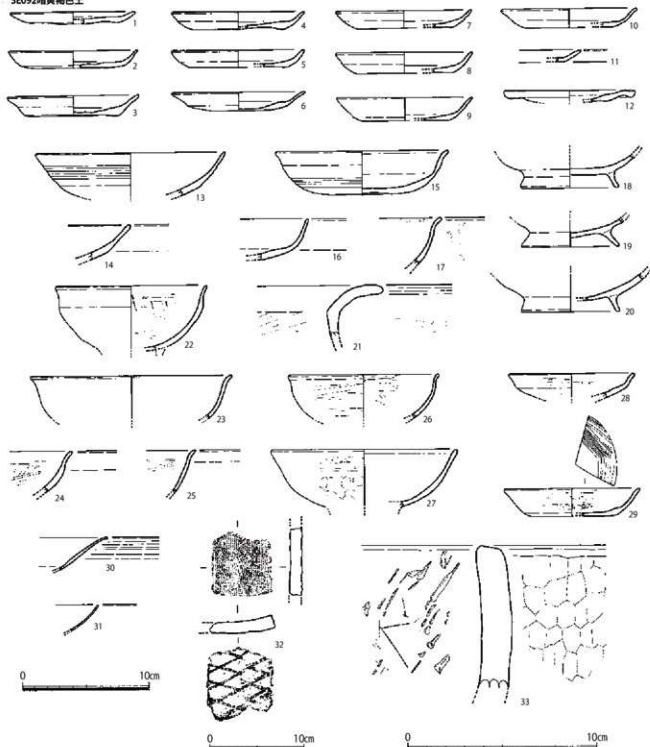


Fig. 148 322SE092 出土遺物実測図① (1/3, 32は1/4, 33は1/2)

碗 (23) 口縁端部を僅かに外反させる。内外面ともヨコナデ調整。

碗 c (24) 口径 14.85 cm, 器高 5.4 cm, 色調は黄褐色を呈する。

322SE091 黄褐色土出土遺物 (Fig. 147)

土師器

小皿 c (25) 復元口径 12.4 cm, 全体的に摩滅が目立つ。

碗 c (26) 口縁部は若干内湾する。復元口径 15.0 cm, 内面は摩滅し調整不明。

碗 (27) 摩滅し調整不明。

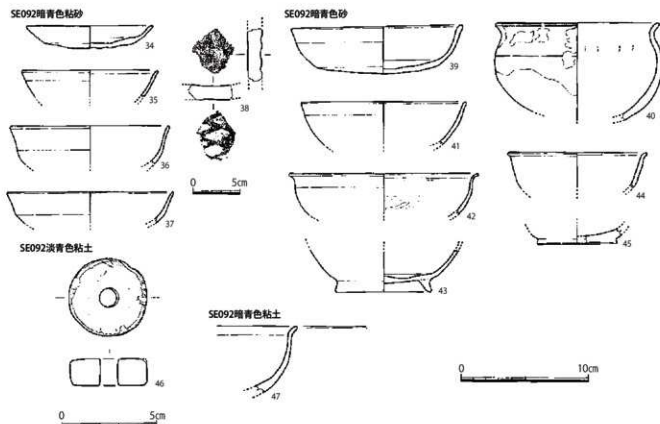


Fig. 149 322SE092 出土遺物実測図② (1/3, 38は1/4, 46は1/2)

緑釉陶器

碗 (28) 口縁端部を僅かに曲げる。内外面とも濃い緑色釉を薄く施す。須恵質。洛西産か。
皿もしくは碗 (29) 円盤高台で、淡い緑色釉を薄く施す。土師質。洛北産。

製塩土器

焼塩壺 (30) 尖った底部部分。II類。

322SE092

322SE092 暗黄褐色土出土遺物 (Fig. 148)

土師器

小皿 a (1～11) 復元口径 10.0～10.8 cm。底部切り離しは確認できるものは回転ヘラ切りである。

小皿 a2 (12) 口縁端部を折り曲げている。復元口径 10.4 cm。摩擦が目立つ。

丸底坏 (13, 14) 13は外面にヨコナデによる沈線がみられる。14は内面ミガキbである。

碗 a (15) 口縁端部を僅かに外反させる。外面底部は回転ヘラ切りで、内面が摩擦するが丸底坏か。

碗 (16, 17) 16は体部中位で屈曲気味に内湾する。内外面ナデ、内面底部ナデ調整。17は口縁端部や外面に煤が付着する。

碗 c (18～20) 18は外面ミガキbである。19・20は内面の摩擦が目立つがナデ調整か。

甕 (21) 体部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。

黒色土器A類

碗 c (22) 内面はミガキbの後ミガキcを施し黒色化するが、焼しはやや弱い。外面はヨコナデ調整。

碗 (23～25) 口縁端部を僅かに外反させる。外面ヨコナデ、内面ミガキcを施す。

黒色土器B類

碗 (26, 27) 26は口縁端部のみ僅かに外反させる。内外面ミガキcを施すが、外面は摩擦が目立つ。

27 は、内面はミガキ c だが摩滅し単位不明。外面ミガキ c で下半には指頭圧痕が残る。

小皿 a (28、29) 2 点とも摩滅が目立つが、29 の内面はミガキ c を細かく施す。

白磁

皿 (30) 破片の下位に屈曲部がある。内外面とも回転ナデの後半透明の白色釉を薄く施す。

碗 (31) やや不透明な白色釉を薄く施す。枢府か。

瓦類

平瓦 (32) 横長の大きな格子叩きで、側面はヘラ切り後分割する。

石製品

石鍋 (33) 外面にはケズリ整形痕、内面には工具痕が明瞭に残る。

322SE092 暗青色粘砂出土遺物 (Fig. 149)

土師器

小皿 a (34) 復元口径 10.0 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。

碗 (35～37) 口縁端部は外反せず直線的である。復元口径 10.8～13.2 cm。

瓦類

平瓦 (38) 横長の大きな格子叩き。

322SE092 暗青色砂出土遺物 (Fig. 149)

土師器

碗 a (39) 底部外面は回転ヘラ切り後板状圧痕を残す。体部はヨコナデ、内面底部は不定方向のナデ調整。

小甕 (40) 復元口径 13.0 cm。内面には工具痕があり、外面上半部は煤が付着し、下半は被熱で器面が荒れている。

黒色土器 A 類

碗 (41、42) 41 は内外面ともヨコナデ調整。42 は丁寧なつくりで、口縁端部のみ外反させる。外面ヨコナデ、内面は丁寧なミガキ b を施す。復元口径 15.0 cm。

碗 c (43) 内外面ともヨコナデ調整か。

緑釉陶器

碗 (44、45) 44 は復元口径 11.0 cm。口縁端部を僅かに曲げる。内外面に緑青色釉を薄く施す。須恵質。洛西産か。45 は円盤高台で復元底径 6.4 cm。内外面に光沢のある淡緑灰色釉を厚く施軸する。土師質。洛北産。

322SE092 淡青色粘土出土遺物 (Fig. 149)

石製品

紡錘車 (46) 大きさは 4.1×4.15 cm、厚さ 1.4 cm。中央に径 0.9 cm の円孔を穿つ。重さ 45.5g。滑石製。

322SE092 暗青色粘土出土遺物 (Fig. 149)

土師器

碗 c (47) 口縁端部を外反させる。内外面とも回転ナデで、外面には煤が付着する。

土坑

322SK035

322SK035 黒褐色土出土遺物 (Fig. 150)

土師器

小皿 a (1～7) 復元口径 10.0～11.2 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

小皿 a2 (8～10) 復元口径 10.2～11.0 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。8は口縁端部が摩滅し沈線が残っていない。

碗 a (11) 復元口径 13.0 cm。口縁端部を外反させる。調整は摩滅し不明瞭。色調は黄褐色を呈する。

碗 (12、13) 口縁部が若干外反する。内外面とも摩滅し調整不明。

丸底坏 a (14、15) 14は復元口径 13.0 cm。内面は摩滅し調整不明。15は底部押し出しで、内面にミガキ b を施す。

丸底坏 (16) 内外面とも摩滅するが、内面ミガキ b のような痕跡を残す。

甕 (17) 内面に炭化物が付着する。外面は摩滅が目立ち調整不明。

器台 (18) 中央に径 1.2 cm 程の孔を設ける。外面は摩滅し調整不明。

黒色土器 B 類

碗 c (19) 復元口径 16.0 cm。外面中位に指頭圧痕を残し、内面はミガキ c を施す。

碗 (20、21) 20は復元口径 15.0 cm。内面ミガキ c を施すが摩滅が目立つ。21は内面ミガキ c、外面ヨコナデ調整。

製塩土器

焼塩壺 (22) II - b 類。外面ナデ、内面は工具ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

土製品

トリペ (23) 内面は被熱するが、溶解はあまりなく、付着物もない。

金属製品

鉄釘 (24) 角釘で、先端部は欠損するが、頭部を曲げている。現存長 3.65 cm、幅 0.55 cm。

鉄線状製品 (25) X線撮影すると中位両側に筥被がみられる。

石製品

滑石加工品 (26) 長方体で円形の突起が作り出されている。縦 4.5 cm、幅 2.3 cm、厚さ 1.2 cm。

瓦類

平瓦 (27～29) 27・28は大きめの格子叩き。29は二重格子叩き。

322SK035 黒色土出土遺物 (Fig. 150)

土師器

小皿 a (30、31) 底部切り離しは回転ヘラ切り。復元口径は 8.8 cm と 10.6 cm。

碗 c (32) ハ字形に踏ん張った高台で、内面はミガキ b のような痕跡が残る。

碗 (33) 口縁端部を僅かに曲げる。内外面とも回転ナデ調整。

黒色土器 B 類

碗 c (34) 内面はミガキ c を施す。

322SK050 灰褐色土出土遺物 (Fig. 150)

土師器

坏 a (35～38) 底部切り離しは回転ヘラ切り。口径 12.0～12.2 cm。35～37はやや丸味のある底部である。

碗 c (39) 低い断面三角形の高台を貼付する。色調は淡灰茶色を呈する。

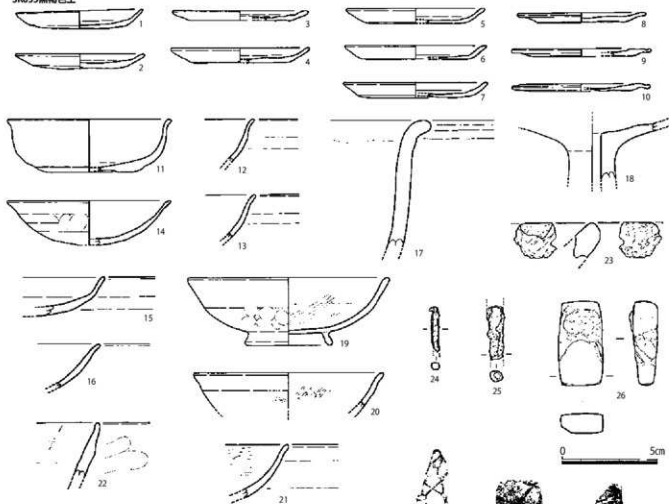
甕 (40) 体部内面はヘラケズリ、外面ヨコナデ調整。

瓦類

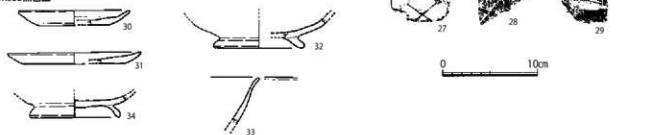
丸瓦 (41) 横長の格子叩き、内面は布目痕を残す。

322SK055 灰褐色土出土遺物 (Fig. 151)

SK035黒褐色土



SK035黒色土



SK050灰褐色土

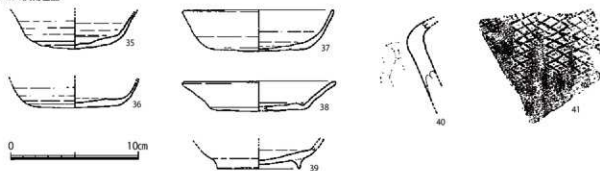


Fig. 150 322SK035・050 出土遺物実測図① (1/3、瓦は1/4、金属・石製品は1/2)

土師器

坏a (1~11) 復元口径12.0~13.2cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、平坦な底部と若干丸味のある底部が混在する。色調は白茶色や薄茶色などを呈する。

SK055灰褐色土

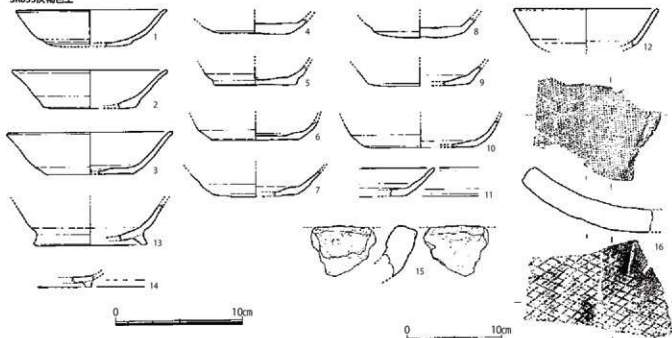


Fig. 151 322SK055 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

坏 (12) 復元口径 11.4 cm。色調は白茶色を呈する。

碗 c (13) 丸味のある底部に外開きの高台を貼付する。

緑釉陶器

碗 c (14) 貼り付け高台で、焼成は土師質で、内外面に光沢のある淡緑色釉を施す。

土製品

トリベ (15) 口縁部から内面は被熱で溶解し、赤茶色や黒色の付着物がみられる。

瓦類

平瓦 (16) 横長の格子叩き。

322SK075

322SK075 黄灰色土出土遺物 (Fig. 152)

石製品

棒状石製品 (1) 欠損するが、棒状に研磨され、細かく擦痕が残る。泥岩製か。

322SK075 暗褐色土出土遺物 (Fig. 152)

須恵器

鉢 (2) 口縁部を肥厚させる。篠窠。

土師器

小皿 a (3~9) 復元口径 8.4~11.6 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

坏 a (10, 11) 2点とも底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕を残す。色調は暗黄色を呈する。

丸底坏 a (12~15) 復元口径 14.8~15.6 cm。全体的に摩滅が目立つ。

碗 c (16) 高台径 5.3 cm。

黒色土器 A 類

碗 (17) 内外面とも摩滅し調整不明。

黒色土器 B 類

碗 (18) 内外面ともミガキ c を施す。

碗 c (19) 内面には平行にミガキ c を施す。

緑釉陶器

椀 (20) 外面に縦篋沈線、輪花を施す。内外面に濃い緑色釉を薄く施す。須恵質。

皿もしくは椀 (21) 胎土は明灰色で、緑色釉を薄く施す。円盤高台で高台底面は露胎で僅かな段を設ける。須恵質。

越州窯系青磁

椀 (22) 口縁端部を緩やかに外反させる。深く光沢のある緑色釉を内外面に薄く施す。

322SK075 黒褐色土出土遺物 (Fig. 152)

土師器

小皿 a (23) 底部切り離しは回転ヘラ切り。復元口径 9.0 cm。

椀 c (24) 復元高台径 7.2 cm。

丸底坏 a (25) 外面摩滅し調整不明。口径 15.2 cm。

黒色土器 A 類

椀 c (26) 内面ミガキ、外面ナデ。復元高台径 6.6 cm。

黒色土器 B 類

椀 c (27) 外側に跳ねた高台を貼付する。

椀 (28, 29) 内外面ともミガキ c を施す。復元口径 15.0 cm。

322SK075 灰褐色粘土出土遺物 (Fig. 152)

土師器

小皿 a (30) 底部切り離しは回転ヘラ切り。

丸底坏 a (31) 内面ミガキ b で上部にはコテ当て痕が残る、外面下半には指頭圧痕を残す。

黒色土器 A 類

椀 c (32) 底部ヘラ切りで板状圧痕を残し、内面はミガキ c を施す。

金属製品

鐏子 (33) 先端部が若干曲げている。現存長 7.7 cm、幅 0.5 cm、厚さ 0.2 cm。

322SK075 灰黄褐色砂出土遺物 (Fig. 152)

土師器

小皿 a (34, 35) 復元口径 9.6 cm と 9.8 cm。底部切り離しは不明瞭。

丸底坏 a (36 ~ 41) 復元口径 15.0 ~ 15.9 cm。内面にミガキ b、底部にはヘラ切りが残る。

黒色土器 B 類

椀 (42, 43) 内面はミガキ c が残るが、外面は摩滅し調整不明。

椀 c (44) 高台径 6.7 cm。内外面にミガキ c を施す。

322SK075 黄色砂出土遺物 (Fig. 153)

土師器

小皿 a (45) 底部切り離しは回転ヘラ切り。復元口径 9.8 cm。

丸底坏 a (46, 47) 口径 15.2 cm。底部は回転ヘラ切り痕が残る。

甕 (48, 49) 48 は復元口径 35.4 cm。外面下半に平行叩き、内面には強いヨコナデを施す。49 は復元口径 36.2 cm。胎土は白色砂粒を多く含み、黄灰色を呈する。外面は摩滅するが、内面はやや強いヨコナデで整形する。

道路

322SF090

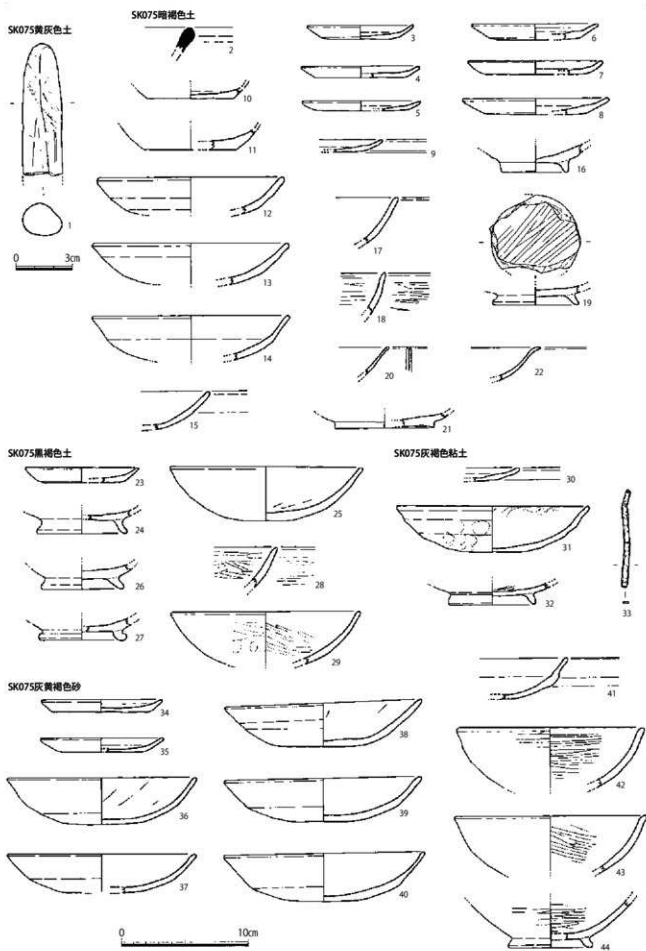


Fig. 152 322SK075 出土遺物実測図① (1/3、金属・石製品は1/2)

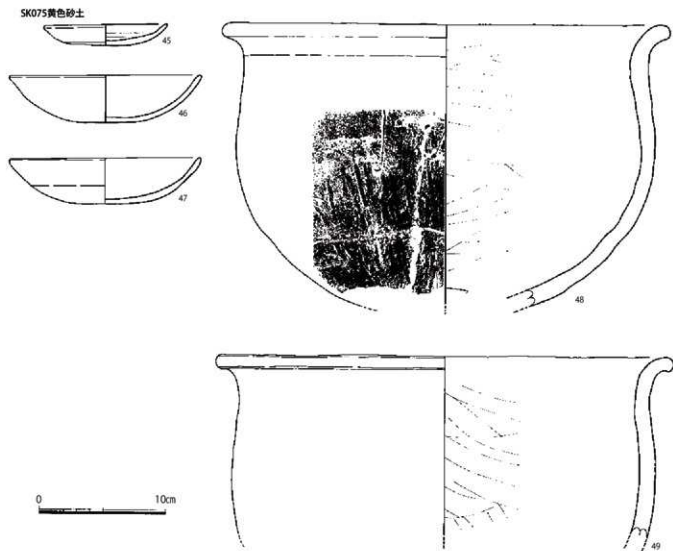


Fig. 153 322SK075 出土遺物実測図② (1/3)

322SF090 出土遺物 (Fig. 154)

緑釉陶器

椀 (1) 復元高台径 8.5 cm。胎土は微細な黒色粒を含み、淡灰色を呈する。内面には淡緑灰色釉を施すが、やや剥落する。

322SF090 黄褐色礫土出土遺物 (Fig. 154)

須恵器

蓋 c (2) ボタン状のツمامミを貼付する。

蓋 3 (3, 4) 3の端部調整はやや不定形である。

坏 a (5) 底部ヘラ切りで、内外面とも回転ナデ調整。

坏 c (6 ~ 18) 全体としてやや低く貧弱な高台を貼付する。復元高台径は 7.0 ~ 10.4 cm。

円面硯 (19) 復元口径 9.2 cm、器高 2.75 cm。体部中位には径 0.5 cm 程の円孔を設ける。底面外面にはヘラ記号を施す。硯面は欠損するが、円面硯と推測される。

土師器

坏 a (20) 若干丸味のある底部である。色調は橙茶色を呈する。

甕 (21, 22) 摩滅が目立つが、体部内面はヘラケズリ。

白磁

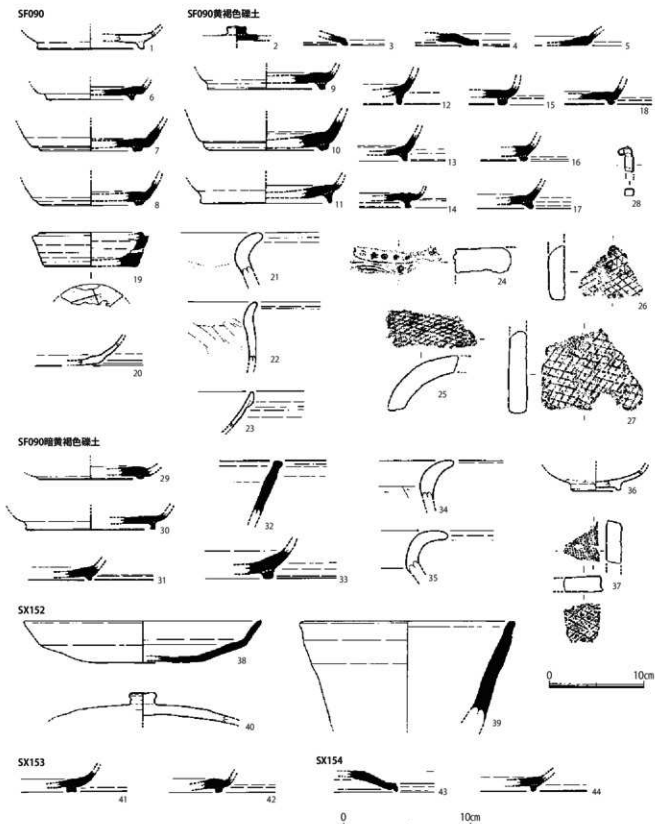


Fig. 154 322SF090、SX152・153・154 土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)
 碗 (23) II-5 類。

瓦類

軒平瓦 (24) 欠損が目立つが、瓦当面は扁行唐草文とする。

丸瓦 (25) 外面は小さな横長格子叩きである。

平瓦 (26、27) 凹面は摩擦するが、凸面は小さな方形格子叩きである。

金属製品

鉄釘 (28) 頭部をL字形に曲げている。

322SF090 暗黄褐色礫土出土遺物 (Fig. 154)

須恵器

坏 c (29 ~ 31) 29・31は低く貧弱な高台、30は細い高台を貼付する。

鉢 (32) 内外面とも回転ナデ調整。

壺 (33) 外面ヘラケズリ、内面不定方向のナデ調整。

土師器

甕 (34、35) 口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリである。

白磁

皿 (36) I-1類。復元高台径4.0 cm。

瓦類

平瓦 (37) 凸面に格子叩きを施す。体部は直線的な外開きである。

322SF090 底面

322SX152 出土遺物 (Fig. 154)

須恵器

皿 a (38) 底部外面は回転ヘラ切り後板状圧痕が残る。底部内外面とも使用により若干平滑となる。

鉢 (39) 復元口径17.0 cm。内外面とも回転ナデで、外面は灰被りする。

土師器

蓋 c (40) 全体的に摩擦するが、外面上半部は回転ヘラケズリ。色調は橙色を呈する。

322SX153 出土遺物 (Fig. 154)

須恵器

坏 c (41、42) 低い高台を貼付する。

322SX154 出土遺物 (Fig. 154)

須恵器

蓋 3 (43) 外面上部は回転ヘラケズリ、その他は残存範囲では回転ナデ調整。口縁端部には重ね焼き痕が残る。

坏 c (44) 若干貧弱な高台を貼付する。全体的に摩擦する。

○第3面

掘立柱建物

322SB135

322SB135a 出土遺物 (Fig. 155)

須恵器

坏 c (1) 直線的な外開きの体部。内面底部はナデ、外面底部はヘラ切り、その他は回転ナデ。

322SB135c 出土遺物 (Fig. 155)

土師器

甕 (2) 肥厚した口縁部で、外面は摩擦が目立つが、体部内面ヘラケズリ、口縁内面はヨコハケ。

322SB135d 暗褐色砂出土遺物 (Fig. 155)

須恵器

蓋 3 (3) 外面上半部は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。

322SB135e 暗黄色土出土遺物 (Fig. 155)

須恵器

坏 c (4, 5) 4 は平坦な底部で、外面下半が回転ヘラケズリである。色調は灰白色を呈する。5 は断面方形の低い高台を貼付する。

322SB135f 暗黄褐色土出土遺物 (Fig. 155)

須恵器

蓋 3 (6) 口縁端部は蓋 2 のように若干長い。内外面とも回転ナデで、色調は灰色を呈する。

蓋 a3 (7) 外面上半部は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ調整。

蓋 3 (8, 9) 潰れた体部で、口縁端部は僅かに擠まむ程度に仕上げる。外面上半部は回転ヘラケズリ。

碗 a (10) 外面底部は回転ヘラ切りで、若干丸味を帯びる。

坏 (11) 内外面とも回転ナデ調整。

小壺 (12) 口縁端部を短く曲げる。内外面とも回転ナデである。胎土は微細な砂粒を含み、色調は灰色を呈する。

土師器

坏 c (13) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は淡橙黄色を呈する。

甕 (14) 肥厚した口縁部でヨコナデ、体部内面はヘラケズリである。

322SB135f 暗褐色粘土出土遺物 (Fig. 155)

須恵器

小壺 (15) 口縁端部を短く曲げる。内外面とも回転ナデである。胎土は微細な砂粒を含み、色調は灰色を呈する。

土師器

皿 c (16) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は橙色を呈する。復元高台径 14.0 cm。

甕 (17) 口縁端部は短く曲げる。体部内面はヘラケズリ、外面はタテハケカ。

322SB135k 上層出土遺物 (Fig. 155)

越州窯系青磁

壺 (18) 明確に言い難いが、壺として報告する。復元高台径 7.2 cm。胎土は灰黄色を呈し、内外面に光沢のある黄色味があった軸を薄く施す。高台畳付は露胎である。長沙窯系青磁の可能性もある。

322SB135k 下層出土遺物 (Fig. 155)

須恵器

蓋 3 (19, 20) 19 は口縁端部をやや長めに折り曲げ、蓋 2 のように見える。20 の外面上半部は回転ヘラケズリ。

坏 c (21, 22) 21 は還元やや不良で、淡茶灰色を呈する。22 はやや丸味のある底部である。

蓋 (23) 外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整。

土師器

坏 c (24) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は淡茶色を呈する。

甕 (25) 摩滅が目立つが、外面ハケ調整。

322SB135l 出土遺物 (Fig. 155)

須恵器

蓋 3 (26 ~ 29) 28・29 は口縁端部を僅かに曲げて擠まんた程度である。

- 坏c (30 ~ 32) 30は外開きの高台を貼付する。外面底部には十字のヘラ記号を施す。
- 坏 (33) 内外面とも回転ナデ調整。
- 鉢 (34) 内外面とも回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。
- 土師器
- 皿c (35, 36) 色調は淡橙黄色を呈する。35は底部外面はヘラ切り、内面はミガキa、36は摩滅するが、内面の一部にミガキaが残る。
- 高坏 (37) 復元脚部径15.0 cm。内外面とも回転ナデ調整。
- 322SB135l 暗黄色粘土出土遺物 (Fig. 155)**
- 須恵器
- 蓋3 (38) 薄い器壁で、口縁端部は断面三角形を呈する。
- 小坏c (39) 底部端に高台を貼付する。色調は黒灰色を呈する。
- 鉢もしくは壺 (40) 内面は回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリ、上半部は回転ナデ調整。還元不良で赤茶色を呈する。
- 壺 (41) 丸味のある底部で、内面底部ナデ、それ以外は回転ナデ調整。外踏ん張りの高台を貼付し、復元高台径11.6 cm。
- 322SB135l 暗黄色土出土遺物 (Fig. 155)**
- 須恵器
- 壺 (42) 内面底部は不定方向のナデ、それ以外は回転ナデ。高台は小さな高台を貼付し、復元高台径7.5 cmである。
- 322SB135m 出土遺物 (Fig. 156)**
- 須恵器
- 蓋c3 (43) 外面上半部は回転ヘラケズリ。
- 蓋3 (44 ~ 46) 44の外面上半部は回転ヘラケズリで、ヘラ記号を施す。46の外面上半部は回転ヘラケズリ。
- 坏c (47) 内外面とも回転ナデ調整。色調は灰黒色を呈する。
- 土師器
- 皿b (48) 口縁端部を僅かに内湾させる。内外面とも回転ナデ調整。橙黄色を呈する。
- 坏c (49) 細く小さな高台を貼付する。外面底部は回転ヘラケズリ、内面はミガキaである。色調は鈍い橙色を呈する。
- 甕 (50, 51) 51は体部外面がタテハケ、内面はヘラケズリ。
- 322SB135m 暗黄色土出土遺物 (Fig. 156)**
- 須恵器
- 蓋3 (52) 外面上半部は回転ヘラケズリで、外面端部は重ね焼きで変色する。
- 坏c (53) 底部端に低い高台を貼付する。
- 322SB135n 出土遺物 (Fig. 156)**
- 須恵器
- 蓋3 (54) 外面上半部は回転ヘラケズリ調整。
- 坏c (55) 若干丸味のある底部に高台を貼付する。色調は灰色を呈する。
- 322SB135n 暗黄褐色土出土遺物 (Fig. 156)**
- 須恵器

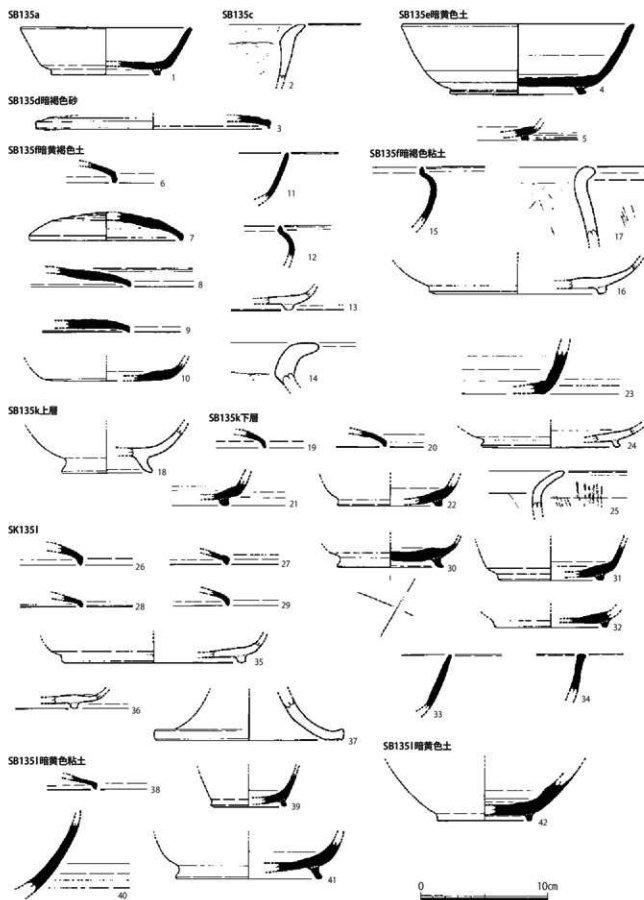


Fig. 155 322SB135 出土遺物実測図① (1/3)

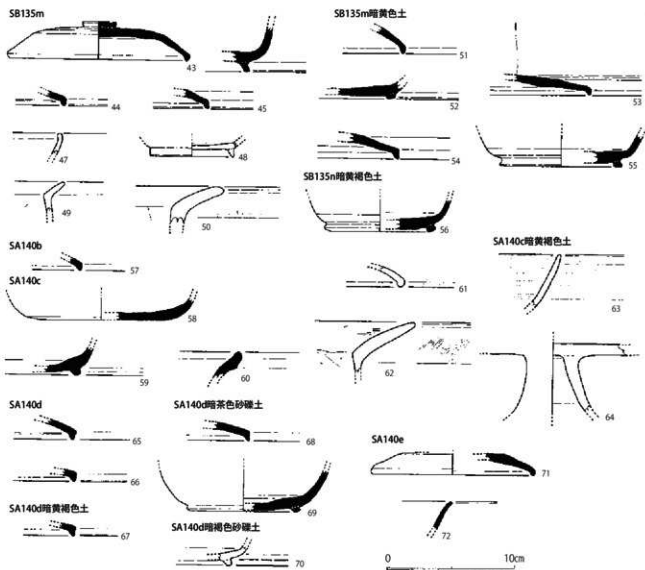


Fig. 156 322SB135 ㉔、SA140 出土遺物実測図 (1/3)

坏c (56) 若干丸味のある底部に高台を貼付する。内面底部ナデ、外面底部は板状圧痕が残る。

322SA140

322SA140b 出土遺物 (Fig. 156)

須恵器

蓋3 (57) 口縁端部は僅かに擴まむ。内外面とも回転ナデ。

322SA140c 出土遺物 (Fig. 156)

須恵器

碗a (58) 若干丸味のある底部で、回転ヘラ切りである。色調は灰色～灰黄色を呈する。

坏c (59) やや低く若干外に開く高台を貼付する。

甕 (60) 内外面とも回転ナデ調整。

土師器

蓋 (61) 内外面ともミガキaだが、摩擦が目立つ。色調は淡茶色を呈する。

甕 (62) 口縁部内外面はハケ、体部内面はヘラケズリである。

322SA140c 暗黄褐色土出土遺物 (Fig. 156)

土師器

椀 (63) 色調は淡茶色を呈し、内外面ともミガキaを施す。

高坏 (64) 摩滅が目立つが、坏部は内外面ともミガキaである。

322SA140d 出土遺物 (Fig. 156)

須恵器

蓋 3 (65, 66) 内外面とも回転ナデ。

322SA140d 暗黄褐色土出土遺物 (Fig. 156)

須恵器

蓋 3 (67) 内外面とも回転ナデ。色調は灰色を呈する。

322SA140d 暗茶色砂礫土出土遺物 (Fig. 156)

須恵器

蓋 3 (68) 内外面とも回転ナデ調整。色調は灰色を呈する。

壺 (69) 一見坏cのようだが、内面の回転ナデや焼成具合から壺と推測される。復元高台径 9.0 cm。

322SA140d 暗褐色砂礫土出土遺物 (Fig. 156)

土師器

坏c (70) 内外面ともミガキaを施す。色調は淡黄茶色を呈する。

322SA140e 出土遺物 (Fig. 156)

須恵器

蓋 3 (71) 内面は回転ナデ、外面上半部は回転ヘラケズリ。

坏 (72) 内外面とも回転ナデ調整。色調は灰黄色を呈する。

土坑

322SK100

322SK100 暗黄色土出土遺物 (Fig. 157 ~ 159)

須恵器

蓋c2 (1) ツマミは潰れているが、口縁端部は折り曲げ、外面は回転ヘラケズリである。

蓋c3 (2 ~ 5) 復元口径 15.0 ~ 17.2 cm。外面上半部は、3は回転ナデ、その他は回転ヘラケズリであるが、2はやや粗い。5の内面は使用により若干平滑である。

蓋 3 (6 ~ 14) 復元口径 11.2 ~ 16.5 cm。外面上半部は、6は回転ヘラ切り後簡単な回転ヘラケズリ。

8・13は回転ヘラ切り後ナデ調整。12は回転ヘラ切り後未調整。その他は回転ヘラケズリである。

大蓋 3 (15) 小片だが復元口径 21.6 cm。全体的に若干摩滅する。

蓋 4 (16) 小片で若干変形し、形状がやや不正確である。端部はほぼ真っすぐに仕上げ、外面上半部は不定方向のヘラケズリである。

蓋c4 (17) 復元口径 17.4 cm。胎土は白色砂粒を含み、やや粗い。外面にはボタン状のツマミを貼付し、外面上半部は回転ヘラケズリである。

壺蓋 (18) 復元口径 7.6 cm、器高 2.25 cm。外面上部は回転ヘラケズリである。

坏a (19 ~ 22) 復元口径 12.2 ~ 15.3 cm。底部外面は回転ヘラ切り後未調整。内面底部はナデ調整。

皿a (23 ~ 28) 外面底部は、24・28は回転ヘラ切り後ナデ調整。その他は回転ヘラケズリ。

大皿c (29) 復元高台径 19.8 cm。底部外面は回転ヘラケズリ、内面底部は不定方向のナデ調整。色調は灰白色を呈する。

坏c (30 ~ 60) 全体として、低くやや不定形な高台を貼付する。30 ~ 42は復元口径 9.9 ~ 15.8 cm。

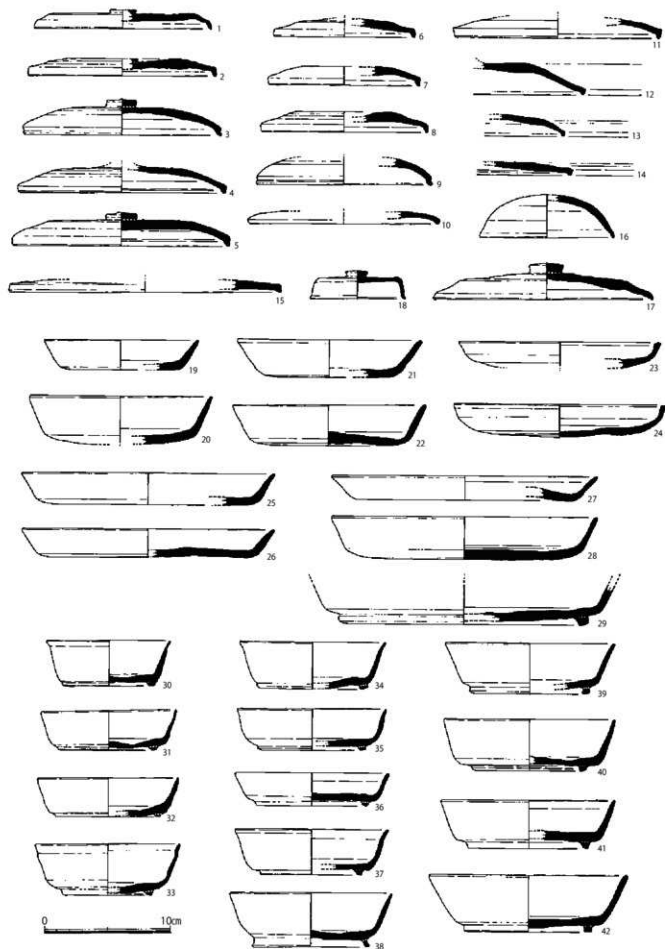


Fig. 157 322SK100 暗黄色土出土遺物実測図① (1/3)

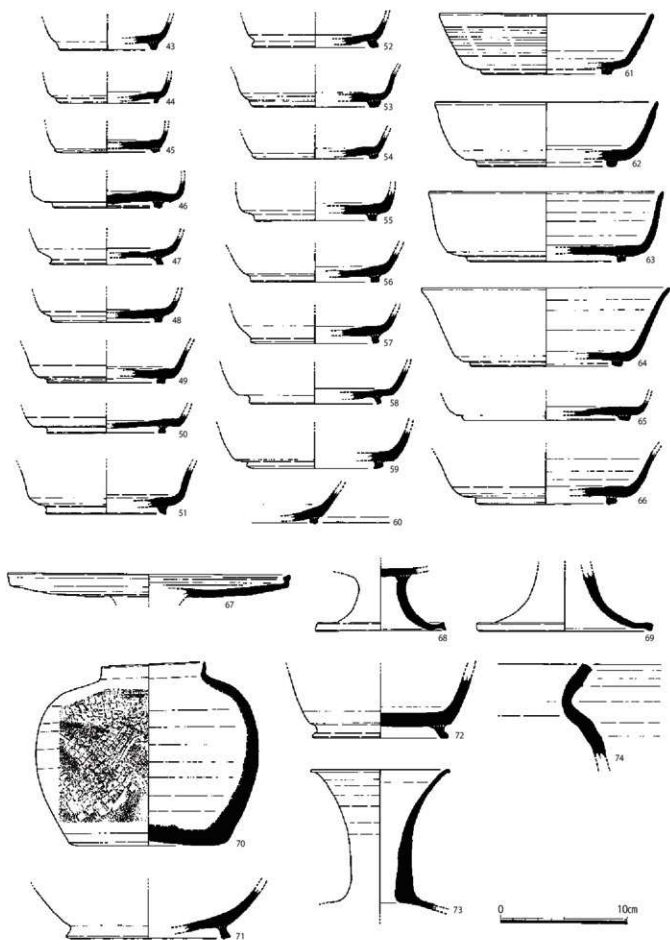


Fig. 158 322SK100 暗黄色土出土遺物実測図② (1/3)

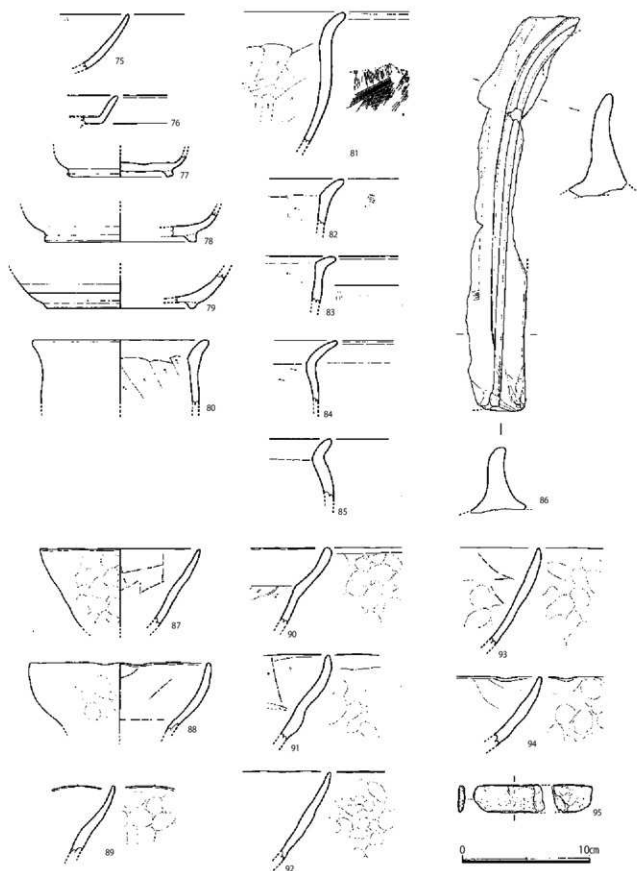


Fig. 159 322SK100 暗黄色土出土遺物実測図③ (1/3)

大坏 c (61 ~ 66) 復元口径 17.0 ~ 19.7 cm。断面方形の低い高台を貼付する。内面底部は不定方向のナデ調整。

高坏 b (67) 復元口径 22.4 cm。坏部下半は回転ヘラケズリ。

高坏 (68, 69) 脚部復元径は、68 は 10.4 cm、69 は 14.0 cm。

壺 (70 ~ 72) 70 は口径 8.2 cm、器高 14.3 cm、底径 12.6 cm。底部外面は若干ナデ調整するが、ほぼ未調整である。体部外面は下端がヘラケズリだが、それ以外の内外面は回転ナデ調整で、外面の一部には叩きを施す。色調は灰色を呈する。71 は復元高台径 13.0 cm。外面下半は回転ヘラケズリ、内面は不定方向のナデ調整。72 は復元高台径 10.8 cm。体部内外面は回転ナデ。

壺 b (73) 口径 11.0 cm。内外面とも回転ナデで、内面は灰被りする。色調は灰色や暗灰色を呈する。

甕 (74) 内外面は回転ナデ、体部内面はナデで、口縁部内面は灰被りする。色調は淡灰色を呈する。土師器

坏 (75) 外面は摩滅するが、内面にはミガキ a が残る。色調は淡橙色を呈する。

坏 c (76 ~ 79) 78 は復元高台径 12.0 cm。外面は橙色、内面は黄白色を呈する。79 は外面下半がヘラケズリで上部はミガキ a、内面はミガキ a を施す。色調は明橙色を呈する。

小甕 (80) 復元口径 13.9 cm。外面摩滅するが、体部内面はヘラケズリである。

甕 (81 ~ 85) 全体として、体部内面はヘラケズリ。外面は 81 ~ 83 がタテハケ。81 は外面に煤が付着する。

甕 (86) 甕の跨の部分である。ナデ調整し、色調は黄橙色を呈するが、煤は付着していない。

製塩土器

燒塩壺 (87 ~ 94) II - b 類。外面は指頭圧痕が明瞭に残る。内面はケズリもしくはナデ調整。色調は橙色を呈する。87 ~ 90 は中位で若干屈曲している。図化したもの以外にも多くの破片が出土している。金属製品

刃物類 (95) 2 片あり、同一個体とみられる。幅 2.25 cm、厚さ 0.5 cm。

322SK100 黄褐色粘土出土遺物 (Fig. 160)

須恵器

蓋 (96, 97) 坏 a と区別が難しい状況だが、内面の調整具合が坏の意識が薄いように思われるため、蓋と推測した。上面は回転ヘラ切り。

蓋 c3 (98, 99) 98 は潰れたツマミを貼付する。外面上半部はヘラ切り調整。99 は外面上半部が回転ヘラケズリである。

蓋 3 (100) 口縁端部は明確な断面三角形をなす。

蓋 c (101, 102) 101 は潰れた擬宝珠のツマミを貼付する。外面上半部は回転ヘラケズリ。102 は回転ナデ調整。

坏 a (103) 底部外面は回転ヘラ切り後若干ナデ調整。

坏 c (104 ~ 110) 復元口径 11.8 ~ 15.1 cm。やや貧弱な高台は貼付する。底部外面は、104 は回転ヘラケズリ。105 は回転ヘラ切り後一部ナデ調整。

高坏 b (111, 112) 復元口径は、111 は 26.8 cm、112 は 27.6 cm。内面回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ。

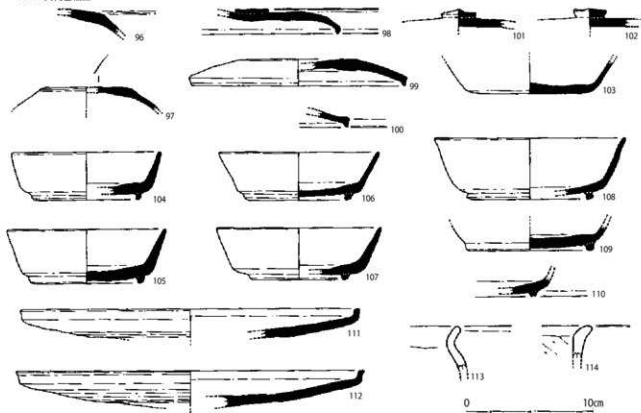
土師器

甕 (113, 114) 113 はく字形の口縁部。114 は肥厚した口縁部である。

322SK100 灰黄色粘土出土遺物 (Fig. 160)

須恵器

SK100黄褐色粘土



SK100灰黄色粘土



Fig. 160 322SK100 黄褐色粘土・灰黄色粘土出土遺物実測図 (1/3)

蓋 3 (115) 内外面とも回転ナデ調整。

坏 c (116) 若干外開きに高台を貼付する。底部内外面はナデ調整。

土師器

坏 c (117) 復元高台径 11.6 cm。摩滅が目立つ。色調は橙黄色を呈する。

322SK105

322SK105 黒褐色土出土遺物 (Fig. 161)

須恵器

蓋 c3 (1) 外面上半部はやや様な回転ヘラケズリ。

蓋 3 (2~6) 口縁端部は、2・3は明確な断面三角形をなす。3の外面上半部は回転ヘラケズリ。

坏 c (7~11) 復元口径 12.6~14.0 cm。

壺 b (12) 復元口径 12.0 cm。内外面とも回転ナデ調整。

土師器

蓋 (13, 14) 13は内外面とも摩滅し調整不明。14は内外面ともミガキ a を施す。

皿 a (15) 外面底部は回転ヘラ切り、内面底部はナデ、その他は回転ナデ調整。

皿 b (16) 内外面とも摩滅し調整不明。色調は淡茶色を呈する。

坏 c (17) 低く小さな高台を貼付する。外面ヨコナデ、内面は摩滅し調整不明。色調は薄茶色を呈する。

高坏 (18) 復元脚部径 12.4 cm。内外面とも回転ナデ調整。色調は淡黄茶色を呈する。

甕 (19~21) 体部外面タテハケ、内面はヘラケズリ調整である。19は復元口径 35.1 cm。20は復元口径 12.2 cm。21は復元口径 14.4 cm。器高 13.9 cm。

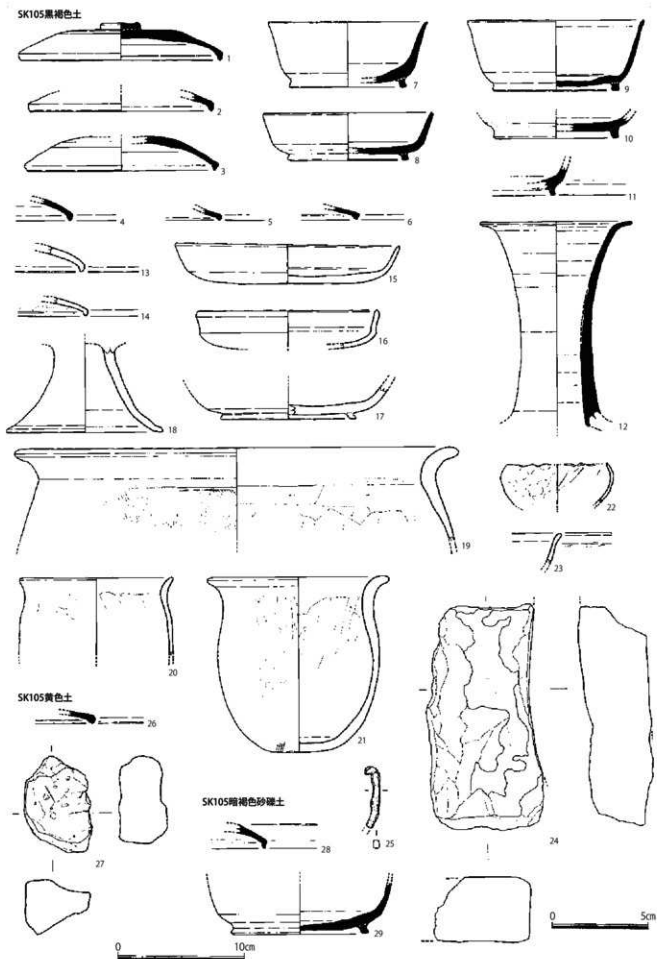


Fig. 161 322SK105 出土遺物実測図 (1/3、石製品は1/2)

手握ね土器

小鉢 (22) 復元口径 8.1 cm。内面ナデ、外面には指頭圧痕が残る。色調は橙色を呈する。

黒色土器 A 類

椀 (23) 内外面ともミガキであるが摩滅する。

石製品

砥石 (24) 3面使用している。現存長 12.0 cm、幅 6.2 cm、厚さ 4.0 cm。砂岩製。

金属製品

鉄釘 (25) 断面方形で、頭部はL字形に曲げるが、先端部は欠損する。現存長 4.85 cm。

322SK105 黄色土出土遺物 (Fig. 161)

須恵器

蓋 3 (26) 口縁端部は肥厚するが、明確に断面三角形はなしていない。

土製品

用途不明土塊 (27) 胎土は精製され、明茶色を呈する。片面だけ小さく浅い穴が穿たれている。側面は面取りされているように見える。

322SK105 暗褐色砂礫土出土遺物 (Fig. 161)

須恵器

蓋 3 (28) 口縁端部はやや長い断面三角形をなす。

坏 c (29) やや深い体部で、内面底部は軽いナデ調整。還元不良で、色調は淡茶色を呈する。

その他の遺構出土遺物 (Fig. 162・163)

須恵器

坏 c (1) 復元口径 13.2 cm。内面は赤色顔料が付着し、底部は平滑である。灰黄色砂土より出土。

緑釉陶器

椀 (2～6) 2は内外面に濃緑色釉を施し、外面にヘラ押圧縦線を施す。須恵質。近江もしくは東海産。灰黄色土より出土。3は円盤高台で、復元底径 7.0 cm。明灰黄色釉を内外面に施す。須恵質。灰黄色土より出土。4は円盤高台で、復元底径 8.3 cm。焼成は土師質で淡黄緑色釉を施すが、剥落日立つ。洛北産。SX045より出土。5は円盤高台で、復元底径 8.3 cm。焼成は須恵質でやや暗い緑色釉を施す。洛西産。SX045より出土。6は淡黄緑色釉を内外面に施すが、剥落が目立つ。土師質。防長産。灰黄色土より出土。

灰釉陶器

壺 (7) 復元高台径 16.4 cm。胎土はやや粗く淡灰色を呈する。内外面とも回転ナデで、外面に暗灰緑色釉の軸垂れがみられる。高台豊付は内側に僅かに段が付く。SK065 黒褐色土より出土。

白磁

蓋 (8) 小片で全形が明確に掴めない。内外面ともやや水色がかった白色釉を施すが、端部は露胎。SK087より出土。

合子もしくは小壺 (9) 復元口径 2.6 cm。灰黄白色釉が外面下半と内面に見られ、それ以外にも化粧土がかかる。SK065 黒褐色土より出土。

瓦類

軒平瓦 (10) 均整唐草文。外区は珠文と鋸歯文が巡る。凸面はヘラケズリと縄目叩き。九歴分類 673a'。灰黄色砂土より出土。

弥生土器

壺 (11) 複合口縁の一部と推測される。胎土は砂粒を多く含み、淡灰黄色を呈する。屈曲部には刻み目を施す。廃土より出土。

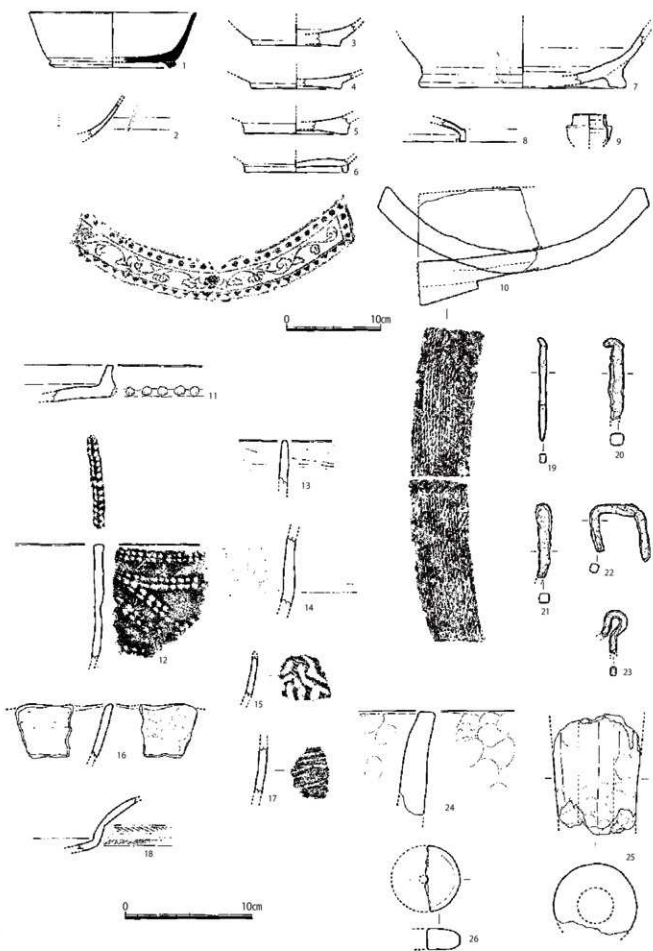


Fig. 162 第322次調査 その他の遺構出土遺物実測図① (1/3、瓦は1/4)

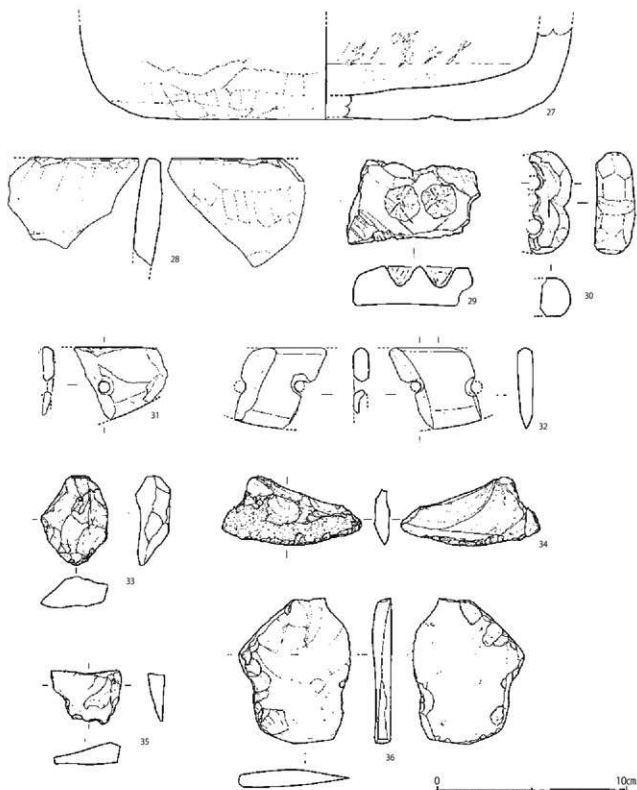


Fig. 163 第322次調査 その他の遺構出土遺物実測図② (1/2)

縄文土器

深鉢 (12～15) 12の胎土は雲母粉を多く含み、暗茶灰色を呈する。内外面ともナデ調整し、外面と口縁端部に刺突文を施す。SX107 黄灰色土より出土。13は、胎土に白色砂粒を多く含み、茶灰色を呈する。内外面に条痕を施す。SB135n (S-115h) より出土。14は、胎土が粗製で、白色砂粒を多く含

み灰茶色を呈する。内面には指頭圧痕や条痕が残る。SA140d (S-115d) 暗褐色砂礫土より出土。15は、胎土が茶褐色を呈し、内面ナデ、外面は沈線間に擬縄文を施す。SB1350 (S-115f) より出土。

鉢 (16、17) 16は口縁部が若干波打つ。色調は暗赤茶色を呈する。外面は条痕を施す。灰黄色砂土より出土。17は、胎土は砂粒を多く含み、淡灰茶色を呈する。内面はナデ、外面には条痕を施す。S-115Kより出土。

浅鉢 (18) 胎土はやや粗く、黄茶色を呈する。屈曲部の外面には2条の細線文を刻んでいる。SK105暗褐色砂礫土より出土。

金属製品

鉄釘 (19～21) 19は長さ8.1cm、幅0.75×0.7cm、断面方形で頭部を僅かに曲げる。SX058より出土。SK065黒褐色土より出土。20は頭部をL字形に曲げる。先端は欠損するが、現存長6.4cm。灰黄色土より出土。21は先端を欠損する。現存長5.85cm。

錠状製品 (22) 断面方形の鉄棒をコ字形に曲げている。SX032黒褐色土より出土。

鉄製金具 (23) 両端を欠損し、輪状に曲げた部分を残すが、全形は不明である。SK065黒褐色土より出土。

土製品

輪羽口 (24、25) 24は内外面ともナデ調整。外面は被熱でひび割れし、暗灰色を呈する。灰黄色砂土より出土。25は径6.6cm。外面はナデ調整し、端部は溶解し灰色に変色する。灰黄色土より出土。

紡錘車 (26) 径5.3cm、厚さ1.65cm。胎土は砂粒が多く、色調は淡黄灰色を呈する。SX001赤褐色土より出土。

石製品

石鍋 (27、28) 27は石鍋の底部で、復元底径19.2cm。内外面ともケズリ加工し、内面は使用によりやや平滑である。外面には煤が付着する。滑石製。灰黄色土より出土。28は内外面ともケズリ調整し、外面は煤が付着する。滑石製。灰茶色土より出土。

滑石製容器 (29) 大きさ7.0×4.5cm、厚さ2.0cm。片面に円錐状の孔が2個彫り込まれている。灰茶色土より出土。

滑石製加工品 (30) 縦5.4cm、厚さ2.0cm、3つの円孔を穿つ。SX074より出土。

石包丁 (31、32) 大きく欠損する。輝緑凝灰岩製。31は廃土より出土。32は灰黄色土より出土。

石核 (33) 縦4.75cm、幅3.5cm、厚さ1.85cm。安山岩製。SF090暗黄褐色礫土より出土。

スクレイパー (34) 自然面が残るそれ以外は大きく剥離させ、長辺端面両面を小刻みに加工し刃部を作り出している。縦3.65cm、横7.4cm、厚さ0.8cm。安山岩製。SD080灰黄色粘土より出土。

剥片 (35、36) 35は大きさ2.85×3.7cm、厚さ1.2cm。安山岩製。SF090暗黄褐色礫土より出土。36は大きさ7.7cm、幅5.9cm、厚さ0.9cm。一部自然面が残る。安山岩製。SD094暗黄灰色粘土より出土。

(5) 小結

今回の調査の主な所見は以下の通りである。

- ・奈良時代、平安時代、近現代と遺構面を3面確認。
- ・近現代の瓦窯（だるま窯）の検出。
- ・11条路を検出。
- ・条坊区画を東西に2分割する溝（SD060）を検出。

○条坊について

第2面では平安時代の遺構が展開する。調査区南辺で検出された溝群（322SD070・080・085・094・096）は、井上条坊案の11条路推定ラインに位置する。SX090については、路面舗装と考えられることから、条路であることは間違いないであろう。

奈良時代の道路側溝は、SD080とSD096のセットと考えられる。そのうち南側側溝（SD096）はSD080より先に埋没した可能性が高く、SD096の上面には舗装（SX090）も行われている。しかし、北側側溝（SD080）も8世紀後半～9世紀初頭までには埋没し、さらに、SD080に切り込んで井戸（SE091・092、10c後～11c前埋没）が造られていることにより、平安前期～中期にかけては、道路の位置が変わっていたことが理解できる。しかし、今回の調査地内で平安中期の道路を想定するような遺構は未確認であることから、道路が存在したと考えた場合、SD094と重複し消滅したか、調査区外南側まで5m以上もズレて道路が施工されていたと考えざるを得ない。その後SD070とSD094を道路側溝とする道路が11世紀に施工され、南側は若干の掘り返し（SD085）があるが、両側溝とも11世紀後半～12世紀前半には埋没している。

また、SD060は井上条坊案の5坊路と6坊路のほぼ中間に位置しており、平安後期の一条坊内を1/2に分割していた区画溝であった可能性が高い。なお、平安後期の建物や井戸などの生活痕跡は調査地内では確認できていない。

第3面については、それを覆う2面の基盤層の時期が調査ミスで特定できないが、ほぼ奈良時代に収まることは間違いない。よって、2面目で検出していた奈良時代の条路（SD080とSD096）とセットになる。

○瓦屋について（Fig. 164）

瓦屋については、今回調査地の土地所有者やその関係者から聞き取り調査を実施し、以下の証言を得ることができた。また、かつて周辺で聞き取り調査を行った際に得られた瓦屋に関する情報も掲載する。

【聞き取り調査日：2008年11月13日】

話者：岡山恒雄（大正14年生、通古賀在住）

・瓦屋は加藤さんがやっていた。終戦になってやめた。北橋さんも瓦屋で終戦後すぐ位にやめた。加藤さんがする前は和田烈英さんがしていた。和田さんがやめて加藤さんに譲った。私の親父が若い頃は瓦の赤土運びを手伝っていた。和田烈英さんの親父が同年代だったので。通古賀にはいつも2軒の瓦屋があった。瓦の粘土は今の田中の森の辺りで、あの辺が赤土を取った跡である。知で粘土を取ったから田にした。だから「ヂサゲ田」と言っていた。

【聞き取り調査日：2018年2月20日】

話者：北橋セツ子（昭和17年生）、水越紗代子（昭和21年生）、北橋美智子（昭和10年生）

（証言）

〔燃料・材料〕

・昔の通古賀は木が少なかった。薪がなかった。薪を大佐野や内山、竜門神社の山を買って薪を得ていた。
・通古賀には薪になるものがないため、山を買っていることもあり、根こそぎ持って行った。そのため

通古賀の人は根ざらい持っていくため笑いものになった。

- ・南ヶ丘までばあちゃん達が馬車でタキモンをとりに行っていた。
- ・粘土は大佐野・向佐野方面の田んぼとされる。馬車でとりに行っていた。

[瓦屋・作業]

- ・この場所は瓦屋という屋号であった。
- ・操業開始年については詳しい時期は不明である。
- ・最後の操業については、1952年から1958年あたりか。
- ・最近書きだした家系図に北橋徳三郎（瓦屋）の記述あり。徳三郎さんは、家系図では寛政2年までさかのぼることができる。
- ・敷地内には瓦窯は1基のみで、敷地内には職人が住む家が2カ所あった。
- ・農業をしながら、一年を通じて瓦造りをしていた。農業の最中は瓦職人に作業を任せていた。
- ・当時瓦職人さんが2人いた。
- ・窯は両側に燃やす口（焚口）があった。瓦を入れる入口は南に開いており、反対側には小さな窓があった。煙突はなかったため、小さな窓が煙突の代わりであったと思う。父は窯から出る煙や火の具合を見ていた。
- ・窯は両脇から薪で焚いていた。
- ・火の加減は父がいつも見ていた。
- ・窯の隣には石炭やコークスが置かれていた。焚口が2カ所あるため、左右に燃料となる石炭とコークスが置かれていたと思う。
- ・窯から出たガラ（粉炭）はすぐ火力があり、そのガラでお客さんが来たら七輪でお湯を沸かしていた。
- ・機械で瓦を作った後は、乾かさないといけない。庭に干した瓦を踏んだら製品にならないため遊んではいけないといわれていた。子供が入らないように縄を引いていた。
- ・瓦窯から瓦を取り出した後は、とても暖かかった。窯の中に入って遊んだりした。
- ・瓦窯のあった敷地には粘土置き場があった。
- ・粘土置き場は深く落ち込んでいて、1m以上もの深さがあった。粘土を取り上げた際は、プールのようになっていた。
- ・粘土置き場の横には瓦を作る機械があった。その横には瓦を乾かす広い小屋があった。
- ・機械で作られた瓦は、直接日光に当たると割れてしまうため、小屋の中で乾かした。小屋は風通しを良くする構造になっていた。
- ・瓦を干した小屋は、私たちは「職場」と言っていた。子供の頃はかくれんぼをするのにとってもいい場所であった。瓦を陰干している時は遊べないが、瓦がないときに遊んでいた。機械で瓦を作り、小屋で陰干しし、その後小屋の外に出して乾燥させていたが、夕立でも降ろうものなら総動員で小屋の中にしまい入っていた。小屋の中は風通しがよくとても涼しかった。屋根の付いた広い小屋だった。
- ・南側の道路は今の道路よりも細く、馬車が一台通ればよかった。瓦窯と道路の間には、焼きあがった瓦を置くための棚が設けられ、そこに並べられていた。棚は2段になっていた。
- ・敷地にゴミ穴があった記憶はない。

[供給先]

- ・瓦については父がバイクで回って注文を受けていた。
- ・注文が来たら馬車で瓦を運んで行った。
- ・通古賀、水城村、二日市に持って行っていた。水城小学校の瓦にも供給し、瓦も貰っていた。

〔その他〕

- ・通古賀にはもう1軒瓦屋があった。北橋家から南東に位置する加藤家に瓦窯があり、瓦を作っていた。元々は和田家が瓦を作っていたが、瓦職人として島根県から来ていた加藤家に瓦窯を託した。
- ・窯の北側にもともと道が東西に通っていたが、後に窯の南側に道が付け変わった。

以上のように、瓦窯については窯の構造だけでなく、敷地内の作業スペースや、作業の工程についても知ることができた。聞き取り調査をもとに瓦屋の配置や作業工程をまとめると、以下の通りである。

広い敷地内の西側に自宅と納屋や瓦職人の家が並び、東側にも瓦職人の家が建っていた。敷地内の中央南側に、瓦窯が位置し、北側には瓦の材料となる粘土置き場があった。粘土は大佐野・向佐野方面から調達し、調達された粘土は1m以上も掘った粘土置き場に、土の流出や乾燥しないように置かれる。粘土置き場のすぐ西隣には瓦を作る機械があり、ここで瓦が形作られた。機械は小屋の中にあり、形作られた瓦はヒビが入らないように、機械の横に並べられ、小屋の下で陰干しが行われる。陰干しが終わると次に敷地内の中央で天日干しを行い乾燥させる。十分乾燥させた後、瓦窯で焼成される。焼成が終わった瓦は窯から取り出され、窯の入口の南側に設けられた棚に陳列された。その後、通古賀とその周辺地域に配達されていった。

また、瓦造りは年中行われ、農業をしながら瓦を製作していた。農業をしている間も瓦職人が作業を行っていたという。聞き取り調査より、現在の土地所有者の5代前に徳三郎という人物がかつて瓦窯を操業しており、瓦屋と言う屋号で呼ばれていたことを家系図より確認している。しかし、徳三郎氏が活動していた年代や、徳三郎氏の代よりも瓦造りが通るかは確認することができず、操業開始時期を確認することができなかった。しかし、最後の操業については、1952～1958年頃と思われる。徳三郎氏に関係するものとして322SX009より「通瓦徳」と刻印された瓦が出土している。「通」は地名である通古賀、「徳」は徳三郎氏の名を示しており、製造場所と製作者の名を表しているものと考えられる。



Fig. 164 瓦屋の配置復元図



Fig. 165 第322次調査 第1面遺構略測図 (1/150)

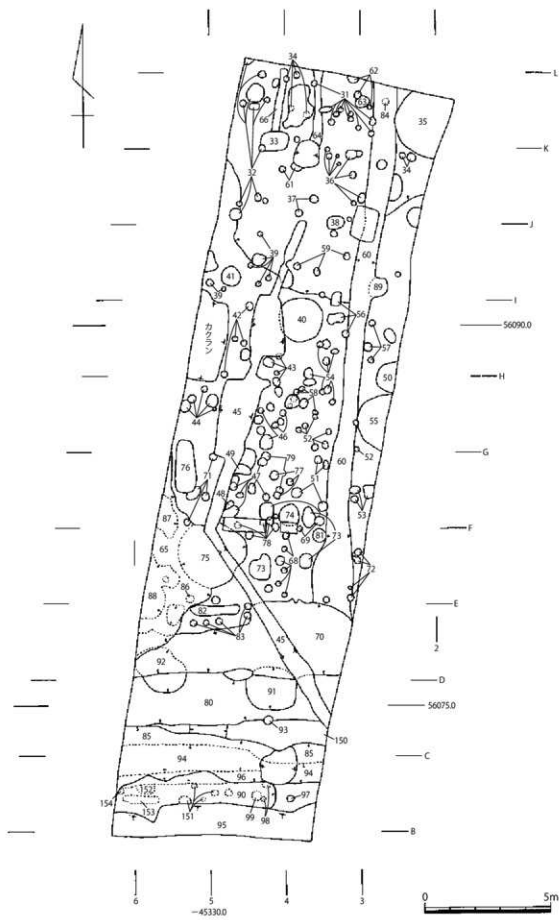


Fig. 166 第322次調査 第2面遺構略測図 (1/150)

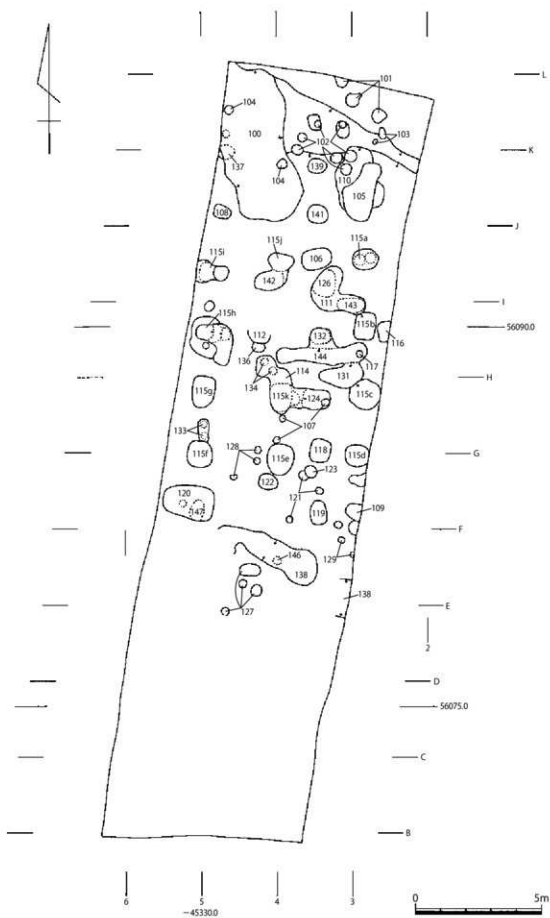


Fig. 167 第322次調査 第3面遺構略測図 (1/150)

表33 第322次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土・切り合い等	時期	地区
1	322S3001	だるま窯		近現代	B・C3・4
2		ピット群	灰色土	近現代	B9
3		ピット	黒灰土 近現代の釘	近現代	C5
4		堆積層	黒灰土上 S3009の埋土	近現代	B5
5		堆積層	灰褐色土	近現代	B5・6
6		土坑	黒灰土上	近現代	C4
7		堆積層	褐色土 硬化面	近現代	A・B5
8		堆積層	赤灰土上炭黒じり S3009の埋土	近現代	B・C5
9	322S3009	作業場	赤灰土上	近現代	B・C5
10	322S3001	だるま窯	だるま窯東側納骨部	近現代	B・C3
11		土坑	黒褐色土	近現代	B5
12		ピット群	灰褐色土	近現代	B・C5
13		ピット	灰褐色土	近現代	B5
14		臥床?	黄褐色土	近現代	B・C5・6
16		ピット		近現代	C5
17		土坑		近現代	J2
31		ピット群	一部がS8156の柱穴 黒褐色土	9世紀	K3・4
32	322S3032	ピット群	黒褐色土	8世紀末～平安初期	K4・5、J5
33		土坑		平安前期	K4
34		ピット	黒褐色土	平安時代	J3K3
35	322S3035	土坑	S-60～35ではなくS-35～60か	X期前後	J・K1・2
36		ピット群	一部がS8156の柱穴 黒褐色土	平安初期?	J3
37		ピット群	黒褐色土	平安後期	J3
38		ピット	黒褐色土	8世紀後半	J3
39		ピット	黒褐色土	平安時代	I4
40	322S040	井戸	黒褐色土	11世紀中頃～後半	B3
41		土坑か	黒褐色砂礫土	平安時代	I4
42		ピット群	一部がS8156の柱穴 黒褐色土	平安中期?	B4
43		ピット群	黒褐色土	平安時代?	B4
44		ピット群	黒褐色土	平安前期?	G4・5
45	322S3045	覆瓦(配管)		現代	F5
46		ピット群	黒褐色土	平安時代	G4
47		ピット群	黒褐色土	平安時代	F4
48		ピット	黒褐色土	古代	F4
49		ピット	黒褐色土	8世紀後半	F4
50	322S3050	土坑	灰褐色土	9世紀半前後	G2
51		ピット群	黒褐色土	平安時代	F3
52		ピット群	黒褐色土	平安中期～後半	G3
53		ピット群	黒褐色土	平安時代	F2・3
54		ピット群	黒褐色土	平安前期	G3
55	322S3055	土坑	灰褐色土	9世紀中頃～後半	G2
56		ピット群	一部がS8156の柱穴 黒褐色土	奈良末～平安初期?	B3
57		ピット群	黒褐色土	平安前期	B2
58	322S3058	ピット群	黒褐色土	平安前期～中期	G3
59		ピット群	一部がS8156の柱穴 黒褐色土	平安後期?	J3
60	322S3060	溝	黄褐色土 S-60～35ではなくS-35～60か	X期前後	E・K2・3
61		ピット群	黒褐色土	平安時代	J3・4
62		ピット群	一部がS8156の柱穴 黒褐色土	平安前期?	K3
63		ピット群	灰黄褐色土	8世紀後半	K2・3
64		溝	灰黄褐色土	8世紀	K3
65	322S3065	土坑	黒褐色土 S-70・75を覆う土	11世紀後半～12世紀前半	D～F4・5
66		溝	灰黄褐色土 S-66～33	奈良時代?	K4
67		覆瓦		現代	E4
68		ピット群	灰黄褐色土	平安時代	F4
69		ピット群	灰黄褐色土	平安時代	E3
70	322S070	溝	暗黄褐色土 S-60～70、S-91・92～70	X期前後	D3～6
71		ピット群	灰黄褐色土	平安時代	F4・5
72		ピット群	灰黄褐色土	奈良時代	E3
73		ピット	黄灰土上	8世紀後半	E・F3・4
74	322S3074	ピット	黄灰土上	平安時代?	F3・4
75	322S3075	土坑	黒褐色土 S-75～65	X期前後	E4・5
76		溝	黒褐色土	平安時代?	F・G5
77		ピット群	黒褐色土	8世紀後半	F3・4
78		ピット群	灰黄褐色土	平安時代	E・F4
79		ピット群	灰黄褐色土	奈良時代	F4
80	322S080	溝	S-80～85、S-80～70	8世紀後半～9世紀初頭	C3～6
81		ピット	灰黄褐色土	8世紀後半	E3
82		溝	黒褐色土	平安後期	D4・5
83		ピット群	黒褐色土	平安後期	D4・5
84		ピット	灰黄色土	平安時代?	K2
85	322S085	溝	S-94～85、S-90～85、S-80～85	11世紀後半～12世紀前半	B3～6

86		ピット	灰黄色土		古代	E5
87	322SK087	土坑	黒褐色土		平安後期?	F5
88		土坑	黒褐色土	S-65の一部の可能性がある	平安後期?	D・E5
89		ピット	黒褐色土	S-89-90	平安中期	I3
90	322SF090	道路	右第11条路路面	S-90-85・95	8世紀末頃施工 11世紀後半～12世紀初頃まで 継続使用	B3～6
91	322SE091	井戸		S-80-91→70	3期	C3・4
92	322SE092	井戸			3期	C・D5・6
93		ピット	灰黄色土		奈良時代?	C4
94	322SD094	溝		S-94-85	1期	B・C3～6
95		覆土			昭和～	A・B3～6
96	322SD096	溝	暗黄褐色土		8世紀後半	B4～6
97		ピット	暗黄褐色礫土		古代	B3
98		ピット群	暗黄褐色土		奈良時代?	B4
99		ピット	暗黄褐色礫土		古代	B4
100	322SK100	土坑	暗黄色土		8世紀後半前後	J・K3・4
101		ピット群	灰褐色土		古代	K2・3
102		ピット群	灰褐色土		8世紀	J・K3
103		ピット群	灰褐色土		平安後期	K2
104		ピット	黒褐色土		8世紀?	J4・K5
105	322SK105	土坑	黒褐色土	S-110-105	8世紀前半～中頃	J2・3
106		柱穴?	暗黄色土		古代	I3
107	322SK107	ピット群	黄灰色土		古代	G3
108		ピット	暗黄色土		古代	J4
109	322SA140a	柱穴	暗黄褐色土		奈良時代?	F3
110	322SK105	土坑	S-105と同一		8世紀前半～中頃	J2・3
111		窪み		S-126・143→111	古代	H・I3
112		土坑	暗褐色土		古代	B4
113		土坑	暗黄色土			C・H4・5
114		窪み	暗黄色土	S-115a・124-114	古代	G・H3・4
115	322SR135 322SA140	竪立柱建物と櫓列			8世紀中頃～後半	F-12～6
116		柱穴か	暗黄色土			H2
117		ピット	赤褐色土			H2
118		柱穴	暗黄褐色土		8世紀後半	F・G3
119	322SB135g	柱穴	暗黄色土			F3
120	322SB135h	柱穴	灰黄褐色土	S-147→120	8世紀後半～9世紀初頃	F4・5
121		ピット群	灰褐色土		奈良時代?	F3
122		ピット	暗黄褐色土			F4
123		ピット	暗褐色土		8世紀後半	F3
124	322SB135e	柱穴	暗黄色土	S-124-114	8世紀	G3
125		竪立柱建物(梁)				
126	322SB135c	柱穴	暗黄色土	S-126-111		I3
127		ピット群	暗黄色土	一部SB135f		D・E4
128		ピット	暗黄色土		8世紀	F・G4
129		ピット群	暗黄色土			E3
130		土坑	暗黄色土		8世紀前半～中頃	G・H2・3
131		土坑	暗黄色土			H3
132	322SB135d	柱穴	暗黄色土		8世紀	G5
133		ピット群	暗黄色土		奈良時代?	H4
134		ピット群	暗黄色土		8世紀中頃～後半	E-1・3～5
135	322SB135	竪立柱建物				
136		ピット	暗黄色土		奈良時代?	H4
137		ピット	暗黄色土			J・K4
138	322SD138	溝	暗黄褐色土	底面にSB135h	奈良時代?	D・E2・3
139		柱穴	暗黄色土			J3
140	322SA140	櫓列			8世紀中頃～後半	F-12
141		柱穴	暗黄色土			J3
142	322SB135b	柱穴	暗黄色土		奈良時代	I4
143		窪み	黄灰色土			H2・3
144		土坑	黄褐色土			H2・3
145		ピット	灰黄褐色土			E3
147	322SB135k	柱穴	黄灰色土	S-147-120	8世紀後半	F4・5
150	322SF150	道路	SD070とSD085・094の間		平安後期	C3～5
151		ピット群	暗黄褐色土	S-151-90		B4・5
152		土坑	暗黄褐色土	S-152-90		B5
153		溝	暗黄褐色土	S-153-90		B5
154		ピット	暗黄褐色土	S-154-90		B5
155		竪立柱建物?	柱間や柱穴の深さがバラバラ		8世紀後半	E-C2～4
156	322SB156	竪立柱建物			平安前～中期?	H～K2～4

5-141 輝黄色土	
土 師	磁磁片
5-142 輝灰色土	
土 師	磁磁片
5-143 輝黄色土	
須 惠	磁蓋
土 師	磁片、甕
5-143	
調 文 土	磁磁片?
白 製	品製片(交出前)
5-146	
土 師	磁片
5-147	
須 惠	磁蓋、蓋3、坪、坪c、甕
土 師	磁片c、甕、磁蓋品
瓦	磁瓦(無文)
5-151	
須 惠	磁片
土 師	磁蓋
5-152	
須 惠	磁片c、甕、甕、甕、鉢
土 師	磁片c、甕、磁片
瓦	磁瓦
瓦	磁瓦(調製し)
5-153	
須 惠	磁片c、甕、磁片
土 師	磁片c、甕、磁片
白 製	品製片(交出前)
5-154	
須 惠	磁蓋3、坪、坪c
土 師	磁片、甕
鎌 州 窯 系 磁磁片(1)	
灰黄色土	
須 惠	磁蓋、蓋3、坪、坪c、高坪、甕
土 師	磁片、坪a、丸底坪、甕、鉢?
土 師 質 土	部大鉢?
須 惠 土 師	磁磁片
須 惠 土 師	磁磁片
鎌 州 窯 系 磁磁片(1-4(1))	
瓦	磁瓦(平瓦(横文))
金 属 製	品家洋、鉄釘
石 製	品玉石、平玉石
土 製	品陶
灰黄色土	
須 惠	磁蓋1、蓋3、蓋c、坪、坪c、坪c、甕a、甕、甕
土 師	磁蓋、小皿a(+?)、丸底坪a、皿a、陶、陶、甕、甕、存、
瓦	磁瓦、つまみ、鉄釘具
須 惠 土 師	磁磁片
黄色土 師土 製陶	
黄色土 師土 製陶	
土 師 質 土	部七輪
瓦	磁瓦
瓦	磁瓦
金 属 製	品磁片、レンガ
須 惠	磁蓋、木鉢、タイル
鎌 州 窯 系 磁磁片(1)	
鎌 州 窯 系 磁磁片(1)	
鎌 州 窯 系 磁磁片(1)	
白 製	品陶(1-1)、坪c(1)
白 製	品陶(1-1)、坪c(1)
瓦	磁瓦(横文、無文)、丸瓦(横文、無文)、横し瓦、瓦玉
石 製	品玉石、石陶、滑石製小笠形鉢、磁片(調製石)
土 製	品土陶
金 属 製	品磁片、鉢?
セ	の 磁石

灰黄色土	
須 惠	磁蓋、蓋1、蓋2、蓋3、蓋c、大甕、坪、坪a、坪c、高坪、皿a、甕、磁片
土 師	磁蓋、小皿a(+?)、小皿a、坪、坪a(+?)、坪c、坪c、丸底坪a、陶、甕、鉢、磁片、鉢、磁片、カマド、鉄釘具
製 成 土	部七輪
黄色土 師土 製陶	
黄色土 師土 製陶	
瓦	磁瓦
瓦	磁瓦
金 属 製	品家洋、鉄釘
石 製	品玉石、平玉石
土 製	品陶
赤褐色土	
須 惠	磁片、甕
土 師	磁片
製 成 土	部七輪
黄色土 師土 製陶	
黄色土 師土 製陶	
瓦	磁瓦
瓦	磁瓦
金 属 製	品家洋、鉄釘
石 製	品玉石、平玉石、磁片(調製石)、磁石、埋石片
土 製	品土陶、陶、磁石口
セ	の 磁石

赤褐色土	
須 惠	磁片、甕
土 師	磁片
製 成 土	部七輪
黄色土 師土 製陶	
黄色土 師土 製陶	
瓦	磁瓦
瓦	磁瓦
金 属 製	品家洋、鉄釘
石 製	品玉石、平玉石、磁片(調製石)、磁石、埋石片
土 製	品土陶

灰黄色砂土	
須 惠	蓋1、蓋2、蓋3、蓋c、坪、坪a、坪c、高坪、皿a、甕、磁片
土 師	磁蓋、坪、坪c、高坪、甕、鉄釘具
製 成 土	部七輪
鎌 州 窯 系 磁磁片(1-2(1))	
調 文 土 師	磁片
瓦	磁瓦(横文)
瓦	磁瓦(横文、横し瓦(平瓦)、横し瓦(平瓦)、横し瓦(平瓦)
金 属 製	品家洋
石 製	品埋石加石、平玉石、石包丁
土 製	品陶石口、土陶

須 惠	
須 惠	磁蓋3、甕c、大甕、坪、坪c、皿a、甕、甕、磁片
土 師	磁片a(+?)、坪a(+?)、坪c、丸底坪c、陶、甕、磁片
黄色土 師土 製陶	
土 師 質 土	部七輪
須 惠 土 師	磁磁片、土甕
須 惠	磁蓋
白 製	品陶(1-1)、坪c(1)、磁磁片(1)
瓦	磁瓦(横文、横し瓦(平瓦))
金 属 製	品家洋
石 製	品玉石、埋石片
土 製	品不明品

出土地点不明	
須 惠	磁片a
鉢類・レンダ	
須 惠	磁片c、高坪、甕
土 師	磁磁片
瓦	磁瓦(横文)、丸瓦(無文)

表土	
須 惠	磁片c、甕
土 製	品陶
埋土	
須 惠	磁蓋3、蓋c、蓋3、坪、坪a、坪c、甕、甕
土 師	小皿a(+?)、坪、坪a(+?)、坪c、坪c、高坪、丸底坪、陶、甕、鉢
黄色土 師土 製陶	
黄色土 師土 製陶	
須 惠 土 師	磁磁片
白 製	品陶片(1)
瓦	磁瓦
瓦	磁瓦(二重横文)、横し瓦(平瓦)
石 製	品玉石

表35 第322次調査 土器供辦具計測表

A:内径7.5 B:取付位置

B-200褐色土								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-001	Fig.150-1	18.0	3.1~4.1	7.7	○
	小皿	へつ	R-019	Fig.150-2	18.2	3.2	7.8	○
	小皿	へつ	R-019	Fig.150-3	18.0	6.8	6.0	×
	小皿	へつ	R-019	Fig.150-4	17.0	1.2	6.0	○
	小皿	へつ	R-017	Fig.150-5	17.0	1.2	6.0	○
	小皿	へつ	R-002	Fig.150-6	17.2	1.1	6.2	○
	小皿	へつ	R-003	Fig.150-7	17.1	1.2	6.4	○
	小皿	へつ	R-009	Fig.150-8	18.2	6.1	7.0	○
	小皿	へつ	R-004	Fig.150-9	17.0	6.0	6.0	○
	小皿	へつ	R-005	Fig.150-10	17.0	6.8	7.0	○
	小皿	へつ	R-002	Fig.150-11	17.0	6.1	6.8	○
	小皿	へつ	R-008	Fig.150-12	17.0	3.4	6.4	○
黒色土器類	瓶	へつ	R-007	Fig.150-13	17.0	3.4	6.4	○
	瓶	へつ	R-006	Fig.150-14	17.0	3.1	6.4	○
	瓶	へつ	R-001	Fig.150-15	17.0	3.1	6.4	○
	瓶	へつ	R-002	Fig.150-16	16.0	5.4	7.0	○
	瓶	へつ	R-014	Fig.150-17	16.0	5.4	7.0	○
	瓶	へつ	R-003	Fig.150-18	17.0	6.2	6.4	○

B-250褐色土								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-001	Fig.150-20	18.0	1.2	6.0	○
	小皿	へつ	R-004	Fig.150-21	18.0	6.9	6.2	○
	瓶	へつ	R-002	Fig.150-22	17.0	3.2	7.1	○
	瓶	へつ	R-002	Fig.150-23	16.0	2.6	6.4	○
黒色土器類	瓶	へつ	R-003	Fig.150-24	17.0	3.1	6.4	○

B-400褐色土								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-001	Fig.148-1	17.0	3.4	6.0	○
	丸底片	へつ	R-002	Fig.148-2	17.0	3.3	6.0	○

B-400褐色砂土								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-002	Fig.146-6	16.0	3.7	6.0	○
	小皿	へつ	R-001	Fig.146-4	16.0	3.7	6.0	○
	丸底片	へつ	R-003	Fig.146-7	16.0	3.6	6.0	○

B-400褐色砂									
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B		
土器類	小皿	へつ	R-006	Fig.149-9	16.2	1.1	6.2	○	
	小皿	へつ	R-005	Fig.149-10	16.2	1.1	6.2	○	
	小皿	へつ	R-002	Fig.149-11	16.2	1.2	6.0	○	
	小皿	へつ	R-001	Fig.149-12	16.0	1.2	6.0	○	
	丸底片	へつ	R-001	Fig.149-13	15.4	3.6	6.0	○	
	丸底片	へつ	R-002	Fig.149-14	16.0	3.7	6.0	○	
	丸底片	へつ	R-007	Fig.149-15	16.0	3.6	6.0	○	
	黒色土器類	瓶	へつ	R-007	Fig.149-16	16.0	3.6	6.0	○
		瓶	へつ	R-002	Fig.149-17	16.0	3.6	6.0	○
		瓶	へつ	R-014	Fig.149-18	16.0	3.6	6.0	○

B-400黒褐色砂								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	丸底片	へつ	R-001	Fig.148-18	16.0	2.9	6.0	○

B-42								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	瓶	へつ	R-002	Fig.151-1	17.0	2.5	6.0	○
黒色土器類	瓶	へつ	R-002	Fig.151-2	17.0	2.5	6.0	○

B-500褐色土								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-002	Fig.150-27	17.0	3.3	6.0	○
	小皿	へつ	R-004	Fig.150-28	17.0	3.3	6.0	○
	小皿	へつ	R-001	Fig.150-29	17.0	2.6	6.0	○
	小皿	へつ	R-002	Fig.150-30	17.0	2.6	6.0	○
	小皿	へつ	R-002	Fig.150-31	17.0	1.7	6.0	○

B-500褐色土								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-012	Fig.151-1	17.0	3.9	6.7	○
	小皿	へつ	R-007	Fig.151-2	17.0	1.0	7.0	○
	小皿	へつ	R-011	Fig.151-3	17.0	3.3	6.0	○
	小皿	へつ	R-014	Fig.151-4	17.0	6.6	6.6	○
	小皿	へつ	R-006	Fig.151-5	17.0	1.9	6.0	○
	小皿	へつ	R-006	Fig.151-6	17.0	1.9	6.0	○
	小皿	へつ	R-008	Fig.151-7	17.0	2.7	7.0	○
	小皿	へつ	R-013	Fig.151-8	16.0	7.2	6.0	○
	小皿	へつ	R-009	Fig.151-9	17.0	1.5	6.0	○
	小皿	へつ	R-002	Fig.151-10	17.0	2.7	6.0	○
	小皿	へつ	R-001	Fig.151-11	17.0	3.1	6.0	○
	小皿	へつ	R-001	Fig.151-12	17.0	3.1	6.0	○
小皿	へつ	R-015	Fig.151-13	17.0	3.7	6.0	○	

B-500褐色砂								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-015	Fig.149-45	16.0	1.0	6.0	○
	小皿	へつ	R-012	Fig.149-46	16.0	1.0	6.0	○
	小皿	へつ	R-012	Fig.149-47	16.0	1.0	6.0	○
	小皿	へつ	R-014	Fig.149-48	16.0	1.4	2.6	○
	小皿	へつ	R-002	Fig.149-49	16.0	1.4	7.0	○
	小皿	へつ	R-006	Fig.149-50	16.0	1.2	6.0	○
	小皿	へつ	R-007	Fig.149-51	16.0	1.2	6.0	○
	小皿	へつ	R-001	Fig.149-52	16.0	1.3	7.0	○
	小皿	へつ	R-005	Fig.149-53	16.0	1.3	7.0	○
	小皿	へつ	R-004	Fig.149-54	16.0	1.9	6.0	○
	小皿	へつ	R-016	Fig.149-55	16.0	3.1	6.0	○
	丸底片	へつ	R-003	Fig.149-56	16.0	3.1	6.0	○
丸底片	へつ	R-010	Fig.149-57	16.0	3.9	6.0	○	
丸底片	へつ	R-008	Fig.149-58	16.1	4.3	6.0	○	
丸底片	へつ	R-011	Fig.149-59	16.0	3.6	6.0	○	

B-600褐色土								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-015	Fig.150-1	18.0	1.1	7.3	○
	小皿	へつ	R-003	Fig.150-2	18.0	6.0	6.4	○
	小皿	へつ	R-004	Fig.150-3	18.0	1.0	7.0	○
	小皿	へつ	R-041	Fig.150-4	18.0	1.3	7.5	○
	小皿	へつ	R-002	Fig.150-5	18.0	6.8	6.8	○
	小皿	へつ	R-002	Fig.150-6	18.0	6.4	6.8	○
	小皿	へつ	R-028	Fig.150-7	18.0	1.3	7.0	○
	小皿	へつ	R-001	Fig.150-8	18.0	1.4	7.3	○
	小皿	へつ	R-019	Fig.150-9	18.0	1.4	7.2	○
	小皿	へつ	R-029	Fig.150-10	18.0	1.5	7.2	○
	小皿	へつ	R-001	Fig.150-11	18.0	1.5	7.2	○
	小皿	へつ	R-004	Fig.150-12	18.0	1.1	7.0	○
小皿	へつ	R-029	Fig.150-13	18.0	1.1	7.0	○	
小皿	へつ	R-001	Fig.150-14	18.0	1.5	7.0	○	
小皿	へつ	R-002	Fig.150-15	18.0	1.2	7.0	○	
小皿	へつ	R-001	Fig.150-16	18.0	1.7	7.0	○	
小皿	イト	R-013	Fig.150-17	17.0	6.9	7.0	×	
小皿	イト	R-014	Fig.150-18	18.0	6.9	7.0	○	
小皿	へつ	R-003	Fig.150-19	18.0	6.3	7.0	○	
丸底片	へつ	R-003	Fig.150-20	18.0	3.3	6.4	×	
丸底片	へつ	R-016	Fig.150-21	17.0	3.9	6.4	○	
丸底片	へつ	R-002	Fig.150-22	17.0	3.1	6.4	○	
丸底片	へつ	R-003	Fig.150-23	17.0	3.3	6.4	○	
丸底片	へつ	R-006	Fig.150-24	16.2	3.9	6.4	×	
丸底片	へつ	R-014	Fig.150-25	16.0	3.3	6.4	○	
丸底片	へつ	R-025	Fig.150-26	16.0	3.1	6.4	○	
丸底片	へつ	R-019	Fig.150-27	17.0	4.9	7.5	○	

黒色土器類								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	瓶	へつ	R-007	Fig.150-25	17.0	2.8	6.4	○
	瓶	へつ	R-008	Fig.150-26	16.0	3.3	6.4	○
丸底片	へつ	R-001	Fig.150-27	16.0	3.4	6.4	○	
	へつ	R-008	Fig.150-28	16.0	3.2	6.4	○	
丸底片	へつ	R-002	Fig.150-29	16.0	2.9	6.4	○	
	へつ	R-002	Fig.150-30	16.0	2.9	6.4	○	

B-700褐色土								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-012	Fig.141-9	16.0	1.1	6.7	-
	小皿	へつ	R-002	Fig.141-10	16.0	6.9	7.7	-
	小皿	へつ	R-009	Fig.141-11	16.0	1.2	6.7	-
	小皿	へつ	R-008	Fig.141-12	16.0	1.2	7.0	-
	小皿	へつ	R-001	Fig.141-13	16.0	3.6	7.0	-
	小皿	へつ	R-007	Fig.141-14	16.0	1.4	7.0	-
	丸底片	へつ	R-003	Fig.141-15	15.0	2.6	6.0	-
	丸底片	へつ	R-013	Fig.141-16	15.0	2.6	6.0	-
	丸底片	へつ	R-014	Fig.141-17	15.0	3.7	6.0	-
	丸底片	へつ	R-022	Fig.141-18	15.0	2.9	6.0	-
	丸底片	へつ	R-015	Fig.141-19	15.0	2.9	6.0	-
	丸底片	へつ	R-005	Fig.141-20	15.0	3.2	6.0	-
丸底片	へつ	R-010	Fig.141-21	15.0	6.1	7.7	-	

B-700褐色砂								
種別	器種	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A B	
土器類	小皿	へつ	R-001	Fig.142-1	16.0	1.2	6.2	-
	小皿	へつ	R-002	Fig.141-23	16.0	1.8	6.0	-
丸底片	へつ	R-005	Fig.141-24	16.0	2.7			

5-15時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-001	Fig.152-21	18.0	1.1	0.0	○	○
			E-001	Fig.152-24	1.2	0.7	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-001	Fig.152-25	15.2	4.2	0.0	○	○
			E-004	Fig.152-26	2.0	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-005	Fig.152-27	1.9	0.7	-	-	
			E-007	Fig.152-28	3.2	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-008	Fig.152-29	15.0	4.1	0.0	○	○

5-17時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-001	Fig.152-30	1.1	-	-	-	-
			E-002	Fig.152-31	15.2	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-002	Fig.152-32	-	1.7	6.9	-	○

5-17時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-008	Fig.152-34	0.0	1.0	0.0	-	○
			E-007	Fig.152-35	18.0	1.1	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-004	Fig.152-36	15.0	3.7	0.0	○	○
			E-005	Fig.152-37	15.0	3.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-006	Fig.152-38	15.0	3.0	0.0	-	
			E-001	Fig.152-39	15.0	3.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-006	Fig.152-40	15.0	3.0	0.0	-	
			E-006	Fig.152-41	-	3.2	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-010	Fig.152-42	14.0	4.0	0.0	-	
			E-011	Fig.152-43	15.0	4.4	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-009	Fig.152-44	3.7	6.7	-	-	

5-20時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-042	Fig.152-1	1.0	0.0	-	-	
			E-021	Fig.152-2	1.0	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-007	Fig.152-3	0.0	0.0	-	-	
			E-008	Fig.152-4	1.2	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-040	Fig.152-5	1.0	0.0	-	-	
			E-023	Fig.152-6	1.2	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-024	Fig.152-7	1.2	0.0	-	-	
			E-022	Fig.152-8	0.0	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-039	Fig.152-9	1.5	0.0	-	-	
			E-038	Fig.152-10	1.0	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-034	Fig.152-11	12.0	3.3	0.0	○	
			E-032	Fig.152-12	1.2	0.7	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-033	Fig.152-13	1.2	0.0	-	-	
			E-019	Fig.152-14	11.0	3.0	0.0	○	
土曜線	丸森	へう	E-016	Fig.152-15	12.0	4.2	0.0	○	
			E-009	Fig.152-16	12.0	4.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-018	Fig.152-17	11.0	4.0	0.0	○	
			E-017	Fig.152-18	2.4	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-014	Fig.152-19	1.0	0.0	-	-	
			E-015	Fig.152-20	1.0	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-017	Fig.152-21	2.2	0.0	0.0	-	
			E-011	Fig.152-22	1.2	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-004	Fig.152-23	2.0	0.0	0.0	-	
			E-003	Fig.152-24	2.1	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-013	Fig.152-25	1.0	0.0	0.0	-	
			E-011	Fig.152-26	1.0	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-010	Fig.152-27	2.2	11.0	0.0	○	
			E-012	Fig.152-28	0.0	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-020	Fig.152-29	6.0	0.0	0.0	-	
			E-025	Fig.152-30	1.2	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-030	Fig.152-31	1.0	0.0	0.0	-	
			E-031	Fig.152-32	1.9	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-013	Fig.152-33	1.5	0.0	0.0	-	

5-21時									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	丸森	へう	E-003	Fig.152-1	1.2	-	-	-	-
			E-002	Fig.152-2	2.5	-	-	-	-
土曜線	丸森	へう	E-001	Fig.152-3	1.1	0.0	0.0	-	

5-20時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-001	Fig.152-14	1.1	0.0	-	○	
			E-002	Fig.152-15	15.0	3.0	11.0	○	
土曜線	丸森	へう	E-003	Fig.152-16	1.0	0.0	-	-	

5-20時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-007	Fig.152-2	10.0	1.3	0.0	-	○
			E-005	Fig.152-3	1.0	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-006	Fig.152-4	3.1	0.0	-	-	
			E-001	Fig.152-5	14.0	3.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-003	Fig.152-6	1.2	0.0	-	-	
			E-001	Fig.152-7	-	3.2	7.4	-	

5-20時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-017	Fig.152-2	-	1.2	-	-	-
			E-001	Fig.152-3	-	0.0	-	-	-
土曜線	丸森	へう	E-018	Fig.152-4	-	1.0	-	-	
			E-002	Fig.152-5	-	1.1	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-004	Fig.152-6	-	1.2	0.0	-	
			E-006	Fig.152-7	-	2.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-005	Fig.152-8	-	1.1	0.0	-	
			E-006	Fig.152-9	-	1.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-019	Fig.152-10	-	3.0	0.0	-	
			E-007	Fig.152-11	-	1.0	10.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-008	Fig.152-12	-	2.2	-	-	
			E-011	Fig.152-13	-	2.1	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-009	Fig.152-14	-	2.0	-	○	
			E-004	Fig.152-15	-	1.5	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-003	Fig.152-16	-	1.2	-	-	
			E-023	Fig.152-17	-	1.2	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-023	Fig.152-18	-	1.0	-	-	
			E-010	Fig.152-20	-	1.0	-	-	

5-20時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-008	Fig.152-2	1.3	0.0	-	-	
			E-001	Fig.152-3	1.3	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-001	Fig.152-4	1.0	0.0	-	-	
			E-002	Fig.152-5	1.0	0.0	-	-	

5-21時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-002	Fig.147-1	10.0	2.0	0.0	○	○
			E-004	Fig.147-2	10.0	1.0	0.0	○	
土曜線	丸森	へう	E-007	Fig.147-3	10.0	2.0	0.0	○	
			E-006	Fig.147-4	11.0	2.0	0.0	○	
土曜線	丸森	へう	E-009	Fig.147-5	11.0	3.0	0.0	○	
			E-008	Fig.147-6	10.0	2.0	0.0	○	
土曜線	丸森	へう	E-010	Fig.147-7	12.7	4.0	0.0	○	
			E-018	Fig.147-8	14.0	3.0	0.0	○	
土曜線	丸森	へう	E-014	Fig.147-9	3.0	0.0	-	-	
			E-011	Fig.147-10	-	3.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-013	Fig.147-11	3.2	0.0	-	-	
			E-010	Fig.147-12	3.2	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-013	Fig.147-13	4.0	0.0	0.0	○	
			E-017	Fig.147-14	2.7	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-018	Fig.147-15	2.7	0.0	0.0	-	

5-21時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-002	Fig.147-21	1.0	0.0	0.0	-	
			E-004	Fig.147-22	1.0	0.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-003	Fig.147-23	1.0	0.0	0.0	-	
			E-001	Fig.147-24	14.0	6.4	0.0	○	

5-21時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-001	Fig.147-25	1.0	0.0	0.0	-	
			E-006	Fig.147-26	11.0	0.7	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-002	Fig.147-27	3.0	0.0	-	-	

5-20時開始地上									
種別	線	種	乗物番号	回番号	口幅	最高	最低	A	B
土曜線	小浜	へう	E-004	Fig.148-1	10.0	1.0	0.0	○	
			E-019	Fig.148-2	10.0	1.4	0.0	○	
土曜線	丸森	へう	E-001	Fig.148-3	10.5	1.0	7.0	○	
			E-011	Fig.148-4	10.0	1.4	0.0	○	
土曜線	丸森	へう	E-018	Fig.148-5	10.0	1.0	0.0	-	
			E-002	Fig.148-6	10.0	1.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-010	Fig.148-7	10.0	1.4	0.0	○	
			E-016	Fig.148-8	10.0	1.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-005	Fig.148-9	10.0	1.0	0.0	-	
			E-017	Fig.148-10	10.0	1.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-006	Fig.148-11	0.0	0.0	-	-	
			E-012	Fig.148-12	10.0	1.0	0.0	-	
土曜線	丸森	へう	E-008	Fig.148-13	11.0	1.0	0.0	-	
			E-007	Fig.148-14	1.2	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-002	Fig.148-15	13.0	3.1	0.0	○	
			E-006	Fig.148-16	3.3	0.0	-	-	
土曜線	丸森	へう	E-011	Fig.148-17	2.0	0.0	-	-	

S-94準拠色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
工紙類	小紙	E-001	Fig.148-9		1.05φ		○

S-94準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
工紙類	丸紙	E-001	Fig.148-10	(14.4)	3.4		○
	丸紙短	E-003	Fig.148-11		3.6φ		○
	丸紙短	E-002	Fig.148-12		3.6φ		○

S-94準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
工紙類	短紙	E-002	Fig.148-13		2.0φ	(8.0)	○
	短紙	E-003	Fig.148-14		2.0φ	(8.0)	○
	短紙	E-004	Fig.148-15		2.0φ	(8.0)	○

S-94準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-004	Fig.148-21		1.0φ		○
	短紙	E-003	Fig.148-20		1.3φ		○
	短紙	E-002	Fig.148-20		0.8φ		○
	短紙	E-006	Fig.148-27	(13.2)	4.1	(8.0)	○
	短紙	E-007	Fig.148-29		2.1φ	(8.0)	○
	短紙	E-005	Fig.148-29		1.4φ	3.3	○
	短紙	E-008	Fig.148-30		2.3φ	(13.0)	○
	短紙	E-011	Fig.148-31		1.9φ		○
	短紙	E-010	Fig.148-32		1.7φ		○
	短紙	E-009	Fig.148-33		1.3φ		○

S-100準拠色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-002	Fig.157-1	(14.0)	1.5		○
	短紙	E-003	Fig.157-2	(15.0)	1.45		○
	短紙	E-007	Fig.157-3	(15.7)	2.3		○
	短紙	E-004	Fig.157-4	(16.0)	1.5		○
	短紙	E-006	Fig.157-5	(17.0)	2.7		○
	短紙	E-018	Fig.157-12		2.9φ		○
	短紙	E-001	Fig.157-6	(17.0)	1.9φ		○
	短紙	E-005	Fig.157-7	(17.0)	1.5		○
	短紙	E-002	Fig.157-8	(17.0)	1.9φ		○
	短紙	E-014	Fig.157-9	(18.0)	2.1φ		○
大紙類	大紙	E-015	Fig.157-10	(18.2)	1.0φ		○
	大紙	E-020	Fig.157-11	(18.2)	1.6φ		○
	大紙	E-009	Fig.157-11		1.7φ		○
	大紙	E-008	Fig.157-14		1.0φ		○
	大紙	E-017	Fig.157-15	(21.0)	1.9φ		○
	大紙	E-009	Fig.157-16	(18.7)	3.4φ		○
	大紙	E-004	Fig.157-17	(17.0)	2.9		○
	大紙	E-001	Fig.157-18	(17.0)	2.05		○
	大紙	E-018	Fig.157-19	(17.0)	2.4	(7.0)	○
	大紙	E-014	Fig.157-20	(17.0)	3.4φ		○
大紙類	大紙	E-008	Fig.157-21	(18.0)	3.0	(10.0)	○
	大紙	E-019	Fig.157-22	(15.3)	2.2	(11.8)	○
	大紙	E-020	Fig.157-23	(18.0)	2.9φ		○
	大紙	E-005	Fig.157-24	(16.0)	2.8	(13.0)	○
	大紙	E-003	Fig.157-25	(20.0)	2.5	(17.0)	○
	大紙	E-007	Fig.157-26	(20.0)	2.35	(17.0)	○
	大紙	E-006	Fig.157-27	(21.0)	1.9	(17.0)	○
	大紙	E-001	Fig.157-28	(21.0)	3.4φ	(18.0)	○
	大紙	E-013	Fig.157-29		3.2φ	(18.0)	○
	大紙	E-006	Fig.157-30	(8.0)	3.0	(7.0)	○
大紙類	大紙	E-032	Fig.157-31	(11.0)	3.1	(8.0)	○
	大紙	E-001	Fig.157-32	(11.0)	4.0φ	(7.0)	○
	大紙	E-008	Fig.157-34	(14.0)	2.7	(8.0)	○
	大紙	E-001	Fig.157-35	(11.0)	2.3	(8.0)	○
	大紙	E-074	Fig.157-36	(12.0)	1.6	(8.0)	○
	大紙	E-008	Fig.157-37	(12.0)	3.6	(8.0)	○
	大紙	E-007	Fig.157-38	(12.0)	4.3	(8.0)	○
	大紙	E-007	Fig.157-39	(15.0)	4.0	(8.0)	○
	大紙	E-009	Fig.157-40	(13.0)	4.15	(8.1)	○
	大紙	E-072	Fig.157-41	(13.0)	3.05	(8.0)	○
大紙類	大紙	E-062	Fig.157-42	(15.0)	4.5	(8.1)	○
	大紙	E-009	Fig.158-01		2.2φ	(7.0)	○
	大紙	E-002	Fig.158-02		1.9φ	(8.0)	○
	大紙	E-011	Fig.158-03		2.9φ	(8.0)	○
	大紙	E-002	Fig.158-07		2.9φ	(8.0)	○
	大紙	E-005	Fig.158-08		2.0φ	(8.0)	○
	大紙	E-010	Fig.158-09		1.9φ	(8.0)	○
	大紙	E-071	Fig.158-10		2.3φ	(8.4)	○
	大紙	E-079	Fig.158-11		3.6φ	(8.0)	○
	大紙	E-078	Fig.158-12		2.9φ	(8.0)	○
大紙類	大紙	E-076	Fig.158-13		2.8φ	(10.0)	○
	大紙	E-090	Fig.158-14		2.0φ	(10.0)	○
	大紙	E-090	Fig.158-15		2.6φ	(10.0)	○
	大紙	E-010	Fig.158-16		1.3φ	(10.2)	○
	大紙	E-009	Fig.158-17		2.4φ	(10.2)	○
	大紙	E-031	Fig.158-18		2.3φ	(10.2)	○
	大紙	E-046	Fig.158-19		3.0φ	(10.2)	○
	大紙	E-049	Fig.158-20		2.0φ		○
	大紙	E-070	Fig.158-21	(17.0)	4.0	(10.0)	○
	大紙	E-033	Fig.158-22	(18.0)	5.0	(12.0)	○
大紙類	大紙	E-075	Fig.158-23	(18.7)	6.2	(12.0)	○
	大紙	E-045	Fig.158-24		1.7φ	(13.0)	○
	大紙	E-045	Fig.158-25		1.7φ	(13.0)	○
	大紙	E-080	Fig.158-26		4.2φ	(11.2)	○
	大紙	E-077	Fig.158-27		4.1φ	(11.0)	○
	大紙	E-076	Fig.158-28		1.2φ		○
	大紙	E-023	Fig.158-29		1.7φ		○
	大紙	E-012	Fig.158-30		2.4φ	(11.0)	○
	大紙	E-043	Fig.158-31		2.7φ	(11.0)	○
	大紙	E-043	Fig.158-32		2.7φ	(11.0)	○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-002	Fig.160-9		1.7φ	(7.0)	○
	短紙	E-004	Fig.160-97		1.9φ		○
	短紙	E-012	Fig.160-98		1.9φ		○
	短紙	E-009	Fig.160-99	(17.0)	2.1		○
	短紙	E-003	Fig.160-100		1.3φ		○
	短紙	E-013	Fig.160-101		1.9φ		○
	短紙	E-014	Fig.160-102		1.4φ		○
	短紙	E-008	Fig.160-103		2.6φ	(11.0)	○
	短紙	E-007	Fig.160-104	(11.0)	3.4	(8.0)	○
	短紙	E-010	Fig.160-105		2.1φ		○
大紙類	大紙	E-006	Fig.160-106	(17.0)	3.8	8.1	○
	大紙	E-007	Fig.160-107		4.1	(8.0)	○
	大紙	E-010	Fig.160-108	(15.1)	4.9	(10.0)	○
	大紙	E-015	Fig.160-109		2.9φ	(10.0)	○
	大紙	E-001	Fig.160-117		1.4φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-003	Fig.160-113		1.05φ		○
	短紙	E-002	Fig.160-116		1.9φ	(8.0)	○
	工紙類	E-001	Fig.160-117		1.4φ	(11.0)	○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-014	Fig.161-1	(16.0)	3.0	(10.1)	○
	短紙	E-011	Fig.161-2	(14.0)	1.4		○
	短紙	E-002	Fig.161-3	(16.0)	2.7φ		○
	短紙	E-010	Fig.161-4		1.7φ		○
	短紙	E-009	Fig.161-5		1.9φ		○
	短紙	E-001	Fig.161-6		1.05φ		○
	短紙	E-002	Fig.161-7	(13.0)	5.2	(8.1)	○
	短紙	E-003	Fig.161-8	(13.0)	3.0	(8.0)	○
	短紙	E-004	Fig.161-9	(14.0)	5.1	(10.0)	○
	短紙	E-013	Fig.161-10		1.7φ	(8.0)	○
大紙類	大紙	E-012	Fig.161-11		2.3φ		○
	大紙	E-018	Fig.161-13		2.1φ		○
	大紙	E-015	Fig.161-14		1.9φ		○
	大紙	E-008	Fig.161-15	(17.8)	3.1	(15.7)	○
	大紙	E-005	Fig.161-16	(14.0)	3.0φ		○
	大紙	E-006	Fig.161-17		2.7φ	(10.7)	○
	大紙	E-017	Fig.161-20		3.3φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-001	Fig.161-26		1.9φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-001	Fig.161-27		1.9φ		○
	短紙	E-002	Fig.161-29		4.9φ	(10.0)	○
	短紙	E-003	Fig.161-30		3.2φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-002	Fig.160-71	(13.0)	1.7φ		○
	短紙	E-001	Fig.160-72		1.7φ		○
	短紙	E-002	Fig.160-73		1.7φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-001	Fig.160-87		1.1φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-004	Fig.160-88		1.9φ	(10.0)	○
	短紙	E-002	Fig.160-89		1.2φ		○
	大紙類	大紙	E-001	Fig.160-91		1.7φ	

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-001	Fig.160-93		1.2φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-001	Fig.160-94		1.2φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号	口径	顕高	底径	A B
短紙類	短紙	E-001	Fig.160-95		1.9φ		○

S-100準拠真鍮色紙上							
種別	種	機番番号	図番号				

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-002	Fig.150-43	(14.4)	2.5a			
	溝②	E-001	Fig.150-44		1.9a			
	溝③	E-002	Fig.150-44		1.2a			
土間部	坪	E-001	Fig.150-40		3.6a			
	坪< へう	E-002	Fig.150-48		1.2a	(6.4)		
	溝底	E-009	Fig.150-47		1.7a			

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-002	Fig.150-51		2.1a			
	溝②	E-003	Fig.150-53		1.6a			
	溝③	E-001	Fig.150-52		1.5a			

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-001	Fig.150-54		1.9a			○
	溝②	E-002	Fig.150-55		2.5a	(9.7)		○
	溝③	E-001	Fig.150-56		2.6a	(6.8)		○

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-001	Fig.150-54		1.9a			○
	溝②	E-002	Fig.150-55		2.5a	(6.8)		○

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-001	Fig.150-54		1.9a			○
	溝②	E-002	Fig.150-55		2.5a	(6.8)		○

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-008	Fig.150-6		1.6a			
	溝②	E-003	Fig.150-7	(13.3)	3.2			
	溝③	E-009	Fig.150-8		1.6a			
	溝④	E-002	Fig.150-9		1.6a			
	坪	E-001	Fig.150-10		1.6a	(16.0)		○
	坪	E-006	Fig.150-11		3.7a			
土間部	坪	E-005	Fig.150-12		1.6a			

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
土間部	溝	E-002	Fig.150-10		2.5a	(14.0)		

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-001	Fig.154-1		1.2a			
	溝②	E-002	Fig.154-2	(16.2)	5.6	9.6		

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝③	E-001	Fig.150-3	(16.4)	1.1a			

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-001	Fig.150-19		1.7a			
	溝②	E-002	Fig.150-20		1.7a			
	溝③	E-004	Fig.150-21		1.8a			
	溝④	E-003	Fig.150-22		1.8a	(6.3)		
土間部	坪<	E-006	Fig.150-23		1.65a	(31.0)		

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-002	Fig.154-30	(16.4)	2.3a	(6.4)		○
	溝②	E-003	Fig.154-31		2.4a			○

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-001	Fig.154-41		1.6a			○
	溝②	E-002	Fig.154-42		1.2a			○

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-001	Fig.154-43		1.65a			
	溝②	E-002	Fig.154-44		1.7a			

種別	部 種	遺構番号	図面番号	口積	断面	底積	A	B
築込部	溝①	E-001	Fig.150-1	(13.2)	4.1	(38.0)		

表36 第322次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
322SD060	北端中点	56099.20	-45322.91	-614.474	-496.056	
	南端中点	56079.00	-45325.26	-634.697	-498.204	N-6° 38' 9" -E
322SD070	東端中点	56077.37	-45325.20	-636.326	-498.128	
	西端中点	56077.11	-45331.00	-636.644	-503.925	W-1° 34' 49" -S
322SD080	南肩東端	56076.45	-45326.00	-637.254	-498.918	
	南肩西端	56076.45	-45333.20	-637.326	-506.118	東西
322SD085	東端中点	56073.67	-45325.42	-640.028	-498.310	
	西端中点	56074.45	-45333.35	-639.328	-506.248	W-5° 37' 3" -N
322SD094	東端中点	56072.53	-45325.65	-641.170	-498.529	
	西端中点	56072.93	-45333.30	-640.847	-506.183	W-2° 59' 35" -N
322SD096	南肩東端	56072.00	-45328.00	-641.724	-500.874	
	南肩西端	56071.91	-45333.30	-641.867	-506.172	W-0° 58' 22" -S

②般若寺地区

1、第293次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀二丁目19番26、19番50の一部で、般若寺跡が所在する丘陵上の標高48mに立地し、般若寺跡の南西140mに位置する。2011(平成23)年11月、対象地に対して個人の専用住宅建築に伴う埋蔵文化財の照会があった。敷地西側で擁壁建設の計画があるため、既存の建物の解体後、翌年1月31日に確認調査を実施したところ、地表下0.7～1.5mの深さで遺構面を確認した。建物部分については保護層が確保されたが、西側法面部分ではL型擁壁を建造するため、遺構への影響が確実となり、擁壁工事部分を対象に発掘調査を行うことになった。調査は発掘調査作業後の工事立会も含め、2012(平成24)年3月26日から4月25日にかけて実施した。開発対象面積は93.78㎡、調査面積は29.3㎡で、調査は遠藤菌が担当した。出土遺物は、土器や瓦等がバンコンテナ1箱分出土した。

(2) 基本層位

調査地は般若寺丘陵上の南西端部に位置し、調査地の西辺は西側に急激に下る法面になっており、西側隣地との高低差は2m以上あった。調査区における地表面から遺構面までの深さは約1.3～1.6mあり、層位は調査区南壁土層 (Fig. 168) の観察によると最上層が厚さ0.2～0.4mの灰色土の表土、その下は

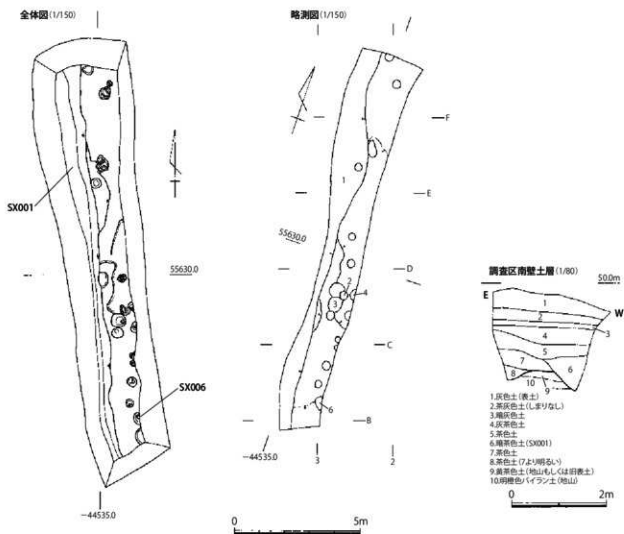


Fig. 168 第293次調査遺構全体図・略測図・土層実測図

厚さ0.1～0.15mのしまりのない茶灰色土、厚さ0.1mの旧耕作土とみられる暗灰色土、0.1～0.3mの灰茶色土と続く。その下に厚さ0.2～0.4mの遺物包含層である茶色土があり、その直下に遺構が切り込む淡黄茶色土の基盤層がある。さらにその下は明橙色の花崗岩バイラン土の地山である。

(3) 検出遺構

その他の遺構

293SX001

調査区西半部で検出した西に向かって傾斜する落ち込みである。段造成による擾乱で、東から西に傾斜する地形に流土が堆積した結果と考えられる。堆積土は明茶色土を呈する。

293SX006

調査区南東部で検出した小穴で、直径約0.6m、深さ約0.12mを測る。底の部分で須恵器の壺の底部片 (Fig. 169-6) が内面を上にして水平に置かれたような状態で出土したが、人為的な結果であるかは不明である。柱痕等の痕跡は確認できなかった。

(4) 出土遺物

293SX001 出土遺物 (Fig. 169)

須恵器

高坏 (1, 2) 1は高坏の坏と脚の接続部分の破片で、坏部内面は回転ナデ、脚部内外面ともヨコナデを施す。2は高坏の脚部片で内外面ともヨコナデを施す。

土師器

坏 (3) 口縁部の破片。内外面とも摩滅しており調整不明だが、ヨコナデと考えられる。

瓦類

丸瓦 (4) 丸瓦の端部片で、凸面は摩滅により調整が不明瞭だが、凹面は布目痕を残す。

平瓦 (5) 縄目叩きの平瓦片で、厚さは1.2cmを測る。

293SX006 出土遺物 (Fig. 169)

須恵器

壺 (6) SX006の底部に平たく置かれていた壺の底部中央部片で、外面はヘラ削り後板状工具によるナデ、内面は指ナデを施す。円形を意識して人為的に割った可能性もある。

茶色土出土遺物 (Fig. 169)

須恵器

蓋 c (7) つまみを有する蓋の中央部破片で、つまみの径は約2cmを測る。

土師器

坏 (8～10) いずれも内外面とも摩滅により調整は不明瞭。色調は淡黄灰色を呈する。

瓦類

平瓦 (11) 凸面に格子目叩きを施し、凹面は布目痕を有する。

表土出土遺物 (Fig. 169)

須恵器

坏 a (12) 底部の破片で、外面中央部に回転ヘラケズリ、その他の内外面は回転ナデを施す。

壺 (13) 肥後系の壺の口縁部破片。体部内外面に回転ナデが施され、底部外面には回転ヘラケズリが観察できる。内外面とも灰黄色を呈する。

弥生土器

甕 (14) 口縁部の破片で、内外面とも摩滅が著しい。胎土は1mm程度の白色石粒を含む。内外面と

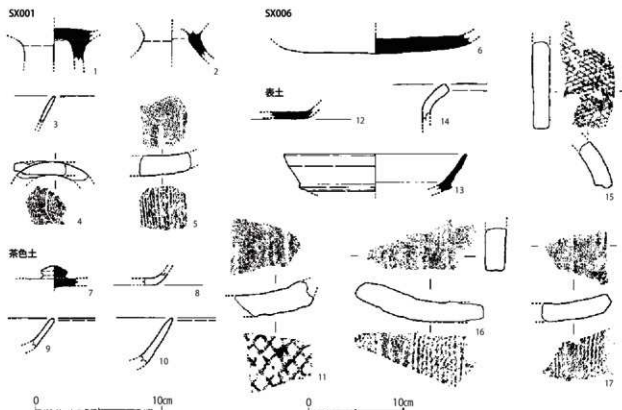


Fig. 169 第293次調査出土遺物実測図(1/3、瓦は1/4)

も淡橙色を呈する。

瓦類

丸瓦(15) 凸面に格子目叩きを施す。

平瓦(16、17) 16は凸面に格子目叩き、17は網目叩きを施す。凹面にはいずれも布目痕を有する。17は側面部が残存し、ヘラケズリし面取りしている。

(5) 小結

今回検出した遺構は、西側斜面の段造成に伴う落ち込み状の堆積層と小穴群で、小穴のほとんどは遺物を含まず、樹根による擾乱が主と考えられる。出土遺物は僅かであり、丘陵縁部部という立地からも、大きな遺構が存在したとは考えられない。しかし、出土する遺物は、弥生土器や平安前期の瓦類などで、周辺の調査と同様のものがみられた。

表37 第293次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1	293SX001	段落ち	暗茶色土		A~F2・3
2		小穴	茶色土		C2
3		小穴	黄橙色土		C2
4		小穴	茶色土		C2
6	293SX006	小穴	淡茶色土	古代	B2

表38 第293次調査 出土遺物一覧表

S-1	須 原 副高坏、壺
土 師 副高坏、供養具	
瓦 類 平瓦(網目、格子、無文)、丸瓦(網目、破片)	
土 質 品粒土塊	
S-2	弥生土器×土師副高坏
S-6	須 原 副壺

基色土	須 原 副壺c
土 師 副供養具、坏、重枚具	
瓦 類 平瓦(網目、格子、無文)、丸瓦	
表土	須 原 副壺、壺、罎
土 師 副供養具、破片、壺	
黄 色 陶 器 破片、須弥	
弥 生 土 器 壺	
瓦 類 丸瓦(網目、格子)、平瓦(網目、格子)	
石 製 品 磨片(黒曜石)	

2、第294次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀2丁目19番25、19番50の一部で、般若寺跡が所在する標高50m程の般若寺丘陵の西端に位置し、般若寺塔跡から南西に120m付近に位置する。この土地は2010(平成22)年より、文化財の取り扱いについての問い合わせが始まり、2012(平成24)年1月31日に確認調査を行い、遺構を確認した。遺構の深さが比較的浅かったため、開発者の(株)オリエンタルホームと協議を重ねた。宅地部分の計画は遺構に影響がなかったものの、その住宅の駐車場部分が遺構を削損することがわかり、発掘調査をすることとなった。

調査は2012(平成24)年5月15日～5月25日に実施した。開発対象面積は256.44㎡で、調査面積は67㎡である。調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位

対象地は、東側の市道(標高49.3m)より約0.6m前後が高い土地で、その現況面から深さ0.4～0.5m付近で遺構が確認された。表土は暗茶色土で、地山の茶色土がそのまま宅地として利用された様子が窺え、真砂土などの客土はほとんどなかった。遺構の埋土はほとんどが茶褐色土であった。

(3) 検出遺構

溝

294SD002

振れはN-48° 17' -Wの斜行する溝で、他の溝と全く異なる方位を示している。溝の検出長3.6m、幅1.04～2.1m、深さ0.42mを測る。埋土は暗茶色粘質土で溝の断面はU字形を示す。

294SD005

振れはN-7° 7' -Wの南北溝で、検出長3.7m、最大幅1.0m、深さ0.15mを測る。埋土は茶褐色土で

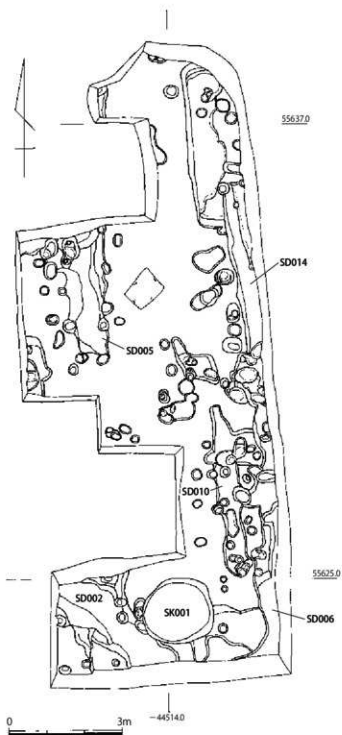


Fig.170 第294次調査遺構全体図(1/100)

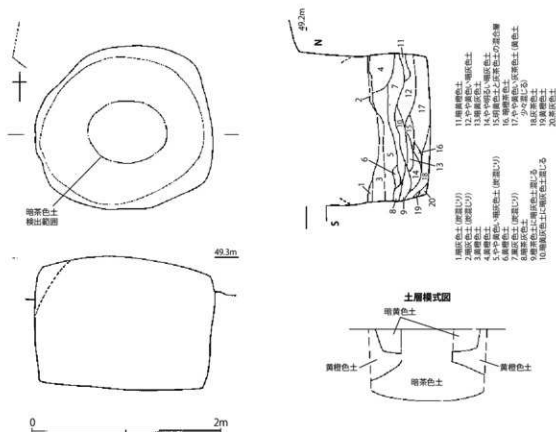


Fig. 171 294SK001 遺構実測図 (1/40)

溝の断面は緩いU字形を示す。

294SD006・014

調査区東端で検出した南北の溝状遺構であるが、東側は調査区外へと続いているため、段落ちの可能性も考えられる。振れは約N-5° 36' -Wで、南側は調査区外へと続き検出長12.5m、検出幅は0.5m前後、深さ0.3m前後を測る。埋土は茶褐色土だが、他の遺構の埋土より若干軟らかかった。これはこの溝が調査区端に位置するため、宅地の植木や石積みに関係する可能性もあるが、即座に攪乱と判断するには証拠に乏しい。

294SD010

振れはN-6° 3' -Wの南北溝で、検出長4.6m、最大幅0.62m、深さ0.1m前後を測る。埋土は茶褐色土で溝の断面は緩い逆台形を示す。この溝の北側延長上に、暗黄褐色土を埋土とする段落ちがあったが、遺物はなかった。断面形状が全く異なるため、単純に同一遺構とは言いづらいが、西層はほぼ同じライン状にあるため関連する遺構と推測される。

貯蔵穴

294SK001 (Fig. 171)

東西1.88m、南北1.74m、深さ1.41mの円形土坑である。遺構検出時は径1.5mの暗黄褐色土の円形プランとその中央に0.9×0.7mの暗茶色土の楕円形プランが検出されていた。暗黄褐色土はすり鉢状の埋土状況だったが、それを除去した付近からは、暗茶色土が深さ約0.6m付近まで地山に挟り込む状況を示していた。調査の安全から挟り込み部分は除去して暗茶色土を掘り進んだ。埋土は主に黄褐色土と炭混じりの暗灰色土の互層で、これらを合わせて暗茶色土として掘削した。出土する土器に完形品や意図的に置かれたものはなかったが、穴の壁面近くで多く出土した。この土坑はフラスコ状を呈する断面形状な

どから貯蔵穴と考えられる。

(4) 出土遺物

溝

294SD002 暗茶色粘土出土遺物 (Fig. 172)

瓦類

平瓦 (1) 凸面は縄目叩き。凹面には糸切り痕と布目が残る。焼成良好で色調は淡灰色を呈する。

294SD005 出土遺物 (Fig. 172)

須恵器

蓋 c (2) 外面上半部は回転ヘラケズリ、内面はそれと対応する範囲がナデ調整。その他は回転ナデ。還元やや不良で、色調は淡茶褐色を呈する。

蓋 2 (3) 外面上半部は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整。その他は回転ナデ。色調は灰色を呈する。

坏 c (4、5) 4は丸味のある体部で、摩滅が目立ち、低くなった高台が残る。復元高台径 10.0cm。焼成還元不良で黄茶灰色を呈する。5は復元高台径 9.3cm。

坏 a (6) 丸味のある底部で、外面は回転ヘラ切り後未調整、内面不定方向のナデ調整。焼成良好だが還元不良で、色調は薄黄茶色を呈する。

土師器

碗 c (7) 復元高台径 9.9cm。焼成不良で色調は薄橙色を呈する。

瓦類

平瓦 (8、9) 凸面はやや粗めの縄目叩き。8は焼成不良で淡黄灰色を呈する。9は暗灰色を呈する。

294SD006 出土遺物 (Fig. 172)

須恵器

坏もしくは皿 (10) 口縁部で、色調は暗青灰色を呈する。

瓦類

平瓦 (11) 凸面が縄目叩き。

294SD014 出土遺物 (Fig. 172)

瓦類

平瓦 (12) 凸面が縄目叩き。色調は灰色等を呈する。

294SD010 出土遺物 (Fig. 172)

須恵器

蓋 2 (13) 蓋 3 と近い形状。色調は淡灰色を呈する。外面は灰かぶりする。

瓦類

平瓦 (14、15) 14は凸面が粗い縄目叩き。凹面はナデ調整。15は凸面が格子叩き。凹面に布目痕をナデ消している。

294SD010 底面 (SX023) 出土遺物 (Fig. 172)

土師器

坏 a (16、17) 16は底径 7.4cm。色調は淡黄茶色を呈する。摩滅し調整不明。17は底径 8.4cm。底面には板状圧痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。

坏 (18) 内外面摩滅し調整不明。色調はにぶい橙色を呈する。

貯蔵穴

294SK001 暗茶色土出土遺物 (Fig. 173・174)

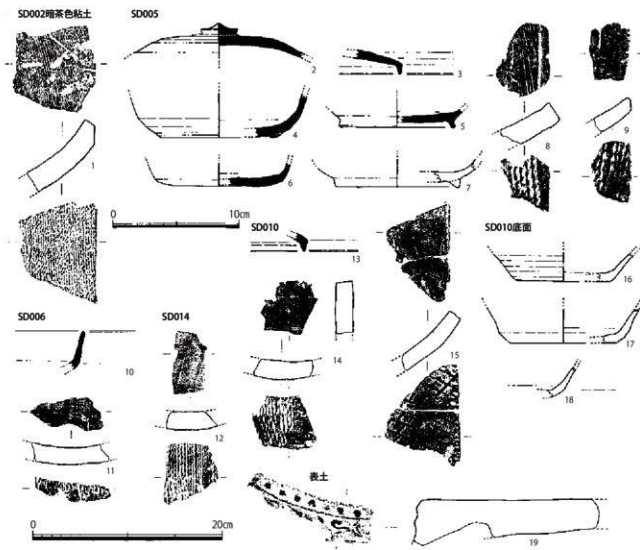


Fig. 172 第294次調査 溝・表土出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

弥生土器

甕 (1～26) 全体として、胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、色調は淡黄茶色や茶灰色を呈する。摩滅し調整が不明瞭なものも多い。1～16は口縁部で、端部を緩やかに外反させる。1は復元口径15.0cm、2は18.1cm。内外面ナデか。焼成不良で色調は薄茶色を呈する。3は復元口径18.1cm。外面は被熱している。4～8は口縁端部に刻みを施す。4は外面に二重の刻み目突帯を巡らす。内面ナデ調整、突帯より下には部分的にハケ目が残る。口縁部内外面はヨコナデ調整。5は摩滅著しいが、外面に丹塗りのような痕跡がみられる。9は外面にハケ目が所々に残る。10は外面が被熱している。11は体部に低い突帯を巡らす。12は口縁部内面がヨコハケ調整。13は体部外面中位にミガキのような調整が見られる。内面ヨコハケか。17は内外面ともナデ調整か。底径5.0cm、18～23は外面タテハケ調整。底部外面はナデ調整。18は細かいタテハケ。19は、底径7.3cm。底部外面が丁寧なナデ調整、内面は薄く炭化物が付着する。20の内面は薄く炭化物が付着する。復元底径7.3cm。21は復元底径7.6cm。22は復元底径8.8cm、23は若干上げ底気味で、外面ヨコハケ調整。復元底径10.5cm。24は復元底径7.6cm。甕もしくは壺(28～30) 27～29は厚い口縁部で口縁部上下に刻みを施す。色調は黄茶色を呈する。摩滅もするが内外面ともヨコナデ調整。30は内面ミガキか。

壺 (31～34) 32は肩部で、外面は明瞭ではないがミガキのような調整があり、3条の沈線を巡ら

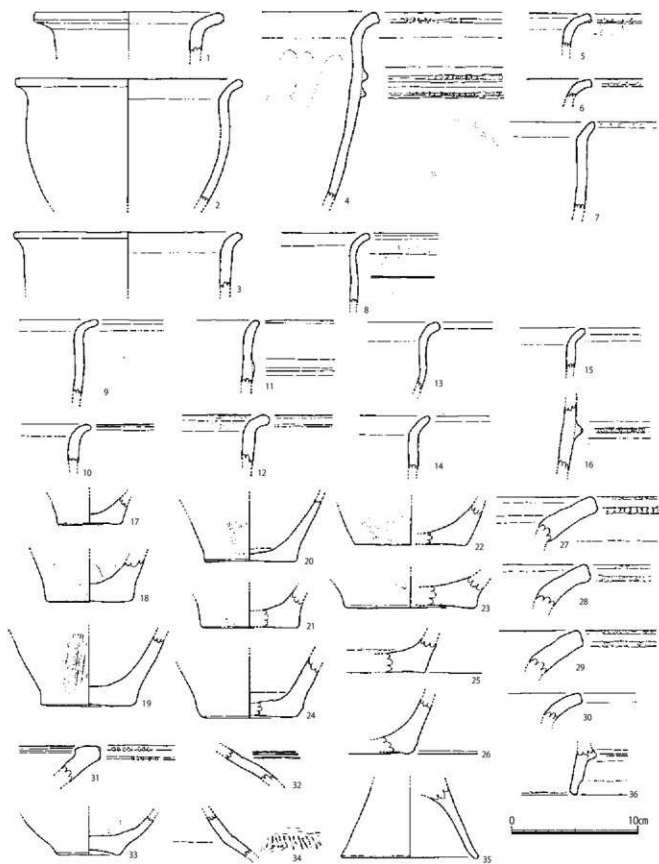


Fig. 173 294SK001 暗茶色土出土遺物実測図① (1/3)

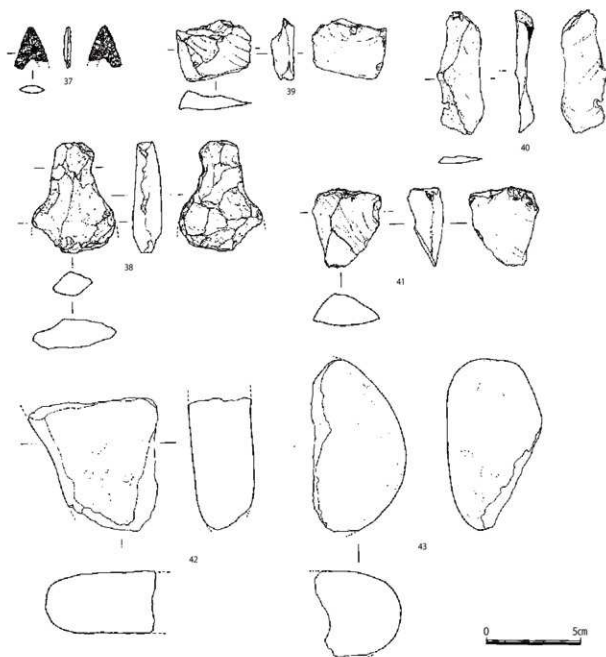


Fig. 174 294SK001 暗茶色土出土遺物実測図② (1/2)

33は若干上げ底気味で、内面はナデで指頭圧痕が残り、外面はナデ調整。色調は淡黄褐色を呈する。
34は肩部の破片で、ヘラで沈線と無軸の羽状文を描く。胎土は白色砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、彩色は見られない。

高環 (35) 脚部復元径 10.8cm。摩擦するが外面ナデか。色調は黄褐色を呈する。

皿 (36) 小破片で器形がわかりづらい。外面に突帯を巡らし、内面ナデとヨコハケを施す。

石製品

石鏃 (37) 一部欠損する。大きさは縦 2.2cm、幅 1.7cm、厚さ 0.35cm。黒曜石製。

打製石斧 (38) 先端が欠損する。現存長 5.8cm、厚さ 1.55cm。一部原石面が残る。安山岩製。

剥片 (39～41) 39は一部原石面が残る。大きさは 3.2×3.9cm、厚さ 1.2cm、安山岩製。40の大きさは 5.5×2.4cm、厚さ 0.9cm。一部に原石面を残す。安山岩製。41は一部原石面が残る。大きさは 4.15×3.55cm、

厚さ1.9cm、黒曜石製。

砥石(42) 欠損が目立つが、表裏に研磨痕が残る。

敲石(43) 半分ほど欠損する。上面や側面は表面が敲き潰されている。

表土出土遺物 (Fig. 172)

瓦類

軒平瓦(19) 偏行唐草文。摩滅が著しいが、縄目叩きが確認できる。

(5) 小結

今回の調査の主な所見は以下の通りである。

- ・弥生時代前期後半頃の貯蔵穴を検出。
- ・奈良時代の南北溝 (SD005・010・006・014) を検出。
- ・古代の遺構に関しては、瓦類は出土するが目立った出土量ではない。

今回の調査で検出した南北溝は、調査区のすぐ西側では丘陵の落ちが始まることから丘陵上の西辺を区切る溝と考えてしまうが、溝から東に約20mでまた段落ちが始まる立地状況を考えると、何のために溝が明確に言い切れない。



Fig. 175 第294次調査遺構略測図 (1/200)

3、第299次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀2丁目9番36で、地表面の標高49.8m前後である。調査地の北西すぐのところ般若寺塔跡(市指定史跡)が残っている。

対象地は、1986(昭和61)年4月11～14日にかけて、4ヶ所にトレンチを設定し確認調査を実施した(Fig.176)。確認調査では、深さ1.3m付近で遺構を検出し、カマドが付く堅穴住居のような方形プランや土坑やピット類のプランを確認、略測図を作成した後に埋め戻された。遺物も7世紀末～8世紀にかけての須恵器、瓦、磁埴などを確認した。

その後、土地利用の際の文化財の取り扱いについて問い合わせが数多くあった。そして、2013(平成25)年2月、(株)九州八重洲から宅地造成に対する文化財の取り扱いについて問い合わせがあった。計画図などをもとにした協議の結果、住宅部分については、遺構に影響がなさそうだが、南側法面については擁壁工事を実施することとなったため、事前に確認調査を行うこととなった。2013(平成25)年4月30日に南側法面部分の確認調査を実施したが、堆積土が厚く、遺構面を確認することができなかったため、擁壁工事の際に立会調査することとなった。

立会調査は擁壁工事に合わせて、2013(平成25)年6月13日～2013年8月5日にかけて実施し、記録作業は7月4・16日、8月1・5日に行った。北側の道路から約17m付近までは今回掘削が全く行われず、そこから幅5m前後、深さ2.5m程が重機が作業する踊り場として掘削作業が行われ、それからさらに南側幅4m前後が擁壁工事のため法面下まで掘削したため、遺構は破壊されたことになる。開発対象面積は601.17㎡であったが、調査面積は約50㎡である。1986年の確認調査は山本信夫・狭川真一が行い、6月の立会調査は遠藤善、7月以降の立会調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位

工事掘削幅約10mで、高さ5.8mを上下2段に段掘りして工事が行われた。工事立会という条件下であったため、上段については東側10m程しか確認できていない。下段については、全体的に観察できたが、部分的に工事の影響で確認出来ていない部分もある。

上段の深さは約2.5mあり、地表から深さ約1.2mは現代の攪乱層で、茶褐色土や真砂土混じりの黄灰色土層である(A)。その下位には西側にこげ茶色土層が厚さ0.2～0.3m程あり、東側には茶色粘土や茶褐色土層が東に向かって深く堆積している。これらはやや粘土質で、やや締まっている感じを受けた。それに対し、その下位の灰茶色土層のみが、やや締りが無い。この層は遺物が少ないため、どういう意味を持つのか不明瞭である。同じレベルで暗茶色土層があるが、これはやや締まっていて、今回の掘削部分では瓦を中心に土器片など遺物を多く含んでいる。遺物は奈良時代頃が多くみられる。詳細に確認できた範囲は限定されたが、全体として確認範囲と同様の堆積層とみられる(B)。

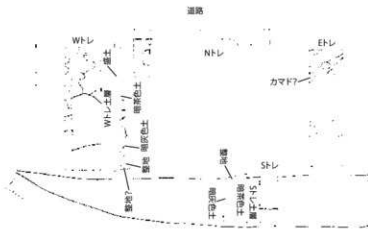


Fig.176 1986年確認調査状況略測図

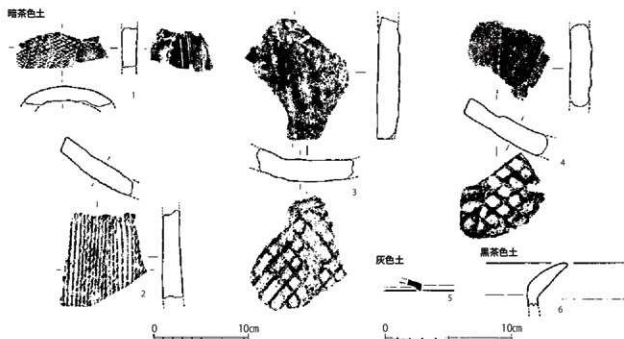


Fig. 178 第299次調査 暗茶色土・灰色土・黒茶色土出土遺物実測図(1/3、瓦は1/4)

下段の土層については、東端から西に向かって全体の土層が緩やかに下がっている状況が観察できる。上段の下位で検出した暗茶色土層と同じとみられる土層が西に向かって深くなる状況で確認された。遺物も古代のものを含んでいる(B)。その下位は、東側で暗茶色土を含む層が互層(厚さ20cm程)となっていた。この層の下位では29m付近から西側に灰色土層があり、突き固めたように固く締まっていた。その灰色土層の範囲は東から37m付近までは確認できたが、それからは表面を厚く工事掘削土が覆っていたため確認作業ができなかったが、掘削土がなくなった47m付近では検出されなかった。この互層と灰色土を合わせた整地層の厚さは30cm前後である(C)。突き固めた灰色土に須恵器の蓋3(Fig. 178-5)が混じっていたため、8世紀後半以降に整地された可能性が考えられる。その下位の黒茶色土層(D)で、遺物は僅かに含んでいるが明確に古代と言える遺物は出土していない。弥生時代後期～古墳時代の堆積層と推測される。それより下位の茶褐色土と明茶色土では遺物が未確認であることから、人が生活を営んでいなかった時期の堆積と推測される(E)。そして調査範囲の東側で西側に下がっていく完全な地山である黄白色土や暗黄灰色土が確認でき、また、その層は西側では西に向かって上がっていく同質の淡黄色土が確認できた(F)。

以上のことから推測すると、当初この付近は谷地形だったことがわかり、そこが自然堆積していき、般若寺が造営・活動していた前後に整地され、般若寺廃絶後に、厚さ3m近くの大きな盛土(堆積)がなされ、現状に近い土地が形成されたと推測される。

(3) 出土遺物

今回の調査ではパンケース21箱の遺物が出土し、そのほとんどが瓦類であった。多くの瓦は全体的に摩滅している。その中でも残存範囲が大きいもの、叩き痕が良好に残るもの、瓦の側面部の調整状況がわかるものを抽出して報告する。

暗茶色土出土遺物 (Fig. 178)

瓦類

丸瓦(1) 凸面は細かい格子叩きで、一部ナデ調整する。内面ナデ調整である。色調は灰黄色を呈する。
平瓦(2～4) 2は凸面が縄目叩きで、凹面は模骨痕が残るが摩滅が目立つ。3・4は凸面が方形の格子叩き、凹面は布目と模骨痕が残る。色調は3が白茶色、4が灰色を呈する。

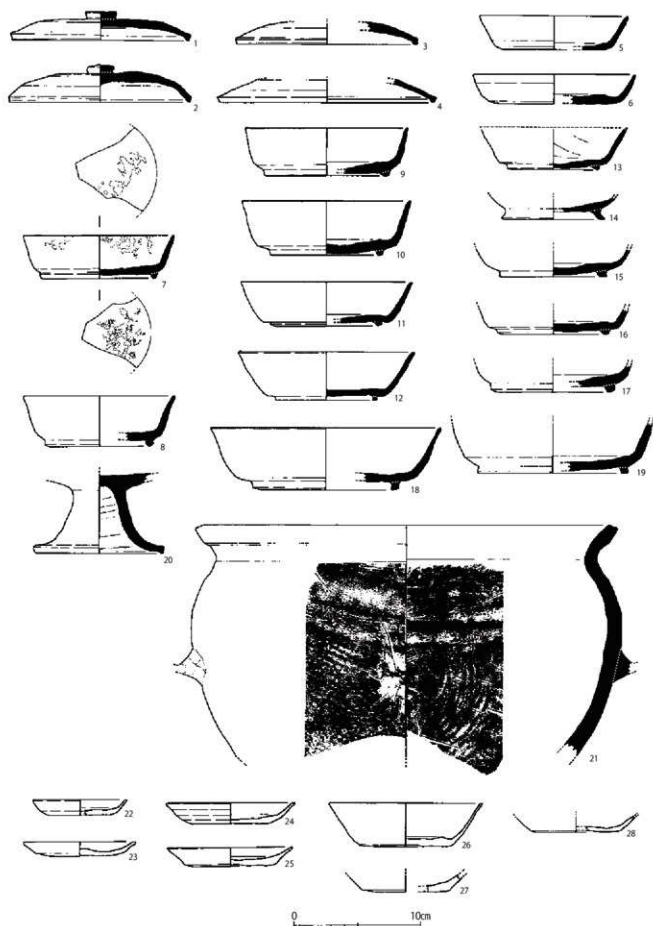


Fig. 179 第299次調査 東側工事採集遺物実測図① (1/3)

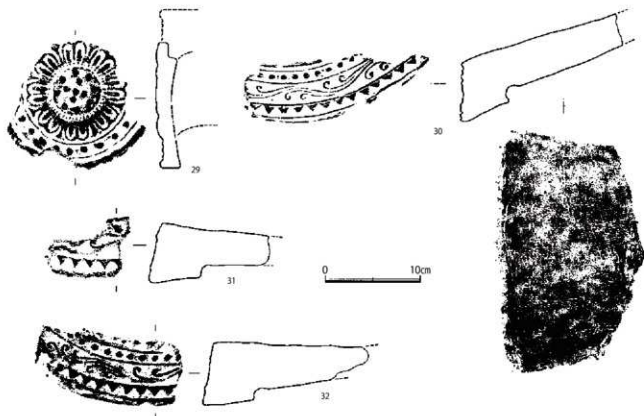


Fig. 180 第299次調査 東側工事採集遺物実測図② (1/4)

灰色土出土遺物 (Fig. 178)

須恵器

蓋3 (5) 焼成良好で、色調は黒灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

黒茶色土出土遺物 (Fig. 178)

古式土師器

甕 (6) 焼成不良で色調は茶橙色を呈する。

東側工事採集遺物 (Fig. 179 ~ 183)

須恵器

蓋c3 (1, 2) 外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は一方方向のナデ調整。1は復元口径14.0 cm、器高2.8 cm。外面は灰被りで、内面は若干平滑である。2は復元口径14.3 cm、器高3.0 cm。

蓋3 (3, 4) 外面上半部は回転ヘラケズリ。復元口径は、3が14.4 cm、4が17.4 cm。

坏a (5, 6) 5は復元口径11.8 cm、器高2.7 cm。6は復元口径12.8 cm、器高2.4 cm。

坏c (7 ~ 17) 復元口径12.0 ~ 14.0 cm、器高3.4 ~ 4.3 cm。低くやや貧弱な高台を貼付する。焼成良好で、色調は暗灰色や淡灰色を呈する。7は内面と外面底部を中心に黒色の付着物がみられる。13は内面に大きな傷が付く。14は外開きの高台を貼付する。

大坏c (18, 19) 断面方形の高台を貼付する。復元口径18.2 cm、器高4.9 cm。19は復元口径12.0 cm、高坏 (20) 脚部の内外面とも回転ナデ調整。焼成良好で、色調は暗灰色を呈する。復元底径10.4 cm、色調は暗灰色を呈する。

甕 (21) 復元口径33.4 cm。胎土は砂粒を含み、焼成不良で白灰色を呈する。口縁部と体内内外面は

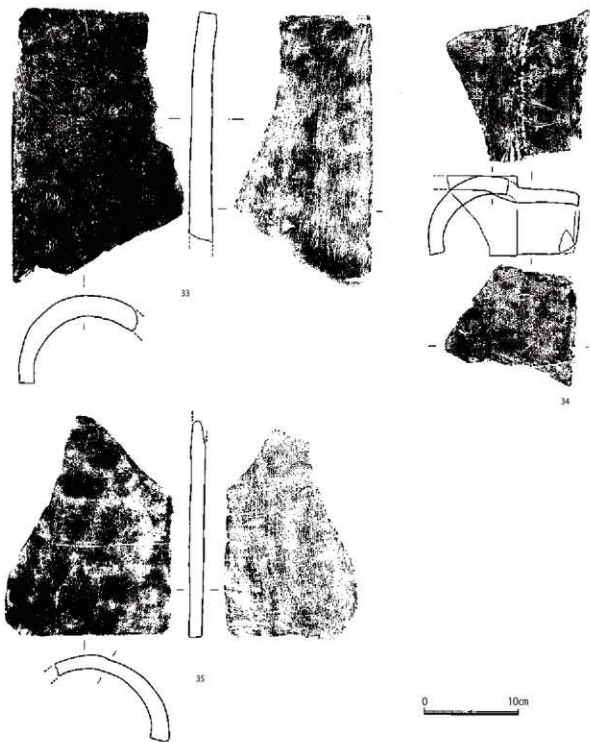


Fig. 181 第299次調査 東側工事採集遺物実測図③ (1/4)

ヨコナデ調整、体部下半は外面が格子叩き、内面は同心円の当て具痕が残る。体部中部に把手を貼付する。
土師器

小皿 a (22 ~ 25) 22の底部切り離しは回転糸切りか。復元口径7.0 cm。23 ~ 25は復元口径9.0 ~ 10.0 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。23は板状圧痕が残る。

坏 a (26 ~ 28) 26は復元口径12.1 cm、器高3.45 cm、底径7.2 cm。底部切り離しは不明瞭。色調は黄橙色を呈する。27・28の底部切り離しは、回転ヘラ切り。

瓦類

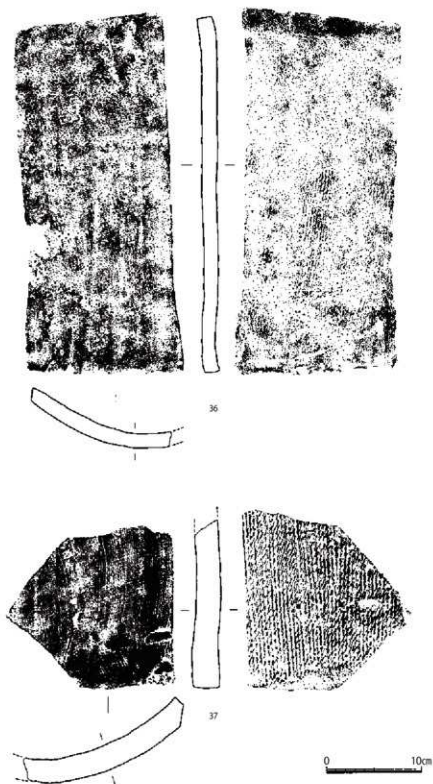


Fig. 182 第299次調査 東側工事採集遺物実測図④ (1/4)

軒丸瓦 (29) 中房は1+4+8で、蓮弁は複弁で、外縁は素文である。鴻臚館式。32は焼成不良で摩滅が目立ち、叩き痕も不明瞭である。

軒平瓦 (30～32) 瓦当面は、上外区が珠文、下外区は鋸歯文で、その間は偏行唐草文で、老司Ⅱ式とみられる。30は凹面に布目、凸面は縄目叩きだが、摩滅が目立つ。側面は2回面取りしている。31は摩滅が著しく、色調は黄橙色を呈する。

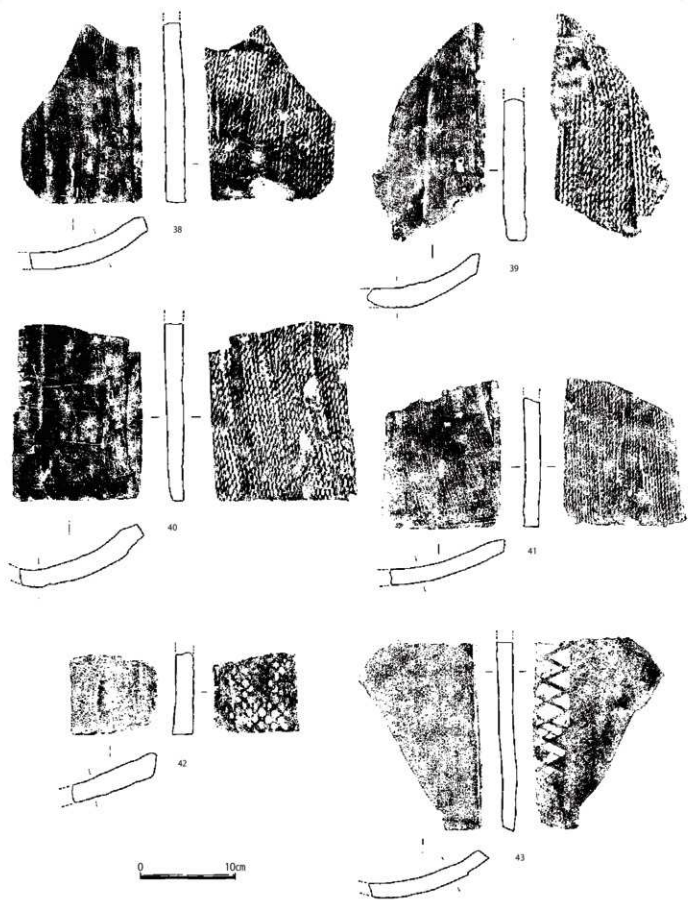


Fig. 183 第299次調査 東側工事採集遺物実測図⑤ (1/4)

丸瓦 (33～35) 全て焼成良好で、色調は暗灰色や灰色を呈する。33・34は凸面を縄目叩き後にナデ消し調整する。

平瓦 (36～43) 36～41は凸面が縄目叩き、凹面が布目と模骨痕が残る。側面はヘラケズリで、凹面の端部もヘラケズリを施す。側面の面取りは、36・43がヘラケズリを1回のみ。それ以外は面取りを2回行う。36は上下が残り、長さ37.6cm。側面の面取りは1回。37は凹面に布目と模骨痕のほかに糸切り痕が残り、一部粘土が付着する。凸面端部は僅かにナデ調整。色調は黄灰色を呈する。38の凸面は、何か重ねたためか、縄目叩きが一部潰れている。色調は灰色を呈する。39の色調は黄灰色を呈する。41は凹面に糸切り痕も残る。42は摩滅が目立つが、凸面に小さな方形の格子叩き、凹面に布目が残る。色調は黄灰色を呈する。側面は2回ヘラケズリを行っている。43は大きな格子叩きで、一部格子内に×がある。叩きの後に一部ナデ調整を軽く行う。

表土出土物 (Fig. 184～192)

須恵器

杯蓋 (1) 復元口径10.1cm、器高2.6cm。外面上部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

蓋c (2) 外面上半部は回転ヘラケズリ、内面は平滑で墨痕が残る。転用砚とみられる。

蓋3 (3～10) 口縁端部はやや貧弱な断面三角形で、3～8は復元口径14.0～15.9cm、2・3は外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は一方方向のナデ調整。4は外面上部が回転ヘラ切り後未調整。5は外面にヘラ記号のような傷がある。外面の最上部付近だけ回転ヘラケズリ。7は外面摩滅、内面は回転ナデ調整。9はやや大きく復元口径21.7cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、内面は不定方向のナデ調整。

蓋c3 (11) 上半部は回転ヘラケズリで、頂部はツマミ接合のナデ調整が残る。内面上半部はナデ調整。口縁端部は若干長めに曲げる。色調は暗灰色を呈する。

皿a (12～14) 底部外面は回転ヘラ切り後未調整、内面底部はナデ調整。色調は灰色を呈する。12は復元口径15.0cm、器高1.8cm。焼成良好で暗灰色を呈する。13は復元口径14.6cm、器高1.35cm。焼成良好で暗灰色を呈する。14は器高2.1cm。

小杯a (15) 復元口径10.7cm、器高2.1cm。外面底部には板状圧痕が残る。16は復元口径13.0cm、器高3.2cm。底部は回転ヘラ切り後未調整。

杯a (16、17) 底部外面は回転ヘラ切り後未調整、内面底部はナデ調整。色調は灰色を呈する。17は復元口径14.4cm、器高3.0cm、復元底径10.2cm。

小杯c (18) 復元口径9.2cm、器高3.95cm、復元高台径6.2cm。焼成良好で色調は暗灰色を呈する。

杯c (19～43) 断面方形や貧弱な高台を底部端に貼付する。色調は暗灰色や灰色を呈する。19～25は復元口径11.5～14.0cm、器高3.5～5.9cm、復元高台径8.0～10.2cm。26～43は、復元高台径7.4～12.0cm。

高杯a (44) 杯部上面はやや平坦に仕上げる。下半部には工具痕が残る。

高杯 (45) 内面ヨコナデ、外面はタテナデやヨコナデ。色調は暗灰色を呈する。

壺 (46、47) 46は内外面とも回転ナデで、色調は灰色を呈し、肩部に自然軸が付着する。47は復元高台径17.1cm、内面は回転ナデ、外面はナデ調整。焼成良好で色調は灰色を呈する。

甕 (48) 胎土は0.1cm以下の砂粒を含み、色調は淡灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

土師器

杯a (49) 復元底径7.2cm。内外面とも摩滅し調整不明。色調は淡橙黄色を呈する。

皿 a (50) 復元口径 19.2 cm、器高 2.6 cm、復元底径 12.6 cm、内外面とも摩滅し調整不明。色調は暗橙色を呈する。

皿 c (51～53) 51 は復元口径 19.4 cm、器高 3.3 cm、復元高台径 13.0 cm、内外面とも摩滅し調整不明。色調は暗橙色を呈する。52 は復元高台径 11.2 cm、53 は復元高台径 12.8 cm、外面は回転ヘラケズリ。色調は橙色を呈する。

大皿 c (54) 復元高台径 6.4 cm、内外面とも摩滅し調整不明。色調は橙色を呈する。

杯 c (55～58) 55 は復元高台径 10.8 cm、内面ミガキ a、外面は摩滅。色調は赤橙色を呈する。56 は復元高台径 12.0 cm、内面にはミガキ a が残る。色調は明橙色を呈する。57・58 は低い高台を貼付し、色調は明橙色を呈する。内面は摩滅し調整不明瞭。57 は復元高台径 14.0 cm、58 は復元高台径 14.4 cm、

椀 c (59) 外開きの高台で復元高台径 10.8 cm、内外面とも摩滅し調整不明。色調は黄白色を呈する。

鉢 (60) 器高 4.3 cm、体部は大きく外反する。全面摩滅し調整不明。色調は淡橙黄色を呈する。

甕 (61、62) 61 は体部内面ヘラケズリ、口縁部外面はタテハケに指頭圧痕がみられる。62 は内外面とも摩滅し調整不明。色調は暗赤茶色を呈する。

弥生土器

壺 (63) 復元底径 5.1 cm の小さな底部である。内面ハケ調整。外面は摩滅し調整不明。

甕もしくは壺 (64) 復元底径 9.8 cm、胎土は 0.7 cm 以下の白色砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。外面下端付近は粘土組織もしくは叩きのような痕跡が残る。内面ナデで、指頭圧痕が残る。

古式土師器

坏 (65) 復元口径 10.2 cm、器高 6.0 cm、内面ナデ、外面は摩滅し調整不明。色調は暗橙色を呈する。

瓦類

鬼瓦 (66) 胎土は 0.3 cm 以下の砂粒を含み、色調は断面が灰黄色、表面は黒灰色を呈する。眉間付近には穿孔が穿たれており、眉間付近の復元幅は約 30 cm である。残りが良好ではないが、残存部分だけで見ると、大宰府行政跡などで出土するいわゆる大宰府式鬼瓦とは異なる。目は大宰府式が空豆のような丸味があるのに対し、この鬼瓦は上部中央付近と端部を尖らせている。また、目の斜方にある頭髪は大宰府式が流れるような直線的な表現に対し、この鬼瓦は巻き髪表現となっている。そして周囲には珠文は巡らせていない。また、欠損し明確ではないが、頬部分の盛り上がりがないように思える。このような目と巻き髪、珠文が巡らない鬼瓦は、福岡県岡垣町墓ノ尾遺跡出土の鬼瓦があり、同じ系統とは言えるが、今次調査出土の鬼瓦の方が造りとしては丁寧で完成度が高いように思える。

軒丸瓦 (67、68) 67 は摩滅が目立つが、中房の蓮子が 1+8、蓮弁は複弁で、外縁は鋸歯文である。68 は複弁蓮華文で、外縁は鋸歯文で、中房は大きく欠損するが、1+6+10 の蓮子と推測される。焼成良好で色調は暗灰色を呈する。

軒平瓦 (69～74) 69 は偏行唐草文で、上外区は珠文、下外区は鋸歯文で、老司Ⅱ式。凸面縄目叩きで、ナゲ消しもしくは摩滅している。凹面は布目痕が残る、色調は灰色を呈する。70 は偏行唐草文。焼成不良で黄茶色を呈する。71 は偏行唐草文で、上外区は珠文、下外区は鋸歯文である。老司Ⅰ式。72 は偏行唐草文で、上外区は珠文である。老司式。色調は黄茶色を呈する。73・74 は摩滅が著しく、白黄色を呈する。瓦当面は偏行唐草文で、上外区は珠文、下外区に鋸歯文が残る。

丸瓦 (75～83) 75～79 は外面ナデで無文、内面布目である。80・81 は外面縄目叩きをナゲ消している。75 は灰黒色を呈する。76 は淡灰色を呈する。77 は焼成良好で暗灰色を呈する。79 は黄褐色を呈する。80 の側面はヘラ切り後割り離している。82・83 はやや横長の格子叩きで、内面布目痕が残る。82 の色調は黄白色を呈する。

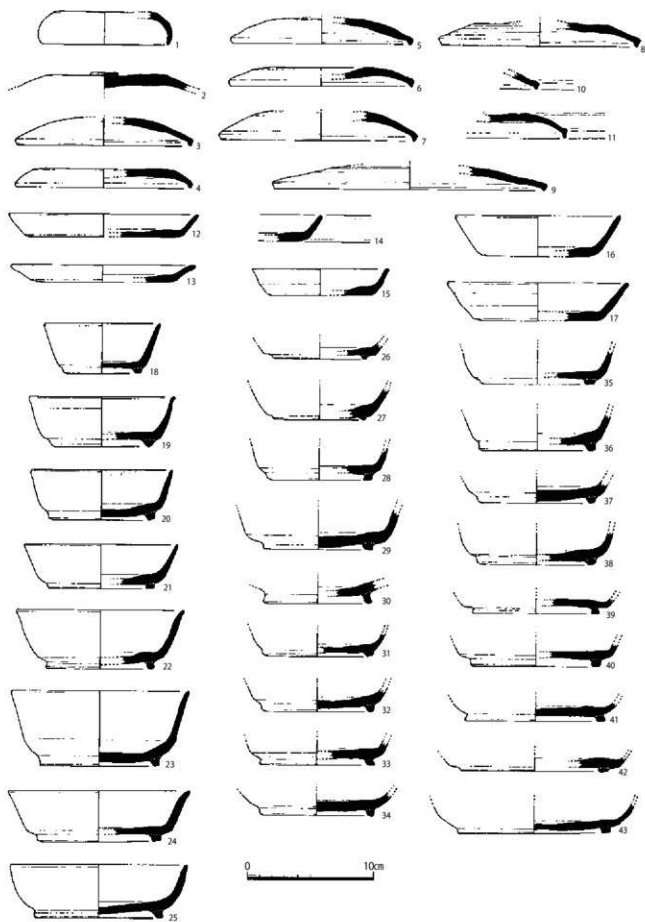


Fig. 184 第299次調査 表土出土遺物実測図① (1/3)

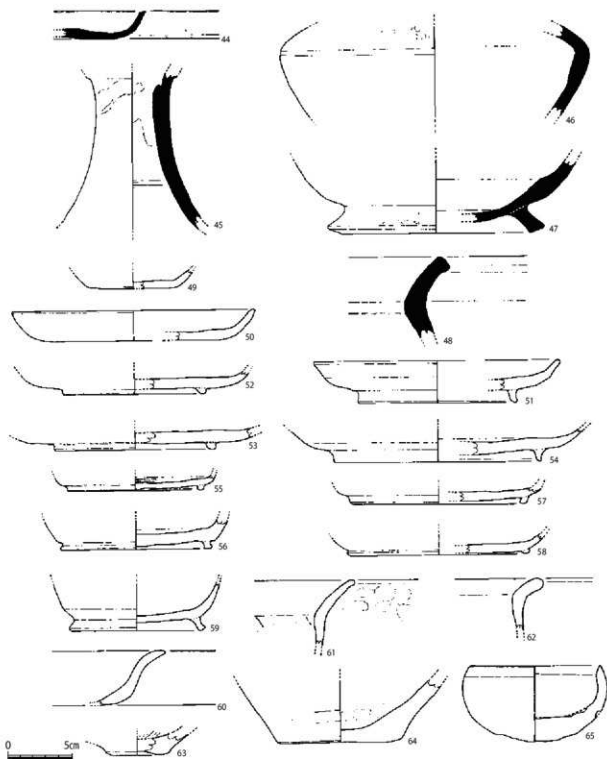


Fig. 185 第299次調査 表土出土遺物実測図② (1/3)

平瓦 (84～117) 84～95は凸面が縄目叩き。86・87・89の側面処理は1回のヘラケズリ、その他は2回のヘラケズリで面取りしている。凹面は布目で模骨痕が残るものが多い。85・91の叩き具幅は6 cm程で、縄の巻き数は15本である。84の凸面端部はヨコナデ調整。86は凹面の模骨痕が明瞭に残る。87は両側が残っていて幅は27 cm。全体的に摩滅するが、側面処理の角度がそれぞれ異なる。88は布目を粗くナデ調整する。焼成良好だが還元不良で淡赤茶色を呈する。90の布目は部分的にナデ消している。93の叩き具幅は5 cm程度。95の凹面には布目と糸切り痕が残る。96～100は格子目がやや太い小

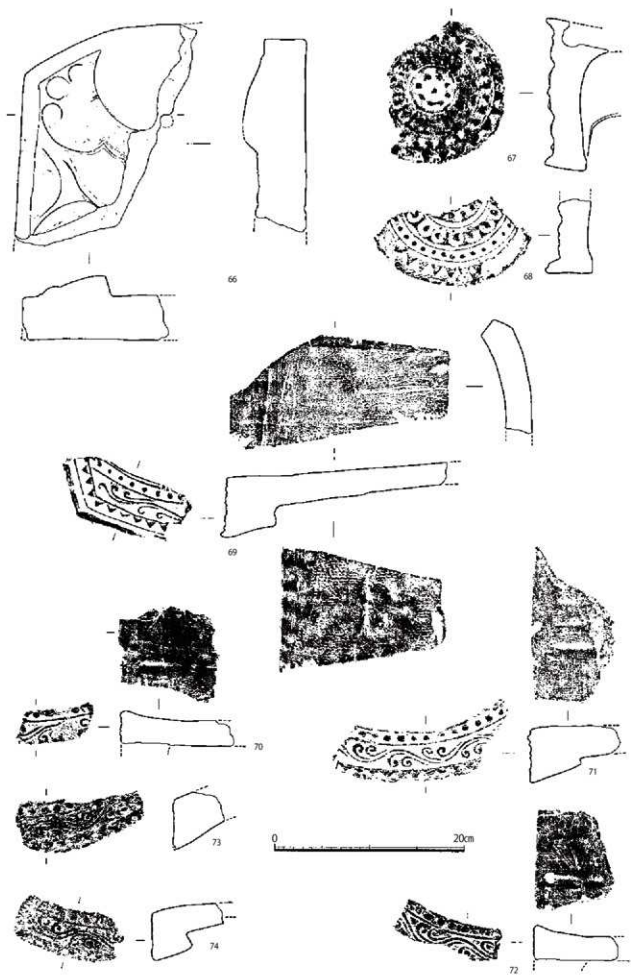


Fig. 186 第299次調査 表土出土遺物実測図③ (1/4)

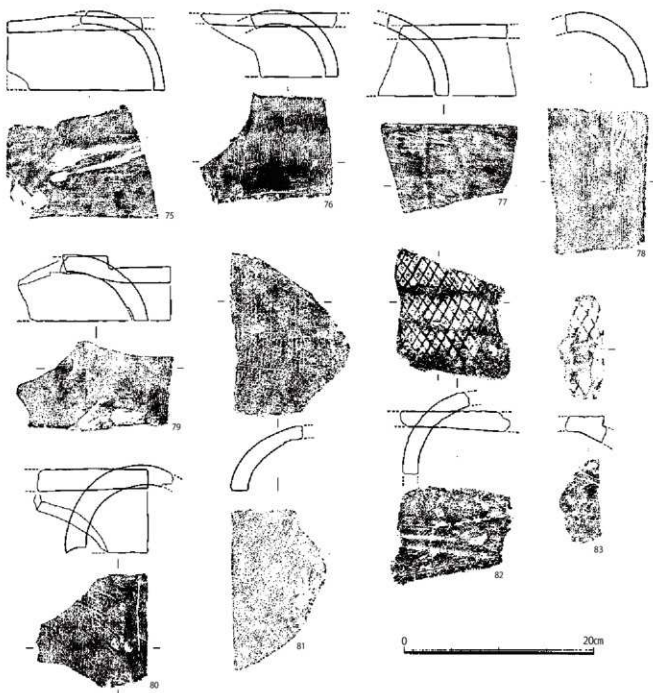


Fig. 187 第299次調査 表土出土遺物実測図④ (1/4)

小さな格子叩き。凹面は布目痕。100の模骨痕の幅は3cm前後である。101～109は若干縦長で格子目がやや太い格子叩き。凹面は布目痕が残る。側面処理は103・107以外2回のヘラケズリ。101は暗黄色や黒灰色を呈する。105は黄褐色を呈する。106の側面処理は4回ヘラケズリし、面取りしている。109は暗褐色を呈する。113～116は小さな格子叩き。側面はヘラ切り。凹面には布目が残る。113は凹面に布目と糸切り痕が残る。114の凹面は布目で、一部ヘラケズリを行う。焼成良好で暗灰色を呈する。115は焼成不良で黄褐色を呈する。117は小さな斜格子で、焼成良好で暗灰色を呈する。

熨斗瓦 (118) 幅11.8cm。内面は布目、外面は縄目叩きで若干摩擦減する。色調は灰黒色を呈する。

埴 (119) 幅13.2cm、厚さ5.8cm。胎土は砂粒を多く含み、焼成やや軟質で色調は暗灰色を呈する。表裏は不定方向のケズリ調整。

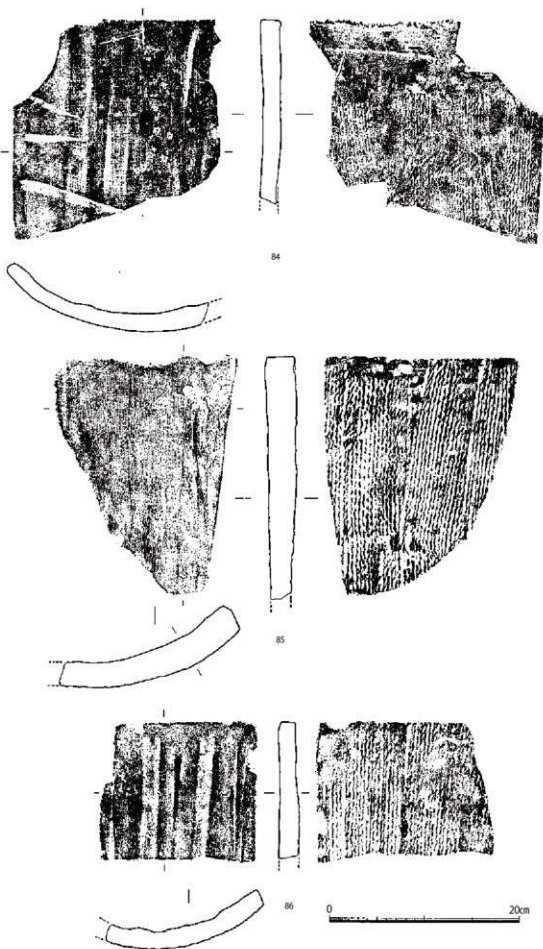


Fig. 188 第299次調査 表土出土遺物実測図⑤ (1/4)

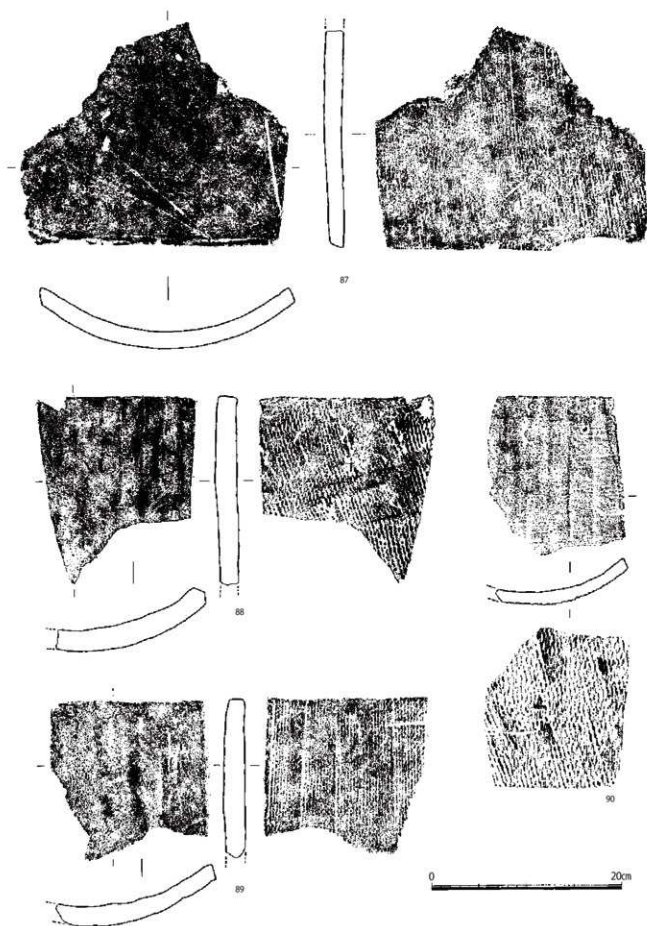


Fig. 189 第299次調査 表土出土遺物実測図⑥ (1/4)

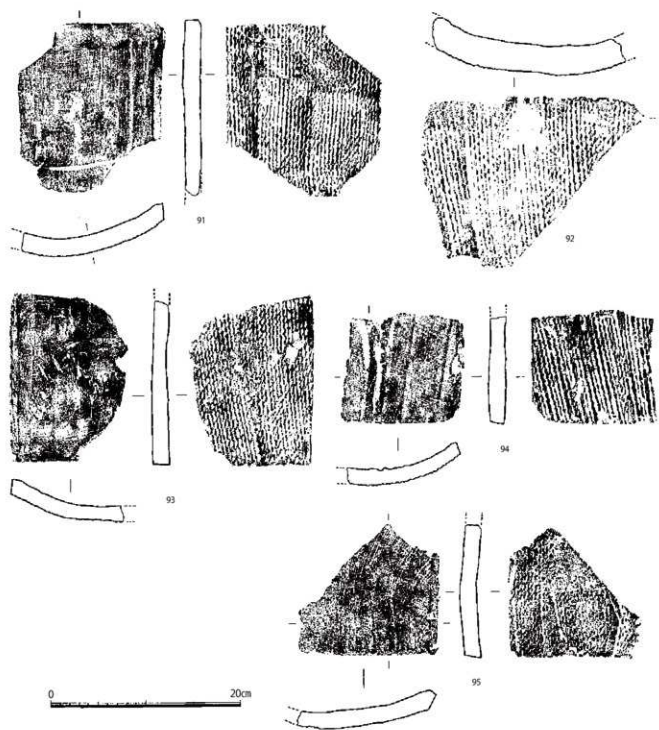


Fig. 190 第299次調査 表土出土遺物実測図⑦ (1/4)

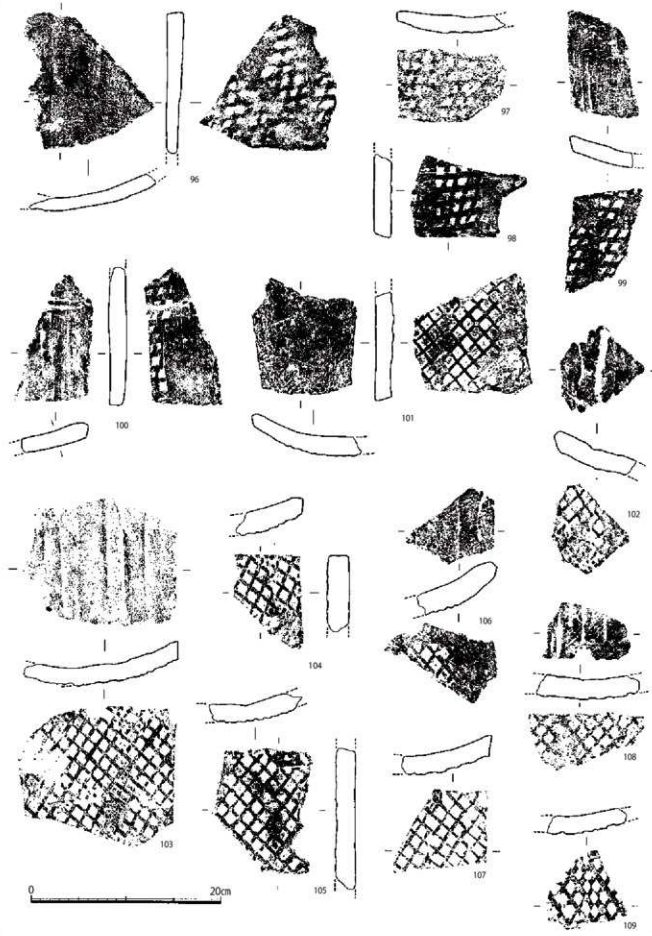


Fig. 191 第299次調査 表土出土遺物実測図③ (1/4)

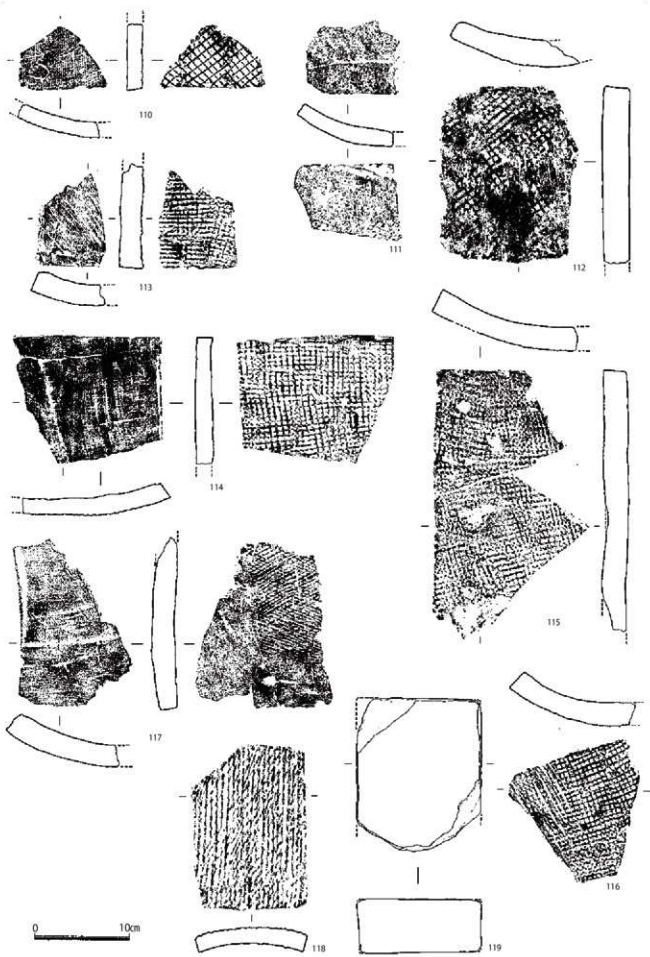


Fig. 192 第299次調査 表土出土遺物実測図⑤ (1/4)

(4) 小結

土地の南辺部の堆積状況調査であり、不明瞭な点が多い。得られた所見をまとめると以下のとおりである。

- ・元来この土地は谷地形であった。
- ・8世紀代に締め固めた土層(10～35cm)をベースとした40cm前後の整地層がみられる。
- ・整地層の範囲は最大約19mで、突き固めた層の長さは8.6m。
- ・整地上面は般若寺塔跡の現況基壇上面より約4.3m低い。
- ・第231次調査の掘立柱建物(SB010、7c末～8c)検出面より約2m低い。
- ・般若寺廃絶時点で、現地表から3mほど土地が低かった。
- ・奈良時代より古い生活面があった可能性がある。
- ・出土遺物の主体は、8世紀中頃～後半を中心とする時期である。
- ・陶磁器が1点も出土していない。
- ・寺院に関係するような宗教関係遺物は出土していない。
- ・摩滅した瓦が多い。

今回の調査地より南側は土地が急に低くなっている。戦後すぐの地形を見ても、この付近は般若寺丘陵が大きく挟り込む形状をしている。この挟り込みの西側で、第249次調査が行われ、奈良時代の掘立柱建物や9世紀前半の瓦窯を検出しており、全てとは言い切れないが、現在見るような挟り込みが奈良時代から一部存在したことは間違いない。今回の堆積状況を見ると、調査地の西側を通る市道が、昔の丘陵際に位置する可能性があり、それから3m程下がった低い位置に土地があったということである。今回確認された整地層は厚みが薄いため、建物の地業と考えられないが、何度も整地していることから、この付近が境内地や関連した通路など利用頻度が高い土地であったと推測される。

参考文献

- 九州歴史資料館『日本の鬼瓦』1993
- 岡垣町教委『墓ノ尾遺跡群』岡垣町文化財報告書第22集 2002
- 太宰府市教委『太宰府桑坊跡32』太宰府市の文化財第90集 2007

4、第301次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀二丁目9番30で、般若寺丘陵上の標高約51mに立地し、般若寺塔跡の西約40mに位置する。

2013(平成25)年9月、対象地に対し分譲建売住宅建築の計画に伴う埋蔵文化財の照会があった。敷地の一部で駐車場設置のため土地の切り下げと建物部分で深基礎の計画があったため、同年10月22・23日に、確認調査を実施した。調査トレンチは、対象地の東側境界ラインから西へ1.1m離れた場所に、南北方向に1本(aトレンチ)設定した。トレンチは延長12.8m、幅1.0m、調査面積は12.8㎡である。調査は遠藤茜が担当した。出土した多量の瓦は近接する般若寺に関連するものと考えられることから、調査次数を付して報告することにした。出土遺物は、瓦類を中心にパンコンテナ5箱分が出土した。

なお、調査結果をもとに開発者と協議を重ねた結果、今回の宅地造成では遺構面に影響がない形で設計されたため、本格的な発掘調査は行わず、11月20日工事時の立会調査をもって終了した。よって、全面に遺構は残されることとなった。

(2) 基本階位と検出遺構 (Fig. 193)

遺構は現地表から深さ1.3m前後で確認されたが、対象地は南側の市道より1.1m前後土地が高いため、市道を基準にすると、深さ0.1～0.15m程の浅いレベルで遺構面が確認された。

遺構は、トレンチ中央部で赤橙色土(赤ホヤ)層に切り込む小穴を1基検出した。埋土は暗茶色土で、土師器片、瓦片が出土した。

(3) 出土遺物

出土遺物は瓦がほとんどで、僅かに土器が混じる。瓦・土器全てが摩滅している。

a トレンチ出土遺物 (Fig. 194～197)

土師器

小皿 a もしくは 杯 a (1、2) 色調は淡橙色を呈する。1は底部切り離しがヘラ切り。

杯 a (3～10) 底部切り離しは確認できるもの全てが回転ヘラ切りである。色調は淡橙色を呈する。3・5は底部がやや丸味があるが、それ以外は平らな底部である。

碗 c (11) 色調は淡橙色を呈する。

龍泉窯系青磁

碗 (12) II-b類。

瓦類

瓦は縄目叩きのものが多かった。ここでは縄目叩きで側面部が残存しているものと、格子叩きのものを中心に実測し報告している。

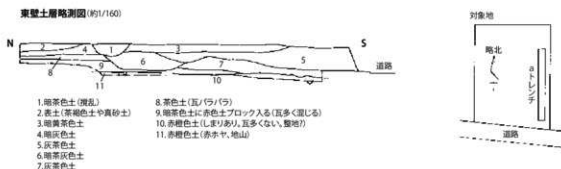


Fig. 193 第301次調査 東壁土層略測図・トレンチ位置図

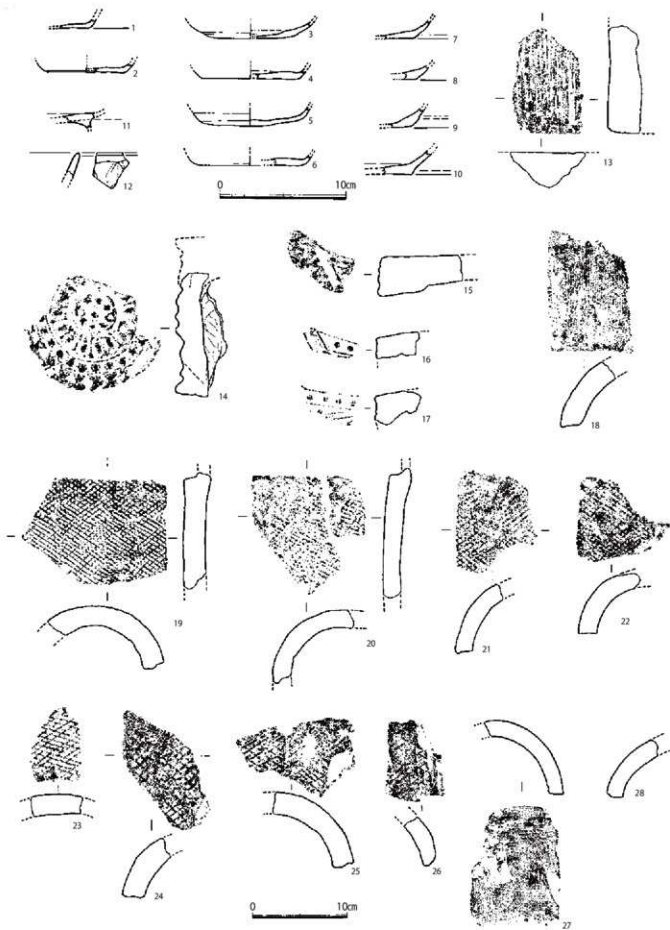


Fig. 194 第301次調査 a トレンチ出土遺物実測図① (1/3、瓦は1/4)

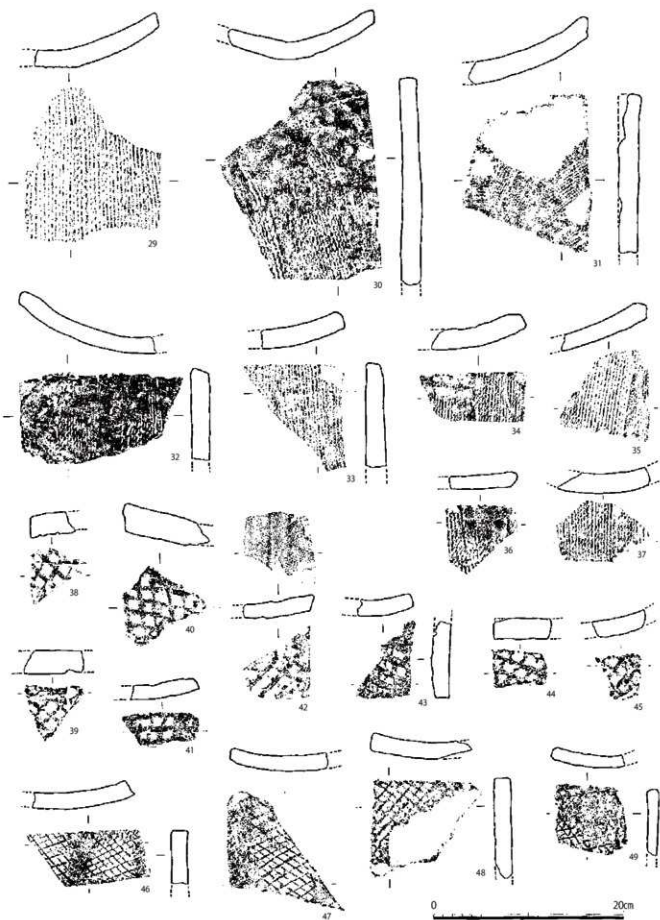


Fig. 195 第301次調査 a トレンチ出土遺物実測図② (1/4)

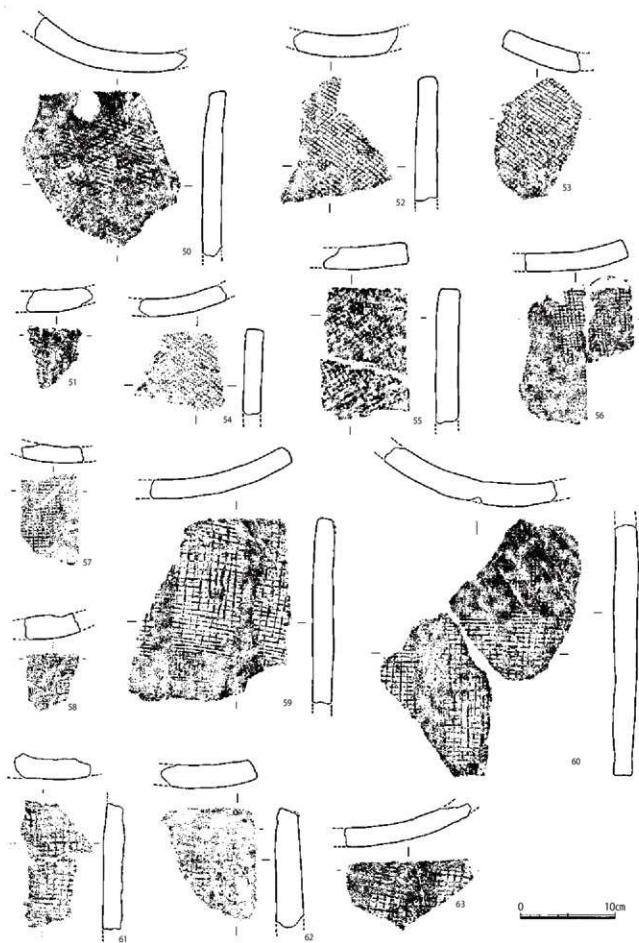


Fig. 196 第301次調査 a トレンチ出土遺物実測図③ (1/4)

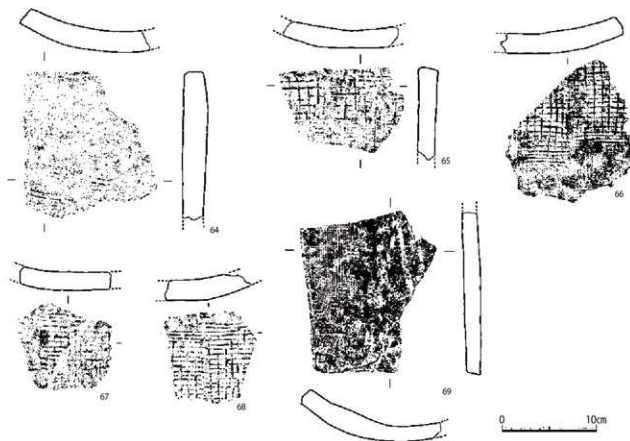


Fig. 197 第301次調査 a トレンチ出土遺物実測図④ (1/4)

埴 (13) 胎土は白色砂粒を多く含み、色調は灰褐色などを呈する。外面は工具によるナデ調整で条痕が残る。

軒丸瓦 (14) 複弁蓮華文で、中房は1+8で蓮子を配する。外区内縁には珠文、外区外縁には鋸歯文が巡る。

軒平瓦 (15～17) 小片でわかりづらいが、15は上外区に珠文が僅かに確認できるが、脇区に珠文はない。16は脇区に鋸歯文を作る。17は上外区に珠文で、内区は唐草文である。

丸瓦 (18～28) 側面部はヘラ切りした後折っている。焼成は不良で、色調は淡灰白色や灰白色などを呈する。18は縄目叩きをナデ消している。19～22は格子の対角線が0.5 cm前後の小さな格子叩き。23は0.4×0.8 cmの横長の小さな格子叩き。内面は布目で模骨痕が残る。24～26は1 cm前後の横長でやや不定形な格子叩き。27・28は外面ナデ調整。27は内面に布目痕、28は内面もナデ調整である。

平瓦 (29～69) 29～37は縄目叩き。側面部は、29はヘラケズリのみだが、29以外は凹面側に面取りのヘラケズリを施す。凹面には布目痕が残る。38～45は格子対角線1～1.5 cmのやや太目の格子叩き。側面はヘラケズリ。46～49は0.5～1.5 cmの細目の格子叩き。側面はヘラケズリ。50は小さい横長の格子叩き。51～58は0.5 cm前後の正格子叩きである。59～68は0.3×0.8 cm前後の横長格子叩きや正格子が混じる叩きである。69は凸面がナデ調整、凹面は布目痕の後ナデ調整である。

(4) 小結

今回の調査で出土した土師器は、ほとんどが9世紀のもので、それ以降のものは龍泉窯系青磁が出土したのみであった。これにより、般若寺が平安時代前期には廃絶したものと推測される。

表43 第301次調査 出土遺物一覧表

オレンシテ	
黒	器Ⅱc、破片
土	器Ⅱc、陶器、鉄製具
白	白磁破片(青銅器)(1)
磁	青磁Ⅱ-Ⅱ(C)
瓦	丸瓦(横目、溝目)群り出し、格子、無文、埴 平瓦(横目、格子小、支格子、無文、軒丸瓦、軒平瓦)

表紙	
瓦	横丸瓦(無文)、平瓦(横目)

V、調査まとめ

【都府楼南・通古賀地区】

今回条坊の西辺部をまとめて報告したことにより、政庁Ⅱ・Ⅲ期の状況が改めて確認できた。以前より、井上信正氏が、大宰府条坊の右郭は8坊までで、それより以西は、条坊と異なる条里区画であると推測され、居住地となるのは政庁Ⅲ期であると考えられていた。このことについては、発掘調査を実施していても、遺構・遺物の出方から感覚的に納得いくものであったが、今回整理報告するに当たり、越州窯系青磁Ⅰ・Ⅱ類をサンプルに検証してみた(表44, Fig.198)。もちろん、各調査地点とも条件が異なることや越州窯系青磁を持ち得ない人が居住していたこともあり得るため、参考程度に見て頂きたい。なお、越州窯系青磁Ⅰ・Ⅱ類とは8世紀末～10世紀中頃の標識磁器であり、政庁Ⅱ期の遺構に伴う陶磁器である。

今回傾向を捉えるため、出土量と調査面積から100㎡に換算した際の越州窯系青磁の出土割合を算出してみた。右郭9坊以西の調査地点では、越州窯系青磁の出土量が100㎡で1点にも満たさず、さらに奈良～平安前期の遺構も全く存在しない。しかし、右郭9坊でも1～4条に位置する調査地点については、右郭10～12坊の調査地点と同様に越州窯系青磁の出土が極めて少ないが、奈良～平安前期の遺構は多く検出されている。ただし、右郭9坊については、4条路以南の調査例がほとんどなく、1～4条の調査例のみである。この1～4条については、現在推定されている官衙域の西隣であり、官道が接続すると予想される特殊な立地にあると考えると、これをもって右郭9坊全てを語るには無理がある。また、政庁前面を東西に走る4条路を境に南北で土地利用の違いがあってもおかしくはないだろう。よって、今回の調査結果は、8坊路付近を境に東西で遺構・遺物の状況が変わることは理解でき、井上条坊案を傍証するものと言える。

【般若寺地区】

今回報告した般若寺の丘陵は、標高約50m、比高差約20mの低丘陵で、南側は急な傾斜であるが、北側に向かっては緩やかに下がる低い丘陵が続き、全体として東西約550m、南北約500mの丘陵が広がる。

第294次調査では、板付Ⅱ式の弥生土器を伴う貯蔵穴(294SK001)が1基検出された。第235次調査で検出した235SK025については、遺構時期の埋没時期については、弥生時代前期末～中期頃と報告しているが、土器のほとんどは板付Ⅱ式に該当する。また、235SK020についても、底部のみの出土であったが、弥生時代前期後半とみて問題ないようである。よって、今回報告した294SK001と同時期のものであり、般若寺所在の丘陵と周辺の低丘陵には、弥生時代前期後半の生活痕跡があることがわかった。しかし、現在この一帯で堅穴住居は確認されていない。

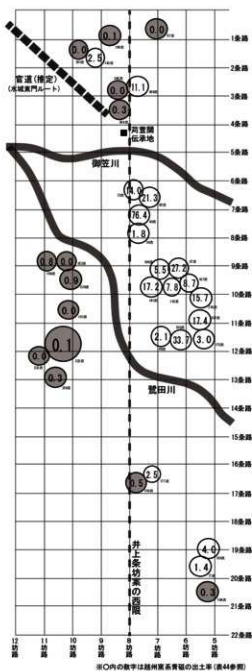
また、今回の調査では多くの瓦が出土したが、塔原廃寺と同様の重弧文軒平瓦や叩き目を有する瓦は、1点も出土しなかった。しかし、この瓦が丘陵の西側裾部を中心に30数点出土している状況は、その瓦を使った建物があったのか、再利用目的で持ち込まれた瓦がそのまま廃棄されたのか、今後さらなる検証が必要である。

表44 条坊西辺部における越州窯系青磁の出土状況

位置(井上地区)	発掘	回数	越州窯系青磁片数					合計 (片数)	100%相当 の出土数	8~9世紀代 の遺構数 (参考)※①
			調査面積	1類	2類	3類	その他			
19・20条	8・645	第120次	1000	31	6	0	3	40	4.00	64
19・20条	8・645	第77次	787	7	0	0	4	11	1.40	19
11条	645	第278次	312	19	0	0	30	49	15.71	15
11条	645	第322次	529.8	81	10	5	1	97	17.37	66
12・13条	645	第173次	1163	23	12	1	0	36	3.01	44
21条	715	第184次	1285	5	0	0	0	5	0.39	3
10条	8・715	第187次	173	8	4	0	3	15	8.67	1
10条	715	第87次	320	61	32	4	4	97	27.19	47
10条	715	第230次	207.5	63	16	1	1	79	33.73	72
10条	715	第98次	800	15	2	0	0	17	2.13	3
10条	715	第119次	360	20	6	2	2	28	7.78	1
10条	715	第106次	470	22	2	2	2	26	5.53	88
1条	7・815	第97次	154	0	0	0	0	0	0.00	1
10条	7・815	第141次	600	54	33	1	16	103	17.17	15
2条	815	第209次	360	32	8	0	0	40	11.11	42
8条	815	第20次	57	1	0	0	0	1	1.75	1
8条	815	第40次	31.4	13	11	0	0	24	76.43	0
7条	815	第62次	28.1	6	0	0	0	6	21.35	0
17条	815	第177次	40	1	0	0	0	1	2.50	3
17条	815	第184次	820	2	0	0	2	4	0.49	81
7条	8・915	第72次	264	30	7	0	0	37	14.02	59
1・2条	915	第190次	1665	0	1	0	0	1	0.06	26
3・4条	915	第265次	401.6	0	0	0	0	0	0.00	45
6条	915	第264次	311	0	1	0	0	1	0.32	63
2条	915	第143次	200	4	1	0	0	5	2.50	4
2条	915	第141次	47.5	0	0	0	0	0	0.00	4
11条	10・1115	第161次	507	0	0	0	0	0	0.00	0
9・10条	10・1115	第223次	338.26	2	1	0	0	3	0.89	0
12・13条	10・1115	第222次	7650	9	0	9	1	19	0.13	0
13条	1115	第223次	684	1	0	0	1	2	0.29	0
9・10条	1115	第253次	260.68	0	0	0	0	0	0.00	0
9条	11・1215	第198次	596	3	2	0	0	5	0.84	0
12・13条	1215	第222次	30.9	0	0	0	0	0	0.00	0

※①遺構については、遺構番号を付したもので、8~9世紀代、奈良~平安朝前期と認識されたものには記載したもので、隠れた穴の数を表したものではありません。

Fig. 198 越州窯系青磁の出土率地図



○内の数字は越州窯系青磁の出土率(表44参考)

参考文献

太宰府市教委『太宰府条坊跡IX』太宰府市の文化財第30集 1996
 太宰府市教委『太宰府条坊跡XIV』太宰府市の文化財第48集 2000
 太宰府市教委『太宰府条坊跡23』太宰府市の文化財第70集 2005
 太宰府市教委『太宰府条坊跡25』太宰府市の文化財第75集 2004
 太宰府市教委『太宰府条坊跡27』太宰府市の文化財第81集 2005
 太宰府市教委『太宰府条坊跡37』太宰府市の文化財第101集 2008
 太宰府市教委『太宰府条坊跡39』太宰府市の文化財第104集 2008
 太宰府市教委『太宰府条坊跡42』太宰府市の文化財第114集 2012
 井上信正「特論 太宰府条坊の現状」『太宰府条坊跡44』太宰府市の文化財第122集 太宰府市教委 2014
 太宰府市教委『太宰府条坊跡45』太宰府市の文化財第123集 2015
 太宰府市教委『太宰府条坊跡46』太宰府市の文化財第127集 2015

写真図版

写真図版には遺構・遺物の主な写真を掲載している。その他の遺構・遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。



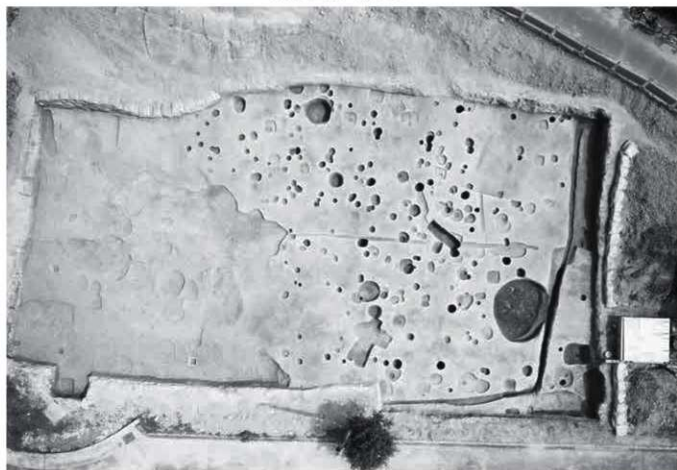
第38次調査全景 (南から)



第40次調査全景 (南から)



62SE001 全景（北から）



第72次調査全景（上が東、空中写真）



第101次調査1 トレンチ全景 (上が東、空中写真)



第101次調査2 トレンチ全景 (東から、空中写真)



第101次調査3 トレンチ全景 (東から)



第101次調査4 トレンチ全景 (西から)



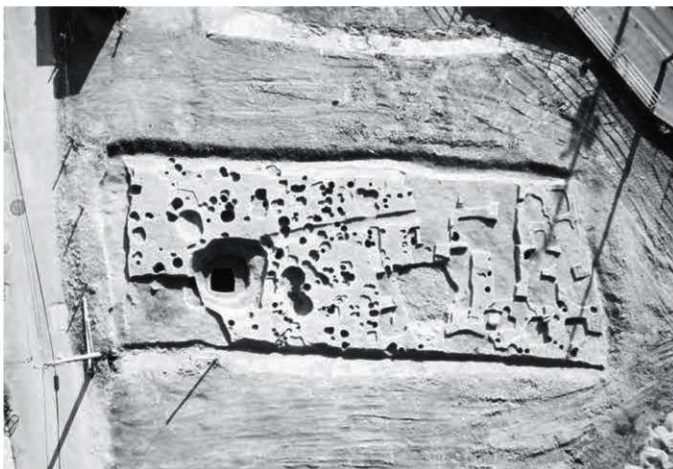
第108次調査遠景（北東から、空中写真）



第175次調査全景（上が西、空中写真）



第175次調査北区全景（上が北、空中写真）



第175次調査中区全景（上が南、空中写真）



第 198 次調査区西半部全景（上が北、空中写真）



第 198 次調査区東半部全景（上が北、空中写真）



第 198 次調査区西半部全景（北から、空中写真）



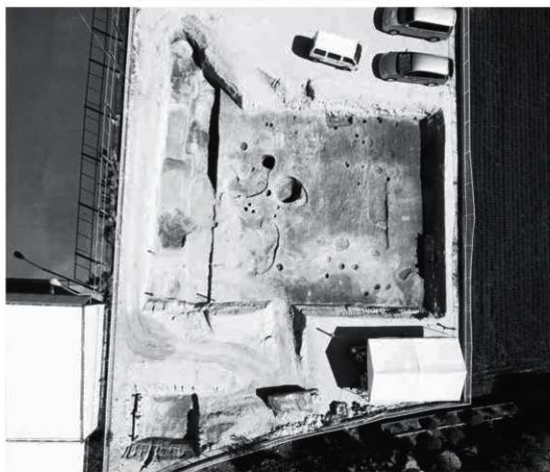
第229次調査区北側全景（空中写真、上が東）



229SK001 黒灰色土 遺物出土状況（北から）



第 253 次調査調査区全景（空中写真、上が北）



第 276 次調査区全景（上が北、空中写真）



第322次調査2面目全景（上が東、空中写真）



第322次調査3面目全景（上が東）



第322次調査3面目全景（北東から、空中写真）



322SX001 完掘状況（南から）



第 293 次調査全景（南から）



第 294 次調査全景（南から）



第 299 次調査区上・下段 土層状況（南西から）



第 301 次調査 a トレンチ北半状況（北西から）



38SD001 灰色粘土出土
須惠器蓋 c3 (Fig. 10-5)



第40次調査 暗茶色土出土軒丸瓦
(Fig. 13-17)



18-12 18-11

62SE001 下層出土黒色土器碗 c
(Fig. 18)



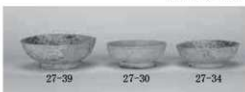
72SX015 出土緑釉陶器碗 (Fig. 34-7)



72SE005 黒灰色土出土黒色土器托上碗
(Fig. 29-59)



108SD004 灰褐色粘土出土
弥生土器甕 (Fig. 48-1)

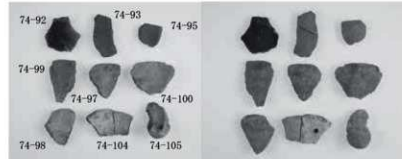


27-39 27-30 27-34

72SE005 黒灰色土出土土師器碗 c (Fig. 27)

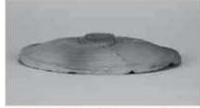


101SE005 下層出土瓦器碗
(Fig. 42-22)



74-92 74-93 74-95
74-99 74-97 74-100
74-98 74-104 74-105

175SK015 黒灰色粘土出土焼塩壺 (Fig. 74)



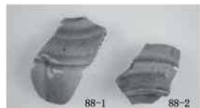
175SK040 黒灰色土出土須惠器
蓋 b3 (Fig. 76-1)



175SK040 黒灰色土出土土師器
大皿 c (Fig. 77-40)

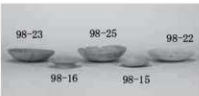


101SE005 下層出土瓦器碗
(Fig. 42-20)



88-1 88-2

198SK005 褐茶色土出土
青白磁壺 (外面) (Fig. 88)



98-23 98-25 98-22
98-16 98-15

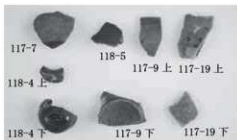
229SK001 黒灰色土出土土師器
小皿 a・小皿 c・丸底坏 a (Fig. 98)



253SE015 暗褐色土出土風字硯
(Fig. 107-2)



253SX001 出土銅鈴
(Fig. 109-2)



276SD010・015, SX002 出土遺物
(Fig. 117・118)



322SX009 赤灰色土出土埴
(Fig. 136-9)



322SX009 黒灰色土出土平瓦
の刻銘 (Fig. 137-14)



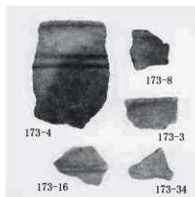
293SX001 出土遺物外面
(Fig. 169)



322SD060 黄褐色土出土
石罏 (Fig. 140-41)



S-107 黄灰色土出土縄文土器
(Fig. 162-12)



294SK001 暗茶色土出土
弥生土器甕 (Fig. 173)



322SK100 暗黄色土出土須恵器坏c・蓋c3 (Fig. 157)



第299次調査 東側工事採集
出土軒丸瓦 (Fig. 180-29)



第299次調査 東側工事採集出土
軒平瓦 (Fig. 180-30)



表土出土鬼瓦 (Fig. 186-66)



表土出土軒丸瓦 (Fig. 186-68)



表土出土軒平瓦 (Fig. 186-69)



表土出土軒平瓦 (Fig. 186-71)



第301次調査 aトレンチ出土
軒丸瓦 (Fig. 194-14)

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと		ふりがな		コード		調査期間		調査面積	調査回数	
番号	大宰府条坊跡 第134集		所在地		市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	
調査名	都府楼南・通古賀・般若寺地区の調査										
シリーズ名	大宰府市の文化財										
シリーズ番号	134集										
編者	窪根克一、山村伊茂、藤原勇、中村茂夫										
編者機関	大宰府市教育委員会										
所在地	福岡県大宰府市観世音寺1丁目1番1号										
発行年月日	平成30(2018)年10月31日										
ふりがな	集名	ふりがな	所在地	市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	調査面積	調査回数
調査名称	【観世音堂】									m ²	回
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第7条7坊	とねのこま	40221	210050-38	56300.0	-45545.0	19821224	19830118	57	区画整理 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第7条7坊	とねのこま	40221	210050-40	56400.0	-45542.0	19830209	19830221	31.4	区画整理 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第6条4坊	とねのこま	40221	210050-45	56800.0	-45640.0	19831011	19831011	50	区画整理 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第6条7坊	とねのこま	40221	210050-42	56470.0	-45543.0	19879126	19879126	28.1	駅前広場整備 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第6条7坊	とねのこま	40221	210050-72	56490.0	-45535.0	19880606	19880625	26.4	区画整理 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第10条8-9坊	とねのこま	40221	210050-101	56130.0	-45730.0	19900726	19900821	507	県道拡幅 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第10-11条5坊	とねのこま	40221	210050-108	56500.0	-46000.0	19914602	19910415	790	公園整備 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第10-11条5坊	とねのこま	40221	210050-175	55990.0	-45300.0	19961120	19960116	1163	越後川埋設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第8条4-10坊	とねのこま	40221	210050-198	56270.0	-45810.0	19980324	19980715	896	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第8条9坊	とねのこま	40221	210050-229	56200.0	-45740.0	20030401	20030617	338.20	宅造成 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第8条9坊	とねのこま	40221	210050-283	56290.0	-45770.0	20051013	20051114	268.68	宅造成 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第8条5坊	とねのこま	40221	210050-276	56150.0	-45330.0	20060616	20060825	312	共同住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	右第10条5坊	とねのこま	40221	210050-322	56090.0	-45330.0	20170807	20171111	528.9	宅造成 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	左第14条3坊	すぞく	40221	210050-293	55830.0	-44533.0	20120326	20120425	28.3	個人住宅建設 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	左第14条3坊	すぞく	40221	210050-294	55630.0	-44514.0	20120615	20120625	67	宅造成 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	左第14条4坊	すぞく	40221	210050-299	56400.0	-44448.0	20130613	20130605	50	宅造成 記録保存調査
だざいふじょうぼうあと	大宰府条坊跡 第40次	左第13条4坊	すぞく	40221	210050-301	55677.0	-44442.0	20131022	20131023	12.8	個人住宅建設 記録保存調査
調査名称	番地順別	時代	主要遺構	主要遺物		調査事項					
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良	溝	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、
大宰府条坊跡 第40次	都城	平安	溝	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	平安	遺構なし								
大宰府条坊跡 第40次	都城	平安	井戸、溝	土師器、瓦							
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	竪立柱礎物、井戸	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	平安	井戸	土師器、瓦葺瓦、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、奈良	溝、竪瓦葺	奈良土師、石葺、	石葺土師、	石葺土師、	石葺土師、	石葺土師、	石葺土師、	石葺土師、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	井戸、土坑	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	平安、近世	溝、井戸、土坑	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	平安	溝、井戸、土坑	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	平安	竪立柱礎物、井戸	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	土師器、陶磁器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	平安	溝、井戸	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	竪立柱礎物、溝、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	井戸、瓦葺	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	竪立柱礎物、溝	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	溝、井戸	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	溝、井戸	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	溝、井戸	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	
大宰府条坊跡 第40次	都城	奈良、平安	溝、井戸	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	瓦葺瓦、土師器、	

大宰府市の文化財 第134集
大宰府条坊跡 48
 - 都府楼南・通古賀・般若寺地区の調査 -
 平成30(2018)年10月

編集 大宰府市教育委員会
 発行 大宰府市観世音寺1-1-1
 印刷 株式会社 四ヶ所
 福岡県朝倉市馬田336

